バカとノリと召喚獣

貴雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとノリと召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ０７５４Ｏ

【作者名】
貴雅

【あらすじ】
『バカとテストと召喚獣』の転生ものです。主人公である浅月雅夜が気ままに好き勝手にしたいと思いながらも上手くいかない、そんなお話です。弄り弄られ楽しみ騒ぎ、日々を面白おかしく過ごしています。※ただいま『強化合宿編』です

プロローグ1

「…なんだ此処は？」

ふと目が覚めると見覚えのない白い空間にいた。
周りを見渡してみたが何も無い。白い部屋かと思ったが、そういう訳ではなさそうだ。

「白く無尽蔵に広い空間、誰もいなく自分だけがいる。……なるほど夢か」

なら目が覚めるまでぼーっとしてるか。周りにはなにもないから、やることなんて無いんだしな。

「いきなり夢オチと思われるとわしが困るのじゃがのぅ」
「――――っ！誰だお前！？」

独り言のつもりが返事が返ってきた。声のほうを振り向くと先程までは誰も居なかった所に変な爺さんがいた。

「わしか？わしは神様じゃ」

……は？

「なんですと？」
「だから神様じゃと言っておるだろうが。神様じゃよ、か・み・さ・ま」
「…オーケー。まずは落ち着くんだ俺。まずは冷静になることから

始めて……」

深呼吸を繰り返す。スー、ハー。スー、ハー……よし。

「色々とツッコミたいことがあるが、それは置いとくとして。いくつか質問してもいいか？」

「ふむ。別に構わぬぞ」

偉ぶる態度が気に食わないが我慢しとこう。俺の夢のなかに出てくる（自称）神様なんだ、偉くて当たり前だ。そんなことよりも今は確認するべきことがある。

「此処はなんなんだ？」

まず第一の疑問。どこまでも広がっている薄気味悪いこの白い空間について。まぁ、夢ですからと言われたらなにも言い返せないんだけどな。

「死後の世界。そしてわしとお主だけが存在出来る空間じゃよ」

なるほど。頭がイッチャッてる爺さんなだけか。病院から抜け出して来た設定かな？

「んじゃ二つ目。これは夢か？」

「お主にとっては現実……いや、現実とは呼べぬの。実際に起きていること、ってところかの」

「ふ～ん……って待てよ。さっき死後の世界って言ったよな？つまりなんだ。俺は既に死んでいるってことなのか？」

「もちろんじゃ」

んー、流石俺の夢。展開がありえないぜ！

「いやいや、夢じゃないとさっきから説明しておるじゃろうが！」

「ええぃ、いい加減諦めろ自称神様（じじい）！俺の夢のクセにわけのわからんことばっかり言いやがって――――――」

「」

★
★
★

「～～♪～～～♪」

俺はフルーツが沢山入ったバスケットを片手に、鼻歌を歌いながら陽気な気分で道を歩いていた。

学生の身なのに果物屋のおばちゃんに『いつもいい子ねぇ～』とオマケしてもらえ、嬉しがっているだけだが。

「あいつなら風邪程度すぐ治すよな」

手に持ったお見舞いの品ではなく機嫌直しのためだ。

そんなことを呟きながら歩いていると、目的地のマンションに着いた。建造八階建て、ごく普通のマンションだ。

「さて、昴（すばる）のやつは大人しくしてるかな？」

結崎（ゆいざき）　昴。それがこのマンションの四階に住んでいる子の名前だった。

俺と昴は生まれた時からの幼馴染みであり兄妹みたいな関係であって、周りから付き合ってるようにみられがちだが、俺からしたら世

話のかかる妹としてか思えい。そんな関係だ。

「まぁ、どうせ平日の昼間でなにもやることがなくて暇だから部屋でゲームでもして俺を待ってるんだろうな」

ふと顔をあげ、赤く染まった昴の部屋の辺を――――――赤く染まった？

「……おいおい冗談だろ？何で燃えてるんだよ！！』

昴の部屋の辺から火の手が昇っており、煙がモクモクと出ていた。マンションの出入口のほうを見てみれば火事に気付いて慌てて外に出てきている人達がいた。……だがその中に昴の姿は見えない。昴がいないのを確認した瞬間、俺は駆け出していた。

「何やってるんだよ！！あのバカっ！」

階段を3段飛ばしで駆け上りながらポッケトからケータイを取り出して昴にかけてみるが出る様子はまったくない。

「肝心なときにつかえねぇな！」

毒気を吐いて階段を登るスピードを上げる。四階まであがるのにそう時間はかからなかった。俺は階段を昇りきると廊下に飛び出してみると、

「くそったれ。こんなのどうすればいいんだよっ！！」

そこは一面、火の海だった。

☆

一面の火の海。

「俺にどうしろっていうんだ…？」

昴の安全を確かめたいとはいえ、さすがにこの中を突っ込んでいくことには躊躇いがあった。

「とりあえず、昴の無事でも確認しておかないと。……返事があればいいんだけどな。スバルーっ！生きてるかーっ！」

『なんとか生きてるよーー！っげほ。ちょっとピンチっぽいけど』

よかった。まだ、昴は無事みた――――――

「っ！！ゴホッゴホッ！……これは長引くと俺もまずいな」

しかし、周りを見渡してみても役に立ちそうなものはない。

（どうすればいい？この状況を打破するにはどうしたらいい？消防車がくるまで待つか？……いや、そんな悠長な考えはダメだ。むやみにつっこんで行くか？……これもダメだ。昴を助ける俺が危なくなったら元も子もない）

（どうする、どうする。時間しか過ぎてかないぞ）

『きゃぁぁ！』
「どうした！」
突如聞こえた悲鳴に反射的に聞き返すが、返事が来なかった。
（昴の身になにかあったのか！？）
「くそっ！こうなりゃやってやる！」
服を破いて、マスク代わりにする。気休め程度かも知れないが、ないよりかはましだろ。
「昴っ！！今、行くぞ！！」
そう、言って炎の中に突っ込んでいった。
（あちっ！・・・思った以上に熱いなこれは。早く見つけないと俺も昴も危ない）
「昴！どこにいる返事をしろーー！」
『……マサ？こっち、私はここにいるよ！』
「そっちか！」
声がしたほうを駆け寄ると手足に火傷の痕がある昴がいた。横には先程の悲鳴の原因か、本棚が倒れていた。
「大丈夫か？」
「ちょっと痛いけど平気だよ。ありがと」
「どういたしまして。って、のんびりしてる場合じゃねぇな！すぐにここから出るぞ！」
「うん！わかった」

そういって、昴の手を引っ張っていく。
が、来るときより火の手が強まっていて進むのを一瞬躊躇ってしまう。

「くそ！火がさっきよりも強くなってやがる。昴、行けるか？」
「当然！こんなんじゃくたばんないよ私は」
「頼もしいな！んじゃ、行くぞ！」

鼓舞して火が弱いところを駆けていく。昴は強がっていたけど、声にいつもの覇気がない。こりゃあ限界が近いかもな。

「あうっ！」

そう思った矢先に、昴がこけた。

「っ！大丈夫かスバ――――――」

スバルと言おうして後ろを振り返ったら、燃えていたドアがスバルに倒れてきていた。
昴も倒れてきた扉に気付いたようだが、固まってしまっている。

「昴っ、あぶねぇ！！」

人間、本能的に動くとき無意識での行動が主となる。気が付いたら、俺は昴と扉の間に自分の身体を入れて昴を庇っていた。

「っ！？早くそこをどけっ！」
「う、うんっ！！」

慌てて離れる昴。俺もすぐに扉を下ろしたが少し遅かったみたいだ。
燃えていたドアを担ぐような状態だったためか、背中からは焦げた臭いがして身体から力が抜けていくような感じがし、意識は朦朧としてきた。
（やべぇ、さすがにこれはやばいかもな）

『マサぁ！起きてよう！お願いだから起きてよう！』

昴の声はどこか遠く、俺はそれに返事をすることができなかった……。

プロローグ1（後書き）

初めまして。貴雅（たかまさ）といいます。
小説を書くのも、投稿するのも初めてな初心者なので、
間違っているところが多いかも知れませんが、頑張っていくつもりです。
学生なので、投稿するのは遅いかもしれません。
あと、文章は短めだと思いますので。
感想などお待ちしております。

プロローグ2（前書き）

今気が付いたら、一話めで主人公の名前わかってなかったよ・・・。
しょっぱなからミスった（泣）

プロローグ2

「……」

「思い出したかの？おぬしは幼馴染を助けるために己自身が焼け壊れた扉の下敷きになった。しかし、体力が持たず、そのまま死んだ」

そう、か……俺は死んだんだったな。となるとこいつは本物ってことなのか、認めたくないが。

……まぁ、最後まで昴を守ることが出来たんだから、そこだけは良かったとするか。

「…そろそろいいかの？」

ん？

「なんだ。まだいたのか？」

「お主が感慨ふっけておったからのう。待っておったのじゃ」

「そっか。じゃあもう帰っていいぞ」

「待ってた人に対してその態度はないじゃろ！…まぁ、もう良い。それよりもお主の名前は浅月雅夜であってるかの？」

「ああ、そうだが？」

ここで間違った名前を出したらぶん殴ってるところだった。

「なんで今更そんなことを聞くんだよ」

「それは前回のときにお主の名前が明かされておらんかったからに決まっておるじゃろ。まったく、お主は。読者サービスがなってお

らぬのじゃ」
「プロローグでメタ発言とかありえねぇだろ！？」
え、なにこれ？なんで俺死んだのに神様のメタ発言にツッコミをいれなくちゃならないの？
「ところで浅月君」
「なんだジジィ？つまらないことだったら容赦なくぶん殴るぞ」
「お主にとってはいい話だと思うがのぅ。神様の暇潰しのために君を転生でもさせてあげようかと思っての」
「……は？転生？」
なに言ってるんだこのじじぃ。
「転生っていうと……もう一度生まれ直って新しい人生を過ごすアレのことか？」
「理解が早くてたすかるの。さきほどの勇敢な行為にたたえ、特別に好きな世界に転生させてやぞい」
「好きな世界？」
「そうじゃ。例えばアニメや漫画、小説の世界などじゃな」
「じゃあ俺が元いた世界「無理じゃ」ですよねー」
どうせそんなことだろうとはわかっていたさ。
「あー、それとスキルも好きに決めてよいぞ。ある程度は融通を利かせてやるのじゃ」
「スキルって、二次でよくある《完全記憶能力》だとか《超能力》とかのことか？」
「前者はともかくじゃが、後者はあんまり凄いのは出来ないぞ。ある程度じゃからな」

ふむふむ。スキルも好き放題に出来るのか……なら！

「決めたぞじじぃ。俺は《バカテス》の世界に行く」

「なんじゃ、以外に早かったのう。普通ならもっと悩むところじゃぞ」

楽しく過ごすにはあそこが一番だからな。前から一度は行ってみたいと思ってたんだ。

「して、スキルは？」

「身体能力は…そうだな、死闘をしたら西村さんと相打ちになれるくらいにしてくれ。身近に武道の心得を持ってる人がいるとやりやすそうだな」

「高校生でそれじゃと結構なハイスペックにならんかの？」

「バカテスで生きていくならそれくらいでいいんだよ。んでスキルは……テスト勉強が怠いから《完全記憶能力》と、召喚獣を操るのにあると便利な《並行処理（マルチタスク）》だな」

「並行処理は２つまでが限度じゃぞ。それでよいか？」

「充分。あとは、召喚獣の装備はどうでもいいとして環境だな。家は明久と同じマンションで幼馴染みで。親戚に藤堂のババァをいさしておいてくれ」

あのババァが知り合いだと、召喚獣を好きに弄れそうだしな。

「注文の多い奴だの……ハァ」

「別にいいだろ。二度とないような経験なんだから出来る限りのことはやるべきだろ？」

「まぁそれもそうじゃの」

「判ればよろしい。っと。そういえば、名前はどうなるんだ？」

「別に好きな名前に変えてもよいぞ。じゃが名前を変えるのはめんどくさいじゃろ？いまのままでも特に問題はないしのぅ」
「確かにそうだな。わかった、このままでいいや」

調子に乗ってると痛い名前で一生を過ごさなくちゃならなくなりそうだしな。

「あぁ、それとお主。原作知識は持っていくのなら、あまり原作崩壊を起こさんように頼むぞい。ややこしくなるんでのぅ」
「りょーかい、りょーかい。それくらいどうってことないさ」
「なら今までの設定を適応させるには、赤ん坊から始めなければならないのじゃが、まぁそこは問題ではないの」

子供の頃の記憶がないってのも嫌だしな。

「それでは行ってくるのじゃ。そう簡単にこっちに戻って来ないでくれると助かるのじゃ」
「おう、わかってら！んじゃ、またな！」
「だからまたは止めてくれと言っておるじゃろうが！！」

さぁ、新しい人生の幕開けだ！！

プロローグ2（後書き）

連続投稿しました。
これで、やっと本編に入れますね（笑）

感想待ってます。

第1話

俺らがこの文月学園に入学してから二度目の春が来た。
校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っている。
その光景に、一瞬目が奪われて立ち止まってしまう。
しかし、それも一瞬のこと。
今俺の頭にあるのは春の風物詩ではあるけれども、桜のことではない。
俺の頭は今年一年をともに戦い抜いていく戦友と教室――――要するに、新しいクラスのことでいっぱいになっていた。

「浅月、遅刻だぞ。」
玄関の前でドスの効いた声で呼び止められる。声のした方を見ると、そこには浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマンですと言える男が立っていた。
「お、西村さんじゃん。おはよっす。」
軽く手をあげて挨拶する。そこにいたのは生活指導の鬼西村教諭だった。
「さんじゃなくて、先生とつけろと何度言ったらわかる。俺をそんな風に呼ぶのはお前だけだぞ?」
「別にいいじゃないですか、そんぐらい。減るもんじゃないし」
「・・・ハァ、もういい。それよりも『おはよう』じゃないだろ?」
「あ、すいません。えーっと、・・・なんかあります?」
「遅刻の謝罪はなしなのか?」
「あぁ、それですか。すいません。」
「・・・まったく、お前といい、吉井という奴は・・・いくら言っ

ても全然懲りないな。」
ため息混じりに先生がつぶやく。こういわれると明久と同じ扱いだと思われるからいやだな。
「西村さん、俺と明久を同じにしないでくださいよ。」
「同じではないが、似たようなもんだろ。ほら、受け取れ。」
西村さんが、箱から取り出し、俺に差し出してくる。宛名の欄には『浅月雅夜』と、大きく俺の名前が書いてあった。
「いちいち個人に渡すのか?めんどくさそうだな。」
普通に掲示板とかに載せとく方が良くないか?
「普通はそうするんだけどな。まぁ、うちは世界的にも注目されている最先端システムを導入した試験校だからな。この変わったやり方もその一環ってワケだ。」
「そっか。そりゃあ、ご苦労なこった。」
適当に相槌を打ちながら封にてをかける。あのときのテストはどうだったっけ?
「浅月、いまだから言うがな」
「ん?なんだ?」
この封筒、結構頑丈に糊付けされてるな。うまくあかない。
「俺は去年一年お前を見てきたが、お前は明久と同じぐらいのバカだと思っていたんだ。」
「む。それは心外ですね。俺はバカじゃなくてタダ単にその場のノリで生きていただけですよ」
自分で言うのもなんだけど、本気を出したら学年主席どころか教師にすら勝てるかもしれないんだ。
「あぁ。お前の振り分け試験の結果を見たときには、驚いた。」
「あたりまえだ。明久と同じにされちゃ困る。」
くそ、いいかげんじれったいな。上の所を破くか。
ビリッと軽い音を立てて封を切る。中を覗くと、紙が一枚入っていた。
あ・・・、そういえばあのときのテストって・・・・・・

「一科目以外すべて寝るとはいい度胸だな。」
最初で本気出したから、疲れて寝ちゃったんだっけ・・・・

『浅月雅夜・・・・・Fクラス』

「あとで、職員室に来い」
こうして俺の最低クラスでの生活が幕をあけた。

第1話（後書き）

感想待ってます。

第2話

「・・・なんだ、この馬鹿でかい教室は」
去年はほとんど来た事のない三階に足を踏み入れると、目の前には通常の五倍はあろうかという広さを持つ教室だった。

「これが、Ａクラスか・・・」

ちょっと気になり、窓から覗いてみると、

『・・・・・・霧島翔子です。よろしくお願いします』

ちょうど自己紹介をしている所だった。
(先生のとなりで自己紹介してるってことはクラス代表だよな)

「・・・やっぱり、あの噂は本当だったんだ・・・。」

そんなことを思っていると、隣で声が聞こえた。

「ん?なんだ、明久か。いたのか」
「いたのかって、僕のほうが先にいたきがするよ?」
「んなことどうでもいい。さっさと行くぞ。」
「行くぞって、雅夜もＦなの?」

そっか、明久達は知らなかったっけ

「一科目やったら疲れてな、残りは寝ちまったんだよ。」
「そっか、それなら仕方ないね。今年一年もよろしくね。」
「あぁ、よろしくな。んじゃ行くぞ。」

「あ、まってよ」

こうして俺達はFクラスに向かって進んでいった。

☆

2年F組と書かれたプレートのある教室の前ついた。

となりで明久がためらっているようだが、俺は先に教室のドアに手をかけていた。

「すまん、ちょっと遅れた。雄二。」

「早く座れ、このう・・・なぜ、俺が此処にいるってわかった?」

「んな事どうでもいいだろ。」

「確かにそうだが、なぜ此処にいる?」

「振り分けの時にちょっとな」

俺がそういうと、ニヤリと口の端をつりあげやがった。

「お前がこのクラスか、こいつは面白くなってきたな。」

「・・・助けて欲しい時は言え、少しは助けてやる」

「っ!・・・そのときは頼むな。」

一瞬、なぜそのことをっていう顔になったがすぐに神妙な顔つきになりやがった。

「すいません、ちょっと遅れちゃいましたっ♪」

雄二とやり取りをしていると明久が入ってきた。

「早く座れ、この蛆虫野郎」

さっきまでの神妙な顔はどこにいったんやら・・・。

「聞こえないのか？あぁ？」

俺に対する態度とは全然違うな・・・

「・・・雄二、何やってんの？」

「先生が遅れてるらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「お前も少しは考えろって、先生がいないんだから代表が立っていたっておかしくないだろ？」

「代表って、雄二がこのクラスの代表なの？」

「あぁ、そうだ」

にやりと口の端はまた吊り上げる雄二。その言葉を聞いて明久までも顔が綻びやがった。どうせ、雄二を説得すれば、このクラスを動かせるとでも考えてるんだろうな。

このバカは、雄二しだいでこのクラス全員が敵にもなるってことに気付いてないのか？

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな。」

「おーい雄二、言っとくが俺は好き勝手にやるぞ？」

「必要なときに動いてくれれば問題ないから大丈夫だ。」

やっぱり、俺にも必要な役割があるんだな。・・・めんでぇ

「それにしても・・・・・流石はＦクラスだね」

「俺は楽しかったらどこでもいいがな」

クラスを見渡してみると、机ではなくちゃぶ台で、椅子ではなく座

布団があった。

「明久後ろのほうが空いてる、そこに座ろうぜ。」
「そうだね、居眠りしやすそうだもんね」

こいつはそんな事しか考えてないのか？

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

不意に後ろから覇気のない声が聞こえた。
そこには、寝癖の付いた髪にヨレヨレのシャツを着た、福原さんがいた。
このクラスの担任って福原さんだったんだ・・・ぴったしだな。

「それと席についてもらえますか？HR（ホームルーム）を始めますので」
「はい、わかりました」「うーっす」「ん、了解」

俺達は適当に返事をしてそこらの席に着いた。

第2話（後書き）

う～ん、イマイチ主人公の性格を生かせませんね（汗）
主人公は誰ルートがいいですかねぇ？

第3話

「えー、おはようございます。２年Ｆ組担任の福原慎（ふくはらしん）です。よろしくおねがいします。」

福原さんは薄汚れた黒板に名前を書こうとして、やめた。

「・・・チョークすら、まともにないんすか？」

「あとで申請しておきますので授業には間に合う筈です。」

「これがＦクラスか・・・。」

「そのとうりです。」

さっきはああ言ったけど、もう嫌気がさしてきたよ。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出てください。」

この言葉を聴いて不備しかないと言わんばかりに皆言い出し始めやがった。

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー」

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れてます。」

「木工ボンドが支給されてますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう。」

よし、これに紛れてあのことも言っておこう。

「センセー、このコンセントってかってに使っていいんですか？」
「使い過ぎなければいいですよ。」
よっしゃあ！これで教室でもパソが好き勝手できる。
・・・しかし、福原さんの答えって良く聞いたら『我慢してください』と『自分でやってください』か、『好きにしてください』だよな。
「必要なものがあれば極力自力で調達するようにしてください」
「さすがＦクラスだな。」
教室全体からかび臭い独特の空気が漂っていて、身体にも影響がありそうだ。
「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね、廊下側の人からお願いします。」
自己紹介か・・・、あれは、雄二があとで言うだろうからな普通でいいかな。
「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」
お！秀吉じゃん。演劇に対する情熱を少しでも勉強にまわせば、頭いいとおもんだけどなぁ。
「――――と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」
それにしても部活か・・・、俺も言ったほうがいいのかな？

「・・・・・土屋康太」

次の生徒は名前をいっただけで、また座りやがった。

・・・康太、目立つのは苦ってといっても、もう少し長くしろよ。

せめて、趣味とか特技ぐらい・・・すまん、康太。お前はそんぐらいがちょうどいいよ。

「――です。海外育ちで、日本語は会話は出来るけど読み書きは苦手です。」

これは、島田だな。この後、何て言うんだっけ？

・・・最近、原作知識があんまり思い出せないな。大まかなことなら思い出せるけど、細かいことは思い出しにくいな。

「趣味は吉井明久を殴ることです☆」

おお！流石は危険思考の持ち主。考えることが一味違うな。

「はろはろー」

笑顔で吉井に手を振ってやがる。あんなこと言っておいて笑顔で手を振れるてどういう神経してるんだろな？

「・・・あぅ。し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

自分を殴ることが趣味なやつとよろしくやれるのか？

「――です。よろしくお願いします。」

次は明久の番か、この時のことだったら覚えてる。俺も乗ってみるか

「――――コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

『『『『『ダァァーーリィーーン!!』』』』』

野太い声の大合唱。やっぱりこのクラスはノリがよくて面白い。

「――――失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願い致します。」

おっと、本人的には物凄く気持ち悪かったんだな。吐くなよ。

さてさて、吉井の次はって、・・・俺じゃん!

「よっと。浅月雅夜だ、よろしくな。趣味は御神流と暇つぶしで、ムッツリ商会でバイトをしている。」

『『『『ムッツリ商会だと!!』』』』

「あぁ、秘書できなものをやっている。注文のあるやつは金を持ってきてからこい」

こんなもんでいいかな?どうせこの後でムッツリーニの存在はばれるしな、こんぐらい平気だろ。

さて、そろそろ来る頃かな?

そう思った瞬間、ガラリと教室のドアが開き、息をきらせて胸にてを当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん・・・」

『え？』

だれからというわけでもなく、俺と明久を除いた教室全体から驚いたような声が上がる。そりゃそうだよな、知ってなきゃ俺でもびっくりしてたろうな。

クラスがにわかに騒がしくなる中、数少ない平然としている人物の一人、担任の福原さんがその姿をみて話しかけた。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもおねがいします」

「は、はい！あの、姫路瑞希（ひめじみずき）といいます。よろしくお願いします・・・。」

そこには、元学年次席の姫路がいた。

第3話（後書き）

やっと、メインヒロインが揃いましたね。
雅夜は原作知識を利用してムッツリ商会でバイトしています。
あと、途中であったパソのことは学園祭のころにわかると思います。
感のいい人だったら、もうわかってるかもしれませんが（汗）

第４話

「姫路瑞樹といいます。よろしくお願いします」

小柄な身体をさらに縮込ませるようにして声を上げる姫路。
肌は新雪のように白く、背中まで届く柔らかそうな髪は、優しげな彼女の性格を表している。
しかしその反面、制服を押し上げている胸が自己主張をしていた。

（島田がみたら泣きそうだな）

そう思い島田を見てみると、女子が増えたのがうれしいのか一瞬微笑んだが、すぐに羨ましそうな顔になった。

（・・・頑張れ、島田。）

しかし、男子の連中はその容姿をみて驚きの声を上げたわけではなかった。

「はいっ！質問です！」
「あ、は、はいっ。なんですか？」

姫路は教室に入るなり質問されて、驚く。

「なんでここにいるんですか？」

聞きようによっては失礼な質問だな。
まぁ、聞きたくなるのも仕方ないよな。学年次席が最下層（Ｆクラス）にいるんだもな。

「そ、その・・・。振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして・・・・・・」

この学校の振り分け試験は途中退席は、０点扱いされてしまうのでＦクラスいきが決まってしまう。という理不尽なことになっている。普通の高校だったら再テストなどがあるかもしれないが、この学校にはそれが無い。

『そういえば、俺も熱の問題がでたせいでＦくうらすに』
『あぁ。化学のだろ？アレは難しかったな』
『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』
『黙れ一人っ子』
『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』
『キサマっ！異端者か！』
『『『殺せっ！』』』
『すいませんでしたぁ！自分、調子こいてましたぁ！勘弁してくだせぇ！』

これは想像以上に楽しそうだな。

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

この空気についていけなくなったのか、逃げるように空いてる席――――明久と雄二の間で俺の斜め前の席に座った。

「き、緊張しましたぁ～・・・」

席に着くや否や、安堵の息を吐いて卓袱台に突っ伏した。よっぽど緊張したんだな。

「あのさ、姫「姫路」・・・」

おいおい雄二、明久がすごく泣きそうだぞ。

「は、はいっ。何ですか?えーっと・・・」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む。」

「あ、姫路です。よろしくお願いします。」

深々と頭を下げて挨拶をする。やっぱり礼儀ださしいな。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか?」

「あ、それは「それは、俺も気になるな」・・・」

雄二をみてみると、目がグッジョブといっていた。

考えていることは同じさ。と雄二に変えしておく。

「と、えーっと・・・もしかして浅月君ですか?」

「正解だが、俺を知っているのか?」

「何度か掲示板で見かけましたから。それよりも浅月君も私と同じ理由で此処に?」

「ま、まぁ、だいたい同じ理由だな。」

さすがに、本当のことはいいにくい。

「そうですか、よろしくお願いします。」

「あぁ、こちらもよろしくな」

さて、これで明久の邪魔が出来たな。満足満足。

「あ、そうだ。それで身体の調子は大丈夫なの？」

この声は、明久かっ！話題をみつけて話かけやがった！

「よ、吉井君！？」

くそっ！ここは仕返しをしなければ。

「「姫路、明久がブサイクですまん。」」

さすがは、雄二。考えてることは一緒だな！

「そ、そんな！目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗ですし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ・・・」

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするしな」

「あぁ、Ａクラスのあいつのことだろ？明久も知っていると思うぞ。結構有名だからな」

お、明久が興味深々だな。

「え？それはｄ「そ、それって誰ですかっ！？」・・・」

ここまでしてるんだから明久も気付けよ・・・こんなに・・・

「「確か、久保――――――――――利光だったかな」」

こんなにいい笑顔なのに。

「・・・・・・・・・・」
「おい、明久。声を殺してざめざめと泣くな。気持ち悪い。」
「もう僕、お婿にいけないよ・・・・」
「半分冗談だ。安心しろ。」
「え?残りの半分は?」
「本気に決まってるだろ」
「嘘だよねっ!嘘っていってよ雅夜!?」
「良くわかったな今のは嘘だ。」
「良かった・・・。本当によかったぁ。」
「全部本気だ」
「ちょっ!それのほうがやばいって!ねぇ、今度のも嘘だよね!?ねぇ!?」
「ところで姫路。体は大丈夫なのか?」
「あ、はい。もうすっかり平気です」
「ねぇ、雅夜!!お願いだから、嘘って言ってよ!!」
「いい加減、うっさいっ!」
「ゴペッ!!」

やべっ!?殺っちゃったかな?

「はいはい。そこの人たち、静かにしてくださいね?」
「ん?あぁ、すいま――――」

バキィッ、バラバラバラ・・・・・。

先生がかるく叩いただけで壊れてしまう教卓。

「え、・・・・・替えを用意してきます。少し待っててください」
「さすがに、もろすぎだろ?」

きまづそうに告げると、先生は早足で逃げていった。

「あ、あはは・・・」

近くでは、姫路が苦笑いしていた。
その隣では明久が神妙な顔立ちになって雄二に話しかけていた。そして、立ち上がって廊下に出て行く二人。
そして、二人に気付かれないように扉の前で聞き耳を立てる俺。

やっぱりここから戦争が始まったといっても過言でもないだろうな！

第４話（後書き）

さて、やっと戦争の話になってきましたよ。
雅夜の二つ名はどうしましょうかねぇ？

感想お待ちしております。

第5話

さてさて、どんな会話が繰り広げてるのかな？

『んで、話って？』

『この教室についてなんだけど・・・・・・』

―この教室（Fクラス）についてか・・・

『Fクラスか。想像以上に酷いもんだな』

『雄二もそう思うよね？』

このクラスのやつでけじゃなくて、見た奴誰でも思うぞ。

『もちろんだ』

『Aクラスの設備は見た？』

『ああ。凄かったな。あんな教室見たことがない』

あれは教室じゃなくてホテルみたいだったな

『そこで、僕からの提案。折角2年生になったんだし、＜試召戦争＞をやってみない？』

『戦争、だと？』

『うん。しかもAクラス相手に』

『・・・・・なにが目的だ』

『いやぁ、だってあまりに酷い設備だからさ』

『嘘をつくな。全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすなんて、そんなことはありえないだろうが』

『そ、そんなことないよ。興味がなければこんな学校にくるわけが

―――――』
『お前がこの学校を選んだのは、＜試験校だからこその学費の安さ＞が理由だろ？』

おーっと、明久ピーンチ。そろそろ俺も会話に加ろうかかな

『あー、えーっと、それは、その・・・・・』
「姫路の為だろ明久」
「雅夜！？どうして此処に？」
「雄二、こんな面白いこと俺に何故いわない？」
「いつからきいてやがった？」
「お前らが教室をでた辺りからかな」
「最初からじゃん、まったく雅夜は・・・」

明久に呆れられた！最悪だ・・・

「それよりさっきの話だ」
「あぁ、そうだね。どこまではなしたっけ？」
「明久が姫路の為に戦争を起こそうとしているってところ辺りだ」
「まぁ明久だからな。」
「べ、別にそんな理由じゃ――――――」
「（振り分け試験のときのことだろ）」

雄二に聞こえないように明久にに小声で言った。

「っ！（どうしてそのことを！）」
「（俺が知らないわけないだろ）」
「（・・・そうだよ。姫路さんにＡクラスの環境にいて欲しいんだよ）」
「（やっぱり。お前らしいよ、明久）」

「あ～、そろそろいいか？」

おっと、雄二の存在を忘れてたよ。

「大丈夫だ、それでどうするんだ、代表様？」

「明久に言われるまでもなく、おれ自身でもやろうと思ってたところだ。ちょうど勝てる作戦も思いついたからな」

「え？どうして？雄二だって全然勉強なんてしてないよね？」

「世の中学力だけが全てじゃないって、証明してみたくてな」

あぁ、霧島のことだな・・・あの時からこいつは変わったんだったな

「おい、さっさと教室に入るぞ。先生が戻ってきたみたいだ」

「あ、うん。」

「さて、代表のお手並み拝見と行きますかな」

壊れた教卓をかえて、ＨＲが再開された。

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

「えー、須川亮です。趣味は――――――」

とくに変わったことが起こらずに雄二の番が来た。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

先生にいわれて雄二が席を立つ。

いつものふざけた雰囲気は見られず、代表として相応しい堂々とした態度で教卓に上がっていった。

「坂本君は、Ｆクラスのクラス代表でしたよね？」

先生に問われて、鷹揚にうなづいた。

最下層で一番上っていってもたかがしれてるけどな

「Ｆクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

こっからが雄二の見せ所だな。どうやってＦクラスの皆を乗せるかな？

「さて、皆に一つ聞きたいことがある」

雄二が全員の生徒を見るように告げる。

間のとりかたがうまいく、全員の視線はすぐに雄二に向けられるようになった。

皆が雄二を見た後、雄二は教室の各所に目を向けた。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられて皆雄二の視線を追い、それらの備品をみてしまう。

「――――――不満はないか？

『『『『『『『『『大ありじゃぁっ！！！！！』』』』』』』』』

』

Ｆクラスの魂がひとつになった瞬間だった。

「だろう？俺だってこの現況は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそうだ！』

『いくら学費が安いからといって、この設備はあんまりだ！改善を要求する！』

『そもそもＡクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる！』

堰をきったかのように次々とあがる不満の声。

「皆の意見はもっともだ。そこで」

Ｆクラスの反応に満足したのか、自信のある顔を浮かべて、

「これは代表としての提案だが――――――――」

これから戦友となる仲間達にむけて野性味満点の八重歯を見せ、

「――――――Ｆクラスはクラスに＜試召戦争＞を仕掛けようと思う」

Ｆクラス代表、坂本雄二は戦争への引き金をひいた。

第5話（後書き）

この場面は書いてて楽しいですね

さてさて雅夜はどう紹介されるのでしょうか？

感想おまちしております

第6話

Aクラスへの戦線布告。
それはFクラスにとっては現実未の乏しい提案にしか思えなっかた。

『勝てるわけがない』
『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』
『姫路さんがいたらなにもいらない』

そんな悲鳴が教室のいたるところから上がる。
確かに誰が見ても、AクラスとFクラスの戦力差は明らかだった。

文月学園に点数の上限が無いテストが採用されてから4年間が経過した。
このテストには1時間という制限時間と無制限の問題数が用意されている。その為、テストの点数は上限がなく、能力次第でどこまでも成績を伸ばすことが出来る。
また、科学とオカルトと偶然によって完成された＜試験召還システム＞というものがある。これはテストの点数に応じた強さを持つ＜召喚獣＞を呼び出して戦うことのできるシステムで、教師の立会いの下で行使が可能になる。
学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案された先進的な試み。その中心にあるのが、召還獣を用いたクラス単位の戦争――――試召戦争と呼ばれる戦いだ。
その戦争で一番重要になるのはテストの点数なんだが、AクラスとFクラスの点数は文字どうり桁違いだ。正面からやりあったとしたら、Aクラス一人相手にFクラスは3人でも勝てるかどうか。いや、相手次第では4，5人でも勝てないかもしれない。

「そんなことは無い。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる。」

しかし、そんな中で雄二は自信満々に宣言してみせた。

『何を馬鹿なことを』
『できるわけがないだろう』
『何の根拠があってそんなことを』

しかし、まだ否定的な声しか上がらなかった。
確かにどう考えても勝てる相手ではないだろうな。しかし、雄二にはその考えがある。

「根拠ならあるさ。このクラスには試召戦争で勝つことの出来る要素がそろっている」

この雄二の言葉をうけてFクラスの皆が騒ぎ始める。

「それを今から説明してやる」

得意の不適な笑みで説明を始める。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」
「・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」
「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズをとる康太。
姫路はスカートの裾を押さえて遠ざかると、康太は顔に付いた畳のあとを隠しながら壇上へ歩き出した。

「土屋康太。こいつがあの有名な寡黙なる性識者（ムッツリーニ）」
「・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

ムッツリーニ。この名前は男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑をもって挙げられる。

『ムッツリーニだと・・・・・・？』
『馬鹿な、奴がそうだというのか・・・・・・・？』
『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ・・・・・』
『ああ。ムッツリに恥じない姿だ・・・・・』

たとえどんな状況でも、自分の下心は隠し続ける。異名は伊達じゃないよな。

「姫路のことは説明する必要はないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」
「えっ？わ、わたしですかっ？」
「ああ、うちの主戦力だ。期待している」

姫路ひとりでＦクラス生徒の４，５人分の戦力になるだろう。

『そうだ。俺達には姫路さんがいるんだった』
『彼女ならＡクラスにも引けをとらない』
『ああ、彼女さえいれば何もいらないな』

誰だ？さっきから姫路にラブコールしてる奴は？

「木下秀吉だっている」

木下秀吉。学力ではあまり名をきかないが、他の事だったら有名だ。
演劇部のポープだったりだとか、双子の姉がいたり。

『おお・・・・・・！』
『ああ。あいつ確か木下優子の・・・・・・』
「当然俺も全力を尽くす」
『確かになんだかやってくれそうな奴だ』
『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』
『それじゃあ、振り分け試験のときは姫路さんと同じで体調不良だったのか』
『実力はＡクラスレベルが二人もいるってことだよな！』

やっぱり俺の存在は知れ渡ってなかったようだな。

「いや、Ａクラスレベルの奴はもう一人いる。おい、雅夜。お前も前に来い。」
「俺のことか？・・・・・・まさか、あのことを言うのか？」
「ああ、別にいいだろ。どうせすぐにばれるんだ」

まじかよ・・・、できればばれたく無いんだがな。

『なんだ、あいつもすごい奴なのか？すごそうには見えないけどな』
『そうだな。しかし、坂本がＡクラスレベルの奴っていってなかったか？』
『雅夜・・・・・・・・・あっ、まさかあの浅月雅夜というのか！どこかで聞いたことがあると思ったら、あいつこの学園にはいって最初のテストで、霧島を抜いて学年一位になった奴だ！！』
『『『『なんだとっ！？』』』』

良く憶えてたな。あのとき何となく本気でやってみたら取れちゃったんだよね。

「しかもそれだけじゃないぞ、こっちの呼び名のほうは皆も知っていると思う。

こいつは＜未来の情報屋＞だ！！」

あ～あ、言っちゃったよ。

第6話（後書き）

オリ主いれるんだったら二つ名てきなものが欲しいと思いましてこんなの入れてしまいました。
ちょっと後悔しています（泣）
詳細は次回のやつにのせるつもりです。

第7話

「しかもそれだけじゃないぞ、こっちの呼び名のほうは皆も知っていると思う。
　こいつは＜未来の情報屋＞だ！！」

あ～あ、言っちゃったよ。

『『『未来の情報屋だとっ！』』』
『ムッツリ商会のＮｏ．２と言われていて、影でムッツリーニを支えていると言われている・・・』
『未来に起こりうる貴重な瞬間をムッツリーニに教えているという・・・』
『しかし、存在は一切明かされていなかった・・・』
『『『伝説の情報屋！！！』』』

そう、俺は前にも言ったがムッツリ商会でバイトをしている。
その内容は、康太に未来に起こる貴重な瞬間を教えること。それともう一つ。
康太にどのタイミングで誰の写真がどのぐらい売れるか教えるもの。
この二つの情報を康太に売って、康太がこの情報を使ってムッツリ商会を繁盛させているということだ。
しかし今まで、康太と俺の素性は一切明かされていなかった。（まぁ、明久と雄二、秀吉や島田達は知っていたが）
その存在がたったの５分間の間に両名ともに明かされたのだから、皆が驚くのも仕方が無かった。

『しかし、坂本の言っていることは本当なのか？』
『いわれてみればそうだな。ムッツリーニはさっきの様子からして

本物なのは良いとして』
『未来の情報屋は本当なのか？』
『そういえば、自己紹介のときにムッツリ商会でアルバイトしていると言ってなかったか？』

「坂本の言っていることは本当だ。俺は＜未来の情報屋＞だ」
「・・・・・・・・・この二人の言っていることは本当だ。雅夜は情報屋だ」

康太までもうなずいてくれたことで、この事は確かなことになった。

『おいおい、俺達ならやれるんじゃないなか！？』
『なんだかやれそうなきがしてきたな！』

こんなにすごいメンバーが揃っていれば打倒Ａクラスも夢じゃなくなってきた。
今クラスの士気は確実に上がっていた。

「それに、吉井明久だっている」

・・・・・・・シーン――――

そして一気に下がった。
さすが雄二。明久を弄ることだったら誰にも負けない強さを持っている！

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！まったくそんな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』
『聞いたことあるか？』
『さぁ？初めて聞いたが。このクラスにいるのか？』

「ホラ！折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを――――――って、なんで僕を睨むの！雅夜もっ！士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

ほう、明久は俺達は普通じゃないと言いたいんだな。

「（雄二あのことをいうぞ）」
「（お前も同じ考えか。俺もいま思っていたところだ）」

「そうか。皆はこいつのことを知らないのか」
「ならば教えてやる。」
「「こいつの肩書きは《観察処分者》だ！！」」

『・・・それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

クラスの奴がすこし間違ったことをいった。

「ち、違うよっ！ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」
「そうだ。バカの代名詞だ」
「肯定するな、バカ雄二！」
「そうだ、雄二それは間違っている」
「ありがとう、雅夜」

なにを勘違いしていやがるっ！

「学生生活不適格の烙印を押された、開校いらいのろくでなしのことだ！」
「よくそこまで、言ってくれた表に出ろ！ちくしょーー！」
「あの、それってどういうものなのですか？」
なんだ、姫路はしらないのか？
「まぁ、具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになった召喚獣でこなすといった具合だ」
そう、本来の召喚獣はものに触ることができない。召喚獣が触れられることが出来るのは他の召喚獣だけである。
しかし、明久の召喚獣は違う。雄二の言ったとおりに物に触ることことの出来る特別製だ。
「そうなんですか？それって凄いですね。召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことが出来るなら便利ですよね」
「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ」
実際に大したもんじゃない。召喚獣の負担は何割かは明久に帰ってくる。だから、明久の召喚獣が傷ついたら、明久もダメージを負う。精神がリンクするってことだけだから表面的にではなく、内面にくるってことだ。
『おいおい。《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？』

『だよな。それならおいそれと召喚できない奴が一人いるってことになるよな』
「気にするな。いてもいなくても同じような雑魚だ」
「ああ、一（マイナス）を戦力と考えなくて良い」
「雄二に雅夜、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよね？」
「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずDクラスを征服してみようと思う」
「そうだな。あそこなら小手調べに丁度いい。」
「うわっ、すっごく大胆に無視された！」
「皆、この待遇は大いに不満だろう？」
『『『当然だ！』』』
「ならば、総員武器（ペン）をとれ！出陣の準備だ！」
『『『おおーっ！！』』』
「俺らに必要なのは卓袱台ではない！俺らに必要なのは・・・」
『『『Aクラスのシステムデスクだ！』』』

第7話（後書き）

ふぅー。

雅夜の肩書きでここまで長く続くとは思いませんでしたよ。

感想お待ちしております

第8話

「明久にはDクラスへの死者になってもらおうと思う。無事大役を果たせ！」
「この役目は明久だからこそ出来る役目だ、頼んだぞ！」
そうこの役目は明久だからこそ出来るものである。
「・・・・下位勢力の宣戦布告の使者って大抵酷い目に遭うよね？しかも今字がちがく無かった？」
ちぃっ、きずきやがったか！
「大丈夫だ。奴らがお前に危害を加えることは無い。騙されたと思って行ってみろ」
「本当に？」
「本当だ、俺達を誰だと思っている」
「そうだ、俺達を信じろ。俺達は友人を騙すような真似はしない」
明久は友人に入るわけが無い。こいつは生贄だ。
「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」
「「ああ、頼んだぞ」」
クラスメイトの歓声と拍手で明久を送り出した。
その数秒後・・・
「やっぱ明久は最高のやつだぜ！」
「ああ。皆もわかったか？危なくなったら遠慮なくあいつを生贄に

ささげろ。それで助かる。」

『『『『もちろんだ！』』』』

☆

「騙されたぁっ！」

あ、明久が帰ってきた。うん、やっぱりボロボロだな。

「よく生きて帰れたな？Ｄクラスのやつは優しいのか？」

「やはりそうきたか」

「やはりってなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！それに雅夜、君までグルだったの！？」

「あたりまえだ。俺は未来の情報屋だぜ？そんぐらいわからなくてどうする。」

「当然だ。そんなことも予想できなくて代表が務まるか」

「少しは悪びれろよ！」

去年の春からの付き合いなのに、なんで気付かないんだ？

「吉井君、大丈夫ですか？」

そんな明久を見てか、姫路が声をかける

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」
「吉井、本当に大丈夫？」

島田までも明久に声をかける。

「平気だよ。心配してくれてありがとう」
「そう、良かった・・・・。ウチが殴る余裕はまだあるんだ・・・・」
「ああっ！もうダメ！死にそう！」

おいおい、島田。照れ隠しももう少し可愛げのある奴にしろよ。

「島田。明久を殺すなよ？」
「大丈夫よ。生かさず殺す手加減はできるわ」

さすが島田。恐ろしい子。

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

Fクラスでは行わないようで、扉を開けて外に出て行った。

「あの、痛かったら言ってくださいね？」
「大変じゃったの」

姫路・秀吉の順番で明久に声をかけて雄二のあとについていった。

「・・・・・・・・・・（サスサス）」

そのあとに康太が自分の頬のあたりをさすりながら続いていった。

「ムッツリーニ。覗いていたときの畳の跡ならもう消えてるよ？」
「・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」
「今更否定しても遅いだろ。」
「そうだよ、ムッツリーニがＨなのは知ってるから」
「・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」
「ここまでバレてるのに否定し続けるなんて、ある意味凄いと思う」
「否定していなかったら、ムッツリーニなんてあだ名を付かないと思うけどな。」
「・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」
「――――――何色だった？」
「みずいろ」
「即答かよ！」
「やっぱりムッツリーニはいろいろな意味で凄いよ」
「・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

そうやって教室内で話していると、

「ほら吉井。あんた達も来るの」

くそっ！姫路の弁当フラグを消したかったのに・・・！

「あー、はいはい。」
「仕方ない。腹をくくるか。」
「返事は一回！雅夜も変な事言ってないで、早く来る！」
「へーい」「ほーい」
「・・・・一度、Ｄａｓ　Ｂｒｅｃｈｅｎ――――――ええと、日本語だと・・・」
「ん、ドイツ語か？」
「・・・・・・・・・・調教」

「そう。調教の必要がありそうね」
「調教って。せめて教育とか指導って言ってくれない？」
「じゃ、中間とってＺｕｃｈｔｉｇｕｎｇ――――」
「・・・・・・・・・・それはわからない」
「折檻だろ。しかも悪化してるし」
「そう？」
「というかムッツリーニ。どうして『調教』なんてドイツ語を知ってるの？」
「・・・・・・・・・・一般常識」

すげぇ一般常識だな。

「相変わらずムッツリーニは性に関する知識だけズバぬけてるよね」
「・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

そんな会話をしていると屋上にたどり着いた。

第8話（後書き）

やっぱり他の小説と比べると短いですね（汗）

やっぱり長くしたほうがいいですかね？

感想お待ちしております。

第9話

雲一つない空から眩しい光が差し込む。
春風とともに訪れた陽光に、気持ちよさを感じた。

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

それができてなかったら、もう一回行かせるまでだ。

「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたけど」
「それじゃ、先にお昼ご飯ってことよね？」
「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともなもの食べろよ？」
「そう思うならパンでもおごってくれるとうれしいんでけど」
「なぜ俺が、お前に金をかけなければいけないんだ？」

もったいないったらありゃしない。

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」
「いや、食べないんじゃない。食べれないんだ。」
「いや、一応食べてるよ。」
「・・・・アレは食べてると言えるのか？」

あれでどうやったら生きれるのか不思議だ。

「何が言いたいのさ」
「いや、お前の主食って――――――水と塩だろう？」
「失礼な。きちんと砂糖だって食べてるさ！」
「あの、吉井君？水と塩と砂糖って、食べるとはいいませんよ・・・・？」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

やっぱりこいつはバカなんだよな・・・・

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いんだよな」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

明久の両親は仕事の都合で海外にいる為、明久は一人暮らしをしている。

一応親からの仕送りはあるらしいけど、そのほとんどはゲームや漫画に消えている。まぁ、いくつかは俺が進めた奴だけど。

「・・・・あの、良かったら私がお弁当作ってきましょうか？」

「ゑ？」

しまったぁっ！姫路の弁当フラグを忘れてた！やばい、どうするどうする！？

「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久し振りだよ！」

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うん！」

そうだ、明久だけに作らせれば俺達は死をまぬｇ・・・

「・・・・・ふーん。瑞樹って随分優しいんでね。吉井だけに作ってくるなんて」

やめてくれぇ！島田は俺達を殺すきかっ！

「あ、いえ！その、皆さんにも・・・・」
「俺達にも？いいのか？」
「はい。嫌じゃなかったら」
「それは楽しみじゃのう」
「・・・・・・・・・・（コクコク）」
「・・・・・お手並み拝見ね」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「？雅夜はどうして泣いてるの？」
「人間の儚さを知ってな・・・・・」

俺、明日いきて帰れるかな・・・・・

「わかりました。それじゃ、皆さんに作ってきますね」
「姫路さんって優しいね」
「そ、そんな・・・・」
「今だから言うけど、僕初めて会う前から君のこと好き――――――」
「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」
「――――――にしたいと思ってました」

明久・・・ついにお前は変態になったんだな。

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」
「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になるときがあるな」
「だって・・・お弁当が・・・・」
「どんだけ、欲しいんだよ」
「話がかなりそれたな。さて、試召戦争の話に戻ろう」

今回の戦争では殆どが回復試験だからなぁ・・・面白くないんだ

よな。

「雄二。一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなのじゃ？段階を踏んでいくのならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そういえば、確かにそうですね」

「なんだ、雄二。皆にまだ話してなかったのか？」

「お前にも話してないよな？」

「俺にわからないことなんて無いってことさ」

「まぁいい。当然考えがあってのことだ」

「どんな考えですか？」

「色々と理由があるんだが、とりあえずEクラスを攻めないのは簡単だ。戦うまでも無い相手だからな。」

「え？でも、僕らよりクラスが上だよ？」

試験の点数で振り分け試験を行われているので、Eクラスは俺達のFクラスより点数は高い。

「振り分け試験の時はな。姫路と俺に問題が無い今ならEクラスには勝てる。」

「だから、Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」

「？それならDクラスは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初っから目標のAクラスに挑もうよ」

「さっき雄二が言ってたろ？色々と理由があるって。」

「その通りだ。初陣だからな、派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？それに、打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

「あ、あの！」

と、姫路にしては珍しく大きな声を出していた。

「ん？どうした姫路」

「えっと、その。吉井君と坂本君と浅月君は、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されて――――」

「それはそうと！」

雄二の台詞を遮るように明久が大きな声をだした。

「さっきの話、Ｄクラスに勝てなかったら意味が無いよ？」

「負けるわけ無いさ」

「本気の雄二にかなう奴なんかいると思うか？」

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」

「そう。この戦いは負けられない」

「「いいか、お前ら。ウチ（俺ら）のクラスは――――――最強だ。」」

雄二は、学力が全てじゃないという証明のため。

明久は、姫路に相応しい設備を与えるため。

俺は、戦いという楽しさを求めて。

皆、違った目的であるが、やることは一緒。

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Ａクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「・・・・・・・・・（グッ）」

「が、頑張りますっ」

打倒Ａクラス。

Fクラスにとっては荒唐無稽な夢かもしれないが、夢は見るためにあるものだ。

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

ここに、最下層（Fクラス）が最上層（Aクラス）に対する下克上が始まった。

第9話（後書き）

次回からやっと戦争に入ります。
Dクラス戦では雅夜はあまり活躍しないかもしれないです。

感想お待ちしております。

第１０話

Ｆクラス教室にて、

「・・・・・雄二、いい言葉を教えてやる。」
「何だ、雅夜？」
「暇は人を殺す、だ」
「そうか、そいつは結構だな」
「だから面白いことをやってくれ。」
「そんなこと言ってる暇があるなら、テストをまじめに受けろ。」
「楽しくねぇーんだよ、チクショー！！」

今、俺と姫路は回復試験を全科目受けている。
俺達の役目はまず回復試験を受けることだった。

「しかたないだろ。お前らの持ち点はゼロなんだから、テストをうけなくて如何する？」
「めんどくせぇな、全部２００点ぐらいでいいか？」
「まぁ、そんぐらいだったら問題ないだろう。」
「まじか！？ならとっとと終わらせよっと」

ちょっとだけやる気出てきたな。それだったらすぐに終わるだろう。

「そうだ、雄二。」
「今度はなんだ？」
「そろそろ、明久が脱走を考える頃だぞ？」
「そうか、なら・・・（カキカキ）良し。お～い、横溝。」
「なんだ坂本？」

雄二は何かをメモして横溝を呼んだ。

「これを明久に伝えてきてくれ。頼んだ」

「了解した」

そういって横溝は教室を出て行った。

「なにを頼んだんだ？」

「明久に《逃げたら殺す》っていわせに行かせた」

だめだね、全然だめだね。

「おい雄二、今度は俺にやらせろ。もっと面白くしてやる。」

「べつにかまわないぞ」

そう雄二に言ってから数分後・・・・

「坂本！吉井からの伝言だ！」

「なんだ？」

「先生たちに偽情報をながしてくれ、と」

「そうか・・・ムッツリーニ！」

「・・・・ここに（シュタ）」

「Dクラスが呼んだのは誰だ？」

「・・・・船越先生だ」

「そうか、だったら・・・」

「おいっ、雄二！今度は俺の番だろ？」

「そうだったな。ならお前に任せる」

「任せろ。須川。これを校内放送でながせ。」

「これは・・・。浅月、絶対に成功させてみせよう」

俺が渡した紙を見た後、須川はとてつもなく笑顔になって教室をでていった。

「雅夜、お前は何を渡したんだ？」
「そうあわてるな、そのうち嫌でもわかるさ」
「？まぁ、雅夜が言うなら」

《ピンポンパンポーン》

「お！来た見たいだぞ」

《船越先生、船越先生》

《吉井明久が体育館裏で待っています》

「「「「ぶっ！！」」」」

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

「「「「「わはははははっ！！」」」」」
「グッジョブ！須川。最高の仕事だったぜ！」
「これが、お前の、いった、奴か。最高すぎる！わははっ！」

皆が笑いきるまでしばし、雄二達は教室を出て行った。

「おい姫路。あとどん位で終わる？」
「えっと、あと３０分ぐらいで終わると思います」
「そうか、だったら大丈夫だな」

「このあとって、浅月君が近衛部隊の人たちを引き付けている間に、私が平賀君を倒せばいいんですよね？」
「まぁ、お前の点数だったら近衛部隊もろとも倒せそうだけどな」
「そ、そんなこと無いですよっ。」
「そう自分を謙遜するなって。この学年じゃお前とまともに戦えるのって霧島ぐらいだろ？」
「・・・本気の浅月君には敵いませんよ。」
「ん？なんか言ったか？」
「はい。浅月君はなんで、本気を出さないんですか？」
「本気か・・・・・・。何でだろうな？」
「そういって誤魔化さないでくださいっ！本当のことを教えてください」
「本当のことか・・・・。誰にも言わないって誓えるか？」
「はい。誰にも言いません。」
「じゃあ、お前に質問だ。Ａクラスとｆクラス、どっちが楽しいと思う？」
「え・・・・・・？」
「俺はｆクラスのほうが楽しいと思うんだ。勉強なんてどうだっていい。学校なんて楽しめればそれで俺は満足できる。」
「・・・・・・・・・」
「だから俺はｆクラスにいる。わかった？」
「・・・・・確かにそうですね。私もＡクラスよりもｆクラスのほうが楽しい気がします。」

そう。俺がこのクラスにいる理由は楽しそうだからだ。学生時代は後のことなんて考えなくて良いんだよ。今楽しんでいるかどうかが問題なんだよ。
楽しくない学園生活なんて全然つまんないだろ？そう思ったら、誰でもｆクラスが良いと思うさ、きっと。

数分後、雄二たちが明久たち――――戦死を免れた奴ら、をつれてもどってきた。
「明久、良くやってくれた。」
「ああ、明久にしちゃ上出来だ。」
「・・・校内放送、聞こえた？」
「「ああ。バッチリな」」
「それよりも、須川君がどこにいるか知らない？」
「もうすこししたら、帰ってくるんじゃないか？」

おいおい、明久。どこから包丁もってきたんだ？

「ちまみにだが、さっきの放送を指示したのは雅夜だ。」
「シャァァアッ！」
「うおっ！アブねーじゃないか、明久！」
「黙れ！とっとと死ねっ！」

ちぃ、めんどくさいな。さっさと平賀を討ち取りに行かなきゃならないのに。

「お、船越先生」

お！ナイスフォロー雄二。明久が掃除用具のロッカーに入って行ったぞ。

「さて、バカは放っておいて、そろそろ決着をつけにいくか」
「そうじゃな、ちらほらと下校している生徒の姿も見え始めたし、頃合じゃろう」

「・・・・・・・・・（コクコク）」
「おっしゃ！Dクラス代表の首を取りに行くぞ！」
『『『『応っ！』』』』

やっと、戦える！戦わなかったら、そんすぎる！

「あー、明久。船越先生が来たっていうのは嘘だ。」

やばい、明久が復活する前に戦場にいかなければ！

「姫路。さっさと行くぞ。」
「はいっ。わかりました。」
「というわけで雄二、行ってくる。」
「あぁ、頼んだぞ。」

☆

「向井先生！Fクラス吉井が――――」
「Dクラス玉野美紀、試験召喚（サモン）」
「なっ！近衛部隊！？」
「残念だったね。船越先生の彼氏クン？」
「ち、違う！アレは雄二が勝手に」
「そんなに照れなくてもいいじゃないか。さ、玉野さん。彼に祝福を」
「わかりました」
「ちくしょう！あと1歩でDクラスを僕の手で倒せるのに！」
「何を言うかと思えば、彼氏クン。いくら防御が薄く見えても、さ

すがにFクラスの人が近づいたら近衛部隊が来るにきまっているだろう?ま、近衛部隊がいなくてもお前じゃムリだろうけど」
「それは同感。確かに僕にはムリだろうね。だから――」
お、やってるやってる。
「雅夜後はよろしくね?」
「もうすこしがんばろうぜ?えっと、Fクラス浅月雅夜がDクラス近衛部隊に勝負をしかける、サモンっと」
「「「「はっ?」」」」
Fクラス　浅月雅夜　VS　Dクラス　近衛部隊×5
現代国語　288点　平均110点
漆黒の衣服を身にまとい、その上からジャケットを羽織っている。手には小太刀を二つ持っている――いわゆる二刀流である。
「さて、お前えら。この俺が受けてたとう。」
「ひるむなっ!取り囲んでいっきにたたくんだ!」
雑魚がいくら束になっても雑魚には変わりようが無いのに。
「まったく・・・。姫路そっちは任せたぞ」
「そうだね。姫路さん、そっちはよろしくね」
「は?」
いやいや、何を言ってるんだこいつみたいな顔されても。
「あ、あの・・・・」
「え?あ、姫路さん。どうしたの?Aクラスはこの廊下は通らなか

ったと思うけど」
「いえ、そうじゃなくて・・・・・・Ｆクラス姫路瑞樹です。Ｄクラス平賀君に現代国語勝負を挑みます。」
「・・・・はぁ。どうも」
「あの、えっと・・・・・さ、サモンです」

Ｆクラス　姫路瑞樹　　ＶＳ　　Ｄクラス　平賀源二
現代国語　３３９点　　１２９点

「え？あ、あれ？」
「ご、ごめんなさいっ」

相手に反撃をいちども許さずにに一撃でＤクラス代表を倒し、Ｄクラス戦は終わった。

第１０話（後書き）

いつもより長くなってしまいました。

感想お待ちしております。

バカテスト第1問目（前書き）

１０話ごとぐらいにバカテストを挟んでいこうと思います。

バカテスト第1問目

バカテスト　科学　第一問

問　以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞樹の答え

『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。

合金の例・・・ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え
『合金の例・・・未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント
　すごく強いといわれても。

浅月雅夜の答え
『問題点・・・マグネシウムを選んだときにきずかなかった、わるい頭』

教師のコメント
　あとで職員室に来てください。その悪い頭についてじっくり話しましょう。

バカテスト　国語　第二問
問　以下の意味をもつことわざを答えなさい。
『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』
『（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞樹の答え
『（1）弘法も筆の誤り』
『（2）泣きっ面に蜂』

教師のコメント
　正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（2）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え
『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント
　シュールな光景ですね。

吉井明久の答え
『（2）泣きっ面蹴ったり』

浅月雅夜の答え
『（2）殴ったり蹴ったり』

教師のコメント
　君たちは鬼ですか。

バカテスト　英語　第3問

問　以下の英文を訳しなさい。

［This is the bookshelf that grandmother had used regularly.］

姫路瑞樹の答え

［これは私の祖母が愛用していた本棚です。］

教師のコメント

正解です。きちんと勉強してますね。

土屋康太の答え

［これは　　］

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

［☆●◆▽「♪＊×　　］

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

浅月雅夜の答え

［3ヶ月前に祖母は死にました　　］

教師のコメント

・・・・すみません。

バカテスト　数学　第4問

問　以下の問に答えなさい。

『（1）4sinX＋3cos3X＝2の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するXの値を一つ答えなさい。

（2）sin（A＋B）と等しい式を示すのは次のうちどれか、?～?の中から選びなさい。

?sinA＋cosB　　?sinA－cosB

?sinAcosB　　?sinAcosB

＋cosAsinB』

姫路瑞樹の答え

『（1）X＝π／6

（2）?　　』

教師のコメント

そうですね。角度を『°』ではなく『π』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

『（1）X＝およそ3』

教師のコメント
　およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え
『（2）およそ？』

教師のコメント
　先生はいままで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

浅月雅夜の答え
『（1）X＝たぶんπ／6
（2）？だった気がする』

教師のコメント
　正解なんですが、余計なことは書かなくて良いです。

バカテスト　物理　第5問
問　以下の文章の（　）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（　　）である』

姫路瑞樹の答え
『粒子』

教師のコメント
良く出来ました。

土屋康太の答え
『寄せては返すの』

教師のコメント
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え
『勇者の武器』

教師のコメント
先生もＲＰＧは好きです。

浅月雅夜の答え
『眩しいの』

教師のコメント

まじめにやってください。

バカテスト第1問目（後書き）

すみません！

いままで、バカテストの存在を忘れていました。
なので、十話ごとに入れていくことにします。

感想お待ちしております。

第11話

Dクラス代表　平賀源二　討死

『『『『うぉぉーーっ！』』』』

その知らせを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大きな音響を校舎内を駆け巡った。

「お疲れ様、姫路」
「お疲れ様です、吉井君、浅月君」
「お疲れ、姫路さん、雅夜」
「お前も最後くらいは戦えよ。どうせ殆ど召喚してないんだろ？」
「ギクッ！そ、そんなことないよ。ちゃんと指揮官として戦ったよ！」
「指揮官としてって、どうせ皆がやられたときに一度だけとかだろ？」
「そ、そんなことより！」

図星かよ。

「明久、雄二のところに行って戦後対談に参加して来い。俺は姫路に話がある。」
「え、あ、うん。いってくるね」

明久は俺が言ったとおりに雄二の元に行った。そして、姫路は驚いていた。

「これで、話やすくなったな、姫路？」

「え?どういうことですか?」
「俺か雄二に聞きたいことがあるんじゃないか?そして、それは明久に聞かれるとちょっとばかしまずいってこと」
俺がそういうと、姫路の顔は一瞬で真っ赤にそまり恥ずかしがっていた。
「ど、どうしてしっているんですか?」
こころなしか、声が小さくなった気がする。
「どうしてもなにも、姫路の明久に対する態度をみて気付くなっていうほうが難しいぞ?」
「は、はぅぅ!」
姫路の顔はさらに真っ赤になっていった。
「とりあえず落ち着いてくれ。ほら深呼吸して」
「スーハー、スーハー」
姫路はよほど気が動転しているのか、俺が言ったとおりに深呼吸をした。
「落ち着いたか?」
「は、はい。それで、この試召戦争についてなんですが、どうして始めたんですか?」
「ま、俺と雄二は元々興味をもっていたんだけどな、きっかけは明久が相談してきたからだ」
「あの、吉井君がそんなこと言い出した理由って・・・・」
「さぁな。あいつは振り分け試験のころから、やる気になっていた

が。バカにはバカなりに譲れないものがあった、ってことだろ？」

お、明久がもどってきたみたいだな。

「振り分け試験って――――それじゃ、やっぱり」

「俺が言えるのはここまでかな。姫路、お前の想像は多分間違っていないと思うぞ」

「は、はい。ありがとうございましたっ！」

「ん？どうしたの、姫路さん？」

「よ、吉井君っ！い、い、今の話聞こえちゃいましたかっ！？」

「？よくわからないけど、聞こえなかったよ」

「明久、そろそろ帰るぞ」

「あ、うん。姫路さんとはもういいの？」

「ああ。これで決心も固まっただろうし、な？」

俺が姫路に問いかけると、ボンッ！と音が聞こえそうなほどに姫路の顔が真っ赤になった。

「ふーん、そっか。よくわからないけど、それじゃ帰ろうか。姫路さん、またね」

「あ、はい！さようなら！」

姫路は顔を赤くしたまま手をブンブンと振るのを見て、俺と明久は教室を出て行った。

☆

「それにしてもさ」
「ん？」
「Ｄクラスとの勝負って本当に必要だったの？別にエアコンくらいなら他の方法でも壊せたと思うけど」
「Ｄクラスにエアコンって・・・Ｂクラスのエアコンのことか、雄二？」
「ああ。Ｄクラスにはｂクラスのエアコンを壊させる条件で取引してきた。」
「なるほどな。たしかに次のＢクラス戦はめんどくさそうだしな。」
「ん？お前が戦争を面倒くさいとは、どういった風の吹き回しだ？」
「きにするな。戦争になったらわかる。」
「まぁ、お前だったら大丈夫だろうな」
「ね、ねぇ！無視しないでよ！？」
「Ｄクラス戦のことだろ」
「理由だったら他にもあるさ。クラスの皆を戦争に慣れさせる為だとか、他のクラスにプレッシャーを与える為だとか、自信をつけさせて士気を上げる為とかな」
「ふーん。それじゃ、Ｄクラスの設備を手に入れなかったのは？」
「目的はＡクラスだからだろ。Ｄクラスの設備を手に入れることで満足してしまう奴らが出るかも知れねぇだろ？それに試召戦争に反対する奴もでてくるかもしれねない。そうならない為と、不満によるモチベーションを維持する為だ」
「ああ。雅夜が言ってることで正解だ」
まあ、失敗したら大変なことになるんだけどな。

「Aクラスに勝てるかな？」
「無論だ。俺に任せておけ」
「本気の雄二に出来ないことはない、だろ？」
「・・・・ありがとう。僕のわがままの為に」
「別にそんなわけじゃない。試召戦争は俺がこの学校に来た目的そのものだからな」

ふと、雄二は遠くをみる。
昔は神童ともよばれていたが、今ではその面影をなくした。
ある事件がきっかけで雄二は勉強よりも大切なものを見つけた。
雄二はそのことを証明するために、この学校に来た。

「目的の為にも、お前達にはきっちり協力してもらうからな。とりあえずは明日の補給テストで」
「・・・・・ぐぅ」
「大丈夫だ。任しておけ、代表殿」

あしたは最初っからテストか。すこしは勉強でもしておくか。

「明久も、ゲームばっかしてないで、寝る前にすこしくらいは勉強しろよ？」
「はいはい。教科書くらいは読んで・・・ん？」
「どうした？」
「あ！教科書、卓袱台の下に置いたままだった！」
「・・・・あほ。さっさと取って来い」
「うぅ・・・・。んじゃ、先に帰っていいよ」
「え？待ってると思ってたのか？」
「もちろんだ。待ってるわけが無いだろう」
「わかっていたけど、薄情もの」

そういって明久は走って学校に行った。

「・・・・・・雅夜。一つだけ聞いておきたいことがある」
「なんだ、雄二？」
「雅夜は・・・いや、未来の情報屋は今回の戦争はどう見ている？」
「どうもなにも、明久は姫路の為に戦い、雄二は霧島をはじめ、先生・学園、そして世界に勉強だけが全てじゃないと訴えるために戦う。成し遂げなきゃいけない事がある奴は強い。それだけのことだろ？」
「・・・・・・・・・お前はいったいどこまで知っている？」
「・・・・・お前が生まれ変わったときの真相なら知っている。そのときの雄二の気持ちも、霧島の気持ちも、だ。」
「そうか・・・・。このことは誰にも言うなよ、絶対にだ。」
「大丈夫だよ、俺は守ると決めたものは絶対に守る」
「ならいい。じゃあな」
「ああ。また明日な」

第11話（後書き）

さて、最後はちょっとだけシリアスな展開になったかな？

感想お待ちしております。

第１２話

カタカタカタカタカタ。

「雅夜、何してるんだ？」

「清涼祭のときに部活で出す物のプログラムを作っているんだがな・・・結構大変で、まにあうかどうかギリギリなんだ」

「清涼祭か。そういえばそんなのもあったな。」

「そんなものって、興味はないのか？」

「ああ。まったくと言って良いほどない。」

断言しやがったよ、コイツ。

「しかし、１ヶ月ちかく掛かるなんて何を作っているんだ？」

「それは清涼祭のときのお楽しみだ。」

たぶん出来上がると思うけど、完璧にできるか微妙なんだよね。

「おはよー」

雄二と話していると明久が教室に入ってきた。

「おう明久。時間ギリギリだな」

「遅かったな」

「ん、おはよう雄二、雅夜」

１時間目が始まるまで、あと１０分ってことか

「皆には何も言われなかったの？」

「ん？何がだ？」
「Ｄクラスの設備のことだろ」
「そう、それそれ」

Ｄクラスの設備は普通に机と椅子だったな。

「ああ。皆にもきちんと説明したからな。問題ない」
「ふーん」

みんなが素直に聞いたのは昨日の雄二の働きを評価したからだろう。
もっと上を狙えるかもしれないとわかった以上、Ｄクラスの設備には興味がないだろうからな。

「それよりお前はいいのか？」
「なにが？」
「昨日の後始末だよ」
「うん。雄二じゃなくて雅夜にやったら逆に殺られそうだもん」
「いや、俺の始末じゃなくて」

こいつは忘れたのか？

「いったい何がいいたい――――――――」
「吉井っ！」
「ごぶぁっ！」

お、ナイスパンチ。

「し、島田さん、おはよう・・・・・」
「おはようじゃないわよっ！」
「ムッツリーニもおはよう」

「・・・・・・・・・（パシャパシャ）」

いつのまに来てたんだ？

「アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽き足らず、消火器のいたずらと窓を割った件の犯人に仕立て上げたわね・・・・・・！」

そんなこともあったのか？

「おかげで彼女にしたくない女子ランキングがあがっちゃったじゃない！」

「その反面、女子の彼女にしたいランキングも上がったがな」

ＴＯＰ３くらいには入ってると思うぞ

「――――――と、本来は掴みかかっているんだけど」

「掴むまえに十分殴ってると思うぞ？」

顔の面積がちょっとばかし増えてるような・・・

「アンタにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる」

「うん。さっきから鼻血が止まらないんだ」

「いや。そうじゃなくてね」

「ん？それじゃ何？」

「１時間目の数学のテストだけど――――」

「っ！雄二！早くドアを閉めろ」

「わかった！」

「――――監督の先生、船越先生だって」

「雄二、雅夜！どけぇ！」

「雄二、絶対に阻止するぞ！コイツには地獄を見せるんだ！」

「応とも！明久、観念するんだな。」
「イヤァァアアアッ！」
明久の悲鳴が轟いた。

第１２話（後書き）

感想お待ちしております。

第１３話

「うあー・・・・・・づかれだ！」
「ちゃんと喋れ、明久」

とりあえず、４教科が終了。ただでさえテストは疲れるのに、明久は更に船越先生とひと悶着があったせいか、机に突っ伏した。
ちなみにだが、明久は船越先生に近所のお兄さん（３９歳／独身・・・お兄さん？）を紹介して逃げ延びた。

「うむ。疲れたのう」
「・・・・・・・・・・（コクコク）」
「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

こいつの体はどうなってるんだ？昼飯のメニューがおかしいぞ。

「ん？吉井たちは食堂に行くの？だったら一緒していい？」
「ああ、島田か。別に構わないぞ」
「それじゃ、混ぜてもらうね」
「・・・・・・・・・・（コクコク）」

・・・・・・・・・なんか忘れているような気がするな？

「吉井、なんかウチの悪口考えてない？」
「滅相もございません」

なんだっけ？とてつもなく大事なことだった気がする。

「じゃ、僕も贅沢にソルトウォーターあたりを――――――」
「お前は塩水さえも贅沢というのか!?」

塩水なんて0円だろ!?

「あ、あの。皆さん・・・・」
「うん?あ、姫路さん。一緒に学食に行く?」
「あ、いえ。え、えっと・・・・・・お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の・・・・・」
「昨日の約束・・・・・・?なんだっけ?」
「おお、もしや弁当かの?」
「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

やべぇ!姫路の弁当フラグの存在を忘れてた!

「迷惑なもんか!ね、雄二、雅夜!」
「ああ、そうだな。ありがたい」
「そうですか?良かったぁ~」

どうしよう。ここで逃げ切らなかったら、生きて帰れないぞ!

「むー・・・・・・っ。瑞樹って、意外と積極的なのね・・・・・・」
「・・・・島田、がんばれ。」
「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなく屋上でも行くかのう」
「そうだね」

すまんが皆、俺は逃げさしてもらうぜ。

「すまん。ちょっとやらなきゃいけない仕事があるんでな、俺はパ

スする。」
「え～、どうしてよ雅夜。一緒に食べようよ？」
「こっちにも色々あるんだよ。締め切りが近かったり、な。」
「いいの？女の子の手作り弁当だよ？めったにもらえないんだよ？」
「確かに惜しいが、やることがあるから仕方ない。」

これで死亡フラグから逃げ切れる！
まぁ、実際にやらなきゃいけない事はあるんだけどな。

「そうか。それならお前らは先に行っててくれ」
「ん？雄二も行かないの？」
「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた例も兼ねてな」
「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

と、珍しく気遣いを見せる島田。

「悪いな。それじゃ頼む」
「おっけー」
「きちんと俺達の分を取っておけよ」
「大丈夫だってば。あんまり遅いとわからないけどね」
「そう遅くならないはずだ。じゃ、行ってくる」

雄二と島田は財布をもって教室を出て行った。きっと一階の売店に行ったんだろう。

「僕らも行こうか」
「そうですね」
「じゃ、行ってらっしゃい」
「うむ。行ってくるの」

・・・・・・・う～ん。やっぱり秀吉の笑顔には既視感をかんじるんだよな。
秀吉にもう一度聞こうかな？助けるついでに。
そう思い、メールで皆に内緒で来てもらうことにする。

待つこと数分・・・・

「なんじゃ、雅夜？言いたいこととは？」
「まず一つ目は姫路の弁当について。」
「姫路の弁当じゃと？」

その様子じゃ、だれも食べてなかったんだ。

「姫路の料理は、食べたら死ぬかもしれないぞ」
「・・・・・・・・・は？」
「姫路はな、隠し味に硝酸とかを平気で入れるんだ。」
「もしかすると、雅夜はそのことを知っておったから断ったのかのう？」
「ああ。あれは料理なんて生易しいもんじゃない、兵器といっても過言ではない。」
「・・・・・・・・わしのことを助けてくれてありがとうじゃ」
「あのまま、行っていたらお前は最後に自称：鉄の胃袋を信じて、明久の身代わりになっていた。」

明久と雄二だったら耐えられるものの、秀吉には耐えられない。

「二つ目は、前にも言った事があるが。秀吉、俺と昔会ったことはないか？どうにもお前の笑顔に既視感を感じるんだ」

去年あったときから何度か秀吉に言ったが、思い出せないことだった。

「わしも、おぬしの顔をどこかで見たことが有るような気がするのじゃが・・・・・すまぬ、思いだせんのじゃ」

「・・・・なにかが足りない気がするんだよな。いや、俺もすまなかった。」

俺と秀吉だけじゃなく、もう一つピースが足りない気がする。

「すまんのう。思い出せそうで思いだせんのじゃ」

「気にするな。しかるべきときに思い出す筈だ、そのときまで、気長に待とうじゃないか」

「そうじゃの」

第１３話（後書き）

ちなみにですが、姫路の弁当は雄二が全て食べ、デザートは明久が食べました。
ムッツリーには、最初の一つだけで後は食べてません。

最後に伏線見たいなものを張っておきましたが、回収するまで時間が掛かるかも知れません。

感想お待ちしております。

第１４話

「そういえば、坂本、次の目標だけど」
「ん？試召戦争のか？」
「うん」

昼飯を終え、のんびりと教室でお茶をすする。

「相手はＢクラスなの？」
「ああ。そうだ」
「どうしてＢクラスなの？目標はＡクラスなんでしょう？」

なんだ、雄二。まだ、話していなかったのか？

「正直に言おう。どんな作戦でも、ウチの戦力じゃＡクラスには勝てやしない」

戦う前からの降伏宣言。雄二らしくない。
しかし、ムリはないだろう。文月学園はＡからＦの６クラスから成るけど、ＡクラスとＦクラスは格が違いすぎる。五十人のＡクラス生徒のうち、四十人はまだいい。Ｂクラスより少々点数が上の普通の生徒だ。
でも残り十人はヤバイ。特に代表をやっている霧島。彼女の力は想像を絶する。奇襲が成功してＦクラス生徒十人が彼女一人を取り囲んだとしても、恐らく返り討ちにあってしまうだろう。
どんな作戦を練ろうとも代表を討ち取れない限り勝利は無い。

「それじゃ、ウチらの最終目標はＢクラスに変更ってこと？」
「いいや、そんなことはない。Ａクラスを必ずやる」

「雄二、さっきといってることが違うじゃないか」
「クラス単位では勝てないってだけだ。一騎打ちなら勝てる、だろ？」
「一騎打ちに？どうやって？」
「バカ、少しは考えろ。何のために他のクラスを倒していると思っているんだ」
「その通りだ。Ｂクラスをやったら、設備の入れ替えない代わりにＡクラスに攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらＦクラスだが、Ａクラスに負けるだけならＣクラス設備で済むからな。まず上手くいくだろう」
「Ｄクラスと同じようにな。」
「ふんふん。それで？」
「それをネタにＡクラスと交渉する。『Ｂクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」
「なるほどね！」

さらにＤクラスも攻め込ませれば、Ａクラスといえどもきついだろう。
Ｆクラスも連戦だが俺達には原動力がある。そもそも頭を悪いけど体力のあまっている連中が殆どのクラスだし。
けどＡクラスはそうじゃない。勝っても何も得られないし、Ｆクラス相手に時間をくうのも嫌がるだろう。モチベーションの差は歴然だろう。

「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Ａクラスとしては一騎打ちよりも試召戦争のほうが確実であるのは確かじゃからな。それに――――――」
「それに？」
「そもそも一騎打ちで勝てるのじゃろうか？こちらに姫路がいるということは既に知れ渡っていることじゃろう？」

戦争の内容は誰でも興味があるはずだ。そうなると最後は一番注目があつまる。

「その辺に関しては雄二に考えがあるはずだ。心配するな」
「ああ。まかしておけ」

俺と同様にいつでも自信満々な雄二。

「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後に教えてやる」
「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」
「で、明久」
「ん？今日のテストが終わったら、Bクラスに行って宣戦布告してこい」
「断る。雄二か雅夜がいけば良いじゃないか」

流石に二度目は聞かないか・・・

「やれやれ。それならジャンケンで決めないか」
「ジャンケン？」
「それなら、文句ないだろうな。待ったなしの一回勝負だ」
「ＯＫ．乗った」
「よし。負けたほうが行く、で良いな？」

明久はコクリとうなずいて返す。

「しかし、ただのジャンケンじゃつまらん。心理戦ありでいこう」
「たしかにその方が面白いしな」

「（雅夜、明久をはめるぞ）」

「（わかっている。そっちこそドジ踏むなよ）」

「わかった。それなら、僕はグーを出すよ」

明久はグーか、なら・・・

「「そうか。それなら俺は――――お前がグーを出さなかったらブチ殺す」」

いいね！やっぱり心理戦はこうでなくちゃ。

「いくぞ、ジャンケン」

「わぁぁっ！」

パー　（俺と雄二）　グー　（明久）

「よかった・・・。明久を殺さないで済む・・・・」

「決まりだ。いって来い」

「絶対に嫌だ！」

やれやれ、めんどくさいな

「Dクラスの時みたいに殴られるのを心配しているのか？」

「それもある！」

「それなら今度は大丈夫だろ。保証できる」

「・・・なんで？」

「なぜなら、Bクラスは美少年好きが多いらしいからな」

「そっか。それなら確かに大丈夫だねっ」

騙されるの早やっ！

「でも、お前ブサイクだしな・・・・」
「失礼な！３６５度どこから見ても美少年じゃないか！」
「５度多いぞ」
「実質５度だな」
「二人なんて嫌いだっ」

明久はそう叫びながら教室を出て行った。

「とにかく頼んだぞ～」

☆

「言い訳をきこうか・・・・・」

放課後、宣戦布告から帰ってきた明久の言葉にたいして俺と雄二は・・・・

「「予想どうりだ」」
「くきぃー！殺す！殺しきるーっ！」
「黙れ」

お、鳩尾に上手く入った。

「先に帰ってるぞ。明日もテストなんだからな、早く帰れよ」

第１４話（後書き）

次回、Ｂクラス戦。

感想お待ちしております。

第１５話

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った雄二が机に手を置いて皆の方を向いている。

今日も午前中がテストで、ついさっき全科目が終わり、昼飯を取ったところだ。

「午後はＢクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺るいきは充分か？」

『『『おおーっ！』』』

一向に下がらないモチベーション。他のクラスにはない、唯一の武器だろう。

「今回の戦争は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『『『おおーっ！』』』

「そこで、前線部隊は姫路に指揮を取ってもらう。野郎共、きっちり死んで来い！」

『『『うおおーっ！』』』

姫路と一緒に戦えるとあって、前線部隊の士気は最高潮に達しようとしていた。

最初の廊下での戦いは負けるわけには行かないため、Ｆクラス５０人中４０人を注込む。

ここで負けると、Ｆクラスの負けといっても良いだろう。

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のチャイムが鳴り響く。Bクラス戦開始だ。

「よし、いって来い！目指すはシステムデスクだ！」

『『『サー、イエッサー！』』』

勢いが大切なためか全力で走っていった。

教室にのこったのは、雄二と俺、他Fクラス7人。ムッツリーニは情報収集のためどこかに行ってしまった。

「雅夜、情報屋としては俺の作戦にイレギュラーはでてくるか？」

「とりあえず、もう少ししたらBクラスから協定を結びたいと使者がくるだろうな」

「その協定の内容は？」

「4時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前9時に持ち越し。それと、その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。この二つだ」

「そいつは、俺達にとってかなり都合がいいな」

ここまではな。

「しかし、明日姫路が使えないとするとしたらどうする？」

「っ！・・・・そいつはどうしてだ？」

「理由はいえない。いや、俺が言っちゃいけない事だ」

「・・・・対策は取れないのか？」

「もうしたが、姫路を出せないことには変わりはない」

姫路のラブレターにはちょっとした細工をしており、戦争が終わったら姫路に話すつもりだ。

「・・・・条件がある。」
「なんだ?」
「明久を本気にさせろ。それができるか?」

明久を本気にさせろ、か。だったら・・・・

「問題ない。あいつは人のためだったら本気になる。それはお前もわかっているだろう?」
「たしかにそうだな」

っと、そろそろくるころだな。

「Fクラス代表坂本雄二。Bクラス代表根本恭二が協定を結びたいそうだ、音楽室まで来てもらえないだろうか?」

Bクラスの奴にでも頼まれたのか、Cクラスの黒崎（だったきがする）が使者として来たようだ。

「ああ、わかったが、護衛を数人つれていっても構わないか?」
「ちょっとまってくれ。根本に連絡をとる」

そういって黒崎は教室をでてどこかに連絡をとった。

「（雄二、今のうちにシャーペンと消しゴムを隠しておけ）」
「（わかった。皆聞こえているな?持てるだけ持って後はどこかに隠しておけ）」
「「「（（（了解）））」」」

俺の言葉の意味に気付いたのか、何も言わずにクラスに残っている奴らに的確な指示を飛ばしていた。

「坂本雄二、根本から許可が取れた。そのかわりBクラスも護衛が数人いるが構わないだろう？」

「ああ。それくらいなら問題ない。じゃ皆行くぞ」

黒崎についていく形で音楽室まで行った。

「根本。言われたとおりに坂本を連れてきたぞ」

「ご苦労。もういいぞ」

根本は黒崎にお礼の一つも言わないばかりか、用済みだと言わんばかりに出て行かせた。

「さて、Fクラス代表坂本雄二。Bクラスと協定を結んでもらいたい」

「協定の内容は？」

「4時までに決着が付かなかった場合、戦況をそのままにして続きは明日の午前9時からに持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。これが協定の内容だ」

「ふむ・・・。それだったらいいだろう、協定を結ぼう」

雄二は初めて聞いたように振る舞い、根本と協定を結んだ。

「では、俺達はこれで失礼するぞ」

そう雄二は言って、皆を伴いFクラスに向かっていった。

「・・・・・・雅夜、お前の情報はいったいどこから出てくるんだ？」

帰ってる途中、雄二から突然質問がきた。

「おいおい雄二。俺の立場で考えてみろよ、情報屋が情報源を教えるはずがないだろう？」

「そうなんだが・・・・。少しぐらいだったら教えてくれるかも知れないと思ってな」

そうだな・・・・、ヒントぐらいなら問題ないかな？

「それなら、ヒントをくれてやる。俺の情報源は康太みたいなやり方はしていない」

「ムッツリーニのやり方じゃないっていうと、盗聴とかではないってことか？」

「ああ。俺の情報は少しあいまいだけどな、結構先のことまでわかるぞ」

このぐらいだったら、問題ないだろ？くそジジィ。

「どのくらいまでわかるんだ？」

「さぁな？・・・・お、あれは明久と秀吉じゃないか？」

雄二の質問に答えていたら、いつのまにかＦクラスの近くまで来ていたようだ

第１５話（後書き）

最後のほうで雅夜が出したクソじじぃとは、神様のことです。
もしかしたら、なんどかでてくるかも知れません。

感想お待ちしております。

第16話

「明久と秀吉、どうしたんだ？」
「ん？ああ、Ｂクラス代表が根本と聞いてのう、念のために来てみたのじゃ」
「あれ？雅夜？それに雄二も。そっちこそどこ行ってたのさ？」

教室に入ろうとしている明久と秀吉に声をかける。
もっとも、向こうはこっちに気付いていなかったようだが。

「まぁ、話はなかでしようぜ」
「それもそうだな、ちょっと気になることもあるしな」
「？それもそうだね。」

俺と雄二の言葉に明久は頷き教室の扉をあけた。

「・・・・うわ、こりゃ酷い」
「まさかこうくるとはのう」
「卑怯、だね」

教室の扉をくぐるとそこには、穴だらけになった卓袱台とへし折られたシャーペンや消しゴムだった。
しかし・・・

「あれ？シャープと消しゴムの数が少ない気がするけど・・・？」
「たしかにそうじゃのう。数にして数人分といったところかの？」
「その辺は、雅夜のおかげだ。雅夜に言われてほとんど持っていったからな」
「まぁな。壊れていると言っても、要らない奴だからな」

事前に皆に持たせていたので、被害はそれほど無いだろう。

「それはそうと、どうして雄二たちは教室がこんなになっているのに気付かなかったの？」

「協定を結びたいという申し出があってな。調印の為に教室を空にしていた」

「まあ、空にしていたとしてもムッツリーニの隠しカメラがあるだろうから、犯人はわかるけどな」

「協定じゃと？」

「ああ。四時までに決着がつかなけったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな」

「それ承諾したの？」

「そうだ」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利なんじゃない？」

「姫路以外は、な」

そう、姫路だけは違う。彼女はFクラスの奴らみたいに体力があるわけではない。

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日ということになる」

「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうに無いね」

「その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路と雅夜個人の戦闘力のほうが重要になる」

雄二には姫路が使えないといってあるので、姫路と俺というよりも俺個人の戦闘力になるんだろうな

「だから受けたの？姫路さんが万全の体勢で勝負できるように」
「そういうことだ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い」

雄二はすこしだけ顔をしかめたが、すぐに戻った。
きっとさっき俺が言った言葉について考えたのだろう。

「明久。とりあえずワシらは前線に戻るぞい。向こうも何かされているかもしれん」
「そうだね。雄二、雅夜あとよろしく」
「任しておけ、そこまで被害はないしな」

秀吉と明久は教室を駆け足で出て行った。

「・・・・・・さて雄二。何か聞きたそうな顔だな」
「ああ。この協定についてだが、相手の目的はまだあるだろ？」

やっぱり気付いていたか。

「たしかにな。でも、その前に・・・・・・康太、出て来い！」
「・・・・・・・・・・・ここに（シュタ）」

俺が康太の名前を呼ぶと、窓から康太が入ってきた。

「Ｃクラスで何か起こってないか？ちょっと知らべて来てくれ」
「・・・・・・・・・・了解した」
「Ｃクラスだと？」

そう。調べる相手はＢクラスではなくＣクラス。

「ちょっと待て雅夜。もしかしてCクラスは漁夫の利でも狙うつもりか？」
「そうだったら雄二はどうする？」
「そうだな・・・。Cクラスと協定を結ぶか。Dクラスを使って攻め込ませるぞ、とかいって脅せばCクラスも攻め込むきはなくなるだろう」
「Cクラス代表が根本の彼女だったら？」
「っ！・・・なるほど、それでさっきの協定か」
「御明察。そろそろ康太も帰ってくるころだろう」
「・・・・・・・・・ただいま」
「おう、お帰り。どうだった？」
「・・・・・・・・・雅夜の言う通り、Cクラスは開戦の準備をはじめている」

やっぱりな。

「さてどうする代表様？Cクラスに協定を結びに行ったら、待ち伏せしているBクラスの連中にやられるだけだぞ？」
「簡単なことだ。返り討ちにすればいいだけだろ」
「返り討ちって、誰がするんだ？」
「もちろんお前と明久だな」
「暴れても良いのか？」
「ああ。明久を巻き込んでもいいぞ」

そいつは面白そうだな。

「Cクラスはどうするつもりだ？」
「そっちは考えがある。任しておけ」

ふむ・・・、問題はこれで終わり・・・っと、そういえば

「雄二、この話は知らないフリしておけよ。」
「わかってる。俺が知っているのがばれたら、また対策を取られてしまうからな」

さすがは雄二。細かく言わなくてもちゃんと伝わる。
相手が明久だったら・・・、細かく言わなきゃわからないからな。

「っと、そろそろ4時になるな」
「ああ、停戦の時間か。・・・・明久、生きてるかな?」
「明久がどうかしたか?」

死んでなきゃいいんだけど・・・・。

第１６話（後書き）

・・・・・・・原作を知らない人には優しくないような？

ま、まあ、多分原作を知らない人はいないと思うので大丈夫でしょう（汗）

感想お待ちしております

第17話

「お～い、明久。生きてるか～？」
「・・・・・・ここはどこ？」
「お、気付いたみたいだぞ」

今は4時になったので停戦中。続きは明日になる。

「あ、気が付きましたか？」

明久が起きたのに気が付いたのか、姫路が駆け寄ってくる。

「心配しましたよ？吉井君ってば、まるで誰かに散々殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたような怪我をして倒れているんですから」
「姫路、それ正解」

誰かを島田に帰れば完璧だ

「いくら試召『戦争』じゃからといって、本当に怪我をする必要はないんじゃぞ？」
「明久は馬鹿なんだ、仕方がない」
「ちょっと色々あってね。それで試召戦争はどうなったの？」

殺されかけるのを色々で済ませられるのおかしいと思う

「今は協定どおり休戦中じゃ。続きは明日になる」
「戦況は？」
「一応計画通り教室前に攻め込んだ。もっとも、こちらの被害も少

なくないがな」

雄二が此方の被害を書いたメモを読み上げる。予想の範囲以内だが、被害はかなり大きい。廊下戦は圧勝だったが、それは此方がほぼ全力を注いだ結果で、全体としては決してよい状況ではない。

「ハプニングはあったけど、今のところ順調ってわけだね」
「まぁな」

さて、そろそろCクラスにいきますかな。

「おい雄二、明久。Cクラスに行くぞ」
「？なんでCクラスに行くの？」
「康太の情報でな。Cクラスが開戦の準備を始めているんだ」
「・・・・・・・・・・・（コクコク）」

隣では康太がうなずいていた。
明久は頭に？？？を浮かべていた。

「だから、Cクラスは漁夫の利を狙うつもりなんだよ。」
「なるほど。それで雄二どうするの？」
「Cクラスと協定を結ぶ。Dクラスを使って攻め込ませるぞって言って脅してやれば俺達に攻め込む気もなくなるだろう」
「それに僕達が勝つなんて思ってもいないだろうしね」
「じゃ、いまからいくか」
「ああ。」
「そうだね」
「秀吉は此処に残っていてくれ」
「お前の顔を見せると万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるんでな」

「よくわかんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

素直に引き下がる秀吉。雄二のことを信頼しているからだろう。

「ちょっと人数が少ないのが不安だけど、行こうか」

秀吉を残して俺、雄二、明久、姫路、康太というメンバーでCクラスに向かう。

「吉井。アンタの返り血こびりついて洗うの大変だったんだけど。どうしてくれるのよ」

「それって、吉井が悪いのか？」

廊下に出たところで、ハンカチで手を拭いている島田と鞄を肩に担いでいる須川にあった。

「あ、島田さんに須川君。ちょうどよかった。Cクラスまで付き合ってよ」

まさかコイツ、この二人を盾にするつもりか？

「んー、別にいいけど」

「ああ。俺も大丈夫だ」

「お前ら急ぐぞ。グズグズしてたらCクラス代表が帰っちまう」

「ああ、うん。」

こして更に島田と須川を加えた7人でCクラスに向かうことになった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表はいるか？」

扉を開けるなり、雄二がそこにいる全員に告げる。
教室にはまだかなりの人数が残っていた。試召戦争の準備をしていたのだろう。

「私だけど、何か用かしら？」

俺達の前に出てきたのは、Cクラス代表小山友香。バレー部のポープだ。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」
「クラス間交渉？ふぅん・・・」
「ああ。不可侵条約を結びたい」
「不可侵条約ねぇ・・・。どうしようかしらね、根本君？」

小山は振り返り、教室の置くにいる人たちに声をかけた。
なんだ、そんなところにいたのか。

「当然却下。だって必要ないだろ？」
「なっ！？根本君！Bクラスの君がどうしてこんなところに！」

知らないためか、明久はかなり驚いていた。

「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する行為を禁止したよな？」
「何を言って――――――」
「先に協定を破ったのはそっちだからな？これはお互い様だよな！」

教室の奥には数学の長谷川先生の姿が隠されていた。

「長谷川先生！Ｂクラス吉野が召喚を――――」
「須川！」
「了解！Ｆクラス須川が請けて立つ！試験召喚！」
俺の言葉に逸早く反応して須川が召喚をした。
「僕らは協定違反なんてしていない！これはＣクラスとＦクラスの――――」
「無駄だ明久！根本は条文の『試召戦争に関する一切の行為』を盾にしらを切るに決まっている！」
「ま、そゆうこと♪」
「へ理屈だ！」
「へ理屈も立派な理屈のうちってな」
「明久、ここは逃げるぞ！」
「くそっ！」

Ｂクラス　芳野孝之　ＶＳ　Ｆクラス　須川亮
数学　１６１点　４１点

「逃がすな！坂本を討ち取れ！」
背後から聞こえてくるのは根本の声と複数の足音。
この足音からして、５，６人ってところかな？
「はぁ、ふぅ・・・・・」
「姫路、大丈夫か？」
さすがに姫路には全力疾走はきつそうだった。

「雄二！」
「なんだ！明久！」
「雄二、僕がここを引き受ける！だから姫路さんをつれて逃げてくれ！」
「よ、吉井君、私のことは、気に、しないで」
「・・・わかった。ここはお前に任せる。」

さすがは雄二。感情に流されず、今必要な判断を出している。

「・・・・・・・・・・・・（ピタッ）」
「いや、ムッツリーニも逃げて欲しい。多分明日はムッツリーニが戦争の鍵を握るから」
「んじゃ、ウチは残ってもいいのかしら。隊長どの？」
「いいやダメだ。此処は俺に任せろ」

島田の言葉を断って、明久の隣に立ち止まる。

「ウチがダメって、どうしてよ？」
「男子に女子を見捨てて、逃げろってか？それにもともと俺は残るつもりだったしな」
「わかったわ。ならここを頼むわよ？」
「・・・・・・・・・・・・（グッ）」
「雅夜、足止めを頼む。危なくなったら逃げろよ」
「お、お願いします」

俺と明久がここに残り、皆は走っていった。

「さて、明久。どうする？」
「任してよ。僕に考えがあるんだ」

「そうか、なら聞いてやる。馬鹿なことだったら地獄を見せてやるからな？」
「う、うん。ダイジョウブダヨ」
なぜか片言になっていたがスルーしておく。
『いたぞっ！Ｆクラスの吉井と浅月だ！』
『ぶち殺せ！』
正面から追っ手がやってくる。長谷川先生も一緒だ。
「Ｂクラス！そこで止まるんだ！」
相手の威勢を削ぐためか、強い口調で呼び止める。
「いい度胸だ。たった二人で食い止めようってのか？」
「いや、その前に長谷川先生に話がある」
さてさて、明久はどうするのかな？
「なんですか、吉井君」
「Ｂクラスが協定違反をしていることはご存知ですか？」
まぁ、根本のことだから上手く言ってあるんだろうけどな
「話を聞く限り、協定を破ったのはＦクラスのようですね。そこで反撃を受けて協定違反を訴えるのは戦争云々以前に人としてどうかと思いますよ」
ここまでは予想通り、さてこっからはどうする

「・・・・・・万策、尽きたか・・・・・」

『コイツ馬鹿だぁーっ！』

俺もそう思う。

「ところで明久。さっきの言葉は覚えているよな？」
「え？な、ナンノコトカナ？」
「そうか・・・・、憶えてないならもう一度言ってやる。馬鹿をやったから地獄を見せてやる」

明久の悲鳴が轟いた。

第17話（後書き）

原作と違って、残ったのは島田ではなく、雅夜です。

・・・島田の名前を呼ばせるフラグどうしよ？

感想お待ちしております

第１８話

「坂本君、吉井君は、大丈夫なんですか・・・・・・？」
「もちろんだ。他の奴ならともかく、明久ならなんとかなる」
「でも・・・・・・」
「確かにあいつは勉強が出来ない。でもな、学力が低いからといって、全てが決まるわけじゃないだろう？」
「そ、それは、どういう・・・・・・？」
「あのバカも、伊達に《観察処分者》なんて呼ばれてないってコトだ」

☆

『『『『試験召喚！』』』』

追っ手が４人とも声を揃えて召喚獣を呼び出す。
走って逃げているけど、この先は行き止まり。俺らが戦闘区域に入るのは時間の問題だろう。

「明久。生きて帰れると思うなよ」
「すいません。すいません。すいません。まじで簡便してくださいっ！」

とりあえず、明久には後で地獄を見せることにしておいて。
今は、目の前の奴らだな。

「ちょろちょろ逃げ回りやがって。疲れるだろうが！」
「というか、別にこいつらを追いかける必要はなかったんじゃないか？」
「仕方ないだろ？こいつらのジョークに付き合っているうちに坂本たちに逃げられちまったんだから・・・」
「さっさと片付けて帰らない？」

俺らが逃げられないとわかると、４人はやる気なさそうにすき勝手なことを言い始めた。

「ほう、好き勝手言ってくれるな」
「だって・・・・・なぁ？」
「だって、何だ？」
「お前ら最低クラスじゃん」
「クラスは最低じゃないぞ！メンバーが最低なだけだ！」

・・・・・・・いい事を聞いたな。

「明久から見たら、俺や姫路、秀吉は最低なんだな」
「ち、違うよっ！別に雅夜達のことをいったわけじゃなくて・・・・・」
「おい、工藤！Ｆクラスを甘く見るなよ」
「そうか？所詮Ｆクラスだろ？」
「あれ？僕のことは無視？」

黙ってろ、このバカが。

「だったら、自分で確かめんだな。試験召喚。」
「上等だ！実力の差を見せてやる！」

『Ｂクラス　工藤信二　ＶＳ　Ｆクラス　浅月雅夜
数学　１５９点　３２０点』

「おいおいどうした？実力の差を見せてくれんだろ？」
「お前、本当にＦクラスか・・・・？」
「遺言はそれだけか？とっとと失せろ！」

俺が言葉を発すると同時に手に持っている小太刀の一本を相手の召喚獣に投げつける。
相手は避ける事も出来ずに、頭を攅らぬかれ消滅した。

「戦死者は補修っ！」

倒したと同時に西村さんが何処からともなく現れ、工藤を担いでいく。

「クソっ！Ｆクラスごときにっ！」
「これで、一人目。さぁ、次はどいつだ？」

あと残り、４人。

「私が相手するわ。Ｂクラスの意地を見せてあげるわ！」
「「俺達も手伝うぞ！」」

これで、３対１。ちょっときびしくなったか？

「雅夜、手伝おうか？こんなので補修室に行きたくないでしょ？」

「喋ってる暇があるんだったら、とっとと召喚しろ」
「う、うん。――――試験召喚」

「「「試験召喚」」」

「よしっ！行くぞ！」
「吉井は構うな！見るからに雑魚だ」
「返せっ！僕のカッコイイ描写を返せ！」

そんなもの最初っからない。

「おらっ！行くぞ！」
「明久。やれ！」
「うん。足払いっ」

明久が召喚獣を走らせ、横から足を引っ掛ける。

「ああっ！」

相手は突然のことに対処できずに、簡単によろめいた。

「更にっ！」

敵に木刀を叩き込み、完全に体勢を崩させる。

「雅夜！」
「まかせろ！」

そこに、俺の召喚獣が小太刀で切り伏せる。

『・・・・・え？』

まぁ、驚くのも無理はない。

『Ｂクラス　井川健吾　ＶＳ　Ｆクラス　吉井明久＆浅月雅夜
数学　１６６点　５１点＆３２０点
』

遅れて先ほどの点数が現れる。
もう相手の召喚獣はやられているので相手の点数は０点だが。

「なんでだよ！井川の点数の方が高いはずだろ！？なんであんな弱そうな奴にやられてるんだよ！」

Ｂクラスの奴が先生に問いかける。別に先生は何もしていないのだが。
というか、俺も弱そうな奴かよ。

「明久、早く終わらせるぞ！」
「うん。」

明久に相手の召喚獣を突っ込ませる。

「明久！相手を一箇所に固めろ！俺が止めを刺す！」
「了解っ！」
「くそっ！やられてたまるかっ！」

相手は明久に突っ込んで行った。
しかし、また避けられ体勢を崩された。

「っ！雅夜、今だよ！」
「わかってる！」

さっきと同じように小太刀を投げる。

「くそがぁっ！」

一人はしとめたがもう片方は、ギリギリよけて、俺の方に突っ込んできた。
今俺の召喚獣は丸裸に見えるので、チャンスだと思ったんだろう。

「死ねっ！」
「バカが。俺の武器が小太刀だけだと思うなよ」

そう言い、召喚獣に何かを引っ張らせるように動かす。

「鋼糸って言ってな、目を凝らさなきゃ余り見えないくらいの糸で、使い方によっては簡単に人を殺せる鉄の糸なんだよ。召喚獣じゃ扱いが難しいから殺すことはムリだけど、この位なら出来ないこともない」

相手の召喚獣の背中には先ほど俺が投げた小太刀が刺さっていて、その小太刀には糸のようなものが巻きつかれていた。
――――――――もう一本は明久の召喚獣に刺さっていた。

「いたぁっ！背中に焼けるような痛みがっ！」
「さて西村さん、戦死者をどうぞ。俺は教室に戻るんで」
「雅夜っ！どうして僕まで殺すのさっ！」
「・・・忘れたのか？いったろ、地獄を見せてやるって」

「地獄ってこれのことかぁ！」

またも明久の悲鳴が轟いた。

第１８話（後書き）

雅夜の召喚獣についてですが、
武器は『鋼糸』です。
小太刀二刀は副装備です。

感想お待ちしております

第19話

「あー、疲れた」
「無事だったんですね！・・・・・吉井君は？」
明久か・・・・・・。あいつはもう・・・・・。
「姫路。あいつのことはもう忘れろ」
「え・・・・？それって・・・・」
「あいつは死んだよ・・・地獄に行ったんだ」
「そ、そんな！吉井君が・・・」

簡単には戻って来れないだろう。

「雅夜、Bクラスの連中はどうした？」
「雄二か。殺っといたよ、約束どおり明久ごとな」
「・・・・・え？」
「そうか、なら今頃は補修室だな」
「ああ。」
「ちょ、ちょっと待ってくださいっ！」

ん？何か気になることでもあるのかな？

「どうした姫路？何か気になることでもあるのか？」
「約束通りって前からわかっていたんですか？」
「そのことか。停戦協定を結んだときに雅夜から助言を受けてな、作戦を立てておいたんだ」
「もとから解っていたんだけど、あえて相手の作戦に乗って返り討ちにしたってわけだ」

「そうだったんですか」
「まぁな」
「って、違いますよ！吉井君のことです！」
「？明久がどうかしたのか？」
「さっき、明久ごとって言ってましたけど・・・。それってどういうことですか？」
「どうもこうも、そのままの意味だが」
「それって、Ｂクラスの人たちと一緒に吉井君も倒したんですか・・・？」

いや、ちょっと違う。

「Ｂクラスの奴を殺した後に明久を殺したんだ」
「どうしてそんな事したんですか？」

どうしてって・・・

「雄二と約束したんだ、『おとりになる代わりに明久を巻き込む』って感じにな」
「ああ。雅夜がそうしないと面白くないって言うからな」

そんなこと言ったっけ？

「吉井君が可愛そうですよ・・・。」
「なんだ、明久が心配なのか？」
「べ、別にそういうわけじゃなくてですねっ！」
「別に隠さなくても良いだろ？ほとんどの奴が知っているんだし」
「は、はううっ！」

姫路は俺の言葉を聴くと、顔をこれでもかというくらいに真っ赤に

した。

「無事じゃったようじゃな」
「・・・・・・・・・お帰り」
「ん。ただいま」

康太と秀吉もやってくる。あまり心配はしていなかったようだが。

「さて、おまえら」
「ん？」
「こうなった以上、Ｃクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦というかたちになるだろうが正直Ｂクラス戦の直後にＣクラス戦はきついだろうな」
「それならどうしようか？このままじゃ勝ってもＣクラスの餌食だよ？」
「そうじゃな・・・・・」
「心配するな、雄二に考えがあるはずだ」
「ああ。向こうがそう来るなら、こっちにだって考えがある」
「考え？」
「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ」

雄二の野性味たっぷりの顔で今日は解散となった。

第１９話（後書き）

いつもより短くなってしまいました。

感想お待ちしております。

第２０話

「おはよう、雅夜」
「ああ、おはよう明久」

翌朝、学校に入る前に明久に会った。
昨日鬼の補修をくらったから（くらわせたから）死んでるかと思ったんだが、問題ないようだ。

「ねぇ雅夜」
「ん？どうかしたか？」
「昨日戦死したから補修室に連行されたけど・・・」
「けど？」
「鉄人に『停戦協定を結んだんだったら、あれは試召戦争ではなくて、模擬だろう？だったら明日の試召戦争に出ることは出来るぞ』って言われたんだけど？」
「そうなのか？」
「うん。よくわからなかったけど、今日も戦争に参加できるみたいだよ」
「そうか、それならよかった。」

俺にも良くわからないが、要するに『協定があるので、あの戦いは戦争には関係ない模擬試召戦争だ』ということなのかな？

☆

「昨日言っていた作戦を実行する」
教室に入るなり、雄二はそう告げた。
「雅夜。作戦ってなんのこと？」
「Cクラス対策の作戦のことだろ」
今の時刻は8時半。開戦時刻は9時だ。
「その通り。昨日は内容は話さなかったが今から実行する」
「それで、なにをするんだ？」
「秀吉にこれを着てもらう」
そういって雄二が取り出したのはウチの学校の女子の制服。
赤と黒を基調としたブレザータイプで、オトナのオトモダチにも大人気がある逸品だ。
「オーケー。雄二がなんで持っているかは突っ込まないでおくよ」
「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするのじゃ？」
そこは構ったほうがいいと思うのだが？
「秀吉には木下優子としてAクラスの使者を装ってもらう」
木下優子。秀吉の双子の姉で一卵性双生児かと思うほど似ているらしい。らしいというのは、俺は実際には見たことがないからだ。
「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」
「う、うむ・・・・」

雄二から制服を受け取り、その場で着替える秀吉。

「・・・・・・・・・・・・!!（パシャパシャパシャパシャ!）」

その横では康太が指が擦り切れるくらいの速さでシャッターを切り、明久は秀吉のなま着替えを凝視している。

「よし、着替え終わったぞい。ん?皆どうしたのじゃ?」

「さぁな?俺には良くわからん」

「気にするな秀吉。こいつらが馬鹿なだけだ」

「おかしな連中じゃのう」

この学校におかしくない奴なんて余りいないだろう。

「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

「ああ」

雄二の後に俺と秀吉が続いていく。

「あ、僕も行くよ」

あわてて明久も付いてきた

「さて、ここからすまないが一人で頼むぞ、秀吉」

しばらく歩き、Cクラスを目の前にして立ち止まる。

「気が進まんのう・・・・」

あまり乗り気ではない様子の秀吉。

「そこをなんとか頼む」

「むぅ・・・。仕方ないのう・・・」

「悪いな。とにかくあいつ等を挑発して、Ａクラスに敵意を抱くように仕向けてくれ。お前なら出来る筈だ」

秀吉は演劇部のポープで、演技が達者だったりする。勉強が苦手だけど、他の面に抜群に秀でているのだ。

「はぁ・・・。あまり期待はせんでくれよ・・・・」

溜息と共に力なくＣクラスに向かう。本当に気が重そうだ。

「雄二、秀吉は大丈夫なの？別の作戦を考えておいたほうが・・・・」

「多分大丈夫だろう」

「多分かよ」

「心配だなぁ・・・・」

「シッ。秀吉が教室に入るぞ」

雄二が口に指を当てる。ここから声は聞こえないと思うが念のため指示に従うことにした。

ガラガラガラ、と秀吉がＣクラスの扉を開ける音がした。

『静かになさい、この薄汚い豚ども！』

・・・・へ？

「流石だな、秀吉」
「うん。これ以上ない挑発だね・・・・」
「木下優子ってこんな性格なのか・・・？」

てっきり秀吉みたいにおとなしい奴かと思ったんだが？

『な、何よアンタ！』
『話しかけないで！豚臭いわ！』

自分から行ったのに豚臭いって、ツッコミどころが多すぎだろ。

『アンタ、Ａクラスの木下ね？ちょっと点数良いからっていい気になるんじゃないわよ！何の用よ！』
『私はね、こんなに臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！あなた達なんて豚小屋で充分だわ！』
『なっ！言うに事欠いて私達にはＦクラスがお似合いですって！？』

豚小屋＝Ｆクラスなんだな。

『手が汚れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回はあなた達に相応しい教室に送ってあげようかと思うの』

木下優子ってここまで性格が悪かったのか・・・。ちょっとショックだな。

『ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚いあなた達を始末してあげるから！』

そういい残し、靴音をたてながら秀吉は教室を出てきた。

「これで良かったのかのう？」

どこかすっきりした顔で秀吉が近寄ってくる。

「ああ。すばらしい仕事だった」

『Ｆクラスなんて相手にしてられないは！Ａクラス戦の準備を始めるわよ！』

Ｃクラスから小山のヒステリックな叫び声が聞こえてくる。どうやらうまくいったようだ。

「作戦も上手くいったことだし、俺達もＢクラス戦の準備を始めるぞ」

「あ、うん。」

「・・・ああ。」

余計なことの時間をかけてる暇なんてない。

俺達はＦクラスへ駆け足で戻っていった。

第２０話（後書き）

感想で指摘された点について最初に説明しておきました。
わかりにくかった方はすみませんでした。

感想お待ちしております

バカテスト第2問目

第六問　問　以下の問に答えなさい
『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞樹の答え
『Ｃ６Ｈ６』

教師のコメント
簡単でしたかね

土屋康太の答え
『ベン＋ゼン＝ベンゼン』

教師のコメント
君は科学を舐めていませんか

吉井明久の答え
『Ｂ－Ｅ－Ｎ－Ｚ－Ｅ－Ｎ』

教師のコメント
あとで土屋君と一緒に職員室に来るように

浅月雅夜の答え
『ＣＨ６』

教師のコメント
案外普通の間違え方ですね。面白くないです

第七問　問　以下の問に答えなさい
『ｇｏｏｄおよびｂａｄの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞樹の答え
『ｇｏｏｄ－ｂｅｔｔｅｒ－ｂｅｓｔ
　ｂａｄ－ｗｏｒｓｅ－ｗｏｒｓｔ』

教師のコメント
その通りです

吉井明久の答え
『ｇｏｏｄ－ｇｏｏｄｅｒ－ｇｏｏｄｅｓｔ』

まともな間違え方で先生驚いています。
ｇｏｏｄやｂａｄの比較級と最上級は語尾にｅｒやｅｓｔをつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太の答え
『ｂａｄ－ｂｕｔｔｅｒ－ｂｕｓｔ』

教師のコメント
『悪い』『乳製品』『おっぱい』

浅月雅夜の答え
『ｇｏｏｄ－ｇｏｏｄ？－ｇｏｏｄ！』

教師のコメント
発音のしたかの問題では有りません

第八問　問　以下の問に答えなさい
『女性は（　）を迎えることで第二次性長期になり、特有の体つきになりはじめる』

姫路瑞樹の答え

『初潮』

教師のコメント
正解です

吉井明久の答え
『明日』

教師のコメント
随分と急な話ですね

浅月雅夜の答え
『恋愛』

教師のコメント
先生は好きな答えですが、間違えです

土屋康太の答え
『初潮と呼ばれる、生まれてはじめての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が４３ｋｇに達するころに初潮をみるものが多いため、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均１２歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント
詳しすぎです

第九問　問　以下の問に答えなさい
『人が生きていくうえで必要とされる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞樹の答え
『?脂質　?炭水化物　?たんぱく質　?ビタミン　?ミネラル』

教師のコメント
さすが姫路さん、優秀ですね

吉井明久の答え
『?砂糖　?塩　?水道水　?雨水　?湧き水』

教師のコメント
それで生きていけるのはあなただけです

浅月雅夜の答え
『?愛　?希望　?勇気　?友情　?試練』

教師のコメント

何処の漫画の世界の話ですか?

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時を早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに十八歳になったも初潮がない時を原発性無月経といい・・・・』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

バカテスト第2問目（後書き）

感想お待ちしております

第２１話

「雄二、そろそろ来る時間だぞ」

あの後午前９時よりＢクラス戦が開始され、俺らは教室で点数補充をしていた。

「なにがだ？」

「明久だよ。昨日言ったろ？明久を本気にさせる、と」

「そうわ言ったが、出来るのか？」

「出来る出来ないの問題じゃない。なるんだ」

「？どういう意味だ？」

雄二が言ったとき、明久が教室に飛び込んできた。

「雄二っ！」

「うん？どうした明久。脱走か？チョキでシバくぞ」

「話があるんだ」

「・・・・・・とりあえず、聞こうか」

「（雅夜、さっき言っていたのはこれのことか？）」

「（ああ。真剣に聞いてやれ、明久が漢をみせる）」

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

「・・・・・お前に何があったんだ？」

あれ、おかしいな？事情を知っているのに明久が変態に見える。

「ああ、いや、その。えーっと・・・・・」

「雄二。人の趣味は人それぞれなんだから、気にしちゃだめだ」
「まぁそうだな。勝利の暁にはそれくらいなんとかしてやろう」
うん。なんか明久がなにか言いたそうだけど、気にしない気にしない。
「で、それだけか？」
「それと、姫路さんを今回戦闘から外して欲しい」
「理由は？」
「理由は言えない」
「・・・お前も同じことを言うんだな」
そういえば俺も理由は言ってなかったっけ
「どうしても外さないとダメなのか？」
「うん。どうしても」
雄二が手を顎に当てて考え込むフリをする。
雄二には昨日、俺が先に言ってあるので今更考えることなんてないはずだ。
昨日の時点で俺に明久を本気にさせろと言ってるんだ、策があるに決まっている。
「頼む、雄二！」
なにも事情を知らなかったら、俺だったら断るだろう。姫路抜きでBクラスに勝つことはほとんど無理、いや絶対といってもいいほど無理なことだろう。
「・・・・条件がある」

「条件？」
「姫路が担う役割をお前がやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させろ」
「もちろんやってみせる！絶対に成功させるさ！」
「いい返事だ」
「それで、僕は何をしたらいい？」
「タイミングを見計らって根本に攻撃をしかけろ。科目は何でもいい」
「皆のフォローは？」
「ない。しかも、Ｂクラス教室の出入り口は今の状態のままだ」
「・・・・難しいことを言ってくれるね」

時間を稼ぐために戦闘はＢクラスの前後の扉で行なわれている。そこを突破して根元に近づくには姫路みたいな圧倒的な火力が必要になる。しかし、明久にはその火力はない。

「もし、失敗したら？」
「失敗するな、必ず成功させろ」

失敗なんてしないだろうけどな

「それじゃ、うまくやれよ」
「お、雄二。もういくのか？」
「ああ。もうそろそろ止めといたほうがいいからな」
「え？どこか行くの？」
「Ｄクラスに指示を出してくる。例の件でな」

Ｂクラスの室外機を壊すことだろう。

「明久」

教室を出る直前、雄二は振り向かずに言い始めた。

「確かに点数は低いが、秀吉やムッツリーニ、雅夜のように、お前にも秀でた部分がある。だから俺はお前を信頼している」

「・・・・雄二」

「うまくやれ。計画に変更はない。」

そういい残し、雄二は教室を後にした。

「さて、俺もそろそろ行こうかな」

「え？雅夜もどっか行くの？」

「戦線に出てくるんだよ。秀吉一人じゃ厳しいだろ？」

そういって教室を出ようとする。

「雅夜。皆を頼んだよ」

「まかしておけ。それが俺の役目だ」

あとは、明久に任せるとしよう。あいつならきっと成功させるだろう。

☆

「お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集ま

りやがって。暑苦しいことこの上ないっての」
「どうした？軟弱なＢクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

現在時刻は午後２時５７分、作戦開始３分前だ。
場所はＢクラス前で姫路がいない分、雄二たち本隊が出てきている。

「はぁ？ギブアップするのはそっちだろ？」
「無用な心配だな」
「そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？」
「・・・・お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくのさ」
「けっ！口だけは達者だな。負け組代表さんよぅ」
「負け犬？それがＦクラスのことなら、もうすぐお前が負け組み代表だな」

ドンッ！
音が段々と大きくなってきている。そろそろ限界だろう

「雄二！そろそろ時間だ！」
「わかってる」
「・・・・さっきからドンドンと、壁がうるせぇな。何かやってるのか？」
「さぁな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？」
「けっ。言ってろ。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し戻せ！」
「・・・・・体勢を立て直す！一旦下がるぞ！」
「どうした、散々ふかしておいておきながら逃げるのか！」

２時５９分、作戦開始まで残り一分。
Ｂクラスは俺達をおってＢクラスを出てきた。

「雅夜！」
「まかせろ！Ｆクラス浅月雅夜がＢクラス全員に勝負を申し込む！
『試験召喚』！」

『Ｆクラス　浅月雅夜　ＶＳ　Ｂクラス　生徒×１５人
古典　３９８点　平均１７０点』

「明久！あとは任せたぞ！」
『ダァァーーッシャァーッ！』

ドゴォッ！

『んなっ！？』

「さて、Ｂクラス。Ｆクラスの勝利の瞬間を見れなくて残念だったな。」
「ほざくなっ！」
「黙ってみてろって。お前らの代表様が平伏す姿を、な」

『Ｆクラス　土屋康太　ＶＳ　Ｂクラス　根本恭二
保険体育　４４１点　２０３点』

康太の召喚獣の小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てる。
今此処に、Ｆクラスの勝利が決した。

第２１話（後書き）

Ｂクラス戦終了です。

感想お待ちしております

第２２話

「さすがだな康太。屋上からロープで教室に入ってくるなんて」
「・・・・・・・・・・（ブイッ）」
「明久、随分と思い切った行動にでたのう」
「うぅ・・・・・。痛いよう、痛いよう・・・・」

終戦後、Ｆクラスのメンバーが集まってきた。

「なんとも・・・・お主らしい作戦じゃったな」
「で、でしょ・もっと褒めてもいいと思うよ？」
「後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる、すばらしい作戦じゃな」
「・・・・遠まわしに馬鹿って言ってない？」
「気にするな、今に始まったことじゃないだろ？」
「・・・・それも充分に酷いよね？」
「ま、それが明久の強みだからな」

雄二がバンバンと肩を叩きながら明久に言った。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」
「・・・・・・」

床に座り込んでいる根本。さっきまでの威勢が嘘のようにおとなしい。

「本来なら設備を受け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の言葉に周りの連中がざわつき始める。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達も目標はＡクラスだ。ここがゴールじゃない」

「皆、Ｄクラスの時を思い出せ。あの時もいっただろ？」

「うむ。確かに」

「ここまでは通過点だ。だから、Ｂクラスが条件を呑めば解放してやろうかと思う」

この言葉でＦクラスの皆はどこか納得したような表情になった。Ｄクラス戦でも言ったことだし、雄二の性格を理解し始めているのだろう。

「・・・・・条件はなんだ」

力なく根本が問う。

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝ってやってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

「否定できないだろ？お前はこう言われても仕方ないことをやってきただろう」

酷い言い様だが、言われるだけのことを根本はやっている。だから此処まで言っても周りの人間は誰もフォローしない。本人もそれはわかっているだろう。

「そこで、お前らＢクラスに特別チャンスだ」

雄二のAクラス戦に必要な取引を提案する。

「Aクラスに行って、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告するな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「・・・・・それだけでいいのか？」

「それだけでいいと思っているのか？」

根本が恐怖したような視線を向ける。これから何が起こるか恐れているんだろう。

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

そう言って雄二が取り出したのは、先ほど秀吉が着ていた女子の制服。

これは明久の要望の制服を手に入れるための手段だが、雄二の先ほど罵倒された仕返しも入ってるだろう。

「ば、馬鹿なことを言うな！この俺がそんなふざけたことを・・・・・！」

根本が慌てふためく。しかたないことだが・・・・・・

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守られるなら、やらない手はないな！』

Bクラスからの暖かい声援。これを見る限り根本が今まで根本がどれほどの扱いを受けてきたかがわかる。

「んじゃ、決定だな」
「くっ！よ、寄るな！変態ぐふぅっ！」
「とりあえず黙らせました」
「お、おう。ありがとう」

一瞬で根本を見限って腹部に拳を打ち込んだBクラスの男子。さすがの雄二も変わり身の早さに驚いている。

「では、着付けに移るとするか。明久、まかせたぞ」
「了解っ」

雄二に言われて明久が根本の制服を脱がし始める。
男が男の服を脱がすのを見るのは気持ち悪いな。

「う、うぅ・・・・・・」
「どけ、明久」
「わかったよ、雅夜」

明久にどいてもらい、根本に近づき手に持っていたスタンガンを突きつける。

「寝てろっ！」
「ぐぺっ！」

一撃で静まり返る根本。あとは明久に任せるとしよう。

「うーん・・・・・・。これ、どうするんだろう？」

「私がやってあげるよ」

Bクラスの女子が明久に話しかけた。

「そう?悪いね。それじゃ、折角だし可愛くしてあげて」

「それは無理。土台が腐ってるから」

酷い言われようだ。

「じゃ、よろしく」

そう言って、明久は根本の制服をもって教室を出て行った。

「(雄二、明久をみてくる。あとは任せれるか?)」

「(明久を?・・・こっちは、まかしておけ)」

さて、もう一仕事といきますか。

第２２話（後書き）

感想お待ちしております。

第２３話（前書き）

すいません。昨日更新するのをわすれてました。

第２３話

「・・・・・あったあった」

明久が根本の制服から何かを見つけたようだ。

「なにをだ？」

「姫路さんのラブレターだよ・・・って雅夜！どうしてここに？」

んなことどうでもいい。

「それより、ソレみないのか？」

「だ、ダメだよ！そんなことしたら姫路さんに失礼じゃん」

「そうか？それは明久あての手紙だと思うんだが？」

「・・・僕宛の手紙？」

「ああ。だからあけても大丈夫だ。むしろ開けないのは姫路に失礼だろ？」

「そ、そうだね！じゃあ開けてみるよ」

明久も中身興味があったのか、すぐに手紙の封を開けた。

「・・・・・・・・・」

「どうしたんだ？」

「・・・・・雅夜も見てみなよ」

「ふむ。どれどれ？」

『バカがみる♪』

「ほらみろ。明久宛の手紙だろ」

「どこがっ!?これって姫路さんのラブレターじゃなかったの!?」
「とりあえず落ち着け。別に俺はコレが姫路のラブレターなんて一度も言ってないぞ?」
「・・・じゃあ、なんなのさ?」
「不幸の手紙だ」
「嘘だっ!」
「冗談だ。それは俺が書いた手紙だ」
「・・・雅夜が書いた手紙?」
「ああ」
「・・・雅夜が姫路さんに?」
「まぁ、そうだな」
「なんでこんな文なの?」
「明久が見るかと思って」
「僕に見させたのは雅夜じゃんか!」
「という冗談はおいといて。本当は根本に盗られる前にすり替えておいただけだ」
「すり替えた?」
「だから、姫路の本物(ラブレター)と俺の偽者(フェイク)を根本に盗られる前に換えておいたんだ」
「ほかにそのことを知ってる人は?」
「だれも」
「ってことは姫路さんも?」
「ああ。だから後で言っといてくれ、すまなかった、と」

俺からも姫路にあやまっておかないとな。

「本物はどこにあるの?」
「ここにある、ちゃんと姫路に渡しておけよ」
「う、うん」

明久は俺から手紙(ほんもの)を受け取って、Fクラスに入って行こうとしてまだ根本の制服を持っていることに気が付いたようだ。

「ねぇ雅夜。これどうしようか？」
「貸せ。俺が処分しておく」
「うん。まかしたよ」

明久から根本の制服を受け取り、雄二たちのもとに行こうとすると・・・

「あの、浅月君」
「お、姫路か？」
「は、はい。明久君を知りませんか？」
「明久か？あいつだったら教室にいると思うぞ？」
「ありがとうございます」

そういって姫路は教室に走って行った。

「おーい姫路」
「は、はい。なんですか？」
「明久は今回頑張ったからな、ちょっとくらいサービスしてやれよ」
「サービスですか？」
「ああ、抱きしめるぐらいでいいんじゃないか？」
「だ、抱きしめるですか？」

顔を真っ赤に染まってるぞ

「そのくらい構わないだろ？好きなんだし」
「べ、別に、そういうわけじゃ・・・」
「ほら早く行って明久に抱きついて来い。明久が戻ってくるぞ」

「そ、そのために行くんじゃありませんっ！」

姫路は顔を真っ赤に染めながら、教室に走って行った。

「・・・これで、少しも進展しないから不思議なんだよな」

愚痴りながら、雄二たちのいるＢクラスに戻ってきた。

「おーい雄二、こっちはどうなってい・・・・・・る？」

『こ、この服、ヤケにスカートが短いぞ！』

『いいからキリキリ歩け』

『さ、坂本め！よくも俺にこんなことを――――』

『無駄口を叩くな！これから撮影会もあるから時間がないんだぞ！』

『き、聞いてないぞ！』

「お、雅夜か。明久たちはどうなった？」

「・・・そんなことより、コレはどういうことだ？」

「Ｂクラスの奴らが予想以上に乗ってきてな、撮影会まで組んじまってな」

「いい脅迫材料になりそうだな」

「ああ。」

女装癖に目覚めなければいいけどな・・・・・・

「何か言ったか？」

「いや、なんでもない」

第２３話（後書き）

感想お待ちしております。

第２４話

Ｂクラス戦終戦２日後、残りはＡクラス戦のみとなった俺らはもうじき変わるＦクラスで最後の作戦の説明を受けていた。

「まず皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらず此処まで来れたのは、他でもない皆の協力があってのことだ。感謝している」

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは俺の偽らざる気持ちだ」

「雄二が、Ｆクラスが此処まで来た意味を今、証明するときだ」

「ここまで来た以上、絶対にＡクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねぇんだーっ！』

最後の勝負を前にしてまた、皆の気持ちが一つになった気がした。

「皆ありがとう。そして残るＡクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

『どういうことだ？』

『誰と誰が一騎打ちするんだ？』

『それで本当に勝てるのか？』

「皆落ち着け。今まで雄二の作戦が間違えたことはないだろ？」

「それを今から説明する」

雄二がバンバン、と机を叩いて皆を静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

Aクラス代表の霧島翔子とFクラス代表の坂本雄二。クラス間の戦争を代理で行うのだから、代表どうしの一騎打ちは当然といえば当然だ。

しかし、相手はあの霧島だ。学年主席であり、元学年次席の姫路でもかなりの差をつけられている。

「馬鹿の雄二が勝てるわけなぁぁっ！」

「うおっ！危ねぇだろ雄二。外すなよ」

「わかった。次は耳だ」

「よかったな明久。耳だったら生きていられるぞ？」

「・・・雅夜、耳でも良くないと思うよ？」

「まぁ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」

「だがそれは、まともにやりあったときだけだろ？」

「そうだ。Dクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかった」

「けど、俺達はここまで勝ち進んでいる」

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ちは揺るがない」

「今までだって見てきただろう？Fクラス代表坂本雄二が本気をだせば勝てないものなんて、ありはしない」

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『『『おおぉーーーっ！』』』

今更皆に意思を確認するのは無粋だろうな

「さて、具体的なやり方だが・・・・・一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」
「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」
「日本史だ。ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」
小学生レベルで上限あり。
この内容だと満点が前提になり、ミスをした方が負けるといった注意力勝負になる。
「でも、同点だったら、きっと延長戦だよ？そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」
「確かに明久の言う通りじゃ」
「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」
「？？それなら、霧島さんの集中力を乱す方法でも知っているとか？」
「いいや。アイツなら集中なんてしていなくても、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」
確かにな。学年主席だからその程度は簡単だろう。
「雄二。あまりもったいぶるでない。そろそろネタを明かしても良いじゃろう？」
「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」
かぶりをふり、雄二は改めて口を開く。

「俺がこのやり方を採った理由は一つ。ある問題がでれば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」
「？ある問題とはなんじゃ？」
「その問題は――――『大化の改新』」
「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」
「小学生レベルといっただろ。もっと単純な問だ」
「単純というと――――何年に起きた、とかかのう？」
「おっ。ビンゴだ秀吉。お前の言うとおり、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

「おい明久。大化の改新が何年に起きたか言ってみろ」
「簡単だよ『鳴くよウグイス、大化の改新』だから７９４年だよ」

『『『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』』』

「大化の改新が起きたのは、６４５年。こんな簡単な問題は明久ぐらいしか間違えない」
「だが間違える、と？」
「ああ。翔子は確実に間違える。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室ともおさらばって寸法だ」

作戦の内容はわかった、けど雄二は良いのか？

「あの、坂本君」
「ん？なんだ姫路」
「霧島さんとは、その・・・・・・仲が良いんですか？」

霧島との関係がばれるぞ？

「ああ。アイツとは幼なじみだ」
「総員、狙えぇっ！」
「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」
お前と霧島がいい関係だと思っているんだろう。
「黙れ、男の敵！Ａクラスの前にキサマを殺す！」
「俺が一体何をしたと！？」
「遺言はそれだけか？・・・・・まつんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むんだ」
「了解です隊長」
落ち着けよ・・・・・。
「あの、吉井君」
「ん？なに、姫路さん」
「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」
「そりゃ、まぁ。美人だし」
「・・・・・・・・・・」
「え？なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？それと美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険なものを投げつけようとしているの！？」
「まぁまぁ。落ち着くのじゃ皆の衆」
パンパンと手を叩いて場を取り持つ秀吉。流石に冷静だ。
「冷静になって考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ？男である雄二に興味があるとは思えんじゃろうが」
霧島に失礼じゃないか？

「むしろ、興味があるとすれば・・・・・・」
「・・・そうだね」

Fクラスの視線が一人に集中する。

「な、なんですか？もしかして私、何かしましたか？」
「気にするな姫路。お前は何もしていない」
「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さい頃に間違えて嘘を教えていたんだ。アイツは一度教えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる」
「けど今回は仇になる」
「俺はソレを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は――――」
『『『システムデスクだ！』』』

第２４話（後書き）

雅夜は雄二と共に演説をしています。
と言うより、隣でフォローしています。

感想お待ちしております。

第２５話

「一騎打ち？」
「ああ。Ｆクラスは試召戦争として、Ａクラス代表に一騎打ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。
今回は雄二を筆頭に、俺、明久、姫路、秀吉に康太のＦクラス首脳陣勢揃いでＡクラスにきていた。

「う～ん、何が狙いなの？」

現在雄二と交渉しているのは秀吉――――の双子の姉木下優子だ。
姉のほうをみるのは初めてだが、微妙に違和感を感じる。

「もちろん俺達Ｆクラスの勝利が狙いだ」

木下が訝しむのも無理はないだろう。俺も同じ立場だったなら何か裏があると考えるだろう。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを犯す必要は無いかな」
「賢明だな」

予想通りの返答。けどここからが本番だ。

「ところで、Ｃクラスとの試召戦争はどうだった？」
「時間は取られたけど、それだけだったわよ？何の問題もなし」
「Ｂクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって・・・・・・。昨日来ていたあの（・・）・・・・・・」

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い戦線布告はまだされていないようだが、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月間の準備期間を取らない限り試召戦争は出来ないはずだよね？」

「知っているだろ？実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっているってことを。規則的にはなんの問題もない。・・・・・・Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

「・・・・・・それって脅迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

どう聞いても、脅迫だろ？

「うーん・・・・・わかったよ。何を企んでいるかは知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

「え？本当？」

意外とあっさりとした返事に驚き、会話に参加していなかった明久が声をあげてしまう。

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん・・・・・・」

微妙なところで根本が役にたったようだ。

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝った方の勝ち、っていうなら受けてもいいよ」

「う・・・・・・」

「さすがAクラスの秀才。きっちり警戒しているな」
「なるほど。こっちから姫路が出てくる可能性を警戒しているんだな？」
「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし」
「姫路も安く見られたもんだな」
「安心してくれ、ウチからは俺が出る」
「無理だよ。その言葉を鵜呑みに出来ない。コレは競争じゃなくて戦争だからな」
「ま、別に問題無いんじゃないか？」
「そうだな。それならその条件を呑んでもいい」
後ろの連中が驚いているが、スルー。

「ホント？嬉しいな♪」

・・・やっぱりどこかで見たことある気がする。
後ろで秀吉の考えているような顔つきになってるし。

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハンデはあってもいいはずだ」
「え？うーん・・・・・・」

さすがに戦争の勝ち負けが係わってくる内容だからか、またも悩む。

「・・・・・受けてもいい」
「ぅわっ！」
「おい明久、驚くなよ。霧島に失礼だろうが」
「・・・・・雄二の提案を受けてもいい」

突然現れた学年主席、霧島翔子。

「あれ？代表。いいの？」

「・・・・・その代わり、条件がある」

「条件だと？」

「・・・・・うん」

霧島は雄二を見た後、姫路を見、そしてまた雄二を見て言葉を発した。

「・・・・・負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

「（雄二、後ろの奴らは気にするな。無視して構わん）」

「（ああ。どうせ勘違いしているみたいだしな）」

「じゃ、こうしよう？勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる。二つはこっちで決めさせて？」

「そんぐらいだったら問題ないな」

「ああ。交渉成立だ」

「ゆ、雄二、雅夜！何を勝手に！まだ姫路さんは了承していないじゃないか！」

ほんとに勘違いしてやがるよ・・・。

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない」

「・・・・・姫路に、ね」

微妙に顔が引きつって見えるのは気のせいだろう。

「・・・・・勝負はいつ？」
「そうだな。十時からでいいか？」
「・・・・・わかった」
「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」
「そうだな。皆にも一応報告しとかないとな」

交渉は成功し、Ａクラスを後にする。
俺らの試召戦争の終結は、すぐそこだろう。

「・・・なぁ秀吉、気付いたか？」
「・・・やっぱりお主も気付いたか」
「ああ。あの違和感はお前の姉かもしれないな」
「けれども、姉上だったとしたら何故ワシが違和感を感じるのじゃ？」
「・・・もしかしてお前も一緒だったんじゃないか？」
「それもそうじゃの。だったらワシと姉上と雅夜の三人であっているのじゃろうな」
「けどお前の姉は、俺を見ても特に反応を示さなかった」
「きっと姉上も忘れているのじゃろうな」
「だよな。だったらＡクラス戦の時に何か思い出すかもな」
「・・・思い出せるといいのじゃがのう？」

「きっと思い出せるさ」

第２５話（後書き）

原作の６．５巻を見た後だと、ここでの優子は猫かぶりすぎだと思う。

次回Ａクラス戦。
雅夜と秀吉は何を思い出すのか？

感想お待ちしております。

第２６話

「では、両名共準備は良いですか？」

立会人はＡクラス担任であり、かつ学年主任の？橋先生が務める。

「ああ」

「・・・・・・問題ない」

一騎打ちの会場はＡクラス。こっちの方が広くて綺麗だからだ。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

Ａクラスからは佐藤美・・・穂、だと？

たしか原作だったら木下が出てくるはずなのだが？

「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？僕！？」

対戦相手は明久、と変わっていないが・・・。

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

負けるほうにだろ？

「ふぅ・・・・・。やれやれ、僕に本気を出せってこと？」

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この会場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

『おい、吉井って実は凄い奴なのか？』
『いや、そんな話は聞いたことないが』
『いつものジョークだろ？』

ジョークに決まっているだろ。

「吉井君、でしたか？あなたは、まさか・・・・・・」
「あれ、気付いた？ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」
「それじゃ、あなたは・・・・・・！」
「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕――――左利きなんだ」

『Ａクラス　佐藤美穂　３８９点　ＶＳ　Ｆクラス　吉井明久　６２点　物理』

一瞬で決着が付いた。

「このバカ！テストの点数に利き腕なんて関係ないでしょうが！」
「み、美波！フィードバックで痛んでいるのに、更に殴るのは勘弁して！」
「バカだからこんなことになっているんだろ？」
「雅夜も！ちょっとはフォローしてよ！」
「よし。勝負はここからだ」
「ちょっとまった雄二！アンタ僕を全然信頼していなかったでしょう！」
「信頼？なにそれ？食えんの？」

「では、二人目の方どうぞ」

「・・・・・・・・・・（スクッ）」

康太が立ち上がる。

保健体育だったらAクラス以上の力を持っている。

「じゃ、僕が行こうかな」

対してAクラスからは工藤愛子。ボーイッシュな女子だ。

「一年の終わりに転校してきた工藤愛子です。よろしくね」

「科目はなににしますか？」

「・・・・・・・・・保健体育」

康太の唯一にして最強の武器が選択される。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

Bクラス戦でも大活躍だったらな。

「でも、僕だってかなり得意なんだよ？・・・・・・君とは違って、実技で、ね♪」

Fクラスの男子ら、異様に興奮しているみたいに見えるのだが？

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育でよかったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「フッ。望むところ――――――」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強な

んていらないのよ！」
「そうです！永遠に必要ありません！」
「お前ら、少しは明久の気持ちを考えろ！本当のこと言ったら傷付くだろ！」
「・・・・・・・・・」
「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔しているんだが。それと雅夜。お前の言葉が一番効いたようだが」
「気にするな」
「それそろ召喚を開始してください」
「はーい。試獣召喚っと」
「・・・・・・・・・・試獣召喚」

二人に似た召喚獣がそれぞれ武器を持って出現する。康太は小太刀の二刀流。そして工藤は、

「なんだあの巨大な斧は！？」

みるからに破壊力満点の巨大な斧。おまけに腕輪もしているようだ。

「実践派と理論派、どっちが強いかみせてあげるよ」

工藤は微笑かけると同時に腕輪を光らせながら召喚獣が動いた。
斧に雷光をまとわせ、ありえないくらいのスピードで康太の召喚獣に詰め寄る

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん」
「ムッツリーニっ！」
「・・・・・・・・・加速」
「・・・・・・え？」
「・・・・・・・・・加速、終了」

康太がボソッと言うと、工藤の召喚獣が血を噴出しながら倒れた。

『Ａクラス　工藤愛子　　ＶＳ　　Ｆクラス　土屋康太
保健体育　　４４６点　　　５７２点　　』

「Ｂクラス戦のときは出来がイマイチだったらしいからな」

「そんな・・・・・・・・・・！この、ボクが・・・・・・・・・・！」

工藤が膝をつく。相当ショックだったようだ。

「コレで一対一ですね。」

第２６話（後書き）

感想お待ちしております。

第27話

「これで一対一ですね。次の方は？」
「あ、は、はいっ。私ですっ」

こちらからは当然姫路がでる。Fクラスにいて Aクラスにまともに戦える貴重な存在だ。

「それなら僕が相手しよう」

Aクラスから出てきたのは学年次席の久保利光。

「やはり来たか、学年次席」

姫路に次ぐ学年四位の実力の持ち主である。

「ここが一番の心配どころだ」
「心配？お前は何を言っている。Fクラスの姫路が負けるわけがない」
「それもそうだな。あいつほどFクラスが好きな奴はいないしな」

「科目はどうしますか？」
「総合科目でお願いします」
「かまいません」

総合科目。全科目のなかで、実力の差が一番わかる科目である。
久保は決着でもつけたいのだろうか？

「それでは・・・・・・」
「「試獣召喚っ！」」

『Ａクラス　久保利光　　ＶＳ　　Ｆクラス　姫路瑞樹
総合科目　　３９９７点　　　４４０９点　』

一瞬でケリがついた。

『マ、マジか！？』
『いつのもにこんな実力を！？』
『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ・・・・・・！』

Ａクラスのほうから驚きの声があがる。
４００点近くもあがっているのだから、無理もない。

「ぐっ・・・・・・！姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ・・・・・・？」
「・・・・・私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Ｆクラスが」
「Ｆクラスが好き？」
「はい。だから、頑張れるんです」

Ｆクラスが好きとどうどうと言われると、すこしハズいな。

「これで、一対ニです」

？橋女史にも若干の変化がみられた。姫路の急成長に驚いているんだろうか？
それとも、Ａクラスがクラスに追い詰められていることにか？

「では、四人目どうぞ」
「俺の番だな」
「ああ。雅夜、頼んだぞ」

さて、どうやって負けようかな？
原作を壊さない為にもここは負けないといけないんだけどな。

「こっちはアタシが出るよっ！」
「木下か」

弱点が多そうな奴がきたな。

「始める前にちょっといいかな？秀吉に話があるんだけど」
「別に構わんが」
「ありがと」

またこの笑顔。秀吉の時よりも何かが引っかかる。

「秀吉、ちょっとこっち来て」
「なんじゃ姉上。ワシを廊下に連れ出してどうするつもりじゃ？」

木下が秀吉の腕を取って、教室を出て行く・・・。
今まで秀吉に感じていた違和感は、木下のことで間違いなさそうだな。さっきの笑顔で確信を持てた。
木下優子と木下秀吉。ずっと前にどこかで会ったことが有るみたいが。

『姉上、勝負は――――どうしてワシの腕を掴む？』
『アンタ、Cクラスで何をしてくれたのかしら？どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなぁ？』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して――あ、姉上っ！ちがっ・・・・・！その間接はそっちに曲がらなっ・・・・・・！』

ガラガラガラ

「さ、始めましょ」
「おい、秀吉は死んでないよな？」
「大丈夫のはずよ。あんなのでも一応弟だもの」
「一応をつけるな。一応を」
「それよりさっさと始めましょ」
「あ、ああ。じゃあ、科目は現代国語で」

「「試獣召喚！」」

『Ａクラス　木下優子　ＶＳ　Ｆクラス　浅月雅夜
現代国語　３３８点　４３０点』

第２７話（後書き）

感想お待ちしております。

第２８話（前書き）

今回は展開が速いので、注意して読んでください。

第２８話

「始める前に二つほど聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」
「聞きたいこと？別に構わないぞ」
「ありがと。まず一つ目なんだけど、どうしてそんなに点数が高いの？」
「そりゃあ、頭が良いからだろ？」
「そうじゃなくて！どうしてＦクラスなのにそんなに点数が高いのってこと」
「振り分け試験のときに居眠りしちまってな。」
「・・・・・バカね」
「返す言葉もないな」

ま、Ｆクラスに元々入るつもりだってけどな。

「それで二つ目、だけどね・・・・・・。アタシの気のせいかも知れないけど、どこかで会ったことないかしら？」

どうやら俺が感じた違和感を向こうも感じているみたいだ。

「なんでそう思うんだ？」
「なんでって・・・。アナタの召喚獣が着ているジャケット、同じものを、昔助けられた時に貰ったからよ」
「助けられた？」
「昔秀吉と一緒に火事に巻き込まれてね、その時に通りすがりの男の子に助けてられたの」

・・・火事？

「印象的だったのが、助かった時にその男の子、『よかった。本当によかった』って泣き始めちゃったのよね」

秀吉と木下、ジャケット、そして火事。

・・・・・・・・・あの時のことか！

「木下！それっていつのことだ？」

「えーっと、だいたい４年前のことかな？」

どんな偶然だよ！？

あのときの助けた奴が、木下だったなんて。

「・・・なによ、その『やっと思い出した』って顔は？」

「しかたないだろ？思い出したいことがやっと思い出せたんだから」

「・・・まあいいわ。さっさと勝負を開始しましょ」

勝負、か。

「俺の降参でいい。俺はお前と戦うことはできない」

「へ？どういうことよっ！」

「別に理由なんていいだろ、そっちの勝ちなんだから。そういえば秀吉はどうした？」

「秀吉なら廊下に捨てているけど・・・ってそんなことより理由はなんなのよ！」

「あとで秀吉にでも聞け！こっちは秀吉に話さなきゃいけないことが出来たんだよ」

「えーっと、これで二対二ですね？」

「ああ、それで構わない。雄二後は頼んだぞ！」

「あ、ああ。あとで理由を聞くからな！」
「ちょ、ちょっと待ちなさいよっ！」
雄二にこの場を任せて秀吉の元に行こうとするが木下に止められた。
「私にも関係のある話でしょ？一緒に行くわ」
「・・・別に構わん」
『『『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』』』
Ａクラスとｆクラスの両方からなにか言いたげな視線を感じるが、
無視だ無視。

第２８話（後書き）

いつもより短くなってしまいました。
展開速すぎ！ってツッコミはナシの方向でお願いします。

木下姉弟と雅夜の過去については、試召戦争が終わったら書いていきます。

第２９話（前書き）

更新遅れました！すいません。

第２９話

「おーい秀吉。生きてるかー？」
「ちょっと秀吉！さっさと起きなさいよ」
「・・・・・ん。姉上に雅夜、おはようなのじゃ」

お、やっと起きたみたいだな。

「おはようって時間じゃないけどな」
「む、それはすまんのう」
「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ」

おお、そうだった。

「秀吉、今までずっと『お前から違和感を感じる』って言ってたよな？」
「うむ」
「その違和感の正体が木下ってことは理解できているよな？」
「今朝にもそんなことを話したの」
「その違和感がやっと解けたんだ！」
「なんじゃと！？それでなんだったのじゃ？」

やっぱり秀吉も気になるよな。

「４年前の火事のことを憶えているか？」
「４年前の火事、じゃと？」
「お前が木下と一緒に遭ったやつだよ。場所は・・・」

えーっと。何処だったっけ？

「マンションよ」
「ありがと。場所はマンションだ」
「・・・おお！あのときのことじゃな」

思い出したようだな

「で、火事に遭ったお前らを助けたのが、俺だったんだ！」
「「え！？」」
「ちょっとまて。木下、お前は最初っから居たのになんで驚くんだよ！」
「べ、別にいいでしょ！そんなことより本当なのそれ？」
「俺がこの話をしている時点で、本当も嘘もないだろ」

知らなかったら、話すら出来ない筈だ。

「そうじゃな。して、雅夜。どうやって思い出せたのじゃ？」
「木下が結構覚えていたんだよ。思い出せたのはいろんな意味でコイツのおかげだ」
「そうなのか、姉上？」
「アタシが言ったのは、『４年前に火事に遭った』『ジャケットに見覚えがある』『助かった時に泣き始めた』の三つぐらいよ？」
「それだけあれば充分なんだよ」
「？ジャケットと言うと、姉上の部屋に大切そうにか――――あ、姉上っ！ワシの間接はそっちに曲がら・・・・・！」
「ちょ、まて木下！俺は何も聞こえてないから秀吉を放せっ！」
「聞こえてない？本当ね？」
「ああ、大丈夫だ」

嘘でも聞こえてないと言わないと、秀吉が死んじまう。

「もし嘘吐いていたら――――」
「吐いてたら？」
「軟体動物にしてあげる♪」

笑顔で恐ろしいことを言うな、怖すぎる。

「そういえば、アタシと戦わない理由はなんなのよ？」
「・・・・・そんなことよりもっ！戦争はどうなったかな？」
「話をそらさないで！」
「さっき雄二と霧島が出て行くのが見えたからそろそろだ――――」

『『『うぉぉっ！』』』

「うおっ！ビックリしたー。」
「この声はＦクラスの皆のじゃな」
「ってことは、代表がまけたの！？」
「それはないから安心しろ」

きっと大化の改新の問題が出てきたから声をあげたんだろう。

「それはどういう意味じゃ？」
「どうもこうも、雄二の作戦は雄二が１００点取ることを前提に話していたろ？昔神童って呼ばれていたとしても、昔の話だ。今のあいつはＦクラス代表だ」
「む、言われてみれば確かにそうじゃの」
「ちょっと、作戦ってどういうことよ？」

そっか、木下はしらなかったな。

「雄二の作戦は、『小学生レベルで１００点満点の日本史のテスト。霧島が必ず間違ええるから勝てる』って感じだけど、雄二が１００点取れないから意味ないけどな」

「雄二は自信満々に語っておったからの、皆そのことに気付かなかったのじゃろう」

「・・・そうだったんだ。それじゃあ、坂本君がちゃんと勉強していたら負けてたね」

「雅夜はいつから気付いておったのじゃ？」

「えーっと、試召戦争を始めた辺りからかな？」

「最初っからじゃの・・・。気付いておったのなら雄二に言っておけば勝てたかも知れないのに」

「ヒントなら最初っから言ってたぞ。『本気の雄二なら負けない』って。あいつが本気になんないのが悪い」

バンッ！ドドドドド！

『『『坂本を殺せーーっ！』』』

Ａクラスから殺気立ったＦクラスの奴らが雪崩出てきた。

よほど怒っているのだろう。

「雅夜、秀吉。今から雄二を殺りにいくよ！僕らの信頼を裏切った報いを受けさせるんだ！」

「明久か。その様子じゃ決着がついたみたいだな」

「どれ、ワシ達も急ぐとするかの？」

開いたドアから教室を覗いてみると・・・

『日本史勝負　限定テスト　１００点満点
Ａクラス　霧島翔子　９７点
ＶＳ
Ｆクラス　坂本雄二　５３点』

第２９話（後書き）

これでＡクラス戦終了です。

感想おまちしております。

第３０話（前書き）

すいません（ペコッ）
風邪のアンチクショウにやられてました。

第３０話

「三対二でＡクラスの勝利です」

視聴覚室にやってきた俺らに対する高橋女史の締めの台詞。

「・・・・・雄二、私の勝ち」

「・・・殺せ」

「いい覚悟だ、殺してやる！歯を食いしばれ！」

「吉井君、落ち着いて下さい！」

姫路が後ろから明久に抱きついた。結構羨ましい状態だ。

「だいたい、５３点ってなんだよ！０点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと――――」

「いかにも俺の全力だ」

「威張るところじゃないだろ」

「この阿呆がぁーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！アンタだったら３０点も取れないでしょうが！」

「それについては否定しない！」

「しないじゃなくて出来ないだろ？」

「それなら、坂本君を責めちゃだめですっ！」

「くっ！何故止めるんだ姫路さんに島田さん！この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

「それに負けた原因は俺らにもあるんだぞ？雄二にやったら俺達も受けることになるけど、いいのか？」

「ドンマイ雄二！次はミスるなよ！」

「切り替えはぇな！」

ま、俺が体罰を受けそうになったら明久をボコるけどな。

「・・・・・でも危なかった。雄二が所詮小学生程度の問題どと油断していなければ負けてた」

「言い訳はしねぇ」

「図星であることくらい隠せよ」

何でコイツはここまで言い張れるんだろう？

「・・・・・ところで、約束」

お！そういえば『敗者は勝者の言うことをなんでも聞く』って死亡フラグ立てたんだっけ？

「・・・・・・・・・！（カチャカチャカチャ）」

「ムッツリーニ、僕も手伝うよ」

後ろの馬鹿共は放っておこう。

「わかっている。なんでも言え」

「よかったな霧島。あんなことやこんなことも出来るみたいだぞ？」

「まてっ！そこまで言った憶えはないぞ！」

「・・・・・あんなことや、こんなこと（ポッ）」

「翔子も！そこは恥らうところじゃない！」

別にいいじゃねぇか。

「・・・・・それじゃ――――――雄二、私と付き合って」

教室に沈黙が訪れる。
驚いていないのは多分、雄二と霧島、それと俺ぐらいだろうな。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」
「・・・・・私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

驚いているのも無理はないだろう。今まで霧島は『女子が好きな同性愛者』と見られていたんだからな。

「その話は何度も断っただろ?他の男と付き合う気はないのか?」
「・・・・・私には雄二しかいない。他の人なんて、興味ない」

今の言葉を霧島ファンが聞いたら泣くだろうな。
それか、雄二を殺すかのどっちかだ。

「拒否権は?」
「・・・・・ない。約束だから。今からデートに行く」
「ぐぁっ!放せ!やっぱりこの約束はなかったことに――――」

ぐいっ　つかつかつか

霧島は雄二の首根っこを掴んで教室を出て行った。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・」」」

教室にしばしの沈黙が訪れる。
あまりに予想外の出来事に言葉が出ないのだろう。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

呆然としていた俺らに野太い声が掛かる。

声のしたほうを見ると、そこには生活指導の西村さん（鉄人）が立っていた。

「あれ？西村先生。僕らになんか用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補修についての説明をしようと思ってな」

やべぇ！この人のことすっかり忘れてた！

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『『『なにぃっ！』』』

クラスの男子全員が悲鳴をあげる。

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまで来るとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』といっても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てではないからと言って、ないがしろにしていいものじゃない」

まぁ、雄二が必要最低限の知識さえ持っていれば勝てたかも知れないしな。

「吉井。お前と坂本は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の《観察処分者》と《A級戦犯》だからな」

ザマァ、明久！日頃の行いが悪いからこうなるんだよ！

「それと浅月もだ。お前には学園長から『ちょっとはまじめにしてやってくれ』と直々に頼まれているからな、覚悟しろよ」

え？俺も！？

「そうは行きませんよ！なんとしても監視の目をかいくぐって、今まで通りの楽しい学園生活をすごして見せます！」

「そうだ！まじめ君の何処が楽しいんだ！俺は自由気ままに生きてみせる！」

「・・・お前らには悔い改めるという発想はないのか」

溜息交じりの台詞。俺らのやる気のなさに呆れているみたいだ。

「とりあえず明日からは授業とは別に補修の時間を二時間設けてやろう」

「二時間も！？学園生活の放課後は大切なんだ！絶対に逃げ切ってみせる！」

でも、明久はやる気が出てきたみたいだ。

三ヵ月後にまた試召戦争を起こして、西村さんから逃れる為だろうけど。

「さぁ～て、アキ。補修は明日からみたいだし、今日は約束通りクレープを食べに行きましょうか？」

「え？美波、それは週末の話じゃ・・・・・・」

「約束？いつの間にやってたんだ」

呼び名もアキと美波にかわってるし。確か原作でのフラグは発生させなかった気がするが？

「えーっと、確か戦争が始まった直後だったかな？僕がＡクラスに勝つで美波がＡクラスに負けるほうを選んで、負けたほうが相手の言うことを三つだけ聞くって賭けをしたんだよ」
「何をお願いされたんだ？」
「えーっと、『ウチがアキって呼ぶから、アンタは美波って呼ぶ』と『週末にラ・ペディスでクレープをおごる』と『ウチのことを愛してるって言う』の三つだよ」
原作で起きたことはちゃんと起きてるみたいだな。
「で、これからクレープを食べに行く、と？」
「週末の話だった気がするから二度奢らせられるのかな？」
「別にいいじゃないか。可愛い女子とデートできるって考えると安いもんだろ？」
島田は結構可愛い部類に入るはずだ。
「だ、ダメです！吉井君は私と映画を観に行くんです！」
「ええっ！？姫路さん、それは話題にすら上がってないよ！？」
「よかったじゃないか明久。両手に花だぞ？」
「それよりも僕の食費が！！西村先生！明日からと言わず、補修は今日からやりましょう！思い立ったが仏滅です！」
「『吉日』で、バカ」
「そんなことはどうでもいいですから！」
「うーん。お前にやる気が出たのは嬉しいが――」
言葉を区切って明久と島田と姫路を見る西村さん。
「無理することはない。今日は存分に遊ぶといい」

そしてニヤニヤと嫌な笑顔でご無体なお言葉。

「おのれ鉄人！僕が苦境にいると知った上での狼藉だな！こうなったら卒業式には伝説の木の下で釘バットをもって貴様を待つ！」

「斬新な告白だな、オイ」

「アキ！こんな時だけやる気を見せて逃げようたって、そうはいかないんだからね！」

「ち、違うよ！本当にやる気が出ているんだってば！」

「吉井君！その前に私と映画に行くんですっ！」

「姫路さん、それは雄二とじゃなくて僕となの！？」

「？？坂本君？なんのことですか？私は吉井君のことがずっと――」

「アキ！いいから来なさい！」

「あがぁっ！美波、首は致命傷になるから優しく――――」

「ほら、早くクレープ食べに行くわよ！」

「わ、私と映画にいくんですよね！」

「いやぁぁっ！生活費が！僕の栄養がぁっ！」

「行ってらっしゃーい」

あいつらも見ていて楽しいな。

「さて、秀吉。俺達も帰るとするか」

「そうじゃの。話たいことも沢山あるしの」

「そうね。あのときの事について沢山お話しましょう」

そういって三人で帰ろうと・・・三人？

「って木下！どうしてここに居るんだ！？」

「どうしても何も、秀吉と家は一緒よ？それに聞きたいことも沢山

あるし、ね？」
「すまんっ！秀吉、ちょっと用事ができた！じゃあｎ・・・ちょ、木下！一瞬で俺の間接をとるな！」
「逃がさないわよ？たっぷりとお話しましょうね」
「秀吉！助けてくれ」
「すまぬ。ワシも興味があるのじゃ」
「秀吉ぃーー！」
「秀吉、どこで話しましょうか？結構時間係りそうだし」
「そうじゃのう、ウチで――――」
「秀吉？」
「雅夜の家はどうじゃ？」
「そうね。そうしましょうか」
「ちょ、勝手に決めるな！俺の家はまずいって！」

や、やばいって！

「なにが見られたらまずい物でもあるの？・・・コレはますます行きたくなってわね」
「そうじゃの、雅夜がここまであわてるのは珍しいしの」

でも、俺の家はあまり知られていないはず！だったら・・・・・・・・・

「場所は確か、明久と同じマンションだったはずじゃ。さっそく行こうかの」

嘘だぁぁっー！明久の奴、教えちゃってるの！？

「そうね。早く行きましょうか。時間は限られているもの」

そういいながら俺の間接を更にきつく締める。
チクショウ！これじゃ、逃げられない！どうする！？

「さ、浅月。行くわよ」
「うむ、もう諦めるのじゃ」
「・・・・・・勘弁してください」

第３０話（後書き）

バカテスト一巻、終了です。

次回はバカテストを挟んで、浅月たちの過去の話です。

感想お待ちしております。

バカテスト第3問目

第１０問　問　次の（　　）に正しい年号を記入しなさい。
『（　　）年　キリスト教伝来』

霧島翔子の答え
『１５４９年』

教師のコメント
正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え
『雪の降り積もる中、寒さに震えるキミの手を握った１９９３』

教師のコメント
ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

第１１問　問　次の（　　）に正しい年号を記入しなさい。
『（　　）年　鎌倉幕府設立』

姫路瑞樹の答え
『１１９２年』

教師のコメント
正解です。かんたんでしたか？

吉井明久の答え
『１１２９年』

教師のコメント
間違ったごろで憶えないでください。

浅月雅夜の答え
『１１９２年と書きたいところだが１１２９年』

教師のコメント
まじめにやってください。

Ｆクラス男子×４５名
『１１２９年』

教師のコメント

Fクラスの9割がこの答えを書くとは思いませんでした。

第12問　問　次の（　　）に正しい年号を記入しなさい。
『（　　）年　大化の改新』

坂本雄二の答え
『645年』

教師のコメント
正解です。憶え方は無事故（645）の改心ですね。

霧島翔子の答え
『625年』

教師のコメント
珍しいですね？霧島さんがこんな簡単な問題を間違えるなんて。

浅月雅夜の答え
『245年』

教師のコメント
まさか、不事故の改心とでも覚えたのでしょうか？

吉井明久の答え
『６４５年―（訂正）６２５年』

教師のコメント
訂正しなければ合っていましたのに、勿体ないですね。

第１３問　問　以下の問に答えなさい。
『１８５３年に黒船で横浜にやってきたのはだれですか。』

姫路瑞樹の答え
『ペリー』

教師のコメント
正解です。

浅月雅夜の答え
『ペリー』

教師のコメント
驚いたことに正解です。まじめに受けてみようと思ったのでしょうか？

吉井明久の答え
『ペルー』

教師のコメント
惜しいですが間違いです。

バカテスト第3問目（後書き）

バカテスト第三問目終了です。

感想お待ちしております。

第３１話

「着いたぞい、姉上」
「へ～こんな所に住んでいるんだ」
間接を取られた為逃げられず、とうとうマンションまで着いてしまった。

「雅夜、お主は何号室に住んでいるのじゃ？」
「アンタ知らないの？」
「明久からは同じマンションに住んでいるとしか聞いておらんからのう」
明久、ナイス！部屋を教えなければ入って来ることはな――――

「大丈夫よ。部屋ならわかるわ」
「・・・え？」
「そこを見れば良いじゃない」
そういって木下が指差した所には・・・・・・マンション全体の郵便ポスト。

「おお、本当じゃ！これで雅夜の部屋がわかるの」
「ちょ、バカ！コレを見るのは反則だろ！」
「え～っと・・・あった！これね」
「早っ！」
マンションに入ってから部屋がバレルまでにかかった時間、約一分。
いくらなんでも早すぎるだろ！

「雅夜、もう諦めるのじゃ」
「そうよ。諦めが悪いわよ」
「・・・俺の部屋に入らないならって誓えるなら入れてもいい」
「「無理よ（じゃ）」」
「そろって言い切るなよ！」

なんか哀しくなってきた。

「俺の部屋だけは絶対にダメだ！これだけは譲れない」
「・・・そこまで言われると余計に入りたくなってきたわね」
「そうじゃの。いったい何を隠しておるのじゃ？」

しまった！更に興味を仰ぐ結果に！

「とにかく駄目なもんは駄目なんだ！今見せたら意味が無くなっちまうんだから」
「今見せたら？今度ならいいの？」
「少なくとも学園祭までは駄目だ」
「学園祭じゃと？学園祭に個人で出すのかの？」
「それで今見せられないてことは――」
「「サプライズ？」」
「・・・それはそれとして」
「逃げたわね」
「逃げたのじゃ」

別にいいだろ。

「俺の部屋に入らないと誓えるか？」
「まぁ、そう言った理由があるなら仕方ないわね」

「そうじゃな。サプライズの内容を知ってしまったら面白くないしの」
「サプライズなんかじゃねぇよ！」
「じゃあなんなのよ？」
「サプライズじゃなくて、なんなのじゃ？」
「・・・・・・・・・」
「浅月雅夜君？」
「わ、わかった！サプライズだよ！だから俺の腕を取るな！」

このまま黙ってたら間接が外されるところだった。

「ただし、俺がサプライズをしようとしているのは他言は無用だぞ」
「わかってるわよ」
「大丈夫じゃ」
「ったく」

サプライズの意味がなくなってくるだろ。

「ほらっ、サプライズのことはもういいから。さっさと部屋に入れなさいよ」
「そうじゃな。ずっと立ち話というのも疲れるしの」

それをお前らが言うか！？

カチャ

「ほら、入っていいぞ」
「「おじゃましまーす（するのじゃ）」」

鍵を開け、二人を中に入れる。

「ふむ。明久の所と変わらんの」
「まぁ、基本は一緒だしな」
そういいながらリビングへの扉を開ける。
ガチャ（扉を開ける）
ニャー！（中にいた猫が飛びついてくる）
バタッ！（猫に耐え切れず尻餅をつく）
「痛ってぇーっ！」
「あら、可愛い猫じゃない」
「そうじゃのう。愛くるしいの」
「俺は無視っすか！？」
二人とも猫が気になるようだ。
「ねぇ浅月。この猫の名前なんていうの？」
「カノンだよ。種類はアメリカンショートヘヤー・・・だった気がする」
「自分の飼っている猫の種類ぐらいしっかりと覚えておきなさいよ！」
ニャー。
カノンが木下の腕を抜け出し、俺の頭の上に来る。
ちなみにカノンの定位置は俺の頭の上だ。

「あっ・・・・・・」
「むぅ。もっと触っておりたかったのにのう」
「それはまた今度な。今日は話をするんじゃなかったっけ？」
「おお！そうじゃったな。すっかり忘れておったぞ」
「そうね。さっさと話ましょ」

なんだ忘れてたのか。もったいないことしたな。

「お前らはどのくらい覚えているんだ？」
「え？・・・う～ん、断片的に憶えてるだけだからはっきりとは憶えてないわ」
「ワシもそうじゃな」
「そうか。だったら最初っから話すか」

第３１話（後書き）

すいません。
過去の話をするつもりでしたけど、書いていくうちにスペースがなくなってきましたので、次回から書き始めたいと思います。

感想お待ちしております。

第３２話

――――４年前――――

「邪魔だっ！クソガキ」
「うぉ！っと。危ないだろ！」

道を歩いていると、マンションからいきなり男の人が出てきて、俺とぶつかった。

「うっせぇ！」

男はそういい残しすぐに走ってどこかに行ってしまった。

「・・・なにかあったのか？」

男はどこかに用事があるから急いでいるのではなく、マンションから逃げていくように雅夜には感じた。

「何かあったとすると・・・ここだよな？」

マンションを見上げて呟く。当然マンションから出てきたのだからマンションで何かあったはずだ。

「ちょっくら見てみるか」

雅夜は特に用事がなかったので、暇を潰すためにマンションに入っていった。

「・・・何もないな」

しかし、一階、二階には何もなく、いたって普通だった。

「後は三階だけか・・・・・・ん?」

パチィ　パチィ

ふと上のほうから何かがはじける音がした。

その音は段々と大きくなっていき、次第にはっきりと聞こえるようになってきた。

「・・・まさか!」

音の元が気になり、急いで三階へと駆け上る。

「・・・外れててくれよ!」

雅夜はあっては欲しくない出来事を想像していた。

「くそっ!またかよ!」

目の前に広がる炎の海。すなわち火事である。

あって欲しくない想像ほど現実にはなる。

しかし、前の時と同じ状況に見えるが一つだけ大きな違いがあった。

それは――

「・・・俺が助けるべき存在がいないこと」

助ける人がいない。前は昴がいたが、今は偶然通りかかったに過ぎ

ない。
だから、この炎の中にいく必要はなかった。
けど、昴と同じ状況の奴がいるかもしれない。
対極の考えが頭の中をグルグルと駆け巡る。

「えぇい！今はそんなこと考えてる場合じゃない。おーい！誰かいるかー！」

火事で身動きが取れない奴がいるか確かめてみる。
この中に助けを求めている人がいるはずだ。

「さっきから、嫌な予感しかしねぇんだよ！」

『・・・誰かそこにいるの！』

炎の向こうから声が聞こえた。

「やっぱりか！大丈夫か！」
『アタシは大丈夫だけど、弟が気絶したみたいで起きないの！』
「わかった。お前は今どこら辺にいる！」
『えーっと・・・扉のかｇ――きゃぁああっ！』
「お、おい！？大丈夫か！返事しろ！」

返事が返ってこない。なにかあったみたいだ。
でも、場所は『扉の影』ということがわかった。

「くそっ！今助けてやるからな！」

ポケットからハンカチを取り出し、口にあてて炎の中に飛び出す。

（やっぱり熱いな。ジャケットがあるからまだ平気だけど）

そう思いながら扉の影を見てみると、双子と思われる姉弟がいた。

「おい！大丈夫か！？」

「・・・・・・ぅん」

とりあえず大丈夫みたいだ。

「起きろ！」

「・・・・・・ハッ！今どんな状況！？」

寝起きでそんなことが聞けるなら結構だ。

「とっととここから脱出するぞ。長居は危険だ」

「わかったわ。・・・弟を頼めるかしら？」

「お前は一人で大丈夫なのか？」

「大丈夫よ」

「そうか。だったらこれを着ておけ、気休め程度にはなるだろう」

そういって着ていたジャケットを渡す。

「・・・大丈夫っていったのに」

「ほら、とっとと行くぞ！」

弟の方を背よって、準備する。

「いいか？絶対に止まるなよ」

「わっかってるわよ！」

「そんだけ元気があれば充分だ。行くぞ！」

一気に炎の中を駆け抜ける。後ろにはしっかりと姉が着いて来ていた。

「よしっ！ここまで来れば大丈夫だろう」
「・・・ふぅ」
「疲れたか？」
「・・・まぁね。流石に命の危険を感じたからね」
「よくがんばったな」

姉の頭をなでてやる。

「ちょ、や、やめなさいよ！？」
「照れるなって。この可愛いやつめ」
「な、なに言ってるのよ！？」
「本当に・・・助かってよかったよ。」

いつの間にか目から涙が出てきていた。

「な、なに泣いているのよ！シャキッとしなさい、男でしょ！！」

あの時とは違って、今回はきちんと助けられた。
誰一人死なずに皆が助かった。

「・・・ハハハ」

そのことが嬉しいのか、涙が出ているのにも拘らず顔が綻んでくる。

「・・・フフフ」

そんな俺が面白いのか、姉も笑顔になってくる。

「「ハハハハハハハハハッ！」」

「さて、俺はこれで帰るとするかな」

「もう帰っちゃうの？一緒に秀吉を見ていかない？」

笑いあっていると消防団が来て、消化活動が始まった。

もう夕日が見れる時間になっていた。

弟一（ひでよしだっけか？）は救急車によって病院に運ばれた。

心配は無いようだが、一応検査するらしい。

「いや、遠慮するよ。俺はたまたま通りかかっただけだし」

「そうは言っても、私達の命の恩人なのには代わり無いんだから。ちゃんとお礼がしたいの」

「お礼なんていらないよ。お前らが助かっただけで、俺は満足だからな」

「・・・そう？じゃあ――」

チュ♪

「これでいいわ」

・・・・・・・へ？

「お、おおお前！今何をした！？」

「またどこかで偶然あったら、責任とってもらうからね？」

「責任もなにもあるかーっ！！俺は勝手にされたんだぞ！？」

「でも顔は真っ赤よ？」

「夕日のせいだよ！！」

決して照れているわけじゃないからな！

「じゃあね！またどこかで！」

「まて！お前の名前はなんて言うんだ？」

「アタシ？アタシは――――『　　』よ！」

え？上手く聞こえない。

「バイバーイ！」

「あ、ああ！またな！！」

名前がわからないまま、彼女は消えていってしまった。

でも俺は彼女のことだけは絶対に守り抜こう、と心に誓ったのであった。

第３２話（後書き）

過去の話、終了です。
こうして雅夜は優子を守ろうと誓ったのでした。

面白くなかったらすみません。

感想お待ちしております。

第３３話

「「・・・・・・・・・・・・・・」」

どうらや二人ともあの時のことを思い出したようだ。
俺は話をしているうちに少し気になることが出来た。
それは、秀吉はずっと気絶していた筈なのに『俺の顔に見覚えがある』と言っていた事だ。

「秀吉。あの時ずっと気絶していたんだよな？」
「うむ。ふがいないの」
「いやそういう意味じゃなくて。ずっと気絶していたのにどうして俺の顔に見覚えがあったんだ？」
「む・・・。いわれてみればそうじゃな。どうしてじゃろか？」
「・・・自分でもわからないのか？」

自分のことは自分が一番知ってるはずだろ？

「多分じゃが、顔じゃなくて雰囲気じゃったのかも知れないのう」
「雰囲気か・・・。だったらおかしくないかもな」

ずっと秀吉を背負っていたし、木下も話していただろうしな。

「・・・・・てこと・・・・・・」
「どうした木下？」
「アンタ！なんてこと、思い出させてくれんのよっ！」
「いきなりどうしｔアッ！！俺の間接はそっちにまｇギャアアア！」
「余計なことまで思い出させないでよっ！」

「あ、姉上。雅夜の腕が紫になっているように見えるのじゃが・・・？」
「え！？・・・あ、浅月大丈夫？」
なんで一瞬でここまで出来るんだ？この世界の女子はおかしい気がする。
「・・・あー、すこし待ってくれ。流石にこれだと回復するまでに時間がかかる」
「そう。よかったわ」
「こんなに酷いのに少しで戻るとはどれほどの回復力なのじゃ・・・？」
まぁ、俺もおかしいってことは気付いているがな
「・・・・・っしょっと。だいぶ動けるようになったな」
「もう治ったのかの！？・・・本当じゃ、腕の色が普通なのじゃ」
「回復力には自信があるらな。折れたりしない限りは大丈夫だ」
「そんなにすごいの！？」
「まぁな。・・・だからって、やられ過ぎたら壊れちまうからな」
連続で木下の関節技をくらったら流石にまずい。
「で、なんで俺はこんな事されたんだっけ？」
「え？・・・えーっと、それは・・・」
「それは？」
「姉上のファーストキスのことを思い出させたからじゃよ」
「っ！！／／／／／／」
ファーストキス？・・・ああ、分かれるときのことか。そこまで照

れるもんか？

「別にマウストゥーマウスってわけじゃないんだからそこまで恥ずかしくないだろ？」

さすがに唇どうしだったら照れるだろうけどな。

「アンタにとっては想かもしれないけど、女のアタシにとって、フアーストキスは大切なんだからね！」

「そうじゃぞ雅夜。女子のファーストキスはとても大切なのじゃ！」

男一（一応）の秀吉に言われてもな・・・。

「わかった、わかったから。今度なんかおごってやるからそれで許してくれ。」

「・・・ほんとうね？今自分で言ったんだからね？」

「ああ。男に二言は無い」

嘘ついたらまた間接外されそうだしな。

「そう。それだったら今は許してあげる」

今だけっすか。

「なら話はもう終わりでいいか？そろそろ暗くなってきたしな」

窓の外はだんだんと暗くなってきていた。暗くなってくると色々と危ないからな。

早めに帰らせたほうがいいだろう。

「もうそんな時間かの？」
「あら、予想以上に時間を食っちゃったわね」
「ほら、とっととしたくしろ。途中まで一緒にいってやるから」

ついでにコンビニでもよってくるか。

「そう？だったらおねがいするわ」
「秀吉も」
「・・・・・・・・・」
「秀吉？」

なんか考え事していたみたいだな？

「どうした考え事か？」
「・・・・・いや、何でもないのじゃ。気にしないでくれじゃ」
「そうか？だったら詳しく聞かないが」

秀吉が考え事なんて珍しいな。

☆

木下たちを家に送る途中

「ねぇ、浅月」
「なんだ、木下？」

「その木下ってよびかたやめてもらえる？他人行儀みたいのは嫌いなの」
「別にいいが・・・。なんて呼べばいいんだ？」
「普通に優子でいいわよ。アタシもアンタのこと雅夜ってよぶから」
女子をしたの名前でよぶのか・・・。恥ずかしくないか？
「断る。優子ってよんでたらFクラスの奴らに何されるかわかったもんじゃない」
「・・・戦争の時の約束憶えてる？『負けた方は勝ったほうの言うことを何でも聞く』って」
なんか微妙にかわってないか？
「アンタはアタシに負けてるんだからアタシの言うこと聞いてくれるわよね？」
「拒否権はないのか？」
「ないわよ。雅夜」
「・・・しかたないな。わかったよ、優子」
「うん♪」
ちょっぴり恥ずかしいな。人前では言いにくいな。
「雅夜、ここまででよいぞ。今日はありがとうなのじゃ」
「そうか？どうせだったら家まで送るけど？」
「そこまでしてもらったら、こっちが遠慮しちゃうから」
「わかった。それじゃあな」
秀吉と優子に手を振ってもと来た道を戻る。
来週からは疲れそうだな。

「・・・秀吉、アンタも気になってるの？」
「姉上もかの？」
「ええ。雅夜の話で何度か出てきた『あの時』って何のことかしらね」
「よくわからないのじゃが――」
「が？」
「雅夜は話たくなさそうじゃったの」
「そうよね・・・。それで聞きそびれちゃった訳だし」
「簡単に聞けそうにないしのう」
「どうしましょうか？」
「やっぱり話てくれるまで待つべきなのじゃろうな」
「そうね、きっとそのうち話してくれるわよね」

第３３話（後書き）

最近定期更新が出来なくなってきました（汗）
一日一話をなるべく守っていけるようにかんばって行きたいと思います。

守れなかったらすみません。

感想お待ちしております。

第３４話

「おい、ばーさん。例の約束覚えているよな？忘れたとは言わせないぞ」
「わかってるよ、クソガキ。約束通りに事が進んだらだけどさね」
「俺の計画に狂いは無い。あいつ等なら想像通りに動いてくれる筈だ」
「・・・アンタのその自信はどっから来るんだい？」
「それは企業秘密だ」
「まったく・・・。アンタは昔から全然変わっちゃいないね」
「そうか？すくなくともこの学園に入ってからは結構変わってる気がするんだが？」
「気のせいさね」
「まぁ、妖怪からみたら人なんてどれも同じに見えるだろうしな」
「・・・アンタとはじっくり話し合いする必要があるみたいだね」
「断固として拒否する」

☆

桜の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節。
俺らの通う文月学園では、新学年最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。
しかし、我らがFクラスはというと――――

「姫路、学園祭では何かしたいものでもあるかの？」
「そうですね・・・、やっぱり皆で一緒に楽しめるものがいいです」
「島田はどうじゃ？」
「ウチは特にこれといったものは無いわ。でも瑞樹の意見には賛成ね」
「そうじゃな。学園祭なのじゃから、楽しまないと損じゃ。雅夜は何かあるかの？」

秀吉がこっちに話を振ってきた。

「俺も特にないな」
「ほんとうかの？」
「ああ。」
「（この間のことはやらなくてよいのかの？）」
「（クラスでの出し物じゃない。もっと他の事だ）」
「（そうじゃったのか。てっきりクラスの出し物じゃと思っておったのじゃが・・・）」
「（そう気を落とすな）」
「アンタ達、こそこそと何はなしてるの？」
「ん？ああ、なんでもない。こっちの話だ」
「うむ。雅夜に気なることを聞いただけじゃ」
「ふ～ん・・・それならいいんだけど」
「それよりも、どうしましょうか？このままだと出し物が決まりませんよ？」

「というか、４人で決めるのに無理があるだろ？」

今教室には俺と秀吉、島田と姫路しかいなかった。
他のＦクラスメンバーはと言うと、校庭で野球をしていた。

ガラガラガラ

「どうだ？出し物は決まった・・・これはどういうことだ？」
「あ、西村さん。他の奴らなら校庭で野球でもしていると思いますよ？」
「まったく、あいつらは・・・」

西村さんは額に手をついて溜息をはく。よっぽど呆れているのだろう。

「・・・ちょっとあの馬鹿共を連れ戻してくる」
「ご苦労様です」
「あいつ等には前らを見習って欲しいものだ」
「・・・無理じゃないですか？」

それが出来たら苦労しないだろう。
そう思っているうちに西村さんは教室を出て行った。

☆

「さて、そろそろ春の『清涼祭』での出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが、とりあえず議事進行並びに実行委員として誰か任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

心のそこからどうでも良さそうな態度の雄二。興味がないからって、全部人に押し付けて寝るつもりか？

「吉井君。坂本君って学園祭はあまり好きじゃないんですか？」

話し合いの邪魔にならない程度に姫路が明久に話しかける。

「直接聞いたわけじゃないからわからないけど、楽しみにしているって事はなさそうだね。興味があるならもっと率先して動いている筈だから」

「そうなんですか・・・。寂しいです・・・・・・」

いつも明るい姫路の表情に翳りさした。

「吉井君も興味がないんですか？」

「う～ん、どうだろ？別にそこまで何かやりたいってわけじゃないしなぁ」

Ｆクラスの奴は皆そうだろうな。

「私は・・・・・吉井君と一緒に、学園祭で思い出を作りたいです」

「ほぇ？」

島田の耳が、ピクッと動いたように見えたのは気のせいか？

「その、吉井君は知っていますか・・・・・・？うちの学園祭ではとっても幸せなカップルが出来やすいって噂が――――ケホケホッ」

と、姫路が口に手を当てて咳をし始めた。大丈夫だろうか？

「大丈夫？」

「は、はい。すいません・・・・・・」

本当に大丈夫だろうか？最近良く姫路が咳している姿を見ている気がするが。

「そのうち何とかしないとなぁ・・・・・・」

次の試召戦争まではまだ二ヶ月ほどあるので、簡単にはいかない。

方法はあるにはあるが明久だったら気がつかないだろうしな。

第３４話（後書き）

バカテス第二巻始まりました。

感想お待ちしております。

第３５話

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでいいか？」
「え？ウチがやるの？う～ん・・・・・・ウチは召喚大会にでるから、ちょっと困るかな」

突然の指名に目を白黒させる島田。

「雄二。実行委員なら、美波よりも姫路さんの方が適任なんじゃない？」
「え？私ですか？」

話題をふられて姫路が小首を傾げる。

「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いてるうちにタイムアップになる」

眠たげに変事をする我らがクラス代表。
やる気がなくてもクラスのことをちゃんと考えているようだ。

「それにね、アキ。瑞樹も召喚大会にでるのよ」
「って事は、お前らでペアを組んでいるんだな？」
「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」
「へ～。学校の宣伝みたいな行事なのに。二人とも物好きだなぁ」

今年は『試召召喚システム』を世間に公開する場として、清涼祭の期間中に『試験召喚大会』という企画が催される。

「ウチは瑞樹に誘われてなんだけどね。瑞樹ってば、お父さんを見

返してやりたいって言って聞かないんだから」
「お父さんを見返す？」
「うん。家で色々言われたんだって。『Ｆクラスのことをバカにされたんです！許せません！』って怒ってるの」
「あらら。姫路さんが怒るなんて珍しいね」
「だって、皆のことを何もわかっていないくせに、Ｆクラスっ理由だけでバカにするんですよ？許せませんっ」
「・・・・・・・・・」

明久、すこしは否定しろ。

「だからＦクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

学年二位の実力をもつ姫路と、問題が読めればそれなりに点数の取れる島田が組めば、いいところまでいけるかもしれない。

「四人とも。こっちの話を続けていいか？」
「あ、ごめん雄二。美波が実行委員になる話だったよね？」
「お前はバカか？さっきの話を聞いていなかったのか？」
「だからウチは召喚大会に出るって言ってるのよ」
「なら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それなら良いだろう？」

チラッと雄二が明久を見る。明久にやらせるのだろう。

「ん～・・・・・。そうね、その副実行委員次第でやってもいいけど・・・・・」
「そうか。では、まず皆に副実行委員の候補を挙げてもらう。その中から島田が二人を選んで決選投票をしたらいいだろう」

皆もいいな、と雄二がクラスメイトに告げる。すると、ちらほらと推薦の声が聞こえてきた。

『吉井が適任だと思う』
『やはり坂本がやるべきじゃないか？』
『姫路さんと結婚したい』
『浅月もどうだ？なにかとやってくれそうだが？』
『ここは須川にやってもらった方が』
『ワシは明久が適任じゃと思うがの』

最後のは秀吉だな。

「って、秀吉。僕もそういう面倒な役は、できればパスしたいな～なんて」
「それは皆として同意見じゃ。ならば適任の者にやってもらった方がよいじゃろう？」
「むぅ・・・・・。それはそうだけど・・・・・」

ん？秀吉が後ろ手に親指を突き立てている。
その意味がわかり、俺は明久に見えない角度で秀吉にグッジョブ、と返しておく。

「よし。じゃあ島田。今挙がった連中から二人選んでくれ」
「そうね～。それじゃ・・・・・」

ある程度候補者が出てきたら雄二が島田に言い、島田はぼろぼろの黒板に名前を書いていく。

『候補者？・・・吉井』『候補者？・・・明久』

・・・知っていたとは言え、ここまでやるか普通？

「さて。この二人のどちらがいいか、選んでくれ」

「ねぇ雄二。明らかに美波の挙げ方はおかしいと思わない？」

「諦めろ明久。このクラスに常識は通用しないからな」

むしろこのクラスには新しい常識があるんだろうな。

『どうする？どっちがいいと思う？』

『そうだなぁ・・・・・・。どちらもクズには変わりないんだが・・・・・』

「こらぁっ！真面目に悩んでいるフリするんじゃない！あと、平然とクラスメイトをクズ呼ばわりするなんて、君らは人間のクズだ！」

「それは自分はクズ、だと言っているのか？」

明久の思考回路はよくわからん。

「ほらほら、アキってば。そんなことより、ウチとアンタでやることに決まったんだから、前に出て議事やらないと」

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされている気がするよ・・・」

「貧乏くじ？可愛い女子と一緒に委員をやれるんだから、むしろラッキーだろ？」

島田は貧乳だけど、結構可愛い部類に入ると思う。

「浅月、今なんかウチに失礼なこと考えていなかった？」

「さぁな？」

島田は心が読めるのか！？

「んじゃ。後は任せたぞ。ふぁ～・・・・・・」

島田たちと入れ替わりに席に戻る雄二。全身からダルいオーラが立ち上がっている。

よっぽど興味がなかったのだろう。

第３５話（後書き）

感想お待ちしております。

第３６話

「ウチは議事進行やるから、アキは板書お願いね」
「ん。了解」
「それじゃ、ちゃっちゃと決めるわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれば挙手してもらえる？」

島田が言うと数名が手を挙げた。全員がやる気がないでは無いようだ。

「はい、土屋」
「・・・・・・・・・・・・（スクッ）」

呼ばれて立ったのは寡黙なる性識者こと、土屋康太。今じゃムッツリーニという名前の方が有名かもしれない。

「・・・・・・・・・・・写真館」
「・・・・・・・土屋の言う写真館って、かなり嫌な予感がするんだけど」

島田、その心配は間違っていないと思う。
しかし、康太が撮った写真の中には風景などの写真コンテストでも上位に入ることの出来るであろう写真とかもあるので、全部が全部危険ってわけじゃない。

「アキ、一応意見だから黒板に書いてもらえる？」
「あいよー」

そういって明久が黒板に康太の案を書く。

【候補？　写真館『秘密の覗き部屋』】

名前をお前が勝手に決めるな、とツッコミたいがあえてスルーしておく。

「次。はい、横溝」

「メイド喫茶――と言いたいけど、流石に使い古されていると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」

「ウェディング喫茶？それってどういうの？」

「別に普通の喫茶店だけど、ウェイトレスがウェディングドレスを着ているんだ」

このクラスじゃ無理がないか？このクラスでウェディングドレスを着れるのって島田か姫路か秀吉（周りの奴らが男と思っているため）ぐらいしかいなくないか？

しかも島田と姫路は召喚大会にでるから、クラスにはほとんどいれないだろう。

『斬新ではあるな』

『憧れる女子も多そうだ』

『でも、ウェディングドレスって動きにくくないか？』

『調達するのも大変だぞ？』

『それに、男は嫌がらないか？人生の墓場、とか言うぐらいだしな』

横溝の意見にクラスが少しざわつく。

「ほら、アキ。今の意見を黒板に書いておいて」

「あ、うん」

【候補？　ウェディング喫茶『人生の墓場』】

・・・そんなんで客が来るのか？

「さて、他に意見は――――はい、須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

「中華喫茶？チャイナドレスでも着せようっていうの？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そういってイロモノ的な格好をして稼ごうってワケじゃない。そもそも、『食の起源は中国にある』という言葉があることからわかるように、こと『食べる』という文化に対しては中華ほど奥の深いジャンルはない。近年、ヨーロピアン文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが、本来食というものは――――」

須川にはこだわりでもあるのか？随分な熱弁なのだが。

「アキ。それじゃ、須川の意見も黒板に書いてくれる？」

「あ、うん」

明久は黒板に候補を書こうとして、動きが止まった。

「どうしたの？早く書いてよ」

「りょ、了解」

【候補？　中華喫茶『ヨーロピアン』】

俺は何も見てない。何も見ていない。

ガラガラガラ

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

そんなことを自分に言い聞かせていると、西村さんが教室に入ってきた。

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです」

島田が言うと西村さんは明久が書いた黒板に目をやった。

【候補？　写真館『秘密の覗き部屋』】
【候補？　ウェディング喫茶『人生の墓場』】
【候補？　中華喫茶『ヨーロピアン』】

あらためて見るとまともなものがない気がする。

「・・・補修の時間を倍にした方が良いかもしれんな」

俺もそうしたほうがいい気がするのはなんでだ？

『せ、先生！それは違うんです！』
『そうです！それは吉井が勝手に書いたんです！』
『僕らがバカなわけじゃありません！』

クラスの皆は補修の時間が増やされたくないから必死になって弁護する。明久を売って・・・。

「馬鹿者！みっともない言い訳はするな！」

西村さんの一喝で、思わず背筋がのびる一同。

クラスメイトを売ってその場を逃れようとする魂胆が気に入らない

のだろうか？

「先生は、バカの吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だと言っているんだ！」

「・・・・・・西村さん。皆は悪くないとはいえないけど、アンタも結構悪いだろ？」

「まったくお前達は・・・・・・。少しは真面目にやったらどうだ。稼ぎを出してクラスの設備を工場させようとか、そういった気持ちすらないのか？」

溜息まじりのセリフ。実際はそんなこと出来ないだろうが、Ｆクラスの皆を動かすには充分だろう。

『そうか！その手があったか！』

『なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ！』

予想通りに活気づく教室内。

「み、皆さんっ！頑張りましょう！」

姫路までもが立ち上がって胸の前でグーを握り、そのやる気を表現していた。

『出し物はどうする？利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？』

『いや、初期逃避の少ない写真館の方が』

『けど、それだと運営委員会の見回りで営業停止処分を受ける可能性があるぞ』

ここぞとばかりに頭を使って考えるＦクラスの皆。

『中華喫茶なら外れはないだろう』
『それだと目新しさに欠けるな。汚いせいであまり人が来ない旧校舎だと、その特徴のなさは致命傷じゃないか？』
『ウェディング喫茶はどうだ？』
『初期投質が大きすぎる。たった二日間の清涼祭じゃ儲けはでないんじゃないか』
『リスクが大きいからこそリターンも大きいはずだ』

皆がやる気にはなったのはいいが、これじゃ全然まとまらない。

「はいはい！ちょっと静かにして！」

島田が手をパンパンと叩いて注意するが、効果はあまりない。皆がそれぞれ好きなことを言い始めている。

『お化け屋敷とかの方が受けると思う』
『簡単なカジノを作ろう』
『焼きとうもろこしを売ろう』

どんどん意見がバラバラになっていく。試召戦争の時の様なまとまりが全く見れない。

「・・・・・まったく・・・・・・・・・・坂本・・・・・・・・・まとまりが・・・・・・・」
「・・・・・・無理だ・・・・・・・・・・・・・興味の無い・・・・・・・・・冷たい・・・・・」

島田と明久が話しあっているが周りが五月蠅くてよく聞こえない。

「もうっ。とにかく静かにして！決まりそうに無いから、店はさっき挙がった候補の中から選ぶからね！」

業を煮やした島田が無理矢理話をまとめに入った。正しい判断だろう。

「ほらっ！ブーブー言わないの！この三つの中から一つだけ選んで手を挙げること！いいわね！」

反論を眼力で押さえ込み、決を採りにかかる島田。こういった役は姫路や明久ではできないだろう。雄二の人選もデタラメってわけではなかったのだろう。

「それじゃ、写真館に賛成の人！――――――はい、次はウェディング喫茶！――――――最後、中華喫茶！」

クラスの中に島田の声が響く。しかし、それでも喧騒はなかなか収まりそうにない。

騒がしい中、島田は挙げられた手の本数をカウントし始める。

結果は・・・

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員協力するように！」

接戦だったが僅差で中華喫茶が勝利を収めた。妥当なところだろう。

第３６話（後書き）

感想お待ちしております。

第37話（前書き）

またもや風邪を引いていました貴雅です。

身体弱いなぁ～、俺。

第37話

「それじゃあ、まずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は――――」
「お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」
島田の言葉に須川が立ち上がる。須川は中華が好きなのか？
「・・・・・・・・・・・・（スクッ）」
と、康太が立ち上がる。
「ムッツリーニ、料理なんか出来るの？」
「・・・・・・・・・・・紳士の嗜み」
料理の腕前を明久が聞くが、康太は問題ないかのようにそう答えた。
「そう、わかったわ。厨房班は須川と土屋のところ、ホール班はアキのところに集まって！」
明久はいつの間にかホール班のトップにされていた。
「それじゃ、私は厨房班に――――」
「ダメだ姫路さん！キミはホール班じゃないと！」
平然と厨房班に入ろうとした姫路を明久が止める。きっと姫路の料理を食べたからだろう。
その破壊力を知っている康太が明久にグッジョブ！と、アイコンタクを送っている。一番の被害者であった雄二は寝ているから気がつ

いていない――――はずだが、小刻みに震えているのは気のせいか？

「え？吉井君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

自覚のない必殺料理人が首をかしげる。

「あ、えーっと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんに接していたほうがお店として利益が痛あ゛っ！み、美波！僕の背中はサンドバックじゃないよ！？」

「落ち着けよ島田。明久の馬鹿は今に始まったことじゃないだろ？」

「それでもよっ！」

「か、可愛いだなんて・・・・・。吉井君がそう言うなら、ホールでも頑張りますねっ♪」

「いや、ホールだけで頑張ってくれ。専門の方がやり易いからな」

「アキ。ウチは厨房にしようかな～？」

「うん。適任だと思う」

「・・・・・・・・・」

ああ・・・なんて馬鹿なことを。

「それなら、ワシも厨房にしようかの」

「秀吉、何をバカなことを言っているのさ。そんなんに可愛いんだから、もちろんホールに決まってみぎゃあぁっ！み、美波様！折れます！腰骨が！命に関わる大事な骨が！雅夜、助けて！」

「島田、もうちょっと左だ」

「こう？」

「ふぎゃあぁっ！」

「雅夜、明久を助けなくてよかったのか？」

「明久が悪いから問題ない」

助ける必要がない。

「・・・・・ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね・・・・・・。それが、いいと、思います・・・・・」

「こんなドタバタなスタートでいいんじゃろうか？」

「いいんじゃね？Ｆクラスだし」

「そうじゃな」

☆

「雅夜、雄二何処にいるか知らない？」

「雄二だったら霧島に追い掛け回されているんじゃないか？」

「そうみたいなんだけど、どこかに隠れてるみたいなんだよ」

「俺は知らん。けど、お前ならだいたいはわかってるんじゃないのか？」

「だいたいはわかるけどね・・・」

「ならそこに居るんだろう。自信を持て」

「・・・うん、そうだね」

「それじゃあな。俺はちょっと用があるんでな」

「そう、じゃあね」

☆

「もしもし、優子か？今暇か？」
『暇じゃないわよ。学園祭の準備でいそがしいわ』
「すぐ終わるからさ。お前にしか頼めないことなんだよ」
『アタシにしか？・・・なにをすればいいのかしら？』
「簡単だ。体操着を着て、体育館の更衣室に行くだけでいい」
『・・・・・アタシに何をさせたいのよ？』
「大丈夫だって。行けばわかる」
『・・・何時頃行けばいいの？』
「もう行ってくれても構わない。あぁ、あせらなくてもいいぞ」
『そう、わかったわ』
「ああ。頼まれてくれてありがとう」

ピッ

「これでよし、っと」

そう言いながら携帯をポケットにしまい、体育館に向かって歩き出す。

☆

『先生！覗きです！変態です！』
『逃げるぞ明久！』
『了解！』

優子に更衣室を覗いてもらい、中に居る雄二と明久を見つけてもらう。

『吉井と坂本だと！？またアイツらかっ！』

遠くから西村さんの怒鳴り声が聞こえる。どれだけの地獄耳なのだろう。
いや、そんなことよりも・・・

「雅夜～、これはどういうことかしら？」

こっちのいい笑顔をした優子をどうにかしないとな。

「更衣室にいる変態を捕まえる為に協力してもらっただけだ」

とりあえずこれは本当のことだ。

「へ～。なんでそんなことわかったの？」
「それは、あれだ。未来の情報屋での情報にあったんだ」
「未来の情報屋？何よそれ」
「未来で起こる出来事を教えてくれるんだ」
「それだったらこの後、何が起こるか解る？」

この後のこと？

「さぁ？そこまでは知らないな」
「それだったら教えてあげる♪」

そう言って、俺の腕をとる優・・・子？
えーっと、アレか？

「・・・俺が悲鳴をあげるパターン？」
「正解♪」

ゴキュン

「ぎゃぁあああああああっ！！！」

第３７話（後書き）

病み上がりなのでおかしなところがあったらご指摘お願いします（ペコッ）

感想お待ちしております。

第３８話

「イテテテテ・・・。ったく、優子は」

優子の関節技をくらって数分後、ダメージが回復してやっと動けるようになった。

優子は俺に関節技を食らわせると、Ａクラスの準備があるのか早々に校舎に戻っていった。

「外では優等生の仮面を被ってるんじゃなかったのか・・・？」

外―（学校など人の目がある場所）では優等生の仮面を被っていて、中―（家など人の目を気にしなくてもよい場所）では超が付くほどのグウタラだった気がする。

（ま、いっか。それより今日の予定はもうないよな？）

そう思い、ケータイの予定表を見ようとしてケータイを開くと着信履歴が一件あった。

だれからだ？と、疑問を感じながら履歴を見ると『ばーさん』と・・・。

「よしっ。今日の予定はもうないな」

履歴を見なかったことにして、帰ることにする。

☆

カタカタカタカタ　カチッカチッ　バンッ

「これでよし、っと」

明日は清涼祭一日目。
完成予定が少し遅れてしまったが、締め切りまでには間に合ったようだ。

「不具合は・・・・・特にないな」

出来上がった【作品】を見直してみるが、特に問題はないようだ。

「一応、ばーさんにも連絡しておくか？」

側においてあった携帯をとり、ばーさんに連絡をとる。

プルルルルッ　プルルルルッ　プルッ　ガチャ

「お、ばーさんか？」
『なんだい、クソガキ』
「例の奴、出来上がったから一応報告をな」
『ふむ・・・・・。不具合をあったかい？』
「ねーよ。アンタが作った【白金】と一緒にするな」
『・・・わかっていたなら、こっちの腕輪の修理を手伝いな』

「めんどい。それじゃ、約束どおりやらせてもらうぞ」
『はぁ・・・・・・。こっちにも利益があるから止める必要もないしね』
「だったら最初っからやらせろよ」
『そいつは却下だね』
「・・・・・・・・頑固ババアが（ボソッ）」
『なんか言ったかい？』
「なんも言ってねぇよ。じゃあな、ばーさん」
『それじゃあね、クソガキ』

ピッ

これで学園長の許可も取ったことだし、これで明後日の準備は整った。
あとは・・・

「あの馬鹿共がちゃんと動いてくれれば・・・・・・だな」

もう賽は投げられた。後はあいつらの動きしだいだ。

「さぁ、祭りを始めようじゃないか。楽しい楽しい祭りをな！！」

第３８話（後書き）

雅夜ってこんなキャラだっけ？
なんだか雅夜のキャラが変わってきてるような・・・？

感想お待ちしております。

第３９話

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」
「ホント、いつもはただのバカなのにね」
「それは褒めているのか？それとも貶しているのか？」

清涼祭の朝。
俺らの教室はいつもの小汚い様相を一転して、中華風の喫茶店に姿を変えていた。

「このテーブルなんて、パッと見は本物と区別がつかないよ」

教室内のいたるところに設置されてるテーブル。実はこれ、俺らがいつも使っているみかん箱だったりする。上手く積み重ねて綺麗なクロスをかけることで、汚い箱は立派なテーブルに変身していた。

「あ、それは木下君が作ってくれたんですよ。どこからか綺麗なクロスを持ってきて、こう手際よくテキパキと」

尊敬の目で秀吉を見る姫路。
この綺麗なクロスは演劇用の小道具らしいようだ。

「ま、見かけはそれなりのものになったがの。その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

秀吉がクロスを捲る。すると、その下には見慣れた汚い箱が。

「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

島田が覗き込んで言う。確かにその通りだろう。

「きっと大丈夫だよ。こんなところまで見ないだろうし、見たとしてもその人の胸の内にしまっておいてもらえるさ」

「そうですね。わざわざクロスを剥がしてアピールするような人なんて来ませんよ、きっと」

「・・・・・・それが来ちまうんだよな、これが」

営業妨害が目的の常夏野郎共が。

「ん？雅夜、なんか言った？」

「いや、なんでもない。気にしないでくれ」

教えてもいい事かも知れないけど、俺は《原作に関わりそうなことはあまり教えない》ということにしているので、言わないでおく。

「室内の装飾も綺麗だし、これならうまくいくよね？」

「まぁ、学園祭のレベルとしてはなかなかの完成度だしな」

転生前の高校では、もっと質素なものだったきがする。

「・・・・・・・・・飲茶も完璧」

「おわっ」

「うるさいぞ明久。康太が出てきた程度でいちいち驚くな」

存在感をまったく感じさせないで現れた康太。毎度のことなので俺はもう慣れてしまったが、明久は未だに驚いていた。

「ムッツリーニ、厨房の方もオーケー？」

「・・・・・・・・・味見用」

そういって康太が差し出したのは、気のお盆。上には陶器のティーセットと胡麻団子がのっていた。

「わぁ・・・・・。美味しそう・・・」

「土屋、これウチらが食べちゃってもいいの？」

「・・・・・・・・・・（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

姫路、島田、秀吉の三人が手を伸ばし、作りたてで温かい胡麻団子を勢いよく頬張る。

「お、美味しいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう」

と、大絶賛。確かに、康太が完璧と言えるほどのものなのだろう。

「お茶も美味しいです。幸せ・・・・・・」

「本当ね～・・・」

姫路と島田の目がトロンと垂れる。トリップ状態におちいったようだ。そんなに美味しいのか？

「それじゃ、僕も貰おうかな」

「・・・・・・・・・・（コクコク）」

明久は残りの一つを康太から受け取り、一口だけ頬張る。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても――――んゴパッ」

明久の口からありえない音がでた。団子を食っただけでどうしてこうなるんだ?

「あ、それはさっき姫路がつくったものじゃな」

「・・・・・・・・・・!!(グイグイ!)」

「む、ムッツリーニ!どうしてそんなに怯えた様子で胡麻団子を僕の口に押し込もうとするの!?無理だよ!食べられないよ!」

「秀吉、これが姫路の料理だ」

「・・・あのときは本当にありがとうなのじゃ」

秀吉が明久たちの必死のやり取りに恐怖を覚え、俺がこれが姫路の実力だと教えると前に助けたときのお礼をまたされた。

「うーっす。戻ってきたぞー」

と、そんなところで雄二が戻ってきた。

「あ、雄二。おかえり」

「ん?なんだ、美味しそうじゃないか。どれどれ?」

そして、躊躇いもなく明久の食べかけのバイオ兵器を口に運ぶ。

「・・・・・・たいした男じゃ」

「雄二。きみは今、最高に輝いているよ」

「安らかに逝け、雄二」

「?お前らは何を言っているのかわからんが・・・・・・。ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ、甘すぎず、辛すぎ

る味わいがとっても――――んゴパッ」

ここにまた、一輪の花が散った・・・。

第３９話（後書き）

秀吉は未だに姫路の料理（地獄への招待状）を食べていません。
けれども、雅夜から聞いた内容と、明久たちの必死のやり取りからどれだけのものなのかわかってしまい、軽くトラウマになっています。

ま、想像以上のものなんですけどね（笑）

感想お待ちしております。

第４０話

「あー、雄二。とっても美味しかったよね？」

床に倒れ伏した雄二に、明久が聞いた。

目で『これは姫路さんの料理だよ。まさか酷いことなんて言わないよね？』と訴えているように見えるのは気のせいだろうか？

「ふっ。何の問題も無い」

床に突っ伏したままで、雄二が答えた。

「あの川を渡ればいいんだろう？」

それは三途の川だ。

「ゆ、雄二！その川はダメだ！渡ったら戻れなくなっちゃう！」

「・・・・・明久より頑丈な雄二がなぜ、明久よりダメージを食らっているんだ？」

明久はすぐに戻ってきていた筈だが？

「え？あれ？坂本君はどうかしたんですか？」

成功作である胡麻団子で夢心地になっていた姫路が、ようやくこっちの様子に気が付く。

「あ、ホントだ。坂本、大丈夫？」

島田もいままでトリップしていたようだ。ウチの胡麻団子は食べたらトリップできるようだ。二つの意味で。

「大丈夫だよ。ちょっと足が攣っただけみたいだから。おーい、ゆーじー、おきろー」

おどけた口調で明久が雄二に語りかける。手では必死に心臓マッサージをしているが。

「六万だと？バカを言え。普通渡し賃は六文だと相場が決まって――――――はっ！！」

どうやら蘇生が成功したようだ。・・・・・普通出来るか？

「雄二、足が攣ったんだよね？」

「足が攣った？バカなことを言うな！あれは明らかにあの団子の――――足が攣ったんだ。運動不足だからな」

珍しいな、明久が雄二を脅すなんて。

「ふーん。坂本ってよく足が攣るのね？」

「ほら、雄二って余計な脂肪がついてないでしょう？そういう身体って、筋が攣りやすいんだよ。美波も胸がよく攣るからわかるとぐべぁっ！」

「・・・・・俺が手を下すまでもなかったな」

「明久はいつも一言多いからな」

その一言でいつもバカなことになっているというのに。

「とこれで、雄二はどこにいっておったのじゃ？」

秀吉が明久を呆れながら、話題をそらす。

「ああ、ちょっと話し合いにな」

ばーさんから聞いていた通りに、科目の指定をしていたのだろう。

「そうですか～。それはお疲れ様でした」

人をまったく疑わない姫路はその言葉を信じて笑みを贈る。

「いやいや。気にするな。それより、喫茶店はいつでもいけるな？」

まあ、姫路たちも策に貶めるからな。

「バッチリじゃ」

「・・・・・・・・・お茶と飲茶も大丈夫」

姫路のが混ざっていなければな。

「よし。少しの間、喫茶店は秀吉とムッツリーニと雅夜に任せる。俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

そういって俺達に目配せをする。

「あれ？アンタたちも召喚大会に出るの？」

「え？あ、うん。色々あってね」

ばーさんとの交渉のことだろう。

「もしかして、賞品が目的とか・・・？」
「う～ん。一応そういうことになるのかな」
明久、その答え方は間違えたな。
「・・・・・誰と行くつもり？」
「ほぇ？」
島田の目が攻撃色にそまった。どこの戦闘人だよ！
「吉井君。私も知りたいです。誰と行こうと思っていたんですか？」
気が付けば姫路も戦闘モード。
「だ、だれと行くって言われても・・・・・・」
ばーさんと交換するから、特に決めていなかったのだろう。
「明久は俺と行くつもりなんだ」
答えに詰まっている明久に雄二のフォローが入る。
「え？坂本とペアチケットで、『幸せになりに』行くの・・・・・・？」
これが本当なら、こいつらとは縁を切りたい。
「俺は何度も断っているんだがな」
もうだめだ・・・。切りたい。

「アキ。アンタやっぱり、木下よりも坂本の方が・・・・・・」
「ちょっと待って！その『やっぱり』って言葉は凄く引っかかる！それと秀吉！少しでも寂しそうな表情をしないでよ！雅夜も！目をそらさないでよ！」
「話しかけるな、ホモ野郎」
「誤解だよ！」

とりあえず、しばらくは話したくはないな。

「吉井君。男の子なんだすから、できれば女の子に興味を持ったほうが・・・・・・」
「それができれば、明久だって苦労はしてないさ」
「雄二、もっともらしくそんなことを言わないで！全然フォローになっていないから！」
「秀吉、康太。あっち行こうぜ。こんなののそばに居たら危ない」
「だから、誤解だから！」

秀吉と康太にも声をかける。この二人も女装したら結構可愛い部類にはいるからだ。

「っと、そろそろ時間だ。行くぞ明久」
「・・・・・・くっ！と、とにかく、誤解だからね！」

まるで小悪党の捨て台詞のように弁明し、明久と雄二は教室を後にした。

第４０話（後書き）

この世界の男達は（明久、秀吉、康太）の三人はどうして女装が似合うのですかね？

感想お待ちしております。

バカテスト？第４問目

清涼祭アンケート

第一問　学園祭の出し物を決めるためのアンケートにご協力ください。

『あなたが今欲しいものはなんですか？』

姫路瑞樹の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物がいいかも知れませんね。写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Ｈな本（訂正）　成人向けの写真集』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか。

吉井明久の答え
『カロリー』

教師のコメント
この回答に君の生命の危機が感じられます。

浅月雅夜の答え
『一大スペクタル！』

教師のコメント
浅月君はお祭りが好きなようですね。お客様の心に刻むような、すごい出し物が良さそうですね。

第二問　学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。
『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか？』

姫路瑞樹の答え
『家庭用のエプロン』

教師のコメント
いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

浅月雅夜の答え
『ネコミミ！　祭りといったらこれでしょ！』

教師のコメント
祭りとネコミミの関係性がわかりません。

土屋康太の答え
『スカートは膝上１５センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品をたもつ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいのものを用意し裏にはロゴを入れる。靴は５センチ程度のヒールを――――――』

教師のコメント
裏面までびっしりと書き込まなくても。

吉井明久のコメント
『ブラジャー』

教師のコメント
ブレザーの間違いだと信じています。

第三問　学園祭の出し物を決めるアンケートにご協力ください。
『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？
【？可愛らしさ　？統率力　？行動力　？その他（　　）
また、そのときのリーダーの候補も挙げてください
』

土屋康太の答え
『【？可愛らしさ】　候補・・・・・・姫路瑞樹&島田美波』

教師のコメント
甲乙がたいといったところでしょうかね。

吉井明久の答え
『【？可愛らしさ】　候補・・・・・・姫路瑞樹（訂正）、木下秀吉（訂正）、島田美波』

教師のコメント
用紙に付いている血痕がきになるところです。

浅月雅夜の答え

『【?統率力】　候補・・・・・・坂本雄二、木下優子』

教師のコメント
確かにリーダーには必要かも知れませんね。

坂本雄二の答え
『【?その他（結婚相手）】　候補・・・・・・霧島翔子】

教師のコメント
どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか?

バカテスト？第４問目（後書き）

・・・・・だんだんと雅夜のイメージが崩れてきているような気がしますね（汗）

まぁ、気にしないでおきましょう。

感想お待ちしております。

第４１話

「じゃ、俺達もやるとしますか」
「・・・・・・・・・・厨房はまかせておけ」
「ホールはワシに任せておくのじゃ」
「ああ、両方とも任せたぞ」

ホールは秀吉に任せて大丈夫だろう。なにせ、演劇部のポープだしな。

「そういえば、雅夜はどっちをするのじゃ？」
「厨房・・・と言いたいところだが、あいにくばーさんに呼び出しをくらっていてな。こっちの手伝いがあまり出来そうにない」
「ばーさん、じゃと？」
「学園長室にいる妖怪のことだ」
「・・・学園長じゃろ」

そうとも言う。

「俺はこっちの手伝いが出来ないからな、俺の代わりと言っちゃあなんだが戦力になる奴を連れて来ておいた」
「・・・・・・・・・雅夜の代わり？」
「ああ。客寄せにおいてはクラス、いや学年最高を誇れるつわものだ」
「雅夜がそこまで言うとは・・・。いったいどれほどのものなのじゃ」

過大評価しすぎかもしれないが。

「まぁ、見てくれたらわかるだろう。こいつだ」

そう言いながら鞄を開けて、中に入れてきた『コイツ』を出す。

ニャー　ドスッ　バタッ！

「痛ってぇえ！」

「おお！カノン君ではないか！」

「・・・・・・・・・確かに客寄せには使えるかもしれない」

また、俺への心配はなしっすか！？

「カノンには今日一日、秀吉に付いていてもらう。頼んだぞ秀吉」

「うむ！お安い御用じゃ！」

「カノン。今日はコイツの頭の上で大人しくしていろよ？」

「ニャー」

どうやらカノンの方も大丈夫のようだ。

「カノン。おいでなのじゃ」

「ニャー！（スタッ）」

「おお！お主、結構身軽じゃの！！」

「ニー！！」

二人とも相性は良い様だ。

「康太。ちゃんと写真撮れよ」

「・・・・・・・・・わかっている（パシャパシャパシャ）」

「客にカノンとの写真をお土産に渡しておけば、いい思い出になる」

「・・・・・・・・・手配しておく」

「頼んだぞ」
「・・・・・・・・・・（コクリ）」

良い写真が出来そうだな。

「じゃあ、俺はもう行くな。カノン、大人しくしてろよ」
「カノンは良い子なのじゃから大丈夫じゃ」
「ニー！」
「そうか。後は頼んだぞ」

俺はそういって、教室を出てばーさんのところに向かう。

『さっきの決着をつけるぞクソ野郎！』
『それはこっちの台詞だよバカ野郎！』

途中、ウチのバカと代表が争ってる声が聞こえたけど気のせいだろう。
いや、気のせいだと信じたい。

～学園長室～

「おい、ばーさん。来てやったぞ」
「遅かったね、クソガキ」

「ったく・・・。学園祭なんだから、すこしはこっちの身を考えろ」
「ふんっ、知ったこっちゃないね。それよりもこっちの話さね」

まがりなりにも学園長だろ!?

「ああ。俺が作った『腕輪』だろ?」
「そうさね。調べたところアンタの言ったとおり、欠点はないみたいだね」
「そういったろ?アンタのとは違うってな」
「・・・現状、『白金』は平均点程度で壊れてしまうかもしれないからね。アンタのところのバカ共に賭けてるけど、成功するかどうか・・・・・・・・・・・・心配さね」

心配?

「成功するさ。なんたって『観察処分者』と『A級戦犯』だぞ?あのコンビは最強だ」
「そうだといいんだけどねぇ・・・」

わかってないな、あいつらの強さを。

「まだ信じきれない、と?」
「まぁね。バカには変わりはないしね」

やっぱりコイツはアイツラのことを良くわかっていない。

「バカはアンタだ、ばーさん。あいつらは必ず成功させる。アンタはアイツ等の強さを何もわかっちゃいねぇ。『バカ』だと?『バカ』がどうした。あいつらの『バカ』はな、強い武器になるんだよ。他の『バカ』と一緒にするな」

「・・・・・・・・・・」

・・・言ってて恥ずかしいな、これ。

第４１話（後書き）

学園祭にカノン君登場！
猫って最高の癒しですよね？

感想お待ちしております。

第４２話

～ｓｉｄｅ　明久～

「吉井に坂本。殴り合いなんてしてないで、急いで教室にきてくれ」

相棒と友情を確認し合っていると、校庭の特設ステージに須川君がやってきた。少し息が弾んでいるところを見ると、急いでいるみたいだ。

「あれ？喫茶店でなにかあったの？」

「ああ。ちょっと面倒な客が来てな。すまんが話は歩きながらで頼む」

「あ、うん。了解」

先を急ぐ須川君に続く雄二と僕。どうやらとらぶる発生と見て間違いなさそうだ。

「・・・・・・営業妨害か？」

歩いている雄二の目が細くなる。学園長のところに行った時と同じ目つきだ。何か思うところがあるのだろうか。

「あはは、まさか。学園祭の出店程度で営業妨害なんて出てこないんじゃない？そんな真似をしたところで何のメリットもないと思うよ」

せいぜい僕らが大会に集中できなくなるとか、そういった程度だ。

「いや、それが坂本のいったとおりなんだ」

須川君の顔が歪む。まさか本当に営業妨害？

「そうか。相手はどこのどいつだ？」

「うちの学校の三年だ」

しかもよりによって三年生か。まったく、生徒の中では一番のおとなのくせに。

「雅夜はどうした？あいつがいれば問題ないだろ」

「それが学園長に呼び出しをくらった、とか言って教室にはいない」

「・・・・・・・・・・・・・」

あ、雄二の目がまた細くなった。雅夜がきになるのだろうか？

「でも、そういうトラブルなら雄二にお任せだね。チンピラにはチンピラを充てるのが一番だよ」

実際に雄二は腕っ節も強いし、こういうことにはうってつけだ。

「・・・それが人にものを頼む態度か？・・・・・・まぁいい。喫茶店がうまくいかなければ、明久の大好きな姫路が転校してしまうからな。協力してやろう」

「べっ！別にそんなことは一言も・・・・・・！」

「あー。わかったわかった」

「その態度は全然わかってない！」

再三に渡ってからかってくる雄二に文句を言いながら歩く。すると、教室近くとはいえ、廊下にまで響く大声が聞こえてきた。

「お。あの連中だ」
「じゃ、ちょっくら始末してくるか」

首をコキコキと鳴らしながら教室の扉に手をかける雄二。こいったことには滅法強いよなぁ。

「まじできったねぇ机だな！これで食い物を扱っていいのかよ！」

雄二が扉を開けるなり耳に飛び込んできた罵声。どうらやクロスで覆い隠していたみかん箱がお気に召さなかったらしく、クロスを剥がして文句を言っていた。なるほど。絵に描いたようなチンピラだ。

『うわ・・・・・確かに酷いな・・・』
『クロスで誤魔化していたみたいだな』
『学園祭とは言っても、一応食べ物のお店なのに・・・』

その様子を見ていたお客さんが口々につぶやく。まずい。喫茶店でこの悪評はかなりの痛手だ。

「雄二、早くなんとかしないと経営に響くよ」
「そうだな・・・・・。須川、ちょっと来てくれ」
「？なんだ？」
「至急用意してきて欲しいものがあるんだ」

須川君に耳打ちをする。

「秀吉に聞いてみないと詳しくはわからんが・・・・・あっても

二つ程度だった気がするぞ？」
「それで充分だ。その後はまた他から調達してくるさ」
「了解だ。すぐに戻る」

そういって秀吉に声をかけた後に、教室内のクラスメイト数名に声をかけて須川君は足早に去って行った。

「明久。お前はあの小悪党どもの特徴をよく覚えておけ」
「？よくわからないけど、了解」

あとで報復でもするつもりなんだろうか。とりあえず言われたとおりに相手の特徴を覚えておこう。
営業妨害をしているのは二人。いずれも男だ。片方は中肉中背の一般的な体格と小さなモヒカンという非一般的な髪型をしている。
もう一方も１７５センチぐらいの普通の体格で、こちらは丸坊主だ。
なんとも憶えやすい髪型の二人だなぁ。

第４２話（後書き）

更新遅れてすみません（涙）

テストが近く、大変でして（汗）

感想お待ちしております。

第４３話

「まったく、責任者はいないのか！このクラスの代表ゴペッ！」
「私が代表の坂本雄二です。何かご不満な点でも御座いましたか？」
ホテルのウェイターのように恭しく頭を下げる雄二。話しかける前に相手を殴り飛ばしていなければ、まるで模範的な責任者だ。
「不満も何も、今連れが殴り飛ばされたんだが・・・・・・」
殴られていないソフトモヒカンの男が驚いている。無理もない。僕だっていきなり友達が殴り飛ばされたら驚くだろう。
「それは私のモットーの『パンチから始まる交渉術』に対する冒涜ですか？」
凄い交渉術だ。
「ふ、ふざけるなよこの野郎・・・・・・！なにが交渉術ふぎゃあっ！」
「そして『キックでつなぐ交渉術』です。最後には『プロレス技で締める交渉術』が待っていますので」
「わ、わかった！こちらは夏川を交渉に出そう！俺は何もしないから交渉は不要だぞ！」
「ちょ、ちょっと待てや常村！お前、俺を売ろうと言うのか！？」
慌てているのは坊主頭の夏川と呼ばれた男。憶えにくいから、『夏坊主、常モヒカン』で憶えよう。

「それで常夏コンビとやら。まだ交渉を続けるのか？」

あ、雄二の仮面が外れた。どうやら慇懃な態度はあまり継続しないみたいだ。

それにしても、常夏コンビとは上手い命名だ。座布団一枚。

「い、いや、もう充分だ。退散させてもらう」

常村（モヒカン）先輩が雄二の剣呑な雰囲気を感じ取って撤退を選ぶ。賢明な判断だ。

「そうか。それなら――――」

大きく頷いた後、夏川一（坊主頭）先輩の腰を抱え込む雄二。

「おいっ！俺はもう何もしていないよな！どうしてそんな大技をげぶるぁっ！」

「――――これにて交渉は終了だ」

バックドロップを決めて平然と立ち上がる。できればあの交渉術は門外不出であって欲しい。

「お、覚えてろよっ！」

倒れた相方を抱えて走り去っていくモヒカン先輩。これで問題は片付いた。

『流石にこれじゃ、食っていく気はしないな』

『折角美味しそうだったんだけどね』

『食ったら腹壊しそうだからなぁ』

――――というわけにはいかなかった。
クロスの中を目の当たりにし、ガタリ、音を立てて一人目が席を立つ。あれは教頭の竹原先生か。うちのクラスに来てくれていたのか。こういって催し物が好きそうには見えなかったけどなぁ。

『店、変えるか』
『そうしようか』
「あ、お客さん！」

一人目が席を立つと、次々とお客さんが席を立ってしまう。集団心理ってやつだろう。こうなると悪評は風に乗るように学校中に広がってしまう。

「失礼しました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れていたので、暫定的にこのような物を使ってしまいました。ですが、たった今本物のテーブルが届きましたのでご安心ください」

そんなお客さんたちに頭を下げる雄二。その後ろには、Ｆクラスの男子数名が立派なテーブルを運んでくる姿がある。
あれは・・・演劇部で使っている大道具のテーブルか。なるほど。こうしたらお客さんの目の前できちんと衛生面を改善した姿を見せられる。雄二も一応風評について考えていたみたいだ。

「あれ？テーブル入れ替えているの？」

そんな時、後ろから女子の声が聞こえてきた。

「あ、おかえり。美波に姫路さん。一回戦はどうだった？」
「はいっ。なんとか勝てました」

姫路さんがVサインをしている。そんなに勝負にこだわる性格じゃなかったと思うけど、今回は場合が場合だ。勝ちにこだわるのも当然だろう。

「そんなことより、テーブル入れ替えちゃってもいいの？演劇部にあるテーブルなんて、そこまで多くないでしょ？」

美波の指摘ももっともだ。さっきも須川君が二つ程度しかないと言ってたし、かといって残りのテーブルをそのままというわけにもいかないし・・・・・・。

「大丈夫だ。雄二にちゃんと考えがあるからな」

「ふ～ん。それなら大丈夫そうだね。・・・・・・って、雅夜！？」

なんで、雅夜がここに！？学園長に呼び出しくらってたんじゃなかったっけ？

「なんだ、その『なんで、ここにいるんだ！？』みたいな顔をして」

心が読まれてる！？

「だって、学園長に呼び出しくらってたんじゃなかったの？」

「疲れたから休憩しにきたんだ。カノンの様子も気になったしな」

「「カノン？」」

姫路さんと美波が雅夜に聞き返す。そうか。二人はカノンのこと知らないのか。

「雅夜の家で飼ってる猫のことだよ。・・・って、雅夜連れてきた

の！？」
「ああ。利益になると思ってな。今は秀吉についてると思うぞ？」
カノンを連れて来たんだ。確かにカノンが居れば猫好きが沢山きそうだもんね。
「なんじゃ？ワシのことを呼んだかの？」
「ニャー」
話題に上がっていた秀吉がカノンを連れてやってきた。
「秀吉、カノンはどうだった？」
「いい子じゃぞ。ひと懐っこくて、女性客に人気者じゃ」
「そうか。予想通りだな」
「カノン、久し振り」
「ニャー！」
ひさびさにカノンに会った気がする。前あったのはいつだっけ？
「「・・・・・・・・・か」」
「ん？どうしたの二人と「「かわいいですぅーーっ！！」」ぅお！！」
おかしい。二人の動きが見えなかった気がする。
気が付いたら秀吉の頭の上に居た筈のカノンが美波と姫路さんに抱きかかえやらている。
「って、早っ！！いつの間にカノンを取ったの！？」
「俺ですら見えなかったぞ！？」

となりの雅夜も驚いている。さすがにここまでの速さは予想外だったみたいだ。

「「はうぅぅぅ。かわいいですぅ」」

姫路さんだけじゃなく、美波までトリップしている。姫路さんならわかるけど、美波までトリップするなんて、カノン凄すぎでしょ。

「ニ、ニャー！！」

あ、やばい。カノンが助けをもとめてる。

「姫路に島田、返すのじゃ！！カノンが大変な目にあっておるのじゃ！！」

「「あ・・・・・・」」

そういって、秀吉が二人の胸に手を突っ込んでカノンを救出する。どうでもいいんだけど、普段は自分は男っていってるけどどうして女子の胸に平気で手を突っ込めるんだ？

「カノン、大丈夫だったかの？」

「ニャー！」

よほど苦しかったのだろう。

美波ならともかく、猫の大きさで姫路さんに抱かれると胸に埋まっちゃって息ができそうにないからね。やばい、そんなこと考えていたから鼻血がでそう。

「アキ。ウチに失礼なこと考えなかった？」

「滅相も御座いません」

まか心が読まれた。そんなに顔に出やすいかな?

「それでは、他のテーブルも届き次第順次入れ替えさせて頂きますので、ご利用中のお客様はひとまずこちらのテーブルにお移りの上、ごゆっくりとおくつろぎください」

そう締めて、雄二が僕等のいる廊下に戻ってきた。

「ふぅ。こんなところか」

小さく息をつく。慣れない丁寧語に疲れたのかもしれない。

第４３話（後書き）

皆さんは犬と猫、どっち派ですか？

私は断然、猫はです。

感想お待ちしております。

第４４話

～ｓｉｄｅ雅夜～

「お疲れ、雄二」
「何があったのかわからないけど、お疲れ様」
「お疲れ様です」
「お疲れ様だ、雄二」
「おう。姫路に島田、それと雅夜か。その様子だと姫路たちは勝ったみたいだな」

口ではそういいながらも、二人の勝敗をまったく気にしていない様子。やっぱり二人なら勝てると確信しているんだろうな。

「一応ね。それより、喫茶店は大丈夫なの？」
「まぁ、まだ大丈夫だ――」
「このまま何も妨害がなければ問題ない」

雄二が俺のセリフの後を引き継いだ。頭の回るこいつのことだ、ある程度のことは予想しているのだろう。

「あの、持ってくるテーブルは足りるんですか？」
「ああ、それか。そうだな・・・・・・。明久、二回戦まであとどれくらい時間がある？」

二回戦は確か、十一時開始だった気がするから・・・

「小一時間ってところかな」
「そうか。あまり時間がないな・・・・・・。ちゃっちゃと行くか。

明久、雅夜、付いて来い」

雄二が俺と明久に向かってクイクイ、と指を動かす。

「ウチらは手伝わなくてもいいの？」

指名を受けなかった島田が尋ねる。こういった心遣いは、嬉しいもんだな。

「お前らは喫茶店でウェイトレスをやっていてくれ。落ちた評判を取り戻す為に、笑顔で愛想よく、な」

「はいっ！頑張りますっ！」

姫路も当然やる気充分。

「おい明久に雅夜。行くぞ」

「あ、うん。でもどこに行くのさ？」

「・・・さっきまでの会話を聞いてたらわかるだろ」

雄二は悪そうに口の端を吊り上げて、俺は明久に呆れながら。

「「テーブル調達だ」」

笑みを浮かべた。

☆

「吉井君に坂本君に浅月君！今日という今日は、許しませんよ！」
「明久に雅夜、走れ！捕まったら生徒指導室行きだぞ！」
「鉄人の根城！？冗談じゃない！」
「くっちゃべってないで、走れ！」

布施先生に追われながら、俺達は必死に廊下を走っていた。
何故走っているのか？それはそこに廊下があるから――――――というワケではなく、

「折角パクったテーブルだ！落として壊すなよ！」
「わかってる！そんなヘマしねぇよ！」

学園の応接室からテーブルを盗んできたからだ。

「それにしても、どうして、テーブルを背負って、そんなに早く、走れるんですか・・・・・・」

これは布施先生の後ろから迫ってきている長谷川先生のセリフ。先生は体育の授業がないから運動不足なのだろう。

「とにかく一旦喫茶店で使っちまえばこっちのモンだ！一般客が使用中のテーブルを回収なんて真似は、いくら教師でもできないだろうからな！」
「ああ！そんなことが出来るやつなんているもんか！むしろいてた

まるか！」

隣で走っている明久が『この極悪人め』って顔しているのは気にしない。

「こうなったら、西村先生に応援を――――」

布施先生が携帯を取り出す。この状態で西村さんから逃げ回るのは至難の業だろう。

「雄二、頼む！」
「任せろ！明久！」
「あいよっ！」

流石にテーブルを背負ったままだときついので雄二たちに任せる。

「くらえっ！」
「うわっ！」

明久が走りながら上靴を片方脱ぎ、雄二に向かって蹴り上げる。その上靴を雄二が空宙でけり、そのシュートは狙い違わずに布施先生の手元に命中。携帯は宙を舞って廊下に転がった。

「それでは御機嫌よう、先生方！」
「ああっ。僕の上靴・・・・・・」
「惜しむくらいなら、渡すなよ！」

布施先生が携帯を拾っている間に全力ダッシュ。姿が見えなくなったところでテーブルを放置して、須川の携帯に置き場所を連絡。これで回収班が喫茶店に持って行ってくれるだろう。

「よし。次は職員室そばの休憩室を攻めるぞ！それが終わったら二回戦だ！」
「はぁ・・・・・・・・・・。僕達はいつか停学になるきがするよ・・・・・」
「大丈夫だ、明久。退学じゃないぶんマシだろ」
「停学になるのは否定しないんだね・・・・・・」

だって、もうすこししたら停学になるからな。
そんなこんなでテーブル泥棒として駆け巡ったおかげで、テーブルの目標数を確保することには成功した。
ま、これだけで済めばいいんだけどな。

第４４話（後書き）

感想お待ちしております。

第45話

「ばーさん、戻ってきたぞ」
「遅かったね、クソガキ」

テーブル調達を終え、明久たちは召喚大会に行って俺はばーさんのところに戻ってきていた。

「あんた達また騒ぎを起こしたみたいだね？」
「騒ぎってほどのことじゃないけどな」

テーブルをパクルくらいたいしたことじゃないだろ。

「・・・まったく。すこしは静かに出来なのさね？」
「逆に聞くが、それが出来る奴がFクラスにいると思うか？」
「思わないさね。でも、アンタなら少しは静められるだろ？」

まぁ、やろうと思えば出来るかもしれないが、

「断る。そんなんじゃ、俺がFクラスに入った意味がなくなる」
「アンタがFクラスに入った意味さね？アンタ、テストは居眠りしたからFクラス行きじゃなかったのかい？」
「表沙汰は、な。俺は最初からFクラスに入るつもりだったんだよ」
「・・・なんでそんなバカなことをしたのさ？」

バカなこと？俺はそんな風に思っちゃいないよ。

「そんなの決まってるだろ。Aクラスに入るより、Fクラスの方が楽しいから・・・いや、面白いからだ！」

Aクラスに入って毎日勉強するくらいだったら、Fクラスに入って毎日バカ騒ぎした方が面白いに決まってる。学園生活は楽しく過ごさなきゃ損に決まってるだろ？だったらどっちに行くかなんて考えるまでもない。
実際、Fクラスに入ってからは暇なときなんて全然ない。

「・・・・・ホント、アンタは昔から変わってないさね」
「ほっとけ。変わらなくても別にいいんだよ。本人が自覚してるかどうかが問題なんだ」
「アンタは自覚してるのかい？」
「ある程度はな」

ウチのクラスのバカに比べたら、まだましだろ。

「で、腕輪のことなんだんだが。他にも聞きたいことはあるのか？」
「そりゃあ、あるさね」
「ちっ。面倒な」
「起動キーはなにさね？」

軽くスルーされたな。

「起動キーというと、『白金』の『起動（アウエイクン）』や『二重召喚（ダブル）』みたいのか？」
「そうさね。決まってないなら考えないといけないからね」
「問題ない、起動キーなら決まっている」
「そうかい。なんだい？」
「言わねーよ。アンタに教えたところで何の利益がある？」

盗聴されている部屋で簡単に喋れるかよ。

「・・・アンタがそういうなら、構わないさね」
ばーさんも俺の態度から何か感じ取ったみたいだ。いいことだ。
「さて、俺はもう行くぞ。ここは空気が悪いからな」
「?そんなに空気が悪いかい?空調はまわしているはずなんだけどね」
「アンタは気が付かなくても無理はないだろうな。空気を悪くしている奴には感じられないだろうしな」
そういって俺は学園長室を出る。後ろからなにか聞こえた気がするが、気にしないでおいとく。

☆

「おーっす、繁盛してるかー?」
「お、雅夜。いいところに戻ってきたのじゃ」
Fクラスに戻ってそうそう、秀吉が寄ってきた。
喫茶店の方は・・・・・予想通りに客が全然いないな。常夏コンビがAクラスで妨害しているらしいしな。
「どうした、秀吉?なにかあったのか」
「何かあったと言うより「あら、雅夜。自分のクラスほったらかし

てどこ行ってたのよ?」・・・こういうことじゃ」
「・・・わかった。だいたいのことは把握した」

秀吉に後ろから優子が出てきた。ウチのクラスに来ていたみたいだ。
それに、どうやら俺を探していたみたいだ。

「いっらしゃい、優子。ゆっくりしていってくれ」
「ゆっくりしていくわよ。それより、さっきの質問の答えは?」
「用事があってばーさんのところに行ってただけだ。ほったらかしているわけじゃない」
「ばーさん?」
「学園長のことじゃ」

そうともいう。

「アンタね・・・」
「別にこんくらいいいだろ?明久達の妖怪扱いに比べたらましなほうだ」
「・・・吉井君たちもそうだけど、アンタもアンタよ」

気にしない気にしない。

「それより、何か食うか?おごってやるぞ。ちなみに胡麻団子がオススメだ」
「いいの?だったらその胡麻団子ちょうだい♪」
「了解。じゃ、後は任したぞ秀吉」
「うむ。あんまり姉上をまたすでないぞ?姉上は気が短いからのう」
「秀吉、ちょっといいかしら?」
「なんじゃ、姉上!?ワシの間接はそっちにまがら――――っ!!
ま、まつのじゃ姉上!落ち着Kぎゃあぁっ!」

絶えてくれ秀吉。俺がすぐに胡麻団子もってってやるからな。

第４５話（後書き）

さてさて、雅夜の作った腕輪の効果はいったい、何なのか？

感想お待ちしております。

第４６話

「またせたな優子。当店自慢の胡麻団子だ」
「あら、遅かったわね。秀吉はもうダウンしっちゃったわよ」
「ニャー！！」

厨房から胡麻団子を片手にホールに戻ってくる。いそいだつもりだったが間に合わなかったようだ。

「すまないな、秀吉。俺は急いだんだけどダメだったみたいだ」
「残念だった。もう少し早かったら生きてたのに」
「ニャー・・・」

やった本人が言うなよ。

「ま、もう少ししたら復活するだろう」
「そうね。アタシの弟だもんね」

それは、いつもの事だからか？

「じゃ、頂くわ。・・・・・・・・・・（モグモグ）」
「どうだ？」
「（ゴクン）・・・こんどまた作って頂戴」

どうやらお気に召したようだな。

「そんくらいお安い御用だ」
「他にもなんか作れるのもあるの？」

期待の眼差しでこっちをみる。甘いものがすきなんだな。

「他か？そうだな・・・、マフィンは得意だな」

お菓子作りは結構面白いからな。

「今度の週末は、アンタの家でお菓子パーティー決定ね」

「オイコラ待て。何勝手に決め手やがる」

「いいじゃない。アンタの家に今度行くんだし」

「俺の家じゃなくて、俺の部屋な。そこんところは間違えないでくれ」

部屋を見せるとは言ったけど、見せるだけだ。お菓子パーティーのお菓子は、どうせ俺がゼンブ作るんだろ！

「ただいまー・・・・・・・・・って、あまりお客さんがいないなぁ・・・・・・」

空気を読まないバカがやってきた。

「お、戻ってきたようじゃな」

いつの間にか復活した秀吉が明久に駆け寄る。いままで死んだフリでもしてたのか？

「無事勝ってきたよ」

「それは何よりじゃ。ところで、雄二の姿が見えんがの？」

「うん。トイレに寄ってくるってさ」

随分と暢気な代表様だな。

「・・・・・・・・・・・・・・・」
「ん？どうした優子。秀吉たちが気になるのか？」
明久と秀吉のやり取りを見て、優子が固まっている。何かあったのか？
「・・・吉井君って秀吉と仲がいいの？」
「そりゃあ、友達だからな。当然だろ」
なにをいいだしているんだ、コイツ？
「坂本君とじゃなかったの？」
「・・・・・・ちょいとまてや婦女子。どうしてそうなる？」
そういえば、コイツ婦女子だったな。しかも重度の。
「ち、違うわよ！アタシは婦女子なんかじゃないわよ！！」
「静かにしろ。周りに聞こえるだろ」
「む・・・・・・。とにかく違うんだからね」
「俺にまでも隠さなくてもいいだろ？もう知ってるんだし」
「・・・秀吉が言ったのね？まったくあの子ったら・・・・・・・・・・・」
秀吉、逃げろ！！お前の運命の危機だぞ！！
「って、違う違う。秀吉はしゃっべてなんていないさ」
「じゃあ、どうして知っているのかしら？」
怖えぇぇ！！すげぇドス暗いんですけど！？

「え、えーと、ほら。俺は情報屋だからな。そこらへんも知ってるんだよ」
「その情報はどこからくるのかしねぇ？」
「それはほら、企業秘密？」
「あんたのどこが企業なのよ！」

ヤバイな。軽く切れかけてる。

「俺の情報は金になったりならなかったりするからな。りっぱな企業だ」
「へ～。本当かしらね～？」
「本当だってば。康太、いるか！？」
「・・・・・・・・・・なんだ？」

証明するために康太に来てもらう。こいつには色々しているからな。証明してくれるだろう。

「俺の情報は金になるよな？りっぱな企業だよな？」
「そうなの土屋君？」
「・・・・・・・・・雅夜の情報は金になる。それは本当だ」

俺の情報のおかげで、沢山のサービスショットを取れている康太の言葉。
こいつとは切れない縁で結ばれている。切る時はどちらかが死ぬときだ。

第４６話（後書き）

雅夜は料理ができますが、普通の料理だと明久より下手（でも普通に出来る）ですが
お菓子に関してはプロなみです。

感想お待ちしております。

第47話

『お兄さん、すいませんです』
『いや。気にするな、チビッ子』
『チビッ子じゃなくて葉月ですっ』

康太から証言を得ていると廊下から雄二と小さな女の子の声が聞こえてきた。

「お、雄二が戻ってきたみたいだな」
「・・・・・・・・・俺は厨房に戻るぞ」
「ああ。ありがとな、康太」

康太はもう用が済んだとわかると、すぐに厨房に戻っていった。

『んで、探しているのはどんな奴だ?』

ガラッと音を立てて教室の扉が開き、雄二の姿が見えた。話し相手の女の子は雄二の影でちょうど見えない。

『お、坂本。妹か?』
『可愛い子だな~。ねぇ、五年後にお兄さんと付き合わない?』
『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなぁ』

やっぱりウチのクラスにはロリもいたのか・・・。流石はFクラス。

『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ』

どうやら女の子―(葉月だっけか?)は人を探していて雄二に声を

かけたみたいだ。よく雄二に声をかけられたもんだ。外見は不良そのものなのにな。

『お兄ちゃん？名前はなんて言うんだ？』

『あぅ・・・・・。わからないです・・・・・』

『？家族の兄じゃないのか？それなら、特徴は？』

名前がわからない相手でも探してあげようとする雄二。意外と子供好きか？

『えっと・・・・・バカなお兄ちゃんでした！』

なんとも凄い特徴だ。

『そうか・・・・・沢山いるんだが？』

否定できない。

『あ、あの、そうじゃくて、その――』

『うん？他に何か特徴があるのか？』

『その・・・・・すっごくバカなお兄ちゃんだったんです！』

『『『吉井だな』』』

これも否定できないな。

「全く失礼な！僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！絶対に人違い――」

「あっ！バカなお兄ちゃんだっ！」

女の子一（葉月ちゃん）が明久に駆けていき、いきなり抱きついた。

「絶対に人違い、がどうした？」
「・・・・・人違いだと、いいなぁ・・・・・・」
バカ＝明久はこの世界の常識だ。
「って、キミは誰？見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の知り合いはいないよ？」
「え？お兄ちゃん・・・・・・。知らないって、ひどい・・・・・・」
明久の言葉を聴いて、葉月一（女の子）の顔が歪む。
「バカのお兄ちゃんのバカぁっ！バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きながら来たのに！」
流石子供。無邪気に明久の心をえぐっている。
「明久――じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」
「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう？」
「バカなお兄ちゃんだからバカなんだよ？仕方ないから許してあげてくれないかな？」
「そうよ。バカなんでから仕方のないことなのよ？」
見かねた俺と優子も慰める。
「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに――」

「瑞樹！」
「美波ちゃん！」
「「殺るわよ！」」
「ごぶぁっ！？」

突然現れた二人によって明久の首筋に攻撃がはいる。あれは痛い。

「姫路に島田か。どうやら勝ったようだな」

落ち着いて雄二が言う。

「瑞樹。そのまま首を後ろに捻って。ウチは膝を逆方向に曲げるから」
「こ、こうですか？」

島田はどこで関節技を覚えたんだ？技の切れが良すぎる。

「ちょっと待って！結婚の約束なんて、僕は全然――」
「ふえぇぇんっ！酷いですっ！ファーストキスもあげたのにーっ！」

あれ？葉月ちゃんの顔が笑ってるような・・・。

そんな疑問に思っている俺の顔が見えたのか、葉月ちゃんは他の奴に見えない角度で方目をつむって『言っちゃ、ダメですよ？』とアイコンタクトを送ってきた。

わざとかよ！？あ、あれ？葉月ちゃんってこういうキャラだったっけ！？

「坂本は包丁を持ってきて。五本あれば足りると思う」
「吉井君、そんな悪いことするのはこの口ですか？」
「お願いひまふっ！はなひを聞いてくらはいっ！」

葉月ちゃんとやり取りしていたうちに明久の命が危なくなっていた。
葉月ちゃんもやりすぎたかな？という顔をしている。

「仕方ないわね。二本刺したら聞いてあげるからちょっと待ってなさい」
「あのね、美波。包丁って一本だけでも刺さったら致命傷なんだよ？」

明久だったら生きられるんじゃないか？

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

と、葉月ちゃんが話を変えた。これで明久の命も助かるだろう。

「ああっ！あのときのぬいぐるみの子か！」
「そうそう、ぬいぐるみの子だ・・・・・って、いまさらかよ！？」
「し、しかたないじゃん！あの後観察処分者だとか色々あったから、すっかり忘れてたんだよ！」
「そういえばそうだったな。なら、仕方ない・・・か？」

観察処分者になったきっかけなら、なおさらおぼえているんじゃないか？

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

明久の発言にぷぅっと頬を膨らませる葉月ちゃん。

「そっか、葉月ちゃんか。ひさしぶりだね。元気だった？」

「確かにひさしぶりだな。元気にしてたか？」

「はいですっ！・・・お兄ちゃんは始めましてじゃないですか？」

ん？明久は覚えてて、俺は忘れたのか？軽くショックだ。

「俺のことは覚えてないか？明久と一緒だったんだが？」

「そうですか？・・・すいません。覚えてないですぅ・・・」

あらら。本当に覚えてないみたいだな。あの時一緒にいたはずなんだがな――――あの時？

あの時のことを思い出し、確かに覚えてなくてもしかたないなと呟きながら、鞄からあるものを取り出す。

「それなら、これで思い出せるかな？」

鞄からとりだしたメガネを掛けながら葉月ちゃんの方をむく。

「あっ！メガネのお兄ちゃんですっ！」

「思い出したみたいだな」

よかったよかった。

「あれ？雅夜ってメガネ掛けてたっけ？」

隣で見ていた優子が聞いてくる。そっか、優子はしらなかったな。

「目が悪くてな。普段はコンタクトだけど、時間がないときや、めんどいときはメガネだぞ」

「そういえば、あの時もメガネだったね」

あの時のことを思い出した明久が言った。観察処分者の設定が忙しくて、めんどかったんだよな。

第４７話（後書き）

雅夜は視力が悪いです。
よく、パソコンやらゲームをやっているんで悪くなりました。

感想おまちしております。

第４８話

「それにしても、よく僕の学校がわかったね？」
「お兄ちゃん達、この学校の制服着てましたから」
そういって明久の制服を引っ張る葉月ちゃん。
「あれ？葉月とアキ達って知り合いなの？」
そんな様子を見て島田が首を傾げた。
「まぁな。色々とあったんだよ」
「うん。去年ちょっとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの？」
「知ってるも何も、ウチの妹だもの」
「へ？」
いや、そこは驚くなよ。さっきお姉ちゃんって言ってたろ。
「雅夜、アタシはもう戻るね。」
「そうか？もうすこしゆっくりして行けば良いじゃないか」
「ありがと。でも、そろそろ交代の時間だしそれに・・・・・」
「それに？」
「なんとなく居辛い雰囲気だしね」
そう言って優子はＡクラスに戻っていった。
そこまで気にすることないと思うけどな。
「吉井君はずるいです・・・・・。どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いなんですか？私はまだ両親にも会ってもらってな

いのに・・・・・・。もしかして、実はもう『お義兄ちゃん』になっちゃってたり・・・・・・」

壊れてきてるな～、姫路も。だんだんとFクラスの影響を受けてるみたいだな。

「あ、あの時の綺麗なお姉ちゃん！ぬいぐるみありがとうてしたっ！」

葉月ちゃんがぺこりとお辞儀する。礼儀正しい子だな。

「こんにちは、葉月ちゃん。あの子、可愛がってくれてる？」
「はいですっ！毎日一緒に寝てます！」

そういえば、姫路もぬいぐるみをプレゼントしてたんだっけ？

「よかった～。気に入ってくれたんだ」

嬉しそうに微笑む姫路。やっぱり子供が好きなんだな。

「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

と、教室を見回す雄二。葉月ちゃんの登場ですっかり忘れてたな。

「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話聞いたよ？」
「ん？どんな話だ？」

雄二が屈み込んで葉月ちゃんに目線を合わせる。

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かないほうがいい、って」

やっぱり外で営業妨害してたか。暇なやつ等だな。

「ふむ・・・・・。例の連中の妨害が続いているんだろうな。探し出してシバき倒すか」

口元に手を当て、まるで確信しているかのように雄二は断言した。

「例の連中の妨害って、あの常夏コンビ？まさか、そこまで暇じゃないでしょ？」

「どうだかな。ひとまず様子を見に行く必要があるな」

「そうだね。少なくとも、噂がどこから流れてどこまで広がっているのかを確認しないと」

まぁ、葉月ちゃんが聞いたくらいだからな、結構広まってると思うぞ。

「お兄ちゃん、葉月と一緒に遊びにいこっ」

ギュッと葉月ちゃんが明久の手を握る。健気だな。

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなきゃいけないから、あんまり一緒に遊べないんだ」

頭をなでながら言い聞かせるように言う。

「む～。折角会いに来たのに～」

葉月ちゃんの頬が不満げに膨れ上がった。でも、わがままを言わない辺りはいい子だな。

「それなら、そのチビッ子も連れて行けばいい。飲食店をやってる他のクラスを偵察する必要もあるからな」

雄二からのフォローが入る。学園祭程度で敵情視察までする必要があるか？

「ん～、そっか。それじゃ、一緒にご飯でも食べに行く？」
「うんっ」

膨れ顔から満面の笑みに。表情が豊かで面白いな。

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね」

いつもとは違って、優しい口調で話す島田。妹に対しては優しいお姉ちゃんでいるようだ。

「ふむ。ならば姫路と雄二、雅夜も一緒に行くと良いじゃろ。喫茶店の方はワシとカノンに任せておくのじゃ」
「ニャー！！」
「そうか。悪いな、秀吉」
「いいんですか？ありがとうございます。木下君」
「ありがとな。お礼として今度、カノンの激選写真を何枚かやるよ」
「まかせるのじゃ！！絶対じゃぞ！！」
「ニャー！」

これで全部で六人。混雑する学園祭の中を歩き回るには結構な人数だ。

「それでチビッ子、さっきの話はどの辺りで聞いたか教えてくれな

いか？」
「えっとですね・・・・・短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店の――――」
「なんだって！？雄二、それはすぐに向かわないと！」
「そうだな明久！我がクラスの成功の為に、（低いアングルから）綿密に調査しないとな！」

葉月ちゃんから聞いた瞬間、明久と雄二は全力ダッシュ。

「アキ、最低」
「吉井君、酷いです・・・・・・」
「お兄ちゃんのバカ！」
「ほんとにバカだな・・・」

それよりも、場所はわかっているのか？

第４８話（後書き）

カノンをセリフが一定ですね（汗）

カノンのセリフでなんかいいのありますかね。

感想お待ちしております。

第４９話

「明久、ここはやめよう」
「ここまで来て、何を言っているのさ！早く中に入るよ！」
「頼む！ここだけは、Ａクラスだけは勘弁してくれ！」

営業妨害が行われている、我等（Ｆクラス）の宿敵のＡクラス【メイド喫茶　『ご主人様とお呼び！』】に着いた。
メイドなのかご主人様なのかよくわからないネーミングだな。それとなんとなく優子が提案したような気がするタイトルだった。

「そっか。ここって坂本の大好きな霧島さんのいるクラスだもんね」
「坂本君。女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」
「諦めな、雄二」
「雄二、これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだから――」
「・・・・・・・・・・・！！（パシャパシャパシャ！）」

見てみると、指が擦り切れんばかりにシャッターを切っている男が一人。

「・・・・・・ムッツリーニ？」
「・・・・・・・・・・人違い」

俺が厨房を任せていた、土屋がここにいた。

「どこからどう見ても土屋でしょうが。アンタは何してるの？」
「・・・・・・・・・・敵情視察」
「ローアングルでの敵情視察が存在するか」

ローアングルからの女の子の撮影は敵情視察とは言わん。

「ムッツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんなことしたら撮られる女の子が可哀想だと――」

「・・・・・・・・・一枚百円」

「康太、優子のは全部こっちによこせ」

「二ダース買おう――可哀想だと思わないのかい？」

「アキ、普通に注文してるわよ」

「雅夜、お前は何言ってるんだ？」

はっ！？つい反射的に！？

「・・・・・・・・・そろそろ当番だから戻る」

優子のはなかったのか、明久に写真を渡し、教室の方に去っていった。なんだ、優子のはなかったのか・・・・・・。

「まったく、ムッツリーニにも困ったもんだね」

呟きながら、さりげなく写真をポケットに仕舞い込む明久。

「吉井君、その写真はどうするつもりなんですか？」

あ、バレた。

「やだな～。もちろん処分するに決まってるじゃないか。それよりそろそろお店に入ろう？もうすごくお腹がへっちゃったよ」

ばればれの演技でお腹を押さえる。

「あ、そうですね。入りましょうか」

ばればれの演技でも信じる姫路。さすがだな。

「うんうん。早く敵情視察も済ませないと――――写ってるのは男の足ばかりじゃないか畜生！」

「やっぱり見てるじゃないですかっ！」

「ご、ごめんなひゃい！くひをひっぱらないで！」

姫路が頬をつねり、足元で葉月ちゃんが腿を捻っていた。

「それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

美波が一番手でドアをくぐる。

「・・・・・お帰りなさいませ、お嬢様」

出迎えたのはクールで知的な美人メイド、霧島翔子だった。

「わぁ、綺麗・・・・・・」

姫路が感嘆の声を洩らす。確かに綺麗だな。

長い黒髪にエプロンドレスの白がよく映えて、黒のストッキングが彼女の美脚を際立たせている。同姓が羨ましんでも仕方ない麗しさだ。

「それじゃ、僕らも」

「はい。失礼します」

「お姉さん、きれ～！」

明久が姫路と葉月ちゃんをつれて入る。

「・・・・・・おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

と、出迎える。

「・・・・・・チッ」

「そう、舌打ちしなさんなって」

最後に俺と雄二が入店する。霧島はやっぱり同じように、

「・・・・・・おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

ちょっとアレンジされていた。

「お帰りなさいませ、ア・ナ・タ♪」

これまた、アレンジされたセリフが聞こえた。・・・って、優子!?

「霧島さん、大胆です・・・・・・!」

「ウチも見習ないとね・・・・・・!」

「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな?」

三者三様のリアクション。確かに島田は見習ったほうがいいかもな。

「お席にご案内いたします」

霧島が歩き出し、皆がそのあとを着いていく。

「・・・優子。これを提案したのお前か？」
「そうよ。凄いでしょ？」

俺の問に対して、優子が自信満々に答える。その自信はどこからでてくるのやら。

「それよりも・・・綺麗だな、優子」
「へっ!?あっ、ありがと／／／／／／」

第４９話（後書き）

優子はツンデレで行くべきでしょうか？
それとも、デレデレで行くべきかな？

感想お待ちしております。

第５０話

優子は「じゃ、アタシは仕事あるから。またね」と行ってしまったので、明久達を追いかけ、テーブルに付いた。

「ね、お兄ちゃん。凄いお客さんの数だね～」
「そうだね。いっぱいいるね」

明久と葉月ちゃんの会話が聞こえる。
葉月ちゃんの言うとおり、Ａクラスの広い教室は客で一杯になっていた。メイド喫茶だからほとんどの客が男だと思っていたが、意外と女性の多かった。

「・・・・・では、メニューをどうぞ」

霧島が立派な装丁のメニューを渡してくる。凄いな。流石は最優秀クラス、学園祭にまで手を抜かないみたいだ。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」
「あ、私もそれがいいです」
「葉月もー！」

姫路たちは仲良くシフォンケーキ。

「僕は『水』で。付け合せに塩があると嬉しい」
「俺は『カスタードシュー』で」
「んじゃ、俺は――」
「・・・・・ご注文を繰り返します」

雄二を遮るように霧島が言う。

「・・・・・『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『水』を一つ、『カスタードシュー』を一つ、『メイドとの婚姻届』が一つ。以上でよろしいですか？」

「全然よろしくねぇぞ！？」

「霧島、『メイドとの婚姻届』をもう一つくれ」

動揺した雄二を他所に、霧島に追加注文をする。優子のからかい材料が一つ増えた。

「・・・・・わかりました。では食器をご用意致します」

女子のところと俺の前にはフォークが、明久の前には塩が、さらに俺と雄二の前には実印と朱肉が用意された。

「しょ、翔子！コレ本当にうちの実印だぞ！どうやて手に入れたんだ！？」

「霧島。俺は自分のを持ってるからいらねぇぞ」

「・・・・・失礼致しました。では、メイドとの婚姻生活を想像しながらお待ちください」

霧島は優雅にお辞儀してキッチンと思しき方向に歩いていった。

「・・・・・明久。俺はどうしても召喚大会に優勝しないといけないんだ・・・・・！」

「あ、うん。それはもちろん僕もそうだけど」

「頑張れ、お二人さん」

形だけの声援を送っておく。優勝することに変わりはないしな。

「それよりも雅夜。お前・・・・・・木下と付き合ってるのか？」
「へ！？そうなの雅夜？」

先ほどのやり取りを見て、雄二が問いかけてくる。明久は『もし付き合ってたら、異端審問会に掛けてやる』と、目に殺意の気が宿っていた。

「落ち着けって、明久。俺達はまだ付き合ってねぇよ」
「そう。ならよかった～」

明久の目から殺意が消える。

「そうなのか？てっきり付き合ってるものだと思ってたんだが」

雄二はまだ信じられないようだ。

「そうなんだよ。まだ告白なんてしてないからな」
「ほぅ・・・・・・。まだ、ってことはする気はあるんだな？」
「・・・・・・ま、それはまた今度、ってことで。それよりも、葉月ちゃん。キミの言っていた場所ってここで良かったの？」
「へっ！？・・・あ、うんっ。ここで嫌な感じのお兄さん二人がおっきな声でお話してたの！」

こっちの話に聞き耳を立てていた葉月ちゃんが元気よく頷く。

「そらしたな・・・」
「そらしたね・・・」
「いいところでしたのに・・・」
「惜しかったわね・・・」

そう簡単に喋ってたまるか。というか、姫路と島田も聞き耳立ててたのかよ。

『お帰りなさいませ、ご主人様』
『おう。二人だ。中央付近の席は空いてるか？』

と、新しい客の声が聞こえた。聞き覚えのある下品な声だ。

「あ、あの人達だよ。さっき大きな声で『中華喫茶は汚い』って言ってたの」

声の主は、さきほどうちのクラスで妨害工作をしていた常夏コンビ。さっきもこの辺りで聞いたってことは、もしかして通ってるのかもしれないな。

『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな！』
『そうだな。さっきいった二－Ｆの中華喫茶は酷かったからな！』
『テーブルが腐った箱だし、虫も湧いてたもんな！』

人の多い喫茶店の中央で、わざわざ大声で叫びあう。こんなことされたら悪評は広まる一方だな。

「待て、明久」

連中に殴りかかりに行こうとしていた明久を雄二が止めた。

「雄二、どうして止めるのさ！あの連中を早く止めないと！」
「落ち着け。こんなとこれで殴り倒せば、悪評は更に広まるだけだ」
「そういうことだから、落ち着け明久」

雄二の目が鋭く連中をにらみつける。
雄二の言うとおりにこんなに人の多い場所で殴り飛ばしたら、Ｆクラスの悪童の溜まり場なんて印象を与えかねない。たぶん、常夏コンビはそういうことも計算に入れてやっているのだろう。

「けど、だからってこのまま指をくわえて見ているなんて・・・・・！」

まぁ、わかっていながら何も出来ないのは歯がゆいだろうけどな。

「誰も見ているだけなんていってないだろ？ちゃんと雄二に考えがあるさ」
「ああ。やるからには頭を使えってことだ――――おーい、翔子！」
「・・・・・・なに？」

雄二に呼ばれた瞬間に霧島が現れた。常に雄二の近くにいたんじゃないか、って思うほど早かったな。

「あの連中がここに来たのは初めてか？」

雄二が顎で常夏コンビを示す。すると、霧島は小さく首を振った。

「・・・・・さっき出て行ってまた入ってきた。話の内容もさっきと変わらない。ずっと同じような事を言ってる」

霧島が顔を歪める。Ａクラスにとっても愉快な客ではないらしい。

「そうか・・・・・・よし。とりあえず、メイド服を貸してくれ」

臆面もなく問題発言をする雄二。躊躇いや恥じらいなんて存在しないみたいだ。

「・・・・・・わかった」

こちらも何の迷いのない返事。やっぱりお似合いのカップル――って、ちょっと待ったぁぁっ！

「き、霧島さん！？こんなところで脱ぎ始めちゃダメですっ！」
「そうよ！ここにはケダモノが沢山いるのよ！？」
「わぁ～。お姉さん、胸おっきいです～」
「だ、代表！なにやってるのよ！？」

あろうことかその場でメイド服を脱ごうとした霧島を、姫路と島田と偶然通りかかった優子が止めにかかる。危ないところだった。

「・・・・・・雄二が欲しいっていったから」

止められた霧島は不思議そうな顔をしている。コイツ、雄二の頼みなら迷いなく実行するみたいだな。

「お、俺がいつお前の着ているメイド服が欲しいといった！？予備のヤツがあれば貸してくれって意味だ！」

そっぽを向いて首まで真っ赤になっている雄二が怒鳴る。相当照れてやがるな。

第５０話（後書き）

感想お待ちしております。

緊急報告！！

どうも。
バカとノリと召喚獣の作者である、貴雅です。

今回、題名通り緊急報告があります。

実は・・・来週からテストがあるんです！

しかも前回の成績が予想以上に悪かった為、今回は頑張らなければいけないのです！

なにが言いたいのか、と言うと・・・感のいい人はそろそろ気づいていると思いますが、

しばらくのあいだ更新が出来そうにありません！

すいません（汗）

偶に親の目を盗んで書いていくかも知れまｓーーーちょ、母さん！？いつの間に俺の背後に！？

・・・へ？書いてることは本当かって？

バカだなぁ。そんなことするわけ「じゃあ、パソコンはいらないわね」すいませんでしたーーっ！！

だから、パソコンだけはぁあああああああっ！！！

緊急報告！！（後書き）

パソキトク
モウ、ムリポ

バカテスト第5問目

第１５問　以下の問に答えなさい
『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

姫路瑞樹の答え
『リトアニア　エストニア　ラトビア』

教師のコメント
そのとおりです。

土屋康太の答え
『アジア　ヨーロッパ　浦安』

教師のコメント
土屋君にとっての国の定義が気になります。

浅月雅夜の答え
『バルト　バトル　ロバート　（※これが全力です・・・っていったら怒ります？）』

教師のコメント
怒ります。

吉井明久の答え
『香川　徳島　愛媛　高知』

教師のコメント
正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう。

第１６問　以下の問に答えなさい
『ＰＫＯとは何か、説明しなさい』

姫路瑞樹の答え
『Ｐｅａｃｅ　Ｋｅｅｐｉｎｇ　Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ（平和維持活動）の略。
　国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動のこと　』

教師のコメント
そうですね。豆知識ですが、Ｕｎｉｔｅｄ　Ｎａｔｉｏｎｓ　Ｐｅ

ａｃｅｋｅｅｐｉｎｇ　Ｏｐｅｒａｔｉｏｎとも呼ばれたりもします。余裕があれば覚えておくと良いでしょう。

土屋康太の答え
『Ｐａｎｔｓ　Ｋｏｓｈｉ－ｔｈｕｋｉ　Ｏｐｐａｉの略。
世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体のこと』

教師のコメント
キミは世界の平和をなんだと思っているのですか？

浅月雅夜の答え
『Ｐｃ　Ｋｏｗａｒｅｔｅ　Ｏｏｎａｋｉの略
昔あったできごと。まじで泣きました。』

教師のコメント
それは先生も泣くかもしれませんね。

吉井明久の答え
『パウエル・金田・岡田の略』

教師のコメント
それはセ界の平和を守る人たちです。

第17問　以下の文章の（　　）に入る正しい物質を答えなさい。
『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（　　）である』

姫路瑞樹の答え
『水酸化カルシウム』

教師のコメント
正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください。

土屋康太の答え
『塩化吸収剤』

教師のコメント
勝手に便利な物質を作らないように。

浅月雅夜の答え
『酸化カルシウム』

教師のコメント
惜しいですね。今回は真面目に答えようとしたんでしょうか？

吉井明久の答え
『アンモニア』

教師のコメント
それは反則です。

バカテスト第5問目（後書き）

・・・今回、ビクビクしながらお送りいたしました。

いつ親が帰ってくるかのわからない状態で書きました。

タイミングを誤ると一発で死ぬ。

そんな生活。

第５１話

「・・・・・今、持って来る」
「あ、代表。アタシも手伝うわ」

霧島と優子が去っていく。
ふと気が付けば、俺らのテーブルは注目の的になっていた。

『あの店、出している食べ物もヤバいんじゃないか？』
『言えてるな。食中毒でも起こさなければいいけどな！』
『二―Ｆには気をつけろってことだな！』

さいわい、常夏コンビは気付いていないようだ。

「雄二！なんでもいいから早く連中を！」

・・・なんでもいいんだな？

「いいからもう少し待ってろ。姫路に島田、櫛を持ってはいないか？」
「？持っていますけど・・・」
「ちょっと貸してくれ。他にも身だしなみ用のものがあれば全部」
「はぁ・・・・・・」

姫路が上着のポケットをごそごそとあさって小さなポーチを取り出す。流石は女の子、ってところか。

「悪いな。あとで必ず返す」

雄二がポーチを受けとる。とてつもなく似合わないな。

「・・・・・雄二、これ」

「ひとつでよかったかしら?予備ならもう一つあったけど」

と、霧島と優子がメイド服を抱えて戻ってきた。不吉な言葉を携えて。

「おう。すまないな」

「・・・・・・貸し一つ」

「だ、そうだ。明久、雅夜」

「わかったよ。御礼に今度雄二を一日自由にしていいよ」

「・・・・・ありがとう。吉井はいい人」

「ちょっと待て!どうして俺が!」

「それなら俺は、俺が激選した結婚式場のパンフをわたそう」

「・・・・・ありがとう。浅月もいい人」

「雅夜も!なんて事してくれんだ!!」

雄二の必死の弁明も虚しく、霧島は嬉しそうにその場を離れていった。

「で、これをどうするの?」

雄二の手元にはポーチとメイド服。これで思い浮かべるものは一つしかないだろう。

「・・・・・着るんだ」

恨みがましく明久をみる雄二。

「だってさ、姫路さん」
「え？わ、私が着るんですか？」
「心配するな。姫路は着ない」
「あたりまえだ。姫路が着ても攻撃なんて出来ないだろうが」
「それじゃ、美波？でも、胸が余っちゃうとぼべらぁっ！」
「ツギワ、ホンキデ、ウツ」

島田に胸の話はＮＧだ。

「島田でもない。それなら面が割れてしまうだろうが」
「・・・・・・まさか」

ここに居るのは、俺・雄二・明久・姫路・島田・葉月ちゃん・優子。
優子はもう着てるし、姫路でも島田でもない。葉月ちゃんだと丈が余りすぎるだろうから着れない。
残りは・・・・・・

「「着るのはお前だ」」
「いやぁぁぁっ！」

俺と雄二の声がかぶる。考えることは同じ。

「雅夜が着ればいいじゃないか！雅夜の方が似合う――――――」
「・・・ほぅ。俺にまた女装しろというのか？」

思い出したくない物を思い出され、明久に殺意を向ける。

「――――すいませんでした！もう言いませんから勘弁してください！！」
「・・・謝った程度で、許されると思うか？」

昔、ちょっとしたきっかけから起こったある出来事。俺の人生の汚点である。

「またって・・・・・もしかして、女装したことあるの？」
「したことはない！！」

優子から変なかんぐりを受けそうだったので、全力で否定する。

「そういえば昔、吉井君から聞いたことがありましたけど――――」
「姫路」
「は、はいっ」
「わすれろ」
「・・・へっ？」
「わ・す・れ・ろ！」
「は、はい！忘れました！何も覚えてません！！」

姫路が何か言い出しそうだったが、有無を言わさずに忘れさせる。
まさか、姫路も覚えていたとは・・・

「明久」
「は、はいっ！」

姫路とのやり取りをみて、固まってしまった明久に声を掛ける。

「さっさと着て来い」
「・・・へ？」
「さっさとメイド服を着て来いと言っているんだ」
「ちょ、ちょっと待って！？僕はまだ着るなんて一言も――――」

「着て来い」
「・・・・・・はい」

メイド服を抱え、連絡を受けて来た秀吉とともに教室を出て行く。

「雅夜、どういうこ「お前等は何も聞いていない。俺はなにも言ってない。いいな？」・・・」
「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい（です）」」」」

第５１話（後書き）

雅夜の女装事件（あえて事件と言わせて貰います）は番外編でやります。

感想お待ちしております。

第５２話

～数分後～

「お！明久が戻ってきたみたいだぞ」

教室に入ってきた、メイド服を着て女装した生徒――吉井明久を見つけて声を出す。

「本当ですかっ！？」

「どれどれ～？」

「お兄ちゃん、戻ってきたですかっ？」

俺の言葉に反応して、女子連中が慌てて声をあげる。そんなに慌てなくてもいいと思うんだが。

「・・・・・浅月。アレがアキなの？」

「ああ。間違いないぞ」

女装した明久は、知らない人が見たら女性と思うほど違和感がなく、しかも結構かわいい部類に入るであろう容姿であった。

「お兄ちゃん、可愛いですっ！」

「はぅぅ！可愛すぎますっ！」

「可愛い・・・・・・」

今まさに、後のネットアイドル【アキちゃん】が誕生した瞬間だった。

『お客様』
『なんだ？――――へぇ。こんなコもいたんだな』
『結構可愛いな』

明久が常夏コンビと接触し、作戦を開始する。

『お客様、足元を掃除しますので、少々よろしいでしょうか？』
『掃除？さっさと済ませてくれよ？』

掃除する対象はお前等だがな。

『ありがとうございます。それでは――――』
『ん？なんで俺の腰に抱きつくんだ？まさか俺に惚れて――――』
『くたばれぇぇっ！』
『ごばぁぁっ！』

バックドロップ成功。これで坊主の方は、本日二度目の脳天痛打だ。

『き、キサマは、Ｆクラスの吉井・・・・・！まさか女装趣味が――――』

おお！まだ意識があったみたいだ。バックドロップなんてくらってよく平気だったな。

『こ、この人、今私の胸を触りました！』
『ちょっと待て！バックドロップする為に当ててきたのはそっちだし、だいたいお前は男だと――――ぐぶぁっ！』
『こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！』

痴漢退治という大儀名分を得て雄二が登場。ちなみに俺は参加しない。その理由は・・・

「アンタは行かなくていいの？」
「まだシュークリーム食ってないからな」
「・・・シュークリーム好きなんだ」
「否定はしない」

と。まあそんな感じで行かないというわけですよ。

『何を見ていたんだ！？明らかに被害者はこっちだろ！』
『黙れ！たった今、コイツはこのウェイトレスの胸を揉みしだいていただろうが！俺の目を節穴ではないぞ！』

節穴じゃなかったら、ビー玉かなんかだろう。

『ウェイトレス。そっちで倒れている男は任せたぞ』
『え？あ、はい。わかりました』

明久は一瞬考えるそぶりを見せて、どこからかブラと瞬間接着剤を取り出し坊主頭にくっつけた。
・・・敵ながら同情するな。止める気はないけど。

『さて。痴漢行為の取調べの為、ちょっと来てもらおうか』

一方で指を鳴らしながらモヒカンに近づく雄二。
どうしてこんなことしているのか、吐かせるつもりだろう。

『くっ！行くぞ夏川！』
『こ、これ、外れねぇじゃねぇか！覚えてろ変態めっ！』

不利と感じて逃げ出すモヒカン。坊主は頭にブラをつけたまま逃げ出す。

・・・はたから見たらどっちが変態だよ。

『逃がすか！追うぞアキちゃん！』

『了解！でもその呼び方は勘弁して！』

二人の後を追って明久と雄二も飛び出す。

「お待たせしました。シュークリームでございます」

二人が見えなくなったとき、優子がシュークリームを持ってやってきた。

「やっと来たか。意外と遅かったな」

「ちょっと、ね。忙しかったのよ」

Aクラスの広さだしな。それなら仕方ないな。

「・・・・・優子がシュークリーム作ろうとして失敗し「わ、わーーっ！！代表、言わないっていったでしょ！？」・・・隠さなくてもいいのに」

「・・・どうした？」

霧島がなんか言った気がするが・・・優子の声でよくわからなかったな。

「なんでもないわよっ！雅夜は気にしなくてもいいの！！」

「あ、ああ」

そこまで隠されたら気になるところだが・・・。ま、いっか。
そばで見てた姫路たちは、俺と優子を見てニヤニヤしてたけど。

第５２話（後書き）

感想お待ちしております。

第５３話（前書き）

明日からはついにテスト！！

・・・俺、こんなことしてていいのかな？

第５３話

「・・・・・お会計は、夏目漱石を一枚か、坂本雄二を一名のどちらかとなります」
「坂本雄二を一名でお願い」
「・・・・・ありがとうございます」
「雄二、ドンマイ・・・」

千円で売り飛ばされる友人に涙を流す。

☆

「戻ったぞ～」
「たっだいま～！って、なんだ。アキってばメイド服脱いじゃったんだ」
「あ・・・・・残念です。可愛かったのに・・・・・」
「お兄ちゃん。葉月もう一回みたいな～」

シュークリームを食べ終え、Ｆクラスに戻ってくると明久と雄二が既に戻ってきていた。
どうやら不戦勝だったみたいだ。

「あはは。残念ながら、ただで人のコスプレを見られるほど世の中

あまくないよ？」
「そういうことだ。姫路に島田、クラスの売り上げの為に協力してもらうぞ」
チャイナ服を片手に退路を断つ明久。目が狩人（へんたい）の目になっている。
「な、なんだか二人とも、目が怖いですよ・・・・・・？」
「凄く邪悪な気配を感じるんだけど・・・・・・」
それに気付くうさぎ（エモノ）たち。若干引き気味だ。
「やれ、明久！」
「オーケー！へっへっへ、おとなしくこのチャイナ服に着替え痛ぁっ！マジすんませんした！自分チョーシくれてましたっ！」
「弱いな、お前・・・・・・」
明久の言葉を聞いて携帯を取り出そうとしたが、やめた。
弱すぎるだろ、明久・・・・・・。
「どうしてまた、急にそんなことを言い出すのよ？前に須川はチャイナドレスを着たりすることはない、って言ってたと思うけど」
「そういえば、そんなことも言ってたな」
言ったのは企画をだした時だっけ？よく覚えてたな。
「店の宣伝の為と、明久の趣味だ。明久はチャイナドレスが好きだよな？」
姫路たちを騙すために雄二が明久に話をふる。
明久の返答次第では、姫路たちも着ないこともないかもしれな――

――

「大好――――愛してる」

絶対着るだろう。

「・・・・・・お前は本当に嘘がつけない奴だな」

「・・・・・・想像の斜め上どころか、裏側を行くな」

と言うより言い直す意味があったのか？

「し、仕方ないわね。店の売り上げの為に、仕方なく着てあげるわ」

「そ、そうですね！お店の為ですしね！」

雄二の目論見通り、姫路達が着る気になった。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い・・・・・・？あ、うん！手伝うから、あの服葉月にもちょうだい！」

ふむ・・・。それなら・・・・・・、

「けど、ごめんね。気持ちは嬉しいんだけど、葉月ちゃんの分は数が――――」

「康太！！」

「・・・・・・・・・・まかせろ！！（チクチクチクチク）」

「ム、ムッツリーニ！どうしてそんな勢いで裁縫を！？っていうかさっきまでいなかったよね！？雅夜も！！どっからその布だしたの！？」

「・・・・・・・・・俺の嗅覚を舐めるな」
「企業秘密だ」

どこからともなく取り出したチャイナ服の生地を、どこからともなく現れた康太に渡す。
康太が作り終わるのにそう時間はかかんないだろう。

「それじゃ、三回戦が終わったら着替えますね」

姫路が腕時計を確認している。もうそんな時間か。

「いや、今着替えてもらいたい」
「「え？」」

雄二の言葉に二人の声がハモる。

「宣伝の為だ。そのまま召喚大会に出てくれ」

三回戦からは一般公開が始まる。折角人が集まるんだ、宣伝しておいて損はないな。

「こ、これを着て出場しろって言うの・・・・・・？」
「流石に恥ずかしいです・・・・・・」

二人ともチャイナを片手に困った顔をする。メディアを含めて大勢の人が来るなか、その格好で動き回るのはやっぱり恥ずかしいんだろうな。

「二人とも、お願いだ」

と、言って明久が頭を下げる。
こういう時だけは無駄に男らしいんだよな・・・・・・。

「明久・・・・・・。お前は本当に――――――――チャイナが好きなんだな」

え!?そっち!?しかも否定しない!?

「もしかして吉井君。私の事情知って――――」
「仕方ないわね。クラスの設備の為だし、協力してあげるわ。ね、瑞樹？」

姫路の言葉を遮って美波が色のよい返事を返す。

「あ。は、はいっ！これくらいお安い御用です！」

姫路からも快諾を得る。

「それならスグに会場に向かってくれ。大会では自分たちの所属がFクラスであることを強調するんだぞ」
「オッケー。任せといて。行くわよ瑞樹」
「はいっ」

チャイナドレスを抱えて教室を出て行く二人。あっちは任せておいて大丈夫だろう。

「・・・・・・・・・できた」
「わ、このお兄さん凄いです！」
「早すぎるだろ!?」

下心の絡んだ康太は最強とは思っていたものの、ここまでの速さとはな・・・・・。
予想をはるかに上回っている。

「ふむ。それでは着替えるとするかの」
「ちょ、ちょっと秀吉！ここで着替えるの！？きちんと女子更衣室で着替えないとダメだよ！」

秀吉は男子だ！！・・・と言っても意味無いだろうな。

「・・・・・最近、明久がワシのことを女として見ておるような気がするんじゃが」
「気のせいだ。秀吉は秀吉だろう」
「うん。雄二の言うとおりだよ、秀吉は性別が『秀吉』で良いと思う。男とか女とかじゃないさ」
「・・・・・俺が言ったのはそういうことじゃない」
「ドンマイ、秀吉・・・・・」
「・・・お主だけは変わらんでほしいのじゃ」
「大丈夫。・・・・・お前は男だ。俺がずっと信じていてやる」

この学校だと、俺と雄二、優子と西村さんぐらいか？秀吉が男だと理解しているやつは。

「んしょ、んしょ・・・・・」
「・・・・・・・・・！！（ボタボタボタボタ）」
「小学生で鼻血を出すなよ・・・」
「は、葉月ちゃん！キミもこんなところで着替えちゃダメだよ！ムッツリーニが出血多量で死んじゃうから！」

心から幸せそうな顔をしている康太には呆れるしか出来なかった・・

第５３話（後書き）

感想お待ちしております。

第５４話

「たっだいまー」
「ただいま戻りました～」

お、この声は姫路たちか。これで大丈夫かな？

「丁度良かったよ。二人とも疲れてるところ悪いけど、ホールに回ってくれる？」
「客が増えてきたからな。ちょっとばかし忙しくなってきたぞ」
「ニャ～」

二人が大会に向かった後、明久はチャイナドレスに着替えた秀吉と葉月ちゃんを連れて校舎内を歩いてきてもらった。最初はあまり効果がなかったが、徐々に客が増えていき――――姫路たちの試合が終わった頃からはほとんどの席が埋まってる状態になった。

「良かった。だんだん持ち直してきたのね」
「良かったです」
「女性客も増えてきているんだよ。きっと味についての噂も流れ始めたんだろうね」
「猫好きも結構いるみたいだな。カノン目当ての客もくるぞ」

今は疲れて俺の頭の上にいるけど、さっきまでは客に可愛がられてた。ウチのカノンは懐っこいからな。

「それじゃ二人ともウェイトレスをやってくれる？」
「はいっ」
「オッケー」

チャイナドレスの裾を翻して二人は注文票やペンを取りに行った。
これでまた客が増えてくるだろう。

「カノン。お前も行って来い」
「ニャ～！」

俺の言葉を聞いてカノンは、先ほどからずっとカノンを見ていた客の元に行った。

「君。注文をしてもいいかな？」
「あ、はい。どうぞ」

カノンを見送ってたら、明久が客から声をかけられていた。この声は・・・・・教頭の竹原か？

「本格ウーロン茶と、胡麻団子を」
「かしこまりました。本格ウーロン茶と胡麻団子ですね？」

明久は注文をメモ取り、確認の為客に顔を向ける。ちゃんと接客がなってるな。

「ありがとうございます。後ほどお持ちしますので、少々お待ちください」
「それと聞きたいことがあるんだが、いいかね？」
「はい。なんでしょうか」
「このクラスに吉井明久という生徒がいると聞いたのだが、どの子かな？」
「え？吉井明久は僕ですけど・・・・・」

脈絡もなく、明久を訪ねる竹原。

「ああ、そうかい。君が――――吉井君（笑）か」
「教頭先生。人の名前に（笑）はおかしいかと思います」
「ああ。それはすまない。だが、私はどうしても教え子である君のことを吉井君（馬）とは呼べなくてね」
「あの、僕は職員室でなんてよばれているんですか・・・・・・？」

馬鹿に決まってるだろ。
そういえば、この間職員室で『西村先生。あの馬鹿がまたやらかしましたよ』『また、吉井か・・・・・。まったく、こりないヤツだな』みたいな会話があったぞ。

「アキ、厨房の土屋から伝言。茶葉がなくなったから持ってきて欲しい、だって」
「ん、わかったよ。先生、ちょっと行ってきてもいいですか？」
「構わんよ。特に用があったわけではないからね」
「？そうだったんですか？」
「さっさと行って来い。教頭の相手は俺に任せておけ」

ちょっと話したいことがあるからな。

「アキ、土屋が急いで欲しいって言ってたわよ？」
「はーい」

明久はストックの置いてある空き教室に急いでいった。さて、

「竹原。話すことはわかってるよな？」
「さぁ？なんのことかね？」

しらを切るつもりか？

「しらを切っても無駄だぞ」
「しらを切るもなにも。なんのことかさっぱりわからないね」
「だから無駄だっていってるんだよ。『情報屋』にわからないことなんて無いんだ」
「その『情報屋』が何を知ってるのかね？」
「言っていいのか？」
「どうぞ」

俺がカマかけてるとでも思ってるのか？

「そうだな・・・・・・簡単に言うと、アンタが黒幕ってことだ」
「・・・ほぅ。本当に知っているみたいだね」
「だから知ってるって言ったろ」
「それで、『黒幕』である私に何を聞きたいのかね？」

もう隠す気はないみたいだな。

「聞きたいんじゃない、言うことがある」
「言うこと？」
「アイツラに犯罪行為まではするな」
「・・・なんで貴様の言うことを聞かなきゃいけないんだね？」
「言うことを聞かなきゃ、明久達に黒幕はアンタってことを言う」
「ふむ・・・。それは面倒だな」
「面倒だがお前は聞かなきゃならない。そのかわり、さっきのことを守ってくれるなら俺は言わない」
「・・・信用できんな」
「出来る出来ないの問題じゃない。信用しろ」
「・・・仕方ないな。アイツラに言っておこう」

交渉成立。

「ほら、話は済んだんだ。とっとと帰れ」

「・・・まだ頼んだウーロン茶と胡麻団子が来てな――――」

「こねぇよ。注文を受けた明久はどっか行っちまったんだからな」

「なっ！？」

「ほら、とっとと帰った帰った」

第５４話（後書き）

竹原と交渉をする雅夜。

雅夜は基本的に面識がある人なら年上でも呼び捨てで呼びます
敬意をはらう人だけにさん付けします。

感想お待ちしております。

第５５話

俺が竹原と話してる内に明久が不良にからまれたみたいだが、特に変わったことがないまま二時間がたった。

「明久、そろそろ四回戦だ」
「え？もうそんな時間なの？」
「頑張ってこいよ～」

もう、といっても今は午後二時過ぎ。喫茶店に夢中になりすぎて時間を忘れてたか？

「あれ？アキたちもそろそろなの？」
「そうなんですか？実は私達もそろそろ出番なんですよ」

島田と姫路がトレイを置いている。こっちは忘れてなかったみたいだ。

「お兄ちゃん、葉月を置いてどこかいっちゃうの？」

明久のズボンの裾を握りながら、寂しそうな顔で葉月ちゃんが言う。

「チビッ子。バカなお兄ちゃんは今から大切な用事があるんだ。だからおとなしく待ってないとダメだ」

言いながら葉月ちゃんの頭をグシグシとなでる雄二。子供の扱いがうまいな～。

「お兄ちゃんはすぐに戻ってくるからな？すこしの辛抱だよ」
「う～。でも・・・・・・」
俺と雄二の説得でもまだ不満げな葉月ちゃん。
「その代わり、良い子にしてたらご褒美をあげよっか」
「ご褒美・・・・・・？」
「そうだな。良い子にしてたら――――――バカなお兄ちゃんがオトナのデートを教えてくれるからな？」
だ、そうだ。よかったな葉月ちゃん
「葉月お手伝いしてくるですっ！」
「ち、違うんだよ葉月ちゃん！僕には君が期待するような財力はないんだ！ねぇ、聞いてる！？」
聞いてないだろう。ものすごい勢いでホールに行っちゃったし。
「アキ、ちょっと校舎うらまで来て？」
掴んでる明久の肩は今にも外れそうだ。
「美波ちゃん、ちょっと待ってください」
それを笑顔の姫路がとめて、
「次の対戦相手は吉井君たちのようですから。召喚獣でお仕置きしたほうが遠慮なく出来ますよ？」
笑顔のまま死刑宣告を下した。Ｆクラスの影響がでてるなぁ。

「ちょっと待って！僕の召喚獣はダメージのフィードバックつきなんだよ！？姫路さんの召喚獣に攻撃されたら僕自身も酷い目に――」

「フン、望むところだ」

「雄二！お願いだから勝手に僕の生命を左右しないで！」

むしろ死亡までの一直線コース？

「上等よ。早く会場に向かいましょうか。アキがどんな声で鳴くか楽しみだわ」

「いいだろう。そこまで言うなら、明久をどこまで大きな悲鳴をあげさせられるか、じっくり見させてもらおうか」

「姫路。痛めつけるときは一撃で決めちゃダメだぞ。じっくり嬲（なぶ）るように限界まで持っていってから止めを刺すんだぞ」

「わかりました。じっくり嬲るようにですね？やってみます！！」

「はは・・・・・は・・・。僕に味方はいないのかな・・・？」

いるわけがない。

☆

明久達が行ってから十数分。
試合が終わったと思われる頃からだんだんと客が増えてきた。向こうで行った宣伝のおかげだろう。
チャイナ服を出す前とは大違いだ。

「ほぅ。なかなかに盛況じゃないか」
「そうだね。結構いいかんじだね」
「よかった。宣伝の効果があったみたいですね」
「そうでなきゃ、こんな恥ずかしい格好で大会に出た意味が無いものね」

と、思ってるうちに四人とも帰ってきたみたいだな。

「お。戻ったか」
「ただいま、雅夜」

俺に気付いた明久が答える。ちょっと疲れてるように見えるのは気のせいだろうか？

「あ！バカなお兄ちゃん！お客さんがいっぱい来てくれたんだよ！」

明久を見つけた葉月ちゃんが一目散に明久に駆け寄る。

「そうだね。葉月ちゃん、お手伝いどうもありがとうね」
「んにゃ～・・・・・」

明久が頭をなでると気持ち良さそうに目を細める。ウチのカノンにやったときと同じ反応だな。（ようするに猫っぽい反応だった）

『お、あの子たちだ！』
『近くで見ると一層可愛いな！』
『手伝いの小さな子も教室内にいる子も可愛いし、レベルが高いな！』

客（特に男性）の中からそんな声があがる。チャイナが効いたみたいだ。

「明久。戻ってきたようじゃな。どちらが勝ったのじゃ？」

【教室内にいる可愛い子】である秀吉がトレイを片手にやってくる。

「雄二、かな？」
「そうね。坂本の一人勝ちね」
「ですね」
「？明久は同じチームなのに負けじゃッたのか？」
「気にすることもないだろ秀吉。いつものことだ」

そこまで珍しいことでもない。

「そんなことよりも、数少ないウェイトレスが固まってると客が落胆するぞ。今は喫茶店に専念してくれ」

きずくと、客の視線はこちらに集中していた。綺麗どころの四人一（秀吉ふくむ）が固まっているのだから無理もない。

「そうですね。喫茶店のお手伝いをしないといけませんよね」
「そうね。ちょっと視線が気になるけど、売り上げの為に頑張りましょうか！」

「はいっ。葉月も頑張りますっ」
「・・・・・ワシは男なのじゃが・・・・・・」
「秀吉。絶対に性別をバラしちゃダメだからね？」
「「めんどいなぁ」」
「雄二に雅夜！しっかりやる！！」

俺と雄二のセリフが見事にはもる。ウェイトレスは嫌いじゃないが、面倒ことには変わりはなかった。

「やれやれ、仕方ないのぅ・・・・・。あ、いらっしゃいませー！中華喫茶ヨーロピアンへようこそ！」

新規入店の客がきた瞬間に秀吉の口調が変わった。本人の気持ちとは裏腹に演劇魂が勝手に反応しているみたいだ。

「さて、俺達も突っ立てないで手伝うか」
「ん、そうだね」
「ああ」

俺達も喫茶店の手伝うために用意されたエプロンを身に着けた。

第５５話（後書き）

感想お待ちしております。

第５６話（前書き）

テスト終わったーーー！！

やっと、やっとどうどうとパソコンが出来るっ！

第５６話

「それじゃ、準決勝行ってくるね」
「はい。頑張ってくださいね」
「アキ、まけたら承知しないからね！」
「わかってるって」

明久達が戻ってきてから一時間。いよいよ準決勝の時間になったみたいだ。
ちなみに決勝戦は明日の午後に予定されているので、今日の試合はこれでラストになる。

「明久。この試合は特に負けられないからな」

雄二の目が今までとは比べ物にならないほどマジだ。そうなるのも仕方ない。なぜなら次の試合の相手は、

「霧島さんと木下君のお姉さんが相手なんて、大変そうですね・・・・」

そう。学年次席の霧島翔子に、霧島には劣るが学年ＴＯＰ５に入る木下優子。召喚大会の優勝候補である。

「大丈夫だよ。雄二に作戦があるみたいだし」
「まぁな。あんなバケモノどもとまともに勝負するほどバカじゃない。うまくやってくるさ」

むぅ・・・・・。優子をバケモノ呼ばわりか・・・。あまり気持ちのいい事じゃないな。

「アキなら不安だけど、坂本がそう言うなら大丈夫ね。きっちり勝ってきなさいよ！」
「お兄ちゃんファイトですっ」
「ま、死なないように頑張って来いよ」
「あいよっ」

クラスの声援を受け、雄二と明久は教室を出て行った。

「さて、俺も行きますかな」
「え？浅月君も行くんですか？」
「応援にでも行くの？」

チッ、ノリに任せて行けるかと思ったんだが。

「応援なんかいかねぇよ。学園長のところに行って来るだけだ」

今回のアイツラの戦いは見る側としては、まったく面白くないからな。

「なんで学園長のところに？」
「ん～、ちょっと、な。色々とやることがあるんだ」
「そうなんですか。頑張ってきてください」

俺の言葉を全く疑わず、屈託のない笑顔で言う姫路。・・・嘘は言ってないのに、罪悪感が出てきたな。

「厨房は須川辺りに任しとけば大丈夫だろうし、ホールはお前たちでどうにかなるだろうしな。俺がいなくても大丈夫だろ？」

原作では特に問題なかったしな。あることを除けば、だけどな。

「そうね、大丈夫。こっちは問題ないわ」

「じゃ、そういうことで」

手を振りながら教室を出る。

☆

「おや？なにしに来たんだい？」

「特に用はねぇよ。ただ隣に入ってくるな、って言いに来ただけだ」

「そうかい。またなんかする気かい？」

「なにもしない。むしろ出来ないからここに来たんだ」
「？意味がわからないさね」
「わかんなくていいんだよ」

言うことは言ったので学園長室を出て隣の部屋に入る。

ちなみに言ってなかったかもしれないが俺は部活に入っていて、この部屋は『科学研究部』の部室である。広さは広くはないが狭くもない広さである。この部屋にあるものは作業をするためのパソコンに始まり、本棚、冷蔵庫、簡易キッチン、ベットなどがある。徹夜するときがたまにあるので、寝泊りするための家具もある。ちなみに部員は俺一人であるので、プライベートルームとも言える。
部員一人なのになぜ部として認められてる？とか、私物化しちゃっていいの？など思うかも知れないが、そんなに難しいことじゃない。バーさんを脅せばすぐ手に入る。

とまぁ、今はこんぐらいにしておいて。

さっきはやることがあると言って出てきたが、やることなんて特になかった。
ではなぜここに来たかと言うと、

「逃げる為、なんて言えねぇよな・・・・・・」

これから起きる出来事がわかってる為、逃げてきた。

「それに、姫路たちが攫われるとこなんて見たくなかったし・・・・・」

これだけ聞いたら（読んだら）どれほどのヘタレだの臆病だの言わ

れるかもしれないが、仕方のないのことだったんだ。

俺がこの世界に来るときじじぃ（神様）は『なるべく原作を壊さんでくれよ』と言った。

原作を壊さない。

俺というイレギュラーが存在するんだけで、原作は歪んでいる。俺がこの世界に誕生した時点でそれはどうしようもないことだ。でも、俺はここにいる。俺が存在する程度のことなら壊れないということなのだろう。

では、壊すとは？

簡単だ。原作とは違う状況になることだ。

では、壊さないようにするにはどうすればいい？

それも簡単だ。原作通りであればいいんだ。

では、原作通りとは？

起こることは起こす。ただそれだけだ。

だが、起こってないことは、起こしても大丈夫だろう。優子たちの火事がいい例だ。

なら今回は？

姫路たちが誘拐されるのは必然。

竹原と交渉したが、あんなもん意味はない。どうせ守りはしないだろうしな。

ならあのまま教室にいたら？

姫路たちが誘拐されるのが必然なら、俺はなにも出来ない。
ただ見ているだけでなにも出来ない。姫路たちを助けることも、不良どもを撃退することも出来ない。

いつかは来ると思っていた出来事だ。
したくても出来ない。むしろ知ってたらしなきゃならない。
でも、そんな状況でもなにも手出しができない。

だから俺は逃げてきた。
なにもできない自分がふがいないと思いながら。

「・・・・・・これが俺（イレギュラー）である存在の宿命か」

第５６話（後書き）

転生したものとしての宿命。
わかってるのになにも動けない。
誰でも通ったことがあるであろう道。
しかし雅夜は、他の人よりも重要に感じています。

感想おまちしております。

第57話

雄二たちの試合が終わるであろう時間になった。

――――プルルルルルル！

・・・来たな。

「はい、こちら浅月」

「・・・・・・・・・・・・姫路たちが攫われた」

「もう来たか。居場所は？」

「・・・・・・・・・・・・盗聴できてる」

「なるほど。雄二たちに連絡は？」

「・・・・・・・・・・・・まだ。帰ってくるのを待っているところだ」

「そうか。すぐ行く」

携帯を切り、部室を出る。ふむ。意外と早かったな。

「康太。雄二たちはまだか？」

「・・・・・・・・・・・・もう来る」

早足で教室に戻り、康太に話しかけながら教室を見渡す。

先ほど言われたとおり、教室には姫路、島田、秀吉、葉月ちゃんがいなかった。

「・・・・・・・・・・・・雄二」

「ムッツリーニか。何かあったのか？」

「・・・・・・・・・ウェイトレスが連れて行かれた」
「ええっ!?姫路さんたちが!?」
「やはりな俺や明久とやり合っても勝ち目がないと考えたか。当然と言えば当然の判断だな」

明久はともかく、雄二と喧嘩して勝つのは厳しいだろう。かつては悪鬼羅刹とまで呼ばれていたんだ、そう簡単に勝てるもんじゃない。

「って、そんなことより、姫路さんたちは大丈夫なの!?どこに連れて行かれたの!?相手はどんな連中!?」
「落ち着け明久。これは予想の範疇だ」
「え?そうなの?」
「ああ。もう一度俺達に直接何かを仕掛けてくるか、あるいはまた喫茶店にちょっかいを出してくるか。そのどちらかで妨害工作を仕掛けてくるとは予想できてたからな」

相変わらずいい読みしてるな。

「なんだか随分と物騒な予想をしてたんだね」
「引っかかるところが随所にあったからな、雅夜?」

どうやら今回の俺の動きに気付いたみたいだ。いや、ずいぶんと前から気付いていたかもしれない。

「・・・・・・話は後で、だ。今はすることがあるだろ」
「・・・・・・・・・行き先はわかる」

と、康太が取り出したのは盗聴の受信機らしきもの。

「なにこれ?ラジオみたいに見えるけど」

「・・・・・・・・・盗聴の受信機」
「オーケー。敢えて何で持っているかは聞かないよ」
「気にするほどのことじゃない。俺も持っている」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ポケットから受信機（小型）を取り出し、明久に見せる。顔が引きつってるように見えるけど気のせいだろう。

「さて、場所がわかるなら簡単だ。かる～くお姫様たちを助け出すとしましょうか、王子様？」

王子様、か。明久にはぴったりだな。

「そのニヤついた目つきは気に入らないけど、今回は雄二に感謝しておくよ。姫路さんたちになにかあったら、正直召喚大会どころの騒ぎじゃないからね」
「・・・それが向こうの目的だろうな」
「え？」
「とにかく、まずはあいつらを助け出そう。ムッツリーニ、タイミングを見て裏から姫路たちを助けてやってくれ」
「・・・・・・・・・・わかった」
「雄二、僕等はどうするの？」
「いいかげん気付け」
「王子様の役目は昔から決まっているだろ？」
「王子様の役目って？」
「悪者にさらわれたお姫様を助けに行って、」
「「悪者を退治することさ」」

☆

『さてどうする？坂本と――――吉井だったか？そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？』
『待て。吉井ってのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしていたらしいからな』
『坂本って、まさかあの坂本か？』
『ああ。できれば事を構えたくはないが・・・・・・』
『それと、浅月って野郎には気を付けろ、って言われたが知ってるか？』
『いやしらん。そいつってヤバイのか？』
『俺も知らないが、もしかして坂本なみにやばいかもしれんな』
『マジかよ・・・。やりあいたくねぇな』
『気持ちはわかるがそうもいかないだろ？依頼はその二人を動けないようにすることなんだから』

雄二って結構有名人なのか？不良のヤツなら誰でもしってる、みたいな？

（雄二、この連中って）
（ああ。黒幕に依頼されたそこらのチンピラだろうな）
（それ正解）

『お、お姉ちゃん・・・・・・』
『アンタたち！いい加減葉月を放しなさいよ！』

中から聞こえてきたのは島田の怒鳴り声。葉月ちゃんが捕まってるせいでろくな抵抗ができずに連れてこられたみたいだな。

『お姉ちゃん、だってさ！かっわいぃー！』
『ぎゃはははは！』

中にいるのはだいたい七人ってところだな。

（待て、明久。勝手に行動するな。気持ちはわかるが、まずは人質の救出が先だ。ムッツリーニがうまくやるまで待ってろ）
（もう少しの辛抱だ。我慢しろ）
（・・・・・・わかったよ）

今にも中に入りそうだった明久をとめる。まぁ、もう少ししたら勝手に行くんだけどな。

『・・・・・・・・・灰皿をお取替えします』
『おう。で、このオネーチャンたちどうする？ヤっちゃっていいの？』
『だったら俺はこの巨乳チャンがいいなー！』
『あっ！ズリー！それなら俺二番ね！』
『あ、あのっ！葉月ちゃんを放して、私達を帰らせてください！』
『だってさ～。どうする？』
『それはオネーチャンたちの頑張り次第だよな？』
『やっ！さ、触らないで――――』
『ちょっと、やめなさいよ！』
『あーもう。うっせぇ女だな！』

『きゃぁっ！』

ドン、という何かを突き飛ばした音と島田の悲鳴。その後数瞬遅れて聞こえてきたのはガシュァァンなんていう、まるで何かがテーブルを巻き込んで倒れたような音だった。

（おい、明久！）
（雄二、行かせてやれ）
（なっ！？）

そんな俺達のやり取りも聞こえてないのか、ドアを開け放って部屋に入った。

『おじゃましまーす！』
『よ、吉井君？』
『アキ・・・・・・・・・』

（雅夜！作戦が台無しだろ！！）
（いいから。黙って聞いてろ）

『ハァ？お前誰よ？』
『それでは、失礼して・・・・・死にくされやぁぁっ！』
『はごあぁぁっ！』

おお！一撃で失神させるとは。

『てっ、てめぇ！ヤスオに何しやがる！』

ゴキッ
と鈍い音が聞こえた。どうやら殴られたみたいだな。

『イィッシャァァー！』
『ごぶぁぁっ！』

これで失神者二人目。

『テメェら、よくも美波に手を挙げてくれたな！全員ぶち殺してやる！』

いまはこんな状況だけど、今の台詞後で聞いたら恥ずかしくて死ぬかもしれないな、明久。

『コイツ、吉井って野郎だ！』
『どうしてここが！？』
『とにかく来ているなら丁度いい！ぶち殺せ！』
『たった一人で調子こいてんじゃねぇよ！』
『舐めてんのか！』
『・・・・・・っ！』

流石に一人じゃきついか。そろそろ行くとするかな。

（雄二。こういうときの為に鍛えた身体だろ？そろそろ行くぞ）
（・・・・・お前を先に殺したほうがいい気がしてきたな）
（違うのか？）
（・・・黙ってろ）

『お前ら全員、絶対ぶっ飛ばす・・・・・・・・・！』

（おー！いつもこんなんだったら良いんだけどな）
（・・・先に行くぞ）

（あ、俺も行くって）

「やれやれ・・・・・この阿呆が。少しは頭を使って行動しろって――――のっ！」

「げふっ！」

「雄二っ！」

「雄二だけじゃない――――ぜっ！」

「ぐわっ！」

相手を壁に叩きつけながら中にはいる。

「貸しイチ、だからな？」

「この程度で貸しになるか？」

言いながら俺が腹を殴ってすこし浮いたところを、雄二が壁に蹴飛ばす。

「で、出たぞ！坂本だ！」

「坂本まできたのか！」

「その隣にいるのが浅月か！」

「坂本と同じくらい強いぞ！」

俺達をみて連中が浮き足立つ。なんだ、骨のある奴はいないのか？

「おめぇらよぉ。このお嬢ちゃんがどうなってもいいのかァ？」

そんな中、連中の一人が葉月ちゃんを羽交い絞めにする。それに見て俺と雄二は動かなかった。

なぜなら――――

「いいか？おとなしくしていろよ？さもないと、ヒデェ傷を――――」
「・・・・・・・・・・負うのはお前だ」

ゴインッ

「あがぁっ！」

康太がいるからだ！

「お、お姉ちゃん！お姉ちゃーん！」
「葉月っ！良かった・・・・・・。怖かったよね・・・・・・・？」

解放された葉月ちゃんを島田が抱きしめる。感動の再会、だな。

「吉井君っ！」

姫路が腕を広げて明久に駆け寄る。

「姫路さんっ！」

どうように腕を広げて明久も構えて、

「吉井ぃ！ヤスオをよくも！」
「ぐふぁっ！」

チンピラのパンチを食らった。

「・・・・・・・・・・！！」
「な、なんだコイツ？血の涙流しているぞ・・・・・・・？」

さすがに同情するな。

「姫路さん、ちょっと待ってて！コイツをシバき倒した後でもう一度――――」

「姫路に島田！先に学校に戻っていろ！」

「雄二！キサマまで僕の邪魔をするのか！」

「康太！秀吉の縄解いて一緒に戻れ！護衛も頼むぞ！」

「・・・・・・・・・・了解（グッ！）」

姫路たちを康太に任せて、俺達は残りのチンピラたちに向き直った。

「くははは！それにしても丁度良いストレス発散の相手ができたな！生まれてきたことを後悔させてやるぜぇぇっ！」

「待てよ！そんな楽しそうなことに俺をまぜないでどうする。ご一緒させてもらうぜぇ！」

「こ、これが坂本か・・・・・・！」

「悪鬼羅刹の噂は本当だったか・・・・・・」

「浅月も坂本に匹敵するぞ・・・・・・！」

霧島に追い詰められているこのタイミングで雄二と喧嘩するなんて。この連中、ご愁傷様としかいいようがないな。俺も一緒にやるけど。

第57話（後書き）

雅夜伝説の始まり（笑）
その後、不良たちの間で修羅や夜叉などの名で広まったとさ。

感想お待ちしております。

第５８話

誘拐騒ぎも解決し、喫茶店の一日目も終了したＦクラスの教室。すぐに帰ろうとしたが、俺は雄二に捕まり、縄で縛られ身動きできない状態でいた。

「おい雄二。いい加減この縄ほどけ」
「めんどいから断る。それに逃げられたりしたら困るからな」
「にげねぇよ。それにアレを呼んだんだろ？」
「ああ。もうそろそろ来る頃だ」

明久に縄を解いてもらい、テーブルで一緒にお茶を飲む。

「？来るって、誰が？」
「ババァだ」

ババァ＝学園長。この学園の生徒の共通認識である。

「学園長がわざわざここに来るの？」
「呼んだって言ったろ？」
「俺が呼び出した。さっき廊下で会った時に、『話を聞かせろ』ってな」
「話ねぇ・・・・・・。ダメだよ雄二。一応相手は目上の人なんだから、用事があるならこっちから行かないと」

目上の人・・・・・・？ありゃあ人じゃねぇ。妖怪だ。

「用事もクソも・・・・・・この一連の妨害はあのババァと雅夜に原因があるはずだからな。事情を明かさせないと気が済まん」

「ん?そこには俺は関係ないぞ。あのばーさんのミスだ」
「そうなのか?」
「ああ」
「ババァに原因が――――えぇぇっ!?」

雄二のセリフに明久が驚く。今更かよ・・・。

「あ、あのババァ!僕等に何か隠してたのか!」
「・・・・・やれやれ。わざわざ来てやったのに、随分とご挨拶だねぇ、ガキどもが」
「来たかババァ」
「出たな諸悪の根源め!」
「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされていないか?・・・ってアンタも居たのか」
「もう諦めたほうが良さそうだぞ。ウチの代表様はほとんど気付いてるみたいだし」
「ああ。黒幕ではないだろうが、俺達に話すべきことを話していないのは充分な裏切りだと思うがな」
「ふむ・・・・・。やれやれ。賢いやつだとは思っていたけど、まさかアタシの考えに気が付くとは思わなかったよ」
「最初に取引を持ち掛けられた時からおかしいとは思っていたんだ。あの話だったらなにも俺達に頼む必要はない。もっと高得点者を叩き出すことの出来る優勝候補を使えばいいからな。たとえばここに居る雅夜、とかな」

俺はとある事情で出れないけどな。

「あ、そういえばそうだよね。優勝者に後から事情を話して譲ってもらうとかの手段も取れたはずだし」
「そうだ。わざわざ俺たちを擁立するなんて、効率が悪すぎる」

う〜ん、雄二たちだったら、そこまで効率が悪くないけどな。

「話を引き受けてきた教頭の手前おおっぴらに妨害することができない、とかは考えなかったのかい？」

「それなら教室の補修を渋ったりなんかしないはずだ。教育方針なんてものの前にまず生徒の健康状態が重要だからな。教育者側、ましてや学園の長が反対するなんてありえないからな」

「つまり、僕らを召喚大会に出場させるためにわざと渋ったってこと？」

「お、今回は妙にさえてるな」

「そういうことになる」

ここらへんでオーバーヒートするかと思ってたんだが

「あの時、俺がババァに一つ提案したのを覚えているか？」

「提案？えーっと」

「科目を決めさせろってヤツだ」

「なるほどね。アレでアタシを試したってワケかい」

「ああ。めぼしい参加者全員に同じような提案をしている可能性を考えてな、もしそうだとしたら、俺達だけが有利になるような話には乗ってこない。だが、ババァは提案を呑んだ」

パチパチパチ

雄二の疑り深さに敬意をこめて拍手する。ウチの代表はそうでなくちゃ。

「他にも学園祭の喫茶店ごときで営業妨害が出たり、俺達の対戦相手に情報を流す報告者がいたりと色々あったしな。それになりより、

俺達の邪魔をしてくる連中が姫路たちを連れ出したのが決定的だった。ただの嫌がらせならここまでしない」

いくらなんでも、ただの嫌がらせで警察沙汰は起こさない。そこらへんも考えてあるのだろう。

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったのか・・・・・・すまなかったね」

と、頭を下げるばーさん。

「アンタらの点数だったら集中力を乱す程度で勝手につぶれるだろうと最初は考えていたのだろうけど・・・・・決勝まで進まれて焦ったんだろうね」

俺との契約（そこまで信じてなかったが）を無視して警察沙汰を起こしたもんだしな。

「さて、こちらのタネ明かしはこれで終わりだ。今度はそっちの番だ」

そういいながら学園長と俺をにらみつける。

第５８話（後書き）

感想お待ちしております。

第５９話

「はぁ・・・・・。アタシの無能を晒すような話だから、出来れば伏せておきたかったんだけどね・・・・・・」
「アタシ？雅夜は関係ないのか？」
「俺は関係ないぞ。面倒だったら手をださなかった」

だから誰にも公言しないで欲しい。そんな前置きをして、ばーさんは真相を明かし始めた。

「アタシの目的は文月ハイランドのペアチケットなんかじゃないのさ」
「ペアチケットじゃない！？どういうことですか？」
「アタシにとっちゃあ企業の企みなんかどうでもいいんだよ。アタシの目的はもう一つの賞品のほうさ」
「もう一つというと、『白金の腕輪』とやらか」
「ああ、あの特殊能力がつくとかなんとかってやつ？」

白金の腕輪
これには二つの種類があり、一つはテストの点数を二分してもういったいの召喚獣を作る腕輪。もうは一つは教師の変わりに立会人になって召喚フィールドを作ることのできる腕輪。召喚フィールドの科目はランダムで選択される。

「そうさ。その腕輪をアンタらに勝ち取って貰いたかったのさ」
「僕等が勝ち取る？回収して欲しいわけじゃなくて？」
「あのな・・・・・。回収が目的だったら俺達に依頼する必要はないだろう？そもそも、回収なんていう真似は極力さけたいだろうし、な」

「本当にアンタは頭がよく回るねぇ・・・・・・。そうさ。できれば回収なんて真似はしたくない。新技術は使って見せてナンボだからね。デモンストレーションもなしに回収なんてしたら、新技術の存在自体疑われることになるさね」
「最悪の場合は回収も考えてたがな」
「それで、何でその『白金の腕輪』を手に入れるのが僕等じゃないとダメなんですか？」
「・・・・・欠陥があったからさ」

苦々しく顔をしかめるばーさん。技術者にとっては新技術の欠陥は耐え難い恥じである。それを生徒に明かすのだから無理もないかもしれない。

「その欠陥は俺達であれば問題ないのか？」
「そうさ。アンタたちが使うなら暴走が起こらずに済む。不具合は入出力が一定水準を超えたときだけだからね。だから他の生徒には頼めなかったのさ」
「なるほどな。得点の高い優勝候補を使えないわけだ」
「だから、お前達を選んだんだよ」

雄二と俺が苦笑いをする。

「えーっと、つまり・・・・・・」
「アンタらみたいな『優勝の可能性を持つ低得点者』ってのが一番都合がよかってわけ」
「よくわからないけど、とりあえず褒められているってことでいいのかな？」
「「いや、お前らはバカだと言われているんだ」」
「なんだとババァ！」
「説明されないとわからない時点で否定できないと思うんだが・・・

・・・」

「しかたない。それが明久だからな・・・・・・」

どうやら、明久だけわかっていないみたいだな。

「二つある腕輪のうち片方は召喚フィールド作成用はある程度まで耐えられるんだけどねぇ・・・・・。もう片方の同時召喚用は、現状のままだと平均点程度で暴走する可能性がある。だからそっちは吉井専用にと」

「雄二、これは褒められていると取っていいんだよね？」

「いや、バカにされている。物凄い勢いで」

「なんだとババァ！」

「いい加減自分で気づけ！」

「明久は黙ってろ！話が進まない」

直接お前はバカ、って言わないと気付かないのか？

「そうか。そうなると、俺達の邪魔をしてくるのは学園長の失脚を狙っている立場の人間――――他校の経営者とその内通者といったところだな」

「雄二、そうやって僕を会話から置き去りにするのは、やめて欲しいな？」

「だとさ、雄二。バカでもわかるように説明してやれ」

「やれやれ、このバカが・・・・・。俺達の邪魔をするってことは、腕輪の暴走を阻止されたら困るってことだろ？そんな学園の醜聞をよしとするやつなんて、ウチの生徒を取られた他校の経営者くらいしかいあにだろうが」

「ご名答。身内の恥を晒すみたいだけど、隠しておくわけにも行かないからね。恐らく一連の手引きは教頭の竹原によるものだね。近接の私立校に出入りしていたなんて話も聞くし、まず間違いないさ

ね」

「恐らくじゃなくて、完璧に竹原の仕業だぞ。本人に問いただしたらあっさりと認めた」

「そうだろうな。常夏コンビの始めの妨害のときに居たし、明久が襲われたときも居たことだしな」

「それじゃ、僕等の邪魔をしてきた常夏コンビとか、例のチンピラとかは」

「教頭の差し金だ。協力している理由はよくわからんが」

理由は推薦状を書いてもらう、って知っているんだがあえて黙っておく。そこまで知ってることがわかったら、向こう側の人間かと思われるかもしれないからな。

「あのさ、コレって――――――かなりまずい話じゃない？」

「そうだな。文月学園の存続がかかっている話になるな」

試召戦争と試験召喚システムは、その特異な教育方針と制度で存在自体の是非が問われているものだ。そんな状態で暴走なんていう問題が起きたら、学校そのものの存在意義も問われることになる。

「あ、でも。いざとなったら優勝者に事情を説明して回収したら――――」

「残念ながら、いまさらそんな温い真似できねぇよ」

「明久は決勝の相手を知っているか？」

雄二がガズボンのポケットから小さな冊子を取り出す。書き込まれているトーナメント表をたどっていくと、対戦相手は、

「常夏コンビ・・・・・・！」

「そうだ。やつらは教頭側の人間だ。嬉々として観客の前で暴走を起こすだろう」

そしたら回収どころの騒ぎじゃない。

「悪いが、アンタたちにはなんとしてでも優勝してもらうしかないんだよ」

ばーさんの表情は硬い。事態はかなり深刻なレベルまできている。

「まさかこんなことになっているとはな」

雄二もここまでは予想していなかったみたいだ。

「学園長、質問です」

「なんだい？」

「腕輪の暴走って、総合科目で平均点にいかなければ起こらないんですか？」

「そうさ。一つや二つの科目が高得点でも、その程度なら暴走は起きないよ」

「そうですか。それは良かった」

明久達が暴走を起こしたら話しになんないからな。

「雄二。学園長に聞きたいことも聞けたし、今日はもう帰ろう」

「そうだな。家に帰ってやることもあるし――明日は早いしな」

「そうれじゃ、アタシは学園長室に戻るとするかね」

ばーさんは静かに椅子から立ち上がった。

「二人とも、明日は頼んだよ」

「はい」

「任せとけ」

そういい残してばーさんは教室を出て行った。

「さてと、俺も帰るとするか」

そう言って席を立ち上がり、教室を出ようとする――

「まてよ、雅夜。お前にはまだ聞くことがある」

「そうだよ。話すことが沢山あるんだ」

――が、両肩を捕まれ、立ち止まらざるをえなくなる。

「・・・・・話ってなんだ？」

やれやれ、やっぱりこうなったか。できれば起きないで欲しかったんだが。

第５９話（後書き）

次回、雅夜ＶＳ雄二と明久！？

感想お待ちしております。

第６０話（前書き）

すいませんでしたっ！！

まず最初に謝罪しておきます。

この一週間更新できなかったのには理由があったんです。

テストが終わり、ひさびさの開放感をあじわいながらパソコンをしていた。

テストが返却され結果は平均７０点以上といういい結果であった。

しかし親に見せてみると、

「なにこの低い点数は！ちゃんと勉強したの？」

「低い！？高い方だと思うんだけど！？」

「言い訳はしない！！ちゃんと勉強しなかった罰として一週間パソコンは没収！！」

「なっ！？」

と、いう感じでパソコンを取られ、耐えに耐えていたんです。

まぁ、実際にテスト中なのに書いてたりしましたけど。

というわけで一週間ぶりの更新です。

またせてしまった方々、すいませんでした。

第６０話

「話ってなんだ？」

とりあえず、誤魔化しておく。こんなこと意味ないと思うが。

「とぼけるな。情報屋が知らないとは言わせないぞ」

「俺の情報は１００％あたる情報と１００％でない情報があるんだ。全てがわかるわけじゃねぇよ」

「だが、今回は１００％わかる情報だ」

・・・・・・・・・ほう。

「なぜそう言い切れるんだ？」

「なんとなくだ。俺は情報屋じゃないからな。予想しか出来ないんだ」

「なんだ。雄二も誤魔化すんだな」

「雅夜も、だろ？」

「違いないな」

お互いに苦笑する。こんなもんは茶番だからな。

「で、話があるのは明久だろ？雄二もなんかあるのか？」

「特にない。俺は結果を知りたいだけであって、経過を知りたいわけじゃない。だから俺はここで帰るとする」

なるほどな。雄二らしい。

「さて明久。お前が話したいのは、Ｆクラスにいるいつもの俺か？

それとも情報屋の俺か？」
「・・・・・・両方に決まっているだろ」
いままで声を押し殺していた明久が答える。
「わかった。なら話を聞いてやろう」
「・・・なら、まずこっちの質問に正直に答えろ」
いきなり話じゃなくなって、質問にかわったようだ。
「わかった。なるべく答えてやろう」
「・・・なるべくじゃない。全てだ」
「はいはい。注文が多い客だな」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
明久のキレているような声に対し、俺は軽く答える。
「姫路さんが転校するかもしれないことは知っていた？」
「ああ」
「僕達と学園長が結んだ交渉については？」
「知っていた」
「常夏コンビの妨害は？」
「来るとわかっていた」
「・・・・・・姫路さんたちが攫われることも？」
「――――――ああ」
ドゴッ！
「――――ぐっ！」
「ふざけるな！！」

俺が答えた瞬間、明久に殴られ、起き上がろうとしたところで胸倉をつかまれる。

「言ったよね！雅夜に喫茶店を任せるって！！雅夜に任せるから僕等は大会に集中できたんだ！僕は知らなかったけど雄二は妨害が来るのを予想してた！だから雅夜に喫茶店を任せたんだ！雅夜だったら並大抵のことには対処できるはずだから！姫路さんたちが攫われたときも！！」

「・・・・・・・・・・」

明久の言葉は正論だ。だから俺はなにも言い返せない。

「試召戦争のときもそうだ！姫路さんのラブレターが取られるってわかってたのに防ごうとしなかった！Ａクラス戦の時も雄二が油断しているのも教えればよかった！なのにしなかったんだ！！どうして！？どうして雅夜はなにもしないの！？」

「・・・・・・・・・」

「ねぇ！！答えてよ！」

そう。俺は何もしなかった。いや、

「しない、じゃない。出来ない、だ」

「・・・・・え？」

「お前に俺のなにがわかる。姫路たちが攫われるの知り、自分の立場を理解し、何も出来ない自分の情けなさに涙を流した。どれだけ俺が嘆き、悲しみ、苦しみ、むりやり自分を納得させ、姫路たちを見過ごしたと思う？」

「・・・・・・・・・・」

「お前にわかるか？自分の大切な人や物が無くなると知っていて普

通に過ごすことしか出来ない気持ちを。自分がどうあがいても結果を変えられず、最後にはただ見ていることしか出来ない気持ちを。」

「それは・・・・・・」

「わかる、とでも言うつもりか？簡単にそんなこと言うなよ。この気持ちは経験した奴にしかわからないはずだ」

「・・・雅夜は経験したことがあるの？」

「大切なものを無くした時の夢を何度もみた。何度も何度も。無くしてから初めて大切なものだったと気付いたけどな。どうあがいても失うことを止められず、大切な人を悲しませて目が覚める」

俺の大切なもの。それは前の世界での普通の生活だ。とりとめもなく、いつもぐうたら過ごしていたが、そこで過ごせなくなってから、その生活がどれだけ楽しくて、充実していたのかを初めてわかった。けど、気付くのが遅かった。

だから俺は後悔した。

そして夢を見始めた。

何度も何度も昴のために身を挺して助け、自分を殺し、昴をも悲しませた。

そんな夢をなんども見る。中二になった頃から気が狂い始めた。学校にも行かなくなり、ぶらぶらと、行く当ても無く、毎日この町をさまよっていた。

そんなある日、二人の姉弟と出会った。

昴の時と同じ状況、火事に巻き込まれた二人を助け、一人は気絶していたがもう一人の方から「ありがとう」と言われた。

言われた瞬間、救われた気がした。けど心の底では「もっと強くなんないと」と思っていた。

そこから俺の生活は一変した。

学校にはしっかりと通うようになり、知り合いらの道場で剣道と空手をならい、日々身体を鍛え始めた。

最初は周りの連中から気味悪がられた。けど、だんだんと昔の俺に

戻ってきているのことに気付いたのか、誰も気味悪がらなくなった。それにあの夢も昔に比べたら全然見なくなった。いまでは月に一度、忘れかけた頃に来るようになった。

「・・・・・・・・ごめん」

「謝るな。もとは俺が悪い。それはしっかりと理解しているし、今回のことはしっかりと姫路たちに謝るつもりだ。すまなかったな」

「・・・ううん。雅夜の本心が聞けたからね。いいんだよ」

「そういうもんか？」

「そういうもんだよ」

互いに笑いあった。気になるところはまだあるだろうが、これ以上聞くとまずいことになる、と感じたのか明久は深く追求してこなかった。

「ほら、話は終わった終わった。とっとと帰って勉強でもしてこい。明日があるんだからな」

「あ、う、うん。そうだね。明日は早いしね・・・・・・って、雅夜は帰らないの？」

「俺か？俺は学校に泊まるから帰らないぞ。いろいろやることがあるからな」

「学校に泊まる！？それにやることって！？」

「腕輪の修復に始まり、明日の行事の下準備、今日の出し物の結果をまとめたり、壊れてるとこがあったら直したり・・・等等だ」

ついでに見回りもしたりする。雑務をしている感じだ。

「腕輪の修復って・・・出来るの？」

「一応試験召喚システムの開発チームに入ってるからな。明日までに完璧になおすのは無理だが暴走する点数を高めるぐらいなら出来

るかもしれないからな」
「へぇ～・・・。すごいね」
めんどくさいがな。
「それじゃあ、また明日。雅夜」
「ああ。また明日な、明久」
こうして学園祭【清涼祭】一日目が終わった。

第６０話（後書き）

雅夜が自分の気持ちを正直に話す。
明久はそれには何も言わないが、深くは追求しない。

感想お待ちしております。

バカテスト第6問目

第１８問　以下の文を英訳しなさい
『すみません、病院はどこですか？』

姫路瑞樹の答え
『Ｅｘｃｕｓｅ　ｍｅ．Ｂｕｔ　ｗｈｅｒｅ　ｉｓ　ａ　ｈｏｓｐｉｔａｌ？』

教師のコメント
正解です。よくできましたね。

土屋康太の答え
『Ｓｉｎｔａｉｋｅｎｓａ　Ｈｏｋｅｎｓｈｉｔｕ．Ｏｋ？』

教師のコメント
何がＯＫなんですか。

浅月雅夜の答え
『英作文を作るのが面倒でした』

吉井明久の答え

『英作文が出来ませんでした』

教師のコメント

・・・・・・・・・・・・・・・

第１９問　以下の問に答えなさい

『徳川幕府８代将軍は誰か？』

姫路瑞樹の答え

『徳川吉宗』

教師のコメント

テレビドラマなどで知名度も高く、簡単でしたかね？

吉井明久の答え

『遠山の金さん！』

教師のコメント

フィクション上の人物のうえに、残念ながら人違いです。

島田美波の答え
『金（キム）さん』

教師のコメント
吉井君と同じ人物を想像したのでしょうが、その答えだと国籍まで違ってしまいます。

浅月雅夜の答え
『徳川のヨッシー』

教師のコメント
徳川家に緑色の恐竜なんていません。

第２０問　以下の問に答えなさい
『素数とはなにか？および、１０以下の自然数の内、素数を答えなさい』

姫路瑞樹の答え
『素数・・・一とその数自身のほかに約数がない数
１０以下の素数・・・２、３、５、７』

教師のコメント
1は素数に入りませんね。よく出来ました。

浅月雅夜の答え
『目玉焼きにかけると美味い』

教師のコメント
ソースと間違えたのですか?それと、先生は醤油派です。

吉井明久の答え
『・・・・・・分数?』

教師のコメント
君は自然数の定義ですら理解していないのでしょう。

バカテスト第6問目（後書き）

感想お待ちしております。

第６１話

明久を見送ってから数分後。

「腕輪の調整、か・・・・・・。めんどいな」

そんな愚痴をこぼしながら部室の扉を開く。

「あら、おかえりなさい」
「おう。ただいま」

中にいた優子に返事を返し、ＰＣの電源をいれる・・・・・・？

「って、優子!?」
「ん?どうかしたの?」

どうかしたのじゃないんだが

「なぜにここにいる?というかどうやってここに入った?」
「えーっと、なぜにここにいる?の答えは雅夜に会いに来たからで、どうやってここに入った?は学園長に開けてもらったからよ」
「・・・学園長?」
「そ。学園長が『浅月を待っている?だったらこん中で待ってるといいさね』って言って開けてくれたの」

あ、あのクソババア!勝手に許可するなよ!

「それよりもこの部屋ってなんなの?すごくいい設備なんだけど」
「この部屋?ここは『科学研究部』の部室だ」

「へ～。最近の部活ってここまで設備整ってるものなのね」
「あ、いや。ここの設備が特別なだけで、他はいたって普通だ」
「特別？この科学研究部になんかあるの？」

この科学研究部は、

「試験召喚システムの研究と実験をする。ついでに開発も」

基本はこんなところだな。

「システムの研究？そんなの学生ができるもんなの？」
「できるもんだぞ。俺以外に出来るやつがいるかは知らんが」

そもそもシステムを弄ろうと思う奴がいるかわからん。

「雅夜だけ？じゃあこの部って・・・」
「ああ。俺一人だ」

存在事態があまり知られて無いしな。

「ふ～ん・・・・・・・・」
「なんだ、その『いい事聞いちゃった♪』みたいな顔は？」
「べ、別にそんなこと考えてもないわよ」

そうですか。

「アンタのその『俺は何も言うまい』って顔はなによ」
「そういえば、俺に会いに来たって言ってたけど何か用でもあるのか？」
「うん。アタシの台詞を無視なのは置いとくとして」

「ありがとうございます」
「ま、雅夜と一緒に帰ろうかなって思って／／／」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい？
「あ、え、えーっと、その、別に深い意味はないんだけどね。ほら、今日は清涼祭なのにあまり会わなかったし、一緒に回らなかったから、ね？一緒に帰りながら話そーかな、なんて」
いやいや。『深い意味はない』って、顔を真っ赤にしながら言われても説得力ないんですが。
「あ、用事があるんならそっち優先でいいよ。む、無理ならそれで構わないんだしね・・・（シュン）」
後半メッチャ落ち込んでますよ！？
「・・・・・だ、だめかな？」
さらに涙目で上目使いですか！？
「・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・」
お互いが無言のまま時間が経っていく。
その空気に俺は耐い切るなくなり、

「優子、その――――――」
「（ガチャ）いるか、浅月？いつものやつ持ってき――――――なにをやっているんだ？」

俺→優子の手を掴んで、何かを言おうとしている
優子→目尻に涙を浮かべて俺を見ている

傍から見たらどう見えるんだろうな。

「・・・・・すまない。タイミングが悪かったみたいだな。また後で来る」
「ちょっと待った西村さん！！別になんかしてたわけじゃないですよ！いや、なんかしようと思っていましたけど！」
「どっちなんだ？」
「どっちでもいいですよ！！それよりも、何しにきたんですか？」
「ん、ああ。ほれ、いつものやつを持ってきた。それと学園長からの伝言だ」
「ああ、ありがとうございます。って、ばーさんから？」
「『遊びすぎ無いで、しっかりと仕事するんだよ』と」

そういえば、優子をこの部屋に入れたのってばーさんだったっけ？

「了解です。ばーさんに『とっとと人間に戻れ』とでも言っておいて下さい」
「・・・あとは任せたぞ」

伝言頼まれてくれたのかな？どうでもいいけど。

「・・・・・・だ、だめ？」

そっから始めますか！？まるで西村さんがいなかったように！？

「えーっと、その、すまん。今日は一緒には帰れそうに無い」

「・・・どうしてなの？」

それでも食い下がらない優子。そんなに一緒に帰りたいのか？

「というか、そもそも今日は家に帰らないからな」

「・・・・・・え？」

前提条件の『帰る』ができないんじゃ、どうしようもないだろ。

第６１話（後書き）

ひさびさの優子登場！

ヒロインなのに出番がなかなか出せず、困ってました（汗）

感想お待ちしております。

第６２話

「帰らないって、どういうこと？」

そのままの意味なんだが。

「今日は家に帰らないでここに泊まる、ってことだ」

「学校に泊まる！？」

俺の発言に驚く優子。学校に泊まることってそんなに驚くことか？

「この部屋見ればわかると思うが・・・一日二日ぐらいだったら平気でとまれるぞ」

簡易ベット、簡易キッチン、冷蔵庫（小）等等。徹夜するために揃えたものである。ちなみに冷蔵庫の中は飲み物と冷凍食品だ。

「・・・確かに必要最低限のものは揃ってるわね。いままでに泊まったことでもあるの？」

「一年のころは数十回、二年になってからは数回ぐらいだな」

「結構泊まってるのね・・・。そんなに召喚システムの研究って忙しいの？」

「いや、召喚システムの方はそんなに大変じゃないぞ」

「？？じゃあなんでそんなに泊まってるのよ？」

ん～っと、

「説明するのが面倒なんだが・・・・・・お！そういえばこれがあったな」

さきほど西村さんから受け取った紙の束を優子に渡す。

「なによこれ？」

「みればわかると思うぞ？俺がここによく泊まる理由が」

優子は紙を受け取り、目を通し始める。

「えーっと、どれどれ・・・。『机の脚が折れたので、補給か交換お願いします。１－Ｃ』、『うちのクラスの出し物――お化け屋敷の中で使ってるものが壊れたぽいっす。直しておいてくんね？３－Ａ』、『出し物で使ってる借り物の服が破けちゃったみたい。・・・頼めるかな？２－Ｄ』。雅夜、もしかしてこれって・・・・・・」

「たぶん想像してるのであってると思うぞ」

「そう・・・。じゃあ、これが『生徒会への不備申込書』なのね」

生徒会への不備申込書。名前の通り、生徒会へ不備を申し込むための申請書である。

「でも、なんでこれが雅夜のところにくるのよ？生徒会の仕事じゃなかったの？」

そう。優子の言ったとおりこれは生徒会の仕事である。毎年生徒会は、生徒達から出された不備や頼みごとをできる限りの範囲でやることになっていて、昨年まではほとんど（無茶なもの以外）は対処できていたが、今年の生徒会はこういうことにはあまり対処できず、困っていたらしい。そこで、生活指導の西村さんにお願いし手伝ってもらってもらい、なんとか対処してきた。が、

「西村さんに俺が暇そうにしてたところを捕まえられて、いくつか

手伝ってな。それで何回か手伝ってるうちにだんだんと頼まれてきたってわけ」
「へ～、そうだったのね」
「だから、俺はこうして泊り込みが多いわけ」

だいたい一ヶ月で１０枚～２０枚ぐらい、イベント（例えば清涼際）があるときはもっと増える。

「雅夜も大変ね。生徒会の仕事のために泊まらなきゃいけないなんて」
「そいつは違うぞ。仕事のために泊まるんじゃなくて、泊まったときに仕事があるだけだ」
「それでもよ。大変なことには変わりないじゃない」
「いや、そうでもないぞ。そこまで面倒な申請はないし、あんがい楽しいもんだぞ」

最初は面倒だったが、やってくうちにだんだんと慣れていき楽しくなっていった。

「俺と一緒に優子もやってみるか？・・・っと時間があまりないか」
「そうね、もう6時になるわね」
「ならまた今度だな。家まで送ってってやるよ」
「でも、やってみたいわね。・・・・・・・・・ちょっと待って」
「ん？」

そう言い携帯を取り出し、どこかへ電話をかける優子。

「・・・・・あ、秀吉？ちょっと母さんに言っておいてほしいことがあってね」

どうやら相手は秀吉らしい。

「・・・え、今いるの？だったら母さんに変わって・・・・・・・あ、母さん？」

今度は母親に変わったみたいだ。

「今日さ、学校に泊まるたいんだけど、いいかな？」

・・・・・・・はい？

「・・・・・・うん。・・・・・・違うわよ、一人じゃないわよ。・・・・・・え？変われって？雅夜、はい」

「・・・あ、ああ。もしもし、変わりました」

『あ、すいません。えーっと、お名前は？』

「あ、俺は２－Ｆの浅月雅夜といいます。秀吉とはクラスメイトです」

『秀吉のクラスメイト？・・・・・・秀吉。浅月君って知ってる？』

『む、浅月じゃと？もしかして雅夜のことかの？』

『そうそう、たぶんその浅月雅夜君』

『ふむ・・・。ちょっと変わってくれんかの』

『はいはい。・・・すいません。秀吉にかわりますね』

また秀吉にかわるみたいだ。

『雅夜かの？』

「ああ。なにか俺にでも言いたいことがあるのか？」

『姉上が学校に泊まるとか言っておるのじゃが・・・・・・どういうことじゃ？』

「それは俺も聞きたい」

『雅夜も知らないのかの！？』

「知らないと言うより、優子がいきなり言い出してな」

詳しく知りたいのはこっちだ。

第６２話（後書き）

突然ですがアンケートをとりたいと思います。

明後日、クリスマスイヴの日に、番外編を書こうと思っているのですが、
どうでしょうか？
書いたほうがよいか、書かなくてもよいか。
どっちかをお願いします。
投票結果が多いほうをやりたいと思います。

感想とアンケートお待ちしております。

第６３話（前書き）

アンケートの結果、クリスマス編を書こうと思います。

第６３話

「ちょっと優子と話すから、いったん切るな」
『うむ。話終わったらまたかけてくれなのじゃ。それまでにワシは母上と話しておくのでな』
「俺についてか？・・・へんなこと言うなよ？」
『はてさて？それはどうじゃろうかの』
「・・・後でかけなおす」

ピッ

あっちは秀吉に任せといて大丈夫？だろう。たぶん。
問題は・・・

「？どうかしたの雅夜？」
「どうしたの？じゃないだろ！？聞きたいことがたくさんあるんだが」
「あ、そうそう。親がＯＫだしたらアタシも泊まるから」

今の会話の流れから予想はしてたが・・・

「そうじゃなくて！どうして泊まることになってるんだ？」
「それりゃあ、泊まりたいからでしょ？なに当たり前のこと言っているのよ」

え？当たり前のことなのか？

「・・・食事は冷凍食品があるから、雅夜がなんか作ってくれるわね。・・・トイレは学校のが使えるからオッケー、・・・ベットは

あるし、パジャマは・・・ジャージがあるから大丈夫」

必要なものがあるかチェックし始める優子。

泊まる気満々だな。

「・・・・・うん。これなら泊まっても問題なさそうね」

「いや問題あるだろ」

「そう？大丈夫だと思うんだけど」

「あのな・・・・・・。食事とトイレと着替えは問題ないかもしれないが、ベットはシングルだぞ？」

「そうね。でも二人でもぎりぎり寝れるわよ」

二人って・・・・・・

「お前自分でいってる意味に気づいてるか？」

「？」

気づいてないのかよ・・・

「年頃の男女が一緒に寝るんだぞ？問題ありに決まってるだろ」

「・・・・・・・・・、・・・・・・・・・・・・！？（ボンッ！！）」

やっと気づいたようだな。

「え、えーっと、つまり、その・・・・・・／／／／／」

「どこまで妄想が働いているかはわからんが、だいたい想像通りだと思うぞ」

爆発寸前の爆弾みたいに顔を真っ赤にしていく優子。これはこれでかわいいな。

「それでどうするんだ？泊まることになったら一緒に寝ることになるんだが」
「・・・・・・・・・雅夜はどうなの？」
こっちに振りますか。
「そうだな・・・・・。俺からは泊まってもなにもする気はないから問題ないんだが、もしも優子から迫られたりしたら危ないかもな」
「ア、アタシから！？そ、そんなことするわけ・・・・・ないじゃない！」
「今のつまりはなんだ！？」
「大丈夫よ、たぶん！！いや、きっと！」
「信用出来ねーっ！！」
というよりも、なにかする気か！？
「いやな予感しかしないんだが・・・・・」
「いやな、ってなによ。アタシじゃ不満なわけ？」
「・・・別に不満ってわけじゃないんだが」
「ならいいじゃない。それともなに？アタシに泊まられたら困るって言うの？」
「いや、むしろ逆。泊まってもらったほうがうれしいに決まってるだろ」
「ふぇ！？・・・あ、ありがとう／／／／」
いきなりの台詞に驚いたのかおかしな声を一瞬上げる。
「けどな・・・。いろいろと問題があるような気がするが」

「大丈夫よ。アタシと雅夜なら」
「？俺とお前なら？なにを根拠に」
「雅夜になら、なにされても大丈夫だもの」
「っ！？お、お前なにバカなこといってるんだ！？」

自制心が危ういところまで持っていかれそうだった。いきなり何言い出すんだ！？

「ああ、もう！わかった。今日は一緒に泊まるってことでいいんだな？秀吉に連絡するぞ」
「ええ。雅夜のことは秀吉が母さんに話してると思うから、許可が下りるはずよ」

プルルルルッ　プルルルルッ　プルル――ピッ

「もしもし、秀吉か？」
『雅夜か。姉上との話はすんだのじゃな？』
「ああ。それで優子はこっちに泊まっても大丈夫なのか？」
『いま母上にかわる――――もしもし、浅月君？』
「はい」
『浅月君のことは秀吉から聞いたわ』
「そうですか。なんて言ってました？」
『うふふ。それはね『母上！雅夜には言わなくていいのじゃ！』らしいから秘密よ』
「わかりました。後で秀吉からじっくりと聞いておきます」
『そうね。そうしたら良いかもしれないわね』
『母上！？』
「まぁ、秀吉は置いといて。優子のことなんですが・・・」
『泊まりでしょ？良いわよ別に』
「いいんですか！？当事者が言うのもなんですが・・・男女二人っ

きりですよ?」
『そのあたりも考えて優子は泊まりたいっていったんでしょ?なら大丈夫よ』
「いや、最初は考えてませんでしたよ?」
『そうなの?でも、最後には自分から泊まるっていったんですよね?』
「え、ええ。まぁ」
『優子を任せても大丈夫かしら?』
「大丈夫です。任せてください」
『お願いね。うちの大事な娘ですもの。大切にしてあげてください』
「わかりました。ではそろそろ切りますね」
『あ、そうそう。もうひとつ言うことがあったわ』
「?なにか?」
『お互いにまだ学生なんだから、するときはちゃんとひに――――』
(ツーツーツー)
言い切らせるまえに電話を切る。秀吉、覚えてろよ・・・・・・

第６３話（後書き）

優子たちの親の名前ってどうしよう？
原作では登場してないから名前がない・・・・・・・

いい名前はないですかね？

感想お待ちしております

番外・クリスマス編　前編（前書き）

番外編・第一本目！！

・・・今度から行事があるごとに番外編書いていきましょうかね？

番外・クリスマス編　前編

「ねぇ、みんなでクリスマスパーティーでもしない？」
きっかけは明久のこんな台詞だった。
「クリスマスパーティーか・・・・・。それは良い考えじゃの」
「みんなでクリスマスパーティーですか？いいですね～」
「そうね。楽しそうね」
どうやら三人娘（笑）はオッケーみたいだ。
「明久にしては珍しくまともな意見だな？」
「こいつがそんなに深く考えられる訳がないしな」
「・・・・・・・・・なんか裏がある？」
一方俺たちは明久の意見に疑問を覚えていた。なにせ自分が助かるためにはどんなことでもする奴だからな。
「裏なんかないよ！ただみんなで楽しく過ごしたい思っただけだよ」
「どうせ食べ物が目当てなんだろ？」
「・・・ぐっ。そりゃあ、少しは思ってるけど」
少しだけなのか？
「それで雅夜達は平気なの？」
「ああ、大丈夫だ。俺も参加する」
「・・・・・・・・・・問題ない」

雄二と康太も参加することに決まった。

「で、雅夜は？」

「悪いがパス」

「・・・・・・・・・・・・・・・え？」

俺の返答に驚いたかのように明久が間抜けな声をあげる。

「なに驚いてるんだよ。高校生だったら普通だろ？」

「まさか・・・・・・！？」

「クリスマスは――――――優子と過ごすつもりだ」

『諸君。ここはどこだ？』

『『『最期の審判を下す法廷だ！！』』』

『異端者には？』

『『『死の鉄槌を！！』』』

『男とは？』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの！！』』』

『宜しい。これより――――――二一Ｆ異端者審問会を開催する！』

「黙ってろ負け犬どもが」

『『『なんだと!?』』』

「俺の邪魔をするんだったら――――――本気で潰しにかかるぞ」

『な・・・・・・!?』

『こっちはこの数だぞ!?まさか一人で勝てると思っているのか?』

「たったそれだけの数で俺を倒せると思うなよ」

『ええい、怯むな!!相手はたった一人だ!!いっせいにかかれ!!』

『『『おーーーっ!!』』』

「かかってこいよ、負け犬共。お前らのその腐った性根を全力で叩きのめす!!」

※少々お待ちください。

「くそっ・・・・・・!!俺達はまだ負けて――――――」

「なら、もう眠れ」

「グペッ!?」

最後に団長である須川のあたまを踏み抜いて、戦いは終わった。

「・・・・・・すごかったな」
「・・・・・・どうやったらできるの？」
「・・・・・・・・・・人間じゃない」

二一Ｆ異端者審問会団員総勢４３名をたった一人で――汗を掻かずに――倒す。たしかに人外のやることかもしれないな。だが、

「俺の幸福の時間を邪魔しようとするこいつ等が悪いんだよ」

自分（と優子）の幸福のためなら、全力を出して遂行する！

「と、いうわけで。俺は不参加な」
「う～ん・・・・・あ！だったら木下さんも一緒に呼べばいいんじゃないかな？」
「優子もか誘うか・・・・・・。わかった。優子がＯＫだしたらな」

そういって携帯を取り出し、優子に連絡する。

プルルルッ　プルル――ピッ

『はい、もしもし』
「優子か？雅夜だ」
『雅夜？そっちから電話かけてくるなんて珍しいじゃない』
「そうか？まぁ、その話はまた今度で。それよりクリスマスのことなんだが」
『良いホテルでもとれたの？』

まわりで聞いてた皆――明久、雄二、康太、秀吉、姫路、島田――が驚きの声をあげる。

「おいコラ。ちょっと待て」
「ホテルってどういうこと!?」
「あ、あの。そういうことはまだ早いと思いますよ!?」
「アタシたちまだ学生なのよ!?」
「むぅ・・・。姉上ともうそこまで行っておったのか」
「・・・・・・・・・・クリスマスにホテル!!（ブシャァァァァ）
」

・・・無視っていいかな?

「って優子。そんな話したっけ?」
『冗談よ。行っても別にかまわないけど』
「それはまた今度な」
『期待してるわ』

「いやいやいや!おかしいだろ!?」
「また今度って、やる気満々!?」
「向こうも期待してるよ!?」

「話を戻すぞ」
『ええ。クリスマスのことだったわよね?確か二人っきりで過ごすんじゃなかったかしら?』
「それなんだが、明久が皆でクリスマスパーティーやろう。って言い出したんでな」
『それに誘われた、と?』
「話が早くて助かる。優子も一緒にどうだ?」
『そうね・・・・・、いいわ。そのかわり埋め合わせはまた今度してもらうからね』
「オッケー。任せておけ。詳しくはまた後でメールする」
『わかったわ。じゃあね』

ピッ

「と、言うわけで参加することになった」

「・・・・・なんか邪魔しちゃって悪い気がするんだけど」

「優子がオッケーしたから、気にしなくて大丈夫だ」

「なら、いいんだけど」

番外・クリスマス編　前編（後書き）

クリスマス編・前編終了～。

最初は一話だけの予定だったんだが・・・・・・

クリスマスパーティーの予定を立てるだけで一話使うとは（汗）

感想お待ちしております。

番外・クリスマス編　中編

12月24日――――クリスマスイヴ

浅月宅

「「「「「「「お邪魔しまーす」」」」」」」

「「いらっしゃい」」

先に来ていた明久と、みなを迎える。

「でも、本当によかったの？雅夜の家で騒いじゃって」

「ん？あ、ああ。ウチの親、週明けまで出張でいないから大丈夫だ」

「姉上、お泊りセットは――――」

「もちろん持ってきてあるわよ」

なに持ってきてんの！？

「ところでお前らの格好って・・・・・・」

「せっかくだからサンタの衣装を調達したんだ」

どっから調達したかは企業秘密。

「意外と暖かくていいもんだよ」

「お前らがそれでいいなら、構わないのだが・・・・・・」

微妙になっとくしていないような雄二。

「心配するな。あと三着も用意してある」
「用意するなっ！」
「・・・・・・・・・・俺は遠慮しておく」
「わ、私もちょっと恥ずかしいので」
「そ、そうね。恥ずかしいわよね」

姫路、島田、康太は辞退。

「「準備はオッケーよ（じゃ）！」」
「ノリノリだ！！」

一方、木下姉妹（笑）はノリノリで着替えてくる。

「おぉー！似合ってるな」
「そうだね。二人ともかわいいね」
「そう？ありがとう」
「ありがとうなのじゃ」

二人ともよく似合っていて可愛いもんだ。ちなみに秀吉も女ものである。

「浅月君っ！！もう一着はどこにありますか！？」
「あ、瑞樹ずるいわよ！！アタシが着るのよ！！」

と、さっきまで着るのを恥ずかしがっていた二人がいきなり、サンタ服を迫ってきた。

「「どこにあるの！？」」
「落ち着け、お前ら」

「ねぇ、残りの一着って・・・」
「あれじゃろうな・・・」

「服はあっちにある。早い者勝ちだぞ？」
「瑞樹！負けないわよ！！」
「美波ちゃんでも、ここは譲れません！！」
「さきに触ったほうが着る、な？絶対だぞ」
「「はい！」」

そういって服を求めて奥の部屋へと入っていく。

「・・・いいの、教えなくて？」
「・・・残りの一着はあれじゃろ？」
「あ・・・・・・そういえばそうだったね」
「面白そうだから教えない」
「？どういうことだ雅夜？」
「残りの一着はサンタ服であって、サンタ服ではないものなんだよ」
「・・・・・・・・・？もっと詳しく」
「口で説明するより、目で見たほうが早いと思う」
「つまり説明するのが面倒、だと？」

御名答。

そうこう話しているうちに島田が部屋から出てきた。

「お、どうだった島田。負けたのか？」
「・・・・・アタシは勝ったわ」
「まぁ、ある意味島田の勝ちだな」
「そうね。姫路さんの負けね」

「？服は姫路がとったんだろ。だったら姫路の勝ちじゃないのか？」
「いいから。姫路を見ればわかる」
「「？？？」」

「・・・着替え、終わりました（シクシク）」
「なるほど・・・そういうことか」
「やっぱりそれじゃったんじゃな」
「それしか残ってなかったもんね」
「あー、姫路さん？可愛いから大丈夫だよ」
「あきらかに同情されてません！？」
「仕方ないと思うけどな」

簡潔に言うと、姫路の格好はトナカイである。しかも男性用。
もともと用意したのはサンタ服男性用二着、女性用二着、トナカイ男性用一着である。
明久が着ていた理由は、「トナカイを着る可能性があるんだったらサンタ（男性用）を自分で来たほうがいい！」と言い出したので、俺と一緒に着たのである。
で、女性用は適当に誰か着るだろうと思っていたのはいいが、問題はトナカイである。
本当だったら雄二あたりが着ればいいと思っていたのであるが、なにを思ったのか、姫路たちが迫ってきたので勝手にやらせておいた。
これはこれで面白いからな。

「しかも何で男性用なんですか！！せめて女性用だったらよかったのに・・・」
「だったら着なかったらよかったんじゃないの？」

「だって浅月君が『触ったほうが着る、な？絶対だぞ』って言ってましたから」
「触らなくて本当によかった・・・！！」

番外・クリスマス編　中編（後書き）

なんだかいろいろあり、サンタ服である明久、雅夜、秀吉、優子。

そしてなぜかトナカイである、姫路。

感想お待ちしております。

番外・クリスマス編　後編

「さて、エプロンは二着だけだし、俺達で料理作るか明久」
「え、でもそれじゃ・・・」
「いいから。女の子は服がよごれちゃったら大変でしょ？」
「あ、だったら私達も手伝わせてください」
「「いいから女子は座って待ってて」」
「「・・・はい」」

姫路（必殺料理人）なんかにうちの厨房に立たせてたまるかってんだ！

～明久と雅夜料理中～

「じ～～～～～～」
「どうしたの優子？」
「はぁ～。なんといいますか・・・・・・」
「キッチンになにか？」
「エプロンを着て料理する殿方の姿が――――」
「姿がどうかしたんですか？」
「色っぽいなーーと（ポッ）」
「なに言ってるんですかっ！？／／／／／」（↑すこし思ってしまった）
「そ、そうよ！なに考えてるのよ！？／／／／／」（↑ちなみにこいつも）

～料理終了～

「できた料理運んでー」
「あ、はい」
「そっちの男二人も働け」
「お、なんだ。もうできたのか」
「・・・・・・・・・・早いな」
「あらかじめ下準備はしておいたからな」

明久にちょっと早く来てもらっておいて正解だったな。

「うぅ・・・。美味しそうね」
「そ、そうですね・・・」
「あら、美味しそうじゃない」
「確かに。うまそうじゃな」

ん？姫路と島田はあんまりうれしそうじゃないな

「どうした姫路に島田。なにかあったか？」
「あ、いや。特に問題はないんだけど・・・」
「美味しそうだから困ってるといいますか・・・」
「あ、あー。そういうことか」

つまり、好きな人が自分より料理上手だと自分が（もし）手作り弁当を渡したとき比較される。ってことかな？

「明久に料理教えてもらったらどうだ？」
「・・・それはいいかもしれないわね」
「そ、それはいい考えかもしれませんね。今度一緒にお願いしてみ

ませんか、美波ちゃん？」
「ま、がんばれや」
明久の命に冥福あれ。

「明久。シャンパン開けちゃって」
「ＯＫボス」

ターゲット（雄二）ロックオン、完了！

「げっ！？こっちに銃口むけんなーっ！！」
「はっはっはっは！お約束はやらんとな！！」

まぁさすがに嫌がるわな。

「お約束で眉間打ち抜かれてたまるかっ！！」
「明久、そろそろやめておけ」
「ちっ、命拾いしたな雄二」

そういって天井に向けて、放つ！！

ガッ！！（天井にシャンパンの栓が当たる音）

バンッ！！（跳弾した栓が雄二の眉間に当たる音）

バンッ！（さらに跳弾した栓が明久の眉間にあたる音）

「「ふぬぅおーーーっ！！」」
「バカだなこいつ等」
結局お約束どおりになったな。

「皆、手元に飲み物は回ったかーっ！！」
「「「「準備完了！！」」」」
「じゃ、せーの！で行くぞ」
「「「「はいっ」」」」
「せーの！」

「「「「「「「メリー・クリスマス！！」」」」」」」

番外・クリスマス編　後編（後書き）

クリスマス編終了！！

一日で三回の投稿・・・・・がんばったな、俺。

感想お待ちしております。

第６４話

「・・・・・・・・・ハァ」
「なにため息ついてんのよ？」
「お前の親のせいだよ・・・・・・」
「？うちの親がなんか言ったの？」

最後まで言わせる前にきったよ・・・・・・。

「なんなんだよ、お前の親！？」
「普通の親よ」
「普通の親がこの状況であんなこと言うか！？」
「？あんなことって、なによ？」

・・・言わなきゃよかった気がする。

「べ、別に気にするまでのことじゃねぇよ」
「なによ？気になるじゃない」
「気にしなくていいんだよ」
「む～～～。そこまで逃げられると余計気になるわね」

どうか気になんないでください！

「泊まりの許可が出たんだから、別にどうでもいいだろ？」
「あ、許可出たんだ。それはよかったわ」
「出たら出たで、面倒なんだがな。ちょっと許可取ってくるから待ってろ」
「アタシも一緒に行くわ」
「そうか」

一緒に来てもらったほうがやりやすいかもしれないしな。

「榊さ～ん。いますか～」
「ん？おお。雅坊じゃねぇか。どうかしたか？」

この人は戌井（いぬい）　榊（さかき）といって、文月学園の警備員をしている人だ。

「今日も泊まるんで一応報告に」
「お、そうか。清涼際中に泊まるなんてご苦労なこった」
「そうでもありませんよ。あとそれともうひとつ」
「ん？・・・・・ああ、そっちの嬢ちゃんか？」
「はい」
「えっと、２－Ａの木下優子です」
「警備員の戌井榊だ。よろしくな穣ちゃん」
「よろしくお願いします」
「で、雅坊。コレか？」

そういって小指を立てる榊さん・・・・・ってちょい待て！！

「いきなりそれは無いだろ！？それと表現が古い！！」
「そうか？それより、どうなんだ？」
「ぐっ・・・。え、えーっと一応まだ違います」

「一応ってなんだ。一応って」

ああ、もう!!優子が近くにいるんだぞ!?

「（まだちゃんとは告白してないんです）」

「（まだってことは、する気はあるんだな？）」

「（ええ、まぁ一応）」

「（とっとと告っちまえばいいじゃねぇか？）」

「（こっちにも事情があるんですってば）」

「（なんだ。つまんねぇな）」

人の恋路をつまらないとは。

「雅夜、なに話してるのよ？」

「こいつが気になるのか、嬢ちゃん？」

「え、ええ。まぁ／／／」

「・・・・・・・・・ふむ」

ん？俺がどうしたって？

「（雅坊。お前ら両想いだろ）」

「（・・・まぁ、俺も鈍いわけじゃありませんからね。そうだと思いますけど？）」

「（わかってて告白しないのか？）」

「（こういう時はシチュエーションってもんがあるでしょ）」

「（む・・・・・。そいつは一理あるな）」

「（今度いい機会があるので、そのときに、と）」

「（ほぅ・・・。最近のガキってのはそこまで進んでるもんなのか？）」

「（さぁ？俺が違うだけかもしれませんね）」

「（けっ！マセガキかよ）」

マセガキって・・・・・・また古い表現を。

「っと、そういえば用件はなんだったっけ？」

「俺と優子が今日泊まるので報告しに」

「そうか。雅坊と嬢ちゃんが泊まるっと・・・・・・嬢ちゃんもか！？」

うぉ！？いきなり大きな声だすなよ！

「なにか問題でもあるんですか？」

「い、いや。問題はないんだが・・・・・・」

だったら驚くなよ。

「言うことも言ったし、そろそろ戻るぞ。優子」

「ええ。戌井さん、また今度」

「またな、榊さん」

「あ、ああ。じゃあな、雅坊に嬢ちゃん」

思った以上に時間食っちまったな・・・。

「それにしても、面白い人だったわね。戌井さん」

「そうか？俺にとっちゃあ厄介な親父ってところだけどな」

気さくでいい人でもあるけどな。

第６４話（後書き）

感想お待ちしております。

第６５話

「で。戻ってきたのはいいけど、これから何するの？」
「そうだな・・・・・先に飯にでもするか？」
「いいわよ。時間もちょうどいい頃合いだし」

時刻はただいま６時４０分。晩飯を食うにはちょうどいい時間だろう。

「なにか食べたいものはあるか？・・・・・・冷凍食品しかないけど」
「そうね・・・・・、ご飯ものはあるかしら？」
「ん？ああ。今日は清涼際だったな」

祭りのときはご飯ものをあまり食べないからな。食べたくなったのだろう。

「ご飯ものだと・・・・・・・・チャーハンかピラフだな。どっちがいい？」
「う～ん、チャーハンでお願い」
「了解」

冷蔵庫の中を覗いて目当てのものを探す。えーっと・・・あったあった、五目チャーハン。これだったら好き嫌いとかは問題ないだろうな。
カセットコンロを点火してその上にフライパンを置く。フライパンも暖まってきたところに五目チャーハンを入れる。冷凍食品は火にかけるだけで簡単に作れるからいいんだよな。

「優子。そっちの棚にある皿取ってくれ」
「・・・・・なんでもあるのね」
皿は俺が使ってるからあるだけだぞ。
「はい」
「ありがと」

優子から皿を受け取り、軽くキッチンペーパーで埃をとってからチャーハンを盛り付ける。

「よいっしょ、っと。ほら出来たぞ」
「あら?早いわね」
「あらかじめ食べるかもしれないのは清涼際中に解凍しておいたからな。解凍してあるのとしてないのとじゃ速さが全然ちがうから」
「へ〜、そうなの。いつもはレンジでやってたから知らなかったわ」
「レンジでやってもいいんだが、あいにくここにはレンジは無いからな」

レンジか・・・・・今度仕入れようかな?

「それよりも、冷めないうちに食うぞ」
「?もしかして急いでる?」
「俺手製のデザートがある」
「さ、早く食べましょ」

理解が早くて助かる。

「あ～、美味しかった・・・・・・」
「喜んでもらえてなによりだ」
食器を片付けながら返事を返す。
「おかわりがほしいくらいよ」
「俺の分をすこしやったろ？まだ食うつもりか？」
「雅夜のお菓子が美味しすぎるのがいけないのよ」
と、言ってももうお菓子はないからな・・・・・・
「今度Ａクラスに差し入れするつもりだから、そのときにでも」
「差し入れ？」
「そう、差し入れ。Ａクラスの他にもいくつか配るけどな」
「なんで差し入れなんか？」
「近頃、大量にお菓子を作る機会があってな。せっかくのことだし皆に配って感想でも聞こうかな、と」
「？感想なんか聞くの？」
「むしろそっちのほうが本題だな。高校生あたりの意見が一番ほしいか――――――」
そこまで言って、ハッと気づく。もしかして言わないほうがよかった、と。

「――――いや、なんでもない。気にしないでくれ」
「もう遅いわよ。またなんかアタシに隠しているわね」
「も、黙秘権を主張します」
「だいたい見当はつくけど。お菓子を大量に作って、高校生から感想や意見がほしいなんて一つしかないじゃない」
な、なにかな？
「雅夜は――――――新作のお菓子を作ろうとしている。それもお店で出すであろうものをね！！」
「ち、ちくしょぉぉおおお！！」
やっぱり言わなきゃよかったぁぁ！
「やっとわかったわ。雅夜のお菓子がこんなに美味しいわけが」
「どうしてこんなときにかぎって勘が鋭いんだよ！？」
「誰でも気づくわよ、ここまで聞いちゃったら」
Fクラスのやつらは絶対に気づかない！！雄二は除いて！

第６５話（後書き）

感想お待ちしております。

第６６話

「もう諦めて素直に話しちゃいなさいよ」
「・・・聞かなかったことにしてもらいたいんだが」
「無理ね」
「即答かよ！」

もう・・・・・・やだ・・・・・・。

「・・・そんなに話したくないの？」

俺の気持ちを察したのか、優子が声をかけてくる。

「・・・あんまり知られたくない」
「アタシの他に知ってる人はいるの？」
「この学校じゃ４人。いや、西村さんも知ってるかもしれないから５人だな」
「西村先生？・・・・・・あ、担任だからね。あとの４人は誰？」

えーっと、

「まず、ばーさんだろ。榊さんだろ。明久だろ・・・・・・」
「学園長と警備員。それに吉井君？」
「明久とは幼馴染みたいなもんだからな、そのよしみで。榊さんにはよく差し入れしたりするからで。ばーさんはばーさんだからな」
「吉井君と榊さんはわかったけど、学園長のは説明になっていないわよ」
「そのまんまの意味なんだが」
「・・・・・・まって。まさかアンタの母親の旧姓って、・・・藤

堂？」
「そのまさかだ」
不本意極まりないがな
「親族てきにはどのあたりなの？」
「伯母さんに位置する」
「・・・もう一人は誰なの？」
優子は学園長の話を避けるため、最後の一人を聞いてきた。
「ん、ああ。Ｄクラスの清水美春だ」
「清水さん？なんで？」
「あいつん家って喫茶店経営してるからな。そっち経由で」
「清水さん家ってどこのお店？」
「お前も知ってると思うが・・・駅前にある『ラ・ペディス』だ」
「ああ、あの文月学園生徒御用達の？」
「そう。それそれ」
結構美味しく、値段が手頃なので生徒達に人気の喫茶店である。
「それで、雅夜の家もお店やってのよね？」
「ああ。隣町で経営してる」
「なんてお店なの？」
「『喫茶・翡翠』って店だ。ケーキ類とコーヒー系統をおもにあつかってる喫茶店だな」
「雅夜もそこでアルバイトしてるの？」
「まぁ、一応週一でバイトしてる」
「・・・・・・ふ～ん」

ああ！俺はまた余計なことを！

「お前来る気満々だろ！？すっげぇ行きたそうな顔してるぞ！」
「な、なんのことかしら？」
「隠せると思ってるのか！？絶対に来るなよ！！」
「・・・そこまで反対されると逆に行きたくなるわね」

まさかの逆効果！？

「でもお前場所しらないだろ？どうやって来るつもりだ？」
「雅夜が教えてくれればいいじゃない」
「俺は教えん」
「じゃあ吉井君が知ってると思うから吉井君に教えてもらうわ」
「明久か・・・・・口止めしておくべきだな」

ただでさえ口が軽いんだ。脅す勢いでやらなければな。

「そのときは秀吉の寝顔写真で買収するつもりだからよろしくね」
「それは反則だろ！？」

秀吉の寝顔写真のためだったら平気で俺を売るだろうなあいつなら。

「いいから絶対に来るなよ！！」
「わかってるわよ。絶対にでしょ？」
「『絶対に押すなよ！』みたいなノリで言うなぁあああ！！」

もうこれ絶対にくるだろ！？

第６６話（後書き）

雅夜のお菓子が美味しい理由が明らかに！！

感想お待ちしております。

番外・お正月編　前編（前書き）

今回はお正月です。

番外・お正月編　前編

雅夜宅――――――

一月一日午前１１：００

「優子。もちでも食うかー？」
「食べる～・・・」
「りょーかい」

せっかくだし、七輪でも使うか。
押入れの中にある七輪を取り出し、もちを置く。

「お餅がふくらむのってなんかいいよね～」
「そうだな」

ぷくー

「「・・・・・・・・・・」」

和むな～

「雑煮と海苔醤油のどっちにする？ご所望ならぜんざいも作れるが」
「ぜんざいも美味しそうね・・・・・・あ、でもぜんざいはお雑煮に比べてカロリーが高そうね」

「イメージ的に高そうだけどそうでもないぞ」
「そうなの？」
作り方によるが。
「そもそもお餅食べてる時点でカロリーきにする必要はないと思うが」
「きーこーえーなーいー」
「気にしすぎだと思うぞー」
結局お雑煮（カロリー低め）を作ることになりました。
「そういえば皆は？」
「？皆って？」
「吉井君たちよ」
お雑煮を食べ終え、ふたたびコタツに入りながら会話をはじめる。
「クリスマスの時みたいに誘われたんじゃないの？」
「まぁな」
実際明久から誘われていたんだが断っておいた。なぜなら、
「あいつらのテンションに付き合うと疲れるからな。正月ぐらい休

ませてほしい」
「・・・それもそうね」

あいつらと一緒に新年を迎えたら最後。今年一年苦労に耐えないだろう。

「だからこうして家でぬくぬくと過ごしているんだ」
「ご苦労様」

ありがとう。と返しながらみかんの皮をむく。

「優子、食べるか～？」
「ちょーだい」
「はいよ。あーん」
「あーん・・・」

優子の口の中にみかんを入れ、俺も一切れ食べる。

「はあ～～～。コタツにみかん。最高の組み合わせね～」
「日本伝統さいこー・・・」

すばらしきかな、コタツの魔力。

「そういえば雅夜はもう初詣は行った？」
「だるいから行ってない」

寒いのは苦手だ。

「じゃあ今から行く？アタシもまだだし」
「ん～、それもそうだな」
・・・明久たちに会わなければいいけど。

番外・お正月編　前編（後書き）

お正月編、前編終了！

感想お待ちしております。

番外・お正月編　後編（前書き）

更新遅れて申し訳ございませんでした！

番外・お正月編　後編

「やっぱり、さみぃ～～」
「・・・・・そんなに寒いの苦手なの？」
苦手というより嫌いだ・・・

今いる場所は近くにある神社――――八坂神社に初詣に来ている。
とっとと御参りを終わらせて帰りたいのだが、

「それにしても結構こんでるわね？」

もう十二時になるというのに沢山の人がいるから無理そうであった。

「元旦だといっても、もう昼だぞ？こいつらどんだけだらだらしてんだよ」
「アンタもよ・・・」

まったく、だらしないやつらだ。

「だからアンタもよ」
「心の声までにもつっこみありがとう」

読心術が普通にできることにつっこみは入れないでおく。

「それよりも並びましょ」
「ん、ああ」

ざっと見て４、５０人くらい並んでいるのか？それなら・・・・・・

３０分待ちか。

「やっぱり帰っていいか？」

「ダメよ。帰るのは御参りしてから」

「仕方ないか・・・・・・ん？」

ふと後ろが気になり、いやな予感がしつつも振り向いてみると・・・

「・・・明久？」

・・・・・・そこには明久がいた。

俺に気づいた明久は、近くにいると思われる雄二たちに知らせようとし、

ダッ！！　（その隙に逃げようとする）

ガッ！　（優子に襟をつかまれる）

ジタバタ！！！　（必死に逃げようとする）

「頼む優子！！俺を見逃してくれ！」

「だーめ。せっかくここまできたんだから」

「ちくしょぉおおお！！」

見逃してくれよーーーっ！

「・・・なにやってるの雅夜？」

「新年早々騒がしい奴だ」
「うむ。まったくじゃな」
「・・・・・・・・・すこしは自重するべきだ」

お前らのせいだよ、ちくしょぉおおお！

「あけましておめでとう、吉井君に坂本君に土屋君に秀吉。秀吉ともどもよろしくね」
「あけましておめでとう。今年もよろしくお願いします、木下さん」
「あけおめことよろ。今年も雅夜を頼んだぞ」
「・・・・・・・・・あけおめ」
「うむ。あけましておめでとうなのじゃ。今年もよろしく頼むぞ、姉上」

年始の挨拶をかわす五人。

「雅夜も。あけおめことよろ」
「あ、ああ。あけましておめでとう。今年・・・・・・は遠慮させてもらいます」
「遠慮！？よろしくじゃないの！？」
「ああ」
「ああ。で、すましちゃダメだよ！」
「だってお前らに付き合うとすっげぇ疲れるんだよ」

楽が3割、疲れが7割？

「なんだと！？おい、雅夜。今の台詞は聞き捨てならねぇな」
「・・・・・・・・・不愉快極まりない」
「ワシも失礼じゃと思うんだがの」
「雅夜。今のはアタシも失礼だと思うわよ？」

「そうだよ！皆の言うとおりだよ！！」

・・・そうだな。確かに間違えてたな。

「わかった、確かにそうだな。俺が間違ってた」

「そうだよね。よかった～」

「お前らじゃなくて、明久だけだったな。すまなかった」

そういって素直に頭を下げる。

「って、よくないよ！！」

「雅夜、わかればそれでいいんだ」

「・・・・・・・・・ありがたい」

「うむ。それなら問題ないじゃの」

「うん。それならいいわね」

「皆も！？」

全会一致だな。

「そういえば、雅夜達も御参りはまだなのか？」

「ああ。今行く途中だった」

「帰ろうとしてたくせに」

それは言わないお約束。

「せっかく会ったわけだし、一緒に行こうぜ」

「そうね。一緒に行こうかしら」

「なんだ？雄二たちはまだだったのか？」

「ん～、まぁな。・・・実はついさっき起きたばっかりなんだ」
「ついさっきって・・・。もう十二時だぞ？」

遅すぎないか？

「皆、４時ぐらいまで起きてたんだけどね。限界が来て寝ちゃったんだよ」
「それで微妙に頭に寝癖があるのか」

じっくりと見ないとわからないほどだが、皆頭に寝癖がついていた。

「雅夜、なにお願いするの？」
「どうしようかな？あまりご利益とか信じてないし。優子は？」
「秘密♪」

ガラガラガラ

「「・・・・・・・・・・」」

・・・・・和むな。

「皆はなに願った？」
「俺は平和な日常」

「・・・・・・・・・スペシャルショット」
「ワシは皆と楽しく過ごしたい、じゃ」
「僕は美味しいものを食べれますように」
明久は神様になんてことお願いしてるんだ！？

「さて、御参りも終わったことだし羽根突き勝負なんてどうだ？」
「羽根突きだと？」
「その勝負受けてたつ！」

ノリノリだな、明久。

「・・・・・・・・・だが罰ゲームが墨塗りだけじゃつまらない」
「それは一理あるね」

ねぇよ。

「そこで俺はこいつを出す。雅夜――――の生着替え写真！！」
「いつ撮ったんだ！？」
「不満か？」
「不満だ！！」
「ならなんか別のものをだせ。話はそれからだ」

くっ・・・・・・。しかたないあれを出すか。

「ならばこれでどうだ！康太――――の鼻血写真！！」

「どえらいチョイスだな」
「・・・・・・・・・いつのまに!?」

それは企業秘密だ。

「木下さんもやる?」
「・・・そうね。アタシもやろうかしら」
「あ、明久!お主、なにやっておるのじゃ!?」
「バ、バカ野郎!!自分がやったことの意味がわかってるのか!?」
「なにって・・・木下さんを誘った――――」

バチッ!

「ぐふぁ!」(明久)

ズガンッ!!

「ごふぅ!」(康太)

ドゴンッ!!!

「がふぁ!」(雄二)

「・・・次は?」
「「キケンします」」(俺と秀吉)

優子って羽根突き威容に強いんだよな。

「今年の幸先が不安な光景だな」
「あ、あははは」
「というか三人とも動かないぞ？手加減はしたか？」
「したわよ」

『明久！雄二！ムッツリーニ！しっかりするのじゃ！！』
『なに、あれ・・・？』
『まさかこれほどまでとは・・・・・・』
『・・・・・・・・・人間じゃない』
『皆・・・！！よかった無事じゃったのじゃな。姉上が手加減しておいてよかったのじゃ』
『『『手加減して、これなのか！？』』』

「・・・なんだかんだで今年も騒がしくなりそうだな」
「そうね。不満？」
「どうだろ」

それが明久たちのいいところでもあるからな。

「とりあえず。改めて今年もよろしくな」
「よろしく」
「と、写真は返そうな」
「・・・・・・嫌」

番外・お正月編　後編（後書き）

今回は二部構成で書かせていただきました。

一日、二日と更新をしなかったことはすみませんでした！！

感想お待ちしております。

第67話

「・・・・・まぁこの話はまた今度で」
「そう?まだ話たりないわよ」
これ以上やったら俺の身がもたん!!

「いいかげん仕事を始めないといけないんでな」
「仕事・・・・・・?あ、ああ。西村先生が持ってきてたやつね」
「正解」

西村さんが持ってきた申請書にざっと目を通し、必要そうなものの準備をする。

「アタシは何すればいいの?」
「ん~、特にないな。しいて言うなら、申請書にでも目を通しておいてくれ」
「わかったわ」

いつも自分ひとりでやっているので、実際に優子にやらせることはあまりなかった。

「それにしても、改めて見るとすごいわね・・・・・」
「年に一度の清涼際だからな。いつも以上に不備に敏感になるんだろう」
「・・・それを一人でやっちゃう雅夜もすごいわよ」
「そうかー?技術と時間さえあればそこまで難しくはないと思うが」
前までは生徒会のやつらもやれてたわけだし。

「普通の高校生がそんな技術もってるのがおかしいのよ」
「・・・まぁ、俺が普通じゃないってことぐらいわかってるよ」
普通の高校生が、世界的に注目されているシステムの研究にかかわることなんてないだろう。
「よいしょ、っと。優子行くぞ」
「って、もうおわったの？」
「ああ」
さて、仕事の開始だ。
「さて、まずはここからだな」
最初に来たのは３－Ａの教室。出し物がお化け屋敷であり、時間も遅いためかなりの趣きがある。
「えーっと、３－Ａでは『中で使ってるものが壊れたぽいっす。直しておいてくんね？』だって」
「なにが壊れたのか書いてないか？」
「ちょっと待って・・・・・・・・・ないわね」
「マジかよ。探さなきゃいけないのか」

最初っから面倒なものだな。

「雅夜。そうでもないみたいよ」

え？

「ほら、あそこ」

そういって優子がある一点を指差す。そこには・・・・・・・・・・・・・・・『生徒会。後は任せた！』と書かれた張り紙が。

「お、サンキュ！助かった」

「どういたしまして」

優子に礼をいい。さっそくその張り紙のところにいく。

そして張り紙を取り、なにがどう壊れているのかを調べようとするが、

「・・・・・・ねぇ、雅夜。普段はこんなものまで直してるの？」

「・・・・・・・コレを直すのは久々だ」

「・・・・・・・やったことはあるのね」

「・・・・・・・ああ」

カバンから取り出したドライバーを使い、ラジカセ（・・・・）のそこを取り外す。

基盤のどこが悪いかを調べようとするが、すぐに見つかった。

配線が一本ねじ切れていた。

「優子。カバンの中に銅線があると思うから５ｃｍくらいに切ってくれ」

「は～い」

優子に銅線を切ってもらってる間に、中にあるねじ切れている配線のカバーの部分だけを切り取り、取り除く。

「雅夜」

「ん」

優子から銅線を受け取り、切れている部分を銅線で繋ぐ。

ラジカセが動くことを確認して、さきほどの銅線にカバーをつける。

「これで修復完了～」

「手際いいわね・・・」

俺にとったらこんなこと朝飯前だ。

お次は３－Ｂ。

「優子。ここは？」

「３－Ｂは・・・『水道が調子わるいです』だって」

教室に水道があるのか・・・。

「生徒会に頼る前にクライアンに頼れよ」

「お金がかかるし、明日までに来るかわからないからじゃない？」

「生徒会が出来ることは前提なんだな・・・・・」

「去年も同じこと頼んだんじゃないかしら。それで直ってたから」

・・・そういえばやったことあったっけ。

「とにかく、さっさと直して次に行きましょ」
「はいはい」

水道の調子が悪いのはだいたい栓がゆるんでいるか、しまっていないかのどちらかであるので慣れてしまえばそれほど難しくない。
案の定、栓がきちんとしまっていなかったのでそれをスパナを使い閉める。

「ほい。終了」
「もうアンタ、クライアンに就職しなさいよ」

さーって次だ、次だ。

三階掲示板前。

「雅夜、今度はここよ」
「掲示板か・・・。なんと?」
「『最近掲示板がガタガタと独りでにゆれるときがある。なんだか不気味なので調べて直しておいてくれ』・・・・・・なにこれ?」
「あー、それは無視していいや。あとで俺がやっておくから」
「ちょ、ちょっと待ちなさいよ雅夜!どういう意味か説明しなさいよ!」

説明と言われてもな・・・

「そうだな・・・・・・、優子。ここはどこだ？」
「？？えっと、三階掲示板前よ？」
「違う。もっと大きくでいい」
「もっと大きく・・・・・・？・・・・・・・・・文月学園？」
「そう、正解だ。ならその文月学園はどういった特徴がある？」
「・・・・・・試験召喚システムの試験校？」

お、今度は一発正解か。

「その試験召喚システムはどうやって出来ているか知ってるか？」
「たしか・・・・・・科学とオカルトと偶然によってつくられ・・・・・・・・。ま、雅夜？」

気づいたようだな。いや、気づいてしまったようだな。

「たぶん優子がたどり着いた答えであっている」
「ま、待って！！じょ、冗談よね！？」
「冗談じゃないぞ。ここはそういうところだ」
「嘘・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

今にも泣き出しそうな顔になる優子。そして、

「オカルトが本当に存在するっていうの・・・・・・・・・・」

決定的な台詞を言ってしまう。

第67話（後書き）

雅夜の仕事を手伝っているうちになんだかおかしな方向に進んでいく。

優子は無事、仕事を終えられるのか！？

感想お待ちしております。

第６８話

「オカルトが、本当に実在するっていうの・・・・・・・・・？」

優子は決定的な台詞を言ってしまう。

「ああ。世間ではお話の中の物だと思われがちだがな。オカルトは実在しているし、幽霊は存在しているし、超能力者や霊能者も本当にいるぞ」

テレビとかで時々やっているインチキや紛い物ではなく、本物のの、である。

「オカルトみたいな『不思議』なことは表向きは否定されてる。だけどその裏ではちゃんと実在しているんだ」

「・・・・・・なんで裏でしか実在してないの？」

優子は若干涙目で聞いてくる。

「そう言うのはマイノリティでな。表立って力を使ったりすると化け物扱いされて排斥されるかもしれない。だから表では誰も力を使わない」

この世界では知られてないだけで、数々の裏が存在している。

「・・・・・・雅夜はどうして信じてるの？」

もう落ち着いてきたのか、涙目ではなくなっている。

「その裏の世界の人とちょっとした知り合いでな」
「・・・実は俺も裏の人、とか言うんじゃないわよね？」
「お、よくわかったな。実をいうと見えるほう」
「見えるってなにをよ！？」

それは企業秘密だ。
というより、

「ホントに聞くか？」

聞いたら最後。後悔するぞ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・やっぱりやめとくわ」

懸命なご判断で。

「ならとっとと次行くぞ。ここはあとで俺がやっとくから」
「う、うん・・・」

・・・・・・他にもなければいいんだが。

とくにこれといった出来事はないまま四階の不備（オカルト系は除く）はあらかた終わった。何度か優子が「・・・雅夜って、なにものなの？」と言ってきたので「ちょっと手先が器用な普通の高校生」と返したら、優子に怒られた。なんでだ？本当のことをいったのに。

～三階～

「やっと三階ね・・・」

疲れたのか？

「まず最初は優子の所から行くぞ。なんかあるか？」

今回Ａクラスでの出し物の指揮を執っていたのもに不備を聞く。

「大丈夫よ。問題ないわ」

「そうか。ならＢクラスに行くぞ」

問題がないことは、いいことだ。さすがはＡクラス。

「Ｂクラスは・・・・・『いい加減、ゴミクズが邪魔です。消しといてもらえませんか？』だって」

「ゴミクズ・・・・・。ああ、根本のことか」

相変わらず評判悪いんだな。クラスメイトですらこの扱いだよ。

「消しといてもいいけど、いまはいないから後回し」

「消しちゃダメでしょ！？」

「あの女装趣味の代表だぞ？」

「見つけ次第、消去よ」

「イエス・マム」

Aクラスに女装してきたのを思い出させ、消去の命令をくだされる。
そろそろ根本の居場所なくなるんじゃない？

「Bクラスは他にないのか？」
「ん～っと、特にないわね」
「愚痴だけかよ」

根本の存在を不備申請書に書くな。書きたくなる気持ちはわかるけど。

「お次はCクラス」
「『畳が破けちゃった。予備の畳と取り替えておいて』」
「畳・・・？喫茶でもやったのか」

そういえばCの代表って茶道部だっけか？

「まぁいいや。優子ちょっと待っていてくれ。これは純粋に力仕事みたいだからな」
「そうみたいね」

えっと、破けてる畳は・・・あれか。ご丁寧に張り紙が張ってあるやつ。
畳を取り外し、教室の奥にあるカーテンで区切られたスペースに持っていく。その中にあった予備と思われる畳と交換しさきほどのところにはめ込める。

畳一枚、一往復なのでそこまでの重労働じゃないのだが・・・・・・
Cの奴らなぜ生徒会に頼った?

第６８話（後書き）

ちなみに私（作者）はオカルトを信じています。

・・・できませんけど（笑）

感想お待ちしております。

第69話

「Cクラスはこれだけか？」
「えーっと・・・・・・あ、あったわ。『Bクラスの変態（クズ）を消しといてもらえない？しつこくてうざったいんだけど』」
「・・・誰からって書いてある？」
「2－C代表・小山友香って書いてあるわよ」

やっぱり、あの根本（クズ）と付き合ってしまった可哀想な奴だったか・・・・・。
雄二から写真集受け取ったんだっけ？

「・・・Cクラスからも消去申請きてるのね」
「だな」
「ここまで来ると逆にかわいそうに思えてくるんだけど・・・」
「そうか？」
「さすがにね・・・・・・」

根本に同情したのか？

「根本は『俺が戦う姿を間近で見ないか？』とかなんとか気持ち悪い台詞を言って小山を連れてに大会に参加。一回戦は勝ちぬいたんだが、二回戦で運悪くも雄二と明久にあたる。雄二は小山に根本の女装写真集『生まれ変わったワタシを見て！』を渡すのを条件に勝ちを譲ってもらうよう交渉。小山は中身のことを知らなく興味があり、さらには大会には興味がなかったのであっさりと交渉成立。その後中身を見た小山は根本と別れた。――――――だとしてもか？」
「即刻排除よ」
「イエス・マム。――――近い内にには必ず」

「任せたわ」

先ほどまでの同情はどこかへと消え、排除の命をくだす。
Bクラス、Cクラス、優子の三つから（優子からは二回）同じ要望がきた。ここまで来るともう見逃せなくなった（元から見逃す気はなかったが）。

「Cクラスは他には？」
「小山さんに同情した女子から同じようなものが数通だけね」
「・・・そうか」

Cクラスの不備申請（もうすでに違うものになってきている）の返事は決まっているのだが、このことを伝えるのをどうやってするべきだ？
明日伝えるためだけにここまで来るのは面倒だしな。

「どうしたもんかな？」
「アタシが伝えてこうか？クラス近いことだし」
「・・・・・いや、大丈夫だ」
「そう？」

優子に頼むという手もあるが、そこまで優子の手を煩わせることでもない。
それに、これで伝わるだろうからな。

「えーっと、『不備申請書は見ました。近い内に掃除しておきます。生徒会より』っと」
「なるほど・・・・・、黒板に書いておくのね」
「これなら申請書出してきた奴には伝わるだろうし、知らない奴は『どこか汚いところでもあったのか？』としか思わないだろうしな」

根本（ゴミクズ）はきちんと掃除させてもらいますよ。

「次はDクラスか」

「・・・ここは『清水の暴走を止めてください！』や『玉野の様子が変です！助けてください！』という要望が多数あるわ」

清水はいつものことだが・・・

「・・・・・・・・玉野？」

「ええ。なんか休憩時間のとき、どこかへ行って戻ってきたら『ハァハァハァ。なにあの子！？かわいすぎるよぉ！！』って言ってたみたいよ」

「・・・・・・そうか」

そういえばアキちゃんが出始めたのって今日だったな。

「ねぇ。ここ申請はどうするの？」

「Cクラスと同じやりかたでいいか・・・」

チョークを片手に黒板をみる。

さて、・・・・・・俺が言えるのはこれだけだな」

「『頑張れ。応援している。　生徒会より』」

「まさかの投げ捨て！？」

「俺にどうしろっていうんだ！？清水一人ならなんとかなるかもし

れなかったが、玉野と清水の二人相手はどう考えても無理だろ!?」
「女子二人よ!?男だったらどうにかなるでしょ!」
「それは、あいつらが普通の女子だったらの話な!」

二人とも危険人物ランキング～女子版～（俺の中での）の上位に入る連中だぞ!?

「さて、残りE、Fの二つなんだが・・・・・」
「・・・・・ここ二つだけで10枚近くあるんだけど」
「ここでの対応は基本は決まってるから、簡単にすむ」
「え?こんなに沢山あるのに?」

大丈夫だ。問題ない。

「すぐ終わらせられる」
「・・・どうやって?」
「簡単なことだ。黒板に『あきらめろ。これが文月学園だ。生徒会より』と書いておけばいい」
「本当にそれでいいの!?」
「大丈夫大丈夫。去年もこれで行けたからな」

不備がでるのはすこしの間だけ。半年もすればなれてくるからな。

「だから3年のE・Fではあまりなかっただろ?」
「・・・そういえばそうだったわね」

「そういえば一年のはないの？」
「一年は設備は全部一緒だから不備はあまりないし、あったとしても年上にいちいち不備を申請してくる度胸があるやつがいると思うか？」
「・・・いないわね」
「だろ」

第６９話（後書き）

不備申請書のお仕事終了～。

後日談として

～Ｂクラス～

「後回しか・・・・・・。ま、いっか。やってくれるみたいだし」
「ん？なんかあったのか？」
「いや、なんでもねぇよ代表」

～Ｃクラス～

「お、畳やっておいてもらえたみたいだな」
「ラッキー♪これで楽でき・・・・・・女子はなにしてるんだ？」
「さぁ？・・・・・・なんだか黒板みてうれしがってるようだが」

～Ｄクラス～

「「「そんなーーー！！」」」
「どうしたんです？そんな絶望したような顔をして。なんかあったんですか？」
「「「（お前が原因だよ！！ちくしょーーっ！！）」」」

～Ｅクラス～

「あ、やっぱダメだとさ」

「まぁダメもとで頼んだことだったしな」

～Fクラス～

「なんだとっ！？不備申請が通らなかったと言うのか！？」
「はいっ！黒板に『諦めろ、これが文月学園だ。』と書いてありました！！」
「文月学園だからどうだというのか！！ええい。もっと申請書を送りつけろ！通るまでなんどでも――――――ぎゃぁぁあああ！」
「お前らは喫茶店に集中してろ！他のことなんか考えなくていいんだよ！！」

感想お待ちしております。

第７０話

カタカタカタカタカタカタッ

「・・・・・・・・・」

カタカタカタカタカタカタカタカタッ！

「・・・・・・・・・・・・・」

カタカッ！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！！

「なにやってるのよ、アンタ！？」

？プログラミングだが？

～数分前～

不備申請書を片付け終わったのでひとまず部室に戻ってきた。

「さて、こっから先の仕事は俺一人でやるんだが・・・」

「なんでよ?アタシも手伝うわよ」

「や、気持ちはうれしいんだが・・・・・・、出来ないだろ?」

残ってる仕事は腕輪の修復と不備申請（オカルト）の二つである。優子に出来るとは思えないのだが。

「・・・・・・・うん」

「それで、その間優子はなにする?」

「そうね・・・・・。雅夜の後ろで見てるわ」

「・・・暇だぞ?」

「大丈夫よ。見てるだけで楽しいから」

そうか。

「だったら先にシステムのほうをやるか」

「そういえば気になってたけど・・・・・清涼際中にやらなきゃいけない仕事ってなんなの?」

ん?・・・ああ。そういえば優子は知らないんだっけ?

「腕輪の故障の修理。出来る範囲だが」

「腕輪!?腕輪って大会の景品の!?」

「そうそれ。あのばーさん欠陥があるのに気づかないで景品に出し

やがってな。それの尻拭いをしなくちゃいけなくてな」
「・・・・・・直せるの？」
「ある程度は。完璧には無理だがな」
「・・・・・・出来るんだ」

無論。俺を誰だと思ってる。

「1時間で終わらせるから待っててな」
「・・・・・・そんなに早く終わるんだ」

適当にやるけどな。

※冒頭部分

「パソコンからでる音じゃないでしょ！！」
「そうか？いつもどおりなんだが」
「いつもこんな感じなの！？」
「あ、ああ」

なんかおかしいか？

「・・・・・・。・・・・・・もういいわ」

なにかを諦めたような顔で優子がいう。

「・・・ならいいが」

さて、作業開始だな。

カタカタカタカタカタカタ――――――――――ガガガガガガガガガガガガッ！

「・・・・・・・・・・おかしくない。これは普通。おかしくない」

後ろでなんか呟いてるような気がしたが、気のせいだろう。

第７０話（後書き）

雅夜のタイピングはとてつもなく速いです。

優子の疑問は当然であり、普通の反応です。雅夜がおかしいだけです。

感想お待ちしております。

バカテスト第7問目・・・・・・ではなくて（前書き）

今回は雅夜のプロフィール紹介です。

・・・・・・今後、まだまだ追加されるかも知れませんけど（苦笑）

バカテスト第7問目・・・・・・ではなくて

名前：浅月　雅夜　（あさづき　まさや）

容姿：黒髪短髪　目の色は黒に緑が混ざっている　顔は少し中性的
身長は明久と雄二の中間
疲れたときなどはメガネをかける。

家族構成：父親　母親　姉　雅夜　猫（カノン）

所属：文月学園・・・　２－Ｆ　科学研究部　ムッツリ商会（バイト）
その他・・・　翡翠屋（バイト）　ラ・ベデェス（スケット）

呼称：浅月　浅月君　雅夜　クソガキ　雅坊　マサ君　雅夜君　修羅　夜叉

性格：面白いことが大好きで、面白いことが起こりそう（起こせそう）だったら迷わず
ことの中心に行く。お調子者。
ノリが良く、その場の勢いに流されやすい。
頼まれ事は面倒といいながら結局やってくれる。面倒見がいい。

若干ツンデレ・・・・・・・・・ダルデレ？（どこかで聞いたことだあるようなフレーズ・・・・・・・）

好きな物（好きな事）：優子　シュークリーム　機械弄り　面白い事　楽しい事　火種を作る　猫

嫌いな物（嫌いな事）：暇　勉強（苦手というわけではないが）　火事　面倒事　女装

趣味：お菓子作り　機械弄り　スポーツ（特に剣道と空手）　調べ事

特技：お菓子（腕前はプロ並み）　剣道と空手（両方とも有段者）　プログラミング（研究者）　事務仕事

弱点：いじるのは得意だが、その反面いじられるのはあまり得意ではない。

本作の主人公。
一度死んでおりバカテスの世界は二度目の人生。簡単に言うと転生者。
前世であまり報われない死に方をしたので転生してからはいつ死んでもいいように悔いの無い人生を送ろうとしている。

雅夜の中では優子とはまだ友達以上恋人未満。告白をするまでは付き合っているわけではないので、その辺の区切りはきっちりつけている。

告白する気まんまんであるが。

周り（明久達や榊さんなど）はもう付き合ってるばかりだと思っている。

昔、ある事件（トラウマ）がきっかけで女装は絶対にしたくないと思っている。

明久と姫路はこの事件のことをしってはいるが、雅夜が話させないよう釘を刺している。

機械を弄ることが好きで（自作のＰＣを作るほど）、特にプログラミングが得意（タイピング速度は常人とは比べ物にならない）。

また、お菓子作りは趣味でもあり、特技でもある。腕前はプロ並み。

喫茶店での試作品を作るのを店から任されるほど。

バカテスト第7問目・・・・・・ではなくて（後書き）

ふぅ～・・・・・・・・・。

今はこれぐらいですかね？

後々改正されていくと思いますが。

感想お待ちしております。

第７１話

「ふぅー・・・・・・」

やっと終わった・・・。

「お疲れ様。腕輪はどうなったの？」

「ん～。代理召喚型のほうは４０００点までは大丈夫になった」

「もういっこのほうは？」

「同時召喚型は２５００点程度までしかいかなかった」

「２５００点・・・・・・。Ｂクラスくらいの点数ね」

まぁ、あの二人だったらこれで十分だが。

「で、次も優子は見てるのか？」

「ええ。もちろんよ」

次は残っている最後の仕事、オカルト関係である。

「でもな、優子は見えないだろ？」

とりあえず、当たり前のことを聞いておく。仕事を見るといっても、オカルト関係。幽霊が見えなければこの仕事は、一人ごとを呟いているだけである。

「・・・それはそうよ。アタシは一般人だもの」
「じゃあ、なんでそんなに見たがるんだ？」
「・・・・・・いい加減察しなさいよ」
「・・・・・・・・・は？」

察しろ言われても・・・。なにをだ？
と思った時、さきほど――オカルトが実在することを話した時――のことを思い出した。もしかして優子、

「・・・恐いから、一人で居たくないのか？」
「う、うるさい！そんなの別にいいでしょ！！」

と、顔を赤らめながらそっぽを向く優子。否定しないあたり、そうだったみたいだな。

「そりゃそうだな。オカルトが実在するって言われて、一人で――幽霊がでる場所に――居たいって思うやつはいないもんな」

優子はまだそっぽを向いている。ちょっと不謹慎だったかな？

「ごめんな、優子。気づけなくて」
「――――っ！！べ、別にいいわよ／／／／／／」
「いや、俺はわるかったんだ。だからごめん」

そもそもの原因は俺の不謹慎な言葉。

「・・・・・・反省してるの？」
「してる」
「・・・・・・嘘ついたら？」

「謝る。許してもらえるまで何度でも」
「・・・・・・。・・・・・・・、・・・・・・・ならいいわ」
「ありがとうな、優子」
やっぱり優子は優しい。
「そのかわり絶対よ。絶対にアタシを裏切らないこと」
「ああ、わかってる」

第７１話（後書き）

ちょっと短めですね（汗）

優子が一緒に居たがる理由。

年頃の女の子ですからねぇ。

感想お待ちしております。

第７２話

優子に許してもらえてから十数分後。
雅夜と優子は件の掲示板前に来ていた。いろいろと準備を終えて。

「優子。なにかあったらすぐ声をあげろよ」
「わかってるわ」

わかっているのは知っているのだが、心配なのにはかわりないんだよな。この手の仕事を一般人をつれてやることなんて今までに無かったし。

「んじゃ、始めるとしますか」

そう言いながらカバンの中から一本の小太刀を取り出す。

「？小太刀なんか何に使うの？」
「ん？あ、ああ。これを『器（うつわ）』として霊に取り付かせる為にな」
「・・・・・・・・・」

手に持った小太刀を掲示板に刺しつける。

――――オン――――

そう呟きながら突き刺した小太刀という媒体を通して、そこにいる霊に己の霊力を注ぎ込む。

『キャッ!?・・・な、なんデスかこんな時間にいきなり!?』
「こんな時間って・・・。本来ならお前みたいのの活動する時間だろ?」

出てきたのは15、6歳ぐらいに見える女の霊。俺らと同い年ぐらいか?

『いやー、そうなんデスけどね~。・・・・・・って、アタシの声が聞こえるんデスか!?』
「あ~、一応俺は霊能者にあたる」
『そうなんデスか・・・・・・。それでいきなりアタシを起こしたりして、なにがしたいんデスか?』
「さっきも言ったが、この時間はお前らが活動してる時間だろ?」

俺らみたいのは例外だが。

『普通はそうなんデスけど・・・・・・ほら、この時間帯ってほとんど人いないでしょ?』
「そりゃあな。こんな夜中にいるとしたら警備員ぐらいだもんな」
『それだと、面白くないじゃないデスか!』
「・・・・・・は?」
『せっかく幽霊になったと言うのに人を驚かせなくちゃつまらないデスか!』

ちょっと待った。えーっと、なんだ。つまり、こいつは、

「・・・・・人を驚かす為だけに、動きやすいこの時間帯は動かなくて。動きづらいけど、人が沢山いる昼間の時間に動いているって言うのか?」

『その通りデス！いやー、死んでから楽しいことがなくて地脈にそってブラブラしてたらこの学校を見つけましてな。（ムムッ。なにやら面白いことが出来そうな予感が！！）と頭に思い浮かんだんデスよ。そうしてこっちに来てみれば、動きづらかったはずの昼間でも結構楽に動けるし、物体ぐらいだったら憑依出来るようになっちゃったんデスよ！！』

「それで、いろいろな物に憑依して、人を驚かしたりして楽しんでたのか？」

『あー、まあぶっちゃけな所そうデスね』

「・・・はた迷惑もいいところだな」

『あははは！生前にも同じこと言われましたっけな？』

「生前もいたずらばっかしてたのか！？」

見たところ高校生だと思うんだが・・・・・？

『そういえば、アタシはなんで起こされていたんでしたっけ？』

「あ、ああ。お前のいたずらのせいで苦情が来てたらな」

『もしかして、アタシを除霊しにきたんデスか？』

「お、察しが早くて助かるな」

『ん～、そうデスか・・・。ちょっと悲しいと言いますか・・・・・・なんといいますか・・・・・・』

「そういわずとっとと成仏してくれ。幽霊がいると怖がる人がいるんでな」

『そこの女性のことデスか？』

幽霊は後ろで呆然と見ている優子を指差しながら言った。

「まぁな」

『彼女さんデスな？』

「な・・・・・・・・・ッ！？」

『おやおや、その反応はあたりみたいデスね。彼女の為に頑張っているんですか?ヒューヒュー、御暑いねお兄さん!!』
「中年のおっさんみたいな反応はやめんか!!」
『いいじゃないデスか!弄れるときには弄んないと面白くないと、言うデスし』

・・・俺も言ったことがありそうな言葉なので、反論はできないな。

「ええい、うっさい!有無を言わさず除霊するぞ」
『ええっ!?そりゃあないデスよ!!せっかくこんなに楽しい人生を――――』
「十分楽しんだだろ?・・・なら、もういいじゃないか」
『・・・・・・・・・ハァ。確かにアナタの言うとおりデスね。もう十分楽しみましたね』
「わかってくれたか。ならとっとと成仏してくれ」
『・・・その態度は気に食わないデスが、アナタの言うとおりデスからね。おとなしく従うとしましょうか』
「神様によろしく言っておいてくれ」
『・・・最後には使いパシリですか?・・・・・・・・・まぁいいデスよ』
「んじゃあな。あの世で頑張ってくれ」
『・・・・・・おおっと!そういえばアナタの名前を聞いていませんでしたね。なんと言うのデスか?』
「俺か?俺は浅月雅夜。神様とはちょっとした知り合いの、な」
『・・・・・浅月・・・・・雅夜。わかったデスよ、出会えたら伝えておきマスね』
「今度こそ、じゃあな」
『では』

――――ボンッ!――――

小太刀は小さく爆発し、廊下にその音を響かせた。

「お疲れ様。終わったの？」
「・・・・・ああ。本当に疲れた・・・・・・」

こんなに疲れたのは何時振りだろうか？

「そんなに疲れたの？・・・一人ごと呟いてるようにしか見えなかったけど」
「あー、やっぱり優子にはアイツの声が聞こえてなかったのか」

優子には聞かれなかったと思うとホッとする。特に最後のほう。

「アイツって？」
「俺と話してた幽霊」

そういえば、こっちは名乗ったのにアイツは名乗らなかったな。

「どんなのだったの？」
「んー、年は俺らぐらいかな？いたずら好きの女の子」
「へー。かわいかった？」

優子さん。顔が怖いですよ？

「ま、まぁかわいい部類に入るんじゃないかな」
「ふーん・・・・・・」

と、さらに顔が恐くなる優子。

「でもまぁ、優子ほどじゃなかったけどな」

「そう♪」

うわっ！すっげぇうれしそうな顔。

第７２話（後書き）

お仕事終了！

オカルトと言ってましたが、あんまりオカルトらしくなかったかも・・・（汗）

感想お待ちしております。

第７３話

「・・・・・？雅夜、なにかあるわよ」
「んー？」

浄霊が終わり部室に戻ってくると、優子がなにかを見つけた。
優子が指差したほうを見てみると、部室のテーブルにビニール袋が置いてあった。

「お！これはもしかして・・・」
「なんなの？」

たぶん、いつものだと思うから中身は・・・・・・

「よっしゃあ！さっすが榊さん。わかってるな」
「え？榊さん？？」
「そ。榊さんからの差し入れ」

そう言って、袋の中から取り出した物を優子に見せる。

「（大人の）グレープフルーツ！」
「お酒じゃない！？」

他にはピーチとか、レモンとか、グリーンアップルとかもあるな。

「優子は何味飲む？お勧めはピーチあたりだが」
「アタシたち未成年よ！？」
「と言いつつ、十八禁のものとかを平気で見ている優子であった」

たとえばＢＬ本とか、ＢＬ本とか、ＢＬ本とか。

「うっ・・・・・・。それはそうだけど・・・・・・」
「だろ？だったらチューハイぐらいいいじゃんかよ。ジュースとさほど変わらないぞ」
「で、でも・・・・・・」
「一本だけでもいいからさ」
「だ、ダメよ！お酒は二十歳になってからなの！！」
「じゃあ祝い酒だ。今日は優子と一緒に初めて泊まるからそれのお祝い。それだったらいいだろ？」
「・・・・・・わかったわよ」

よし、優子の懐柔成功！
・・・・・・でも、こう言う奴ほど絡み酒が多いんだよな。

優子と飲み始めて２０分後。
俺は二本、優子は一本空けたのだが・・・・・・。

「マサニャー、もうちょっとチョーダイ♪」
「まさかこうなるとは・・・・・・」

優子は完全に酔っていた。完璧に酔っていた。酔っているとしか思えない言動だった。
さすがにチューハイ一本でここまで酔うとは思っていなかったぞ・・

・・・・。

「マサニャ、くれないのかニャ？」
「もうダメだ」
「ナー・・・・・・」

優子はなんだかネコっぽくなってると思ったら、いつのまにかネコミミ（どこから持って来たかは不明）を付けてるし、いつもはしない行動（俺の背中に顔をうずめたり・・・）とっているんだぞ？

「ニャー♪（ゴロゴロ）」

しかも妙に色っぽいから困る。うれしいはうれしいんだが・・・・・。

「マサニャ？」
「どうした？（ナデナデナデ）」

優子に聞き返しながらつい、頭を撫でてしまう。俺はなにをやってるんだ・・・・・・？

「んニャー・・・・・・・♪」

気持ち良さそうに目を細める。か、かわいい・・・・・・。

「ニャー・・・・・・・・」
「ん？どうした優子。俺をじっと見て」
「・・・・・美味しそう」
「おーい、優子さん？その発言はいろいろとマズイ気がするんですが？」

若干優子から距離をとりつつ答える。

「マサニャ・・・・・・」

「ゆ、優子?」

だが優子は、その距離をすぐに詰め、俺にのりかかってくる!?

えーっと、今の状態を簡単に説明するとしたらアレだ、優子に押し倒されたいる状態だ。

って、マズいだろ!!

「と、とりあえず落ち着きましょうか、優子さん?」

「ヤダ」

「ま、待て優子。いったいなにをするきだ?」

「・・・・・・いただきます」

なにをだーーっ!?

第７３話（後書き）

優ネコ暴走（笑）

姫路も霧島も酒に弱かったので、優子にも酒を飲ませてみました。
（原作７．５巻参照）

感想お待ちしております。

第７４話

「・・・・・すぅ・・・・・・・・・すぅ・・・・・・・・」
「・・・やっと眠ってくれたか」

優ネコ状態になってから十数分後。すっかり眠ってしまった優子を見ながら呟く。

「よく耐えてくれた、俺の理性・・・・・・」

ここまで耐えた自分を褒めたい。
優ネコの『いただきます』が、実行されたときは本気で危うかった。
なにせ、優ネコがしたことは、

「・・・まず最初にいきなり抱きついてきて、・・・・・・それに驚いた隙に首筋に甘噛みされて、・・・・・・さらに驚いて後ずさりしようとしたところに、今度は耳を甘噛みされて、・・・・・・それで悶絶したらしたで、頬をなめられるはで」

落ち着くために、なにがあったのかを声に出しながら思い出していく。

「・・・・・で、いったん優ネコを引き剥がそうとしたら、それを掻い潜って胸に顔を埋めてきて・・・・・」

今、俺の胸の中で眠っている優子を見ながら、

「眠っちまったんだよな・・・・・」

と、呟く。
当のご本人様は、俺の呟きに「・・・・・・んにゃあ」と寝言で返す。

「・・・・・いいかげんベットに寝かせるか」

胸の中で眠っている優子を起こさないように優子を抱き上げ（お姫様抱っこで）ベットの上に移動させる。制服のままだけど・・・・・・大丈夫だよな？

タオルケットをかぶせ、頭を軽く撫でる。今日はお疲れ様、優子。

「さて、俺もそろそろ――――ふわぁ～・・・・・・。寝るか」

そろそろ明日を迎える時間。
今日やるべき仕事はもう終わっているので、もう寝ようと思うんだが・・・・・・・。

「すぅ・・・・・・すぅ・・・・・・」
「・・・・・・・・・」

俺はどうするべきだ？選択肢てきには・・・・・・

1. 優子を端に寄せて、俺はその反対側の端で寝る。
2. 違う場所（たとえば床）などで寝る。
3. 気にしないで一緒に寝る。

の三つか？

1はダメだな。優子が起きた時に悲しむかもしれないからな。
2は・・・・・そこまでスペースがあるわけでもないしな。保留。
3は一番良い案（俺達的には）なんだが、同時にダメ（社会的に）でもあるんだよな・・・・・・。

「・・・さて、どうしたもんかな？」
「・・・・・・ん～、マサニャ♪」
「どわっ！？」

考え込んでいると、寝ているはずの優子がいきなり俺をベットにひっぱった！？

「マサニャ～・・・・・・♪（ゴロゴロ）」
「っ！！」

またも俺の胸の中に顔を埋める優子。しっかりと俺を抱きしめたまま。
・・・・・もしかして、あれか？優子って抱き枕で寝るタイプ？・・・・・今度秀吉に聞いてみるか。

って違うだろ！？
今考えるべき問題は、俺が優子の抱き枕になっているという点だ。

抱き枕：寝具の一種。頭の下に敷くのではなく、抱くようにして使用する大型のものである。（ｂｙＷｉｋｉ）

寝具。つまり、一晩中使うものである。それでもって、一晩中使うということは、

（ずっと優子に抱かれたまま？）

このままだと、【3．気にしないで一緒に寝る】を強制的に選んでしまう上に、【↓優子を意識しながら一緒に寝る】という素晴らしい派生をしてしまうな。

「・・・・・・ん～♪（ゴロゴロ）」

「・・・・・・・・・・」

しかも、これはアレだ。拷問とでも言った方がいいかも知れないな。好きな人にずっと抱かれたまま一晩中過ごす。いつまで、理性を抑えていられるかな？

早く寝れればいいんだが、あいにく心臓がバクバクいってるから簡単に寝れそうもない。

（・・・・・・頑張って落ち着くしかないのか）

結局眠りにつけたのは、あれから3時間後であった。

第７４話（後書き）

すごいグダグダになってしまった（汗）

ただでさえ更新が遅れたのに（涙）

感想おまちしております。

第７５話

――――ｓｉｄｅ優子――――

「・・・・・・ん～、まぶしい」

もう朝になったのか、窓から差し込む朝日がまぶしい。

「・・・カーテン閉めとけばよかった」

しかしいちいち起きてカーテンを閉めに行くのは面倒。

「・・・ん～～～」

朝日がから逃れるため抱き枕を強く抱きしめる。・・・・・・なんだかいつもより気持ち良いわね？

「・・・・・・すぅ・・・・・・すぅ」

「・・・・・・・・・・・・え？」

目の前で雅夜が寝ていた。

いや、それだけなら別にそこまで驚かない。

だんだんと思い出していく。

昨日は清涼際だったと思う。それで雅夜と一緒に帰ろうと思っていたら、雅夜は学校に泊まるらしかったのでアタシも一緒に泊まったんだっけ？

それでもって雅夜の仕事を手伝ったり、仕事姿を見てたりしたんだ

ったわよね。
で、雅夜の仕事が終わって部室に戻ってくると榊さんからお酒の差し入れがあって、一杯だけ飲もうと思って・・・・・・・・・・・・・。

ダメね。ここから先が思い出せないわね。酔っ払っちゃって寝ちゃったのかしら？

けど、ただ酔っ払っちゃって寝たのならまだいい。（よくないけど）
でも・・・・・・・

（何でアタシは雅夜を抱き枕代わりにしてるわけ！？それに今気づいたけど腕枕もしてもらってる！？）

そう思った瞬間、

「・・・・・・ん？・・・ああ、優子か。おはよ――」
「き、きゃあああああ／／／／／／／／／／／／／／／／」

なんてタイミングで起きてくれてるのよ！！

――side雅夜――

「・・・・・・あらためて、おはよう。優子」

「お、おはよう。雅夜」

叩かれ赤くなった頬をさすりながら挨拶をする。（後に雅夜が語った。「優子のあそこまで大きな声（悲鳴？）を聞いたのは初めてだ」と。それと、「あのビンタは世界を狙える」と。）

「んで。なんで俺は寝起きにビンタされたんだ？」

いや、まぁ、想像はついているんだがな。

「お、起きたら雅夜と一緒に寝てたら驚くでしょ！！」

想像通りの返答。けど・・・・・・

「本当にそれだけなのか？」

「うっ・・・・・・」

と、またもや予想通りの反応。一緒に寝てただけじゃないだろう？

「優子が起きたとき、どうゆう状況だったんだ？」

すこし意地悪く優子に尋ねる。

「べ、別にどうでもいいでしょ！／／／」

「ほぉー。どうでもいいのかー・・・」

「そ、そうよ！！どうでもいいことよ！！」

「・・・ま、いっか」

っと、もう7時になるのか。早くしないと明久達が来ちまうな。

「優子。朝飯タマゴサンドでいいか？」
「え！？・・・あ、うん。大丈夫よ」
急な話の展開に驚いたようだが、すぐに返事は返ってきた。
「でも、早くない？まだ7時になったばかりよ」
「ん？もう7時だろ。・・・・・・優子っていつも何時頃朝飯食ってるんだ？」
「えーっと、普段は7時50分ごろかしら？学校がないときは食べないで寝過ごす時が多いわね」
「・・・・・・とりあえず、食おうか」
そういえば優子って学校では優等生だけど、家ではものすごいレベルのズボラだったな。
「あ！そういえば・・・」
「今度はどうしたの？」
「優子って抱き枕でいつも寝てるのか？」
「な、なんでアンタがそのことを――――朝起きたときのこと知ってわねーっ！！」
「ちょ、落ち着け・・・・・・や、やめろ優子！俺の腕はそっちにまがら――――――――っ！？」
全部優子からやったことだろ！？

・・・・・俺が酒飲ませたのがいけなかったのか？

第７５話（後書き）

優子の朝飯の時間は自分の（作者の）を参考にしています（苦笑）

でもズボラではありませんよ？

堕落してるだけです！（キリッ

感想お待ちしております。

第７６話

「お、やっときたか。おはよう、明久に雄二」

午前７時３０。もうすこし早いと思っていたが少しばかり予想が外れた。

「おはようー・・・・・・・・・って雅夜！？」

「雅夜だと！？・・・なんでお前がここにいる？」

「なんでって。俺はここの生徒だぞ？」

なにを当たり前なことを。

「いや、そうじゃなくてな・・・・・・。質問を変えよう。なんでお前はこんな時間にいるんだ？」

「その答えはだな・・・・・・・・・」

そこまでいって言いよどむ。いちいち説明するのは面倒ではないか？

「そうだな、明久が知っているとでも言っておこうか」

「本当か、明久？」

「えーっと・・・・・・・・・・・僕も知らないよ？」

「お前は昨日のことすら忘れたのか！？」

いくらバカだとは知っていたが・・・・・・これほどまでとは。

「昨日帰り際に言っただろ！！」

「帰り際・・・・・・・・・。ああ！あれか！！」

「やっぱり知ってたのか・・・・・・。で、なんなんだ？」

呆れたようにため息をはく雄二。苦労してるな・・・

「確か・・・学校に泊まるって言ってた気がする」
「学校に泊まる!?いったいなんの為に?」
「えっと。腕輪の修復だとか、壊れてるところ直したりだとかだっけ?」
「だいたいそんな感じだな」
「腕輪の修復だと?・・・・・・まぁ、『出来るのか!?』みたいはやばだからしないでおくが」
「お!気が利いてるねぇ」

明久は普通に聞いてきたがな。

「で、どうだった?完璧に治せるんだったら最初っからやってるはずだから、あるていどの改善はできたんだろ?」
「まぁな。代理召喚型は４０００までいったんだが、同時召喚型は２５００までしかいかなかったがな」
「十分じゃないか?俺でもまだ４０００にはとどかねぇんだし、明久にとって２５００は夢のまた夢の話だろうしな」
「だな」

お互いに笑いあう。やっぱり雄二とは気が合うな。

「っと。そういえばお前達テストを受けに早く来たんだろ?とっとテストの準備しろ」

この二人が朝早く学校に来た理由を思い出す。

「あ、ああ。それもそうだな。明久しっかりやれよ?」

「う、うん。せっかくここまで頑張ったんだ。しっかりやるさ」

俺の言葉にうながされてすぐに試験の用意をする。

準備が出来たのを確認して二人に声をかける。

「さて、それでは日本史のテストを始める。机の上は筆記用具以外は置かないように。それと机に何かが書かれている場合はカンニングと見なすので予め消しておくこと。また、途中退席は無得点扱いになるので注意を――」

「って、ちょっと待て！なんでお前が監督の教師役をやっているんだ！？」

「そうだよ！なんで雅夜がやってるの！？」

「なんで、と言われてもな・・・。暇だったところを西村さんに捕まったから、としか言い様がないんだが」

また、西村さんに捕まっちまったんだよ！！

まったく・・・あの人は遠慮と言う言葉をしらないのか？

「・・・まあいいや」

「なら最初から聞くな。テスト用紙を配ったら私語は慎むように」

仕事はやるからにはきちんとやるけどな。

・・・西村さん、俺の性格を理解しているから俺に押し付けたのか？

「はい、終了。ペンを置いて、悪あがきをやめろー」
「はいよ、っと」
「ちょ、ちょっと待って。ここを書いたら「あきらめろ」ああっ！」
明久の答案用紙をとる。まったく。やめろと言っているのに。

「・・・いいじゃんかよ、ちょっとくらいは。ケチ」
「なんかいったか、明久？」
「おーい、顔が怖くなってるぞ？」

大丈夫。雄二には危害を与えないから。

「で、明久。もう一度言うぞ。なんかいったか？」
「うっ・・・・・・。な、なんでもありません・・・・・・」
「そうか。ならいい」
「・・・・・・・・・ほっ」

制裁はあとでするとしよう。

コンッ　コンッ

「雅夜ー。そろそろ終わったかしら？」

ドアをノックして入ってきたのは優子。この二人のテストが終わるまでＡクラスの準備をして待ってもらっていたのだ。

「ああ、あとコレを西村さんに届けるだけ。そっちはもう終わったのか？」

「まぁね。そんなにすることはなかったけど」
「ん、そっか。西村さんにコレ渡してくるからちょっと待っててくれ」
「あ、アタシも一緒に行くわ」
「りょーかい」

っとと。雄二たちにも言っておかないとな。

「雄二に明久。お前らも準備くらいはしておけよ？」
「あ、ああ・・・・・・」
「う、うん。そうだけど・・・・・・」
「どうしたんだ？」

二人とも驚いてるように見えるが？

「「なんで木下さん（姉）がいるの（んだ）？」」
「・・・・・・・・・は？」

なにを言ってるんだこいつら？

「なんでって・・・。そりゃあ、俺と一緒に――――」

・・・・・待てよ。優子と一緒に泊まったことをこいつらに教えたらどうなる？

↓明久と雄二が驚く。

↓優子が軽く相槌をいれる。

↓明久は俺に殴りかかってくる。

↓雄二は興味を持って優子に詳細を尋ねる。

↓優子は顔を赤らめながら簡単に説明する。

↓明久の殴る力が強まる。

↓ちょうど教室にやってきた姫路たちが驚く。

↓雄二は面白がって事情を説明。

↓姫路と島田と秀吉はなにがあったかを優子に聞く。

↓その間に康太がＦＦＦ団を始動させる。

↓地獄の鬼ごっこスタート♪

大体こんな感じかな？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・隠し通さねば！！

第７６話（後書き）

久々に雄二と明久登場（笑）

雅夜は仕事のことになるとマジメモードになったりします。

感想お待ちしております。

第７７話（前書き）

更新遅れてすみませんでした。

インフルエンザって最悪ですね（苦笑）

第77話

「俺と一緒に、どうしたんだ？」

さて、雄二相手に（明久は気付かないだろうから）隠し通せるかな？

「俺と一緒に――――――仕事してたんだ」

とりあえず、優子が余計なことを言わないように本当のことを言っておく。

「仕事？なんのだ？」

「生徒会の。不備申請ってあるだろ？アレの対応を」

「なんでお前が？」

「雅夜って生徒会じゃないよね？」

「コレも西村さんに頼まれてるんだ。ったく、あの人の中では俺を雑用係にでもなっているのか？」

「ひごろの行いが悪いからそうなっているんだろうな」

「そうか？とくに何もやっていないと思うんだが」

「あ、でも僕もそんな感じだよ？」

「「バカは黙ってろ」」

「ハモらないでよ！！」

明久は当たり前だろ？

「っと、そろそろ行かなきゃな。優子、行くぞ」

「わかってるわよ」

「ん？・・・ああ。頼んだぞ」

「頑張ってね」

「まぁ、仕事だからな」

そう言いながら教室をでようとする。・・・・・・このまま行けるか？

「お、そうだ！木下姉！」

「ん？なにかしら？」

雄二が優子に声をかける。なにか用事でもあったのか？

「雅夜って寝るときもメガネかけてるのか？」

「かけてないわよ。そもそも昨日はコンタクトだったはずよ」

今朝新しいのに変えたがな。

ここでふと、疑問を感じた。

なぜ雄二はこんな質問をしたのか？それにメガネをかけたまま寝るわけもないのに。

雄二が気になり、見てみると・・・・・・・・・気色悪いくらいに顔がにやけていた。

なにか面白いことがあったのか？

いや、違う。この顔は楽しいときの笑顔じゃない。どちらかと言うと子供がよくやる顔だ。

そう――――――いたずらが成功したときの顔だ！！

「スマン、優子！！　ちょっと急用が出来た！！」
「え！？　いきなりどうしたのよ！？」
「させるかよ！　明久！！なにがあっても雅夜を逃がすな！！」
「え！？　なんかよくわかんないけど、わかった！」

わかるなよ！！　そう心の中で叫びながら廊下に出る。

きっと、さっきのは質問じゃなかった。あれは確認だったんだ。

俺がなにかを隠していることに雄二は気付いたんだろう。

さっき俺は仕事をしたと言った。
だが生徒会の仕事と言っても、なにも朝早くに来てまでするものじゃない。それに時間もかかる。

さらに腕輪の修理もやったと言った。
雄二には修理にかかる時間はわからないと思うが、結構時間がかかるものだと思っているはずだ。（実際は一時間程度で終わったが）
腕輪の修理は家で出来るとしても、生徒会の仕事は学校じゃないと出来ない。

そこで雄二は思い出したんだろう。俺が学校に泊まったことに。

俺は学校に泊まって仕事をした。それを優子も手伝った。
なら、優子も一緒に泊まったと考えるのが妥当だろう。
そこでさっきの質問になる。
あれは俺の寝るときの姿を見たのかを確かめるためだったんだ。

「あぁ、もう！　なんで気付くんだよ！！」

廊下を走りながら、後ろを追いかけてくる雄二たちに聞こえるように叫ぶ。

「ねぇ雄二！　雅夜がなにかしたの！？」
「明久！　なんとしてでも捕まえろ！　アイツは――――木下姉と一緒に泊まったはずだ！」
「雅夜ぁあああああ！！」

明久がさらに早くなった！？

「捕まって堪るかよ！」

負けじとスピードをあげる。――――目的地まで、あと少し！！

曲がり角を迷わず左に曲がり、目の前にある扉を――――――おもいっきり蹴って反対側にある教室に隠れる！！

「逃がすかぁぁあ！！」

追ってきた明久と雄二は俺が蹴った扉をあけ、中に入っていく。そこがなんの部屋か知らずに。

『どこだ、雅夜！！』

『どこに隠れやがった・・・・・・引き返すぞ明久！！』

『どうかしたの雄――――ま、まさか！？』

俺が扉を蹴った部屋は・・・・・・

『・・・なにをしてるんだお前らは？』

『『て、鉄人！？』』

拷問部屋【生徒指導室】である。

『西村先生と呼べ！！　・・・・・・お前らはテストを受けていたんじゃなかったのか？』

『あ、テストはもう終わりました』

『それよりも、ここに雅夜はこなかったか？』

『浅月・・・？いや、来てないが』

『そうか。明久、行くぞ』

『長居は無用だもんね。失礼しました』

そういって、さっさと部屋から出ようとするが。わすれてないか、こいつ等？

『生徒指導室の扉は鍵なしではあけられんぞ？』

『くそっ！　とっとと開けろ！！』

『雅夜が逃げてしまうじゃないか！！』

と、ここで俺は扉をすこし開け、中にあるものを入れる。

『なんだ？・・・・・・紙束か？』

『今のは・・・雅夜かっ！？』

『鉄人、早く！！』

『まぁ、待て。・・・・・・すこし待ってろ。フムフム・・・・・・』

『そんな紙切れなんかいいから！！』

『すぐに扉を開けやがれ！！』

俺が入れたのがなんなのかわかってないのか？

『よろこべ、お前ら。補習の時間だ』

『『なんだとっ！？』』

『とりあえず、テストの間違え直しと行こうではないか』

先ほどあいつらが受けたテストの答案。

走ってる最中に採点は終わらしてる！！

『『嫌だぁぁあああ！！』』

「清涼祭があるんで、早めに逃がしてあげてくださいね？」

『『雅夜ぁあああっ！！』』

一応中にいる西村さんに言っておく。

第７７話（後書き）

雄二たちにはバレたが、二次災害（ＦＦＦ団）はどうにか防げた（苦笑）

最後のほうはグダグダになっているが（笑）

感想お待ちしております。

第７８話

扉の向こうから『お助けよ～・・・』という声を聞き流しながら教室に戻る。

「優子になんか言われるかもな・・・」

事態を飲み込めていなかったであろうから、俺が突然どこかへ行ってしまったと思っているはずだ。
今頃、Ｆクラスの教室で俺を待っていることだろう。

「あとで、謝っとかなきゃな・・・・・・・・・・」

だが、あそこで雄二たちにばれてＦＦＦ団が動くよりも手早くすんだので良かったはずだと思う。

ふと、思い出す。昨日の約束のことだ。

（やべー、わすれてた！　・・・・・・・・・いつ謝ろっか？）

約束とは、明久に言ったことだ。『今回のことはしっかりと姫路たちに謝るつもりだ』と。
謝ること事態、問題はない。自分でも悪いことだとしっかりとわかってる。

ただ問題なのは――――

（謝ってる姿をあまり見られたくないんだよなー）

誰でも見られたくないと思うが、俺は人以上にそう思ってると思う。
なんどかしたことがあるのだが、自分の恥をさらしてるようで昔からなれない。
さらに、俺を見ていた人が近所の知り合いに面白そうに言いふらかして、一躍町中のうわさの人となったからだ。

（あれは流石に最悪だったな・・・・・・）

昔の出来事を思い出すが、すぐに記憶の奥底に戻す。出来れば二度と思い出したくなかった。

と、考えてる間に教室についてしまっていた。

「優子ー。またして悪かった・・・・・・な？」

教室に入りながら優子に声をかける。だが、そこでまたもや最悪のものをみてしまった。

優子が顔を赤くしながら、秀吉と姫路と島田に言い寄られてる姿をだ！（ちなみに康太はそばでどこかへと連絡していた）

それみた瞬間、俺は迷わず教室から飛び出す！！

「あ、雅夜!?　なんで登場と同時に退場してるのよ!?」
「浅月!?　ちょっとこっちに来なさいよ!!」
「浅月君!!　聞きたいことがあります!!」
「雅夜、詳しく聞かせてもらおうかの?」

優子は驚きながら、島田はちょっと顔を赤くしながら、姫路は興味心身な顔で、秀吉は嫌ににやついた顔で、俺を引きとめようとする。

いつもならなんだかんだいって、ここに留まっていたことだろう。

だが、俺はそんなのに構ってる暇はない。なぜなら・・・・・・

「・・・・・・・・・すぐに集まれ。全力で異端者を殺すぞ」
『了解した。すぐそちらに着く。それまで異端者を逃がさないようにしておいてくれ)
「・・・・・・・・・こちらも了解した」

そういってスタンガンを構える康太を視界の隅に捉えたからだ。

「スマン、優子。話は後でだ!!　俺は全力で・・・・・・逃げる!!!」
「ちょ、ちょっとどうしてよ!?」

康太一人だったらすぐに対応できるんだが・・・・・・、すぐに来るであろう嫉妬に狂ったＦＦＦ団の連中を相手するのはさすがに無理がある。

「・・・・・・・・・逃がさない」
「簡単に捕まってたまるかよーっ!」

地獄の鬼ごっこスタート♪

鬼は次第に増えていく。

第７８話（後書き）

感想にあったので、地獄の鬼ごっこをスタートしてみました（笑）

・・・・・簡単に終わらせますが（苦笑）

感想お待ちしております。

第７９話

走り始めてからだいたい十分ちょい、ってところか？
登校してきた奴らがちらほらと見え始めてきた。

『Ａ、Ｂ班は上の階から、Ｃ、Ｄ班は下の階から回り込め！』
『Ｅ班はこのまま追跡！！』
『『『了解っ！』』』

後ろからは嫉妬に燃えた鬼達の声が聞こえる。
あーもうっ！

「無駄なスキルが高けぇんだよ、お前ら！！」
『『『異端者には死を！！』』』

逃げ始めは一人（康太）だけだったのだが、数分もたたないうちに４０人近くに鬼は増えていた。
一対Ｆクラス（姫路、島田、秀吉、明久と雄二（まだ出てきてないだろう）を除く）という状態での地獄の鬼ごっこである。

これ、なんて無理ゲー？

『マテや浅月っ！』
『さっきの話を詳しく説明しやがれっ！！』
『今ならまだ、処刑でゆるしてやるぞ！』
「それは許してるとは言わないっ！」

後ろからは４，５人程度。これが一斑の人数なら、先ほどの会話からして上と下の階に約十人ずつぐらいいるのだろう。

・・・・・奥の手を使うべきか？

・・・・・・・・・・・・・いや、まだ早いな。

『くそっ！　結構足速いぞアイツ』

『ああ。でもこのまま行けば、浅月は袋のねずみだ』

『絶対に捕らえるぞ！』

「このまま行けば、ね・・・・・・」

確かに捕まってしまうだろう。ならちょっとばかし・・・・・・・・・・・・・

・無理してみるかな！

『『『なっ！？』』』

いきなり進路を逆にし、連中の隣を駆け抜ける！！

「喫茶店でちゃんと働けよ！」

すれ違いざまに言う。忘れてもらっていては困るからだ。

『くそっ、やられた！』

『すぐに上と下の奴らに連絡しろっ！！』

『わかってる！・・・・・浅月は逆走している！くりかえす。浅月は逆走している！』

・・・頼むから早めに喫茶店に行ってくれ。

「止まれ、雅夜」

「こっから先は行かせないよ」

「・・・明久に雄二か。もう出てきたのか？」

目の前に明久と雄二が現れる。

「今回のテストは頑張ったからね。そこまで間違えてなかったからだよ」

「間違えがすくなければ、間違えなおしはすぐに終わるからな」

そういえば、そうだったな。

「で、お前らも俺を捕まえようとするのか？　何のために？」

「異端者には死を。ＦＦＦ団のモットーだよ？」

「俺はお前の幸せがムカつくからだ。あきらめろ」

ふぅ・・・・・・。まったく。

「俺を止められると思ってるのか？」

軽く構える。昨日の出来事を忘れたわけじゃないだろう？

「・・・確かに俺一人じゃ無理だろうな」

「でも、僕達なら出来る！」

僕達、ねぇ・・・・・・・・・・。

ヒュ――ガシッ！

「・・・・・・・・・・っ！？」

「無理だな」

「「ムッツリーニっ！？」」

背後に迫ってきた康太を、明久たちから目をはなさずに捕らえる。

「まだまだだな、康太。殺気をビンビン感じたぞ？」

「・・・・・・・・・・・・不覚」

項垂れる康太。殺気を殺せなきゃ、暗殺業は勤まらない。

「で、お前らも。もう俺のことはあきらめて、喫茶店に集中しろ」

正直にいうと、そろそろ清涼祭が始まる時間だ。

「俺を殺るのは後でも出来るだろ？　けど、清涼祭は今しか出来ないだろ？」

簡単に殺させてやらないけどな。

「まぁな」

俺の問いに雄二が答える。

「明久も。姫路の為に頑張るって言ってたけど、やらないのか？」

「や、やるよっ！」

明久は、マジメな顔をしながら答える。

「なら、さっさと働くぞ」

「う、うん！」

「雄二、ＦＦＦ団（バカ）どもの説得を頼むぞ？」

「わかってる。適当にいいわけしておいてやるよ」

適当ってのが気になるが、雄二に任しといて大丈夫だろう。
雄二をその場に残し、明久と教室に戻る。

「・・・・・・・・明久。ちょっと用事思い出した」
「ダメだよ、雅夜。昨日は雅夜もあまり働いていないんでしょ？」
「疲れることは、目に見えてるんだよ！！」

教室に入ると、そこには、

ワクワク、ドキドキしている秀吉達と、何かを思い出して顔を真っ赤にしている優子がいた。

第７９話（後書き）

地獄の鬼ごっこ、適当にやってしまった（汗）

本格的にやるのは、また今度にします。

感想お待ちしております。

第８０話

「優子。そろそろＡクラスに戻ったほうがいいんじゃないか？」
「え！？・・・・・・・あ。う、うん」

顔を赤くしていた優子に時計を指差しながら言う。このままだと、Ａクラスに戻らなさそうだからな。

「・・・今日は一緒に清涼祭回れないかな？」
「う～ん・・・・・・。たぶん無理だろうな。忙しくなるだろうし」
「・・・・・・そっか。・・・・・・・・・うん。そうだよね」

残念そうに笑顔を作る優子。まぁ、こっちだって残念だとは思ってますよ？

「遅いかもしれないけど、放課後になったらＡクラスに行くから」
「うん♪　待ってるね！」

最後にそう言い残し、教室を出てＡクラスに向かってく。
今日一日は優子の笑顔の為に働く、といっても過言ではないだろう。

「よし。ヨーロピアンの準備でもするか」

気合は十分、ヤル気も十分！昨日働かなかった分を取り返さなきゃな。

「「「「（ジー）」」」」

・・・・・・・・・そろそろ無視をやめたほうがいいかもしれない。

「・・・優子から、何を聞いた?」

明久は別として、姫路・島田・秀吉が問題だ。

「ええっと、それは、その~・・・・・・」

「あ、あははは・・・・・・」

姫路と島田は言い辛そうに、

「言って欲しいのかの?」

秀吉はニヤつきながら答える（答えになっていないが）。

「ふむ・・・。優子の言ったことだからな・・・・・・。嘘のことを言うとは思えないが、事実だけを言うとも思えないんだよな」

事実に妄想をねりこんでそうだ。聞かないほうがいいだろう。

「・・・だが!俺はあえて聞こう!!」

「いいのかの?」

「俺にかかわりがあるからな」

優子がどんな風に話したかは分からないが、まったく見当がつかないというわけでもない。

それに・・・・・・ちょっと気になるからな。

「・・・なるほどのぅ。わかっったのじゃ。姉上が言ったの――――」

（ガラッ）「うぃーっす、戻ったぞ」

何の前触れもなく扉を開けて入ってくる雄二。

「ん？どうかしたか？」

教室を見渡しながら聞いてくる。

「「「「「（タイミング悪すぎ）」」」」」

「なんだ！？　どうして俺は邪魔者を見る目で見られてるんだ！？」

チッ。タイミングが悪すぎんだろ。興がそそがれたな。

「ハァ・・・。この話はまた今度だな、秀吉」

「そうじゃな・・・」

「僕は聞きたかったんだけど・・・」

「私もどこまでが本当か知りたかったです・・・」

「ウチもよ。今後の参考にしようと思ってたのに・・・」

「「「「「ハァ・・・・・」」」」」

「悪いのか！？　俺が悪いのか！？」

十中八九お前のせいだ。

第８０話（後書き）

バカテス９巻ついに発売！！

ネタバレになるので、詳しくは書きませんが・・・

今回はすごく熱かったと思います！

感想お待ちしております。

バカテスと第8問目

第２１問　以下の問いに答えなさい
『冠位十二階が制定されたのは西暦（　　）年である』

姫路瑞樹の答え
『６０３』

教師のコメント
正解です。

坂本雄二の答え
『６０３』

教師のコメント
一体どうしたのですか？　驚いたことに正解です。

浅月雅夜の答え

『６０３』

教師のコメント
正解ですが・・・・・なんでこんなに小さく書いたんですか？

吉井明久の答え
『６０３』

教師のコメント
君の名前を見ただけでバツをつけた先生を許してください。

第２２問　【？】と【？】に当てはまる語を答えてください。
『マザー（母）から【？】を取ったら【？】（他人）です』

姫路瑞樹の答え
『マザー（母）から【Ｍ】を取ったら【ｏｔｈｅｒ】（他人）です』

教師のコメント
その通りです。Ｍｏｔｈｅｒから『Ｍ』がなくなるとｏｔｈｅｒ（他人）という単語になります。
こういった関連付けによる覚え方も知っておくと便利でしょう。

土屋康太の答え
『マザー（母）から【M】を取ったら【S】（他人）です』

教師のコメント
土屋君のお母さんが『MS』でも『SM』でも、先生はリアクションに困ります。

吉井明久の答え
『マザー（母）から【お金】を取ったら【親子の縁を切られるの】（他人）です』

浅月雅夜の答え
『マザー（母）から【常識】を取ったら【関わりたくない人】（他人）です』

教師のコメント
英語関係ないじゃないですか。

バカテスと第8問目（後書き）

感想お待ちしております。

第81話

「お前らに清涼祭を成功させる為に言いたいことが三つほどある！」

開店準備を終え、クラス中を見渡しながら皆に聞こえるように言う。

「まず一つ目！今朝の出来事はわすれろ！！」

俺が言った途端にブーイングが飛び交う。

『忘れるわけねぇだろうがっ！』

『坂本の言うことが本当じゃなかったら、ぶち殺してるところだぞ！！』

『清涼祭の間だけの命だと思えっ！！！』

訂正。罵倒が飛び交っていた。

「・・・ん？雄二の言うこと？」

なんのことだ？

「ん、ああ。ＦＦＦ（こいつら）団を説得するときにいったことだろ？」

俺が疑問を思ったことに気づいた雄二が言ってくれる。そうか。あのときのことか。感謝しとかないとな。

「――――雅夜が神級のヘタレ野郎ってな」

・・・いやぁ、感謝、感謝。これはお礼をしないとな。

「雄二は後で霧島にあげるとして・・・」
「おい、雅夜っ!?てめぇなにをいってやがる・・・っ!」
「俺の感謝の気持ちだ。快く受け取ってくれ♪」
最高の笑顔で答える。お礼はしっかりとやらないとな。
「・・・ふざけてんじゃねぇぞ――――」
「まぁ、冗談(ゆうじ)は置いといて」
「置いとくんじゃねぇっ!!」
時間がもったいないので、無視無視。
「二つ目に、さきほどのワビと言っては何だが、報酬を出したいと思う!」
と言うより口止め料だけど。
『報酬程度で済ませれると思ってんじゃねぇよな?』
『いやちょっと待て。あいつってムッツリ商会でバイトしてた気がする。だったら・・・・・激レアもんかもしれないぞ?』
『『『まずは確認だな!』』』
む。FF団(ばか)にしては鋭いな。
「ご名答。俺が出す報酬はムッツリ商会では扱われていない、俺だけがもっているものだ!!」
「・・・・・・・・・雅夜。内容を詳しく」
「あせるなよ、康太」

俺だけが持っている商品に、誰よりも早く食い付く康太。ムッツリーニの名前は伊達じゃないな。

「とりあえず、商品を皆に配ろうと思う。ちなみに二次配布は禁止だからな」

言いながらポケットの中からほんの５０枚ほどの写真を取り出し、皆に配る。

「っと、姫路と島田と秀吉もいるか？」

こいつらは要らなさそうだからな。

「ウチはいいわよ」
「私もちょっと・・・」
「ワシもじゃ」

予想通り、いらないようだ。

「じゃあ・・・・・・一人一枚ずつ、皆に回せよ。あ、まだ見るなよ！」

注意をしながら近くにいたやつらに渡す。すぐに騒がれたら回りが遅くなるからな。

「全員受け取ったか？・・・・・・よし、見ていいぞ！」

全体に行き渡ったところで写真を見させる。

『『『おおーっ！！』』』

写真に写っているのは一見、のほほんとしたお嬢様である。

『見てるだけでいやされそうだ・・・』
『霧島さんとはまた違った感じのお嬢様だな！』
『お嬢様と言うより、お姫様って感じじゃないか？』
『浅月。誰なんだ、この綺麗なお嬢様は！？』

誰、と聞かれてもなぁ。

「名前は深風（みかぜ）。年は２３歳。職業は喫茶店のウェイトレス」

これで十分か？

『深風さん・・・か。いい名だ』
『５歳年上か。お姉さんといったところだな』
『ウェイトレス・・・・・・。確かに、言われてみるとそんな感じがするぞ』
『苗字はなんと言うんだ？』
『性格も聞きたいところだな』

苗字と性格、ねぇ・・・。

「苗字は悪いが企業秘密だ。性格は見た目のまま、のほほんとしたお嬢様」

そしていたずら好き。俺の苦手なタイプだ。

「・・・ん？　あれ・・・？　この人どこかであったことが――――」

「チェストッ！！」
「グペッ！」

余計なことを言いそうになった明久を黙らせておく。ふぅ・・・・・・危なかった。

「それと、清涼祭でもっとも頑張ったと俺が思った奴には、特別バージョンを与えようと思っている！！」
『『『特別バージョン！？』』』
「ただの立ち絵じゃつまらないだろう？　なので、ちょっとしたポーズをとってる」
『『『ちなみにどんな？』』』
「それは企業秘密だ。頑張って手に入れるんだな」

簡単に教えてしまったら、興が冷めてしまうだろう？

「ちなみに、異端者審問会を開いた者、騒ぎを起こした者、時間を守らなかった者には獲得権がなくなる。これらの原因を作った者もだ」
『『『任しとけっ！！』』』
「なら、準備は良いな？」

――――ピピッ

タイミングよく、時計が清涼祭が始まる時間を告げる。

「――――中華喫茶『ヨーロピアン』やるぞ！！」
『『『おっしゃーっ！』』』

第８１話（後書き）

『バカノリ』では原作と違い、雄二と明久は屋上に寝に行きません。

刺激があったのできちんと目が覚めています（笑）

深風さんについてはそのうち紹介すると思います。

感想おまちしております。

第８２話

「八番にウーロン一、肉まん一よ！」
「・・・・・・・・・了解」
「三番に胡麻団子二、紅茶二入りました！」
「了解、っと」

姫路と島田から伝票を受け取って、すぐに作り始める。
あらかじめ作っておいてある団子の実にあんこを入れ、軽く胡麻をまぶして強火の油にさっと通して皿に盛り付ける。
開店してから一時間。昨日の反響のせいか、忙しくはなく、暇でもない状態が続いていた。

「三番の胡麻団子二出来たぞ」
「・・・・・・・・・肉まんも」
「ウーロン一に、紅茶二もだ！」

厨房には胡麻団子などのお茶菓子担当の俺、肉まんなどの軽食担当の康太、飲み物担当の須川、その他雑用係が五名ほどいる。
昨日は須川がお茶菓子も担当していたのだが、お茶菓子ぐらいなら俺も作ることができ、なおかつ須川より美味しいことから須川は飲み物専門になった。

「四番に胡麻団子一、あんまん一、ウーロン一、プーアル一ですっ！」
「一番に胡麻団子二、紅茶一、ジャスミン一じゃ！」

つくり終えるとすぐに次の伝票を持った秀吉と葉月ちゃんがやってくる。葉月ちゃんは今日も朝早くからきて喫茶店を手伝ってくれて

いる。
さきほどと同じように胡麻団子をつくり、皿に盛り付ける。ちなみに胡麻団子は二つで一品となっていたりする。

「胡麻団子二と一出来たぞ！」
「・・・・・・・・・あんまんも」
「ウーロン、プーアル、紅茶、ジャスミンもだ！」

俺が作り終えるのとほぼ同時に二人とも終わらしている。
しかし、康太は当たり前として、須川がここまでの働き者だとは思ってもいなかったな。

「ねぇ、チャーハンって作れる！？お客さんから聞かれたんだけど！？」

明久があわてた様子でメニューにないものを頼みながら厨房に入ってくる。

「・・・客に5分ほどかかると言ってくれ」
「・・・・・・・・・雅夜、出来るのか？」
「何とかしてみる。須川、こっちも頼めるか？」
「任せとけっ！」

急いで教室から飛び出し、冷凍食品のチャーハンを求めに部室へと走る。やっかいなもん注文しやがって・・・！
ラーメンなどの無茶すぎる注文だったら断るのだが・・・。客が注文してきたのは中華喫茶で出しても問題の無く、作るのにあんまり手間取らないチャーハンだ。なので出来る限りのことはしなくてはならない。

メニューにないなら断ってもよくね？と思うかもしれないが、俺は客の注文には出来る限りのことをやらないと気がすまない性分なので。

部室にある冷蔵庫から冷凍食品のチャーハンを二つ（一つは予備）取り出し、すぐに教室に戻る。・・・5分でいけるか？

「戻った！フライパンの準備は出来てるか？」

厨房に入ると同時に中にいる奴らに声をかける。

「早かったな。・・・そんなもんどこから持ってきた？」

「悪いが企業秘密だ」

「・・・・・・・・・フライパンの用意は出来ている」

「ナイスだ、康太」

温めておかれたフライパンに、袋から取り出したチャーハンを3分の1ほどいれ（これぐらいで軽食程度になるだろう）火を通す。

「明久、チャーハンを注文してきたのってどんな客だった？」

「えーっと・・・、二十歳前後のお兄さんだったよ」

「なるほど」

塩コショウをすこし多めに入れ、全体に火が通ったあたりですこし深みのある皿に盛り付ける。

「チャーハン一、待たせたな！」

注文を受けてからきっかり5分。ぎりぎり間に合った・・・。

『どれどれ、お味のほどは・・・・・・・（モグモグ）』
『『『・・・・・・・・・』』』
クラスにいる客全員が静かになる。
『（ゴクン）・・・・・うまいっ！』
『『『おおーっ！！（パチパチパチ）』』』
チャーハンを食べた客の感想を聞くと、クラスメイトからだけではなく客からも拍手を受ける。チャーハンの良い匂いがクラス中に広まってるおかげだろうか？
『俺もそのチャーハンくれっ！』
『俺も俺も！』
『こっちは二人前だ！』
『こっちにも一つちょーだい♪』
クラス中のいたるところから注文の声があがる。メニューに無いもん頼むなよ！？
『え、えーっと。ひい、ふう、みい・・・・・雅夜！５人前出来る？』
手が回りきらないのか、ホールから明久が大きな声で尋ねてくる。
「五人前ならギリギリセーフ。それ以上は出来ないぞ！」
チャーハンの準備をしながら明久に聞こえるように大きな声で返事をする。予備でもう一袋もってきておいてよかったみたいだな。

「すがわー。さっきの皿、もう五枚ほどあるか？」
「ある。出しとくよ」
「サンキュ」

皿を出してもらってるうちに火を通す。さっきに比べ取りに行く時間がないためすぐに出来る。
塩コショウで軽く味付けをし、出してもらった皿にチャーハンを盛り付ける。

「チャーハン五人前、出来たぞ！」

これで、チャーハンは使い切った。さらば、俺の夜食達・・・・・・。

第８２話（後書き）

学生の喫茶店ってこんな感じでいいのかな？

売店しかやったことが無いからよく出来てるかわからん（汗）

感想お待ちしております。

第８３話

「おーい、浅月。十時になったぞ」
「ん？　もうそんな時間か」
「お前もすこしは休憩してこい」
「ああ」

ふぅ・・・。と息を吐きながらエプロンを脱ぐ。さすがに休み無しの二時間労働はすこし疲れるな。
厨房の奴らの邪魔にならないよう気をつけながらＦクラスから出る。
ちなみに俺が居ないときは俺の担当は康太がし、康太の担当を須川がし、飲み物は雑用係――Ｆクラスの二人ほどにやらせるらしい。

「あー、・・・・・・あちぃ」

ワイシャツの前を第二ボタンまで開け、中に風を送る。
ガスコンロの前で二時間も作業をしていたからな。見苦しいかもしれないが、回りの視線は気にしないでおこう。

「飲み物でも買ってこようかな」

なんだか喉まで渇いてきたので、自販機に行こうと歩き始める。
クラスで売り出されてるのより自販機のほうが安いからな。

「・・・・・さすがはＦクラス、というべきなのか？」

飲み物を買い（ちなみにＣ２レモン）、飲みながらすこしブラブラと歩いていただけでＦクラスの奴らが女性にナンパしているのを見かけた。１０回ほど。

「せっかくの祭り（出会いの場）だ！　ってのはわかるんだけどな・・・」

優子がいるからというわけではないんだが、俺はこういうのはする気にならないな。

「っと。そうだ！　一応暇な時間は取れたことだし、軽食ついでに行ってみるか」

確かＡクラスは【メイド喫茶『ご主人様とお呼び！』】だったっけか？　ご主人様なのかメイドなのかどっちなんだ！？　と、毎回ツッコミたくなるような名前の。

「ま、とりあえず会いに行くか」

ここまで言ってふと、気づく。いつの間にかＡクラスに行く予定が、優子に会いに行く予定になっていることに。

「お帰りなさいませ、アニャ・・・・・アナタ／／／」

Aクラスに入るとまたもや優子が出迎えてくれた。前回と同じアレンジされた台詞を言おうとしたようだ。噛んだけど。

「あれ？　どうしたの優子。顔がすごい真っ赤だけど」

と、偶然通りかかったボーイッシュなメイド――工藤が話しかける。

「にゃ、にゃんでもにゃいわよっ！！」

「落ち着いて優子！？　すごい噛んでるよ！？」

「本当ににゃんでもにゃいんにゃにゃら！」

「噛みすぎだよっ！？」

「にゃんでにゃいわにょ！」

「もう元の言葉がわからないほどだよ！？」

優子が（熱）暴走しかけてるので、工藤がアタフタとしている。一方、俺はと言うと・・・

「浅月君っ。見てるだけじゃないで、一緒に止めて・・・・・・・・・・浅月君？」

「（カァー）／／／／／／／／／／」

「「・・・・・・・・・・え？」」

優子以上に顔を真っ赤にしていた。

しかた無いだろ！？　酔っ払ったときの優子を思いだちまったんだから！！

しかもあの時されたことも！！　これを照れずしていられるか！！！！

「スマン、優子！」

踵（きびす）を返し、Ａクラスを後にする。これ以上ここにいたら俺がおかしくなっちまう。

「え！？　ちょ、雅夜！？」

「行ってらっしゃいませ～」

煩悩を退散させ、Ｆクラスへと戻る。そろそろ交代の時間だ。

『・・・ここが噂のヨーロピアンだな』

と、Ｆクラス方から声が聞こえた。どうらや、ウチの噂を聞いた客のようだな。

『胡麻団子が特に絶品と聞いたが・・・』

遠くなのでよく見えないが、年は俺たちと同じぐらいか？　私服だから校外から来たというのはわかるんだが。

『如何ほどの物なのか――――』

――――っ！？　なんだこの寒気は！？　嫌な予感がする・・・・・。

『確かめさせてもらおうか！』

遠目にだが、顔を不敵に笑いチロリと舌なめずりをしたのがわかる。
そして教室に入っていく。

「・・・・・コイツは一波乱起きそうだな」

俺は後を追うように厨房に入っていく。
さすがは文月学園。波乱の日常は退屈しない。

第８３話（後書き）

優子またもや暴走（笑）

ちなみに優子が噛んだ台詞は←です。

「にゃ、にゃんでもにゃいわよっ！」→「な、なんでもないわよっ！」

「本当ににゃんでもにゃいんにゃにゃら！」→「本当になんでもないんだから！」

「にゃんでにゃいわにょ！」→「噛んでないわよ！」

感想お待ちしております。

第８４話

「・・・・・・・・・・３番の胡麻団子、完成」

教室に入るとちょうど、康太が胡麻団子を作り終えたところだった。ざっと見、特に問題は起きてなさそうだ。　・・・・・・さっきのは、俺の気のせいだったか？

「うぃーっす、戻ったぞー」

「お、浅月か。ちょうど良い。これが終わったら交代してくれ」

「須川も休憩時間か？」

「ああ。――――５番の肉まん二つ出来たぞ！」

須川が終えると、須川の担当を康太が、康太の担当を俺と、担当を替えた。調理する人物の関係上、コレがもっとも良いフォーメーションなのだ。

「んじゃ、あとは任せた」

「ああ、任せとけ」

バトンタッチし、須川は「待ってろよーっ！かわい子ちゃんたち！！」といいながら教室を出て行った。さすがはＦＦ団団長・・・。

『・・・所詮はこの程度。噂は噂に過ぎぬ、ということか』

須川を見送ってると、ホールから聞き覚えのある声が聞こえる。

「この声はさっきの・・・・・・っ！？」

さきほどまで消えていた寒気が急激に襲ってくる。やはり、間違いじゃなかったのか・・・！

『あ、あの・・・。お客様。お口に合わなかったでしょうか？』

だれかが、件（くだん）の女に話しかけている。不評みたいなことを言われたので、気にかけたのだろう。

『いや、そうではない。ただ・・・・・ちょっと期待はずれだった、というだけだ』

『そう・・・ですか・・・・・』

期待ハズレだと？
さきほどまで康太が作っていた胡麻団子は良い出来だ。　表面はカリカリで中はモチモチ、甘すぎないことがさらによし。　女性客にも人気の一品だぞ？
それを期待ハズレだぁ？

上等じゃねぇか・・・！　その減らず口、黙らせてやるよ！

「・・・・・・・・・・？　雅夜。胡麻団子の注文は入ってないぞ？」

「すこし黙ってろ」

「・・・・・・・・・・」

生地とアンコの比を調節して胡麻を軽くまぶし、冷水につけた手でやわらかく丸め直す。さらに、低温の油からだんだんと温度を上げながらでゆっくり揚げる。
程よい色合いになったところでサッと皿に盛り付ける。

「秀吉。これを三番に持ってってくれ。さきほどのお礼だ、と」
「うむ。了解じゃ」

ちょうど近くを通りかかった秀吉に持っていかせる。

『どれ。そろそろ勘定を』
『お客様』

ちょうど席を立とうとしたのを秀吉が止める。ぎりぎりのタイミングだったな。

『どうかしたのか？』
『こちらをどうぞ。厨房責任者からのお礼です。「さきほどは申し訳なかった」と』
『お礼じゃと？　別にそこまで・・・・・・・・っ！』
『いかがなさいましたか、お客様？』
『・・・なんでもない。その胡麻団子をよこすのじゃ』
『どうぞ』

食べさせるのは成功。あとは口にあうかどうか・・・・・。

『これは・・・・・・っ！？先ほどのとはまったく違う。・・・作った者が変わったな』

む・・・。一口で見抜いたか。

『先ほどとは違い、こちらはアンコを引き立てながらも、胡麻の風味を消さないよう計算されて作られている。しかもコレは偶然の賜物ではなく、狙って作られたもの。求められれば何度でも再現でき

るように組み立てられた味だ』

すごいな・・・。はっきり言ってここまで理解されるとは思ってもいなかった。賞賛にあたいす――――

『なによりも、愛情がこもっている』

――――へ？　なんか盛大な勘違いされてない？

『すまんが作った者を呼んでもらえないだろうか？　礼をいいたい』

『かしこまりました』

客に頭を下げ、秀吉がこっちに戻ってくる。っておいおい！

「雅夜。お客様がお呼びじゃぞ」

「俺がか？　面倒なんだが・・・」

「早く行くのじゃ。お客様を待たせてはならんぞ」

「うへー」

はっきり言って遠慮したいんだが。それに緊急信号（さむけ）が止まらなくなった。・・・・・・行かなくていいよな？

「早くするのじゃ！」

「・・・・・・はいよ」

最近の秀吉は強気になってると思う。

第８４話（後書き）

雅夜が本気で作った胡麻団子と康太が作った胡麻団子では違いがわかる人が食べたら、天と地ほどのさがあります。

感想お待ちしております。

第85話

「お客様。自分がさきほどの胡麻団子を作った者です」
「おお、お主が――――って、男じゃったのかっ!?」

え!?　そこ、驚くところ?

「はい、そうですが。・・・自分が男だとなにか問題でも?」
「い、いや、そうではないんだが・・・・・・」
「?」

なら、なんなんだ?

「あれほどの腕前だとてっきり、パティシエを目指してる女子だとばかり・・・・・・・・」
「あー・・・」

なるほどね。確かにパティシエだったら普通は女が多いからな。

「・・・まぁ、それは置いといてだ。お主はパティシエでも目指しておるのか?」
「いえ。目指しておりませんが」

・・・雄二の気持ちがわかるな。敬語は疲れる。

「あ、敬語じゃなくても良いぞ。　同い年なのじゃし」

心が読まれた!?　と、バカなことは考えずお言葉に甘えさせてもらおうか。

「助かる。って同い年なのか？」
「うむ。ワシも高2じゃからの」

それなら確かに同い年だ。ダブってないかぎり。

「ところでお主。なぜ、あそこまで美味く作れるのだ？」
「ん～・・・・・現役のパティシエが身内にいてな。その人にいろいろと教えてもらったんだ」

あんまり言い触らかしたくないことだけど、接点ないから奴だから教えても大丈夫だろう。

「なるほどな。さぞかし、そのパティシエもすごい人なのじゃろう」
「いや、あの人は悪魔だ」

反射的に言葉を返す。その認識だけはあらためさせないと・・・！！

「・・・・・悪魔？」
「ああ、アレはいい人なんかじゃない。いい人は――――――人にトラウマなんか作らない」
「作られたのかの？」
「・・・・・ああ。詳しいことは聞かないでくれると嬉しい。思い出すのも苦痛なんだ」
「そ、そうかの・・・」

そう・・・。あれは小学高学年のころ――――いや、これ以上はやめておこう。

「・・・そ、そうじゃ。礼をまだ言ってなかったの」

「礼？　別にそんなのいらねぇよ」
「いや、お主がいらなくてもワシがしたいのじゃ。・・・・・・ありがとう。ここまで美味しいのに出会えたのは久しぶりじゃ」
微笑みながら真面目なこと言ってくる。・・・・・・まったく。こういうのはあまり得意じゃないんだが。

「・・・・・それ以上はやめろ。それだけでもう十分だ」
「なんじゃ？　お主、照れておるのか？」
「だーっ、うっさい！それ以上しゃべるんじゃねぇ」
「なんじゃ。憂いやつじゃのう」
さっきの優子で照れへの耐性が下がっちまったか？

「ほら、礼はすんだだろ？　とっとと帰れ（シッシッ）」
「客に対してその態度はないじゃろう」
「お帰りはあちらです、お客様」
「・・・バカにされてるとしか思えんのじゃが？」
正解。バカにしてます。

「・・・・・まぁ、よかろう。っと、そうじゃ。お主の名前をまだ聞いておらんかったな」
「俺の名前？　覚えてもらわなくて結構だ」
「ホントにつれない奴じゃのう。そう言わずにじゃな、ほれ」
「ことわ――――――おい。そのどこから取り出したかわからん鉄アレイをしまえ」
断ると言おうとしたら、鉄アレイを手にもってるのが見えた。

「教えてくれるかの？」
「知ってるか？　お前が今やってるのは脅迫と言う――――わかった。名前を言うから鉄アレイを振りかざさないでくれ」
「最初からそうすればよかったのじゃ」
というか、なぜ鉄アレイ（そんなもん）をもっている？
名前ぐらい聞かなくたっていいじゃないか。
「ハァ・・・・・・・・・、ったく。俺の名前は浅月雅夜だ」
「なんじゃとっ！？」
アレ？　俺の名前に驚くポイントあった？
「今度はなんだ？　まさか。また、男だとは思っていなかった、だとかか？」
これが本当だったら、一発殴って更正させておかないとな。
「・・・・・なるほど。そういうことじゃったのか」
「ん？　なるほどってなにがだ？」
なんか、嫌な予感がするな・・・・・・。こころなしか、体温が下がってきた気もするし。
「・・・・・となると先ほどのが、か。確かに聞いた通りじゃったな」
「おーい？俺の声が聞こえてるかー？」
自分の世界に入っているのを現実世界に連れ戻す。大丈夫か、コイツ？

「っと、すまぬすまぬ。ちょっと考え事をしておってな」
「俺の名前を聞いてか？　なにを考えてたんだ？」

っ！！　なんだこの寒気は！？　先ほどまでとは比べ物になんないぞ！？　ヤバイ。こいつマジでヤバイって！！

「いや、なに。お主が噂の――――」

危険！危険！　ただちのここから全力で逃げ出せ！！　じゃないと、

「――――マサ君じゃったのじゃな、と」

暴動（さいあく）の火種（じたい）が出来る・・・っ！！

第８５話（後書き）

いまだに名前の明かされていない女の子。

彼女の存在が何を引き起こすのか・・・。

感想お待ちしております。

第86話

「マサ君・・・だと・・・・・・・・・・っ！？」

マサヤだからマサ君。俺は確かにこれで呼ばれている。だが、俺のことをそう呼ぶのは文月学園の生徒にはいない。

「なんじゃ。違うのかの？」

「いや、違ってない。違ってないが・・・・・・」

「じゃろうな。お菓子が美味しくて、同い年で、浅月雅夜って名前で、なんだかんだ言っても最後にはちゃんとお願いを聞いてくれる奴なんて二人もいないじゃろうし」

「おい、ちょっと待て。最後のはなんだ、最後のは！？」

変なのが混ざっていなかったか？

「違わないじゃろ。お主は、なんだかんだ言って最後にはちゃんとお願いを聞いてくれるやさしい奴じゃ」

「んなわけ、あるかっ！」

「でも、さっきは名前を教えてくれたじゃろ？」

「あ」

た、確かに。最後にはちゃんと教えた・・・・・・

「って、違うだろ！？お前が脅迫したから仕方なく言ったんじゃねぇか！！」

お願いを聞いたんじゃなくて、脅迫を無理やり聞かされたんだよ。

「んー、そうじゃったかのう？」
「そうだよ！！」
「まぁ、それは置いといて」
「・・・・・・それもそうだな」

いつもだったら置いとくなっ！って言いたいところだけど、今は他に確かめたいことがある。

「なぁ、お前の名前ってなんなんだ？」
「ワシか？そういえばまだ名乗っておらんかったの。ワシは植田（うえだ）アヤメじゃ」
「ちなみに、どこ高？」
「杜丘（もりおか）高校。――――喫茶・翡翠の近所の、じゃよ」
「だろうな・・・・・・」

やっぱり、そうだったんだな。
杜丘高校。それはここから４駅ほど行ったところにある高校。俺が働いている喫茶・翡翠は杜高（そこ）の生徒達の御用達店である。（文月学園とラ・ペディスみたいな関係）
なぜか、俺が作ったお菓子が翡翠のパティシエが作ったのより杜丘の奴らに大変人気で、今回みたいに顔と名前を覚えられたりして知り合いがたくさんできていった、と。

「なんじゃ。そこまで驚かないのじゃな」
「そりゃあ俺のことをマサ君って呼ぶのなんて杜丘の奴らしかいないからな」
「へ～、そうじゃったのか」
「文月（こっち）じゃ基本は雅夜か浅月で呼ばれてるからな。あだ名は呼ばれてない」
「逆に杜丘（こっち）じゃと、ほとんど全員があだ名で呼んでおるの」

「まぁ、そうだな」

だからって変えてほしいとは思わないけど。

「じゃあ、そろそろ帰ろうとするかの」

「お、そっか。じゃあ、またな」

「次はお主が翡翠で働いてるときにでも行かせてもらうとするかの」

「ああ、いつでも来い」

いつも働いているわけじゃないけどな。と、思いながら厨房へと戻る。いいかげん働かないとな。

『・・・噂はホントウじゃったな。しかも二つとも。噂のたまにはあてになるもんじゃな。・・・・・さて、あ奴らに教えてやらんと』

遠くのほうから植田の声が聞こえた。　噂？　そういえばそんなことを言ってたな・・・。どんな噂がながれてたのか、聞きそびれたな。

「あの子と楽しそうにお話してたわねー、雅夜。　どんなことを話してたのか詳しく聞かせてもらえるかしら？」

これまた声が聞こえた。今度はすぐ真後ろから。しかもじゃっかん怒ったような口調で。

「えーっと・・・・・・・・・優子か？」

「ええ」

「どうしてここに？」

「仕事の休憩時間に入ったからよ。それで雅夜に会いにＦクラスま

で来てみれば、雅夜は可愛らしい女の子と楽しそうにお話してるから待ってたのよ」

優子さん。顔は笑ってるのに、目がわらっていませんよ？

「土屋君から許可はもらってるから、ちょーっと向こうに逝きましょうね？」

「ま、待とう優子。どこかに行くのだったら俺の首を絞めなくていいと思うぞ？それと今字が違くなかった？」

「大丈夫。あってるわよ♪」

「ちょ、バカっ！俺の首はそれ以上まがら――――――クペッ」

俺が目覚めたのは二時間後だった。

第８６話（後書き）

植田アヤメ（菖蒲）　♀

秀吉と同じジジィ口調で話すが、金髪ロング、アホ毛ありの女の子。
身長１５８ｃｍ。

杜丘高校に通う二年生。

今後出てくる予定は、番外編：翡翠のほうの話を書くときに出るかも知れない程度です。

オリキャラの詳しい説明はまた今度書きます。

感想お待ちしてります。

第87話

「・・・・・・・ぁ～、痛ててててっ」

首の痛みで目が覚める。ここは・・・・・・厨房か。

「・・・・・・・・・・やっと起きたか」

「んーあー、康太か。今何時だ？」

首をさすりながら康太に尋ねる。まだちょっと痛いな。

「・・・・・・・・・すこし前に明久たちが試合に向かったから、たぶん1時過ぎごろ」

「マジかよ！？」

そんなに俺は眠ってたのかっ！？

「・・・・・・・・・そんなことよりもとっとと働「スマン、康太！仕事があるから後は頼んだ！！」・・・・・・いてくれ」

せっかくの宴（まつり）なんだから、働いていられるかってんだ！！

俺は教室を飛び出し、会場へと向かう。

『ま、お前にしては上出来だな。明久』

会場から聞こえたのは雄二の声。見えたのは明久の召喚獣が敵の召喚獣の喉を突き刺しているところだった。

『坂本・吉井ペアの勝利です！』

『いいいよっしゃぁああーっ！！』
『『おおーっ！！』』

明久たちの勝利の宣告が下されると、明久と観客から歓声が起こった。ま、間に合ったのか・・・。

「・・・・・こっからが、楽しい祭（パーティー）の始まりだ」

これで、すべての準備は整った。

明久と雄二は優勝し、ばーさんとの契約を果たした。
俺が作った腕輪も、なんの欠陥もなく完成した。

だから、後は摘み取るだけ。

騒動（まつり）という名の花（パーティー）を――――――――俺の心を満たしてくれる非日常（はらん）を。

～ｓｉｄｅ明久～

「第三位。２年Ａクラス霧島翔子と同じくＡクラス木下優子」
「「はい」」
「同じく第三位。３年Ａクラス金田一真之介と同じくＡクラス堀田

雅俊」
「「はい」」

決勝戦が終わり、今は授賞式をやっている。三位になった４人は、賞状を渡されていた。同じくってことは三位決定戦をやらなかったのかな？

「第二位。３年Ａクラス常村勇作と同じくＡクラス夏川順平」
「「はい」」

さきほどと同じように賞状、それと盾が渡される。

「第一位。２年Ｆクラス坂本雄二と同じくＦクラス吉井明久」
「「はいっ！」」

そして、僕と雄二の名前が挙げられる。二位と三位が全員Ａクラスなのに、一位がＦクラスだという不可思議な結果。今後、二度と起きることがあると思えない結果。それを僕らが成し遂げた。

「優勝おめでとうさね。正直不可能だと思っていたよ」
「はっ、笑わしてくれるな」
「言いませんでしたっけ？僕達は最強のコンビですよ」

学園長から賞状とトロフィーを受け取りながら小声で会話する。まったく。この人は僕達のことを信用していなかったのかな。

「わかってるさね。――――そして、優勝者の坂本雄二と吉井明久には優勝商品の『白金の腕輪』を贈呈する」
『おお！』

白金の腕輪。この単語が学園長の口から出たら、観客から小さな歓声が上がる。きっと試験召喚システムを見に来た来賓の人たちの声だろう。

「白金の腕輪には二種類あって、片方は『代理召喚型』、もう片方を『同時召喚型』というさね。『代理召喚型』は教師の変わりに召喚フィールドを作成できる腕輪で、『同時召喚型』は使用者の点数を二分し、もう一体の召喚獣を呼び寄せる腕輪。ということだよ」

「「はい」」

簡単な説明を聞き、学園長から白金の腕輪を僕が『同時召喚型』を、雄二が『代理召喚型』を受け取――――あれ？

「えーっと、学園長？」

いつまでたっても学園長が僕達に腕輪を渡そうとしない。どうしてだろう？

「・・・・・・コインには表と裏があり、光があれば必ず影がある」

『『『・・・・・・・・・・・・・・え？』』』

いきなりの意味不明な学園長の台詞に僕達だけではなく、会場にいる人のほとんどがきょとんとした。なに言ってるの、この人？

「考えたことはないかい？」

そんな回りの様子をまったく気にしないで続ける。

「これはクソガキに言われたことなんだけどさね・・・。――――――どれほど優れた名探偵がいても、それにふさわしい事件がなけ

ればその存在は意味を成さない。対になる優れた犯人がいなければ名探偵になど用はない。コインの表裏、光と影、善と悪、神と悪魔。対でなければ存在しえないもの達・・・・・・」

「・・・おい。まさか・・・！」

学園長の台詞に雄二が驚きの声をあげる。雄二もどうかしたのかな？

「『白金の腕輪』――――――使用者を補佐する腕輪があるなら・・・・・召喚獣を補佐する腕輪が存在すべきだと思わないかい？」

『『『えっ！？』』』

今度は会場全体から驚きの声があがる。え？　どういうことなの？

第87話（後書き）

二巻の見せ場ともいえる明久と雄二ＶＳ常夏コンビの場面を書けなかった（泣）

ちょっと後悔しています。

感想お待ちしています。

第８８話（前書き）

まだ、ｓｉｄｅ明久は続きます。

第８８話

え？　どういうこと？
まったく話についていけない。学園長はなにが言いたいの？

「・・・あるのか？『白金の腕輪』の対となるものが」

隣にいる雄二が学園長に鋭い目つきで聞く。えーっと・・・、

「・・・雄二、わかりやすく説明をお願い」
「アホか、お前は・・・・・。つまりだな、このババァはこう言いたいんだ。『ものには対となる存在があるべきだ。なら白金の腕輪にあってもおかしくないだろう？』ってな」
「な、なるほど・・・」

ということは、腕輪はもう一個あるってことだよね。
・・・・・あれ？　それって、ちょっとおかしくない？

「確か学園長って、腕輪の開発で手一杯だったんじゃないの？」

忙しかったはずなのに、もう一個の腕輪を作ってる暇なんてあったのかな？

「明久にしては良い所に気がついたな。なんか変なものでも食ったんじゃないだろうな？」
「失礼な！変なものなんか・・・・・・・・・食べてないよ！！」

一瞬、昨日食べた姫路さんの特性胡麻団子を思い出した。

「まぁそんなことは置いといてだ。そこんところどうなんだ、ババァ？」

学園長に聞くってことは、雄二もわかってないのかな？

「・・・・・確かに開発チーム（わたしたち）は忙しかったさね。そう。私達は、ね」

「私たちは？　じゃあ作ったのは誰なんですか？」

「システムって外部の人間は弄れないじゃなかったのか？」

おそらく会場にいる人たちは皆疑問に思ってことだろう。

「外部の人間じゃないさね。きちんとした内部の人間さね」

「開発チームじゃない、内部の人間が作ったのか？」

そんな人がいるなら開発チームに入ってもらえばいいのに。

「立場上開発チームには入れないのさね。・・・・・・・・・あー、これ以上説明するのは面倒だから後回しにするよ」

『『『ええ！？』』』

またも会場全体でそろう疑問の声。そういえば教師の人たち（高橋先生は驚いてないけど）も驚いてるみたいだけど・・・・・なんでだろ？

「かまわねぇよ。どうせ本人をみたら納得がいくだろうからな」

「おや？　その態度だと検討はついてるみたいだね」

「そんな立場の奴なんて何人もいないだろ」

と、回りの様子がまったくわかってない二人が話を進める。って、雄二は誰が開発者かわかってるの!?

「雄二、誰――――」

「そんなことより腕輪だ。白金の対ってことは・・・・・黒金あたりか?」

「正解さね。『黒金の腕輪』さっきも言ったとおり召喚獣を補佐するものだとさ」

僕の言葉をさえぎって話をする雄二と学園長。黒金の腕輪かぁ・・・。どんな能力なのかな?

「それをこの場で言ってどうするつもりだ?・・・・・・・・・まさか、優勝商品に上乗せするなんてことじゃねぇよな?」

「あたりまえさね。そんな簡単に手に入るもんじゃないよ」

「じゃあなんでだ?」

そういえばなんでだろう? ただ単に見せびらかしたいだけだったりして。

「作った本人が言ったのさ・・・『大会上位者には【黒金の腕輪】を獲得できるチャンスをやろう』って感じにさね」

これを聞いた観客――――会場全体から歓声が響いた。大会上位者って此処にいる4ペアのことでいいのかな?

「・・・チャンス・・・・・・だとっ!?」

「そう、チャンスさね。召喚獣とのバトルに勝てばもらえるという、ね」

今度は、会場全体からどよめきがおきる。そんな簡単なことで良いの！？

「それで挑戦するのかい？」

学園長が僕達に問いかけてくる。そんなの決まってるさ。

「「当然っ！」」

雄二と綺麗にハモる。受けた挑戦は買うものだ！

「「「「俺は遠慮する」」」」

一方、３年の方達は辞退。なんでだろ？やっぱり受験が近いからなのかな。

「代表、私たちはどうする？」

「・・・・・夫を守るのは妻の役目」

「誰が妻で、誰が夫だっ！」

「出場するのね。・・・わかったわ」

霧島さんと木下さんは出場。Ａクラスのペアが味方についた。これは頼もしい。

「やるのは坂本と吉井と霧島と木下かい。４人だけかい。もう一人ぐらいいたら良かったのにさね」

もう一人って、ええっ！？これでも敵わないのが相手なの！？

「このメンバーでも、まだ足りないってか？」

「5人くらいが望ましい、って言ってたからね。・・そうそう、あまった人数分はそっちで決めて良いらしいよ」

大会上位者5人で望ましい・・・？　なに？　相手は怪物なの？

「勝手に決めていいなら遠慮はしないぞ？　姫路！お前の出番だ！！」

『わ、私ですかっ！？』

「って、いくらなんでもそれはやりすぎじゃないの雄二？」

「問題ないさね」

学年トップクラスを三人と僕達を相手で、問題ないって・・・・・・。相手はいったいなんなの！？

「・・・・・ハァ・・・・・・・・・ハァ」

「大丈夫、姫路さん？そんなに急がなくてもよかったのに」

観客席のほうから走ってきた姫路さんを支える。チャイナ服なので、観客からの視線をあつめている。それだけじゃないかもしれないけど。

「だ、大丈夫です・・・」

「でもいいの？雄二が勝手に決めちゃったけど」

「はいっ！夫を支えるのは妻の務めですので。」

霧島さんがいったことを姫路さんも言う。姫路さんの夫はいないはずだから、夫は比喩的なものなのかな？

「ババァ。これで十分だろ？」

「ま、こんなもんでいいんじゃないかい」

「ならとっとと開発者を呼び出しな」
「わかってるよ」

そういいながら、後ろのほうにいた行事進行役の高橋先生に目配せする。
そして高橋先生はすぅ、と息をすい高らかに宣言をする。

「これより、特別イベント『黒金の腕輪・獲得チャンスバトル！！』を始めます！」
『『『おおーっ！』』』
「ルールは単純。召喚獣バトルで相手を倒すだけ。ただし相手は黒金の腕輪を使います！相手を倒したときにフィールドに生き残っていれば『黒金の腕輪』を獲得ができます」

本当に単純だ。僕でも理解できる。

「そして、彼らが戦うのは・・・！　文月学園の生徒でありながらも黒金の腕輪を作った張本人――――」

文月学園の生徒だったの！？生徒の中に腕輪（そんなこと）を作るが出来る人がいるの――――あ！！

「雄二。もしかして・・・・・・！」
「ああ・・・。そのもしかしてだ！！」
「え！？じゃあ、あの人なんですか！？」
「これがそうだったのね・・・っ！！」
「・・・・・なるほど。彼なのね」

皆も気づいたようだ。
身近にいるじゃないか。召喚システムを弄ることが出来る奴が・・・

っ！！

「――――――２－Ｆの浅月雅夜君です！！」

「「「雅夜（浅月（君））っ！！」」」

「さぁ、楽しい祭（パーティー）を始めようかっ！！」

第８８話（後書き）

とりあえず、常夏＋ａはご退場～。

そして姫路参戦！

感想お待ちしております。

第89話

～side雅夜～

「さぁ、楽しい祭(パーティー)を始めようかっ！」

タイミングを合わして特設ステージに出る。む。スモークの準備ぐらいしておけよな。

「よう、雅夜。ずいぶんと愉快なことをしてくれるじゃねぇか」

「うれしいか？ちょっとしたサプライズだ」

「ちょっとどころじゃないと思うがな」

「そりゃそうだ」

ちょっとじゃなく、盛大にやってもらいたい。

「って、そうだ。いつごろから俺だって気づいた？」

「確信を持ったのはババァが『これはクソガキが言ったことなんだけどさね』ってあたりだな」

そこでか？てっきり『開発チームじゃない内部の人間』ってあたりだと思ったんだが。

「ずいぶんと早いな」

「あんなことをいう奴なんてお前ぐらいしかいないだろ」

「そうか？ほかにもいう奴はいると思うんだが・・・」

「いるわけないでしょうが」

お、優子か？

「よっ、優子！」
「よっ。じゃないわよ、まったく・・・・・・」
「気に入らなかったか？」
「そうじゃないわよ・・・。ねぇ、これが前から言ってたサプライズなの？」
「ああ」
「そう。なら存分に楽しませてもらうわよ？」

楽しんでくれ。楽しむためだけにやったことだんだから。

「って、その反応は間違ってないっ！？」
「明久は置いといて」
「あれ、僕だけそんな扱いなの？」

バカは置いといても勝手に騒ぐから問題なし。

「そっちの二人はなにか言いたそうだな？」

姫路と霧島を見ながら言う。二人ともやる気のある目だ。

「はい。浅月君は本気を出すんですよね？」
「そりゃな。本気を出さなきゃ、一瞬でけりがついちまう」
「・・・・・・なら問題ない」
「はいっ。それなら本気の浅月君と戦えますからね」
「俺と戦える？」

まさかの戦闘狂（バトルマニア）？

「・・・・・・違う、姫路。本気の浅月が見れる、でしょ？」

「あ、そうでしたね」
「・・・・・・・・・・・・あぁ、そういうことか」
この二人には学年トップなりの思いがあるってことか。
「そろそろ始めても、よろしいでしょか？」
皆と話終えると後ろから高橋女史が声をかけてくる。律儀に待ってくれていたのだろう。
「すいません。もうちょっとだけいいですか？」
「わかりました。すこしだけですよ」
ありがとうございます、と高橋女史に言いながらマイクを受け取り、会場全体を見渡せるようにし、
「最後に、二つだけいっておくことがある！」
簡単な前振りをしてから言い始める。
「まず一つ目！　この戦いに勝ったものには『黒金の腕輪』が与えられる。そっちは5人。対して俺は一人だが、先ほど言っていた通りに、こっちは『黒金の腕輪』を使わせてもらう！」
言わなくてもいいかも知れないけど、重要なことなので一応言っておく。
「そして二つ目！　大会で消費した点数のままだと面白みにかけるので、彼らの点数は一番最後に受けたテストの点数に、こちらで勝手にしておいた！」

そして、こちらも重要。消費したままだと簡単にやれてしまって、面白くない。面白みがないのは、見てる側じゃなく、やる側の俺だ。

「ルールは以上だ。楽しんでいってくれ」

そう言いきって後ろにいる高橋女史にマイクを返す。

「それでは、始めてください！」

「「「「「試験召喚！」」」」」

従者の声に応えそれぞれが、木刀、メリケンサック、大剣、槍、日本刀を手にした5体の試験召喚獣が現れる。

「試験召喚っ！！」

それらを確認して、こちらも呼び出す。

登場と同時にジャケットを空に抛りなげ、どうどうとした姿を顕現させる。

漆黒の衣服を纏い、右の手首に金色左の手首に黒金の腕輪をつけ、二本の小太刀を持った姿を。

「久々の本気だ。楽しませてくれよっ！」

一瞬遅れて全員の点数が表示される――――――

第８９話（後書き）

霧島と優子の腕輪の能力、どうしましょかね？

原作で出てきてないから勝手に決めてもいいんでしょうが・・・・・

作者が決めるとチートになると思いませんか？

なので、良いアイデアを思いついた方はどんどん書いて行って下さい！！

感想とアイデアお待ちしております。

番外・バレンタイン編　前編

バレンタインデー前日。俺は明日の為の準備をしていた。

「えっと・・・・・こっからここまでが文月学園(こっち)の奴らの分で・・・・・・・・ここからが翡翠(むこう)の奴らの分」

出来た・・・。味良し！包装(みため)良し！匂い良し！

これで準備はオッケーだな。

「ふぅ・・・・・・。疲れたな」

軽く肩を回して、背伸びをする。う～～ん、気持ちいい・・・。

・・・・・・ん？・・・・・やばぇ、部屋中に匂いが漂ってやがる。これは換気しないとな。

「外はちょっと寒いけど、まぁ問題ない「この良い匂いはなにっ！？」・・・・・・わけがないな」

・・・・・そりゃあ、明久とは同じマンションで俺の家は明久の家の下のほうにあるからな。ここの匂いが上のほうに行くのはわかってる。

そして、「どうやって入った！？」的な質問はこの際無視しよう。

だけど・・・・・だけどな、

「来るのが早すぎだろっ！？」

窓を開けて5秒も経ってないぞ！と言うより、むしろ開けた瞬間といってもいいかもしれないぐらいに！！

「あ、雅夜。雅夜がいるってことは、此処は雅夜の家？」
「しかも、誰の家かも確認しないで入ってきたのか！」
「確認してる余裕なんてなかったんだよ」
「どんだけ急いでたんだよ！？」
「階段を使わずに飛び降りるぐらいに」
「急ぎすぎだろっ！！」

二階からならわかるけど、明久の家って四階じゃなかったか？

「仕方ないじゃないか！この良い匂いが僕を動かしたんだから！！」
「そんなに良い匂いか？この部屋、充満しきってるからよくわからないんだが」
「うん。すごく良い匂いだよ。・・・バニラの甘い香りのなかにほのかに混ざるチョコレートの匂い。これは二種類のクッキーだね。・・・・・・・・雅夜」

どれほど良い匂いなのか目を閉じながら語っていたが、突如俺を期待の眼差しで見始める。
・・・・・ああ、わかってるよ。お前が何を言いたいのかぐらい。

「・・・・・あまりならそこにあるぞ」

その目が何を言ってるのか理解している俺は、テーブルの片隅においておいたクッキーを指差しながら言ってやる。

「食べていいの！？（キラキラ）」
「目をキラキラさせるな。気色悪い」

「いただきまーすっ！！」
「あ、バカ！俺の分まで食おうとするんじゃねぇよ！！」
すべて食われる前に、俺の分を確保します。元はといえば、俺のおやつように残しておいたんだぞ？

「はぁー・・・・・。美味しかったよ、雅夜」
「どういたしまして」
明久が食べてる間に二つのカバンにしまっておく。片方は文月学園、もう片方は翡翠で配るものを。

「それにしても、なんでクッキーを作ったのさ。誰かの誕生日でもあったっけ？」
「・・・・・・・・・は？」
いまさら何をいってるの、コイツは。

「なんでもなにも、明日はバレンタインだろ？」
「バレンタイン？・・・ああ、そういえば明日だったっけ」
「そういえばって・・・・・覚えてなかったのか？」
「まぁねー、ってだったらなんで雅夜がお菓子を作ってるの！？バ

レンタインって女の子が男の子にチョコを渡すんでしょ？」
「日本では、な。欧米あたりだと、バレンタインは男性も女性もクッキーやカード、ケーキなどのさまざまな贈り物を贈る日なんだよ」
「へ～。でもここは日本だよ？」
「日本でも男性が送ってもおかしくないだろ？去年は逆チョコが流行ったことだし」
「あー、そういえばそんなこともあったね！」

まぁ、世間ではそんなことがあったから去年からは俺も作るようになったんだが。

「それで、明久はいいのか？あげたい人の１０人や２０人ぐらい居るだろ」
「そりゃあ・・・・・・って、今人数のケタおかしくなかった！？」
？　おかしいところあったか？

「で、結局のところどうするんだ？」
「・・・まぁ、作らないと思うよ」
「だろうな。作ろうと思っても足りないものがイロイロ・・・・・・全部ないもんな」

材料や包み買うためのお金だとか、道具だとか、愛情だとか・・・。

「ま、明日は頑張れよ」
「なにを頑張れって言うのさ」
「・・・えーっと、まだ気づいてないのか？」
「だからなにを？」

ハァー。だからこいつは――――――

「当然、姫路も作ってくると思うんだが？」

命が何個あっても足りないんじゃないか？

番外・バレンタイン編　前編（後書き）

バレンタイン編前編終了。

雅夜がバレンタイン用に作ったのはバニラクッキーとチョコクッキーです。

一人分はバニラ４、チョコ１で一袋となっています。

感想お待ちしております。

番外・バレンタイン編　中編

明久の「雅夜！なんとか出来ない！？」という声を無視して、当日――――つまり、バレンタインデーをむかえた。

「よしっしょ、っと」

用意しておいたお菓子を入れたカバンを担ぐ。あんまり重くなくてよかった。

「んじゃ、とっとと行くか・・・・・・ん？」

家を出ようとし玄関まで行くと、扉に張り紙と袋があった。内容は、

「『ハッピーバレンタイン！これはマサへのとクラスの人達へね♪
ＰＳ．午後４時頃にはこっちに顔出してね。　深風より』」

袋の中身はチョコなのだがまったく溶けている様子はないので、こっちに持ってきてからあまり時間は経っていないのだろう。

「ったく・・・。メールをしてくれれば取りに言ったっていうのにな」

袋の中から自分の分のチョコを取り出して口に放りこむ。お、うまくなったな。

「うーっす」

いつもならこの時間には居ないはずのFクラスのやつらは、全員（明久、雄二、姫路、島田、秀吉、康太は除く）正座して座っていた。どんだけ、バレンタインが気になるんだよ・・・？

「・・・・・・・・・にらむなよ、お前ら」

教室に入ると同時にギラついた目でにらまれる。いや、血走った目で確認される、か？

『なんだ、浅月かよ・・・』
『やっと来たかと思ったのに』
『まったく・・・空気読めよな』

・・・・・そうか、空気を読まないといけないか。なら・・・

「すまなかったな。せっかく深風からお前らアテのチョコを渡されたんだが、いらないのか・・・」
『『『ようこそ、浅月雅夜様。貴方様を心のそこから歓迎いたします！』』』
「変わり身早ぇな！！」

だらけた姿勢から、姿勢の良い土下座に早変わり。

『早く！そのバレンタインチョコをくれっ！』
『家族以外からもらえる初めてのチョコが、深風様から・・・・・・』
『あぁぁぁ・・・・・・。感動的すぎる！』
感謝感激の言葉が漏れ始める・・・。ふ、普通に気持ち悪いぞ・・・・・。
「・・・・・えっと、須川にまとめて渡すから皆でちゃんとわけろよ」
『ああ、任しとけ！』
『だから早く、俺たちに希望の光を！』
『まだ俺たちの青春は終わってないんだぁ！』
どんだけ欲してるんだよっ！？
「まぁいいや。お前らに付き合ってると時間がもったいないからな」
ほれっ、と須川に深風からのチョコをまとめて渡す。
『『『ありがとう、浅月！』』』
「こういうときだけは、素直なんだな・・・」
あ、そうだ。一ついい忘れてたな。
「ちなみにチョコは２０個しか無いからな」
『『『よこせぇーっ！！』』』
俺の発言ですぐに須川に飛び掛るＦクラス男子総勢４３名。チョコ

は誰の手に渡るのか・・・。

「・・・お前狙ってやっただろ？」

後ろから声をかけられる。この声は・・・雄二だな。

「あたりまえに決まってるだろ」

「まったく・・・」

ハァとため息を吐く雄二。俺と違って雄二は平和な日常を欲してるからな。これだけはどうも気が合わないんだよな。

「っと、ほれ。お前の分だ」

「雅夜・・・・・・・・・っ？」

「変な勘違いをするんじゃねぇよ。ねーさんからだ」

「わかってるよ。冗談だ。お礼言っといてくれ」

そう言いながらチョコを受け取る。ずいぶんと簡単に受け取ったな。

「いいのか？」

「あ？なにがだ」

「いや・・・・・・霧島が知ったらどうなるんだろうな、と」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・だ、大丈夫だろう。流石に」

「・・・・・・雄二。ちょっと向こうに来て」

大丈夫じゃないみたいだな。

「マ、マテッ翔子！これは雅夜の姉貴からのであって、決して本命のチョコではないギャアアッ！」

「・・・・・・浮気は許さない」

がんばー。

「雅夜っ！てめぇ謀ったなっ！！」

「さぁて、なんのことやら」

「知らばくっれるんじゃンギャァアアア！！」

「・・・・・・さ。あっちに行こう？」

いってらっしゃーい。

「・・・まったく、お主というやつは」

「アンタはもうすこし落ち着いていられないの？」

「その、ちょっと坂本君がかわいそうじゃありませんか？」

雄二を見送ってるとまたも後ろから声をかけられる。やっとウチのクラスのアイドル（笑）がやってきたみたいだ。

番外・バレンタイン編　中編（後書き）

バレンタイン編、中篇終了。

・・・・・番外編だとヒロインたちが登場するまでに時間がかかりますね（笑）

感想お待ちしております。

番外・バレンタイン編　後編

「よっ、三人とも。別にいつものことじゃねぇか」
「おはようなのじゃ、雅夜。・・・今日はいつも以上じゃないかの？」
「おはよう、浅月。まったく、アンタといいアキといい・・・」
「おはようございます、浅月君。男の子ってどうしてこうなんでしょうね？」

知るかっ！

っと、そうだ。忘れないうちに・・・

「ほらよ姫路、島田。それで秀吉のはこっちな」
「「なんで、浅月（君）（雅夜）が！？」」

そこまで驚くことか？別に男が渡しても問題ないだろ。

「逆チョコってもんがあるだろ？それと秀吉のは俺のねーさんからのだ」
「む、そうか。なら受け取っておこうかの」
「じゃあ遠慮なくもらうわね」
「ありがとうございます」

あたりまえの如く義理だけどな、といいながら三人に渡す。
軽く笑いながら俺から受け取ると姫路はポンッと手を打って。

「じゃあ、私からも浅月君にあげますね」
「あ、ウチもあげるわ」

「・・・・・すまんのじゃ雅夜。ワシは何も持ち合わせがなくて」
「秀吉のは俺じゃなくて俺のねーさんからのだから、俺に返さなくてもいいんだよ」

それにな、

「姫路に島田。本命（あきひさ）がいるのに気軽に他の男性にチョコをあげようとするな。勘違いされたらどうするつもりだ？」
「「あっ！」」

後、後ろでカッターを構えてるFクラスの連中をどうしてくれるんだ？

「まったく・・・。考えなしの行動かよ」
「あ、あの、浅月君。これのお返しはホワイトデーということで・・・・・」
「ウ、ウチもそれでいい？」
「いや、別に返さなくてもいいぞ」
「えっ！？でも、それじゃあ」
「こっちが申し訳ないじゃない」
「でも申し訳もないから。本人（おれ）が要らないって言ってるんだから、いいんだよ」

事前にホワイトでのお返しは断っておく。姫路が何を創るかわからんからな（島田のは別にもらってもいいんだが）。

（バンッ）「セーフッ！」（キーンコーンカーンコーン）「ほらお前ら、とっとと席につけ。朝のＨＲを始めるぞ」

いきなり明久が扉を開けて走って入ってきたと思ったら、チャイム

が鳴り西村さんが入ってくる。

「ほうら、王子様のご到着だぞ？」

「んじゃあ、行ってくるわ」

四時間目の授業が終わり昼休みなった。いつもは持ってきている弁当は今日は持ってきてない。

「え、どこに？」

「イロイロなところ、に」

クッキーを入れてあるカバンを持ち、立ち上がる。朝にぜんぜん配ってないからなぁ。

「じゃあな」

「うん。じゃあねー」

明久に別れを告げて扉に向かう。途中で・・・

「あとは頑張れよ？」

「「はぅ／／／」」

姫路と島田にそっと言っておく。この二人、タイミングがないと明日になっちまうからな。

ちなみに雄二は朝以降姿を見せていない。どこにいるんやら・・・・？

～職員室～

（コンコン）「失礼しまーす」

「ん？なんだ浅月か。なんのようだ？」

「今日はバレンタインということなので日頃の感謝をこめてクッキーをつくってきました」

「感謝だと・・・？・・・・・・・コレになにを盛った？」

「なにも盛ってねぇよ！？」

あれ。俺ってそんな扱いだった？

「だが、お前から感謝の気持ちを感じるのはチョットな・・・」

「・・・まぁ、確かにそうですね。じゃあ、アレです。いつもお疲れ様、ってことならどうですか？」

「む・・・・・・。それなら違和感がないな」

たぶん俺と西村さんが共感できるであろう数少ない気持ち。

「一応先生達全員分はありますので皆さんに。では、俺はこれで失礼します」
「ああ。ありがとな」

～Dクラス～

「うーっす、清水いるかー？」
「・・・浅月でしたか。いったいなんのようです？」
「ん、これを渡しに」
「これは・・・クッキーですか。って、今年も作ったんですかっ！？」
「まぁな。去年もそこまで大変じゃなかったことだし」
「・・・まぁ、これは頂いておきますけど」

しぶしぶと言った感じで受け取る清水。こいつは・・・っ！

「去年はあんなにもうれしがっていたくせに。まったく、照れ屋（ツンデレ）は似合わないぞ？」
「・・・・・殺されたいんですか？」
「んじゃーな」

手に持ったカッターを見てすぐさま教室から出る。ふぅ、危ない危ない。

～Aクラス～

「ほら優子。『プレゼントはわ・た・し♪』用のリボンあげるから～」

「いらないわよっ！？」

「そんなこと言って、さっきから目がリボンをずっと見てるくせに。興味津々なんでしょ？」

「そ、そんなわけないでしょっ！」

「・・・・・雄二。アーン」

「なんで固形物のはずのチョコがボコボコと沸騰してるんだっ！？」

あ、雄二。此処にいたんだ。って、今考えるべきところはそこじゃないな。

すぅーっと息を吸って。

「カオス過ぎんだろっ！？」

実はAクラスってFクラスよりも異常なんじゃないか？

「あ、噂の浅月君だ。やっほー」

「ま、雅夜っ！？なんでここにいるのよ！！」

「・・・・・そんなことよりも、アーン」

「助けろ雅夜っ！元はといえばお前が原因だろうが！」

んー、あー、えー、と。とりあえずだ。

「落ち着けよっ！」

「で。なんでこうなっていたんだ？」

この中で一番の常識人（であってほしい）工藤に聞くと。

「えっと、まず代表が朝、坂本君を連れてきたと思ったらイスに縛って」

「まぁ、それはいつものことだな」

「ツッコメよ！？」

スルーもツッコミなのだよ？

「それでお昼休みになったら代表が坂本君にチョコを食べさせてあげるのを見て」

「ふむふむ」

「今日がバレンタインだってことに優子が気がついてね」

「はい、そこでストップ」

いったん話を止めて。

「お前、女の子だよな？」

「・・・覚悟は出来てるわよね？」

「女子だったらバレンタインを忘れるなゴペッ！」

なんで女子の拳ってここまで痛いんだろう？

「・・・まぁいい。それで？」

「復活早いねー。・・・・・・で、優子がチョコの用意してない、って慌て始めてね」
「だろうな・・・」

バレンタインを忘れててチョコを忘れないってありえないもんな。

「だからボクが優子に『プレゼントはわ・た・し♪』用のリボンを」
「いきなり話が飛んでないか!?」
「え、そうかな?」
「いろいろ言いたいことはあるが・・・・・・なんで工藤はそんなリボンを持っているんだ?」
「乙女の嗜み?」
「疑問系で返すんじゃねぇよ!・・・・・・・・・って、そうか」

ある一つの解答が浮かんだ。

「ん?どうかしたのかな?」
「自分が使うようだったんだな。康太相手に」
「ななな、なんでそうなるのかな!?」

康太と工藤はけっこう相性いいからな。

「なるほど。だからリボンを持ってたのね」
「ち、違うよっ!!たまたまカバンに入ってたんだよ!!」
「てっきり手作りチョコを手渡しするのかと思ってたんだが」
「なんでボクがムッツリーニ君に渡さないといけないのさっ!!」
「そうね。顔を真っ赤に染めながら『仕方ないからコレあげるよ、ムッツリーニ君///////』とかそんな感じで」
「そんなの全然ボクなんかじゃないよ!」
「お、それだっ!」

「浅月君も『それだ』じゃないよ！！」
「「照れるなよ（ないで）、工藤（愛子）」」
「ハモらないでよっ！？」

イェーイ！と優子とバトンタッチ。俺たちゃあ最強コンビ！

「・・・あ。そういえば雅夜はなんでここに来たの？」
「ん？・・・・・・おお！」

ここに来た目的を忘れるところだったな。

「これだコレ。これを優子とＡクラスの皆に渡すんだった」

カバンからクッキーを取り出し優子の分は優子に渡して、Ａクラス宛のをテーブルに広げる。

「「なんで雅夜（浅月君）がっ！？」」
「もうその反応は聞き飽きた」

なんで俺が渡すと皆そんな反応なんだ？

「・・・あれ？聞き飽きたってことは他にも渡したの？」
「ああ。姫路とか島田とか清水とか教師にだとかいろいろな」
「ふ～ん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「えーっと優子さん？なんで黒いオーラを出しているんでしょうか？」
「・・・・・浅月君、浅月君。優子以外の女の子にもあげちゃダメでしょ？」
「あげちゃダメって・・・。ほとんど義理だぞ？」

あ。さらに優子のオーラが黒くなった。

「ほとんどってことは本命もあるの!?」

「誰に渡したのよ!!」

「一つはそれだぞ」

優子に渡したのを指差しながら言う。

「あ、ありがとう／／／／／／」

「あ～、はいはい。イチャつくのはそれぐらいにしておいてくれないかな?」

「康太とイチャつけないからって怒るなよ」

「そんなんじゃないよっ!」

フンッと顔を背けながら俺が作ってきたクッキーに手を伸ばす。

「それにしても美味しそうだねー・・・って、ホントに美味しいよ!?」

「あたりまえでしょ?だって雅夜の手作りよ・・・んー、雅夜のお菓子はなんでも美味しいわね」

「どういたしまして」

Aクラスの設備で紅茶を入れる。学校の設備で紅茶が入れられるっていいのか?って毎回思うところだ。

「なんでもって・・・。優子って他にもつくってもらったことがあるの?」

「沢山あるわよ」

「沢山作ったな」

「うらやましいなー・・・。ねぇ浅月君ってなにが作れるの?」

「なんでも作ってくれるわよね？」
「基本的なものはほとんどつくれるからな」
「たとえば？」
「んー、ケーキは結構な種類つくったな。あとクッキーやシュークリームも」
「へ～、ってシュークリームも作れるの！？（キラキラ）」
うおっ！いきなり乗り出してくるなよ。
「ねぇ、シュークリームも作れるってホント！？（キラキラ）」
「あ、ああ」
「今度作ってきてくれない？（キラキラ）」
「べ、別に構わんが・・・」
「やったー！（キラキラキラキラ）」
目ぇ輝きすぎだろ？そして、トリップするな。
「俺のシュー食えるだけでそこまで喜ぶものか？」
「雅夜。アタシの分も作ってくれるわよね？」
「ああ、もちろん」
優子は慣れたのか、もう目を輝かしたりはしなくなった。トリップはしているが。
『あれ？なにトリップしてるのよ愛子』
『優子も軽くトんでない？』
『あ、このお菓子私たちも食べていーの？』
「あ、ああ。どうぞどうぞ」
近くにいたＡクラスの女子がお菓子に釣られてこっちに近づいてく

る。

『おいしーっ！なにこのお菓子！！』
『どこのお店で買ったの！？』
「いや、俺がつくったやつだが・・・」

俺の台詞にええーっ！？と声が上がる。

『え！？このお菓子浅月君が作ったの！？』
『お店のやつよりも美味しいよ！』
「あ、どういたしまして」

なんかやりづらいな・・・。なんていうか、こう、悪意のない悪戯みたな感じっていうか・・・。

『そういえばなんで優子と愛子がトリップしてるの？』
『浅月君のお菓子食べたせい？』
「ん、いや。俺が今度シュークリーム作ってきてやるって言ったらこうなった」
『浅月君ってシュークリームもつくれるの！？』
『いいなー優子と愛子。クッキーがこんなにおいしいんだからシュークリームはもっとおいしいんだろうな・・・・・・あ！』

ん、なんだ？
女子がなにかを思いついたのか、回りの女子に耳打ちをして自分の席（と思しきところ）に戻って、なにかを持ってこっちに戻ってきた。

って、ちょっと待ったっ！！そ、それは・・・っ！！

『『『はい、バレンタインチョコ。ホワイトデーは期待してるねっ！！』』』

俺にチョコ――――おそらく友達にあげるであろうチョコを渡して返品される前に去っていった・・・。

やめてくれよぉーっ！！だからチョコはもらいたくなかったん――イタッ！？

「・・・なんだ？」

頭になにかを当てられたような痛み。回りを見渡してみると・・・・・。

「チ○ルチョコ？」

が落ちていた。ふと扉のほうを見てみるとドリルのような髪が見えた。今のは清水か？

「なんでこんなものを・・・・・・・・・ん？」

床にテープがついた紙が落ちている。もしかしてチロ○チョコについてたのが、俺に当たった衝撃ではがれてしまったのか？

「えーっと、なになに・・・『期待していますわよ？』ってふざけんじゃねぇよ！！」

お前もホワイト目当てかよっ！？

番外・バレンタイン編　後編（後書き）

こうして雅夜のバレンタインが終わった・・・・・・わけもなく放課後は喫茶・翡翠にも行かなければならなかった。

翡翠のほうでのバレンタインはまだあんまりキャラが出てきていないため、ホワイトデーのときに書こうと思います。

つまり、ホワイトデーの特別編はないということです（笑）

感想お待ちしております。

第９０話

『Ａクラス　霧島翔子　木下優子　＆　Ｆクラス　姫路瑞樹　坂本雄二　吉井明久
総合科目　４６８２点　３８５９点　４３８７点　２６０４点　１０３５点　』

合計約１６５００点。まぁ、こんなものだろうな。対する俺は・・・

『ＶＳ　Ｆクラス　浅月雅夜
総合科目　７３６７点』

『『『・・・・・・・・・・・え？』』』

むぅ・・・。むこうの半分くらいか。

「・・・・・おい、雅夜。なんだこの点数は？」
「なにって、俺の点数だが」
「・・・・・・なんでこんなに高いの？」
「そりゃあ、本気を出したからな」
「・・・・・・本気を出したからってコレはないでしょ？」
「いやいや。俺は元からこんなんだって。いつもが低いだけ」
「・・・・・・前よりも高くなっていませんか？」
「去年は５、６０００点ぐらいだったっけか？」
「・・・・・目標がさらに高くなった」
「高橋女史を目標にしろ。あの人は俺よりも高いぞ？」

皆あっけにとられながらも（霧島はいつもと変わらなかったが）俺

に聞いてくる。なんだ。あんまり驚いてないみたいなだな。つまら
――――

「「「「それでもおかしいだろっ（よっ）（でしょっ）（ですよっ）!?」」」」

「うおっ!?時間差で驚くなよお前ら」

「これを驚かないでいられるかっ!!」

だったら最初から驚けよな・・・。

「だいたいお前がその点数なら俺たちは――」

「はい、雄二ストップ!この話はここまで」

「待てっ!!まだ言うことは沢山あるぞ」

「もう戦闘を開始する。・・・観客がいるんだぞ?」

「・・・チッ。わかった。あとで説明しろよね」

断る!!・・・が、言わないでおこう。

「んじゃあ・・・・・・」

改めて俺の召喚獣を相手と相対するように動かす。

腕輪もちは二人。姫路のは遠距離攻撃とわかっているが、霧島のはまだわからない。こっちは注意しないとな。

残りの三人で注意するのは・・・明久だな。ダメージにならないとは言え、多数相手のときに体制を崩されるのは一番まずい。優子と雄二は・・・・・・・・・まぁ、どうにかなるだろう。

「始めるとするか」

「雅夜ぁー！」

始まってすぐ、雄二の召喚獣（以後、召喚獣は省きます）がいきなり突進して攻撃してくる。
それを見た俺は、

「受けて立つっ！！」

雄二と乱撃戦に入る。いくら雄二の装備が軽くて早く動けるといっても俺との点数差は三倍。その早さには余裕で対応できる。

「オラオラオラッ！！」
「はあああぁ！！」

雄二が気合を入れてさらに力をこめてくるが、そのすべてをかわし、弾き、受け止め、ながす。

「後ろ取ったぁーっ！」
「わかってんだよっ！！」

明久が首を狙って木刀を振り下ろすが来るのがわかっていた（本体（おれ）は後ろにいるので戦場はきちんと見えている）ので、しゃがんで回避。

「邪魔だ明久っ！」
「貴様のほうこそっ！」

ちょうど雄二と明久をお互いに攻撃があたるように動いたつもりだ

ったが、あっさりと回避して二人がかりでかかってくるので後ろに飛んで回避する。

「予想通りっ！！」

死角――――空から優子が槍を構えながら降って来る！！

「まだまだっ！」

槍の側面に右手に持った小太刀を当て軌道をそらし、そのまま左手の小太刀で無謀身な背中を蹴り飛ばそうとする。が、

「・・・・・・覚悟」

「やあっ！」

「だああっ！！」

と、猛烈なスピードで姫路と霧島が後方の左右から攻撃してきたので今度は前方――――優子と同じ方向に転がる。

「「くたばれーっ！」」

「危ねっ！？」

すると優子の影から明久と雄二が飛び出してきたので、慌てて大幅に真横に飛んでいったん息を整える。

と、同時に観客（教師陣も含む）から歓声があがる。戦いのレベルが高い分、見ていて楽しいのだろう。

「ふぅ・・・・・・。流石に５にん相手はきついな」

むこうもこっちを警戒しながら体制を整えている。

「ふざけるんじゃねぇよ。俺たちを相手にまだ一発も食らってないだろ」
「しかもそっちは回避ばっかりしかしてないくせに」
「それも、どれも間一髪で避けてるように見えるけどちゃんと見切ってね」
「それにまだ本気じゃありませんよね？」
「・・・・・・まだ腕輪を使ってない」

んー、まぁな。初っ端から全開でいっても面白くないし。

「それに霧島。腕輪を使ってないと言うが、そっちもまだだろ？」

先に手の内を見せるのはあまり好きじゃないという理由もあることだし。

「・・・・・・なら次は使わせてもらう」
「私も使っちゃいますよ？」

だが霧島は俺とは考えが違ったみたいだ。挑戦的な目になった。

それなら俺は・・・

「かかってきな。真っ向から打ち破ってやるよ！」

今までのは準備運動。こっからが第一ラウンド！！

第９０話（後書き）

バトルスタート・・・？

最後に準備運動と言ってますが、

雄二たち（腕輪なし組み）はマジでした（笑）

感想お待ちしております。

バカテスト第9問目・・・・・・ではなくて（前書き）

オリキャラの植田菖蒲のプロフィール紹介です。

バカテスト第9問目・・・・・・ではなくて

名前：　植田　菖蒲　（うえだ　あやめ）

容姿：　金髪で腰まで伸ばしている　アホ毛　青色の澄んだ瞳　身長１５７ｃｍ　Ａカップ

家族構成：　母親　菖蒲

所属：　杜丘高校２－Ｄ　生徒会役員（書記）

呼称：　植田　アヤメ　アヤメちゃん　アヤ　アヤっち

性格：　自信家であり努力家。若干ツンデレ

好きな物（事）：　美味しいお菓子　まったりとした雰囲気　噂　嘘

嫌いな物（事）：　期待ハズレ　マズイお菓子　殺伐とした雰囲気

趣味：　噂を確かめること　お菓子を食べること

特技：　４ケタまでの計算なら暗算できる　味がわかる

弱点：　髪を弄る（られる）のが苦手

秀吉と同じジジィ口調で話す。

翡翠屋の常連であるが、土日には行かない（雅夜のバイトの日は土日のどちらか）のであるため雅夜とは初対面。

噂話を聞くのが大好きで、自分でその噂の真偽を確かめるのも好き。

アホ毛は噂を感知するレーダーになっている。（鬼太郎の髪みたいに）

父親は死去しており、母子家庭。アヤメの父親はミシュランでの審査委員をやっていた。

アヤメは父親の舌ゆずりで、味にうるさくなった。

痴漢対策のためカバンの中には鉄アレイが常に入っており、過去に何度か使用済み。（杜丘高校の付近には不良が結構溜まっている）

バカテスト第9問目・・・・・・ではなくて（後書き）

更新遅れて申し訳ございません（泣）

学生の敵――テストが近づいて来た為、親の警戒心があがってきたのです！

少しの間、更新があまり出来ないかも知れません・・・・・・。

感想お待ちしております。

第９１話

「・・・良し。やるぞっ！！」
「「「「はい！」」」」
雄二の掛け声で各自が散開する。
「行くわよ、雅夜！」
しかし、優子だけが一直線にこちらに突進してくる。
「さっきの二の舞だぞ？」
さきほどと同じ様に側面を小太刀で軌道をずらそうとする。
「そんなことわかってるわよっ！」
「――――っ！？」
が、小太刀を押さえ込むように力をかけて来た。いくら点数が離れていたとしても槍と小太刀だと、質量差がありずぎる為、腕を引いて槍から回避する。小太刀を押さえ込もうとした為、槍の軌道は変わっているので回避は簡単だ。
「そこぉぉおっ！」
回避したところに明久が木刀を思いっきり振り下ろしてくる。
「もらったぁぁっ！」
「温いわっ！！」

「嘘っ！？」

振り下ろされた木刀を二本の小太刀を交差させ受け止める。力を籠めていたためか小太刀に木刀がめり込む。
そのまま叩き切ろうとこちらも力を籠めようとすると、雄二によって邪魔される。

「なにやってんだ明久ぁっ！」
「うるさいっ！」
「喧嘩しないでよ」

そこに優子が加わり、三人で同時に攻撃してくる。
雄二が俺の動きを止めようと乱撃し、明久が鋭い攻撃をしかけて俺の体制を崩させようとする。そして優子が隙を見つけたら槍での攻撃を入れる。

「何だ、さっきとは全然動きが違うじゃないか！！」
「さっきまでのは準備運動だったんだろ」
「確かに・・・・・なっ！！」

雄二の頭をつかみそのまま地面に叩きつける！

「なっ！？」
「雄二っ！」
「――――バカッ。雅夜に集中しろっ！」
「遅いんだよっ！！」

続けて明久の足を刈り、宙に浮いたところを蹴飛ばす。

「ごふっ！」

「なにやってんのよ二人ともっ！！」
「優子もな」
「・・・え？」

槍の先端をつかみ、背負い投げの要領で地面に叩きつけようとする。
が、優子は途中で槍から手を離してしまったのか遠くに飛ばされる。

「浅月君っ！覚悟です！！」
「っ！　姫路か！？」

先ほどまで攻撃に加わってないと思ったら、すこし離れた位置で腕輪を光らせている。
だが、姫路の腕輪の能力『熱線』。射線は直線なので腕の動きから目をそらさないようにする。

「来るなら来いっ！！」
「行きますっ」

ぐっ、と手に力を籠め、腕を前に突き出してくる。その動きに合わせて横に飛んで回避――――ん？
俺がさっきまで居た場所には熱線は来ず、姫路の腕輪から光は消えていた。なぜだ・・・・・・？

「翔子ちゃん。今ですっ！！」
「・・・・・任せて」

なんだとっ！？　フィールドを見渡して見ると端の方で霧島が腕を俺に向かってつきだし腕輪を光らせていた。やばい・・・・・避けきれるか！？

「くっ・・・！」

姫路のほうを警戒しながら、霧島を見る。霧島の腕輪の能力は知らない。だから出だしをしっかりと見ないと・・・・・。

「避けてみせるっ！！」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

が、待っても一向に何かをしようとしない。腕輪も光るのをやめている。

「って、来ないのかよ！？」

思わずツッコム。なにこの思わせぶりな行動！？

「来ないならこっちから行く・・・・・・ぞ？」

いまだに動かない霧島に向かって走らせようとするが、こちらも動こうとしない。

目を凝らしてみてみると・・・・・・

「・・・・・・『拘束（バインド）』」

「・・・それは反則じゃねぇか？」

足に光の環が縛り付けていた。拘束（バインド）・・・・・・これが霧島の能力か。

「・・・・・姫路、お願い」
「任せてくださいっ！！」
「って、マジかよ！？」

いまだ霧島に拘束されている状態で、姫路の腕輪が光り始める。ちょ、待てっ。なにこのいじめ！？

「これで終わりですっ！！」

先ほどよりも力を籠め、思いっきり腕を突き出す。

「『熱線』っ！！」

そこから放たれるのは一撃必殺の熱線。食らったら一溜まりもないだろう。

・・・・・・・・・仕方ないな。もうすこし出し惜しみしたかったんだが。

「――――『複製（レプリカ）』」

姫路の熱線を喰らい、煙が巻き上がる。

第９１話（後書き）

ついに発動！

黒金の腕輪――――起動キーは『複製（レプリカ）』

字を見てわかるかもしれませんが、どんな能力かは次回！！

感想お待ちしております。

第92話

～ｎｏ　ｓｉｄｅ～

姫路の腕輪『熱線』が直撃し、フィールド――雅夜がいた場所は煙に包まれた。

「・・・やったか？」

「一応、手応えはありましたけど」

「・・・・・でも油断は出来ない」

「あの雅夜（てんすう）だとしても、さすがに直撃したら死ぬでしょ？」

「まぁ倒してなくても大ダメージは受けてるでしょうね」

煙りがあるため下手に出ることは出来ないので一箇所に固まり、様子を伺っていた。

「それにしても上手く行ったね」

「ああ。腕輪無し組（おれたち）みが雅夜の足止めをして」

「代表の腕輪で動けなくしてから、姫路さんので止めを刺す。いい作戦だったわね」

作戦を練ったのは雄二である。短時間の間にここまでの作戦を一人で立てたのだ。神童の異名は伊達ではない。

「ちと予定が狂ったけどな」

「そうですね。作戦通りだったなら、私はフェイントを入れないはずでしたし」

「あれ、そうだったの？」

「吉井君は聞いてなかったの？代表と姫路さんが安全距離にいける

まで私達で雅夜の足止めをする予定だってでしょ？・・・・・・でも」

「・・・・・予定より早く雄二たちが倒された」

倒されることは作戦のうちであったが、予想より早く倒されてしまったのである。

「だから咄嗟（とっさ）に姫路にフェイントを入れさせたんだ」

「あの時はまだ翔子ちゃんが安全距離とはいえる位置にいなかったですからね」

「・・・・・浅月の射程距離が広すぎる所為」

「中央に立たれたらフィールドのほぼ全体が埋まっちまうからな」

雅夜（７０００点オーバー）を相手にするにはこの会場は狭すぎた。雅夜からしたら、フィールド上ならほとんどが一瞬でいける範囲になっているのだ。

「腕輪の一撃を入れたんだ。これで楽に戦えるように――――っ！？」

突如雄二が身構える。その目は・・・・・・煙りがあがってる地点を凝視していた。

「どうしましたか、坂本君？」

「・・・・・・皆。戦闘準備」

「え？・・・もしかして」

「やっぱりこの程度じゃ、倒れるわけが無かったみたいね」

雄二の反応から、何が起こったのか気がつき戦闘準備に入る。

そして、煙が晴れたところには・・・・・・・・・

「流石に今のは危なかったな」

大剣を盾のように構えている雅夜の姿があった。

～side雅夜～

「流石に今のは危なかったな」

煙りが晴れ、自身の召喚獣の無事を確認して――『黒金の腕輪』の能力が上手く成功したのを確認する。

観客からはもう何度目かわからない歓声があがる。

「・・・・・それが『黒金の腕輪』の能力ってか？」

「正解。起動キーは『複製（レプリカ）』。大まかに説明すると、フィールド内にある武器を点数と引き換えに創ることが出来る代物だ」

「じゃあ、それは私の剣を創ったって事ですか？」

「ああ。盾がわりに使わせてもらった」

「でも、姫路さんのと比べるとすこし小さくない？」

「複製するとき、大きさを変えられるんだ。あんなゴツイのを振り

回せるかってんだ」

大剣を正眼に構えなおさせる。・・・・・・一回り小さくしてあるといっても十分重いな。いったん地面に下ろすとするか。

「ずいぶんと使いがってが良さそうだな？」

「いや、欠点（デメリット）もきちんとある」

欠点がないと反則技（チート）になってしまうだろ？そんなんじゃ面白くない。

「まず一つ目。贋作は本物には敵わない」

「・・・・・えーっと、どういうこと？」

「要するに俺が作ったものは・・・・・・たとえばこの姫路の剣。姫路剣を前に突き出せ」

「え？あ、はいっ」

姫路が剣を前に突き出したのを確認し、それに向かって投げつける！

「きゃっ――――あれ？」

姫路の剣に当たった瞬間、俺が作った贋作は粉々に砕け散った。

「こんな感じに複製する対象に当たると壊れてしまう」

「なるほど・・・だから【贋作は本物には敵わない】なんだね」

「ま、そうゆうことだ。二つ目は、剣は主人に刃向かわない。これは一つ目とさほど変わらないんだが・・・姫路の剣では姫路にダメージは与えられないってことだ」

「ってことは、一対一だと意味の無いものになっちまうのか？」

「まぁな。俺の武器は小太刀だからそこまで殺傷能力が高くないから」

複製できるのはあくまで武器だけ。鋼糸は複製できない。ちなみにジャケットに入っている――試合を始める前に投げ捨ててあり、この試合では使う気はなかったりする。

「で、三つ目が腕輪を複製できないってことだ」

「そりゃねぇ・・・。腕輪まで複製できることになってたら反則物だよ」

他人の腕輪を好き勝手に使うことが出来るんだ。もとから強い能力をいくつも使えたら・・・・・使用を制限されてしまうかもしれないな。

「そうね。・・・・・たとえば、姫路さんの腕輪を同時にいくつも発射できたりしちゃうものね」

そこで、優子がなんともグロイ案を出してくれた。

「「「「「・・・・・・・・・」」」」」

それを聞いた皆は固まる。その発想は無かったな・・・。

ちなみに明久は冷や汗を大量にだしていた。自分が喰らったところを想像してしまったのだろう。

「ま、まぁ黒金の能力はそんな感じだ」

これで説明は終了。黒金の能力は以上である。

「なるほどな・・・・・。確かに使い勝手が良さそうとは一概には言えないな」

「だろ？」
「でも、雅夜だったら上手く使えるんじゃないかしら？」
「さぁ。どうだろうな？」

癖のあるものを使うには、それをどこまで理解できるかに決まるからな。

「んじゃ黒金の説明は済んだことだし。

――――第二ラウンドを始めようか！！」

第９２話（後書き）

後書き　ついに『黒金の腕輪』の能力が明かしました。

・・・黒金の能力で作った物から発生したダメージは、複製された対象者にダメージを与えることは出来ません。

雅夜は上手く使いこなすことは出来るのでしょうか（笑）

感想お待ちしております。

第９３話

「ターゲット霧島、『複製（レプリカ）』」

腕輪の能力を発動させ、霧島の日本刀を複製する。

「今度はこっちから行かせてもらうぞっ！！」

多人数を一人であいてにするときの鉄則――それは１番厄介な姫（や）路（っ）から倒すこと！

いっきに姫路との距離を詰め、切りかかる！

「っ！危ねっ、姫路！！」

「きゃっ！」

が、俺の攻撃があたる直前で雄二が姫路を突き飛ばし、外してしまった。

「ちっ。やっぱり邪魔するか、雄二」

「そう簡単にウチの主戦力を失っては困るからな」

「一筋縄ではいかないか、っと」

後ろに飛んで距離をとる。さっきまでいた場所には霧島の拘束（バインド）が発生していた。

「・・・・・避けられた」

「無音で発生するのはどうかと思うんだが？」

「避けれてる人の台詞じゃないよね？」

「感が良いだけだ」

まぁ、実際は予想が出来ていたからなんだけど。

「となると腕輪の弱点を徹底的に突かないとダメみたいだな」

姫路の熱線は直線過ぎて回避は簡単だし、霧島の拘束は動き続けていれば捕まらないからな。当然そうなるだろうな。

「じゃあ代表を軸にして攻撃ね。皆、雅夜に腕輪を使わせる時間を与えないようにね！」

「「「了解っ！」」」

優子を指示を受け、真っ先に霧島が突撃してくる。

「そう来るのはわかっていたとは言え、容赦ないな」

日本刀が霧島に当たらないように注意しながら避ける。う～ん、流石にオーバー４０００を相手に回避に徹するのはキツいな。

「・・・・・せめて剣に触れられれば」

「簡単にはさせるか、ってんだ」

霧島の攻撃を避け、背中に蹴りを当て

「危ない霧島さんっ！！」

「しっかりしてよね代表！」

ようとしたところで明久と優子が攻撃を仕掛けてくる。

「だぁーっ邪魔だ、お前ら！！」

霧島に蹴ろうとした足を明久に方向転換して蹴飛ばし、優子の槍を日本刀でいなす。

「・・・・・ごめん」

「口を動かす前に手を動かせ。今はお前が勝利の鍵なんだからな」

そこに霧島と雄二が加わる。雄二の間合いに入らないように日本刀で牽制しながら霧島との間に優子を立たせるように動く。

「ほっ、はっ、よっ！」

「くっ・・・！明久みたいにちょこまかと避けやがって」

「スライムと一緒にするな、っと」

いいながら優子の攻撃を避ける。くそっ。黒金を使うタイミングがねぇじゃねぇか。

「ああもうっ！いい加減うっとおしいんだよ！！」

「あっ！？」

「マジかよっ！」

日本刀で槍を弾いて、蹴りで雄二を浮かせる。

「んじゃ、雄二にはご退場をしてもらおうか」

無防備な状態をさらしてしまった雄二。日本刀を振りかざし、切りかかから――

「・・・・・させない」

霧島が雄二を守ろうと間に入ってくる。だが！！

「予想通り！」

――ないで、後ろに飛んで雄二に向かって日本刀を投げるっ！！

「・・・・・ダメ。間に合わない」

「くそったれが！！」

霧島が触れようとしたが間に合わず、雄二の頭を日本刀が貫いた。

まずは一人っ！

「今よ、姫路さん！！」

「はいっ。『熱線』！」

「！？ターゲット姫路『複製（レプリカ）』！」

ギリギリで姫路の熱線をガードする。

危ねっ！！息つく暇すら与えてくれないのかよ。

「雅夜、覚悟っ！！」

「今度は明久かっ！」

第９３話（後書き）

ついに死んでしまう雄二。

だが彼のおかげで生まれた隙を逃さない方達。

そろそろ決着がつきます。

感想お待ちしております。

第９４話

「雅夜、覚悟っ！！」
「今度は明久かっ！」

後ろから明久が攻撃を仕掛けてくるので、振り向きながら大剣を振るう。

「おらっ――――んなっ！？」

明久が姫路の大剣で突っ込んできたのを見て驚愕する。俺が明久を迎撃するために使ったのは姫路の大剣（レプリカ）。【贋作は本物には敵わない】。向こうにぶつければ砕け散ってしまう。

「もらったぁああ！！」

このまま大剣が砕け散ってしまったら俺は無防備な姿を見せてしまうことになる。
そう。このままだったら。

「よっしゃあ・・・・・あれ？」
「俺はこっちだぞ明久」

重量のある大剣を振るった要領で、明久の真横に移動した俺は小太刀を構えながら明久に言う。

「って、ちょ、嘘っ！？」
「じゃあな明久。最後ぐらい派手に死んでくれよ」

無防備な明久の背中に向かって二本の小太刀を投げる。そして、金色の腕輪を光らせて

「『爆発（バースト）』」

明久を爆散させる。これで二人目。

「うあいたーーーーっ！！」

フィードバックが生じ、激痛にもだえる明久。

元から俺が持っている腕輪の能力『爆発』は、俺の武器を爆弾のように爆発させる。当然爆発した武器はなくなる。

「大丈夫ですか、吉井君っ！！」

「ダメッ姫路さん！雅夜から目をそらしちゃ・・・！！」

「戦場にいるのにも関わらず、武器を持たない、相手から目をそらす。良い度胸だな？」

地面に着地した瞬間、姫路に向かって駆ける！！

「ターゲット浅月（レプリカ）（おれ）『複製』！もう一個『複製』！」

小太刀を二本同時に複製し、姫路に近づき

「出直して来い。『爆発』！！」

「きゃああっ！！」

至近距離で腕輪の能力を使い、姫路を倒す。これで三人！

「近距離爆破！？それだと雅夜もダメージ喰らうんじゃないの？」

「・・・・・違う。浅月が爆発させたのは浅月自身の武器」
「ああ、そうか！アイツ黒金の欠点を利用しやがったのか！」

そう。黒金の欠点【剣は主人に刃向かわない】のおかげで、自身の小太刀から発生した爆発は俺にダメージが来ない。

「だから、至近距離でも腕輪を使うことに躊躇いはない！『複製』！」
「・・・・・こっちに来たわね」

姫路の大剣を複製し（同じフィールドのであれば倒した奴のでもOK）、霧島に駆け寄る。
二つの腕輪を使ったんだ。もう遊びは終わりだ！！

「待って代表！雅夜を一人で相手しちゃダメ！」
「・・・・・っ。ダメ、優子。それこそ浅月の思う壺」

流石は学年主席。気づくのが――――――遅いっ！！
姫路の大剣を地面に突き刺し、それを踏み台にして高く飛ぶ。

「飛んだ！？」
「『複製』！『複製』！『複製』！『複製』！『複製』！『複製』！『複製』っ！」

そして姫路の大剣をいくつか複製し、

「ちょ、なによそれ！？」
「すこし多めにサービスしとくよ。これで・・・・・」

その全てを優子に向かって投擲する！

「派手に散ってくれ。『爆発』っ！！」
「サービスって言わないよねっ！？」

優子はこれらを避けきれるわけもなく、爆発の荒波に飲まれて沈んでいった。

「これで四人目」

そして最後に残ったのが霧島か。

「最後は取って置きで決めてやるよ」
「・・・・・まだあるの？」
「見たら誰もが驚くのが」
「・・・・・今までのでも十分驚いてる」

・・・それもそうだな。

「安心しろ。もっと驚けるものだ」
「・・・・・じゃあ、いいわ」
「だ、代表？勝つ気はないの？」

霧島の言葉に疑問を感じたのか、優子が聞いてくる。

「・・・・・もう無理ね」
「霧島の腕輪も使いもんにならないしな」
「は？お前はなにを言ってるんだ？」
「なにって・・・。味方なのに気づいてないのか？霧島の腕輪の弱点に」
「弱点！？そんなのあったの？」

おいおい・・・。今まで戦いを見てたら気づくだろうよ。

「・・・・・能力を使ってるウチは私は動けない」

「だから拘束したら、後は他人任せになっていたんだ」

使うときは止まって発動してたからな。途中で気がついた。

「ま、いいや。とりあえず、『複製』」

優子を槍を複製する。

だが、優子が使っていたのとは同じであって同じでない。

「黒金の能力。複製するものの大きさは俺自身が決められる。小さくすることも、大きくすることも俺の思うがまま」

俺が複製したのは、ほんの十倍ほどの大きさになった槍だった。

「「「デカ過ぎでしょ!?」」」

さすがに・・・っ!デカイだけあって・・・っ!重いな・・・っ!

「これで・・・最後(ラスト)だっ!!」

力の限りに槍を投げる。

フィールドをほとんど覆うほどの槍は寸分たがわずに、霧島を吹き飛ばした・・・。

『しょ、勝者、２－Ｆ浅月雅夜！！！』

第９４話（後書き）

最後のほうは急ぎ足になってしまいました（汗）

勝者は雅夜。黒金を手に入れるのも雅夜。

雅夜に最初から渡す気はなかったんでしょうね（笑）

感想お待ちしております。

第９５話

「てめぇ、最初っから渡す気なかっただろ」

授賞式と黒金の披露が終わり、出口のところで待っていた雄二に開口一番にそういわれた。

「あたりまえだ。獲得(あんなもん)チャンスバトルは、黒金を俺の所有物(もん)だってことを知らしめたかっただけだ」

「・・・やっぱり学園長の甥だけあって、することが似てるわね」

「「「甥！？」」」

俺とばーさんが似てる？

「なにバカな事を言ってるんだ優子？」

「バカなことって・・・。自分勝手に好き放題してるところとかそっくりじゃない。噂じゃ、白金だって学園長が無理やり商品に出したって言うし」

「俺はばーさんと違って、きちんと欠陥がないように調整してから表に出してる分ましだろ」

「・・・・・欠陥？」

「そういえばそのことについて詳しくは聞いていなかったわね」

・・・・・あ。やべ。

「と、そうだ。雄二に明久、姫路も。とっとと喫茶店に戻るぞ。お前らが上位入賞してくれたおかげで客も沢山来てくれてるはずだからな」
「ちょ、ちょっと待て雅夜。ババァの甥ってどういうことだ？」
「浅月君って、学園長の身内なんですか？」
「そ、そうだよ雅夜！どういうことか説め――」
「いいから、行くぞ！」

明久の言葉をさえぎって走りだそうとする。

だが、それを許すはずのないお方が・・・・・。

「ごめんね坂本君。雅夜に聞きたいことが出来たからちょっと借りるわね？」
「・・・・・優子。顔が怖くなってるぞ？」
「あ、ああ。す、すこしぐらいなら問題ない」
「バッ、バカ！雄二、お前までなにを言ってるんだ！？」

喫茶店を成功させなきゃいけないんだろ！？俺を置いて行かないでくれよ！

「坂本君の許可が下りたことだし、向こうで聞かせてくれるわよね？」
「ま、待て優子！今日はせっかくの学園祭なんだし、話は今度にしようぜ？」
「ダメよ。雅夜はいつもそうやって逃げようとするんだから」
「・・・・・私にも教えて」
「霧島もか！？お前は雄二から拷問（きけ）ばいいんじゃねぇか？」
「・・・・・浅月のほうが詳しく知ってそう」
「・・・なんでそう思うんだ？」

「「学園長の親族だから」」

ですよねー。こんちくしょー！！

「さ、メイド喫茶（うちのクラス）に行きましょ。そこできっちり聞かせてもらうんだから」

「冥土喫茶になりそうだな」

「・・・・・・なんならメイド服を貸してあげる」

「じゃあな優子！！話は今度するから！！」

霧島の言葉を聞いた瞬間迷わずダッシュ！やってやれるかっ！！

「あ！・・・ああもう、必ずよ！」

「・・・・・・なんで行った？」

「知らないの代表？雅夜って女装する（させられる）のがダメなのよ」

「・・・・・・知らなかった」

「ま、アタシも見てみたいけどね」

優子も今度は俺と止めずに見送ってくれた。・・・・・・不吉な言葉が聞こえたけど。

『雅夜ぁあ！お前もホールに入れ！』

「断る！」

『お願いだから入ってくれんかの！？お主目当ての客が沢山来ておるのじゃ！』

「面倒！」

『わ、私からもお願いします！お客さんがきすぎて大変なんですっ！』

「頑張れ！」

『お願い雅夜！ホールものすごく大変なんだよ！』

「こっちも大変なんだよ！！」

Fクラスに戻り、厨房に雄二たちに見つかる前に駆け込んだ。ホールで接客なんてやってやれるかってんだ！

『ありがとうございましたー！』

『いらっしゃいませー！中華喫茶ヨーロピアンにようこそ！』

仕事に入ってからは、客が出て行ったら客が入ってくるの繰り返し。昼前は忙しくもなく、暇でもない状況だったが・・・今は忙しすぎて死にそうだ。

「飲み物の補充は大丈夫か？」

「ウーロンが残り４割になった。他のは７、８割ある」

「３割になったらすぐに補充しとけ。この勢いじゃ先に行動しないと危なくなるぞ」

「了解！」

飲み物担当の須川に言っておく。ちなみに須川は、５０人以上にナンパしたのだが、全部失敗したらしい。

「そっちはどうだ康太？」

「・・・・・・・・・さきほど補充要員を出したところだ。問題ない」

「なるほどわかった。そいつらが戻ってきたら胡麻団子のほうも取りに行かせてくれ」

「・・・・・・・・・了解」

オススメの商品だけあって、胡麻団子の減りは速い。

『よっしゃ、到着っ！』

『は、恥ずかしいから大きな声を出さないで・・・』

『いらっしゃいませー！中華喫茶ヨーロピアンにようこそ！何名さまでございますか？』

『あ、四名です。後の二人はもうすこししたら来るんで』

『かしこまりました。席にご案内したします』

今度は四名か・・・。コレぐらいの人数ならちょうどいいんだよな。多すぎず、少なすぎず。

『ありがとうございます・・・。ほら行くよ？』

『りょうかーい～』

『・・・あんまり騒ぎを起こさないでね？』

『わかってるって！む～。それにしてもウェイトレスのレベルは高いね。よくこんなに可愛い女の子を三人も集めたもんだね』

『そうだねー・・・。って、あれ？四人じゃないの？』

『ちっちっち！まだまだだね。よく見たらわかるけど、一人は女の子じゃなくて男の子だね』

『『『『！？』』』』

秀吉を一瞬で見抜いただと！？この客・・・・・・只者じゃないな！！

第９５話（後書き）

大会も終わり、後は喫茶店で頑張るだけ！

と、思っていた雅夜だが・・・・・・

まだまだ波乱は続く！？

感想お待ちしております

第９６話

『・・・え!?ミ、未来(ミク)ちゃん。そんな失礼なこと言っちゃダメだよ・・・!?皆綺麗な女の子なんだからさ・・・』
『だから由美(ユミ)はまだまだなんだよー!私のような熟練者(プロ)から見たら、あの子は絶対男の子だね!』
『未来がなんの熟練者(プロ)なのか知らないけどさ・・・。とりあえず落ち着こう・・・。ね?』
『はいはい。わかったよー!』

どうやら秀吉を男と見抜いたほうが未来で、それを宥めてるのが由美というみたいだ。・・・・・なんとまぁ、聞いたことのあるような名前だな。

「雅夜っ!今のを聞いておったかの!」
「ああ。きちんと聞こえていたぞ。驚いたな」
「そうじゃろ、そうじゃろ!!女性でワシが男と見抜いたのはあの方が初めてなじゃ!」
「とりあえず落ち着け。性別を勘違いされなかっただけで興奮するな」

だが良くわかったなと思う。いつもなら男ものの服を着ているので疑問に感じるたり出来るのだが、チャイナ服を着ている状態で気づいたというのはすごい。

「・・・秀吉。その客(かみ)の容姿はどんなのだった?」
「うむ。ワシを男だと見抜いた客は青くて長い髪をポニーテールにしておって、その連れは茶髪のおさげだったハズじゃぞ」

知り合いの名前と、容姿が一致。・・・・・・やっぱりあいつらか。はぁ・・・。

「・・・どうしたのじゃ、雅夜？いきなりため息など吐いて」
「・・・・・たぶんそいつらは俺の知り合いだ」
「そ、そうなのじゃか？そ、それならちと、挨拶に行ってくるかの・・・」

どんだけ嬉しかったんだよ。

「雅夜の御友人なのじゃから――――」
「はいストップ秀吉。残念だが、お前はあいつらに近づくな」
「なんでじゃ！？」
「そのうち紹介してやるから今回はやめといてくれ。俺があいつらを対処しなくちゃいけないんだ」
「・・・雅夜がかの？もしかして、昼の時と同じような方なのかの？」

昼・・・？・・・・・・あー、植田のことか。

「そうだ。アレの関係だ」

・・・・・待てよ。確かアイツ帰り際に『アヤツらに教えてやらんとな』って言ってやがったな。ってことはこいつらはアレか？アイツが言いふらしたのを聞いてこっちに来たわけなのか。向こうの奴らは植田以外知ってる奴はいないからほぼ間違いないな。
良しっ！植田には今度、からしとわさびの特性ツインシューをプレゼントしてやろう。

「ってことだ康太。しばらく戻ってこれないと思うから後は頼んだ

ぞ？」
「・・・・・・・・・・逝ってこい」
「んじゃ、行って来るわ」

胡麻団子（二人前）を手に持ってホールに出る。

「むっ・・・。（クンクン）・・・・・・・・・この空気、この匂い。間違いないねマサ君だ」
「・・・いつも思うけどそんな匂いしなくない？」
「いーや、すごいするね」
「するかっ！」

いつも通り意味のわからないこと言っている未来を叩く。

「いたっ！？」
「あ、マサ君・・・。こんにちわです」
「ああ、いらっしゃい由美。そしてとっとと帰れ」
「それ店員が来たばっかの客に言う台詞！？」
「ひ、酷いですよマサ君・・・」
「ああ、由美に言ったわけじゃないから安心しろ。未来だけに言った」
「それの方が酷いよ！？」
「あ・・・。それなら安心できますね」
「由美まで！？」

由美は大人しいからな。未来みたいな騒がしい犬はお断りだ。

「・・・ったく。ほらっ。俺からの奢りだ」
「もちろんマサ君の手作りだよね！？（キラキラ）」
「あたりまえだ。じゃないと納得しないだろ？」

「ありがとうございます・・・」
「礼はいらねぇから、食ったらとっとと帰ってくれ」

ただでさえ植田の一件があったんだ。俺、清涼祭が終わったら殺されるかも知れないんだぞ?これ以上やっかいな事を起こされる前に帰って欲しい。

「や、流石に友達残して先に帰るのはダメでしょ」
「すいません・・・。あと、シノちゃんと千夏(チカ)ちゃんが来るので」
「・・・・・・忍(しのぶ)と千夏も?」

・・・・・そういえば、四名で、後の二人は遅れてくるって言ってったっけ?

「そうだよっ!先に美春(ミハ)のところに顔だしてから来るって」
「千夏ちゃんもそれについていったの・・・」
「そうか・・・・・・。んじゃ、俺はもう仕事に戻るな」

面倒ごとは逃げるに限る。席をたって――

「はい、残念でしたー!マサ君は私たちのお茶相手をすることになっているのですよ」

腕を引っ張られて席に座らせられる。ちょ、マジでヤバイんだって!!!

「こらっ、放せバカ犬!千夏はともかく忍まで会ってられるかってんだ!!」
「ダメですよ、マサ君・・・。せっかく来てくれた妻にはちゃんと会わないと・・・」

「俺は結婚した覚えはないっ！！」

そして、迂闊な発言をよしてくれ！だんだんとＦクラスの連中が殺気を放ち始めてるんだから！！

「・・・ねぇ、マサ君。なんなのこのクラス？低レベルのとは言え、結構な数の殺気を感じるんだけど」

「わ、私もです・・・。なんですかコレ？」

「それがＦクラス（うち）の特性だ。他のクラスにはもっとすごい殺気を放つ奴がいるぞ」

主に霧島とか、清水とか、優子とか・・・・・・。あれ？なんで、男子の名前があがらないんだ。

第９６話（後書き）

青髪ポニテの未来、茶髪おさげの由美。

そして、名前だけ出てきた千夏と忍。

彼女らはいったいなにを雅夜にもたらすのか？

感想お待ちしております。

第97話

「・・・で、お前らは結局なにがしたいんだ？」

とりあえず、殺気（Fクラス）は放っておくとしよう。

「マサ君が作ったお菓子を食べる！」

「右に同じく・・・」

「いや、それじゃなくてだな・・・・・・」

こいつらの『俺に会いに来た』は『俺のお菓子を食べに来た』なのは、わかりきったことだから。

「俺が聞きたいのは、俺を此処に留めてなにをさせたいんだってことだ」

「んー、お話？」

「こっちでのマサ君のこととか・・・」

「変わったことは無し。ハイ、話終了ー」

どの口が言うんだろうな？

「マサ君が話すことは終わったかもしれないけど！」

「聞きたいことが沢山あるの・・・」

「あー、今度な今度。だから今は諦めてくれ」

「マサ君がそういうなら・・・」

ん？妙に諦めがいいな？いつもならもっと突っ込んで来るんだが。

「あっちの男の娘（おとこのこ）に聞くことにするね！」

「!?」

え!?なにそれ!?俺に聞かれるよりも困るんですが!?

「おーい、そこの赤いチャイナドレス着てる男の人ー!」
「ちょ、未来ちゃん!あの人も女の子だからね・・・」
「由美。未来の言ってることは本当だぞ」
「マ、マサ君もなにを失礼なことを――――って、え?本当なの・・・?」

まぁ、誰でも信じられないよな。アレが男だって言われても。

「なんでございましょうか、お客様?」

・・・顔が思いっきり笑顔になってるぞ秀吉?接客スマイルじゃなくて。

「今、平気かな・・・?」
「平気だったらいっしょにお話しよ」
「かしこまりましたお客様。少々お待ちください」

そういって秀吉はどこか(だぶん雄二のところあたりだと思うが)に行ってしまった。

「んー可愛い子だね、あの子」
「男だけどな」
「わかってるよ。熟練者(わたし)が間違えるわけないじゃん!」
「だから、いったいなんの熟練者なのかな・・・?」
「俺に聞くな」

というか、俺も知りたい。

「それにしても何であの子チャイナ格好してるの？可愛いからいいけど」

「そこらの女子よりも似合うからだろ」

「確かに似合ってるけど・・・」

「男の子としてはいいの？」

「ああ、あいつ演劇部だからな。女物もよくやるらしい」

「へー、演劇部なんだ」

「じゃあ、今はウェイトレスの演技をしてるってこと・・・？」

「そゆうこと。・・・・・アイツの素の口調聞いたら驚くぞ」

・・・・・いや、こいつらなら慣れてるのか？

「へ？なんで？」

「それはだな・・・・・・。っと、どうだった？」

奥から秀吉が戻ってきたので声をかける。さて・・・

「うむ。雄二に聞いたら大丈夫じゃと言われたのじゃ」

「「ぶっ！？」」

「い、いきなりどうしたのじゃ！？」

「あー、お前は気にしなくていいから」

やっぱりダメだったか。植田で慣れてると思ったが・・・そうじゃなかったみたいだな。

「ケ、ケホッ！・・・・・あー。確かにこれは驚くね」

「ま、まさかアヤと同じ口調の人がもう一人いるとは・・・」

まぁ、そんなにいる口調じゃないからな。

「む。アヤとな？それはもしかして昼頃に来ておったあの客のことかの？」

「ああ、そうだ。あのときのが植田アヤメって言って。こいつらが」

「あ、自分でするよマサ君。私は中島未来（なかじまみく）って言います！よろしくね」

「わたしは長瀬由美（ながせゆみ）。よろしくね、えーっと・・・・・・」

「ワシは木下秀吉じゃ。今後もよろしくなのじゃ、中島に長瀬」

「未来でいいよヒデ君」

「わたしも由美でいいですので・・・」

「そうかの？ならば、あらためてよろしくなのじゃ未来に由美」

「「うん！（はい）」」

仲が良くなるのが早いなー・・・。自己紹介から一気に、名前の呼び捨て（一人はあだ名までつけてやがる）まで行ったよ。

「で、雅夜。二人とはどういう関係なのじゃ？」

「ん？あ、ああ。こいつらは杜丘高校ってわかるか？そこの生徒でな」

「ちなみに二年生だよー！」

「四駅ぐらい先のかの？」

「そうそう・・・」

場所はわかってるみたいだな。

「で。その近くに俺のバイト先があってだな。こいつらはそこの常連さんなわけだ」

「なるほどのぅ。ということは昼頃に来た植田も常連なのかの？」

「いや、あいつは違う」
「え?なに言ってるのマサ君。アヤも常連だよ?」
「マサ君の日曜日（バイトの日）には行ってないだけで、平日とかには行ってますよ・・・」
「・・・だそうだ」

そいつは知らなかったな。あったことないから、てっきりそうだと思ってたんだが。

「ちなみに雅夜のバイトはなんなのかの?」
「残念ながら、企業秘密だ」
「えー、なんでよ?ヒデ君に教えてもいいじゃん」
「えっと、喫茶「由美の初恋の相手は」わあーっ!?わ、わかりました!言いませんからその先は言わないでください・・・!」
「ゆ、由美大丈夫!?ちょっとマサ君!それはやりすぎ「ちなみに未来は一ヶ月間俺のお菓子禁」ごめんね、ヒデ君。わたしたちは無力なんだ」
「そ、そのようじゃな」

ただでさえ優子に知られてんだ。これ以上知る奴を増やしたくない。

『いらっしゃいませ。中華喫茶ヨーロピアンへようこそ!何名様でございますか?』
『連れが先に来ていると思うんですが・・・』
『あ、中にミクっちとユミっちを発見!おーいミクっちにユミっち!・・・・・って、マサ君も!?』
『え、ホント!?』

・・・・・この声は忍に千夏か。

第９７話（後書き）

ついにやってきた忍と千夏。

そして雅夜の命運はいかに！？

感想お待ちしております。

第９８話

「あ、シノに千夏だ！こっち、こっちー！」
「む？・・・あの二人はどなたじゃ？」
「忍ちゃんに千夏ちゃんです・・・。二人は寄るところがあったみたいだったので、わたしだけで先に来たんです・・・」
「ちなみに忍は清水とは従姉妹だからな」

・・・逃げるのは諦めるか。どうせ逃がしてくれないだろうし。

「マーサー君っ♪」
「よっと」
「――――ふみゅ！？」

飛びついて来た忍を半歩移動して避け、そのまま床にダイブするのを首根っこをつかんで回避させる。

「や、マサ君。来ちゃったよ」
「よ、千夏。清水んところはどうだった？」
「普通すぎて面白くなかったね。ミハがいるからもっとフリーダム（ユリユリ）な感じだと思ってたんだけど」
「それは流石にあいつでもやらないだろ。一般客も来るんだし」

それに清水が代表ってわけではないし。

「ねー、この体制のまま放置するのはどーかと思うんですがー？」
「忍が出合い頭に俺に飛びつくのをやめたら考えてやろう」
「ムリ♪」
「・・・誰か窓開けてくれ。ちょっと粗大ゴミが出来た」

「あれれー？私なんかゴミ扱いされてない？」

あー、ダリ。

「千夏パース！」

「きゃー♪」

「おっと」

「――――ぐへっ！！」

あ、千夏のやつ避けやがった。

「・・・うー、酷いよ二人とも」

「私は悪くない」

「元はと言えばお前が悪い」

「助けてー、ユミにミク・・・って、知らない顔の子が一人いるね？」

「そういえば見ない顔だね。マサ君のクラスメイトかい？」

今頃気づいたのかよ・・・？

「こいつの名前は木下秀吉。ちなみに名前からわかる通り男だから」

「・・・へー、よろしくだな。秀吉君」

「えっと・・・・・・よろしくねっ♪秀吉君」

ああ・・・、やっぱり女だと思ってたか。

「んで、金髪のが片桐千夏で、こっちのうす茶髪のが椎名忍」

「よろしくなのじゃ、千夏に忍」

「・・・ふーん。秀吉君はアヤと同じ口調なのか。なんだか親近感がわくね」

「たしかにねー♪」
「あ、二人はあんまり驚かないんだね」
「わたしたちは噴いちゃったけど・・・」
「そんなに似ておるかのう?」

似てると言うより、同じだ。

「それでやっぱり二人も雅夜のバイト先の常連なのかの?」
「・・・・・あー、なるほどね」

おーい、千夏?なにを思いついたんだ?すげぇ(俺からしたら)嫌な顔してるように見えるんだが。

「私はそうだよ」
「は、じゃと?となると忍は違うのかの?」
「なにを言って・・・・・あ、うん!私はちょっと違うよ♪」

・・・は?お前も同じだろ。

「ふむ。どう違うのじゃ?」
「私はねー・・・・・・・・マサ君の妻なんだよ♪」
「しゃがめ!!」
「「「「きゃ!」」」」

カカカカカカカカッ!!!!(フォークやナイフがテーブルに突き刺さる音)

『写真のことがあるから今まで黙ってたがよ!!』
『もう我慢ならねぇ!』
『木下さんだけでなく、そんな可愛いらしい人を妻にしてるだぁ!

？』

『ぶっ殺してやる！！』

えーっと・・・・・ＦＦＦ団全部か？厨房からもナイフ飛んできたし、明久もあんなかに加わってるみたいだし、雄二は・・・・・・一見無関心に装ってるけど袖にナイフを隠しているな。

「あ！ねぇ、マサ君。いま私、可愛らしい人って言われたよね？」

「はいはい。とりあえずシノは黙っておいたほうがいいんじゃないか？」

「写真ってなんのこと、マサ君？」

「ミクも黙ってて・・・」

「むぅ・・・。これは姉上に報告するべきか」

こっちはずいぶんとお気楽ですな。

「やっぱ、お前らもう帰れ」

「ヤダ♪」

「まだマサ君が作ったやつを食べてないからね」

「あ、じゃあ私はお代わりする！」

「右に同じく・・・」

「・・・食ったらすぐ帰れよ」

ったく、面倒なやつらだな。さっさと食わして帰すとするか。

『おい、浅月！生きていられると思うんじゃねぇぞ！』

『朝のことも含めて、今ここで殺してやるっ！』

『ＦＦＦ団全員で血祭りじゃあ！』

『『『応っ！！』』』

「あー、秀吉。後始末は頼んだ」
「・・・とっとと行ってくるのじゃ」

第９８話（後書き）

忍は清水の同類です！

だから妻発言などは、忍が勝手に言ってるだけです。

そこに雅夜の意思なんてありませんから（笑）

感想お待ちしております。

第９９話

『お客様方。ただいまのは【文月学園名物・嫉妬に狂った者達（ＦＦ団）ｖｓ理不尽なものをぶつけられた男子】らによるサプライズイベントでございます。如何でしたでしょうか？』

『『『・・・・・・・・・・』』』

バカ共を早々片付け厨房に向かうと、後ろから秀吉の声が聞こえる。

・・・なるほど。うまい考えだな。事情を知らない客はしらけてるけど。

『・・・なるほどな。――――楽しめたよ、秀吉君！（パチパチ）・・・・・ほら、お前達も』

『あー、そゆことなの？――――かっこ良かったよ、マサ君！（パチパチ）』

『やるねー、ヒデ君っ！！（パチパチ）』

『マサ君、凄かったです・・・！（パチパチ）』

『『『・・・（パチパチパチ！）』』』

だが、あいつらがいるから問題なさそうだな。

『ありがとうございました、お客様方。この後もどうぞごゆっくりと』

向こうは終わったみたいだな。・・・さて

「厨房ぐらいはまともに動いてほしいんだが・・・」

「・・・・・・・・・出来ると思うか？」

「俺も喫茶店は成功させたいが・・・ＦＦ団の団長としては、お

前を逃すわけにはいかないんでな」

この二人には、まともに働いてほしんだがな。じゃないと俺の仕事が増えそうだし。

ちなみにドリンクの二人は先ほどの中に混じっていた。

「どうしても俺と戦(や)るのか？」

「・・・・・・・・・・ああ」

「・・・やれやれ。血生臭いのは簡便したかったんだが」

「出すのはそっちだろうがな」

やれやれ、戦う前に勝負は決まっているんだぞ？

「ほらよ」

「・・・・・・・・・・これはっ！！（ブシャアアア）」

「ど、どうした康太！？いったいなにをみたん眼福じゃあああ！！（ブシャアア）」

「・・・・・・・・・・いや、そこまで（鼻血を）だすものかこれ？たかが、パンチラ程度の写真だろ」

まさかここまで効果を表すとは・・・・・・。狙っていたとは言え、こいつら頭大丈夫か？

「まぁ、とりあえずどいてくれ。胡麻団子の注文が入ったからな」

死にかけている二人をどかして（こいつらの鼻血は調理器具にかかってなかった。・・・無駄に凄いな）、胡麻団子を作る。・・・ふむ。秀吉にも作ってやるか。あと、ついでに俺の分も。

六人前の胡麻団子を持って、テーブルに戻ろうとすると・・・・・・

「あら、また会ったわね忍。雅夜にはもう会ったの？」

「あ、ユウだー！マサ君にはもう会ったよー。今胡麻団子作ってきてもらってるところ♪」

「それは惜しいことをしたわね。アタシも食べたかったのに」

「ユウってヒデ君の双子のお姉さんなんだ。ってことは、ヒデ君って双子だったんだね！男女なのに瓜二つとは、凄いね」

「歩（あゆむ）と祭（まつり）の二人とは大違いね・・・」

「その二人も双子なのかの？」

「そちらとは違って似てないがな。・・・・・・そうか・・・君達も双子なのか・・・」

「どうかしたかの千夏？」

「ん？・・・あ、ああ。いや、なんでもないよ。気にしなくて良い」

「むぅ。ちょっと気になるのぅ」

「秀吉君。チカちゃんがああ言うときはホントに気にしなくていいんだよ・・・」

「それよりも、ヒデ君！ユウとマサ君ってどういう関係なの？」

「雅夜と姉上の関係かの？それならば、本人に聞いたほうが面白――良いじゃろう」

「と、いうことですが・・・どうなんですか、優ちゃん・・・？」

「ふぇ！？えーっと、それは・・・・・・／／／／／／」

「そういえば私も聞きそびれていたな。忍がマサ君の妻と言ってしまって、それどころではなくなったんだった」

「えー！？私のせーにするの？」

「はいはい。シノは静かにしててくださいね・・・」

「む？未来は知っておるのか？先ほどからニヤついておるが」

「なんとなくならわかってるよ！ユウからはマサ君の匂いがプンプンするからね」
「ちょ、ミク！？なにそれ、どうゆうこと！？ユウも！！」
「し、忍！顔が近いわよ！？それに雅夜とは・・・その・・・・・・／／／／／／」
「なんだユウは照れ屋なのかい？こういう時はさっさと白状したほうが気持ちいいよ」
「やれやれ、じゃのう。雅夜と一緒にいるときはあんなに大胆じゃというのに、人前じゃとこんなに照れるとは」
「ほぅ・・・マサ君といると大胆になる、と。まさかマサ君と付き合っているのかい？」
「・・・・・・・・・付き合ってないわよ」
「そ・・・・・・・そうなの？このノリだと付き合ってるって言いそうだったんだけど」
「あれ、そうなの？体中からマサ君の匂いがするから、てっきり付き合ってると思ったんだけど？」
「じゃあなんで優ちゃんは悲しそうな顔してるの・・・？」
「別に悲しくなんてないわよ・・・・・・。ただ雅夜にはっきりと『俺達はまだ付き合ってない』って言われちゃっただけよ・・・・・・」
「「「「・・・・・・・・・うわぁ」」」」
「い、いきなりどうしたのじゃ皆！？」
「いや、だってねー・・・」
「マサ君がそこまで言うとは・・・」
「私の嗅覚に狂いはなかった！」
「あの“マサ君”にそこまで言わせたんだ。だったらもう付き合っているも当然じゃないか」
「・・・・・・・・・なんでそうなるのよ？」
「ワシにもさっぱりなのじゃが・・・？」
「マサ君にそこまで言わせた人だと言うのに、気づいてないのかい

？」

「いい？その台詞の意味はね――――」

「はいストーップ！お前ら人がいない隙に、なに好き勝手に言ってるんだ？」

なにこの状況！？俺が居ないうちにどれだけ話が進んでるんだよ！！

第９９話（後書き）

女の子が三人よると姦しい。ならば六人よったらどうなるのか？（一人男が混じっているが気にしない）

六人いるというだけで、このすこしの間で、ここまで行くとは思いませんでしたよ（苦笑）

感想お待ちしております。

第１００話

「いや、なに。マサ君の癖について語ろうとしていたところだよ」
「人の癖を他人にばら撒いて、良いと思ってるのか？」
「夫の彼女が他人なわけないじゃない♪」
「だれが夫で誰が彼女だ。そんなに外に捨てられたいか？」
「夫はもちろんマサ君で！」
「彼女は優ちゃんに決まってるでしょ・・・」
「俺は結婚もしてないし、まだ誰とも付き合ってないんだが」
「「「はい、その台詞いただきました！」」」
「・・・そろそろお前らいい加減にしろよ？」

こいつらは人の話を聞いているのか？

「・・・姉上。まったくついていけないのじゃが」
「・・・奇遇ね。アタシもよ」
「あー、こいつらの言うことは聞かなくていいから。というか、むしろ聞くな」

ついていけない秀吉と優子に声をかけておく。っと、そういえば

「なんで此処に優子がいるんだ？」
「雅夜に妻がいるって聞いたから、どういうことなのか聞きに来たのよ」

・・・え、ちょ、ま、なに！？も、もしかして噂が広まってるのか！？それだったら流石に収拾がつかないぞ！！

「む？ということは忍にどこかで会ったのかの？」

「っと。そういえば、また会ったわねとか言ってたな」
「忍と千夏に会ったのはDクラスの前でよ。三人の会話の中に浅月って名前が聞こえたからつい話に混ざっちゃったの」
「それで『忍って雅夜の知り合いなの？』って感じなことを聞いたら」
「『マサ君の妻だよ♪』と返って来たのじゃな？」
「そうゆうことよ。で、どういうことなの雅夜？」

なるほど。噂は広まってないってことでいいのか？・・・Fクラスではもう広まったみたいだが。

「どういうことと言われてもだな・・・。忍は清水と同類としか言いようがないんだが」
「・・・へ？なによ、それ。説明になってないわよ？」
「そういえば、先ほど忍と清水は従姉妹と言っておったのう。それと関係があるのかの？」
「まぁな。簡単に言えば、清水と島田の関係と似たようなものだ」

あそこまでは過激じゃないけどな。

「あ、そうゆう関係だったの。だから雅夜がアタシから逃げないわけね」
「確かにの。もしも本当に夫と妻という関係だったのならば、逃げるか誤魔化すかぐらいはしておるじゃろうしな」
「ああー・・・・・。確かに雄二たちみたいな関係だったらそうしてたかもな」

まぁ、俺は浮気みたいなことは絶対にやらないけどな。

『おい、ちょっと待て！！俺はまだ結婚してないぞ！！』

『・・・・・うれしい。浅月はいい人』
『って、翔子!?いつからそこにいた!?』
『・・・・・さっきからいた。ねぇ、雄二。チケットはどうなったの?』
『チケット?・・・あー、如月ハイランドの奴か。あれなら・・・』
『・・・・・そう。その、私と一緒に行くために優勝して取ってくれたやつ』
『違うからなっ!!俺はこのチケットのために優勝したわけじゃないからなっ!!』

ん?・・・なんだ騒がしいと思ったら夫婦漫才か。

「わぁーお!ねぇねぇ、千夏。男ツンデレがいるよ♪」
「だな。でも、彼みたなゴツイ人がツンデレなのはいただけないね。やるとしたら秀吉君みたいな男の娘にやってもらいたいもんだよ」
「彼みたいのは目に毒・・・」
「というわけでヒデ君、やってみよー!」
「どういうわけかはわからんが・・・・・『べ、別にアンタの為なんかじゃないんだからねっ!』」
「うおっ!?これは予想以上にくるね・・・・・・っ!!流石だよ、ヒデ君!」
「たしかに女子顔負けの迫力・・・」
「・・・あんた、ホントに男かい?」
「秀吉君かわいー♪」

こっちはこっちで盛り上がってるな。てか、秀吉。それは誰の真似だ?

「・・・まぁ、いいや。で、お前ら。いつになったら帰るんだ?こっちとしてはとっとと帰ってもらいたいんだが」

「言われなくてももう帰るよー」
「目当ての胡麻団子はもう食べさせてもらったからね」
「マジか！？って、いつのまに食ったんだ！？」

ホントだ！！俺の分までなくなってやがる・・・！！

「ヒデ君今日はありがとね！今度は、そっちから翡翠に来てね？」
「うむ。こちらこそありがとうなのじゃ」
「優ちゃんも来てね・・・」
「もとから行く予定だったし、近い内に秀吉と一緒に行くわ」

こいつらも食い終わってるし。・・・もしかして俺の分食ったのって優子か？

「ってことで、じゃあねーマサ君♪それに秀吉君とユウも」
「ではな。今日は奢ってくれてありがとう」
「ヒデ君、今度は男の子らしい服装してねて！」
「ミクはもうすこし落ち着いてよ・・・」

そういって席を立ち上がる四人。いつのまにか俺のおごりになっているが、今回は黙っていてやろう。

「じゃあな。もうこっちに来るなよ」
「雅夜はこういってるけど、いつでも来てね。歓迎するわよ」
「ワシも歓迎するぞい。その時は雅夜の家でパーティでも開こうかの」

開かねぇよ！！と思ってるうちに、四人は教室を出て行った。

「・・・・・はぁ。やっと行ったか」

「なんじゃ?行ってそうそうにため息とは」
「言っとくけどな・・・。こっちは疲れてるんだぞ?夜中は仕事のあげく、よく眠れないし。昼は厨房にほとんどいたし、植田の相手もしたんだぞ。んで、その後すぐに黒金の戦いもあって、それが終わったらまた厨房。そしたらあいつらまで来て、今にいたってるんだ。休憩してる暇があったと思うか?」
「何割が自業自得よ?」

八割方そうだけどもよ。優子もすこしは関わってるんだが。

「ま、でももうこれと言った出来事は無いからいいんだけどさ」
「そうじゃな。・・・これ以上あってもワシらも困るからの」
「そうね。あとはゆっくりしてたいわ」

・・・・・本当は後もう一回だけあるんだがな。それは明久たちの仕事だから問題ないか。

第１００話（後書き）

やっと帰った忍たち。

後は、清涼祭が終わるのを待つだけ。

感想お待ちしております。

祝１００話記念！（前書き）

さぁーて、ついにこの時がやってきました！
『バカノリ』を書き始めてから早４ヶ月！やっとのことで１００話を達成しました！
なので、今回は１００話達成を記念してアルことをやってみたいと思います

祝１００話記念！

作者（以下作）「題して「作者と俺がオリキャラたちの愚痴に付き合う」って、何を勝手に言ってるんの雅夜！？」
雅夜（以下雅）「別にいいじゃねぇか。要訳しるとそんなもんだろ？」
作「反論できないけどさっ！雅夜のせいで最初っからグダグダで始まっちゃったじゃないか！！」
雅「べつにいつもグダグダだから問題ないだろ？」
作「む・・・。言われてみれば、そうだね」
雅「納得するのかよっ！？」

作「というわけで始まりました。バカノリ第１００話達成記念『作者と雅夜が登場キャラたちの愚痴に付き合う』！」
雅「結局題名それで行くんだな・・・」
作「良いんだよ！ってなわけで、司会は私こと、作者と」
雅「バカノリの主人公、浅月雅夜でお送りします」

作「っと言うわけで。早速一人目行ってみよー！」
雅「最初は誰だ？」
作「えっと、最初の方（ゲスト）は・・・植田アヤメさんです！どうぞ～」
アヤメ（以下ア）「よろしくじゃよ」
雅「なんだ、植田か」
ア「なんだとは何じゃ！せっかく会いに来てやったというのにその

態度はないじゃろ」
雅「はいはい。とりあえず、落ち着け」
作「簡単なプロフィールを説明すると・・・彼女は杜丘高校の二年生で、喫茶翡翠の常連客。秀吉と同じジジィ口調でしゃべりますが詳細は不明」
ア「翡翠には土日には行かぬからマサとは清涼祭のときが初対面じゃ」
雅「そうだな。知ってたら追い払ってるところだもんな」
作「あー、確かにそうかもね」
ア「なんじゃと!?」
雅「お前に俺がここで菓子作ってるのがばれたら杜丘のやつらにもばれるだろ?」
作「そしたらお菓子を求めて皆必ず来るねぇ」
ア「それはそうじゃろうな。あやつらはマサのお菓子が大好きじゃと言っておったからの」
雅「だろ?そしたら俺はどうなると思う」
ア「皆の相手をするのに疲るじゃろうな」
作「あと、ＦＦＦ団に絡まれたりするね。でも雅夜だったら問題ないでしょ」
雅「・・・優子が抜けてる」
作「おっと、彼女を忘れてたね」
ア「なんじゃ、マサには伴侶がいるのか!?」
作「まだ違うけどね、雅夜?」
雅「・・・うるせぇ。ってなんで植田が鉄アレイを振りかぶってゴフッ!!」
ア「ふんっ!!」
作「おいおい、雅夜が気絶しちゃったじゃないか」
ア「別にそんな朴念仁は捨てておけばいいのじゃ!」
作「あ、雅夜が気絶してるならちょうどいいや。アヤメに聞いておくことがあったんだっけ」

ア「・・・やったワシがいうのもなんじゃが、いいのかの？」
作「平気平気。放っておいてもそのうち回復するから。んで、アヤメって雅夜のこと好きなの？」
ア「ぶっ！！」
作「いやー、だってさ。初期設定ではアヤメっていなかったんだよね。清涼祭のときも忍たちは本当はアヤメから聞いたんじゃなくて、雅夜の姉から聞いたっていう感じで行こうと思ってたんだよ」
ア「お、おおお主はな、なにを言っておるのじゃ！？」
作「だけどさ。書いてくうちに勝手に出てきちゃったんだよね、アヤメが」
ア「だ、だからそれでさ、さっきの雅夜がすすす、すきということになるのじゃ！！」
作「その時は設定を作ったなくてさ。この後どうしよっかなー、と考えてたときにねちょうどいいものが来たんだよ！」
ア「・・・いいものじゃと？」
作「シオ@ｓｉｒａｏｎｉさんからバトンが来たんだよ！で、ちょうどいいからそこでキャラ作りしようと思って書いてたらさ、ある項目があったんだよ」
ア「なにがじゃ？」
作「好きな人について、のだよ」
ア「ブっ！！！ま、まさかお主！」
作「そ。ちょうど雅夜と同時に紹介してたからね、これは良い機会だから『やっちゃえ！』と思ってね」
ア「・・・お主。覚悟は出来ておるのじゃろうな？」
作＆ア「・・・・・・・・・・・・・」

作「ってなわけで植田アヤメさんでした～！」
ア「待つのじゃ！せめて一発でも殴らせ――」
雅「なにがあったかわからんが・・・。目が覚めたら終わりって状

況でいいのか？」
ア「マ、マサ！？」
雅「ん？なんだ――ちょ、なんで植田はまたアレイを振りかぶってるんだ！？」
作「バットタイミングだね、雅夜（自分的にはグットタイミングだけど）」
ア「ま、まままままままま」
雅「おい、なんで植田は壊れてるんだ？」
作「さぁ？」
雅「なんだよ、そ――」
ア「いやぁあああ！！」
雅「ゴブッアッ！！」
作「以上、ゲストの植田アヤメでした～！」

作「では二人目行ってみよー！」
雅「まだ頭が痛いんだが・・・」
作「鉄アレイで殴られたのに痛いですむのも凄いと思うんだけどね」
雅「ま、ほっとけば直るからいいけど」
作「・・・（なにも言うまい）ではお次は～、中島未来さんです！」
未来（以下ミ）「よろしく！」
雅「また、騒がしいのが来たな・・・」
作「彼女も杜丘高校の二年で喫茶翡翠の常連。こっちは普通に雅夜の面識があります」
ミ「まぁねー！ちなみにマサ君のお菓子の味について噂を広めてる

のは私たよ！」
雅「植田に言ったのもお前なのか？」
ミ「そだよ！アヤはマサ君が来る土日には来ないからね。マサ君の味がどれほどなのか詳しく教えてあげたよ！」
雅「よーし、ちょっとこっちに来い。制裁を加えてやる！」
ミ「あうわぁー！作者さんヘルプミー！」
作「俺に言うな。ミクのお目付け役はユミだろ？ってなわけで、三人目のゲストもよんじゃいましょー！長瀬由美さんです！」
ユミ（以下ユ）「なんか理不尽な気がする・・・」
ミ「あ、ユミ！助けて～」
雅「お、由美か。いらっしゃい」
ミ「私の時と態度が全然違う！？」
作「雅夜が相手で態度を変えるからね。一応」
雅「一応ってなんだ、一応って。まぁ、由美はいつも落ち着いてるから。嫌いじゃないだけだ」
ユ「ありがとうございます・・・。ほら、ミクも暴れないで・・・」
ミ「助かったよー。ありがと、ユミ！」
作「彼女も杜丘高校の二年で喫茶翡翠の常連。回りからはミクの保護者として扱われています」
ユ&ミ「「それ、初めてきいたよ！？」」
雅「保護者というより、ペットの犬と飼い主って感じだけどな」
ユ「あ、それならいいです・・・」
ミ「よくないよっ！」
作「まあ、この話は置いといて！」
雅「そういえば、未来は聞くことがあったな」
ユ「あ、もしかしてアノこのですか・・・？」
ミ「？な、なんなのかな？私の本能が逃げ出せって言ってるんだけど・・・・・」
作&雅&ユ「「「秀吉のこと好きだろ？」」」
ミ「へっ！？・・・・・・・・・な、なななんのことかな？」

作「いや、いまさら隠しても意味ないから」
雅「流石に気づくなって言うほうが無理だな」
ユ「秀吉君に会ったときのミクすっごく楽しそうだったよね・・・」
雅「いつも以上にテンション高かったもんな」
ミ「はうぅぅぅぅぅう！！」
作「あ、行っちゃった」
雅「なんだ。もっと詳しく聞きたかったんだがな」
作「雅夜・・・それは復讐のつもりかな？」
ユ「もう・・・。それじゃ、私は追いかけますね・・・」
作「いつもお疲れ様です」
ユ「いえいえ。いつもの事ですのでもう慣れました・・・」

作「っと、いうことで中島未来と」
雅「長瀬由美でした！」
作「ちなみに由美の戦闘力は雅夜と同等です」
雅「あの外見にだまされて手を出すと痛い目にあうぞ（↑過去に由美に手を出した不良の結末を何度か見たことがある人）」
作「いや～。それにしてもさ」
雅「なんだ？」
作「将来てきには雅夜の義理の妹になるってことだよね？」
雅「・・・俺が優子と結婚して、秀吉と未来も結婚したら必然的にそうなるな」
作「義兄さんてきには心境はどうでしょうか？」
雅「・・・・・・・・・（ゴスッ）」
作「グハッ！！」
雅「以上、ゲストの中島未来と長瀬由美でした！」
作「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
雅「・・・そのうち復活するよな？急所は外しといたんだが」
作「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

作「さーって、四人目行ってみよー！」
雅「直るの早ぇな！！」
作「回復力と生命力に定評がありますから」
雅「その代わり常識がなさそうだな」
作「ってなわけでお次のゲストは・・・椎名忍さんです！」
忍（以下シ）「やっほー♪」
雅「厄介のしかこねぇ・・・」
シ「こら、マサ君。せっかくきてくれた「自称」妻を厄介のとか・・・って今音重ねられた！？」
作「彼女も同じく杜丘高校二年生。ですが、先に紹介した三人とはクラスは別です」
雅「たしか、その代わり歩と祭が同じクラスなんだっけか」
シ「私の紹介してるのに、無視って酷くない？」
作「ちなみに忍が雅夜の妻だと勝手に言っているのはわけがあったりします」
雅「・・・ああ。あの時のことがあったからだろ？」
シ「そうだよー♪私はあの時からマサ君の妻になると決まっているの♪」
雅「俺は認めてないけどな」
作「ちなみにその時の事件についてはそのうち書こうと思ってるけど、書かないかも知れない」
雅「どっちなんだ、それ？」
シ「私としては書いてほしいかなー♪だって、私とマサ君の間になにがあったのか知ってもらいたいもん」

雅「俺は出来ればパスだな。書かれるってことは優子にバレるってことだからな。なにが起こるかわからん」
作「まぁ優子に知られたらマズイことはしてな・・・・・・・・・いと思うから大丈夫だけどね」
シ「思うだけでしょ？」
雅「意味深に言うな。作者も、今の間はなんだ？それだとなにかあったみたいに思われるだろ」
作「ソウダトイイネ！」
シ「ハハハハハ！」
雅「・・・冗談もほどほどに――――――もしかして、マジなのか！？」
作「んで、忍についてなんだけどさ」
シ「ん、なになに？」
雅「ちょ、無視するなよ！？」
作&シ「「語りあってほしいの？」」
雅「・・・すいません」
作「それで、忍についてなんだが・・・実は初期段階の時と立場が違ったんだよ」
シ「え、そうなの？」
作「立場が違っただけで、キャラは変わってないんだけどね」
雅「・・・もしかして、アレなのか？」
シ「あれって？」
作「本当は文月学園の生徒で出そうと思ったんだよ。雅夜の婚約者として」
雅「やっぱり、ヒロインにするつもりだったのか・・・」
シ「なんでそうしなかったのっ！！」
作「ちょ、落ち着いて！？」
シ「なんで、なんでよ・・・・・・！それだったら好きなだけマサ君とイチャラブできたのに・・・」
雅「その設定でも、無理だと思うけどな」

シ「・・・・・え？」
作「文月学園にはＦＦＦ団があるからねぇ。婚約者だとしたら、会った瞬間に鬼ごっこの始まりになっちゃうだろうしね」
雅「毎日がそんなんだったら不登校になりそうだな」
作「雅夜がそんなメンタルなわけないじゃないか」
シ「・・・・・プッ」
雅「なに笑ってんだよ忍！」
シ「だ、だって・・・プハハハッ！！」
作「バカっ！・・・クッ・・・・・笑っちゃだめ・・・クッ・・・だろ。雅夜に怒られるだろ・・・クハハハハッ！！」
雅「おめえも十分わらってんだろ！！」
シ&作「「悪いか？」」
雅「わりぃよ！」

作「ってなわけで、椎名忍さんでしたー！」
シ「またねー♪」
雅「・・・この流れのまま行くんだな」
作「あ、ちなみに椎名の母親は清水の母親と姉妹です！」
雅「この関連で清水とは知り合いになってます」
作「清水からは一応頼りになる（父親を止められる）男として認められていたりします」
雅「仲がいいか、悪いかで言われたら普通って答える仲だけどな」

作「ってなわけで5人目いってみよー！」
雅「この流れだともう誰が来るかわかるけどな」
作「嘘っ！？じゃあコールは雅夜に任せるね」
雅「ああ。お次の方は・・・かｔ「はい、残念でした！正解は戌井榊さんです！」マジかよ！？」
榊（以下サ）「よぉ」
雅「なんで榊さんが来るんだ！？普通ならここは千夏が出てくる番だろ！？」
作「普通ならでしょ？サプライズは基本なのだよ」
サ「雅坊もまだまだだな」
雅「６４話に一回だけ出てきただけのモブキャラが出てくるなんて予想できるか！」
作「それはそうだけどね。でもちゃんと設定もあるよ」
サ「お。それは俺も気になるな」
雅「ほー。どんなのだ」
作「榊さんは『あっちこっち』という別の漫画のキャラをモチーフにそたキャラなんだ」
サ「知らない人はいるかも知れないが（むしろ知らない人のほうが多いかもしれないが）、マンガタイムキララに載ってるぞ！」
雅「でも、原作（あっちこっち）だと榊さんは確か学生だろ？」
作「だからモチーフにした、なんだよ。はっきりいってそのまま学生にしてたら、鉄人と同じくらいの身体能力という恐ろしい人になるんだよ」
サ「そうかー？そんなこと無いと思うんだがな」
雅「いや、重力無視した行動できる人は十分に凄いとおもう」
作「ちゃぶ台でフリスビーみたいなこともしてたな」
サ「ふっ・・・。今となっては懐かしい過去だな」

作「まぁ、音無さんは音無さんで手先が器用すぎると思うけどね」
雅「あの人のペン回しを超えることが最近の俺の目標だ！」
サ&作「それは無理だ」」
雅「ですよねー」」
作「ちなみにバカノリだと榊さんの年齢は４０歳ってことになってます」
雅「ふいんき的には親父って感じなんだがな。そこまで歳食ってないんだよな」
サ「せめてお兄さんにしてくれ」
作&雅「すみません」

作「と、いうわけで戌井榊さんでした！」
サ「またな！」
雅「他のキャラに比べて短かったな」
作「もとからネタだったしね」
雅「まじかよ！？」

作「さーて、最後の６人目は！」
雅「なんだ、もう最後なのか？」
作「残ってるの人はもういないよ。お次のゲストは片桐千夏さんです！」
千夏（以下チ）「やぁ」
雅「よっ！」

チ「って、トリが私でいいのかい？」
作「特に問題ないですよ」
雅「むしろ、千夏だからこそいいんじゃねぇか？」
チ「それは嬉しいね」
作「彼女もやっぱり杜丘高校二年生で、クラスは忍たち同じです」
雅「周りからは姐さんって呼ばれることがあったりなかったり」
チ「同級生にはそう呼ばれないよ。下級生からは呼ばれてるけどね」
雅「・・・ネタで言ったつもりだったんだが」
作「別に極道の関係者とかではないんですがね」
チ「普通の家庭がよ。父が警察関係者ってだけのね」
雅「その節はありがとな。あの時は助かった」
チ「いやなに。こちらも貴重な体験を出来て楽しかったよ」
作「ちなみに千夏と雅夜は過去、警察にお世話になりました」
雅「その言い方は誤解を生むからよしてくれ」
チ「警察にお世話になったというより、事件にお世話になったといったほうが適切かもしてないけどね」
作「気が向いたら書くかも知れないね」
雅「むしろ書く暇あるのか？」
作「ないね。どこかで過去編みたいな感じで書いてもいいかもしれないけど、きっかけが無いと無理だね」
チ「せっかく私が主人公になれると思ってたんだけどね」
雅「俺が主人公だよ！」
作「書くとしても軸は千夏になると思うけど、残念ながら視点は雅夜だよ」
チ「ふっ。そんなことわかってるさ」
雅「と、言いつつも心の中では非常に残念がってる千夏さんであった」
チ「・・・マサ君はなにをいってるのだい？」
作「千夏はこういう性格をしてるけど、実際は大の可愛いもの好き。部屋にはラヴリーなぬいぐるみが沢山」

雅「ふとしたときに見せる笑顔は、隠れファンがいるほど素晴らしい」
チ「・・・二人とも何を言ってるんだい？」
雅「いやなに。千夏ちゃんのことを説明してるだけだが」
作「古来より男らしい女性キャラは可愛いもの好きと相場が決まっているのですよ」
チ「・・・ぶっ飛ばされたいか？」
作&雅「いえ、結構です」
チ「ならふざけるのはもうやめるんだな」
作&雅「サー、イェッサー！」

作「と、いうことで最後のゲスト、片桐千夏さんでしたー！」
チ「マサ君。今度その隠れファンについて教えてくれ。頭をだけでもいいからな」
雅「あ、ああ。（これは頭が忍だってのばれてるか？）」
作「じゃあね！（噂を流してるのも忍だってこともばれてるんだろうな）」
チ「では、またな」
雅「・・・忍に合掌」
作「自業自得だけどね」

作「いかがでしたか？祝１００話達成記念の特別編」
雅「俺は疲れただけな気がするが・・・」
作「今までに出てきた新キャラ六人、アヤメ・未来・由美・忍・千夏・榊。あと、名前だけ出てきているのは深風・祭・歩の三人。彼、彼女らはいつごろ出てくるのでしょうか？」
雅「作者なのに知らないのか？」
作「どのへんで出すかはある程度決まってるよ。ただそれがいつ頃になるのかがわからないだけ」
雅「計画性がねぇな」
作「『計画？はっ、笑わせてくれる！そんなもんとうの昔に捨ててきたわ！行き当たりばったり？上等！！』って台詞が好きですから」
雅「どこのどいつの台詞だ」
作「ってなわけで『作者と雅夜がオリキャラたちの愚痴に付き合う』改め、『雅夜とオリキャラたちが作者の愚痴に付き合う』でした！！」
雅「やけにオリキャラからの発言がなかったのはそういうことかよ、てめえ・・・っ！！」
作「友人から計画性に定評のある作者ですから～」
雅「さっきの台詞と正反対じゃねぇか！！」
作「ではさいなら～～～！！」
雅「最初から最後までグダグダじゃねぇか！！」

祝１００話記念！（後書き）

という感じで最後までお送りしました。

感想お待ちしております。

第１０１話

『ただいまの時刻を持って、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「お、終わった・・・・・・」
「流石につかれたのう・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・（コクコク）」
「だな」

あれ以降変なのはこなかったが疲れたな。回りを見てみると、床に足を広げて伸びてるやつがちらほらと見えた。

「そういえば、姫路さんのお父さんはどうしたんだろう？」
「ん？お義父さんが気になるのか？」
「なっ！？べ、別にそういうわけじゃなくて！」
「後夜祭の後で話をしに行くと言っておったからのう。結論はそのときじゃろう」
「大会も喫茶店も成功させてし、大丈夫だろ」

ま、もとから問題ないことはわかってるけどな。

「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」
「えぇっ！？どうして！？」
「どうして、って言われても・・・・・・。恥ずかしいからに決まってるでしょ？」
「すいません。すぐに戻りますので」
「待って！二人とも考えなおすんだ！カムバァーック！」

「わめくな！」

軽く明久の頭を叩いて黙らせる。

「ふむ。ならばワシも――」

「させるかっ！せめて秀吉だけは着替えさせない！」

「なっ！？何をするのじゃ明久！」

「だから騒ぐ――」

「・・・・・・・・・（フルフル）」

「康太もかよ・・・」

ったく。バカ共は・・・。

「おい明久。遊んでないで学園長室に行くぞ」

呆れたような声で呼びかけて雄二。

「学園長室じゃと？二人とも学園長に何か用でもあるのか？」

「ちょっとした取引の精算だ。喫茶店が忙しくていけなかったからな。遅くなったが今から行こうと思う」

「忙しいって・・・。途中で何度か喫茶店から消えてた奴の台詞じゃねぇだろ」

実は霧島が雄二と学園祭を回るために何度か来たのだが、雄二は霧島が来る事にどこかへ逃げていってしまっていた。

「ならばその間にワシは着替えを」

「そうはいかない！秀吉も一緒に連れて行く！」

「・・・・・・・・・（クイクイ）」

「あ、ムッツリーニも来る？」

「・・・・・・・・・・（コクコク）」
「お前らバカだろ？むしろバカだ」

もうこいつらを黙らせるの疲れた・・・。

「困ったのう。雄二、なんとか言ってやれんかの？」
「ん～・・・・・・。ま、いいだろ。秀吉とムッツリーニも行こうぜ。明久を説得させるのも面倒だしな」
「・・・・・・これは霧島に伝えるべきか？」
「やめてくれっ！」
「冗談だ」

流石にこの程度のことで浮気扱いされるのも可哀相だしな。

「やれやれ。雄二まで・・・・・・。仕方ないのう。着替えは後回しじゃ」
「よし。ほら明久にムッツリーニ。足を放してやれ」
「うん」
「・・・・・・・・・・（コクコク）」
「やれやれ。ワシのこんな姿を見てなんの足しにもならんじゃろうに・・・・・・」
「んじゃ、俺も行くか。お前らでいると何かと心配だし」
「なんじゃ雅夜も行くのかの？」
「一応ばーさんが何か言いたいかも知れないからな。ちょうどいい機会だし」
「もしや黒金についてか？」
「ま、そうだな」

他にもあるけどな。

「失礼しまーす」
「邪魔するぞ」
「来てやったぞ」

学園長室の扉を開けて中に入る。

「お主ら、まったく敬意を払ってないような気がするのじゃが・・・・」
「秀吉。敬意とは敬う意思と書くんだ。あのばーさんに敬う部分があると思うか？」
「・・・・・・すまぬ」

いや、そこで謝るのもどうかと思うぞ。

「アタシは前に返事を待つようにいったはずだがねぇ」
「あ、学園長。優勝の報告に来ました」
「言われなくてもわかっているよ。アンタたちに賞状を渡したのは誰だと思っているんだい」
「妖怪婆」
「クソガキは黙ってな！」
「断る！」

相変わらず口の悪いばーさんだな！

「それにしても、ずいぶんと仲間を連れてきたもんだねぇ」

俺から目線をはずして雄二の回りにいる秀吉と康太を見る。

「こいつらもババァのせいで迷惑を被ったからな。元凶の顔くらい拝ませてもばちはあたらないはずだ」

「・・・・・ふん、そうかい。そいつは悪かったね」

つまらなそうに鼻を鳴らすばーさん。

「それで白金の腕輪は返却したほうがいいですか？」

と、言いながらポケットから白金をとりだす明久。

ちなみに白金は召喚者自身が装備するものだが、黒金の腕輪は召喚獣に装備させるものである。そのため、黒金は事前にシステムを弄っておかないと使えないものであったりする。

「いや、それは後でいいさね。どうせすぐに不具合は直せないんさね」

「・・・たぶん直すのは俺だと思うけど、また今度でいい」

「む？明久、不具合とはなんじゃ？」

「あ、そっか。秀吉はしらなかったんだね。この白金の腕輪はちょっと欠陥品でね、得点の高い人が使うと暴走しちゃうんだよ」

「ちなみに雄二のが４０００点ぐらいで、明久のが２５００点ぐらいまででな」

「もしかして、雅夜が泊まったのは白金（これ）を修復するためじゃったのか？」

「やることの一つではあったな。・・・・・どうした雄二？」

ふと雄二を見てみると、手を口元にあて考え込むポーズをしていた。

「そういえば、なんであいつらは俺たちがババァとつながっている

と知っていたんだ・・・・・・？」

・・・さぁ、考えろ元神童様。お前が思いつかないと話は進まないんだからな。

「だから、教室の改修と交換条件で僕と雄二がこれをゲットするっていう取引を学園長と――――」

「待て明久！その話はマズイ！」

「え？」

怒鳴るが時既に遅し。明久は重要なことをもう話終わっている。

「・・・・・・・・・・盗聴の気配」

「やられたか！」

雄二は康太の言葉を聞き、扉まで駆け寄って開け放つ。すると、複数の足音が遠ざかっていくのが聞こえた。

「あいつら・・・・・・・！追うぞ明久！」

「ちょっ・・・・・・・！雄二、どういうこと！？」

「盗聴だ！あの連中、この部屋に盗聴器を仕掛けてやがったんだ！」

「なんだって！？」

「今の一連の会話も聞かれてるはずだ。もしも録音なんてされていたら、相当マズイことになる！」

「録音！？冗談じゃない！」

一呼吸の間に会話を済ませる明久と雄二。やっぱりこの二人の相性は抜群だと思う。

「急げ！」

「わかった！秀吉とムッツリーニ、雅夜も協力して！」
「うむ！」
「・・・・・・・・・・（コクリ）」
「俺はいいから先に行け！俺は学園長室にある盗聴器をつぶしてから行く！」
「わかった！」

そういって学園長室から四人揃って飛び出していく。

「・・・・・・行ったか」
「・・・アンタはなにしてるんだい？」

うるせぇな。
えーっと、確か盗聴器は・・・・・・植木鉢の近くだったな。

「・・・・・あの教頭のなんでこんなわかりやすいところに隠すんだろうな」

じっくりと探すまでもなく、すぐに盗聴器は見つかった。

「なにしてるんだい！見つけたんならとっとと行くさね！」
「なんでだ？」
「なっ！？」

手の中で盗聴器をもてあそびながらばーさんに聞き返す。

「なに言ってるさね！このことが世間に広まったらどうなるかわかってるのかい？」
「ああ。ただじゃすまないだろうな」
「じゃあなんーーーー」

「でも、広まったらだろ？」

なら、問題ねぇだろ。と呟きながら扉から歩いて学園長室からでる。

「・・・・・言ってる意味がわからないさね」

「わからなくて結構。俺が理解してれば、それでいいんだよ」

どうせ理解できるやつなんていないんだろうしな。

『・・・・・アンタは昔からかわってないさね』

部屋を出ると中からそんな声が聞こえた。

・・・・・わりぃかよ。

第１０１話（後書き）

清涼祭終了！

感想お待ちしております。

第１０２話

学園長室を出て、いったん部室へと足を進める。

「確かアレ部室にあったよな……」

昔持ってきてたアレは、置き忘れてそのままにしてたはずだ。

「誰かが勝手にいじってなきゃ……いや、俺以外に入るやつはいないか」

いつもは部室にちゃんと鍵がかかってるし、開いてたとしてもそれは俺がいるときだけだからな。

「……さて、と」

部室についたので鍵を開け――――あれ、開いてる？
誰だ!?と、思いながらそぉーっと扉を開け、中を見てみると・・・・・

「……なんだ、優子かよ」

「あら、雅夜。遅かったじゃない」

ベットに腰掛けて雑誌を読んでいる優子がいた。

「いや、なんでここにいるんだよ?鍵かかってただろ」

「Ｆクラス行っても雅夜がいなかったからここに来たのよ。それに鍵は学園長から貰ったわ。聞いてない？」

「…あんのくそババァっ！」

一言も言われてねぇよ！

「まぁ、落ち着きなさいよ。別に勝手に入られても問題ないでしょ？…それとも隠しておきたいものでもあるのかしら？」

「そりゃな。召喚システムとかの資料がその辺にわんさかとおいてあるだろ？それ一応部外者閲覧禁止ものだからな」

「…そうだったのね」

「ま、優子に見られても問題ないがな」

優子がスパイまがいのことをするとも思えないからな。

「それで、なにかあったの？学園長のところに行くって言ってたみたいだけど」

「ん？あ、ああ。ちょっとばかしトラブルがあっただけだ」

「トラブル？…アンタ、またなにかやらかしたの？」

「俺じゃねぇよ！」

「そう、ならいいわ。で、なにがあったの？」

「いやなに。学園の存続が危うくなってるところなだけだ」

っと、そういえばアレ取りに来たんだったな。えーっと、確かここの引き出しの上から三番目に入ってた気が……お、あったあった。

「ふーん……って、ちょっとで済ましていい問題じゃないじゃない！！現在進行で言ってるけど、大丈夫なのそれ！？」

「ん～、心配しなくても大丈夫大丈夫」

「ぜんぜん安心できないわよ！？」

「俺がこうして落ち着いているんだぞ？マジで危ない状況だったら俺がこうしているはずないだろ」

「……そうね。むしろ場を面白おかしく掻き乱しそうね」

え!?さすがにそこまでしねぇよ。信用ねぇな。

「今からそれの後片付け行ってくるけど……ま、優子は気にしなくて大丈夫だから」

「雅夜がそういうなら信じるわよ。早めに終わらしてきてね」

「任しとけ」

優子に言われちゃ、やるしかないな。

…っとと。

「そうだ。もう少ししたらちょっとした面白いもんが窓から見えると思うぞ」

「面白いもの?なんだ、結局なにかやらかしてるのね」

「いいや、今回は俺じゃない。明久と雄二だ」

「吉井君と坂本君が?どういうこと?」

「ま、それは見てからのお楽しみだ」

目当ての物をポケットに入れて、部室を出る。

『いってらっしゃーい♪』

行ってきますよ、っと。

『夏川、そっちの準備は大丈夫か？』
『大丈夫だ。へへっ。これが流れりゃ俺たちの逆転勝利だな』
屋上の扉のむこうから聞こえてくる常夏コンビの声。お、ちょうどいいタイミングだな。
『そうだな。これで受験勉強なんかしなくても――――――おぉぉぉっ！？』
『なんだよ常村。何をそんなに驚いて――――――ゲェッ！？マジかよぉっ！？』
『とにかく伏せろぉぉっ！！』
ドォン！！　（パラパラパラ）
「たーまやー！」
打ち上げ花火が上がり、つい言ってしまう。
そう花火。今、この扉の向こうでは打ち上げ花火があがっているところである。
ドォン！！　（ボンッ！）
『なっ！？スピーカーが！！』
『おい、マジかよっ！？』

ちなみにわかってると思うが、あげているの無くあがっているのだ。……

ドォン！！　（バァン！）

『放送機材まで壊されたぞ！？』

『…俺が言えた義理じゃないが、あいつらこんなことやって大丈夫なのか？』

ホントにお前が言えたことじゃないな。

『ちくしょう！これじゃあテープが流せねぇじゃねぇか！！どうする！？』

『逃げるしかねぇだろ！って、あいつらまだ投げてくる気だぞ！？』

『もう放送機材はねぇだろ！？お、おい。ま、まさか俺たちを狙ってるんじゃ！？』

『き、来たぞぉーーっ！！……へ？』

ドォン！！　（バラバラバラ）

『おいおい、校舎に当たってるぞ！？』

『常村チャンスだ！！あの二人、教師に見つかってやがる！今のうちに逃げるぞ！』

『お、応！！』

お、こっちに来るな。

さて、俺の仕事を始めるか。持ってきたものを弄って…

「ねぇねぇ、今の音なに！？」

「なんか花火みたいじゃなかった？」
「屋上から聞こえた気がするよ」
「ね、ちょっと行ってみようよ。なんかイベントでもやってるかも知れないし」
「そだねー！」
階段から上ってくる女子の声が響く。
『『なっ！？』』
なかの二人もこの声に気づいたのか、驚いたような声をあげ、いそいで屋上の鍵をしめた。
「ん？……なんか扉があかないよ」
「え？屋上の扉はいつも開いてるはずよ」
「でも鍵閉まってるみたい…」
「もしかして……誰かが屋上にいて、むこうから鍵しめてたり」
「そうなんじゃない？すみませーん！だれかいるんですかー！！」
ドンドンと扉をたたいてみるが、中から返事は返ってこなかった。
「あれ、屋上に誰もいないの？」
「……なんかおかしくない？」
「そだね。……ちょっと先生呼んでくるね」
「うん。お願い」
『ま、待った。今、あける！』
「うわっ！な、なんだ。やっぱり屋上に誰かいたんだ」
『す、すまんな。鍵開けるからちょっと待ってくれ』
「屋上でなにしてたのー？花火みたいな音が聞こえたけど…」

ガチャリと鍵が開く音が聞こえて、扉がだんだんと開いてきて、

『ちょっとあって――――』

バンッ！！と音を立てて勢いよく扉が開かれる。開かれて扉からは、常夏コンビが飛び出し。

「な！！――――――はっ！？」

扉のむこう――――こっち側を見て、驚く。

床に置かれたのは、複数のスピーカー。そしてそのそばに立っている、攻撃モーションにはいっている俺。

「んじゃ、眠ってくれ！」

「「ごふっ！」」

腹に一撃ずつこぶしをいれて、二人を沈黙させる。ふぅ…。

「……まさか、こうもあっさりと引っかかるとはな」

もちろん回りには女子はおらず、俺一人。

常夏コンビが女子の声と勘違いしていたのは、スピーカーから出てくる音である。タイミングよく、あらかじめ録音しておいた声を流した。いくつか俺が実際にだした音だが（扉をたたくなど）、あまりにもうまく行き過ぎて笑いを飛び越して、引くな。

「さて、と。テープの回収しとくか」

常夏コンビの制服の中から録音したであろうテープを取り出し、階段を下りる。

今頃、明久と雄二は西村さんに捕まっているころだな。

第１０２話（後書き）

これにて、雅夜の清涼際最後の仕事終了……だといいな。

感想お待ちしております。

第１０３話

「痛てて・・・・・。ずいぶんと殴られたよ・・・・・・」
「くそっ、鉄人め。あの野郎は手加減をしらないのか」
「手加減してそれなんじゃね」

西村さんから逃げ切れなかった二人を連れて、打ち上げ場所である近くの公園へと向かっていた。

「でも、あれだけの騒ぎを起こしたのに厳重注意でよかったのかな？良くて停学悪くて退学くらい覚悟してたんだけど」

厳重注意と言っても相手が西村さんだから、顔の面積が倍になるほど殴られたみたいだけど。

「ババアが手を回してくれたんだろうな」
「処分について？まあ、そうだろうね。そうじゃなければこんなに軽い処分なわけないもんね」

ちなみにばーさんにそうさせたのは俺である。こいつらに言っても面白いことになるわけでもないので、言ってはないが。

「これでババも助かったんだ。感謝する気なんてさらさらないがな」
「僕らは学園長を救ったんだし、学園長が僕らを助けるのはギブアンドテイクってやつだよね」
「俺は無償で動いてたんだけどな」
「「自業自得だ（でしょ）」」
「・・・・・そんなことわかってる」

まぁ、もとから好きに動いているわけだしな。別に感謝してもらいたいわけではないんだが・・・・・・こいつらに言われるとすげぇムカつく・・・っ！

「む。やっと来たようじゃな。遅かったのう」
「・・・・・・・・・先に始めておいた」
「Ｆクラスの連中が俺たちを待つとも思ってないから安心しろ」
「あ、ゴメンゴメン。ちょっと鉄人がしつこくてさ」

公園につくと、秀吉と康太が出迎えてくれた。回りを見渡してみると公園は既にＦクラスの連中で一杯になっており、お菓子やジュースを食べながら騒いでいるようだ。

「お主ら、もはや学園中で知らぬものはおらんほどの有名人になってしまったのう」
「・・・・・・・・・・（コクコク）」
「それは僕の台詞だよ・・・・・・」
「俺はお前らとはまったく違うけどな」

明久と雄二は召喚大会優勝者であり、学園の破壊者。俺は黒金の腕輪の開発者であり、７０００点越えの異常者。
明久たちは悪い噂で、俺は良い噂で広まるだろう。

「あれだけのことをやっておいて、退学どころか定額にすらなんないだもの。妙な噂が流れて当然でしょ？ウチだって気になるし」

と、島田が明久にジュースの入った紙コップを渡しながら聞く。

「ん、ありがと」

さて、俺も飲み物――――そういえば酒だっけか？を取りに行くか。

「おーい、ここにある飲み物数本持って行っていいかー？」

「ん。別にいいんじゃね――――って、浅月！！」

「どうした、須川？」

俺を見た瞬間、須川はやっと見つけた！という感じの顔して迫ってきた。

「どうしたじゃねぇよ！！いいから、早くくれよ！今日はそのために頑張ったんだからさ！」

「なにをだ・・・・・もしかして、写真のことか？」

「そうに決まってるだろ！」

確か、『清涼祭でもっとも頑張ったと俺が思った奴には、特別バージョンを与える』とか言ったんだっけ。で、条件が・・・・・・

「・・・異端者審問会を開いた者、騒ぎを起こした者、時間を守らなかった者には獲得権がなくなる。これらの原因を作った者もだ、って言わなかったか？」

「・・・・・・・・・・」

あの時のことを思い出しながら口にすると、須川は黙り込んだ。

『『『・・・・・・・・・・』』』

ん？・・・・・回りも静かになりやがったな。こりゃ、面倒なことになりそうだ。

「んじゃ、俺はもう行くーーーー」
「浅月を捕らえろっ！！やつは今、写真を持ってるはずだ！」
『『『殺してでも、奪い取れっ！！』』』
「ハァ・・・・・・。いい加減今日はもう休みたいんだがっ！！」

「どうした、難しいそうな顔をして。なんかあったのか？」
「いや、喫茶店の利益だと畳とちゃぶ台がせいぜいだからな。ちゃぶ台でも環境は大丈夫だと思うんだが、せめて机ぐらいまでいけたら完全に安心できるんだがな」
「あー、出だしのころに常夏コンビに妨害くらったからな。でも、ま。学園祭の喫茶店で稼げる額としたら上出来だろ」
たった二日間でこの売り上げとしたら、上々過ぎるくらいだ。

「まぁな。・・・・・・・・ところで後ろの連中はどうしたんだ？疲れて寝ちまったのか？」
「思ってもないことを言うなよ雄二。写真の件で襲ってきたから適当にあしらっておいた」
ったく。たかが写真のためだけにあそこまでやるか、普通。

「写真の件っつうと・・・ああ、なるほど。あいつらには獲得権がなくて、もらえないからか」
「7割がたそうだろうな。残りの3割ほどは昼間のことで襲ってきたみたいだ」
「あの雅夜に会いにって言うよりお菓子を食べに来てた奴らか。確かにどれもレベル高かったからな。あいつらが暴れるのも納得できる話だな」
「普通に女友達ってだけなんだけどな。彼氏彼女じゃないのに暴れられるってのは流石にダルい」
そのせいであいつらに会うごとに毎回毎回ＦＦＦ団を片付けるのは面倒なところなんだよな。
「・・・一人、お前の妻だとか言ってなかったか？」
「あー、忍のことか・・・」
あれについて説明するのは、簡単なんだよな。特に雄二や島田には。
「忍――その妻っていた奴はＤクラスの清水の従姉妹でな」
「清水？ってあの島田に慕ってる清水か？」
「ああ、その清水だ。で、アレと性格が似ててな。それで勝手に妻発言してるんだ」
「・・・・・まぁ、いつもの島田と清水の関係がお前とその忍って奴との関係なのか」
「ああ」
ま、あそこまで暴走してないし女子じゃなくて男子が相手だから、その分正常だけどな。・・・・・ん？前にも同じようなことを考えたような・・・・・。

第１０３話（後書き）

本日の地震は大きかったですね。

地震のときに、驚いて本文を消してしまったのは忘れたい過去（涙）

感想お待ちしております。

第１０４話

「すいません。遅くなりました～」

この声は姫路か？姫路が来たってことは…

「雅夜ー。頼まれたことやったわよ」

「サンキュ、優子」

「このくらいお安い御用よ」

ならいいんだが。

「それにしても、あの話ってどこまでが本当なの？姫路さんにはそのまま話したけど…」

「全部に決まってるだろ」

「…つくり話にしては具体的すぎると思ってたけど…。そう。全部本当なのね」

「まぁな」

優子には今回の清涼祭で明久たちがしていたことをすべて話した。姫路の転校について。ばーさんとの取引について。その結末がどうなったかを。で、優子には駐輪場で明久を待っている姫路にこのことを伝えてきたもらったのだ。

「でも、その……常夏コンビ？だっけ？あの二人にはなんも処分はないのよね」

「そうだな。あいつらは表立っての行動は営業妨害しかしてないことになってるからな。やったことは明久たちと似たようなことしか

してないことだし」

それぞればーさんや教頭と取引をしたことには変わりはないからな。

「じゃ、教頭先生には何にも処分はないの？あの人が黒幕だったんでしょ」

「アレの処分はもうすこししたら出る。黒幕は黒幕らしく、最後はつかまるから安心しとけ」

捕まるのも時間の問題だろう。

「なら安心ね。ねぇ、アタシにも飲み物ちょーだい。のど乾いちゃった」

「ん、ああ」

そう言って、持っていた飲み物を優子に渡した。

「…それにしてもFクラスは楽しそうでいいわね」

「まぁな。…って、いつの間にかずいぶんとカオスになってるな」

「代表に愛子もいるわね」

明久は姫路に抱き付かれ、島田はそれを見て憤怒してるし。雄二は霧島と鬼ごっこしてるし。康太は鼻血を噴いて倒れ、工藤は何か面白いのかわらってるし。ＦＦＦ団の奴らの山はまだ動かないし。

「無事なのは俺たちと秀吉ぐらいか」

「そう見たいにゃ」

……にゃ？

「ま、まさか・・・！！」

打ち上げに用意されてたのは酒。さっき優子に渡しのも酒。

「どうしたにゃ？ん～、変にゃところでもあるかにゃ？」

「なんでも・・・ない・・・」

駄目だ・・・。完璧に酔ってやがる。頭にいつのまにかネコミミついてるし・・・。

ああ、クソッ！なんで優子に酒を渡しちまったんだ俺は！！

「んにゃ～・・・♪」

「お、おい優子？ど、どうしたんだ？」

「マサにゃ、良い匂いがするにゃ～♪（ゴロゴロ）」

「そ、そうか」

優子に抱きつかれたまま、とりあえずベンチに座る。幸い、ＦＦ団のやつらは眠ってるので暴れられる心配はなさそうだ。

「さて、どうしたもんか・・・・・・」

「にゃ？」

「ん？ああ、優子気にしなくて大丈夫だからな（ナデナデ）」

「…ん♪」

優子の頭をなでながら酒を飲む。このままだと優子は寝ちまうからな。早めに家に返したほうがよさそうだ。

となると・・・

「おーい、秀吉。生きてるかー？」

「どうかしたかの雅夜？・・・なにゆえに姉上に抱きつかれておる？」
「優子が酔った」
明久たちのほうを見ていた秀吉に声をかける。・・・良し。どうやら酔ってないみたいだ。酒だとわかって飲んでないのかも知れないな。
「と、言うことで。とっとと帰るぞ。このままだと優子が寝ちまう」
「わかったのじゃ。ほれ、姉上。立てるかの？」
「いやー。まさにゃから離れたくない」
「「・・・・・・・・・」」
そう来たか。
「どうする秀吉？なんなら俺が背負っていくか？」
「そ、そうじゃな。姉上がこうじゃと仕方ないの」
「んにゃー・・・？」
「ちょっといいか優子？いったん立ちたいんだが」
「にゃ～♪」
よいしょ、っと。
「よし優子。しゃがむから背中に乗ってくれ」
「おんぶかにゃ？」
「ああ。家まで送って行ってやるよ」
「わかったにゃ♪」
素直に従い、背中におぶさる優子。・・・む。背中にやわらかい感触が――――っと危ない危ない。あんまり考えないほうがよさそう

だな。

「秀吉。俺のポケットから携帯を取り出してくれ」
「・・・ふむ。これかの？」
「電話帳の中に榊って名前があるからそこ電話してくれないか？」
「さかき、さかきっと。これじゃな（ピッ）」

電話を耳元にあててもらい榊さんが出るのを待つ。

『（プルルル――ガチャ）どうした？』
「今文月学園ですか？」
『ああ。ちょうど見回りが終わったとこだが』
「文月公園まで来てもらえないですか？打ち上げの後始末を頼みたいんですが」
『雅坊がやればいいじゃねぇか』
「優子を家まで送るので、無理っぽいので」
『優子…？ああ、あの嬢ちゃんか。なら任せとけ』
「では。よろしく頼みます」
『おう！（ガチャ――ツーツー）』

後は榊さんに任して大丈夫そうだな。

「誰なんじゃ、その榊って言うのは？」
「文月学園の警備員。信頼できる親父って感じの人」
「・・・大丈夫かの？みながお酒を飲んでることがばれるのではないかの？」
「平気平気。あの人なら笑って一緒に混ざるから」
「警備員として、それでいいのかのぅ」

別に打ち上げなんだから、普通じゃね。

「ってことで行くぞ秀吉。電話してるうちに優子も寝ちまったみたいだし」
「ホントじゃ……」
優子の寝顔が見れないのは残念だが。

第１０４話（後書き）

再び優猫登場（笑）

酔ったときはネコミミ常備しています。

感想お待ちしております。

第１０５話

「すぅ・・・・・・すぅ・・・・・・」
「ってく。気持ち良さそうに眠ってるな」

優子を背負いながら、秀吉と家に向かっている。

「そうじゃのう。いつもこういう顔しておれば、もっと人気も出るのじゃろうに」
「学校じゃ優等生の格好で通してるからな。真面目できついってイメージがあるから、あんまり男子が寄り付かないんだよな」
「家ではあんなにズボラじゃというのに・・・・・・」
「学校での様子を見てたら、誰もそんなこと思わないがな」

仮面が厚すぎて、素と全然違うからな。まぁ、俺からみたらどっちも可愛いんだけど。

「・・・・・・んにゃ？」
「っと、わりぃ。起こしちまったか？」

と、背中で寝ていたはずの優子から声が聞こえた。

「・・・ん・・・・・・・・・すぅ・・・・・・」

が、それもすぐに寝息に変わる。

「・・・寝言のようじゃの」
「だな」

ちょっと音量下げるか。

「そういえば秀吉は酒飲まなかったのか？」

「うむ。飲み物が酒じゃとわかったからの。ワシらはまだ未成年じゃし、飲んではまずかろうと思っての」

「しっかりしてるな。俺なんて小学高学年のころから飲み始めてるって言うのに」

「それはどうかと思うのじゃが・・・」

最初のころは無理やり飲まされたんだけどな。・・・・・あの時（トラウマ）の事はあんまり思い出したくないが。

「気になっておったのじゃが、なぜ姉上はネコミミをつけておるのじゃ？言動もいつもの姉上らしくないように思えたのじゃが」

「ん？もしかして、優子って今までに一度も飲んでないのか？」

まさか、今回が初めの飲酒なのか！？

「うむ、そうじゃ」

「・・・マジでか」

んー、なんか初々しいとは思ったが初めてだったとはな。

「で、どうしてなのじゃ？もしや、酔った勢いでつけておるだけではなのじゃろ」

「いやそれ半分正解。なんか優子は酔ったらネコみたくなるんだが、ネコミミついては俺は知らん。気づいたらつけてる」

「ネコじゃと？」

「語尾がにゃになるし、いつも以上に大胆な行動してくるようにな

る」

抱きついてきたり、首筋や耳を甘噛みされたりしたっけな。

「大胆じゃと!?お主、姉上になにかしでかしたのではないじゃろうな!?」

「なわけあるか。俺からは何もしてねぇから安心しろ」

「・・・・・・ん～・・・・・・どうかしたのかにゃ?」

「おっと。また起こしちまったか。なんでもねぇよ。優子は寝てていいから」

「・・・ん・・・・・・・・・・・そう・・・」

おきてしまった優子を、なだめてまた寝かしておく。眠たいのは酒だけじゃなくて、今日の疲れもだろう。

「・・・・・む?俺からは・・・?」

「っと、秀吉。お前の家ってそこだよな?」

「うむ。そうじゃ」

「案外近かったな」

徒歩でだいたい二十分ってところか?時間確認してないから体感でだけど。

「んじゃ、とっとと優子を置いて俺は帰るとするか」

「なんじゃ、すぐに帰ってしまうのかの?」

「まぁな。特に居座る理由もないし」

あと、そろそろ煩悩が限界なので。

「せっかくじゃし、泊まっていかんかの」

「・・・お前は俺を殺したいのか？」
「なんで泊まりに誘っただけで殺人を示唆されなければならんのじゃ！？」
「このことがＦＦＦ団にばれてみろ」
「む・・・・・・」

気づいてくれたか？
そう・・・

「ＦＦＦ団の対応するので、俺が忙しすぎて死んでしまう」
「それは違うじゃろ！？」
「いや実際、あいつらそこまで強くねぇし。ただ数が多いのと粘り強いのが面倒なだけ」
「雄二や明久がてこずらせる相手じゃというのに・・・」

ＦＦＦ団よりもっと化け物じみた奴らを相手にしてるからな。

「まぁ、よい。とりあえず中に入るのじゃ」
「そうだな」

秀吉は鍵を開けて家に入った。それに続いて俺も入る。

「ただいまなのじゃ」
「お邪魔しまーす」

さて、優子の部屋はどれだ？とっととベットに寝かせ――――

「お帰りなさい秀吉。・・・・・あら。そちらの方はどなた？」

た後にやることがあったな。

第１０５話（後書き）

ついに登場木下母！

作者の都合で父親は不在です（笑）

感想お待ちしております。

番外・バレンタイン編　～喫茶・翡翠～　前編

「ったく。めんどくさいことになったな・・・・・・」

放課後。急いで家に帰ったら、向こうに持っていく分のクッキーを詰めたバックを持ってすぐに家を出る。
家から喫茶・翡翠までだいたい二十分はかかるので、時間ギリギリだ。

「『四時に来い』は、無理があるだろ」

そう呟きながら駅に向かって自転車（チャリ）をとばす。

翡翠につき、裏口から厨房へと入る。

「おや。早かったね雅君」
「・・・時間、間に合いましたかマスター？」
「今ちょうど四時になったところだよ。相変わらず時間厳守だね」

どうも。と返し、翡翠の制服に着替える。

「あいつらはもう来ましたか？」
「いや、まだだよ。あの子たちには雅君は四時半に来るって言っておいたからね」
「なるほど。ところで他の人達はどこにいるんです？」
「深風と陽菜は買出しに。後はまだ学校だよ」

よしっ。あの人達がいないなら安心して準備できるな。

「で、今回も作って来たのだろう？どれほど作ったんだい？」
「クッキーを個別で９人分。後はばらで５０枚ほど」
「となると１００枚ぐらいかな？去年は個別では５枚だった気がするから」
「ええ。学校のほうでも配ったんで今年は合計で２００枚ほど焼きましたが」

去年は向こうでは配らなかったからな。半分ですんだんだが。

「それは・・・・・ずいぶんと沢山だね」
「・・・やりすぎた感があるのはわかってますよ」

呆れられても何も言い返せない。なぜなら自分でも呆れてるからだ！

「そういえは深風のチョコは食べたかい？今朝早くそっちに行くと言ってたが」
「食べましたよ。朝学校に行こうとしたら玄関にぶら下がっていたんで、そのまま登校中に食べました」
「どうだった？今年は陽菜に指導してもらっていたが」
「前よりは美味かったです。まぁ、まだ陽菜さんにはとどいてませんが」

「流石に陽菜には敵わんよ。私の自慢のパティシエだぞ」
「はいはい、ノロケは結構」

「（バンッ）呼んだー？」

「呼んでないし、いきまりドアをあけるな！」

裏口を勢い良くあけて現れたのは、翡翠のパテェシエである陽菜さん。悔しいことにお菓子の腕前だけは勝てない。

「お帰り陽菜。深風は？」
「学校に行って、呼んでくるってさ。それより私のこと話してなかった？」
「話してねぇよ！」
「んー美人のお姉さんとか聞こえたんだけどなぁ」

いや、美人のびの字も出てないから。

「って、ねーさんもう呼び出しにいったのか！？」
「そだよー。でもその前にマサ君、私に渡すものがあるんじゃないかなぁ？」
「・・・・・チッ。ほれ」

絡まれるのが面倒なので、しぶしぶクッキーを渡す。

「ぅわーお。相変わらず私に対してでけはつれない態度だねぇ」
「まったく尊敬できねぇからな」
「流石マサ君。相変わらずのツンデレっぷりだね！」

「誰がツンデレだ！！」
「もー、照れなくていいんだよ？」
「照れてねぇよ！」

あー、だからこの人は尊敬できないんだよ！！

「お味のほどは・・・・・うん。旨くできてるじゃん」
「そいつはどーも」
「流石は私の一番弟子だね」
「弟子になった覚えはねぇよ！」

こんなのが師匠とか最悪だ！

「二人とも遊んでないで、そろそろ時間だよ」
「あ、はーい」
「了解」

さて、ここからも面倒ごとの始まりだな。

番外・バレンタイン編　～喫茶・翡翠～　前編（後書き）

翡翠でのバレンタイン、前編！

あらたに登場したマスターと陽菜さんの詳細はまた今度で（笑）

感想お待ちしております。

番外・バレンタイン編　～喫茶・翡翠～　中編

「よっしゃあ！一番乗りっ！」
「残念。私が先にいる♪」
「嘘だ―っ！」
「いらっしゃい。相変わらず騒がしいな、お前ら」

４時半ピッタリ。忍と未来がやってきた。

「走らなくてもいいのに…」
「こいつらには何度言っても聞かんさ」
「由実に千夏もいらっしゃい。いつも苦労してるな」

すこし遅れて由実と千夏が到着。

「なに。いつもの事だ。いい加減慣れてるさ」
「それでも少しは自重してもらいたいですが…」
「それが出来たら、こいつらじゃねぇよ」
「「酷くない！？」」

いや、当然だろ。

「ねーさんと他の奴らはどうした？一緒に来たんじゃなかったのか？」
「んー、なんかミーさんがどっか寄るところがあるって言ってたから私たちだけで先に来ちゃった♪」
「後はミーさんに付き添いました・・・」
「そうか。わかった」

向こうでなんかあったのか？寄るところってのも気になるが。

「で、マサ君♪そろそろバレンでタインなお菓子をちょーだい♪」
「私も私も！この日のために最近はお菓子を食べてなかったからね！いい加減我慢の限界なんだよ！」

そこまでするか！？

「ハイハイ。ほれ」
「いやったぁあああっ！」
「流石、私の夫♪ありがとね♪」
「……やっぱ返せ」

渡した途端、後悔した。

「それこそいつものことじゃないかい」
「…言うな。哀しくなってくる」

後悔するのがいつものこととか最悪だろ…。

「ま、いいや。ほら千夏と由実も」
「ありがとうございます…」
「ありがとマサ君」

どういたしまして。

「相変わらず良い味してる…」
「それにしても、マサ君のお菓子は最近さらに美味しくなってきてるね」
「わかるわかる♪」

そうか―？

「確かに！なんていうか……こう……優しい味？」
「「それだ！」」
「ハモるな！」

たちが悪いな、こいつら。

「未来もたまには良いことを言うよね…」
「たまにはって酷くない！？」
「そだね♪やっぱり美味しくなってきたのって、ユウの影響なのかな？」
「・・・さぁな」
「おや。どうやら図星みたいだね」
「愛されてるねユウちゃん・・・」
「それはそうでしょ♪だって私（ユウ）が認めた子だもん♪幸せになってもらわなくちゃね」

待て。いつのまにお前が認めてたんだ！？

「ユウは本当に可愛いからね。マサ君のことの話になると、毎回毎回顔を真っ赤にそめちゃうんだよね」
「そうそう！でも、どっちかと言うと恥ずかしがっているって感じじゃなくて、嬉しそうに話すよね！」
「聞いてるこっとが恥ずかしいほどに・・・」
「そのことをユウに指摘すると「・・・うん／／／」って言うところもまた可愛いよね♪」

・・・優子。なにやってるんだよ・・・・・・。

「・・・・・っと。誰か来たみたいだな」
「そうだね・・・。みーさんたちがもう来たのかな・・・？」

ふと、人の気配を感じ外を見てみるが視認はできなかった。まだちょっと向こうのようだな。由美も感じたみたいだから、間違えではないはずだし。

「・・・相変わらず凄いね。私はまったく感じないというのにね」
「私も全然！店の中だったらわかるんだけどな」
「感じるほうがおかしいって・・・。この二人が異常なだけ♪」

異常なのは否定できないな。これが普通であっても困るし。

『お、翡翠だ！後ちょっとだな』
『無駄にコイツが抵抗するから、余計に時間を食っちまったよな』
『ちょ、ちょっと！いい加減にするのじゃ！』
『まったく。ここまで来たんだからもう諦めなよ』
『そうだよアヤメ。そんなに嫌がんなくたっていいじゃないか』
『いやなもんは嫌なのじゃ！アヤツの顔なんじゃみたくないのじゃ！』
『はいはい。アヤちゃんも落ち着きましょうね？そろそろ中にいる人に気づかれちゃってるころだけどいいのかな？』
『うぐっ・・・』

声からすると六人か？一人は久しぶりに聞く声だけど。

番外・バレンタイン編　～喫茶・翡翠～　中編（後書き）

更新遅れてすみません（泣）

計画停電で、なかなか書く時間がなかったもので（謝）

後編は明日になりそうです・・・。

感想お待ちしております。

番外・バレンタイン編　～喫茶・翡翠～　後編（前書き）

新キャラが何人か出てきますが、本編でそのうち出てくるので紹介はその時。

すみません。

番外・バレンタイン編　～喫茶・翡翠～　後編

「遅かったなねーさん。なにしてたんだ？」

扉を開けて中に入ってきたねーさんを迎え、遅れてきた理由を聞いておく。

「この子を迎えにいってたのよ。ほら、恥ずかしがっていないで」

「だ、誰も恥ずかしがっておら――――って、マサヤ！？」

「ん、どうかしたか植田？俺の顔になにかついてるか？・・・・・・鉄アレイはやめろ」

「うるさいのじゃ！！」

そう怒鳴り、鉄アレイを振り下ろそうとしてくる植田。避けようと思えば簡単に避けれるんだが、さてどうしたもんか。と、思っていたら・・・

「――――ふぇ！？」

「はいストップ。これ以上やると、せっかくのスベスベ肌に傷がついちゃうよ？」

「それに久しぶりの対面なんだ。ちゃんと挨拶しろよな」

「お、祭に歩。助かったぞ」

歩が鉄アレイを受け止め、祭が植田の体を後ろから抱き上げる。

「マサならこの程度の攻撃、避けるぐらい簡単だろ。なんで避けないんだ？」

「鉄アレイなんて重いもんを扱ってるからな。避けたら植田が怪我するかもしれないだろ」

「なっ・・・／／／」

祭と歩の腕を振り払い、ねーさんの後ろに隠れてしまう植田。いきなりどうしたんだ?

「ま、いいや。忘れないうちに渡しとくぞ。ほら」

「……なんじゃ、これは」

「は?なにって、俺からのバレンタインのお菓子に決まってるだろ。まさか、お前まで今日がバレンタインってことを忘れてたとか言うんじゃないよな?」

もしそうだったら、本当にどうかしてると思うぞ?優子はそうだったが。

「そんなわけがないじゃろ!!……あ、ありがとうなのじゃ」

「どういたしまして」

植田にクッキーを渡すと、祭が植田の耳元に口を近づけ、

「――――――(ボソボソ)」

「なっ!?」

と、何かを囁いた。囁かれた本人は顔を一瞬で顔を真っ赤に染めた。

「おいおい。何を植田に言ったんだ、祭?」

「ん~なんだろうね?」

言いながら真っ赤になった植田の肩を叩く祭。

植田はチラリと俺を見て、

「なななな、なんでもないのじゃー!!」

「うおっ！？」
「あっ！？」

いきなり踵を返して、どこかへと行ってしまった。

「…なにがしたかったんだアイツ？」
「あーあ、逃げちゃったね。刺激が強すぎたかな？」
「は？」

刺激？なんのことだ？

「マサヤは気にしなくていいよ。こっちの話だから」
「ん、そうか。わかった」
植田について今考えても、特になんかなるとも思えないので、置いとこう。

「で、ほらお前たちのもだ」
「ん、サンキュー」
「あら、ありがとねマサヤ」
「おう。今年もありがとな」

三人にクッキーを渡す。これで個人宛の物は全部くばり終わったな。

「今年も作ったんだな。やっぱり理由は去年と一緒なんだろ？」
「『ホワイトデーに作るのが大変だからバレンタインのうちに渡しておけば、ホワイトデーは貰わなくて済むだろ』だっけ？去年聞いたときは驚いたのを覚えてるよ」
「まぁな。どこぞの誰かさんが『１０倍返しでお願いしようかしらね♪』って言ってたからな。身の危険を感じて作り始めたのは俺も鮮明に覚えてる」

そのどこぞの誰かさんは『へー、そんな酷いこと言い出す人がいるんだ』と、厨房のほうで声を出していた。

「でもな・・・。今年は文月のほうでちょっとしたトラブルがあってな・・・・・・」

「え、もしかしてもらったのか？」

「ああ。俺がつくった奴食べて、ホワイト目当てで友チョコのあまりを俺に渡してきた奴が十人ほどな。断らせない勢いだった」

「で、断れ切れずに貰っちゃったと」

「まぁ、マサヤは断るのは苦手だからね・・・」

・・・自覚はしてる。

「幸いなことに倍にして返してとか言われなかったから良かった」

「あー、十人全員が倍にしてとか言われたら流石に大変そうだ」

「・・・一昨年までのこっちみたいになっちゃうのか」

「・・・その中で一人だけさらに十倍返しにさせようとしてたな」

またも厨房から『なに言ってるか、全然聞こえなーい！』と、声が聞こえた。

「ま、でもマサヤならなんとかするでしょ」

「そうそう。結局はしっかりやるから、皆も無茶な注文しちゃうんだよね」

俺なのか！？俺が元凶なのか！？

番外・バレンタイン編　～喫茶・翡翠～　後編（後書き）

グダグダに終わってしまってすみません（泣）

計画停電があるので、なかなか執筆時間が取れなかったんです（言い訳）

あと、何人か名前の出てこない新キャラがいましたが

その方たちはもうすこししたら本編のほうで出てきますので

わかりずらくて、申し訳ございません。

感想お待ちしております。

第１０６話（前書き）

以前取った木下の母親の名前アンケートでの
レフェルさんの恋（れん）という名前を採用しました。
ありがとうございます。

第１０６話

小説本文　「母上。彼が昨日説明した・・・」
「浅月雅夜です。はじめまして秀吉のお母さん」
「あらあら、ご丁寧にどうも。私は秀吉と優子の母、木下恋（れん）。気軽に恋って呼んでちょうだい」

と、お辞儀をしながら言われたのでつられてお辞儀をしてしまう俺。

「あなたが浅月君なのね。昨日は優子をありがとう。迷惑じゃなかったかしら？」
「いえいえ、全然。むしろありがたかったですよ」

となりで秀吉が「雅夜が敬語をつかっておるじゃと！？」と驚いているが、スルー。

「あ、立ち話するのも悪いし、中に入ってちょうだい。優子もベットに寝かさなきゃならないでしょ？」
「そうしてもらえるとありがたいです」
「秀吉。浅月君を優子の部屋に案内してちょうだい」
「うむ。雅夜、こっちじゃ」

秀吉について行き、優子の部屋と思しき――――床にＢＬ本や脱ぎ捨てやれたジャージ、抱き枕などがあるので絶対にそうであろう――部屋にあるベットに昨晩と同じことにならないよう注意しながら優子を寝かせる。

「なんじゃ？妙にそわそわしておらんかの？」

「ん、そうか？・・・気のせいだと思うが」
「むー・・・・・・」

下手に勘ぐられるのも困るので、とぼけて流す。やけに感が鋭いじゃねぇか。

「さて優子も寝かせたことだし、話の続きでもするか」
「うむ、そうじゃの。昨晩はなにがあったのかワシも気になっておるからの」
「ん？優子に聞いてただろ？姫路と島田と一緒に」
「む、今朝のことかの？アレは・・・・・・たぶん姫路と島田は信じたじゃろうが、ほとんどは姉上の妄想じゃと思うからの」
「・・・・・・・・・・は？」

え、なに、その聞きたくない話しは！？

「『無理やり酒を飲まされて酔った勢いでシちゃって、そのままベットで一緒に寝た』なんて、流石に無理があるじゃろ」
「無理があるどころか、無理しかねぇだろ。ってか、姫路と島田は信じたのかよ！？」

半分は正解なのが嫌なところだ。というより、シたら痕が残るだろうが。

「うむ。食い入る様に熱心に姉上の話を聴いておったのう」
「・・・また無駄な誤解が・・・・・・・・」

説得するのに一苦労しそうだな。と、思っていたら恋さんがダイニングのほうから声をかけてきた。

『二人とも、お茶入ったわよ。早くいらっしゃい』
「はーい、なのじゃ」
「・・・優子を寝かせてすぐ帰る予定だったが、まぁいいか」
家に帰っても特にやることないしな。

「麦茶でよかったかしら？」
「ええ、大丈夫です」
恋さんの対面にすわり、左隣に秀吉が座る。
「夜遅いけど、お家のほうは大丈夫かしら？」
「ほぼ一人暮らしなので大丈夫です」
「あら・・・・・。ごめんなさいね。知らずにとは言え、聞いちゃって」
お。なんか勘違いしてるみたいだ。まぁ、いつものことだけど。
「母上。なにも謝ることでもないぞい」
「両親は健全ですし、ねーさんもいます。ただ両親は仕事で海外を飛びまわっていて、ねーさんは仕事場でお世話になってるだけです」
「あらあら。勘違いしちゃったみたいね」
「気にしないでください。たいていこのことを言うと、皆勘違いするので」

「・・・ワシもそうじゃったしのう」

どこか遠くを見ながら言う秀吉。秀吉には一年のときに話したが、その時のことを思い出しているのだろうか。

「あら、そうなの。でも、一人はさびしくないかしら?」

「もう慣れてます。それに一匹ネコを飼っているので、さびしくはないです」

「えーと、カノン君だったかしら。昨日秀吉から聞いたわ」

「お、そういえばカノン君はどうしたのじゃ?今日は来ておらんかったし、家に一人じゃないのかの?」

「ん~、たぶん家にいないと思う。今頃はねーさんのところにでもいると思うぞ」

あいつは放浪癖があるからな。いると思ったらいないし、いないと思ったらいることがしょっちゅうある。

「あらあら。じゃあ、今日は此処に泊まっていかないかしら?」

「「は?」」

思わず秀吉とハモる。えーっと・・・・・・、なにを言ってるんだ?

「・・・なんでいきなりそういう話になるんですか?」

「あら、ダメだったかしら?」

「いえ、別にダメというわけではないんですが・・・」

や、やばい。このままだと押し切られる。ここは唯一正常をたもってる秀吉を頼るしか――――

「は、母上?ワシもよくわからんのじゃが――――」

「それにここで帰したら浅月君はお家で一人でしょ？こんな時間に出歩くのも問題があると思うの」

あ、秀吉が無視された。

「ま、まぁ、確かにそうですが・・・。本当にいいんですか？俺みたいな奴をいきなり泊めて」

「あらあら。昨晩と似たようなことを言ってるわよ。それで結果(あのとき)はどうなったかしら？」

ぐっ・・・・・・。

「・・・・・はぁ。わかりました。今日は泊まらせてもらいます」

「なんじゃと、雅夜っ！？諦めるのが早すぎると思うのじゃが！？」

「・・・・・なぁ秀吉」

秀吉の両肩に手を置き、がっくりとうなだれながら言う。

「恋さんは確実に優子の母親だ。わかってくれよ。・・・・・・・まったくと言っていいほど勝てる気がしねぇ」

「ま、雅夜・・・・・・」

視界の隅で恋さんはブイサインを出していた。

第１０６話（後書き）

更新遅れて申し訳ございませんでした。

いろいろと混雑しておりまして、大変だったのです（汗）

感想お待ちしております。

第１０７話

結論。俺は恋さんが苦手みたいだ。

「あらあら。私と優子ってそんなに似てるかしら？」
「ええ、そりゃあもう。性格というより性質がまったく同じです」
押しが強いところとか、一度言い出したら止まらないところとか。
「あら。うれしいこと言ってくれるわね」
「いえいえ。本当のことを言ったまでです」
「・・・母上。それは褒められておらんと思うのじゃが」
いや、一種（ひにく）の褒め言葉だ。

「それにしてもどうするのじゃ母上。雅夜が泊まるのは決まったことは言え、寝る場所はどうするのじゃ？客間なんぞウチにはないのじゃぞ」
「あー、確かに。あいてる部屋はなさそうですもんね。まぁ、別にこのソファでも寝れないことはないんですけども」
今現在座っているソファをさしながら言う。
四人ですんでいるのに対して、部屋が三部屋。秀吉と優子が一部屋

ずつ使って、恋さんと木下父で一部屋使ってるとなると、あまってる部屋はないはずだ。

「それともワシの部屋で寝るかの？敷布団ならあった気がするしの」
「ん～・・・そうね。そうしましょ。浅月君もそれで構わないでしょ？」
「ええ。じゃあさっそく準備するか秀吉」

それが、妥当なところだ。『泊まっていって』と言っておいて、ソファで寝かせるのもおかしいしな。

「うむ。今日は疲れたからのう。早めに寝るとするかの」
「あらあら。もうちょっとお話しましょうよ」
「母上。明日も掃除などではあるが一応は学校があるのじゃ」
「そういうことです。なので、話はまた今度にしましょう」

次はあってほしくないが。

「そういうことなら仕方ないわね。じゃあ秀吉。アンタがちゃんと優子の部屋に布団を敷くのよ。浅月君にやらせちゃダメよ」
「任されたのじゃ。・・・・・・？母上、今なんと？」

・・・・・うーん、今日は疲れすぎたのか？どうやら俺の耳が狂ってるみたいだ。今ありえない言葉が聞こえた気がするが気のせいだろう。

「ん？浅月君にやらせちゃダメよ？」
「いや、その一個前じゃ」

秀吉もおかしいと思ったのだろう。額に冷や汗を浮かべて恋さんに

聞き返している。

「ちゃんと布団を敷くのよ」

「・・・・・・・・うむ。そうじゃろうな。母上があんなおかしなこと言うはずないじゃしの。やっぱり聞き間違え――――」

そうだな。さっきのはきっと聞き間違え――――――

「――――――優子の部屋に」

「「じゃないのかっ!?」」

思わず秀吉とはもる。って今はそれどころじゃねぇ!!

「母上、なにを言っておるのじゃ!?」

「話の流れからして、おかしいだろ!!」

「あら、そうかしら?」

「そうかしら?じゃねぇよ!!さっき秀吉の部屋で寝るっていっただろ!」

「そうじゃ、母上!!なぜいきなり姉上の部屋で寝ることになっておるのじゃ!?」

「しー、二人とも。優子が起きちゃうでしょ」

「「あ、すまん・・・」」

と、いったんソファに座り直る。そして軽く深呼吸。・・・・・・よし。これで少しは落ち着いたな。

「・・・で、いったいどういうことですか?詳しく聞かせてもらいたいのですが」

「う、うむ。母上、なぜいきなりそうなったのじゃか?」

隣で秀吉も同じことをしていた。

「詳しくもなにも・・・・・・。私は最初っからそのつもりで話してたわよ？」

「最初からとは・・・・・・。ワシの部屋で寝るということで進んでおったじゃろう」

「あらあら。そうだったかしら？」

「・・・恋さん。俺は秀吉の部屋で寝ます。優子の部屋で寝るのはいろいろと問題があるのでしません」

なにを言ってもこのまま押し切られそうなので、そうそうに話を打ち切ろうとする。

「・・・・・問題？なにかあるのかしら？」

しかし、それを恋さんが許すわけがなかった。

「ええ、男女が一つの部屋で一緒に寝ることがまず問題ありでしょう」

「あらあら。他には？」

「許可もなく勝手に優子の部屋に入ることもです」

「う～ん、他にもあるの？」

「あります。ウチの学校にというより、ウチのクラスにはＦＦＦ団というバカな組織があります」

「うんうん、それで？」

「ＦＦＦ団は嫉妬と嫉みで暴行におよぶ集団です。実際、秀吉の部屋で寝ることでさえ危険だというのに優子の部屋で寝てみたらどうなると思いますか？」

「・・・それは大変ね」

隠そうと思っても最後には絶対ばれてしまう。秀吉も「確かに・・・あやつらはワシを男として見ておらんからの」と呟いている。

「とまぁ、そういうわけです」

「あらあら」

よし。コレなら流石に何もいえないだろう。問題ばかりだからな。

が、恋さんの顔は曇らず、むしろうれしそうに笑っている。

「・・・あの、恋さん？わかってもらえましたよね？」

恐る恐るたずねる。俺の経験からしてこの顔は、決していいことを思っている顔じゃない。

「でも・・・・・・昨晩もそうじゃなかったかしら？」

「「あ」」

結論。恋さんは俺の天敵だ。

第１０７話（後書き）

・・・・・あれ、おかしいな。

最初考えてた恋さんと全然キャラが違う・・・。

どこで間違えたんだろう（汗）

感想お待ちしております。

第１０８話

「秀吉。優子の部屋に布団運んでちょうだい」
「・・・・・うむ。わかったのじゃ」
まだ納得、というより理解しきれてない秀吉。大丈夫か？

「そうそう、浅月君。優子の部屋散らかってるから適当に片付けてもらえないかしら？」
「俺がやったら怒られると思うが」
「きっと浅月君にならやってもらってもらうなら優子も怒らないわよ」
「ならいいんですけどね」
もう反論するのを諦め、素直に従っておく。反論して余計に変な方向へもっていかれるよりましだ。
優子の部屋に行き、さっそく片付けを始めようとするが・・・

「・・・・・本当に俺が片付けていいのか？」
床に放りだされてるのは、ＢＬ本・抱き枕・脱ぎ捨てられたジャージなどなど・・・。俺どころか、本人以外が片付けていいのか？

「・・・まぁ思ってても仕方ないか」
とりあえず優子に抱き枕を抱かせて、ＢＬ本を本棚にしまう。ジャージはあまり意識しないようにしながらタンスなかにたたんで入れる。温もりが残っていなくてよかった。

「よし。これで寝るくらいのペースなら確保できたな」
「雅夜、持ってきたぞい」
「お、秀吉。ちょうどいいタイミングだな」
「む。もう片付けは終わったのかの？」
「ああ。ある程度はな」

他にも片付ける必要がある場所はいろいろとあるが、今はすべきときじゃないだろう。

「ではここに敷いておくの」
「ありがとな」

と、当然のごとくベットに並べるように敷く秀吉――――って、ちょっと待て！！

「お前、なんでそこに敷いてるんだ！？」

優子が起きないように声の低くしてたずねる。なにかの間違えだよな？わかってて秀吉はそんなことしないよな？

「・・・・・さっしてほしいのじゃ」
「は？なにをさっしろと――――」

クイと扉のほうを指差す秀吉。そこには・・・・・・

「あらあら」
「・・・オーケー。よく理解した」

口に手を当てて微笑んでいる恋さんがいた。またも恋さんにやられたみたいだな。

「で、恋さん。俺になにをさせたいんですか？」

こっちが気がついた今でも微笑んでいる恋さんに聞く。

「あら。別に私は何もさせようとなんかしてないわよ？」

「いやいや。いまさらなにを言ってるんですか？なにか思惑があるのは見え見えです」

雄二よりも厄介な策士として恋さんを見る。

「思惑ねー・・・。私はただ、優子に幸せになってもらいたいだけなのよね」

「それで、まだ付き合っても無い男女を一緒に寝かせるんですか？」

「でも優子とは両思いなんでしょ？」

「・・・ええ。そうでしょうね」

無意識に顔を背ける。恋さんと秀吉がニヤニヤしているのは見なくてもわかる。

「じゃあ別にいいじゃない、一緒に寝ても」

「だからそれとこれ――――」

「嫌なの？」

「そんな訳ない」

と、反射的に思わず反してしまう。・・・・・もうだめだな。

言質をとったとばかりにブイサインを作る恋さん。秀吉はやれやれといった顔をしている。

「あらあら。ならいいわよね？」

「・・・いいですよ。ええ、いいですとも。お望みどおりに隣で寝てあげます」
「欲を言えば、同じ布団で寝てほしいわね」
「欲言い過ぎだろ!?というかそこまではしないですからね」

今日は普通に隣で寝るだけで簡便させてもらいたい。二日連続で優子に無許可で寝たら何を言われるか・・・・・・。

「あらあら。じゃあおやすみなさいね」
「おやすみなのじゃ」
「ああ、おやすみ」

そういって部屋を出て行く秀吉と恋さん。

「・・・・・浅月君には感謝してるわ」

部屋を出る途中、恋さんがなにかを囁いた。よく聞こえなかったな。

「どうしました恋さん」
「あらあら。なんでもないわよ」

うふふ。とでも言うように恋さんは去って行った。・・・本当になんだったんだ?

第１０８話（後書き）

感想お待ちしております。

第１０９話

（なにを考えてるんだろうな恋さんは。不可解な行動が多くて、俺になにをさせたいのかわからん）

なにかを企んでいることは確かなんだが、それが何なのかが考えがいたらない。

「・・・すぅ・・・・・・・すぅ・・・・・・・」

・・・・・隣では優子がぐっすりと――――不安を感じさせない顔で――――寝ている。たぶん、件の中心人物になっているというのに。気楽なもんだ。

（まぁ、その分俺が頑張ればいいだけなんだけどな）

優子の頭を撫でる。

（さて。・・・恋さんはどうでてくる？）

あの人が今まで俺にさせてきたことは、優子と一緒に寝させることだ。さらに昨日は避妊はさせないようにとまで言っている。となると既成事実でもつくらせようとしてるのか？

いや、俺たちはまだ学生だ。流石にそれはない――――って、ちょっと待てよ。既成事実？どこかで聞いた・・・いや言ったな。たしかアレは・・・・・霧島だったな。清涼祭のちょっと前ぐらいにそんなこと話たっけか・・・・・・。

・　・　・

『ん、どうした霧島？浮かない顔してるが』
『・・・・・浅月？どうして此処（Ａクラス前）に』
『いや、優子に会いに着たんだが・・・・・。それで。なにかあったのか？俺でよかったら話ぐらい聞くぞ？』
『・・・・・ありがと。でも大丈夫』
『考えごとは第三者からの視点で考えてみるとあっさり行くもんだぞ？』
『・・・・・わかった。雄二がなかなか私の恋人だって認めてくれなくて困ってる』
『・・・あー。なるほど』
『・・・・・どうしたらいいと思う？』
『そこは夫って言ってみるのはどうだ？恋人じゃなくて夫婦って認めさせればいい』
『・・・・・それも試したけどダメだった』
『試してたか。んー、ならどうするか・・・・・。霧島は雄二に恋人以上の関係だって認めてもらいたいんだよな？』
『・・・・・うん』
『となると・・・・・お。待てよ、アレなら・・・』
『・・・・・思いついた？』
『・・・いや、ダメだ。流石にアレはまずいな・・・』
『・・・・・なに？一応教えて』
『既成事実を作るって方法なんだが・・・・・。まだ学生だからな。社会的にいろいろと問――――』
『・・・・・教えてくれてありがと』

『って、ちょっと待て！何ダッシュしようとしてるんだ！？』
『・・・・・・？』
『いや、疑問顔で返されても困るんだが。まさかやる気なのか？』
『・・・・・・うん。善は急げ』
・　・　・
・　・　・

（あの時はどうにか霧島を思いとどまらせたが・・・・・・）

恋さんは俺に既成事実を作らせようとしている？・・・・・・まさかな。流石にコレはないだろう。たぶん。そうであろうと信じたい。

（・・・・・・でもなー。いつも笑顔な人ほど裏でなに考えてるかわからないんだよな）

かつて俺のトラウマを作った陽菜さんがそうであったように。それにだ。恋さんは秀吉と優子の母親でもある。あの演技がうまい秀吉と優子の、だ。

（可能性としては捨てきれないな）

・・・・・・ん、待てよ。押しの強い優子。抗えない恋さん。回りの女子からは応援される、この状況・・・・・・・・・・

（雄二と一緒？）

押しの強い霧島。抗えない雪乃さん。回りの女子からは応援されて

いる関係。
やべぇ。まじでかぶっていやがる。

（となると・・・・・・婚姻届けにいつのまにかに判を押される？）

優子を撫でていた手が止まる。
が、すぐにまた撫で始める。

（いや。それに関しては大丈夫だな。なんせウチの判子は全部俺が管理しているからな）

事実、両親は海外を飛び回っていて日本にはほとんど帰ってこないし、姉さんは契約書などの書類は苦手だから俺にまかせきってる。
だが・・・・・・恋さんならどこからか調達してきそうだな。

（・・・ま。用心するにこしたことはない、か）

本音を言うと、別に俺は雄二と違ってやられても困ったりはしない。
このまま優子と婚約、というながれでも問題はない。ただ、そうゆうことは人にやられるのではなく、自分でやってからこそいいものなのだ。

だからこそ、俺の心情（プライド）を貫き通す。

火種は作って楽しむもの。火種になって楽しむものじゃない。

第１０９話（後書き）

遅れて申し訳ございませんでした！

春休み突入や兄の引越しなどで、なかなか書く時間がなかったのです（汗）

次回からは早めに書き上げれると思いますので！

感想お待ちしております。

第１１０話

～ｓｉｄｅ優子～

ピリリリリッ　ピリリリリッ　ピリリリ――カシャ

「・・・・・・ん・・・・・・・・・・」

ベットから手を伸ばし目覚まし時計を止める。

「・・・もう・・・・・・朝・・・・・・・？」

カーテンを開ける。ん、日差しがまぶしい・・・。
でも、昨日よりぐっすり寝れた感じがしないわね。何でかしら？

「・・・・・・雅夜がいないから・・・なわけないわね」

自分で言って自分で否定する。流石に・・・ねぇ？そこまで要求不ま――――ゲフンゲフン。

「っと。そういえば今日は昨日の片付けがあったわね」

いつもどおり昼まで寝てるわけにはいかないわね。さっさと制服に着替えて朝食を食べなきゃ。
ベットから降りて制服に着替え――――あれ？

「あちゃ～・・・。制服のまま眠っちゃったみたいね。ん～、目立った所にシワは見えないけど・・・・・・帰ったらアイロンでもかけてもらったほうがいいわね」

母さんに。

「それにしても・・・昨晩はどうしたんだっけ?Fクラスの打ち上げにいったところまでは覚えてるんだけど・・・・・」

その先の記憶がない。疲れて眠っちゃったかしら?それでその後、秀吉にここまで運んでもらったってところかな。
後で礼でも言っておこう。部屋もすこし片付けてもらったみたいだし。

「おはよー」

リビングに入り、朝の挨拶をする。

「おはようじゃ姉上」
「あら優子。おはよう」

秀吉は朝食を食べている途中で、母さんはテレビで朝のニュースを見ていた。
席について朝食を食べ始める。

「母さん。なにか気になるニュースでもやってる?」
「そうね・・・。如月ハイランドが近々開園するのが一番気になるのかしらね」
「ふ~ん、如月ハイランドね・・・」

そういえば試験召喚大会の優勝商品でチケットがあったわね。狙いにいったんだけど坂本君たちにやられちゃったんだっけ。それも卑怯な手段で。

「ふむ。明久はどうするのじゃろうな」

どうやら秀吉も同じことを考えたみたいね。

「坂本君は代表と行くとして、吉井君は姫路さんでも誘うんじゃない？」

島田さんの可能性もあるけど、どちらかというと姫路さんのほうが可能性が高いと思う。吉井君、島田さんのこと男としてみてそうだし。

「雄二は明久にチケットをあげたぞ。なんでも雄二が持ってると身の危険があるらしいからな」

と、言いながら席に着く雅夜。朝食はもう食べ終えてるのか、コップだけを片手に持っている。

「それに明久は良く言って鈍感、悪く言ってヘタレじゃ。姫路を誘うなどできないじゃろう」

確かに。言われてみたらそればそうね。

「しかし、チケットはどうなるのじゃろうな？」

「一枚は霧島にあげるみたいだぞ」

「なんでアンタが知ってるのよ」

「企業秘密だ」

雅夜の企業ってなんなのかしら？

「雄二も災難じゃのう。これじゃと明久を中継して霧島に渡すことになっておる」

「ま、自業自得だ。気にするまでも無い」

「まったく・・・・・。友達ならすこしは警告してあげるとかしたら？」

「霧島を思ってのことだ。あの二人は早めに付き合ったほうが良いと思ってるからな」

あら。いいこと言うじゃない。雅夜らしくないわね。

「で、本音はなんなのじゃ？」

「面白いことになるから黙っておいた」

「「うん。それでこそ雅夜よ（じゃ）」」

「・・・・・・・・」

否定しないで黙るってことは自分でも認めてるってことよね？

朝食を食べ終え、家を出るまでまだすこし時間があることを確認する。秀吉はとっくに食べ終えており、雅夜と喋っている。

ふぅ・・・・・。さてと・・・。

「なんで雅夜が家にいるの！？」

「「いまさら！？」」

第１１０話（後書き）

今回は始終優子視点でお送りいたしました。

ちなみに原作とは違い、チケットは雄二と明久それぞれ一枚ずつもらっております。

感想お待ちしております。

バカテスト第１０問目・・・・・・ではなくて（前書き）

むしろ恒例の人物紹介！

今回はこの二人！！中島未来と長瀬由美ですっ！！

バカテスト第１０問目・・・・・・ではなくて

名前：　中島　未来　（なかじま　みく）

容姿：　青髪のポニーテール　ほどけば腰まで届く長さ　身長は１６５ｃｍ　Ｄカップ

家族構成：　父親　母親　未来

所属：　杜丘高校２－Ｄ

呼称：　未来　ミク　みくっち

性格：　好奇心旺盛。　ぶっちゃけ犬。　嗅覚が凄い。

好きな物（事）：　どんちゃん騒ぎ　お祭　熱く燃える展開　雅夜のお菓子

嫌いな物（事）：　しらけた雰囲気　テスト　臭い物　虫

趣味：　ランニング　ショッピング

弱点：　意外と内気で気が弱い

回りからはペット兼ムードメーカーとして扱われてる。

いつもは由美と行動をともにしており、暴走しはじめたら止めてもらっている。

たまに由美に放置されたり、悪戯されたりする。

大の虫嫌いであり、特に台所に出てくるGを見ると失神するほど。

翡翠屋の常連であり、雅夜が来てる日にはほとんどいる。アイスクリームが大好物。

勉強は嫌いだが、頭はよい。文月で言うとBクラス相当。

嗅覚がよく、常人が感じないものでも感じ取れるほど。その代償に臭い物が大嫌いである。

秀吉のヒロイン。

秀吉を一目で男と認識した数少ない人の内の一人であり、秀吉に感激された人物。

秀吉には清涼祭であったときから一目惚れ。実は秀吉もである（しかし、秀吉の場合は男だと認識してもらえたからであるが）。

名前：　長瀬　由美　（ながせ　ゆみ）

容姿：　茶髪でおさげ　目が赤みのかかった茶色　身長１６２ｃｍ
　Ｃに近いＤカップ

家族構成：　父親　母親　姉　由美

所属：　杜丘高校２－Ｄ

呼称：　長瀬　由美　ユミ　ユミっち

性格：　未来の世話役。回りからはいつも未来に引っ張られてる印象で通っている。
　しかし。実際は悪企みが好きで、あれこれと悪戯をしている。

好きな物（事）：　皆でいる時間　世話　雅夜のお菓子　悪戯

嫌いな物（事）：　怪我　無茶　忘れられたい黒歴史に触れられる事

趣味：　読書　悪戯

特技：　スポーツ（雅夜と同等である）

弱点：　過去（黒歴史）

数少ない良心――――ではなく、悪戯好きのおちゃめな人。
ただし、悪戯のターゲットは雅夜にはあまりいかない。基本は未来。
中学生のころは荒れていた。近所の不良たちと喧嘩を繰り返していたりする。その時は鬼神と呼ばれていた。

今、由美に対して鬼神と呼んでしまうとキレるので注意。
というよりも当時のことを話題にしてしまったらキレる。雅夜でも止めるのに一苦労する。

高校に入ってからはおとなしくいようと決めているが、今でも練習は怠っていない。

秀吉とはメル友になっており、たまに未来の恥ずかしい写真や隠し事を教えていたりする。秀吉もなんだかんだいってやめさせない。
もちろん未来には内緒で、である。

バカテスト第１０問目・・・・・・ではなくて（後書き）

感想お待ちしております。

番外・エイプリールフール編（前書き）

今回は番外編、エイプリール編ですっ！

こんな日にちに学校がなんであるんだ！っていうツッコミはなしの方向でお願いします（笑）

番外・エイプリールフール編

「雅夜なんて、大っ嫌い！！」

朝、学校に早くついてしまい、暇だったのでＡクラスで紅茶でも飲もうと思ってＡクラスに入ったら開口一番に優子に言われた。

「・・・・・・・・・・・・へ？」

『『『・・・・・・・・・・・・え！？』』』

言われた俺だけではなく、回りにいたＡクラスの奴等も驚きの声を上げていた。

普段の優子から発せられる言葉とは思えないからだろう。実際に俺も信じられない。

優子はそんな俺たちに構わず

「ア、アタシが言いたいことはそれだけだからね！！」

と、言葉を残して教室を出ていく。

「『・・・・・・・・・・・・・・・』」

教室が沈黙に包まれた。

ま、待とう。こういうときは一旦冷静になるんだ。

「・・・紅茶、貰っていいか？」

近くにいた工藤――――驚いてポカーンとした顔をしていた――――に一応紅茶はクラスのものなので許可を取る。

「へ・・・・・・?・・・・あ、うん」
「ありがとう（ガチャガチャガチャガチャ）」
「待って浅月君!!手震えすぎだよ!?」
「・・・・・・紅茶なら私がいれてあげるから浅月は座ってて」
「・・・すまんな工藤、霧島」

ふぅ・・・・・・と、息を吐きながらソファに座る。
ダメだ。頭の中では落ち着いてはいるんだが、身体は全然落ち着いてねぇ…。

「・・・・・・はい」
「ありがとな霧島」

俺に紅茶を渡して、そのまま右側に座る霧島。
いれたての紅茶を一口飲む。疲れてるわけでもないのに体に染み渡った。

「で、浅月君。これはどういうことなの?」
「・・・わからん」

対面に座った工藤が聞いてくる。
それは俺のほうが聞きたいんだが・・・。

「・・・・・浅月には心あたりはない?」
「ああ。昨日会ったときはいつも通りだったし、あんなこと言われるようなことをした覚えもない」

これだけは断言できる。

「浅月君は関係ない・・・？じゃあ、なんで優子はあんなことといったの？」
「・・・・・あの言葉は浅月に対して言っていた」
「あぁ、わかってる。最初に『雅夜なんて』言っていたからな」
優子がいったのは『雅夜なんて、大っ嫌い！！』だしな・・・・・・・・・。
「すまん。ちょっと逝くところが出来た」
「ん？心あたりでも思い浮かんだの？それに今、漢字が違わなかった？」
「・・・まぁそんなところだ」
そう言って教室から出――
「待って浅月君っ！？なんで窓から飛び降りようとしてるの！？」
「離せ工藤！こんなのは夢だ！夢なんだ！夢に決まってる！」
「ちょ！？現実逃避しないでよ！！代表、見てるだけじゃなくて止めるの手伝ってよ！」
「・・・・・わかった（バチバチッ）」
「んぎゃぁああ！」
突然背後から電流を流された。
「代表っ！？なんでスタンガンなの！？」
「・・・・手っ取り早い」
「それだけの理由でスタンガン使わないでよ！下手すれば死んじゃうかもしれないんだよ！？」
「・・・・・大丈夫。いつも雄二にやってるから」
「それはそれで問題だよっ！？」

「殺す気かっ！！」
「浅月君！？もう復活したの！？」
「スタンガン程度で死ねるかってんだ」
「・・・・・・ほらね？」
「代表は反省しようよ！！」

まぁ、知り合いの持ってる改造スタンガン（クマもイチコロ。最大電圧１００万ボルト♪）だったら危ないかも知れないがな。

「・・・・・・落ち着いた？」
「落ち着いたよ。一応、これが現実だってことを認めないといけないみたいだしな」
「・・・はぁ。なんで僕がこんなに疲れなきゃいけないんだろう・・・」

たぶんだが、まともだからじゃないか？

「・・・・・それで。優子はなんであんなことをいったの？」
「わからん。工藤はなんか思い当たる節はあるか？たとえば、教室で声をかけたときいつもと違ったとか」
「僕？ん～・・・。今朝はいつも以上に元気というか、楽しそうだった気がするよ」
「・・・・・確かに。クラスに来たときからずっと笑顔でいた気がする」
「朝から元気だった・・・？」

となると俺が来たら気分が悪くなったってことなのか？

「・・・・・・・・・・・・」
「無言で窓に向かわない！！ほら、座って」

「・・・ああ」
「・・・・・愛子。浅月の目が虚ろになってる」
「って、代表ホント!?・・・・・・うわぁ、大丈夫なの浅月君?」
「・・・ああ」

ってことは優子は俺を見たく『おーい、浅月君~』なかったってことだよな。そうする『・・・・・ダメ。返事がない』と優子は俺のことが嫌いになった『しかたないね。代表。やっちゃって』のか?・・・そういえば、大っ嫌いって言われたんだったな。『・・・・・えい(バチバチッ)』となると優子『これでも反応がないの!?』とはこれで終わりなのか?それだけは簡便してもらいたいんだが。それより、優子に俺のなにがダメ『代表。今度は最大出力でやって見て』だったのを聞いてみないとな。・・・いや、もしかしたら優子はもう俺に会いたくない『・・・・・今度こそ(バヂバヂバヂバヂッ!!)』かもしれんぎゃああっ!!!

「あ、反応あったよ代表」
「・・・・・よかった」
「よくねぇよ!!俺を殺すきかっ!!」
「それだけ元気なら大丈夫でしょ?・・・って言うかなんで元気なのか不思議なぐらいだよ」
「・・・・・雄二でも一時間は気絶してる威力だった」

体力はゼロにちけぇよ。ただ外見だけは元気そうに見えるだけだ。後、そんなもんを俺に使うなよ霧島。

「それでどう?なにか思いついた?」
「いや、まったく。優子がなに考えてるか思いつかん」
「・・・・・昨日までは普通だったのに」
「だよな。今日になって何かあった・・・・・ん?」

今日？

「どうしたの浅月君？」
「・・・昨日は何月何日だ？」
「え？・・・えっと、三月三十一日だよ」
「・・・今日は？」
「・・・・・・四月一日」

ああ、そうだよな。俺も今、時計見て確認した。

「それがどう・・・・・・って、あれ？」
「・・・・・・もしかして」
「ああ、そうだ。きっとそうに違いない」

四月一日。新年度初日にある、どこで始まったかわからないあの習慣の日。
そう・・・

「「エイプリールフール」」

だからなのか。あの時、優子があの台詞を言ったとき顔が赤かったのは。てっきり怒ってるから赤くなってるかと思ってたんだが、アレは照れてるから赤くなっていたのだろう。そして、その顔をあんまり見られたくないから出て行ったんだ。

「いや～、そういえば今日だったんだね。すっかり忘れてたよ」
「・・・・・私も忘れてた」
「俺もだ。くそっ。そうとわかってれば、優子に言われたとき言い返せたのにな」

嘘だからこその嫌い。わかってしまえば、いつも優子の行動となんの変わりもない。むしろ、俺のほうがいつも通りじゃなかったんだな。

「・・・・・あの時、あんなに動揺してたのに言い返せた？」
「なっ、霧島！？」
「そういえば、すっごく動揺してたよね浅月君？」
「工藤までっ・・・！」

ああ、くそっ。なんかムカつくな。これも皆優子のせいだな。

「そうだな、しかたないな。優子にやり返させてもらおとするか」
「優子に！？」
「ああ。やられた分はやり返さなきゃな」

さてと・・・。とりあえず優子をメールで呼び戻すとして・・・・・

「霧島、工藤。やるなら徹底的にやるぞ」
「・・・あ、あははは。どんまい優子・・・」
「・・・・・ご愁傷様、優子」

「（ガラッ）・・・・・・・・あ、雅夜」
「おお、優子。あらためておはようだな」
「お、おはよう／／／」

あれから数分。あと五分もしないうちに朝のＨＲになってしまう時間だ。

「まさか、優子があんなことするとはな。誰かに言われたことなのか？」
「え、あ、あ、うん。今朝秀吉にちょっとね」
「ほー・・・・・・。秀吉にか・・・・・・」

なるほど。秀吉だったか。携帯を操作してある人物にメールをする。これで秀吉にも報いはかけられるな。

「それで雅夜。えと、その／／／／／」
「ん？ああ、さっきのことか？今日はエイプリールフールだからあの台詞を言ったんだろ？素直にうれしいよ」
「ふぇ！？・・・・・・あ、ありがと／／／」

顔を赤くして俯く優子。確かにあの台詞はうれしいさ。だからな・・・

「優子。今日はエイプリールフールだしな。俺からも一言いいたいんだが、いいか？」
「あ、う、うん。いいわよ／／／／／／」
「そうか。じゃあ優子・・・」
「・・・うん」

顔を赤らめて俺の言葉を待つ優子。回りで聞いてる霧島や工藤、その他Aクラスの面子。
俺はこいつらの前で、はっきりと言わせてもらおう！

「優子。お前のことが・・・・・・・・・好きだ」
「うん・・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

一瞬、優子は頷いたがすぐに顔を上げてキョトンとする。
だが俺はそんなことを気にせずに言葉を続ける。

「俺は優子のことが好きだ。大好きだ」
「ちょ、ちょっと待ってよ雅夜！！な、なんで・・・・・・・・。今日はエイプリールフールだから言ってるのよね・・・・・・・・・・・・？」
「ああ。今日だからこそ言っている」

だんだんと涙目になっていく優子。回りからもざわめきが聞こえてくる。霧島と工藤を除いた連中から。

「・・・・・・雅夜ぁ・・・・・・・嘘でしょ・・・・・・・・・？・・・・嘘よね？・・・ねぇ、嘘って言ってよ！」
「エイプリールフールだからな。当然嘘だが？」
「・・・・・・・・・・・・・じゃあ・・・私のことが好きじゃないってこと・・・？」
「ああ」

俺の制服をつかんで胸の中に顔を埋める優子。制服が湿ってきているのは、きっと優子の涙のせいだろう。

「・・・・・・ねぇ、どうしてよ・・・。・・・・・・・・どうして、そんなことといっちゃうの？」

「・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・流石にそろそろ罪悪感を感じ始めたな。もうやめにするか？

「・・・ねぇ、嘘っていってよ！！なんでアタシのこと嫌いって言うのよ！！」

「なぁ、優子。だれが嫌い、なんていった？」

「・・・・・・え？」

「俺は嫌いなんていった覚えはないんだけどな」

「・・・で、でも好きっていったでしょ・・・？今日はエイプリールフールだから・・・それは嘘になって、嫌いってことなんでしょ・・・・・・」

確かに好きとはいったな。だけどな。

「好きが嘘になっただけで、なんで嫌いになるんだ？」

「・・・だ、だって好きじゃないってことは嫌いってことでしょ？それとも好きでも嫌いでもないっていうの？」

「・・・いいや」

まったく違うな。

「あのな、優子。どうしてそうマイナス思考なんだ？物事はもっとプラス思考で考えるべきだぞ」

「え？・・・・・それってどういう意――――」

「好きの上には愛してるってのがあるだろ？」

「っ！！」

バッと顔を上げる優子。俺はそれを正面から見つめて、

「これは嘘偽りない言葉だ。愛してる優子。好きという言葉では足りないぐらいに」
「・・・・・あ・・・・・・・・・あ・・・」
「だから嘘でも嫌いなんてもう言うなよ？」
「雅夜ぁーっ！！」

うぇーんと聞こえるかのように俺の胸に顔をあてて泣き出す優子。
ったく。しょうがないな。左手で優子を頭を撫でながら右手で背中を軽くさすってあげる。

パチパチパチパチ

拍手が聞こえた。音のほうを見てみると、やっぱりか霧島と工藤の二人だった。
二人と目があったので、目でありがとなと伝えておく。伝わったのかどうかはわからんが、二人は笑顔で返してくれた。いい友人を持ったもんだな。

パチパチパチパチパチパチッ

だんだんと拍手の音が大きくなってくる。見渡してみると、俺たちを見ていたAクラスの女子どものほとんどが拍手をしていた。なかにはちらほらともらい泣きをしている奴もいる。

「おめでとう浅月君、優子」
「・・・・・おめでとう浅月、優子」

霧島と工藤が近づいてきて、声をかけてくる。って

「・・・その台詞はちょっと早くないか？」
結婚式のときで発せられる言葉のように聞こえるんだが？
「いいのいいの。間違ってはないでしょ？」
「・・・いや、間違ってはないんだが」
「・・・・・私たちの本心。素直に受け取って」
「・・・ああ。わかったよ。ありがとな二人とも。ほら優子も」
泣き止み始めてる優子をうながす。
「・・・えっと。あ、ありがと／／／」
「あ、もしかして照れてる優子？皆の前で愛の告白されて恥ずかしいかったりする？」
「愛の告白・・・・・／／／／／／」
「あら。そっちに反応しちゃうんだ」
「・・・・・私もいつか雄二に・・・」
「代表もありがとね」
「・・・・・優子の幸せの為。それに浅月の頼みでもあったし」
「雅夜の？」
こらっ霧島。言うなっていっただろ。
「・・・・・そう。実は――」
「ダメだよ代表。約束はきちんと守らなくちゃ」
「お、ありがとな工藤」
「・・・・・ごめん浅月」
「いや、いい。結果的にはいわなかったんだしな」
結構恥ずいことをやったからな・・・。バレると面倒なんだが――

「そうだね。だから優子。続きは本人に聞くんだよ？」
「うん、わかったわ。後で雅夜に聞いておくわ」
「わかってるさ。だいだいこんなことになるだろうってことぐらい」
「・・・・・諦めがいい」

ずいぶんと経験しましたからね。こういう場面は。

「ね、優子。告白は終わったんだから、アレはしないの？」
「あ、アレって？」
「おい、ちょっと待て工藤。なにをさせる気だ？」
「こんな公衆の面前で告白をしたんだからさ！」
「・・・・・キスもしなくちゃ」
「「キスッ！？」」

いやいや。流石に公衆の面前でやることじゃないだろうが！！

「ささっ。やっちゃいなよお二人さん！」
「・・・・・周りは気にしなくていいから（参考のためにも）」
「やることは決定なのか！？そして霧島！お前今、なにか変なこと考えただろ！？」
「・・・・・なんのこと？（雰囲気は確認した。後はどうやるか）」

おかしい。この空気に酔ったのか霧島？

「だいたい、優子がそんなこと――――」
「・・・ん」↑待機中
「まさかの準備万端！？」

優子もこの空気に酔ったのか・・・。
ったく。仕方ない。覚悟を決めるか。

「優子・・・・・・」
「・・・雅・・・・・・夜」

優子の肩をつかんで準備に入る。優子はもう目を閉じて俺に委ねてる。

「ドキドキ」
「・・・・・・ワクワク」

・・・わざわざ口でいう必要はないと思うんだが？
まぁ、いい。いまは優子だ。

「雅夜・・・」
「優子・・・。愛して――――」

『諸君。ここはどこだ？』

『『『最期の審判を下す法廷だ！！』』』

『異端者には？』

『『『死の鉄槌を！！』』』

『男とは？』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの！！』』』

『宜しい。これより――――――二一Ｆ異端者審問会を開催する！』

「・・・やっぱり来たかＦＦＦ団」

優子の肩から手を離し、ため息をつく。

「あちゃー。タイミング悪いね」

「・・・・・・いい雰囲気だったのに」

「・・・・・・・・最悪ね」

優子、霧島、工藤の怒りのボルテージがあがってきた。かく言う俺も最近のなかで最大にあがってきている。

せっかくの機会をぶち壊しやがってっ！！

地獄を見せてやろ――――

『浅月君っ。ここは私たちに任せてちょうだい』

『優子を連れて逃げて！』
『あなたたちだけじゃく、私たちも頭に血が上ってるんだから！』

「Ａクラスの皆っ！！」
「・・・・・女子だけだけど」
「むしろ男子のやつらがＦクラスに教えたんじゃない？」

目をそらす男子生徒十数名確認。ってほとんどじゃねぇかよ！！

「・・・ちっ仕方ない。Ａクラスの女子。後は頼んだぞ」
『『『任せて！！私たちにかかったらＦＦＦ団なんてへっちゃらよ！』』』
「そいつは頼もしいな。優子！」
「はぁ・・・。結局最後まであわただしいのね」

優子に手を伸ばすとため息を吐きながらもしっかりと握り返してくる。

「行くぞ優子！」
「頼んだわよ雅夜！」

優子を抱きかかえて――俗にいうお姫様抱っこで――窓から飛び出す。三階の高さがなんだってんだ！！

ドンッ

一瞬だけ浮遊状態になったが、すぐに地面に着地する。足に来る衝撃はそのまま耐える。

「大丈夫か優子？」
「ええ、もちろん」

安否を確認してすぐに校門へと駆け出す。今日はもうサボりだな。

「っと、これ以上先は通行止めだ」
「・・・・・・・・・・通行料は雅夜の死体だ」

が、校門の手前で雄二と康太が出てくる。

「・・・無駄に勘がいいから困るなこいつらは」
「先周りされてたのね」

けど、ま。この二人だからこそ問題ないんだよな。

「・・・・・・雄二。なにしてるの？」
「くっ。翔子か・・・！」
「やっほー、ムッツリーニ君」
「・・・・・・・・・・工藤までもかっ・・・・・・・・！」

それぞれ二人にとって一番てこずる相手はこっちの見方だ。
どうやってここまで来たのかわからない――――わけはない。

後ろを振り向く。

――――さっき地面に降りたとき、正面玄関からあの人が走ってきたのを確認している。あの人だったなら、この二人なら三階から飛び降りても受け止めてもらえるはずだ。なにせあんだけ頑丈な体をしているんだからな。

そこにはやれやれといった顔をしている西村さんがいた。

「・・・・・雄二は任せて」

「ムッツリーニ君も任せてもらっても構わないよ」

「ああ。後は任せた！」

「ありがとね二人とも！」

あらためて走り始める。

ん、待てよ！！

学校から出るのはいいが、その後どうする？家に帰るには商店街や駅の近くには行かなきゃならないから、人目につくのは絶対だ。ならそこで厄介ごとが生じる可能せ――――

「雅夜っ！！後ろから車が来てるわよ！」

「マジかっ！？」

くそっ！！学校から出てすぐアウトかよ！！どうする、どうする！？

考えてる間もなく、キキッー！と車が俺たちのすこし前で止まる。

そして・・・

「なにやってんだ雅坊？」

「「榊さん！？」」

「よっ。嬢ちゃんも一緒なのか？」

「なんで榊さんがここに？」

「ん？暇だったからな。ちとドライブしてたところだ。それより急いでるのか？」

「あ、ああ。ちょっと学校でやらかしたんでな。今日は帰ろうかと

思ってたんだ」
「ふ～ん・・・・・・。事情ありってことみたいだな」
学校のほうから待てーっ！という声が聞こえてくる。流石にＡクラスの女子だけではＦＦ団全部を相手にしきれなかったみたいだ。
「ならよし。後ろ乗ってけ！」
～すこし戻ってｓｉｄｅ秀吉～
「皆！！Ａクラスで浅月が木下優子に告白したらしいぞ！！」
『『『『ぶっころせーっ！！』』』』
突然、Ｆクラスのメンバーのほとんどが覆面をかぶって教室を飛び出していった。
「・・・気のせいか？今雅夜が告白したって聞こえたんだが」
「うむ。気のせいじゃないじゃろうな。ワシもはっきりと聞こえたのじゃ」
うむ。どうやら作戦はうまくいったようじゃな。

「よかったですね優子ちゃん」
「そうね。おめでとう優子」
「本当なら僕も殺しにいくところだけど、雅夜なら素直におめでとうって言えるね」

姫路、島田、明久が祝福の言葉を言う。姉上も雅夜もいい友達をもったもんじゃな。

「・・・・・・・・・・雄二。行くぞ」
「ああ、わかってる。このままAクラスに行っても逃げられるだけだからな。先回りして校門に行くぞ」
「・・・・・・・・・・了解」
「・・・お主らもすこしは祝福できぬのかの？」
「「俺たちは他人の幸福が大っ嫌いだ！」」

そう言い残して教室を出て行く雄二とムッツリーニ。
はぁ・・・。まったくこやつらはと来たら・・・・・・。どうなっても知らんぞ？

「それにしても、やっと、じゃな・・・・・・」

窓に近寄り外を眺める。もう雄二たちは校門までついておるのか。早くないかの？

さきほど雄二が校門に先回りするといっておったから、雅夜と姉上が外に出てくるはずじゃ。

と、思った瞬間――――

ドンッ！！！

Aクラスの窓から雅夜が姉上をお姫様抱っこしながら飛び降りた・・・・・って

「なにをやっておるのじゃ!?」

「ん?どうしたの秀吉」

後ろで明久が話しかけてきておるが、今はそれどころではない!!雅夜と姉上は大丈――――普通に走り始めておる!?三階から飛び降りたのに!?

「あ、あそこ見てください明久君!」

「あれは・・・雅夜!?・・・とお姫様抱っこされてる木下さん?」

お、雄二たちと遭遇したようじゃな。さて、雅夜はどうするのかのう?

「ま、待ってアキ!あっちも見て!」

「鉄人!?どうしてあんなところに!?」

「アキ、そっちじゃないわ!!Aクラスの窓のほうよ!」

「霧島さん?って、飛び降りた!?工藤さんも!?」

「なるほど・・・。雄二には霧島。ムッツリーニには工藤を相手させるつもりじゃな」

どちらも相性最高のカードじゃ。これなら雅夜も大丈夫じゃろうな。

ピピッ

「む・・・。こんなときにメールかの」

せっかくいい場面じゃというのに。いったい誰じ――由美？
メールには添付ファイルがある？

「どうしたの秀吉？メール？」
「うむ。西村先生は今、下におるからの今のうちに確認しておこうかの」

さて・・・・・なんじゃ、本文はないのかの？では画像はなんなんじゃろおおおおおおっ！？

未来の『ピーーー』な画像。

「なんじゃこれはっ！？」
「うわっ！！なに！？なにが起こったの！？メールになにかあったの！？」
「な、なななななんでもないのじゃ！！」

いったい何がしたいのじゃ由美は！！すぐに返信――またメール！？しかもまた添付ファイル付き！？

「こ、今度はなんなじゃ・・・・・・！！」

プルプルと震える手でファイルを開く・・・・・・っ！！

未来の『ズキューン』な画像。（↑先ほどより危ない）

「なにがしたいのじゃーーーっ！！」
「また！？いつもの秀吉からは考えられない状況なんだけど！？」
「どうしたんですか木下君！？」
「いきなり雄叫びあげてどうしたのよ！？」

明久たちがなにか喋っておるが、今は関係な――――またメール！？

「・・・・・・・・・（ダラダラダラダラ）」
「ねぇ大丈夫秀吉！？汗の量が半端ないんだけど！？」

ピッ

未来の△＆％▼＃@$◎□――――――――――――

「ふぬぉおおおおおおおおおおおっ！！！！！？？？？？（ブシャアアアアアアアッ）」
「秀吉ーーーーっ！？」

思わず鼻血が飛び出る。しかもいつものムッツリーニなみに。

「だ、大丈夫ですか木下君っ！？」
「いつものアンタらしくないわよっ！？」
「むしろなにを見たらこうなったの！？」

ワシを心配してか、三人が駆け寄ってくる・・・・・。

「だ、ダメじゃ！！今のワシに近寄ってはならぬ！！」

教室の隅まで後ずさりして移動しる。今、ワシのケータイを見られた――またメールじゃと！？

題名は・・・・・・『これがラスト♪取って置きのを送るね♪』

「今までのは取って置きじゃなかったのかの！？」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

明久たちはポカーンとした顔をしておるが、今はこっちのほうが一大事なのじゃ！！

意を決心して、ファイルを開く・・・。此処まで来たらもう自棄じゃ！

西村先生のシャワーシーン

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！」

「「「秀吉（木下（君））ーーーーー！！？？」」」

番外・エイプリールフール編（後書き）

なんかＥＤっぽくなってないか？（笑）

この物語はＩＦです。本編とはまったく関係ありません。

だから雅夜の告白も本編では別であります。

感想お待ちしております。

第１１１話

「なんで雅夜が家にいるの！？」

家を出る時間まで時間が余っていたので、秀吉としゃべって時間を潰していたときに優子が突然驚きの声を上げた。って

「「いまさら！？」」

さっき普通に話してだろ！？

「いまさらってなによ！違和感なさすぎてスルーしかけただけよ！」
「・・・いや、違和感はあったじゃろ」
「・・・むしろ違和感しかねぇだろ」
「うるさいっ！／／／」

恥ずかしいのか、顔を真っ赤にして怒鳴る優子。
ん。朝から良いもの見せてもらえたな。

「それで。優子は昨晩のことはどこまで覚えてるんだ？」
「昨晩・・・？えーっと・・・・・・姫路さんと一緒に公園について、喉が渇いたから飲み物をもらって・・・ダメね。これ以上は思い出せないわね」
「・・・はぁ。やっぱりか」
「あらあら。話は本当だったのね」
「・・・まさか姉上がそこまで酒に弱かったとはの」

って二人とも俺の話信じてなかったのかよ！

「お酒・・・。・・・・・・ねぇ雅夜。もしかして、またなの？」
「ああ。そうだ。優子は二日連続で酔っ払ったぞ」
「・・・はぁ～」

頭に手をあててため息を吐く優子。心境は、なにやってるのよアタシはってところか？

「あらあら。二日連続でってことは一昨日の夜もそうだったのかしら？」
「えぇ。差し入れでチューハイを数本もらったので。チューハイ程度の度数なら酔わないと思ったんだがな・・・」
「酔ってしまった、のね」
「その前にお主は未成年じゃろ！なぜ普通に酒を飲んでおるのじゃ！？そして、なぜ差し入れに酒が送られるのじゃ！？」
「送り主が榊さんだから仕方ない」
「榊さんとは誰じゃ！？」
「戌井榊さん。文月学園の警備員よ」
「警備員が未成年に酒をすすめたのじゃか！？」

子供心がまだ残ってるような人だからな。

「あらあら。また懐かしい名前が出てきたわね」
「「「って、知り合い！？」」」

恋さん、榊さんを知ってるのか！？

「高校のころのクラスメイトよ」
「・・・確かに。言われてみれば同い年っぽいな」

「・・・そうね。同い年って言われてもわからなくもないわ」
「ワシはその榊さんを知らぬからの。なんとも言えんのじゃ」
ん?待てよ・・・・・・榊さんと恋さんが同じクラスってことは・・
・
「父さんとも同じクラスじゃねぇのか?」
「へ?雅夜のお父さん!?」
「雅夜の父上じゃと!?」
「ああ。もともと榊さんとは父さん繋がりで知り合ったんだ。どうですか恋さん。覚えてますか?」
「浅月君のお父さんねぇ。浅月、浅月・・・」
頑張って思いだそうとする恋さん。
が、流石に20年近くも前のことだから覚えてないのか、すぐに顔を横に振る。
「ね、浅月君。お父さんの名前はなんていうのかしら?」
「風雅。浅月風雅(ふうが)です」
「・・・あらあら。思い出したわ。風さんね」
名前を教えると、父さんの事をあだ名で呼んだ。
名字ではなくあだ名のほうで呼んでいたようだ。
「どうやら、ホントに父さんの同級生みたいですね」
「ええ。風さんは今、海外を飛び回ってるだったわよね?確かに風さんならそんなことやってても不思議じゃないわ」
「母さんが言うには昔と全然変わってないそうですよ」
「あのころの風さんのまま、ね・・・。なんだかまた会いたくなっちゃったわ」

「だったら帰ったときには連絡しましょうか？」
「お願いしようかな」

偶然ってあるもんなんだな。まさか優子達の母親が俺の父さんと同級生だったなんてな。

「・・・・・ねぇ雅夜。アタシ達、話についていけないんだけど？」
「うむ。姉上の言う通りじゃ」
「っと、すまん。別にそういうつもりじゃなかったんだが」

つい、な。

「とりあえず話をまとめると、警備員の榊さんと俺の父さんは高校の時のクラスメイトで恋さんも同じクラスだってこと」
「風さんって言うのは？」
「俺の父さんのあだ名。ふうがってなんだか呼びづらいから風って呼ばれてたらしい」
「へ～・・・」
「でも皆は『子供は風の子、元気な子』から取って風って呼んでたのよね」
「・・・なんとまぁ」

そうなのか！？と、驚くところだが、父さんならそうであってもおかしくないので驚かない。

「これで大体は理解し――――っと、そろそろ（学校に行く）時間だ」

そう言いながら席を立つ。

「む。そうじゃな」
「切りのいいことだし、今日はここまでね」
「今日は！？まだ続きがあるのか！？」
「あらあら。行ってらっしゃい」

慌ただしそうに出る準備を始める二人。俺は元から準備など必要なく――そもそも手ぶらで泊まりになった為――なので恋さんと話しでもして時間をつぶすか。
言っておきたい事もあるし。

「恋さん」
「あら。なにかしら浅月君？」
「ありがとうございます」
「どれのことに対してのかしら？泊まっても良いって言ったこと？それとも優子の部屋で寝かせてあげたこと？それとも――」
「話をそらしてくれたことに、です」
「・・・・・・」

俺の言葉に黙る恋さん。

なぁに。話はすぐに終わりますよ。

第１１１話（後書き）

意外なつながり発覚（笑）

若干、暴走しかけてる貴雅がお送りしました。

感想お待ちしております。

第１１２話（前書き）

エイプリール編のラストを加筆しました。

よかったら見てみてください。

第１１２話

「違いますか？」

「・・・・・なんでそう思うのかしら？」

「だって、俺の父親を忘れてたなんて嘘ですよね？いっちゃあなんですが、あのクラスの人なら父さんのことを忘れるわけない」

「あらあら・・・・・・」

そう。父さんたちがいたクラスの人なら必ずと言っていいほど忘れてるわけはないんだ。なぜなら・・・

「毎年高校の文化祭の日に同窓会が開かれる。ですよね？」

約２０年間。なぜ今まで続いているのか不思議だし、なぜか全員集まってしまうというのも不思議だ。

「・・・ええ、そうなのよね。誰が言い出したのかもう忘れちゃったけど、なんだかそういう決まりになっちゃったのよね」

「それては父さんも言ってましたよ」

「あらあら。風さんも相変わらずね」

「『たぶん俺がいいだしたことかも知れないんだが・・・』とも」

「あらあらあら（ゴゴゴゴッ）」

ちょ、ストップ！笑顔のままで殺気ださないでください！

「そ、それに同窓会が無い場合でも知ってるはずですよね？」

「え？・・・・・もしかして、あのことも知ってるのかしら？」

「ええ」

ちょっと焦り気味の恋さん。まぁ、確かにあまり知られたくないような話だしな。てか優子と秀吉に知られたら大変なんじゃないか？

「そ、それを話すのは簡便してもらいたいかしら・・・ね？」

「・・・・・わかってますよ。向こうには聞き耳立ててる優子と秀吉がいることですしね」

『『！？』』

「・・・あらあら。二人ともそこでなにしてるのかしら？」

俺が言うと、またも恋さんから殺気があがった。

扉の向こうでは秀吉は逃げ出そうとしてるが、ため息をついている優子に捕まってるみたいだな。

「支度をしてきてみれば、こんな話をされてるのだもの。誰だって、盗み聞きしたくなるでしょ」

「ちなみにどこら辺から聞いてた？」

「毎年文化祭の日に同窓会が開かれる、あたりからかしらね」

「ほとんど最初っからじゃねぇか」

「うむ。毎年その時期になると母上と父上が一緒に出かけるのはわかっておったが、まさかそんなことじゃったとはな」

一応、恋さんは隠してたみたいだな。

「アタシとしてはお母さんが隠したがってる話のほうが気になるけどね」

「え、えーっと・・・母さん的には話したくないわね」

「雅夜は母上がなにを隠そうとしているのか知っておるのかの？」

「たぶん知ってるぞ」

まぁ、優子たちに隠したいことなんてアレしか思い浮かばないが。

「じゃあ教え「ダメ」教えてちょーだい雅夜！」
「恋さん振り切りやがったぞコイツ」
「ワシも聞きたのじゃが、もう時間じゃ。今日は諦めるのじゃぞ姉上」
「あ、ホントね。なら仕方ないわ。また今度ね」

そう言って家を出て行く二人。諦めが悪く、諦めが良いな。

「だから！今度があってたまるかってさっきも言っただろ！」

そういいながら席を立つ。だが、どうせ聞いちゃいないだろうな。

っと。そういえば

「そうそう。恋さん・・・・・・いや、旧姓綺堂恋さん。今後ともよろしくおねがいしますね」
「っ！！・・・・・・・・あらあら。そうゆうところは風さんにそっくりね。やっぱり息子なだけあるわ。優子と秀吉ともどもよろしくね」

父さんと似てる、か・・・。否定はしないな。

優子と秀吉、俺の三人で登校。・・・ふむ。ＦＦＦ団に見られたら襲われそうだな。

「で、結局母さんが隠したいことってなんだったの？」
「どんな話なのかだけでよいから教えてくれんかの」

やはり気になっていたのか、木下家を出て5分もしないうちに聞いてきた。

「ん～、まぁ簡単に言うとアレだ。恋さんと芳樹さんの馴れ初めの話だな」
「ふ～ん。母さんと父さんの馴れ初めね・・・。確かに、隠したくなるような話ね」
「・・・む。なぜ雅夜が父上の名前を知っておるのじゃ？」
「俺の母さんがお喋り好きだからな。それに芳樹さんと恋さんの馴れ初めはあのクラスの中なら結構有名だぞ」

きっかけがきっかけだけにな。クラス内じゃ大盛り上がりって言ってたし。

「・・・・・雅夜は教えてくれないのよね？」
「ああ。だから優子がそんなに目をキラキラとさせても話さないぞ」
「そのうち母上と父上が話してくれるじゃろう。それまでの辛抱じゃな」

それがいいだろう。俺の口から言うことでもないしな。

「でも秀吉は気にならないの？」
「気になるが、ここで雅夜に詰め寄るまでのことじゃ――――」

「っと。秀吉、優子。すこし黙っていてくれ」

制服のポケットから録音レコーダーを取り「お主。なんでそんなものを持っておるのじゃ！？」だして、

『好きです、明久君』

ピッ――――録音しました。

「よし。録音完了」

通りの向こうから出てきた姫路の声を録音する。タイミングバッチシだな。

「え!?・・・・・・・・・浅月君っ!?それに木下君に優子ちゃんも!?」

第１１２話（後書き）

母親の木下恋さん（旧姓綺堂）と父親の木下芳樹さん。

二人の馴れ初めとはいったい・・・・・・！？

感想お待ちしております。

第113話

「え!?浅月君っ!?・・・それに木下君に優子ちゃん!?」

お、気づかれたみたいだな。まぁバレるように録音したから当然かもしれないが。

「お、おはようなのじゃ姫路」

「お、おはよう姫路さん」

「おはよう姫路」

「あ、えと、その・・・・・・!!」

ピッ『好きです、明久君』

「ひやぁあああああああっ!!!??」

さっきのを再生すると顔を真っ赤にして叫び声をあげる姫路。

「や、やめるのじゃ雅夜!ここは聞かなかったことにするほうがよいのじゃ!!」

「聞かなかったってこれのことをか?」

ピッ『好きです、明久君』

「はぁうううっ!!」

「ダメよ雅夜!!これ以上は姫路さんが大変なことになるわ!!」

「大変なことって・・・こういう風にか?」

ピッ『好きです、明久君』

「もうやめてぇえええええええ!!!」

手をぶんぶんと振りながらこっちに迫ってくる姫路。やばい・・・っ!これは予想以上に面白い!まさか姫路がここまで面白い行動をるとはな。

「お願いですから、消してくださいっ！！」
「こんなに綺麗に取れてるのにか？」
ピッ『好きです、明久君』
「お願いですぅううう！！」

レコーダーを上にあげると、姫路はとろうとしてピョンピョンと飛び始める。

「・・・・・・はぁ。そろそろやめなさいよね雅夜」
「ん、了解」
ピッ『削除しました』
「・・・へ？」

優子に言われてすぐに消す。十分十分。これだけ遊べたら十分だ。

「んじゃ、学校行くか」
「え！？」
「まったく・・・。雅夜が姫路さんで遊んでるからよ」
「あれ！？」
「やれやれ、なのじゃ。雅夜が遊びすぎるのがダメなんじゃぞ？」
「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！！」

学校に行こうと足を進めようとすると、姫路に止められた。

「ん。どうした姫路？さっきのやつならもう消したぞ」
「どうしてですか！？」
「・・・いや、姫路が消してと言っておったじゃろ」
「そ、そうですけどっ！！」
「姫路さんはデータを消してもらえてよかった。雅夜は遊べて、ア

タシと秀吉はご馳走様。それでいいじゃない」
「そ、それもそうなんですけど・・・」
待て。優子と秀吉の部分は問題あるだろ。
「どうして消してくれたんですか？」
「決まってるだろ。音声の中に明久の名前が入ってるからな。こんなんじゃ、ムッツリ商会でも商品として扱われないだろ」
まぁ、明久の名前の部分だけを消すことぐらいできるが。
「で、本音は？」
「これ以上姫路を弄っても面白くなさそうだから」
「でしょうね」
やれやれと首を振る優子と秀吉。姫路はポカンとしてる。
なんだ？そんなに以外だったか？
「そういえば良いの？姫路は今日日直ではなかったかの」
「え、あ、はいっ。そうでした！」
「んじゃ、いってら」
「頑張ってね姫路さん」
「はいっ。ありがとうございます」
と、頭を下げてから走っていく姫路。騒がしい奴は見てて飽きないな。
「姫路さん、行ったわね・・・・・。雅夜。ちゃんと消しなさい」
「はいはい。わかってますよ」
「なんじゃと！？」

レコーダーを操作して・・・よし。これで消えた。

「やっぱり優子は気づいてたか。どうしてだ？」

「愛子が良く使ってるからよ。録音するのには簡単操作――――それこそ一つのボタンを押すだけでいけるけど、消すのにはちゃんと操作しないといけないんでしょ？」

「お見事。その通りだ」

優子の頭を撫でる。撫でると恥ずかしそうに顔を背けるのがまた良い。

「となると、さっきの『削除しました』というのはなんじゃったのじゃ？」

秀吉。機械の音声まで声まねしなくていいからな。

「それも録音させてのを再生しただけでしょ？」

「正解。ほかにも『コピーしました』や『再生する音声がありません』みたいな奴もあったりする」

「・・・用意周到じゃな」

「これぐらい基本だぞ？」

ま、盗聴用のには必要ない機能だから康太はあんまり使わないみたいだけどな。

第113話（後書き）

第二巻・完。

やっと終わったという気持ちでいっぱい。

一巻のときよりも長かった・・・・・・。

軽く二倍近くかかってる気がする（苦笑）

感想お待ちしております。

第１１４話（前書き）

三巻に入る前に、短編をいくつかやろうと思います。

まず最初はやり忘れていたラブレター騒動の話です。

原作では一巻と二巻の間でしたが、『バカノリ』では二巻と三巻の間に起こった出来事として書いていきます。

では、始まります。

第１１４話

とある日の放課後（放課後と言っても夜に近い時間帯だが）。

「優子、Ｆクラス（ここ）はなんかあるか？」

「いつもどおり。無茶なのなら沢山あるわよ」

「ん、了解」

黒板に頑張れと書いて後を発とうとする。清涼祭のときと同じで、優子と一緒に仕事をしているところだ。

「あ、待って雅夜。『教卓がそろそろ壊れそうだ。適当にでもいいから補強しておいてくれ。西村』だって」

「西村って、西村さんじゃねぇか。それぐらい自分でやれよ」

「なんか事情があったんじゃない？適当って書いてあるし」

「それもそうか。あの人はいつも大変そうだしな」

主にＦクラスの連中の対処だとか、雄二と明久たちの相手だとかで。

「で、そうするの？」

「一応やる・・・・・・が、一度部室に道具取りに行かなきゃな無理だな」

「後回しにする？それとも先にやる？」

「先に」

「わかったわ。じゃ、行きましょ」

後残ってるのは一年の軽いやつだからな。先にやっておいたほうが・・・・・・・・ん？

「優子、ちょっとストップ」
「？どうかしたの？」
「いや、なんか落ちてるからさ」
ちゃぶ台の下に落ちていたピンク色の便箋を拾う。
「あら、かわいい便箋じゃない」
「そうだな」
確かに可愛らしいかもしれないな。だが・・・
「なんでこんなものがＦクラスに？」
Ｆクラスの男どもの持ち物であるわけないから、必然的に姫路か島田のものということはわかるんだが。
「優子。どう思うコレ？」
「島田さんからイメージからしたら違うわね。たぶん姫路さんのものね」
「裏をかいて秀吉の、という考えかたもあるぞ」
十中八九姫路ので正解だと思うが、冗談を言ってみる。
「それはないわね。秀吉はこういうことは家でこっそりとやるタイプだわ。学校になんて持ってくるわけないわ」
「誰かにもらったとかは？」
「見た感じ女の子が書いたラブレターでしょ？あの子は男からしかもらわないわ」
「まぁ、そうだな。・・・・・ん？ラブレター？」

「あれ、違うの？てっきりそうだとばかり思ってたけど」
「いやあってると思う。・・・・・・そうかラブレターか。ラブレター、ね・・・・・・・」
だんだんと顔がにやけてくる。そういえば、そんなこともあったなぁ・・・。

「ちょ、ちょっとどうしたのよ雅夜。ラブレターって聞いた途端にやけ始め・・・て・・・・・ラブレター？」
一瞬驚いたが、すぐに優子もにやつき始める。きっと、俺たちの思ってることは一緒だろう。

「教卓の補強なんて今度だ！」
「ええ！すぐに部室に戻りましょ！！そして――」
「「ラブレターの中身を見るぞ（わよ）！！」」
よっしゃあ！いい肴が手に入ったぞ！

「さて。便箋を綺麗にあけて、中にあった姫路から明久宛のラブレターを読んだのですが」
「誰から誰宛なのかは初めからわかってたけどね」

優子はテーブルをはさんで俺の向かい側に座っている。テーブルの上には件の封の開いた便箋と手紙が置いてある。

「・・・・・・・・どうするコレ？」
「どうしよっか・・・・・・？」
「・・・すっごい罪悪感を感じるんだが」
「アタシもよ・・・。・・・・・・内容が内容なだけに、感じらずにはいられないわ」

ガチで書かれてたからなぁ・・・。さっきまでの自分を殴ってやりたい。

「それになぜか、見る前にコピーまでしちゃったのよね・・・」
「言うな。思い出したくない」

テンションがあがっていたとはいえ、なにやってるんだろ俺。

「ええい！いまさら後悔しても遅い！今はこの後どうするかを考えるべきだ」
「そうね」

ふむ。・・・・・・・なら

「いくつかの対処法を思いついたんだがどれにするかは優子に決めたもらおう。いいか？」
「ええ、いいわよ」

「1．見てしまったことを素直に姫路に謝る。
2．見なかったことにしてラブレターを元あった場所に戻す。
3．　〃　　Fクラスの黒板に貼る。
4．　〃　　明久の下駄箱に入れる。
5．知らないことにして、ラブレターは部室に保管。
どれがいいと思う？」
「4と5番の複合。本物のラブレターは部室に保管して、コピーしたものを便箋の中に入れて直して、吉井君の下駄箱に入れる」

わぁーお、即答でそれかよ。だが、それでこそ優子だ。

「んじゃ、それでいくか。予備のためにもう一枚コピーしておくけど、問題ないよな？」
「いいんじゃない？一枚も二枚も変わらないわよ」
「それもそうだな」

こうして夜は更けていった・・・・・・・・・

第１１４話（後書き）

３．５巻の『僕と暴走とラブレター』前哨戦！

そういえば、原作だと誰が明久の下駄箱に入れたんでしょうね？

感想お待ちしております。

第115話

次の日の朝・・・・・・

カッ　カッ　カッ

誰かが廊下を歩く足音で目覚める。

ガチャガチャ――――――――カチャ

「入るぞ浅月。起きてるか？」

「・・・今起きたところですが」

西村さんが入ってきたため、とりあえず上半身を起こす。

「なにか朝一で仕事ですか・・・？」

ふぁ～・・・とあくびをかきながら西村さんに尋ねる。時間は・・・・・7時か。優子はまだ起こさなくていいな。

「すまんな。昼頃に古いサッカーゴールの撤去をしてもらうんだが、ネットが別口で処分することになっているんだ。外して体育用具室にでも置いといてくれ」

「サッカーゴール？・・・・・・ああ。あの校庭の隅にあるやつか。ゴールのほうはどうするんですか？」

「ゴール自体は俺が後でやっておく」

「ん、そうですか。りょーか・・・・・・っと。やっぱやめとくわ」

「む。なんでだ？」

「外で待っていたら朝錬に来た生徒とかが声かけてくると思いますので、そいつを適当に使ってください。正直メンドイんで」

朝っぱらから面倒な仕事はしたくない。それに此処には優子もいることだしな。

「そうか。俺も無理にやらせるつもりはない」

「ありがとうございます。んじゃ、俺は8時まで二度寝するんで」

「わかった。くれぐれも寝すぎることのないようにな。・・・・・・・・ところでなぜ木下優子がいるんだ?」

「優子?ああ、俺の手伝いですよ。心配しなくても優子の親からちゃんと許可とってますから」

「いや、そういうことではないんだが・・・・・・・・・・」

ふむ。やはり男女が一緒に泊まってるのは問題だよな。さて、どうやって説明したものか。

「西村さん。これにはふかーい意味が――――」

「・・・まぁ、別に大丈夫か。お前らなら問題を起こしそうにないしな」

「って、えええぇぇぇぇっ!?」

「Aクラスの優等生にFクラスの苦労人。お前達はしっかりしているからな。ヘタなことはしないだろ」

「いやいやいや。普通に問題あるで・・・・・・・・・・あ、そういえば」

もしかして西村さん、優子が意外と大胆だったり酔うと大変なことになること知らないのか?いや、絶対知らないな。知ってたら大丈夫なんていえないしな。

「では、俺はゴールでも片付けてくるとするか」
「いってら～」
俺の発言になにも突っかからずに去っていく西村さん。さて、俺も二度寝するか。

「・・・・・・・・・・て・・・・・・・・・・きてなさいよ・・・夜・・・・・・・・・・・ってば」
体をゆすぶられている。なんだよ、まだ眠ってたいんだが・・・。
「ほら、も・・・・・・・・間よ。そろ・・・ろ・・・・・・・・・・・しないと・・・・・・・・・・」
いいながら俺の体を揺さぶり続ける。ん～・・・だんだんと意識がはっきりしてきたな。この声は優子だから・・・。そろそろ時間なんだな。
「いい加減、起きなさいよ。まったく、もう・・・・・・」

目をあけないで、寝たふりを続ける。朝の布団の拘束力は強力だな～。やれと言われるとやりたくなくなるのは自然の摂理。コレを考えた人は偉大だな。

「・・・あ、そうだ！ふっふっふっ・・・」

なにを思いついたのか、ゆするのをやめて布団に乗っかってくる優子・・・・・馬乗りで。

オーケー、落ち着くんだ俺。この先の展開が読めてきたぞ。

「起きないなら～。おはようのキ、キスで起こしてあげましょう／／／／／」

目をあけなくてもわかるな。絶対今、優子の顔は真っ赤になってるね。

そしてだんだんと顔が近づいてくる気配。

さて、と。

「おはよう優子」

「ふぇ！？」

俺の顔に優子の髪の毛がかかったので、目をあけて優子を至近距離で見つめる。案の定驚いた顔がそこにはあった。

「なぁ優子。知ってるか？」

「な、なにをかしら」

「相手が気づいてないと思ってやった行動って、実際相手が気づいてたらすっげぇ恥ずかしいんだよな」

「っ！！？？／／／／／

「いってぇえええええ！！」

思いっきりビンタを喰らいました。初動が見えなかったんだが・・・。

「起きてたならさっさと起きなさいよね！！」

「（サスサス）普通に起きたらつまんないだろ」

「だったらもっと違う起き方があったでしょ！あ、アタシにキスさせるのじゃなくてさ」

「キスしようとしたのはお前だろ！？俺がさせたわけじゃねぇだろ！」

ベットから降りて準備をしながら言い合う。こっから教室まで徒歩ゼロ分。秒単位でつくから予鈴で出ても余裕で間に合う。

「しかたないでしょ！雅夜の寝顔なんて始めてみたんだから！！」

「寝顔みたらキスしたくなるのか！？」

「ねぇ、雅夜。自分の寝顔だから見たことないと思うけど、雅夜の寝顔ってすっごくかわいいのよ。なんていうか、こー・・・無防備であどけない寝顔？」

そりゃあな。布団で寝てるときは基本はそうなるだろうな。ってか

「まんま優子の寝顔みたときの俺と同じ感想だな」

「にゃ！？／／／／／／そ、そんなことない・・・わよ・・・・・・」

と、そっぽを向く優子。おー、照れてる照れてる。朝からいい物見せてもらえたな。今日はいい一日になり――――いや、ならないか。

キーンコーンカーンコーン！

「お、予鈴だな。行くぞ優子」

「へ、あ、う、うん！」

第１１５話（後書き）

ラブレター騒動に行かなかった（苦笑）

次回からは始まると思いますので

感想お待ちしております。

第116話

「ぉはよー」

適当に挨拶しながらFクラスの扉を開ける。

「雅夜か。おはようじゃ」
「おはようございます、浅月君」
「おはよう、浅月」

秀吉、姫路、島田が返事を返してくる。見渡してみると明久と雄二、そして康太はまだいないみたいだ。

「昨晩は姉上がまた泊まったのじゃが、なにかあったかの？」
「いや、特になかったぞ。まぁ、しいていえば……久しぶりに疲れたぐらいだな」
「……なにがあったのじゃ？」
「企業秘密だ。そのおかげで二度寝はするし、優子に寝顔みられるし、おもいっきしビンタくらうわで寝起きも微妙だしな…」
「本当になにがあったのじゃ！？」

いらずらしたのは俺だとはいえ、すぐにビンタするのは止してもらいたいところだ。

「……親公認でお泊まりしてるってなんなのよ」
「……木下君も普通に対応してますしね」

「良いのかの雅夜。姫路と島田がなにた言いたそうじゃが」
「ほっとけ。俺はむしろＦＦＦ団の連中が無言で武器の手入れを始めてるほうが問題だ」
ったく…。どうせ返り討ちにあうだけなんだからいい加減諦めてもらいたい。
「はぁ……むっ。来るぞ」
「ん？なにが――――」
秀吉がなにかを言おうとした瞬間、教室の前後のドアが同時に開かれ、
「セーフ！！」
「もうすこし静かにはいれバカ久」
「ＨＲを始めるぞ。全員席に付け」
前からは西村さん、後ろからは明久と雄二が入ってくる。
「よく三人が来るとわかったのう」
「ん、違うぞ秀吉。四人だ」
「……よく気づいた」
「ムッツリーニ！？お主いつのまにそこに！？」
「俺が来るぞっていった時。明久たちが入ってくるタイミングよりはすこし前だな」
「……俺もまだまだみたいだな」
「……気配もなく教室に入ってくるムッツリーニと、それに気づく雅夜も普通ではないの」

歩く変声期のお前も普通じゃないけどな。

「相沢」「はい」「浅月」「んー」「井上」「はい」……

毎朝恒例の出席確認。いつもと同じ平穏の時間。が、はっきりといって怠い。

……「久保」「はい」「近藤」「はい」「斎藤」「はい」

だが、そんな時間もこれまで。こつから先は――――――

「坂本」「……明久がラブレターを貰ったようだ」

『『『『『『殺せぇぇっ！』』』』』』

騒動（ひにちじょう）の始まりだ！

「ゆ、雄二！いきなりなんてことを言い出すのさ！」

「いいぞいいぞ！もっとやれっ！！」

「雅夜もなに煽ってるの！？」

いや、つい。

『どういうことだ！？吉井がそんな物をもらうなんて！』

『それなら俺たちだって貰っていてもおかしくないはずだ！自分の席の近くを探してみろ！』

『ダメだ！腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない！』

『もっとよく探せ！』
『……出てきたっ！未開封のパンだ！』
『お前は何を探してるんだ！？』
そもそもちゃぶ台のどこに隠すスペースがあるんだ？
「お前らっ！静かにしろ！」
怒号が飛び交ってるＦクラスを西村さんが一喝で静める。
「それでは出席確認を続けるぞ」
と、言いながら先ほどの続きを始める。
「手塚」「吉井コロス」「藤堂」「吉井コロス」「戸沢」「吉井コロス」
「みんな落ち着くんだ！なぜだか返事が『吉井コロス』に変わっているよ！」
「吉井、静かにしろ！」
「先生ここで注意するべきは僕じゃないでしょう！？このままだとクラスの皆は僕に殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ！」
「は？なに言ってるんだ明久。その程度ですむわけないだろ」
「不吉なこと言わないでよ雅夜！」
「新田」「吉井コロス」「布田」「吉井マジ殺す」「根岸」「吉井ブチ殺す」
明久の言葉は無視。この程度で不吉だって？某上条さんに謝れ。（↑すみません。ちょっとネタに走っちゃいましたｂｙ貴雅）
「……よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉学に励むように」

出席簿を閉じ、教室を後にしようとする西村さん。背中からは「いちいちお前に構っていられるか」という雰囲気が感じとれた。

「待って、先生！行かないで！可愛い生徒を見殺しにしないで！」
「吉井、間違えるな。お前は不細工だ」
「不細工とまで言われるとは思ってなかったよバカ！」
「授業は真面目に受けるように」
「先生待って！せんせーい！」

明久の叫びも空しく、去っていってしまった西村さん。さて、と。
一時間目が始まるまで残り……２０分ってところか？

第１１６話（後書き）

途中のネタに走ったのは後悔してない。

反省したら負けだと思ってる（キリッ

感想お待ちしております。

第117話

「アキ、ちょ～っと話をきかせてもらえる？」

やはりと言うべきか、島田がすぐに明久に詰め寄った。

「あ、あはは……。美波、顔が怖いよ？」

「手紙を貰ったの？誰からなの？どんな手紙なの？」

今の島田が怖いからなのか、ＦＦＦ団の連中は明久から一歩引いたところで戦闘態勢でいた。

「あー、えっと、そのー」

「いいからおとなしく指の骨を――――じゃなくて、手紙を見せなさい」

見せたところで指の骨程度ではすまないと思うんだが。

「あの、明久君」

と、姫路が後ろから明久に尋ねる。

「ん？なに？」

「その……できれば、なんですけど……私にも手紙を見せて欲しいです……」

私にも（・・・）と言ってるから明久が島田に見せるのは前提なんだな。それが、自分のとも知らずに…。

「その……ごめん」
「でも、でも……！」
「いくら姫路さんの頼みでも、コレばっかりは」
「でも、私は明久君に酷いことをしたくないんです！」
「ちょっと待って！姫路さんまで僕に暴力を加えることが前提なの！？」

なにをいまさら。

「皆、ちょっと落ち着け」

そんな中、雄二がパンパンと教卓の上で手を叩いた。ＦＦＦ団の連中もいったん雄二をほうを見る。さすがは代表。こいつらをしっかりと統率できてるな。

「今問題なのは明久の手紙を見ることじゃない」
「雄二……」
「問題は、明久をどうグロテスクに殺すかだ」
「すこしでも友人だと思った僕がバカだった！！前提条件が間違ってんだよ畜生！」

荷物をつかんで教室からダッシュで逃走する明久。

『逃すななぁっ！追撃隊を組織しろ！』
『手紙を奪え！吉井を殺せ！』
『サーチ＆デス！』
「そこはせめてデストロイで！」
「骨をか！？」
「やっぱりデストロイもなし！」

廊下に響いた明久の声に反射的に返事を返す。殺せじゃなくて壊せって言われたら、なにをって聞きたくなるよな？

「雅夜。階下はどうなってる？」

「ん、まず最初に開き教室にてB部隊とC部隊が濡れたネットからのスタンガンコンボで撃破されてるな」

「あの……」

PCで隠しカメラの映像を見ながら答える。

「その後遅れてやってきたF部隊とG部隊がトラップと明久からの直接攻撃によりあえなく撃沈。現在明久は図書室に潜伏中」

「そうか。図書室にはどの部隊がいる？」

「ちょっと……」

「DとE。っと、あと図書室の近くには康太が単独でいるな」

物陰に隠れて奇襲のチャンスをもち構えてる康太の姿を発見する。

アイツらしい。

「なるほどな。あとの連中はどうだ？」
「ＡとＢ部隊がやられた連中の救助にむかってる。それと、単独行動の木刀を装備した須川とライトグリ――――鬼の形相の島田。秀吉は真面目に教室で授業の準備中」
「すみません……」
「秀吉はうちのクラスの良心だしな。それに明久に危害を加えようとは考えてないからな」
「ああ、そうだな。……お、ＤとＥが本棚の下敷きになってやられた」

これで次は康太だな。

「ムッツリーニは……まぁ、問題ないか」
「…そうだな。交渉一つで簡単に済む」
「二人とも……」
「となると、あとは須川と島田か…。ここまで来るのも時間の問題だな」
「そうだな。って、言ってるうちに交渉終了。康太は教室に戻っていったぞ」

やはり、あっけなく終わったな。

「あのっ！！」
「うおっ！？どうした姫路。いきなり大声だして」
「珍しいもんだな、姫路が大きな声を出すなんて」
「二人が私のこと無視するからですよっ！」

無視なんてしてな――――ああ、そういえばさっきから何か言いたそうだったけど、雄二とずっと喋ってたからな…。

決して姫路の相手をするのが面倒だったわけではないぞ。

第１１７話（後書き）

たぶん、次回でラブレター編終わると思います。

……たぶん、ですけどね。

感想お待ちしております。

第１１８話

「んで。どうしたんだ姫路？」
「えっと、その、坂本君と浅月君はここに居ますけど、追いかけ回さなくていいんですか？」
「…お前も此処にいるだろ」
「わ、私はいいんですっ！」

いやいや、答えになってないからな姫路。

「追いかけ回さない理由、ね……。雄二説明ガンバ。俺はパスだ」
「押し付けるのかよ！？……まぁいい。姫路、理由は簡単だ。明久が考えることぐらい手に取るようにわかるからな」
「明久君の…考え…」
「そうだ。アイツのことだからＦＦＦ団の連中が追い掛け回したところで捕まえるのは難しい」
「そうですね」
「そこで、だ。だったら追いかけ回さないで、待ち伏せをするにこしたこともない」
「それで此処なんですか？」

そう言って後ろを向いて、屋上に続く階段を見る。

「ああ。アイツのことだから告白スポットである屋上（ここ）に下見もかねてくるはずだ」
「告白スポット？そうだったんですか、初めてしりました」
「ちなみに屋上で告白した生徒は文月学園創立から１００回を軽く超え。今年じゅうには２００に到達しそうな勢い」

調べておいてあるデータを見ながら言う。

「ここで告白したうち、成功した回数８９件。全体の約４割と高め、割と実績のある言い伝え」

きちんとした言い伝えは珍しかったので、詳細は調べつくてある。

「ちなみに告白した生徒のうち７０回近くが俺たちの学年のやつらなので、この成功確率を俺たちの学年のやつらが急激に下げていたりする」

うちＦクラスのやつらが６０回近く。どれも失敗に終わっている。

「あと、成功しなくてもその後いい関係にもっていけてるのも結構いたりする。友達から、みたいにな。完璧な失敗が一番すくな……かったんだがな。Ｆクラスの連中のせいで上がり始めてる」

ったく。これだと言い伝えも危なくなってきてるからな…。

「……実績のある言い伝えだったのか。すごいな」

「……そうですね。なんで知ってるのか気になるところですけど」

「調べれようと思えばワリと簡単に調べられるぞ。中でも男から男、女から女、生徒から教師、教師から生徒って言うのもすこしとは言え、あったことに驚いたな」

もちろん教師から生徒のやつには船越女史も入っている。

「あと、それと……」

「いや、もういい雅夜！！それ以上聞いたらマズい気がする！！」

「ん、そうか？」

「まぁ、いろいろと気になるところは沢山あるが聴かないほうがいいと、俺の本能が言ってるので聴かないことにする」
「わ、私も。なんだか怖いので、やめておきます」
なんだ。まだ面白いことはイロイロとあるんだがな。
「話がそれたな。戻すぞ。どこまで言ったっけか？」
「此処に下見をかねて明久君が来るというところまでです。でも、ラブレターを読むだけならトイレとかで読んだほうがいいんじゃないですか？屋上より気づかれにくそうですし」
「いや、そんな簡単なことに明久は気づかないはずだ。たぶん、此処に来てそのことを教えたら普通に「あ」とか間抜けな顔すると思うぞ」
「……たしかにしそうですね」
ん。違和感ないな。
「それで雅夜。階下はどうなってる？」
「おっと、忘れてた。えーっと…」
隠しカメラの映像を見る。島田のいる教室のほうには壁に倒されてるロッカーが、須川のいる廊下には床に転がって悶えてる須川の姿が見える。
「あらら。いつのまにか島田と須川もやられてるな。もう此処にくるぞ」
俺が言うと雄二と姫路が階段のしたを見る。
「やはりここまで来たか、明久」

「明久君、言うことを聞いてください」
「雄二に姫路さん……！」
「残念ながら俺もいる」
「雅夜まで……！」

三人で屋上を背に、明久を見下ろす。

「どうして僕がここに来ると？」
「屋上はこの学校の告白スポットだからな。単純なお前なら下見もかねてここに来ると思っていた」
「くそっ。さすがは雄二だ。僕の思考を完全に読んでいる」
「トイレにでも行けば、誰にも邪魔されずに読めるはずなんだがな」
「あ」

瞬間、吹いてしまった。だが雄二と姫路はどちらかと言うと呆れてるようだ。

「ごめん雄二。僕、ちょっとお腹が痛いから先にトイレに行ってくるね」
「まさか本当に思いついてなかったとは……」
「明久君、ずっと気付かなかったんですか……？」

訂正。可哀想な奴を見る目で見ていた。

「雄二に雅夜、どうしてそこまで僕の邪魔をするのさ！そんなことしても、二人にはなんのメリットもないはずなのに！」
「そうだな。たしかにお前の言うとおり、こんな行動は俺にとってなんのメリットもない。いや、それ以前に俺は、彼女が欲しいなんていう気持ち自体が全くない」
「だったら、どうして……？」

「そういう問題じゃないんだよ、明久。俺はただ、純粋に……お前の幸せがムカつくんだよ」
「アンタは最低の友人だ！」
「それに俺にはしっかりとメリットあるぞ？明久が愉快痛快に頑張る――――――藻掻く（もがく）姿をみるのは面白いからな。面白ければ、俺はいい」
「アンタも最低の友人だ！っていうか、今ダメなほうに言い直してたよね！？」

気にするな。些細なことだ。

「さて明久。『おとなしく手紙をよこせ』なんて野暮なことはいわねぇ。本気でかかってこい」

と、言いながら上着とネクタイを外す雄二。ワイシャツの上から見える筋肉は中の上程度の良い付き方をしていた。

「姫路。上着を持っていてくれるか？」
「あ、はい」

姫路に上着を持ってもらい、軽くシャドーをする雄二。シュッと鋭く風を切る音をだし、殺（や）る気を見せる。やはりと言うべきか雄二は喧嘩の玄人だな。

「明久君、やめておいたほうが……」
「心配ありがとう。けど、僕はやめる気なんてないから」
「そうですか……。わかりました、もう止めません」
「……ごめん。心配してくれたのに」
「いえ……。なんだか明久君らしいです」
「僕らしい？――――――っと。雅夜。雅夜はどうするの？」

「俺か？そうだな……。ここで明久と戦っても面白くないから、傍観者でいることにする」

階段に腰掛け、なりゆきを見守るポーズを取る。

「そう……ありがと。――――――姫路さん。コレ持っていてくれる？」

「あ、はい」

と、制服の上着を姫路に渡す明久。

「……明久」

「雄二、勝負だ！」

呆れたような目の雄二と拳を構えた明久。

「……お前バカだろ」

「へ？」

雄二の視線の先には、当然姫路の持ってる明久の上着。

「あ、あの、手紙がポケットに入ってるみたいなんですけど……見ちゃっていいんですか……？」

「ためらうことない。見ちまいな」

あらかじめ姫路の近くに来ていた俺は、姫路を煽ることにする。

「だ、ダメだよっ！戦わないでそれを見るのは反則だよ！」

「お前がバカなだけだろうが！やれ、姫路！その手紙を始末するんだ！」

スキを見せた明久を雄二が羽交い締めにする。

「……あれ？こ、これってまさか……？」

ポケットから手紙を取り出し戸惑う姫路。出した覚えのない自分が書いたラブレターがあるのに驚いているのだろう。無理もない。

「姫路さん」

「えっ！？あ、はい。なんですか？」

「僕にはわかってるよ。優しい姫路さんは手紙に込められた人の気持ちを踏みにじることができないってこと。だから、おとなしく――――」

「手紙を細切れにするんだ」

「違うっ！そうじゃない！雄二、卑怯だぞ！そうやって僕の台詞みたいにつなげるのは反則だ！」

「はいっ！わかりました！」

「いや、『はいっ！』じゃないよ姫路さんってあああああっ！そんなに丁寧に手紙を破かなくても！それじゃあもう絶対よめないよね！？返してっ！僕の幸せな未来と大切なラブレターを返してぇっ！」

明久の言葉を無視して手紙を破り続ける姫路。それはもう原型をとどめず、紙くずという名前になって廊下に散らばった。

「まさか、本当に姫路が破るとは思わなかった。……すまん、明久」

姫路の行動に驚いている雄二。さすがに予想できなかったみたいだな。

「せめてものわびだ」

「ありがとう、雄二。最後の可能性にかけて、この紙くずをつなぎあわせ」
「ほい、ライター」
「サンキュ。――――――未練をたってやる」

シュボッ　　メラメラメラ……

なんのためらいもなく火を付ける雄二。

「ってうそぉっ!?ここまでやった挙句、容赦なく燃やすの!?もうこれ１００%よめないよね!?僕の幸せの未来はどこいったの!?」
「明久。お前は知らなかっただろうが」
「なに!?なんでもいいから早く水を持ってきて!」
「俺はお前の幸せが大嫌いなんだよ」
「知ってるよバカ!ちくしょー!」

明久の必死の消化作業もむなしく、手紙は綺麗さっぱり灰になってしまった。ったく。

「明久。面白いマジックを見せてやる」
「……雅夜?」

燃えカスである灰を右手に集めて握り潰す。そして、左手の人差し指で右手を軽く叩きながら…ワン。トゥー。スリー。

「よっ、と!」
「「「!?」」」

先ほど燃えてしまったはずのラブレターを出す。

まぁ、ネタバラシをすると、あらかじめコピーしたもう一つのやつを取り出しただけなんだけどな。

「どうやったの雅夜!?って、そんなことは今はどうでもいいや!!ありがと雅夜!これなら手紙が読め――――」

「見ちゃダメですっ!」

バッ!　（↑姫路が明久からラブレターを取る）

ビリビリビリッ!　（↑また手紙を細切れにする）

シュボッ!　（↑雄二の手にあったはずのライターで火を付ける）

メラメラメラ……　（↑燃え落ちる手紙だったもの…）

「…ん、はぁっー…はぁっー…」

「「「……」」」

ものすごい形相で一連の出来事をすませた姫路を見ていた俺たちは、皆突然の出来事に動けずにいた。

「はぁっー…はぁっー……」

そんな俺たちをよそに、姫路は膝に手を付いて肩で息をはいていた。まるで長距離走を感想した人のように。

「……はっ!?え、えっと、ひ、姫路さん?」

「は、はい……。ふぅ……。なんですか明久君?（ニコッ）」

と、満面の笑顔で振り向く姫路。

「あの」
「はい（ニコッ）」
「い、今どうして」
「はい（ニコッ）」
「手紙をやぶ」
「はい（ニコッ）」
「やぶ」
「はい（ニコッ）」
「や」
「はい（ニコッ）」
「……やっぱりなんでもないです」
「そうですか？ならよかったです」

怖ぇえええ！！有無を言わせない勢いで明久を沈めたぞ！！女の笑顔は武器って言うけどこういうことを指すのか！？

「……さて、いい加減教室に戻るとするか」
「……そうだな。十分楽しんだことだし、とっとと戻るか」
「え！？あ、ちょっと待って雅夜！！さっきのマジックもう一回やって！」

ばっ、おま！！姫路のいるところでなに言ってんだよ！！

「断固として断る！」
「そ、そんなこと言わないでお願い！！」

土下座をしてくる明久。そこまですることか！？

「ダメだ明久。同じマジックは二度見せちゃいけないもんなんだよ」

「そこをなんとか！！」
「…明久…君？」
「やっぱなんでもないです！すみません！！」
「そ、そうか」

やばい。姫路がヤンデレみたいになってる。

「ほら、とっとと戻るぞー」
「ん、ああ。姫路はどうする？明久はいいとして」
「あ、私も教室に戻ります」
「アレ？なんで僕はいいの？」
「いや……あの声が聞こえないのか？」

『ア～キ～～～～～～！アンタよくもやってくれたわね～～！』
『吉井ぃっ！絶対殺すぅぅっ！』
『ガンホー！ガンホー！』

「さらばだ！」

下から響いてくる声と足音を聞くと屋上へと走って登っていく明久。
逃げ道はないと言うのに。

「あの…。坂本君と浅月君は手紙の送り主が誰だかは気にならないんですか？」

明久が屋上に消えていったのを確認すると姫路が問いかけてきた。

「全然興味がないな。俺は明久の幸せを妨害できたらそれでいい。もっとも……」
「は、はい。なんですか？」

「誰からの手紙なのかは、目星はついたがな」
「え……っ！？」
「たしかに、他人の書いた手紙を破り捨てたら問題があるよな？」
「そ、それは、その……っ！」

やはりと言うべきか、雄二はきちんとわかってるみたいだ。

「んで、雅夜はどうだ？お前も検討がついてるんだろ？」
「１０割方わかってるぞ」
「ええっ！？」
「それ全部じゃねぇかよ……。いつごろからだ？」

いつごろから？　ん～……

「Ｆクラスに手紙が落ちてた辺りから、だな。Ｆクラスにだと思い当たる生徒が一人しかいなかったから考えるまでもなかったけどな」
「……は？いつの話――――――待て。もしかしてお前が明久の下駄箱にいれたのか？」
「ん？ああ、そうだ――――――いや、違う。なんでもない忘れてくれ」
「……そうなんですか、浅月…君？」
「だから違う。断じて違う。俺じゃない。信じてくれ」

やばい…！コレはまたやってしまったか！？

「じゃあ、さっき言った言葉はなんなんですか？」
「さ、さぁな？無意識のうちに適当なことでも言ったことだしな」
「雅夜。ラブレターの序文に書いてあった文はどんなのだった？」
「『突然ですが、明久君にどうしても伝えたいことがあっ』――――知らん」

おおーっと、姫路からもれている殺気が増えてきましたー！

「中身まで見てたのかよ。となると……さっきマジックだとか言いながら出したのはコピーしたものか？」

「……コピー、ですか……。ふふふ。いけない子ですね……」

「ヤンデレ乙！！というわけで俺は逃げさせてもら！！」

「ダメですよ？ここで浅月君にはオシオキするんですから」

「『でもでも、好きです。大好きです』」

「っ！！」

最後の一文を読み、姫路が怯んでるスキにいっきに階段をかけ降りる。スキなんぞ一瞬あれば十分！

『や、やっぱり読んでるんじゃないですかっ！！』

「いいのか姫路！こんなところで大声だすと周りにきこえるぞ？」

『あっ！』

『ははっ。これは雅夜にやられたな姫路』

このあと俺と雄二、姫路は教室に戻ったのだが、西村さんに見つかり俺と雄二は拳骨をくらい姫路には注意をされた。ちなみに教卓を直してなかったので俺はもう一発くらった。

それとＦＦＦ団の連中と島田だが、俺たちがＦクラスに戻ってから２０分後に戻って来た。やはり俺たちと同じく拳骨をくらった。も

ちろん島田は口頭注意である。男女差別バンザイ！

あ、秀吉と康太はお咎めがなかった。秀吉はともかく、康太は早めに教室に戻ったため、西村さんにバレなかったみたいだ。

ちなみに明久はこの後西村さんに屋上のフェンスにボロボロの状態でめり込んでいるところを発見された。もちろん明久も問答無用でその場で拳骨をくらってたぞ。

……

……

…

「んな感じでラブレター騒動は終わったな」

「ふーん、さすがはFクラスね。たった一枚のラブレターからそこまで大騒ぎになるなんて」

放課後、部室にいくとすでに優子がいた（鍵は渡た覚えはないのだが、どうやって入ってるのだろうか？）ので今日の出来事を話した。

「まぁ、それがFクラスの悪いところであり、いいところでもあるんだけどな」

「……そういえば、雅夜って楽しいそうだからって理由でFクラスに入ったんだったわね」

「ん、楽しいじゃなくて面白そうだからって言った覚えならはあるな」

「あら、そうだった？ま、別にどっちでもいいわ」

ん～、楽しいと面白いだと結構違ってくるんだが……まぁ、別にいっか。

「で、姫路さんはどうするの？ラブレター見たってことバレてるんでしょ？」
「ん？ああ、平気だ平気。姫路のなかじゃコピーした奴と本物はあの時両方とも燃やしたってことになってるからな。中身について忘れるってことで交渉しといた」
「あーあ……。姫路さんも最後までミスりっぱなしね」

同情したようにため息をはく優子。

「本物はまだあるっていうのに……。それにアンタ忘れる気ないでしょ？」
「もちろんだ」
「断言するってことは確信犯よね」
「当たり前だ。ま、あのラブレターは頃合を見て表にだすとするさ。面白くなるタイミングで、な」
「アンタねー……」

またもため息を吐くが、今度は顔を楽しそうにしている。なんだかんだ言って、優子も面白がっているのだろう。

「非日常は楽しんでこその非日常。楽しまない非日常なんて、日常と一緒だ」
「だからこそ火種は沢山仕入れる、でしょ？」
「……ああ」

こうしてラブレター騒動は終わった。

第118話（後書き）

な、長かった…（苦笑）

これだったら二話にわけても問題なかった気がする（笑）

次回もまだ、短編を続けます。

感想お待ちしております。

第１１９話（前書き）

今回も短編ですっ！（笑）

第１１９話

ラブレター騒動も一週間前のこととなった。

「今日の放課後どうする？商店街のゲーセンでも行っか？」

「うむ、それがよいじゃろ。ワシも今日は部活が休みじゃし、たまにはいいと思うしの」

「そういえば秀吉ってあんまりゲーセンにはいかないよね？」

今は平日の昼休み。弁当を食い終わって、放課後なにをするかに話を咲かせていた。

プルルルルッ　プルルルッ　プルルルルッ

「ん？っと、わりぃ。電話だ」

「マナーモードにして置いたほうがよいぞ」

いったい誰から……非通知？

「授業中はしてるから大丈夫だ」

プルル――――ピッ

「はい、もしもし。どちらさんですか？」

『あ、マサ君。私です。今平気かな？』

「平気だが、とりあえず名前を名乗れ。私じゃわからん」

『深風ですよ、深風』

ねーさんからか。ったく、無闇に携帯いじりやがって。機械音痴だ

から非通知設定になるんだぞ。

「なんだねーさんか。それで、なんかあったのか？」
『えーっと、ね。その、すごく言いづらいんだけど……』
「ああ」
『今から翡翠に来てもらえない？』
「断る。じゃあな」

ピッ

「もう電話は終わったのかの」
「ねーさんって聞こえたけど、なんかあったの？」
「いや、なんでもない。とうとうボケは始まったみたいなだけだ」
「「それは大変じゃない！？」」

今から翡翠って……。学校があるから無理に決まってるだろ。

プルルルルッ　プルルルルッ　プルル――――ピッ

「で、なんなんだ。さっきみたいにまたボケたこと言うと問答無用で切るからな」
『ま、待ってよぉ～…。ちゃんとさっきのにも理由はあるのよ』
「そうか。だったらそれから言えよ」
『さきに結論から言ったほうがいいかな？って思ったの』
「はいはい、そうですか。では、どうなったらそういう結論に行くのか教えてくれ」
『了解ですっ！話せば長くなる……。そうアレはつい先程のこと……』
「へんなモノローグを始めるな」
『これから陽菜と私でマスターを置いて二人で温泉に行くことにな

っていたのを忘れており、このままだとマスター一人になってしまう上に、今から来れそうな人がマサ君しかいなかったのです』
「長くなるってい言いながら一文でまとめやがったな……」
温泉旅行はきっと福引きのチケットか、なんかがあたったのだろう。
無駄に運がいいからな。

「ってか、なんでマスターを置いていくんだ？むしろ置いていかれるべきなのはねーさんだろ」
『たまには女同士で行きましょ、って陽菜に誘われたの』
「なんかしたのかマスター……」
まったく……。陽菜さんをまた怒らせたみたいだな。

「んで、スケットとして俺が呼ばれるのか？まだ学校があるけど」
『その辺は大丈夫よ。陽菜がカヲルの許可は取ってあるって』
「無駄に準備いいな！？」

ばーさんの許可が降りてるのか…。学生にサボリの許可を出すって、いいのかそれ？

『ってことで、今から翡翠に行ってね～』
「…ちっ。仕方ねぇな。わかった、今から行くとする。ねーさん達はいつ頃翡翠出るんだ？」
『現在電車のなかから通話中です』
「もう出発ずみかよ！？」

今さっき気づいたんじゃなかったのか！？

「……ま、いいや。んじゃ、切るな」

『じゃあねー。お土産は期待してて頂戴～』

ピッ

はぁ……、面倒だな。今から家に帰ってから翡翠に向かうとすると……二時近くなるな。

「すまん。ちょっと急用が出来た。ちょっくら行ってくる」

「今の電話かの？」

「ああ。メンドイ仕事を押し付けられた」

「じゃあ午後の授業はどうするの？そろそろ鉄人もくる頃だけど」

「ん、気にするな。なんとかなる」

カバンをもって教室の扉から出ようとし、

キーンコーンカーンコーン

「お前ら席に付け……なにしてるんだ浅月」

「お、西村さん。さよならっす」

「おい、待て。さよならじゃないだろう」

「上の許可は取ってる」

「上だと？……もしや仕事か」

さすが西村さん。ものわかりがいい。

「ええ。そういうことです」

「……はぁ。ならよし」

「では」

西村さんにも理由を言ったので、堂々と教室を出る。後ろからはＦ

クラスの連中からの声が聞こえるが気にしないで置こう。

第１１９話（後書き）

またも短編です。今回は翡翠――――杜丘高校のメンツがメインの話です。

前に紹介できなかった奴らを出すつもりです。

題名を付けるとしたら『オリ話と翡翠屋とオリキャラ達』ですかね（笑）

感想お待ちしております。

第１２０話

「へい、マスター！暑いの一本くれ！」
「ここは居酒屋じゃない」

翡翠に冗談をいいながら入ると、カウンターの奥にいたマスターに軽くあしらわれる。

「相変わらずマスターはノリが悪いですね」
「お前も相変わらずだが」
「すこしはノってくれてもいいなじゃないですか？」
「機嫌がいいときならノってやらないこともない」

おっと。そういえば陽菜さんに置いていかれてたんだったな。

「今回はなにやったんですか？もしかしてこの前みたいに上半身裸でいたとか？」
「……違う」
「今間があったよな！？図星なのか！？」
「違うと言っているだろ」
「……信じていいんですか？」
「ああ」

ふむ。マスターがここまで言うんだから本当みたいだな。よかったよか――――

「正確にはタオル一枚だ」
「へー、マスターってカツ丼好きなんでしたっけ？」

「待て。それは当回しに警察に行けと言ってるのか？」
「もしくは病院でもいいですよ。精神科とかの」
「それは直接的に頭がイかれてると言われてる気がするな」
「奇遇ですね。俺も“とっとと病院行け”と言ってるつもりです」
さてと。とりあえず警察でも呼んどくか。えーっと、携帯は確かポケットの中に――――――
「呼ばなくていいからな」
「うおっ！？」
カウンターの向こう側にいたはずなのだが、いつの間にか近くに来ていたマスターに携帯を取られる。
「鍛練後のシャワーを浴びた直後だったんだ」
「それでもタオル一枚で外に出てれば警察を呼ぶ理由には十分だ！それよりも俺の携帯を返せ」
「早く裏で着替えてこい。開店するまで、もうあまり時間がない」
「無視かよ！？わかりましたから。もう警察になんか通報しませんから携帯返してください」
「お断りだ。いいから着替えてこい」
そう言って俺の携帯をポケットのなかにしまうマスター。くそっ！力ずくで取ろうと思ってもマスターが相手じゃ、さすがに無理だ。
「……ちっ。仕方ないですね、わかりましたよ。今日の（・・・）ところは通報しないでおいときますよ」
「微妙に引っかかるが、それでいい」
はぁ……、こういうところがなければ素直に尊敬できる人なんだ

がな。

制服に着替えて店に出る。マスターはカウンターでグラスを磨いてた。……バーじゃねぇんだからさ。

「んで、どうするんですか？」
「なにをだ」

と、俺の問いかけにキョトンとするマスター。

「なにを、じゃないだろ！！店員がたった二人しかいないのにどうするつもりか、って聞いているんだよ！」
「ああ、なんだ。そのことか。気にするな」
「…ん？気にするなってなにか策でもあるのか？」
「……さて、開店の時間だ。きちんと働けよ」
「思いっきり無策なのかよ！？」
「大丈夫だ。こういう時は雅夜がなんとかしてくれるからな」
「しかも思いっきり人任せ！？」

さっきまで尊敬してた気持ちを返して欲しい。

「……ああ、もう！わかりましたよ」

目的は人員確保。カウンターのほうの仕事はマスター一人にやらせるとして、ホールに一人とレジに一人欲しいところだな。計二人か

……。

「……ふむ。じゃあ最初に来店してきた杜丘の奴を二名臨時バイトで捕獲す――――雇う、でいけますか？」

「別にいいぞ。杜丘の生徒たちが来るまでぐらいなら二人でどうにか回せるだろうしな」

「ってか、いつものバイト組みはどうしたんですか？今日は皆都合が悪いって言ってましたけど」

「…さぁ、俺は知らん。連絡は陽菜がとったからな」

そうか。なら別にどうでもいいんだが。

カランコロン♪

「いらっしゃいませー」

店の扉が開いたので反射的に発声する。やれやれ。本来だったらこの時間はまだ授業中なんだがな。

仕方ないか。これも仕事だ。

第１２０話（後書き）

こうして仕事は始まっていった。

次回。新キャラが出てくるとか、出てこないだとか……（笑）

感想お待ちしております。

バカテスト第11問目・・・・・・ではなくて（前書き）

やはり恒例の人物紹介ですっ！

今回は椎名忍と片桐千夏の二人ですっ！

バカテスト第11問目・・・・・・ではなくて

名前：　椎名　忍　（しいな　しのぶ）

容姿：　うす茶の髪を肩と腰の中間あたりまで伸ばしている。　身長１５８ｃｍ　Ｅに近いＤカップ

家族構成：　母親　父親　兄　忍　弟

所属：　杜丘高校二年　喫茶・翡翠　（アルバイト）

呼称：　椎名　忍　シノ　シノちゃん

性格：　おちゃらけ　暴走好き

好きな事（物）：　雅夜　雅夜のつくるお菓子　友達

嫌いな事（物）：　辛い食べ物　痴漢　カサカサモゾモゾと動く生き物

趣味：　料理

弱点：　特に無し

自称雅夜の妻。

清水の従姉妹であるが、別に同性愛者というわけではない。だが、

すこし興味はある。

人の言うことを聞かないことが多いが、限度はわきまえる。意外としっかりもの。

翡翠では主にホールなのだが、カウンターのほうでも卒なく仕事をこなす。家事スキルは高し。

これらのことからモテるのだが、全て「私にはマサ君がいるから」という言葉で振っている。日々雅夜の敵を増量中。

昔、数名の痴漢グループに襲われかけたところを雅夜に助けてもらった。お礼をしたのだが雅夜に「別に助けたわけじゃない」と、名前も言わずに去っていかれた。

その後翡翠で再開したときは運命であると確信し、妻発言は始まった。

名前：　片桐　千夏　（かたぎり　ちか）

容姿：　金髪のショート。　凛々しい美人という感じ。　身長１７

０ｃｍ。　Ｅカップ

家族構成：　父　母　千夏

所属：　杜丘高校二年

呼称：　片桐　千夏　チカ　チカちゃん　姐さん

性格：　硬いイメージがあるが、実際は可愛い物が大好き。部屋はぬいぐるみで満載。

好きな事（物）：　雅夜のお菓子　心のそこから笑える時　ぬいぐるみ

嫌いな事（物）：　大切な人が傷つく事

趣味：　父親の手伝い　調査　剣道（初段）　ぬいぐるみ集め

弱点：　からかわれること

タバコが似合いそうな凛々しい女性。だが未成年。

父親が警察関係者であり、いろいろとその手伝いをしている。優秀。

昔、雅夜がとある事件を起こそうとしたときに、たまたまその場に居合わせ、雅夜の手伝いなどをしていた。その結果雅夜とは知り合いになり、その後忍と一緒に翡翠にいったときに再開する。

隠していた趣味であるぬいぐるみをファンシーショップで買い物してたところを雅夜に見つかり、趣味がバレる。

以後、ぬいぐるみの調達は雅夜に任せている。

が、忍によりファンクラブにこのことがばらされていることは本人はしらない。（雅夜はなんとなくだが感づいている）

バカテスト第11問目・・・・・・ではなくて（後書き）

感想お待ちしております。

第１２１話

やはりというべきか、平日の昼時を過ぎた時間でのバイトだが、なかなかの忙しさだ。

「あら～、雅夜君じゃない。今日はどうしたの？いつもは休日にしか顔出さないのに、平日に顔だすなんて珍しいじゃない」

「いや、それを聞く前に“学校はどうしたの？”を聞くべきだろ。俺が言うのもなんだが、まだ放課後になる時間じゃないんだぞ？」

「どうせマスターがまたなにかやって陽菜ちゃんを怒らせたんで、雅夜君が強制呼び出しくらったんでしょ。って、あら。私が聞いたことを私で解決しちゃったわね」

例えば、近所の主婦だとか、

「お、平日に珍しい顔をみたな。ついに店を継ぐ決心でもしたか？」

「マスターには息子がいるだろ」

近所のおじさんだとか、

「こんにちは～……って、あれ？マサ君？珍しいじゃない。制服似合ってるわよ」

「…学校はどうしたんですか、学校は。あんた教師でしょ」

「ん～、ちょっと時間が空いちゃってね。差し入れでも買ってこようかなーとか思っちゃったりしたから」

「わかりました、いくつですか？」

「シュークリームを１０個もらおうかしら。それにしてもマサ君が平日にいるなんてホント珍しいわね。皆にも教えなくちゃね」

「あいつらには黙って置いてください。一個サービスしますから」

「あら、そう？ならそうしてあげるわ」

あいつらの担任だとか、

「ヘイ、マスター！暑いの一本！」

「俺と同じネタすんな！あと学校はどうした？サボリか？」

「あ、マサ兄！！平日なのに珍しいじゃん！ちなみに小学校はもう終わってる時間だよ」

「それでもガキが喫茶店（こんなところ）に来るじゃねぇよ」

「あ、マスター！いつものチョーダイ！」

「ああ」

「まさかの常連！？」

近所の小学生（ガキ）だとか

「……暇人が多過ぎるだろ」

ため息を吐く。土日とは言えほぼ毎週のように顔を出しているので、ほとんどの客は知った顔である。知った顔であるために、よく話かけてくる。客との隔たりが薄いのも、この店の人気の理由の一つでもあったりする。

が、

「ダリィ……」

いつもは俺のほかに何人かバイトのやつがいるため、話かけてくるのは分散されるのだが…。いかんせん、今はホールで働いているのが俺一人であるので、俺に集中しているのである。

なので面倒い、怠い。実際疲れてはいないのであるが、こう大勢の相手をしていると怠くなってやる気が失せてくる。まぁ、元から強制的にやらされてるもんなのだが。

「マスター…。今何時ですか？」

「三時半近く。杜丘のやつらがいつも来るのは、早い奴でだいたい三時四十分ぐらいだ」

「後十分か……」

それまで待てば、スケットに何人か巻き込――――――雇うので俺の仕事も三分の一になる。それまでの辛抱だな。

そんなこんなで三時四十分になった。

「そろそろだな」

「さて、と。どいつらが犠牲となるんだろうな」

一番目と二番目に来たやつを強制的にバイトさせる。杜丘のやつなら、躊躇う必要はない！

「ところで最初に来るのって予想できます？俺はこの時間帯は基本いないんで、まったく知らないんですが」

「日による。が、だいたいの場合、忍が一番だな。すぐに来てホールに入ってくれている」

「でも、今日は皆用事があってこれないんですよね？」

「……俺は知らん」

ま、誰が来たって別に問題ないんだが……む。

「「来る」」

扉から入ってきたら見えない位置に移動する。さぁーて、最初の一人は……

「こんにちはなのじゃ。マスター、いつものをくれんかの？」

「いらっしゃい、アヤメ君」

最初に来たのはアヤメか…。

「今日は早かったね。なにか用事でもあるのかい？」

マスターがアヤメに問いかける。これで返答がノーだった場合、採用決定だ。

「いや、なんとなくじゃ。今日はマスターの入れるコーヒーがやけに飲みたくなってのう、すこし早足気味だったのじゃ」

「そうかい。けど、飲むのはちょっと後になるみたいだよ」

「む、なんでじ――――――」

「ようアヤメ。会うのは清涼祭振りだな」

「マ、マサヤ！？な、ななななぜここにおるのじゃ！？」

んー説明してもいいんだが……

「とりあえず話はあとだ！」

一瞬でアヤメの背後にまわり、抱き上げる。

「ふぇっ!?」
「お、結構軽いな」
見た目からして小柄なのはわかっていたのだが、予想していたのより軽かった。
「なななななにをし、ししておるのじゃ、マサヤ!!は、離すじゃ!!」
「マスター、アヤメならオッケーですよね?」
「構わん」
「なにがじゃ!?ワシはいったい、なにをされるのじゃ!?」
なぁに、悪くはしないさ。
「あーる晴れた、昼さがりー、いちばーへ続く道♪」
「待つのじゃ!!その不吉な歌はやめるのじゃ!!」
抱き上げたままアヤメの裏へと連れていく。ドナドナドーナドーナー♪

第１２１話（後書き）

一人目の犠牲者、植田アヤメ。

感想お待ちしております。

第122話

～side忍～

「こんにちは～……あれ？マスター一人？」
「いらっしゃい忍君。今は一人だ」

今は、ってことはさっきまでいたのかな？例えば…休憩に入ってるとか。

「ま、いっか♪じゃ、裏で着替えてきますね」
「…？陽菜から今日は用事があると聞いていたが？」
「……？私、そんなこと言った覚えないですけど……」

用事は…ないよね？今日は翡翠（ここ）でバイトするのが用事といえば用事なんだけど…

「なにかの間違えじゃないですか？」
「……ふむ。そういうことか。またいつもの悪戯だな」
「悪戯？…ああ、陽菜さんですか。なにかあったんですか？」

悪戯といえば陽菜さんしかいないだろう。また悪戯したみたいね。

「今日は皆用事があるから、バイトの子は来ないと言っていた」
「へ～。確か今日は私だけでしたけど、ほかの奴らも呼べば来ると思いますけど」
「いや、もう大丈夫だ。二人ほど臨時のアルバイトとして雇った子達がいる」

臨時アルバイト……つまりスケットみたいなものね。マスターが雇うぐらいだから使える子でありそうね。

「その子たちは今、裏ですか？」

「ああ。着替えがてらに会ってくるといい」

「そうしますね♪」

さぁ～って、どんな子が来てるのかな～？♪

『……！？』

『……。……、――――――……！？』

『……！……！！』

『…！？……！――――……！？』

個室――言わいる着替えとかするところ――の中からちょっと騒いでるような声が聞こえる。こんなに騒いでるってことは二人は顔見知りなのかな？

「失礼しま……」

扉を開けてなかに入ると――――――翡翠の制服を片手にもった男の子と、その男の子にワイシャツで馬乗りしている金髪の女の子がいた。そばには女の子のブレザーと思しきものが落ちてる。

「……へ？」

「「ん？」」

目の前の光景に驚いて声が漏れてしまい、二人が私に気づいたみたいだ。……って、それどころじゃない！！

「失礼しましたっ！！」

すぐさまUターン！部屋から外に出て、慌てて扉を閉める。なに！？このなかでなにが起こってるの！？ていうか此処、翡翠の個室だよね！？

『む、今のは忍ではなかったかの？』

『忍！？あいつは今日用事があるはずじゃ……ああ、くそっ！陽菜さんにまたやられたってことか！！』

……あれ？この声って……マサ君とアヤ？なんで二人がここに？もしかしてスケットって二人の事だったの？

「……今、入っていいのかな？」

『…なにを躊躇ってるんだ忍？』

『なにか、躊躇わざることでもあるのかの？』

当の本人たちからの返事。……大丈夫なのかな？

「し、失礼しまーす……」

そーっとなかに入る。なかではマサ君がアヤに馬乗りされてるという――――先ほどと同じ状況だった。

「……なんでそんな格好してるの？」

Uターンして部屋から飛び出したい衝動をどうにか抑えて、いまだ馬乗り状態の二人に尋ねる。

「ふむ、この格好とな？さきほどマサヤに襲われたのでな、仕返し

てるところじゃ」
「襲われたって人聞きの悪いことを……。アヤメなら問題ないと思っての行動だったんだが」
「あれほど無理矢理迫られたら、誰でもヤりかえしたくなるものじゃ！…普通に頼んでくれれば、素直に応じるかも知れんというものじゃと言うのに……」
「マジか？それはうれしいことを聞いたな。わかった、今度からはそうしとく」

……私の耳がおかしいのかな？なんだか二人が事後の会話をしてるように聞こえるんだけど……。

「っと、そろそろ降りてもらえないか？」
「嫌じゃ。あと一発はヤらんと気がすまぬのじゃ」
「あのな……。さっきまでで二発ヤったんだぞ。三発目はヤりすぎじゃないか？」
「お主が悪いのじゃ」

そしてニタァーと笑うアヤと苦虫を噛みしめった顔をするマサ君。
さらにヤるの！？だったら、私は……っ！

「覚悟するの――――なぬ！？」
「忍！？バカッ、なにしようとしてるん――――――」

「私も混ぜてーー♪」

二人に向かってダイブ！！バイトなんか後よ！バイトよりもっと大切なものがあ――――――

ガッ！！

突如、頭を硬いもの殴られたときのような感触が響く。

……あ、れ？……今、なにが……、（ガクッ）

第１２２話（後書き）

今回は忍ｓｉｄｅでお送りしました。

あ、ちなみにこの二次小説『バカとノリと召喚獣（通称バカノリ）』はＲ１５とかではありませんので。

……近々Ｒ１５設定するかもしれませんが（苦笑）

感想お待ちしております。

第１２３話

少し戻って～ｓｉｄｅ雅夜～

「あーる晴れた、昼さがりー、いちばーへ続く道♪」
「待つのじゃ！！その不吉な歌はやめるのじゃ！！」

嫌だね。ドナドナと裏にある個室へとアヤメを運び込む。

「ワ、ワシをこんなところにつ、連れ込んで、なにをするつもりなのじゃ！！」

部屋のすみ――扉から遠い所。逃げようとしてもすぐに阻止できるような場所にアヤメを降ろす。

「なにを、って……。そりゃあ、こんな所に連れ込んでやることなんて一つしかないだろ？」
「もしや……！ま、待つのじゃマサヤ。ワシは嫌じゃぞ！！こんなのが初めてなんて嫌じゃ！」

ロッカーから物(ぶつ)を取り出し、アヤメのほうに迫っていく。

「なんだ、アヤメは初めてなのか？珍しいな。最近の高校生だと、結構なやつがやってるもんだというのにな」
「うるさいのじゃ！！ワ、ワシはその……色々と忙しくての。そういうものはやる時間がないのじゃ」
「そうか。なら、これが初めてになるんだな」
「それは！？」

俺が取り出したものを見ると、アヤメは自身の体を抱きしめるようにしてブルブルと震え始める。

「さぁーって」

ジリジリと物(ぶつ)を片手にアヤメに近寄り、

「おとなしく、こいつに――――――」

「いやなのじゃぁあああああ！！」

「――――ゴフッ！！」

鉄アレイで殴られ、吹き飛ぶ。

「痛ってぇえええええ！！」

どこから出てきた、その鉄アレイ！？――――じゃなくて、なんで殴られたオレ！？

「覚悟は出来ておるじゃろうな……！！」

「なんでだ！？なんでいきなりこんな雰囲気になっているんだ！？」

「自分の胸に聞いてみろ、なのじゃ！！」

そう言いながら転がってる俺に馬乗り…つまりマウントポジションを取る。

「まだ殴(や)るきか！？」

「当たり前じゃ！…マサヤ相手じゃと、手加減をしようと思えんのは不思議じゃな」

ブレザーを脱ぎ、戦闘態勢に入ったアヤメ。言葉通り本気で殴(や)って

きそうだ。

「ま、待て。ここは一旦落ち着こうアヤメ」

「い・や・じゃ♪」

と、笑顔で答えてくる。……そういえば、“ツンデレ貧乳キャラは８割方暴力的である”っていうのをこの間ネットで見たっけな。

ゴッ！！

「グワハッ！？」

突如、さきほどまでの笑顔（悪魔的なだが）だったはずのアヤメが、鬼のような形相をして殴ってきた。

「す、すまぬ！！今なぜか、お主を殴らなければいけないような気がして！」

なぜか慌てた様子で謝るアヤメ。

「大丈夫かの！？」

「たぶん…。回復力には自信がある――――――が、連続に二発はさすがにきついからな！？」

「大丈夫じゃ！お主なら何発でも耐えられる！」

「無理だからな！？今でも頭がクラクラし始めてるんだからな！――――だから止めろよな！？」

俺の必死の説得もむなしく降り下ろされる鉄アレイ。

ええい、ままよ！

右手を突き出して鉄アレイを奪い取る！…よしっ、成功！！

「……へ？」

「「ん？」」

鉄アレイをとったところで、アヤメの後ろの方――入口のほうから声が聞こえた。誰だ？俺からの位置じゃ、よく見えないんだが…。

「失礼しましたっ！！」

どうにか体制を変えて扉のほうを見ようとしたところで、入ってきた奴がすごい速さで扉の外にでてしまう。

「む、今のは忍ではなかったかの？」

姿が見えたのか、アヤメがその人物を言う……って、

「忍！？あいつは今日用事があるはずじゃ……」

と、今更ながらに気がつく。バイト組みが用事があるからこれない、って言ってたのはあの人じゃないか！！

「ああ、くそっ！陽菜さんにまたやられたってことか！！」

俺がこなくてもこの時間になれば誰か来るんじゃないか！…ったく、また面倒事押し付けやがって。

『……今、入っていいのかな？』

扉の向こうから、オドオドとした普段の忍らしくない声が聞こえてくる。

「…なに
を躊躇ってるんだ忍？」

「なにか、躊躇わざることでもあるのかの？」

いちいち聞いてくることでもないだろうが。

「し、失礼しまーす……なんで、そんな格好してるの？」

なにかをこらえてるのか、なんとなくだが声が普段より小さく感じる。

「ふむ、この格好とな？」

マウントポジションのことか？

「さきほどマサヤに襲われたのでな、仕返してるところじゃ」

「襲われたって人聞きの悪いことを……。アヤメなら問題ないと思っての行動だったんだが」

「あれほど無理矢理迫られたら、誰でも殴りかえしたくなるものじゃ！…普通に頼んでくれれば、素直に応じるかも知れんというものじゃと言うのに……」

「マジか？それはうれしいことを聞いたな。わかった、今度からはそうしとく」

後でマスターにアヤメを新しいアルバイターとして紹介してみるか。

「っと、そろそろ降りてもらえないか？」

いい加減この体制もつかれて来た。

「嫌じゃ。あと一発は殴らんと気がすまぬのじゃ」

「あのな……。さっきまでで二発殴ったんだぞ。三発は殴りすぎじゃないか？」

「お主が悪いのじゃ」

と、どこか楽しそうにニタァーとした顔になるアヤメ。……はぁ、仕方ない。あと一発ぐらいは耐えるか。

「覚悟するの――――――なぬっ！？」

アヤメが鉄アレイを降り下ろそうとすると、扉の近くにいた忍が飛び込んできた。なっ！？

「忍！？バカッ、なにしようとしてるん――――――」

「私も混ぜてー♪」

当然振り下ろしている鉄アレイは止まらず……

ガッ！！

そのまま忍の頭に直撃した。

第１２３話（後書き）

今回は、前回の時の雅夜サイドでお送りしました。

…まぁ、ヤるというのは殴るという意味だって前回で気づいてましたでしょうけど（苦笑）

感想お待ちしております。

第１２４話

椎名忍――――喫茶・翡翠の個室にて、臨時のアルバイトである同級生の植田菖蒲に頭部を鉄アレイで殴られ死去

チーン……

「いやいやいや！さすがにそれはねぇよ！！」

「なににツッコンでおるかわからんが、今は忍の手当をするのじゃ！」

はいよ。

「ちょっとどいてくれ」

アヤメを手でどかし、うつぶせで倒れてる忍のよこに動く。

「……ふむ」

うつぶせになってる忍をよく観察した後、患部にそっと触れる。

ビクンッ

触れた瞬間、身体からすこし反応が出る。それに触った感じから内出血はしてないことを確認。命に関わる怪我ではなさそうだな。軽

く頭出腫が出来てる程度だ。

「アヤメ。そこらへんにあるタオル――――清潔なタオルのはずだから、軽く濡らしてもってきてくれ」

「う、うむ。わかったのじゃ」

それにしても鉄アレイで殴られたのに頭出腫ですむっていうのは相変わらずすごいな…。

「マサヤ、持ってきたぞい」

「サンキュ」

ぬれタオルを受け取り、患部に当てる。当てた瞬間またビクッと身体が反応した。……コイツ……もしかして…？

「マサヤ、忍は大丈夫なのかの？」

「ん？ああ、大丈夫だ。問題ない。この程度ならすぐに起きる」

事故とはいえ自分がやってしまったからなのか、やけに心配しているアヤメを安心させる。

「……そうか。マサヤがそこまで言うのなら本当に大丈夫なのじゃろうな」

…俺ってそこまで信用されてるのか？自分って言ってもなんだが、結構ふざけた性格してる気がするんだが……。

「まぁ、いいや。とりあえず、コイツ起こすぞ」

「無理矢理起こすのはやめておいたほうがよいのではないかの？」

「わかってるって。無理矢理ヤボなことはしねぇよ」

「じゃが、それではムグッ!?」

シー、とアヤメの口に人差し指をあてて閉ざす。顔を真っ赤にしてジタバタとしてくるが、アヤメの口に当ててある人差し指一本で、アヤメの進行を止める。

「んじゃ、失礼して」

あいてる片方の手で忍の髪をどかし、耳元へ口をちかずけて

「……寝たふりもいい加減にしとけよ」

「ね、寝たふりじゃないよ!!……あ」

さきほどから気づいていたことを言うと、すぐさま否定してくる忍。そう。すぐさまである。

「……あ、あはははは。……バレちゃってたみたいだね」

「いつから狸寝入りしてたんだ?最初っからか?」

「ち、違うよ!意識が戻ったのは殴られたところを触れたあたりからで……!」

「すこしの間は意識はトんでいたのか」

いくら攻撃を日常的にくらい慣れている忍とはいえ、普段には無い鉄アレイでの一撃だもんな。やはりすこしは危なかったみたいだな。

「患部はどうだ?たんこぶが出来てるのはわかってるんだが」

「え、えと……ん〜、大丈夫。これだったらたんこぶもすぐに戻るよ」

「そうか。んじゃ、あとは頑張れ」

「え?なにを頑張れっていうの?」

「あれ」

後ろにいるアヤメを見ないで指さす。見なくても十分わかる。これは絶対に憤怒のオーラだしてるな。肌にビンビン感じる。

「ごめんなさい！！」

アヤメに気づいた瞬間、速攻で土下座をする忍。残念だが、たぶんもう遅い。

「……覚悟は出来ておるのじゃろうな忍」

「出来てません！」

「そうか。……ならば後一発で許してやるのじゃ」

「待って！！一発でも十分痛いからね！？むしろこれ以上やったらホントに危ないからね！？」

「大丈夫じゃ。マサヤじゃって二発は耐えたんじゃからな」

いや、たしかに二発耐えはしたが……さすがに俺でも危なかったからな？

「無理だからね！！私はマサ君やマスターみたいな化け物じみた生命力はもってなからね！」

「やれ、アヤメ。手加減なんて必要ねぇ。気がすむまで何度でも殴り続けろ」

「うむ！」

しまった！という忍の声を無視して、目をランランと光らせて鉄アレイを振りかぶるアヤメ。その目標は……頭部！？

「だからムリだってばぁあああああ！」

忍の悲鳴もむなしく、鉄アレイは忍の頭に――――――コツンと当てられた。

「…今回はこれで許してやるのじゃ」

と、鉄アレイをカバンにしまいながら言うアヤメ。

「いいのか？」

「…ワシだって鬼ではない。さっきまでのは怒ったように思わせただけじゃ」

「そうか……よく我慢したな（ナデナデ）」

「だから怒ってないと言っておるじゃろうが！！頭をなでるでない！！」

いやだって、なぁ……。

「――――――――――っ！！――――――――――っ！！！！――――っ！！！！！！！！」

「ピンポイントでさっきと同じ場所殴っただろお前」

「……さ、さぁ？なんのことじゃろうな」

声が出ないほど痛すぎたのか、頭を抑えながら床を転がっている忍。

アレから目を逸らして言っても説得できねえぞ。

「ま、いっか。さきに俺は店（おもて）のほうに戻ってるぞ」

「……ワシが働くということは決定なのじゃな」

もちろん！と言いながら個室をあとにする。いつまでもあそこに俺がいたら、アヤメ達は着替えられないからな。

第１２４話（後書き）

……なんだか短編じゃなくて普通に長引きそうな感じがしてきた（苦笑）

それにまだ新オリキャラ達だしてないのに（涙）

感想お待ちしております。

第125話

「えらく遅かったな。なにかあったか？」
「いや、特になにも。いつも通り忍がバカしただけです」
グラスを拭きながらこっちを見ないで答えるマスター。店内を見渡すと、客は一人もいなかった。
「客が見当たらないんですが、杜丘のやつらとかまだ来てないんですか？」
「まだだ。残ってた客もちょうどさっき出ていった」
「この時間帯はほとんで杜丘のやつらで店内埋まりますからね……この後一気にきそうですね」
「そうだな」
普段はだいたい五人ひと組のグループですこしずつやってくるんだけど、今日はそれがまとめて何グループもきそうだ。かったりぃ。
「あ、そうだ。忍（バイト）のやつが居るんですから、俺もう帰っていいですよね？」
もとから埋め合わせだったんだが、忍とアヤメの二人がいるなら俺もういらないよな。
「って、ことでお先に失礼しまーす」
「ダメだ（ガシッ）」
帰ろうとすると、マスターに腕をつかまれる。こうなるとは予想が

出来てはいたが。

「……一応聞いておきますが、なんでですか？」

「君が居なくなったら植田君の世話は誰がやるんだい」

「忍にでもやらせろよ！っていうか、俺が世話するのは決まってるんですか！？」

「忍君はダメだ。彼女は優秀だが、ものを教えるというのにはむいていない」

「ま、まぁ、そうですが」

たしかに忍は教えることは苦手だ。この前も、数学の勉強について未来に教えてるところを見たが、途中式をいくつかすっとばして教えたり、あきらかに公式を使うところを独自のやりかたで教えてたりしてたな。

「だったらマスターが教えればいいじゃないですか。一応翡翠の店長なんでしょ？」

「普通は店長直々にアルバイトに教えるものじゃない。あと一応は外せ」

「翡翠（ここ）は普通じゃないから大丈夫ですね。安心しました」

そういえば、学校途中で抜け出したんだったなー。明日は面倒臭そうだ。

「なにを言ってるマサヤ。翡翠は普通だ」

「露出狂のマスターに、悪魔の陽菜さん。年中天然ボケのねーさんに、一癖も二癖どころじゃなくて十癖はありそうなアルバイト達（俺もそうであることは自覚しているが）。これのどこが普通だと言えるか？」

「俺は露出狂じゃない」

「陽菜さんに逃げられた理由はそれのせいだろ！！」

自分のことは否定してるが……陽菜さんに対する悪魔発言には反応しなくていいのか？

「ち、違う！あれは鍛練の後のシャワーを浴びた直後を見られただけであって、見せたいと思ってやっていたんじゃない！」

「どっちにしろマスターが露出狂なのには変わらん！！」

ええい、見苦しい！！いい大人が言い訳をするな！かっこ悪い！

「だいたいマスターの露出狂なのはいまさらだろ！！いつもいつも裸でいることが多いし、この間なんかは上半身裸で町内走ってって聞いたぞ！！」

「その時はきちんとシャツを着ていたぞ。まぁ汗でほとんど透けていたが」

「気づいてたんなら着替えろよ！」

噂は本当だった。近所じゃいつもの事いつもの事、と通報した人はいなかったみたいだが、遠くまで走っていったみたいなので白バイに追いかけられながら帰ってきたらしい。

「いい加減裸でいるのをやめ――――」

「「はだかはだかうっさいっ！！」」

「ふむ（スカッ）」

「よっ、と（パシッ）」

「「きゃ！？」」

背後からいきなり、それぞれ俺にはアヤメ、マスターには忍の回し蹴りが飛んできたが、俺はそれを掴んで止め、マスターは一歩引い

てよけた。ったく物騒な。

「危ないだろ。店のなかで上段蹴りなんかするんじゃないぞ」
「簡単に止めた人の言う台詞じゃないよね？」
「開き直るな」
「そもそもお主らが裸だの露出だの言っておったのが悪いのじゃろ」
「それについては謝るが、さすがに回し蹴りはないだろ」
「回し蹴りにしたのはなんとなくじゃ」

なんとなく、ねぇ…。まぁ、そんなことはどうでもいいんだが……その……この体制は目のやりどころに困る、というか……。

「そろそろ足を放してくれんかの？この体制も結構疲れるのじゃ」
「ん？…あ、ああ」
「うむ。ありがとじゃ」

やはり気づいてないのか、何事もないかのように礼を言っているアヤメ。……さて、どうしたものか。言うべきか、言わざるべきか。

「……どうしたのじゃ、マサヤ？ワシの顔をじっと見て。ワシの顔になにかついてるかの？」
「いや、そうじゃないんだが……。一つ――――いや、二つアヤメに言っておきたいことがあってだな」
「ふむ。なにかの？」

ん～……言わないほうがいいかも知れないんだが、後々バレたらさらに面倒なことになりそうだからな…。

「よし、俺も男だ。腹をくくってやる！」
「なんじゃと！？なぜワシに話かけるだけで腹をくくる必要がある

のじゃ！？」

ヘタすれば命にかかわるからです。

「んじゃ、アヤメ」

「う、うむ…」

なにか重大なこと言われると思ってるのか、やけに真剣な顔つきになるアヤメ。

「今後は蹴りをするときは服装を気にしたほうがいいぞ」

「……む？

……っ！！／／／／／／」

一瞬遅れて俺が言った意味に気づいて、顔を真っ赤に染め上げるアヤメ。ん、これは死んだな。だが、死ぬんだったら……死ぬ前にもう一つ言っておこう！！

「あと、縞パンだったら白との組み合わせはピンクじゃなくて水色のほうがいいと思――――――――――ギャアアアアアアアッ！！」

鉄アレイで殴られるのは必然だったのかもしれない。

第１２５話（後書き）

別に私は縞パン派という訳ではありませんよ（笑）

アヤメのパンツを縞パンにしたのはなんとなくです。

感想お待ちしております。

第１２６話

「んじゃ、そろそろ客も来ると思うから各々（おのおの）準備しといてくれ」

本来ならマスターが言うべき台詞なのだが、俺が翡翠にいるときはなぜか俺が仕切るようになっている。

「さも、なにごともなかったかのようにしてるけど、大丈夫？」

「大丈夫だが、二日ぐらい眠って過ごした気分だ」

倒れてすぐ起き上がったのだが、なんだかそんな気分だ。

「／／／…／／／

ちょっとまて！今なにをいいとどまりやがった！？

「直せそうか？」

「ん～、たぶん。成功するかどうかわからないけど、やってみるね」

「ああ。頼んだ」

と、アヤメの元まで行き、今だ悶えているアヤメの耳元でなにかを囁く忍。ここからじゃよく聞き取れなかったが、忍の口元から察するとせいぜい一言程度を言っただけだった。それだけで大丈夫なのか？と、思ったが、アヤメはその何かを聞くと体が止まり、すぐに元通りになる。

「ほら、むこう行くよアヤ♪」

「う、うむ。そうじゃの」

元に戻ったアヤメを引き連れてこっちに戻ってくる忍。一瞬アヤメと目があったが、なぜか目をさらされてしまう。ん？

「なんなんだアイツ……？」

「まったく…。マサヤのこれは誰に似たんだろうな」

隣でマスターはため息を吐きながらやれやれと肩をすくめていた。なんだかわからんが、余計なお世話だ！

「とりあえず、それぞれの仕事の確認。マスターはいつも通りカウンターお願いします」

「まかしとけ」

「忍はホールだ。俺と二人で回していくぞ」

「まかっしといて～♪」

「んでアヤメは基本はレジを頼む。他のところは俺がすこしずつ教えてやる。なにか困ったことがあったらすぐに俺に言うように」
「うむ、了解じゃ」

いくら常連とは言え、最初からホールで働くのはちと無理があるからな。まずはレジのところで雰囲気になれてもらったほうがいいだろう。

「んじゃ、始めるぞ！」

パンッ、と手を叩く。忍だけはおーっ！♪と返してくれた。しかし、マスターとアヤメは…

「始めるもなにも、今はすでに開いてるぞ」
「客もいないのに、なにを始めるというのじゃ？」

ノリ悪いな。

「まぁ、適当に持ち場にもでついていい――――」
「「呼ばれて飛び出て、参上っ！！祭＆歩此処に！！」」
「いきなり出てくんな！！しかも呼んでねぇよ！！」

比喩なしで、本当に飛び出てきた――――裏口から入ってきた二人に怒鳴りつける。

「お帰り祭、歩。遅かったな」
「ただいま～。今日はちょっとあってね」
「ちょっと、な。それより、また母さんにどっか行かれたんだって？まったく……」
「おまえら入ってくるなら普通に入ってこいよな？忍は慣れてるか

らいいとして、俺はあまりなれてないんだからな」
「マサヤ、ワシもじゃぞ」

っと、そうだな。

「「マサ!?それにアヤも!?二人ともなんで翡翠の制服きてるんだ!?っていうかマサが平日にこっちにいるなんて珍しい!」」
「うっせぇ!!双子だからってハモって喋るんじゃねぇよ!!」

それより、なんで皆俺をみたら二言目には必ず珍しいっていうんだ!?そんなに俺が平日に顔だしてることが珍しいのか!?

「で、なんでいるの?」
「相変わらずペースのアップダウンが激しいな!!……あー、俺は陽菜さんに嵌められてスケットとして呼び出された」
「ワシはマサヤに襲われてじゃ」
「「襲われて!?」」
「誤解を招く言い方をするなアヤメ!!こらっそこも!変な妄想やめろよな!」
「いや、ね~?あの超絶鈍感奥手ヘタレ野郎の称号の化身でもあると巷で噂のマサがそんなことをするとはね……」
「だよな。しかも襲った相手が今まで接点のなかったアヤだと来たもんだ」

人の話まったく聞いてないな!

「だから襲ったわけじゃねぇって言ってるだろ!!あれは――――」
「無理矢理奥に連れて行かれて、いやがるワシに無理矢理迫ってきたのじゃ」
「「ホントに!?」」

「だから誤解を招く言い方はやめろっていってるだろうがーっ！！」

なんでだ！？たしかにウソは言ってないが、なぜそんな言い方で伝える！？……までよ。

「（忍）」

「（なぁにマサ君？）」

「（アヤメってもしかして……）」

「（先に言っておくけど、アヤは別に腹黒とかじゃないからね♪楽しい雰囲気は好きらしいけど）」

「（本当か？……じゃあ、なんでこんなことに？）」

「（あー、アヤに悪気はないよ。ただ……）」

「（ただ？）」

妙に歯切れがわるいな。言いにくいことなのか？

「（アヤは純粋というか、ウブというか……。子供はコウノトリが持ってくるって今だに信じてる子だからね）」

「（マジかよっ！？）」

その発想はなかった。

「「「（コクコク）」」」

「ん？」

聞こえてたのか、アヤメ以外のやつが頷いていた。アヤメは不思議がっていたが。

「（…了解。嘘じゃなさそうだな。一応気をつけておく）」

「（なにを気をつけるかわからないけど、頼んだね♪）」

第１２６話（後書き）

まさかの新事実発覚！？

そして新キャラの二人が登場！

二人についての紹介はたぶん次回にすると思います（笑）

感想お待ちしております。

第127話

「で、お前らはなんで裏から入ってきたんだ？いつもは普通に表から入ってきてるだろうが」
「理由は簡単。なんとなく、そうしたほうが面白そうだったからだよ」
「歩は？」
「俺も祭と同じだな。そうしなければいけないって思ったな」

いやな双子だ。

「それより父さんブラックちょーだい」
「翡翠（ここ）ではマスターと呼べと何度言っている」
「はいはい父さん。わかったよ」
「歩もブラックでいいか？」
「イエス」

そう言って席に座っていく二人。

「マサヤ。持って行ってくれ」
「了解」

ん。もう入ったのか。早いなぁ。

「ほら、ブラック二つ。お待ちどうさま」
「席に座ったらすぐ来たのに、なにを待ったと？」
「知るか。それより、他の連中はどうした？今日は来ないのか？」
「いや、……来るよ」

カランコロン♪

「「いらっしゃいませー♪」」

お。ちゃんと挨拶してるなアヤメのやつ。

「な？」

「無駄にタイミングとったくせに威張って言うな」

たっぷりと間があったじゃねぇか。

「…おや、なにをやってるのかなアヤ？翡翠の制服のように見えるんだけど」

「…見てのとおりじゃチカ。臨時のアルバイトをやっておる」

「そうなんだ！珍しいね。由美、カメラカメラ！」

「（パシャパシャ）似合ってるよアヤ…」

「や、やめるのじゃ！ワシを撮るでない！／／／」

「あ、照れてる照れてるー！」

「うっさいのじゃ！／／／」

懐かしいなー。昔は俺もああやられたっけ。

「あ、マサ君だ！やっほー…って、マサ君！？」

「ホントだ…。なんでいるの…？」

「マサ君までいるのかい？…今日は珍しいことづくしだね」

「お前らホントめんどくさいな！っていうか、俺が平日にいることがそんなに珍しいのか！？」

「「「「「うん」」」」」

「ためらいもなく頷かれた！？」

え、マジで!?そんなに珍しいか?……たまには平日にも顔だすか。

「なんでマサ君がここに……あ、もしかすると陽菜さんかな?」

察しがいいな。さすがは千夏だ。

「陽菜さん?と、言うと……はめられた?」

「もしくは騙された…?」

「正解。温泉に行くから頼んだわよーって無理矢理呼び出された」

断れない自分が情けない。どうにかしたいとは思ってるんだがな……。

「……なるほど。となると、これは……」

「……チカ?どしたの?」

「なにか気になることでもあるの…?」

ん?どうした、またいつもの考え癖か?

「いや、思いすごしだといいけど…、……気を付けといたほうがいいよマサ君」

……なぜか寒気が!?なんだ!陽菜さんはまだなにか仕掛けてるというのか!?

「それはどういう意味だ千夏?」

「なに、気にしなくていいよ。ただ、もう一波乱起きるかもしれない、ってだけさ」

それが気になるんだが……。ま、千夏なら大丈夫……か？

「…それであとの二人はどうしたんだ？」

「二人って、ヤマとサー君のこと…？」

「ん～、知らない。なんか寄るとこがあるって二人で行っちゃった」

「寄るとこ？」

まーた、なにか持ってくるつもりだなあいつら。厄介なものじゃなければいいんだがな。

「あ、でもすぐにこっちに来るって言ってたよ！」

「ん、そうか」

すぐに、ねぇ。だったらそろそろ来るころか？

「まだもうちょっとかかると思うよ…」

「心を読むな由美。思っただけのことに返事が来るっていうのは案外変な気分になるもんだぞ」

「わかってやってる…」

「確信犯かよ！」

たち悪いな、おい。

「まぁ、いいや。それで、お前らなに頼むんだ？」

「私はアイスコーヒー」

「ミルクコーヒー…」

「オレンジジュースで！」

「おいこらミク。いい加減カフェイン取れるようにしろ！喫茶店でカフェイン入ってないやつ頼むとか普通いないからな」

「そんなこと言ったって私がカフェインがダメなことは変わらないよ！」

開き直るなよ。喫茶店からしたらこっちのほうがたち悪いな。

第１２７話（後書き）

……グダグダだ（苦笑）

最近、ちまたで言うスランプみたいな状況になってる（泣）

前までみたいに書けない（号泣）

感想お待ちしております。

第128話

五人が来てから数分後。客もだんだんと来はじめ、いい感じに忙しくなってきた。

カランコロン♪

「「いらっしゃいませ♪」」

客が入ってくると同時に忍とアヤメの二人はきちんとお辞儀をしながら挨拶をする。
それに対して俺は、

「いらっしゃーい」

お辞儀どころか見向きもせずに、口だけで挨拶をしながら（今回が特別というわけではなく、いつもこんな感じである）あいつらに注文された品――五つのパフェを運ぶ。それぞれチョコ、バニラ、イチゴ、抹茶、フルーツミックススーパーデラックス特盛りジャンボパフェ。

「お待ちどーさま。ほら、注文のパフェ五つだ」
「待ってましたー！」
「平日にマサ君のスイーツが食べれる…」
「普段は土日だけしか食べられないからな」
「めったにないことだから余計に美味しそうだね」
「それにマサ君の奢りときたらどんなに美味しくなるんだろうね（チラ）」

「こっち見んじゃねぇ千夏。俺は奢らねぇぞ。そう何度もおごったら俺の財布が危なくなるだろうが」
「マサ君は相変わらずツレないね」
「普通だ」

っていうか、五人分…いや、後からあの二人が来るから七人分奢るとすたら軽く数千するだろ。

カランコロン♪

「「いらっしゃいませ♪」」
「いらっしゃーい」

さぁて、次は……お、あそこはそろそろ注文してきそうだな。

「注文は決まりましたか？」
「今の雅夜の台詞は『遺言は決まったか？』って、ニュアンスに似ているな。もうすこし言葉に人を敬う感情をいれたほうがいい。普段からそうしろとは言わないが、バイトとは言え今は店員をやっているんだ。ほら、お客様は神様と言うだろ？きちんと敬語を使え、きちんと」
「……注文（ゆいごん）は以上でよろしいんだな？」

さて、携帯しているナイフは確か尻ポケットに…っと。

「ま、待て。落ち着こう。ここは双方ともに冷静に話し合うべきだと思うんだが」

ナイフを取り出そうとした手をつかまれる。…チッ。

「……なにしてんだよアンタ」
「俺の正体もバレているか。さすがに変装をしていても雅夜にはお見通しなんだな」
「たしかに外見だけじゃまったくわからないが、気配で一発でわかる」
「やはりある程度のレベルの人間にはバレてしまうものだな」
まぁ、気づいてるのは俺とマスターだけだけどな。祭と歩は半信半疑ってところか？
「それで。どうしてアンタがここにいる？」
「仕事でこっちにちょっと行かなきゃいけないところがあってな」
「仕事か。どの件だ？」
「お前に関係してないやつ。気にしなくいい」
ならいいや。
「一人でか？」
「アイツはむこうに置いてきた。連れて来るほどやっかいなことじゃねぇし、どうせすぐ行くしな」
「なんだ、そうなのか。行くのはいつだ？」
「今日の夜に飛行機で飛んでるさ」
「もう仕事はすませてあるのか。それで余った時間に、こっちで久々に散歩でもしているってところか」
「まぁな。それで店員、店長のオススメの一杯を適当に頼む」
「はいよ。注文はそれだけでいいのか？」
「ああ」
りょーかい。

「マスター、注文。マスターのオススメ“ポーション”一つ」
「おい、ちょっと待て雅夜！なんだその危なそうな名前の商品は！？」
「なにって…今日のオススメだが？」
メニューにも書いてあっただろうが。ま、今日頼んだのはこれで一人目だがな。

「マサヤ、出来たぞ」
「…うおっ、相変わらず気色悪い色してますね」
モザイクがかかるような色をしている飲みものを運ぶ。

「はい、お待ちどーさま」
「……こいつは大丈夫なのか？」
「大丈夫大丈夫。死にはしないはず」
「…ま、まぁ、店が出すもんだから危険なはずはないよな」
ご武運を。

カランコロン♪

「「いらっしゃいませ♪」」

また、客か。

「いらっしゃーい」

ったく。今何時だ？……まだ五時前かよ。あと二時間近くもあるじゃねぇかよ。だりぃ。

「接客がなってねぇーっ！！！」
「んっ？――――どわっ！！」

ガッ！　ズサーッ！！

「なんだその態度は！！ちゃんと敬語を使えと何度いったらわかる！！」
「いきなり飛び蹴りはねぇだろ！！」

ドゲシッ！！

「痛って！？また蹴りやがったな！」
「うっせぇ！オメェがちゃんとしてねぇからいけないんだろうが！！」
「うっせけのはお前だ！今客を迷惑させてるのはお前じゃねぇかよ！！」
「マサヤが全部悪い！」

んだと！？なんで俺が悪ぃんだよ！客の反応みて言やがれ！！

『『『『うんうん』』』』
「まさかの反応！？」
「それがマサヤクオリティ。味方を敵に、敵を強敵に変え、日々やっかいなことに巻き込まれていく。それでこそマサヤだ」

それだと敵しかいねぇじゃねぇかよ！

「なんだその酷い言われよう！？…って、悟志か。となると今の俺を蹴ったのは」

「天下の大和様だ。わかったならとっととひれ伏せ」
「はいはい、また今度な」

悟志と大和か。やっと来たか。

「そういえば、お前らどっか寄るところあったんだろ？今度はなにしたんだ」
「なんてことのないことだ」
「いつも通り、呼ばれたから行き、手伝えと言われたから手伝っただけだよ」
「そうか、ならいいんだが」

ま、答えなんて最初から求めてないからいいけど。

「じゃ、マサヤ。コーヒー一つ」
「こっちもコーヒーで」
「はいよ。コーヒー二つな」

ん、了解。さっそくマスターに、

「だから、敬語を使え！」
「断る！！――――飛び蹴りはやめろよな？」
「黙らっしゃい！うおりゃああ！！」
「だから止めろってぇえええええええ！！！」

……こいつの飛び蹴りはなぜかよけれないから困る。

第１２８話（後書き）

やっと登場！悟志と大和。

紹介はたぶん次回すると思いますので（笑）

最初のほうに出てきたパフェについては

それぞれ誰が何を頼んだかはご想像にお任せします。

感想お待ちしております。

第129話

「ほら、コーヒー二つおまち――」
「あぁ？」
「お客様。ご注文のコーヒーで御座います」
「よろしい」

くそったれが。

「相変わらずマサヤは大和には敵わないんだな」
「なぜかな。逆らおうと思えば出来なくもないはずなんだが、なぜか勝てない」
「なんか言ったかマサヤ？」
「いえいえ、なにも言ってございませんが？」

キーキーわめくんじゃねぇよ、このクソ野郎が！

「マサヤ、誰がクソ野郎だって？」
「心を勝手に読むんじゃねぇよ！！」
「…いや、声に出てたぞ」

マジかよ！？

「ほらまた。癖かわざとか知らないけど、やめといたほうがいいぞ」
「わざとじゃねぇ……と、思いたい」
「なんだぞれ？」
「わざとじゃないつもりだが、心のそこでは面白がっていて無意識にやってるのかもしれないってことだ」

「なるほどな…。でもそれって――」
「さっきのは紛れもない本音ってことでいいんだよな？なぁ！！」
「言いながら飛び蹴りの体制に入ってんじゃねぇえええ――――ぐわはっ！！！」

三メートルほど蹴り飛ばされ、おもいっきり壁にぶつかる。痛ってぇえええ！！

「だから飛び蹴りはやめろと何度いったらわかる！」
「うっせぇ！！いつもそうだが、今もほとんど自分から飛んでいってるようなもんじゃねぇかよ！ダメージなんかないくせに！」
「んなもん関係ねぇよ！俺はやるなって言ってるんだよ」
「あぁ！？やんのかコラァ！？」

上等じゃねぇか！受けて立ってやる！

「まぁまぁ、二人ともお気付きなって」
「「悟志は黙ってろ！」」
「……はぁ。こういう時だけ息ピッタリなんだから」

特に戦闘力があるというわけではない悟志には、俺たちを止めることはできない。まわりの客もこんなことは翡翠ではよくある事（日常茶飯事）なので、特に騒ぐこともない。

「平日にマサヤとやりあうなんて……」

そう呟きながら背中から木刀を取り出す大和。

「あまり争いは好きじゃないんだが。仕方ない…」

それをみて、俺も裾に仕込んでおいた小太刀二刀を取り出し、

「思ってもいなかったなぁぁあああっ！！！」
「やってやんぞゴラァあああああっ！！！」
「二人とも戦(や)る気満々だよな！？」

俺の頭を叩き割ろうと降りおろされた木刀を小太刀を交差させて止める。木刀を受け止めた体制から繰り出された蹴りを膝で受ける。左手を小太刀からはなし、腹を殴ろうとする。が、相手も右手をはなしてそれを振り払う。木刀をもっている手が一本になったので小太刀で弾くように押し返して、距離をとる。そしてお互いに切り掛ろうとし、

「タイムアップだ」

マスターに止められる。
俺と大和は切りかかろうとした状態で一旦止まり、すぐに舌打ちをしてから武器を納める。
始まってから止められるまでの時間はたったの一分。俺と大和の戦いは制限時間がきっちりと決まっており、その間にどちらか一本入れるか降参させることができなければ引き分け。

「また引き分けか。命拾いしたなマサヤ」
「それはこっちの台詞だ」
「これで１９勝１９敗３６引き分けだな…。早くどっちか２０勝になってもらいくれないか？」
「「次こそは俺がとってやる！」」

大和とハモる。それに気づくと、お互いにそっぽをむく。けっ！

「子供達は青春してていいわね〜」
「あれを青春っていいのかどうかと思うけど、楽しそうだよね」
「そ、そうですね…」

近くで見ていた三人に言われる。どこをどう見たらそうな――――――なっ!?

「陽菜さん!?それにねーさんまで!!」

もう一人は店の中だというのに帽子を深くかぶっているので、顔はよく見えないが帽子からはみ出している金色の長い髪の毛から女子だということはわかった。…いや、あれはカツラだな。

「やっほ〜♪」
「ただいまー」
「こ、こんにちは?」
「挨拶してるところじゃねぇだろ!陽菜(アンタ)なんで此処にいんだよ!温泉行ってたんじゃ――――マスター!話しの最中にいきなり現れて土下座はしないでください!みっともない!!」
「マサヤは黙ってろ。これは俺にとっては死活問題なんだ」

いや、そんなに本気(マジ)で言われても。

「なにしてるのよこーちゃん。もしかして私が怒って出ていったと思ってたの?」
「違うのか?」

ちなみにこーちゃんと言うのはマスターの名前、孝介(こうすけ)からの陽菜さんだけが使っているあだ名である。

「当たり前じゃない。ただ今日はマサ君をはめたかっただけよ。それにこーちゃんの露出癖はいまに始まったことじゃないでしょ。その程度のことにいちいち怒ってるわけないじゃない」
「なんだ、それならよかった」
ほっ、と胸をなでおろすマスター。…変態なのには代わりない。
「ってか、今聞き捨てならないこといってなかったか!?俺をはめたかったってなんだよ!今日は温泉だったんだろ!?」
「もちろん温泉って言うのは嘘。今日バイトの子がこれないっていうのも嘘。ついでにカヲルから許可をとったのも嘘」
「前の二つは気づいているからいいとして、最後のも嘘かよ!?じゃあなんだ。俺は西村さんに嘘ついてサボったことになってるのか？」
やべぇ!!最悪じゃねぇかよ!
「もちろん今のも嘘。きちんと許可はとったわよ、脅して」
「ああ、よかった。それなら問題ない」
「問題あるわよ!!」
「ん？」
帽子をかぶっていた女子にツッコミを入れられる。そいつは自分がツッコンでしまったことに気づくと、慌てて口をふさいで俯く。……なんていうか、気配が思いっきりアイツに似ているんだが？
「陽菜さん……はいいとして、ねーさん」
「なんで私はいいのかな？」
ややこしくなるからに決まってるだろ。

「なぁに？」
「さっきから気になってたんだが、その子誰だ？」
「マサ君はこの子が誰だか気になるの？」
「ええ、すごく。さっきねーさんに気づいたらものすごい速さで出ていった男性なみに」

逃げやがったなアイツ…！

「ちなみにマサ君の予想では？」
「俺の知っている双子の姉のほう」
「呼んだ？」
「祭は黙っていてくれ」
「扱いひどくない！？」
「して、その根拠は？」

グイッとマイクを突き出すようなポーズをとるねーさん。俺はマイクをひんだくるように腕を動かし、

「おどおどしている態度、金髪のカツラ、ツッコミの切れ味、知ってる気配」
「決め手となったのは？」
「さっきのツッコミの切れ味」
「ほかのでしょ！！……あ」

今度は立ち上がってツッコミを入れられてしまう。慌ててイスに座りなおそうとするが、もう遅い。

「……なんで此処にいんだよ優子」

金髪のカツラをつけているが、まぎれもなくコイツは優子だ。

第１２９話（後書き）

…大和達の紹介は次回ですっ！！（汗）

感想お待ちしております。

第１３０話

「それについては！」
「私達が説明しましょう～♪」
とっとと説明してもらおうか。
「まずはじめに、なんで優子ちゃんが此処にいるかというと」
「私たちが文月学園から拐ってきたのよ」
「…拐うって。やばいだろそれ」
「大丈夫よ。ちゃんとカヲルの許可をとってからの行動よ」
「さすがにそれは嘘だろっ！」
いくらばーさんが学園長だからといって、拐うのを許可するのは無理だろ。
「…雅夜。それが本当に許可だしてるのよ」
「……は？」
「放課後、Ｆクラスまで雅夜に会いに行こうとしたら校内放送で学園長室に呼び出しされたの。なにかしら？って思いながら行ってみると深くため息を付いている学園長と二人の女性……陽菜さんと深風さんがいてたの」
学園に直接乗り込んでいやがったか…。
「入ったら『私もすまないとは思っているさな。だが、諦めておくれ』っていきなり学園長に言われたの」
「…陽菜さん、脅したのか？」
「……家族、姉妹っていうのは大変だよね。なにせ過去にあった

ことは全部バレてるようなものだからね」
「悲しそうにいってるけど、顔は思いっきり笑顔になってるぞ。なにが大変だ。楽しそうに言いやがって」
「マサ君。ホントーに姉弟って言うのは大変なんだよ？」
「ねーさん。今度頼み事聞いてやるから、黙っていてくれ」
「はーい♪」

……ホント、大変だな。

「えと、それで陽菜さんと深風さんにこっちの駅前にあるホテルまで連れて行かれて」
「なぜホテル？」
「制服のままじゃ一発でバレちゃうじゃない。私服に着替えるためよ」
「着替えは深風のお古だけどね。悟志君達に持ってきてもらったの」
ああ。だから駅前に行ったのか。…って
「お前ら優子のこと知ってたのか」
「「イエース！」」
ったく。言えよな。

「でも着替えるだけじゃバレちゃいそうだから、途中でカツラと帽子を買ったの」
「ホントは昔マサ君が使――――モガッ！？」
「……ねーさん？今なにを言おうとした？」
「なんでもないです…（ガクガクブルブル）」
笑顔でねーさんに詰め寄って聞く。…なんでもないならそれでいい。

「まぁそれはいいとして。優子ちゃんを変装させて此処まで来たとき、大和とマサ君がじゃれ合ってたからバレないように自然になかに入ったのよ。それで今に至るわ」
「…まぁ、だいたいは理解した。だが、なぜ俺を学校があったのにもかかわらず翡翠に呼び出したり、優子をこっちに連れてきたんだ？」
今度、俺自身で連れてくるつもりだったんだがな。
「理由は簡単。面白そうだったから♪」
「それと、一度話題の優子ちゃんと会いたかったからよ」
「話題の！？アタシって話題になってるの！？」
「あー、優子は気にしなくていいから」
どうせろくでもないしな。
「んじゃ、これで目的は達成したってことでいいんだよな？」
「概ねってところね」
「概ね？まだなにかあるのか？」
「んー、優子ちゃんに皆を紹介しなくていいの？」
コイツらとは縁が無くてもいいんだけど……たしかに、しといたほうがいいな。
「それもそうだな。優子、いいか？」
「ええ。お願い」
了解。

「まずは、俺のねーさんである浅月深風」
「あらためて浅月深風です。マサ君共々よろしくね」
「こちらこそよろしくお願いします」

玲さんと同級生ってことは言わなくていっか。

「こっちは俺の伯母にあたる陽菜さん。翡翠のパティシエだ」
「よろしくね優子ちゃん。私のことはきがるに陽菜って呼んでちょーだい」
「よろしくお願いします陽菜さん。雅夜のパティシエの師匠でいいんですよね？」
「そうよ。マサ君より腕は上よ」

悪知恵も上だな。

「その夫であるマスターこと鳴海孝介さん。武道の腕もバケモノクラスだ」
「化け物は余計だ。よろしく優子君」
「よろしくお願いします。孝介さん」
「…俺のことはマスターと呼んでくれ」

呼ばれ慣れてないもんな。

「陽菜さんとマスターの子供の祭と歩。優子と同じ双子だ」
「「よろしくぅ！！」」
「…それ古くない？よろしくね、祭に歩君」

今度は秀吉も連れてきたほうがよさそうだな。

「で、さっき服ももっていった？二人のうち暴れん坊なのが秋山大

和でその隣にいるひょろいのが牧悟志」
「暴れん坊はよけいだ！よろしくな優子」
「的を射てる説明だけどな。よろしく優子」
「よろしくね、大和君に悟志君」
『『『……』』』

優子が言うと、店内の時間が一瞬だけとまる。

「え？え、なに？アタシなにか変なことといった？」
「…いや、気にするな。いつもの事だ」
「これで５０回連続という大台に入ったね。大和、感想は？」
「俺自信、それらしく振舞ってるからいいんだけどな。優子。一応言っておくが俺は女だ」
「……え！？」

驚くのも無理はないよな。制服も女子のじゃなくて男子の着てるし。けど、紛れも無く女子である。

「それと、多分だけど優子より胸はデカいと思う」

あ、バカッ！！それは言ってはいけないことだ！！

第１３０話（後書き）

どうに紹介できた七人。

鳴海孝介・陽菜・祭・歩、浅月深風、牧悟志、秋山大和。

たぶん出てくる新キャラはこれぐらいだと思います。

次のオリキャラのプロフィールは誰がいいでしょうかね？

感想お待ちしております。

バカテスト第１２問目……ではなくて（前書き）

やっぱり恒例の人物紹介！

今回はこの二人っ！マスターと陽菜さんですっ！！

バカテスト第１２問目……ではなくて

名前：　鳴海　孝介　（なるみ　こうすけ）

容姿：　黒髪短髪　身長１８７ｃｍ

家族構成：　自身　妻（陽菜）　娘（祭）　息子（歩）

所属：　喫茶・翡翠　（店長）

呼称：　マスター　こーちゃん　孝介

性格：　しっかりものの頼れる人　世話好き　戦闘狂者（バトルマニア）

好きな物事：　コーヒー　鍛錬　修行　陽菜

嫌いな物事：　度の強い酒　無理矢理決められた未来　現実味のある嘘

趣味：　料理全般　盆栽　釣り

特技：　武道（雅夜とは比べ物にならないほど）

弱点：　陽菜さん

陽菜さんの夫、祭と歩の父親。

市内じゃ知らない人はいないほどのちょっとした有名な喫茶店、『翡翠』のマスター。

普段は無口で無愛想で冷静沈着であるが、陽菜さんにだけは頭が上がらない。こと陽菜さんにかんすることだと良い意味でも悪い意味でも熱くなる。このときはかなり情けない。

あと戦闘（鍛練や修行）のときは人が変わったかのように先頭狂になる。好戦的。

父親から道場を受け継いだのだが、自分が教えるガラではないので、自分や近所の人の自由な鍛練場として使っている。通ってる主な人物はマスター、祭、歩、雅夜、由美……などなど。子供から大人、男女区別なく通ってる人が多い。

家のなかなら平気な顔して裸で歩ける。露出狂。

人柄、武術（と料理）の雅夜の師匠であり、どれも雅夜以上の実力を持っている。

名前：　鳴海　陽菜　（なるみ　ひな）　　旧姓　藤堂

容姿：　青紫色の長い髪を首の後ろで一本にくくっている　身長１７０ｃｍ　Ｇカップ

家族構成：　自身　夫（孝介）　娘（祭）　息子（歩）

所属：　喫茶・翡翠　（パティシエ）

呼称：　陽菜　陽菜さん　パティ　悪魔

性格：　悪戯好き　やんちゃ　困った人

好きな物事：　新作の挑戦　楽しい事　旅行　悪戯

嫌いな物事：　退屈　苦い食べ物　正座

趣味：　知り合いを貶めること　お菓子作り

本名、藤堂陽菜。藤堂家次女。パティシエの修行をしてるときに孝介――後のマスターに出会う。

パティシエとしての腕前は世界でも通用するレベルであり、海外にいたときアヤメの父親に一度あっている。

お菓子作りの雅夜の師匠。

雄二が可愛くみえるほど悪知恵が働き、実行する能力も高い。最高に困った人である。

だが、基本的には最悪の事態にはもっていかない。笑ってすませられるレベルにとどめている。

学園長の弱みを沢山握っており、よく脅しにつかっている。

またスタイリストの資格をもっており、メイクの腕前は凄く高い。

温泉が好きで、たまに温泉旅行にいってる。（家族で行く時もあれば、一人で行く時もある）

バカテスト第１２問目……ではなくて（後書き）

感想おまちしております。

ちょっとした設定

――――――ピピピピピッ　ピピピピピッ

雅夜（以下雅）「ん？…メールか。誰からだ？」

メールの着信音を鳴らしている携帯を取り出し、受信ボックスを開く。

雅「えーっと、なになに。『ヘイ、カモン！！ｂｙ作者』……は？」

作者って言うと……貴雅のことか？俺と同じく名前に雅って文字が入ってた奴だったな。名前は何かの当て字とか言ってたっけ？

雅「って、そんなことよりどういう意味だこれ？カモンと言われても、どこに行けば――――――ん？」

ふと浮いてるような感じがした。なんだ？と思いながら足元を見てみると――――――穴が空いていた！？

雅「ちょ、ボッシュートかよぉおおおおおおおおおお！！！！？？？？」

突然のことに対応出来ず、そのまま穴のなかに落ちていってしまう俺。

落ちていくのを身体で感じながら自らが落ちた穴の様子を見てみると、単純に地面に穴を掘ったというわけではなく、俗に言う異次元トンネルのようなものだとわかった。

…いや、非現実的にほぼ１００％それしかないだろ。落ちてから一分は経ってるんだぞ？穴の中だから空気抵抗を考えものとすると、１７ｋｍ落ちてることになる。１７ｋｍだぞ？わかりやすく言うと富士山の５０倍近く落ちてることなるんだ。
つまり現実的にありえな――――――うおっ！？

目の前の景色が一瞬で変わった。
さきほどまでとは違い、見渡す限りの白。
着地の振動もなく、気がついたここにいた。地面という概念そのものがない空間。
見覚えのある、過去に一度だけ来たことのある空間。

雅「…で、これはどういうことだ？」

なにも無い空間に問いかける。

作者（以下作）「いらっしゃーい、雅夜」

が、当然のように返事が返ってくる。声のしたほうを見ると、そこにはまるで鏡があるかのように俺とそっくりなものがいた。

雅「……その外見はやめろ」
作「なんで？」
雅「自分と話してるみたいで気色悪い」
作「うん、知ってる。だからこの格好にしたんだよ」
雅「わざとかよ……」

くそったれ。

雅「まぁいい。で？なんで俺がこんなところに呼び出されたんだ？」

作「実はね……ちょっと頼み事を受けてね」
雅「頼まれごと？」
作「そ。吉井明久さんって人に頼まれちゃってね」
雅「待て。吉井明久だと？それって明久じゃないのか？」
作「違うよ。吉井明久ってのはユーザーネームであって、明久君本人じゃないんだよ」

ユーザーネーム…偽名みたいなものか？

雅「なんだ、そうなのか。それで頼み事ってなんなんだ？」
作「簡単に言うと『オリキャラが多いので、それを纏めた相関図みたいなものが欲しいです』かな？ちょっと違うかもしれないけど」
雅「相関図か。そいつは俺も見てみたいな」
作「同感だよ。だから作るのは面白かったんだけど……書き終わった後で気づいたんだけど、画像の取り組み方がわからなかったんだよ」
雅「なんだそのへんの紙にでも書いたのか？」
作「ルーズリーフにね。授業中暇だったから、書いてたんだよ」

ダメだろそれは。

作「で、仕方なく色々と記号などを使って、頑張って書いてみたんだすが…」

長
カ女　鳴海　―・陽菜　次女
ヲ　―　？　？？？　―・祭　・大和　―
　杜丘高校　―
ル　―　？？？？　―　・悟志　―　・

由美・菖蒲

藤

未来・千夏

堂

―・孝介

―

浅月

・??　三女

?　??:??:??:?―・深風

?:?:?:?:?

喫茶・翡翠

?:??:??

?　??

―・雅夜

―・姫路

―・風雅

―・島田

―・雄二・

康太

→

文

→

学

←

木下

・恋

月

―

?　??:??:

?:??:??:

?:??:

?:??:

?



戌井┣・榊

┗　?????・??

・??

雅「……色々と曲がってたりするな」

作「一応???が親族のつながり、↑―→がヒーローヒロインの関係、┗は同級生、―┛は翡翠の従業員って感じなんだけど……やっぱり難しかったよ。頑張ってもところどころ曲がってしまう」

雅「みたいだな。それより、この??ってなんだ?」

作「ああ、それ?存在はしているんだけど、名前はまだ出てきてない人たちだよ」

雅「ほー。たしかに、まだ俺のかーさんの名前は出てきてないもんな」

作「榊さんの奥さんと息子さんもだけどね」

雅「ま、奥さんのほうは予想がつくけどな。どうせ試験召喚システムの開発チームにでも入ってるんだろ?」

作「なぜそれを!?」

雅「原作(あっちこっち)をみれば一発でわかる」

作「否定はしない!!だが息子はわからないよね?」

雅「……確か、好きなキャラだけど出番がなさそうな男子が一人いたとか前に言ってたな」

作「……」

雅「……」

作「……」

雅「……図星か?」

作「ってわけで、吉井明久さんのご要望によってつくることになっ

た、この貴雅作の下手くそな相関図についてなにか付け加えてほしいことがありましたら、どんどん感想に書いてください！！できる限りのことはやろうと思ってます！！」

雅「あ、逃げやがった」

ってことはマジで図星なんだな。

作「ということで以上、設定オリキャラ設定でした～」

ちょっとした設定（後書き）

つくるの大変だった～…。

あれつくるのに二時間以上かかりましたよ、マジで。（苦笑）

出来たとしてもこのヘタさ（笑）

感想お待ちしております。

第１３１話

大和が禁句を言ってから数秒後…

「次はないわよ」

「……はい優子様。すいませんでした」

大和は床に土下座し、優子はそれを見下ろしながら言った。

『『『……』』』

此処にいる、人外クラスの猛者たちもこの展開にも驚いていた。一応は、大和は男に負けず劣らずの強い奴だ。

だが、一瞬で優子と大和の二人の間には絶対的な主従関係が築き上げられた。…優子様って、おい。

「…優子ちゃんって本当は強いの？」

「いや、普通。これは、ほらアレだ。火事場のなんとやらってやつだ」

「あぁ……。なるほどね。優子ちゃんに胸の話しは禁句みたいだね」

「お前らはヘタに慰めようとするなよ？お前らはデカいとはいかなくても世間では大きいほうなんだからな」

此処にいる女子ほとんど（大和、アヤメを除く）が霧島と同じくらいある。その中でも陽菜さんは姫路と同じ、いやそれよりもすこし大きいほどだ。

「わかってるよ。これでも（胸が）小さい子の相手は得意なほうさ」

「…は？その自信はどこから出てくるんだ？」
「あれだよ」
と、優子と一緒に大和を見下ろしているアヤメを指さす千夏。……
…なるほどな。
「アヤも結構気にしてるからね。最近は特に」
「そうか。でも、ま。俺には無縁な問題だから関係ないんだが」
女子の悩みは男子が口出しするようなもんじゃないしな。
「……あの二人にとってマサ君は無縁ってわけじゃなさそうだけどね（ボソッ）」
「…ん？なにか言ったか？」
「いや、なんでもないこちらの話だ。それよりそろそろ止めなくてもいいのかい？」
「ああ、それもそうだな。いい加減止めるか」
大和の服従姿ってもの珍しいから、ついつい止めるのをわすれてたな。
「おーい、優子。そんくらいにしとけ」
「なによ。やっぱり雅夜は胸が大きい子の味方なの？」
やっぱりってなんだよ。
「そんなんじゃねぇよ。俺は――――」
「じゃあ小さいほうが好きな――――キャ！」
「落ち着け」
「うぅ～…」

俺のデコピンをくらい涙目になる優子。ったく。

「まだ全員紹介しきってないし、お前もまだ自己紹介が終わってないだろ」

「でもこれは女にとってはとても大事なことなのよ！」

「そんなもん知るか」

もう一発デコピンくらわすぞ。

「愚痴はまた今度聞いてやるから今は落ち着け」

「わかったわ。今度絶対聞いてもらうからね。覚悟しときなさいよ」

「……は？」

さっきまでも勢いをなくし、落ち着いた感じで答える優子。…ちょ、ちょっと待て。もしかして……はめられた？

「えっと、まだアタシと初対面なのは……」

「ワシじゃな」

「秀吉と同じ口調……ってことは、あなたがアヤメでいいのかしら？」

「うむ、間違っておらんぞ。ワシのことは忍たちから聞いたのかの？」

「ええ。清涼祭のときに聞いたわ。なんでもアタシの弟と同じ口調で話す女の子がいるって」

俺を無視して話し続ける二人。

「これからもよろしく頼むのじゃ、優子」

「こちらこそよ。よろしくねアヤメ」

と、笑顔で握手する。
ほう……。気が合いそうとは思ってはいたが、予想以上に仲良さそうだな。よかったよかっ――――

「でも、友人にも譲れないものもあるわよ……っ！」
「あいにく障害があればあるほど、やりたくなる性格での……っ！」

顔は笑顔のままで、二人の手元からはギシギシとなにかを握りつぶすような音が聞こえてきた。

「勝ち目のない戦いはやめたほうがいいわよ……っ！！」
「それはこっちの台詞じゃ……っ！！！」

だんだんと手に力を入れ、顔を近づけてる二人。ライバル同士のがんのくれ合いみたいだなぁ…。

「（ねぇ、止めなくていいのマサ？）」
「（このままだとなんだか危ない気がするな）」
「（お前らが適当に止めてきてくれ。方法は任せる）」
「「（了解っ！）」」

目で祭と歩に頼む。俺が止めに入ってもいいんだが、むしろ俺が入ったらダメな気がするからな。

「後から出てきたのに渡してたまるもんですか……っ！！」
「後も先も関係ないのじゃ……っ！！」

こちらの様子に気づかず、がんのくれ合いを続ける二人。まわりが見えてないみたいだ。だんだんと近づいていってる祭と歩にまった

く気づいてない。

「（やるわよ歩）」
「（タイミングあわせろよな祭）」
「だいたいアンタに雅夜が――――」
「お主こそ、マサヤに――――」

いまだ口論している二人の背後にまわり……

「「あらよっ、と！」」

そっと、背中を押す。突然のことに二人はなすすべもなく、前につんのめってしまい、

「「むぐっ！？」」

目の前にいたものと――――――――お互いの唇同士を合わせてしまう。

第１３１話（後書き）

別にユリってわけじゃないんだからねっ！！

感想お待ちしております。

第１３２話（前書き）

皆様方のおかげで、ついにお気にいれ登録数５００件突破！！

ありがとうございますっ！！！

第１３２話

「「むぐっ！？」」

優子とアヤメがキス。

この光景を見た皆の反応はまちまちとしていた。

「「いっえーいっ！」」

成功したことにうれしがり、バトンタッチをする祭と歩や。

「祭に歩！二人とも良いことしてくれたわ！！」

「ユウとアヤもナイス！！」

と、陽菜さんと忍は親指を突き出して笑っていたり。

「「御馳走様でした…」」

テーブルにつっぷして鼻血をダクダクと流す悟志と千夏だったり。

「ユミ、カメラカメラ！シャッターチャンスだよ！」

「わかってる…（パシャパシャパシャ！！）」

写真を撮りまくる由美と未来がいて。

「…マスター。コーヒーくれ」

「わかった」

「俺にも一つくれ。ってか大和。足震えてるぞ？」

「うっせぇ！これは武者震いだ！決してこれから怒りそうな優子様におびえてるわけじゃねぇぞ！！」

無関係とばかりに目をそらすマスターと大和と俺、となっていた。

「「……」」

この間も二人はキスしたままで硬直していた。体制を崩したことと、現実に起こっていることに驚いていることからの硬直だろう。瞬きせず、ずっと目を見開いていた。

つまりは誰も二人を助けようとせず、ただ楽しんでいただけであった。

二人が動き出したのは、それから数秒後――――祭と歩が落ち着き、陽菜さんと忍が笑い尽き、悟志と千夏が出した鼻血を拭き終わり、由美と未来がカメラのフィルムを使いきり、俺と大和がコーヒーを一口すすった時だった。

「「ぷはっ！！」」

息も止まっていたのか、二人とも大きく後ろに跳び下がり息を吐く。そしてそのまま二、三度深呼吸。

「大ジョブか二人とも？」

「「大丈夫なわけないでしょ（じゃろ）！！」」

「俺に詰め寄るな！やったのは祭と歩の二人だろ！そっち行け！」

「マサヤに言われてやりました」

「祭に同じく」

「嘘をつくんじゃねぇえええええ！！」

俺はなにもやってねぇだろうが！！

「…覚悟はできるてるわよね雅夜？」

「…やはりお主にはあの程度では足りんかったようじゃな」

腕をポキポキならす優子と、どこからか取り出したわからない鉄アレイを構えるアヤメが近づいてくる。

……紹介してただけなのに、なんでこんな展開になるんだろうな。

「俺は悪くない。無罪だ」

手をあげて無実を主張する。ここはヘタに怒らせると身が持たん。

が、優子は俺の行動にかまわず続けた。

「雅夜。皆を見てみなさい」

「…皆？」

言われた通りに見渡してみる。すると皆が全員「お前が悪い」と睨んでいることに気づく。…は？

「ちょ、ちょっと待て。これは――――」

「待たんのじゃ」

「待てよ！どう考えてもおかしいだろ！俺はなにもしてないだろ！？」

全部祭と歩がやったことだろう！？なんで俺が悪くなってるんだよ！

「…雅夜はなんでアタシ達が怒ってるかわかってないみたいね」

「女どうしでキスさせられたからだろ？」

「…本当にわかってないようじゃの」
「違うのか？」

じゃあなんだ？キスさせられるのを止めなかったことか？それともさっき助けなかったからか？

「ダメね。雅夜はなにもわかってないようね」
「そうじゃな。わからずやにはきちんとお仕置きせねばな」
「だから待て！お仕置きってなん――――――優子に鉄アレイをわたすんじゃないアヤメ！二人してそれで俺を殴る気か！？」

そしてどこからその二つ目の鉄アレイを出した！？

「ほ、ほら落ち着けって二人とも。ここはいったん冷静になってだな。――――――おい、なんで皆手をあわせて拝んでるんだ？」

まるでご愁傷さまって言ってるような気がするんだが？

「「雅夜（マサヤ）？覚悟はいいわよね（じゃろな）？」」
「できてねぇ――――――んぎゃあああああああっ！！！」

頭の両側を鉄アレイで殴られる。…あ。これはマジで……やば……い……力が……。

「おー！久しぶりにマサ君が伸びちゃってるの見るよ！」
「いつぶりだろ…」
「頭に結構いいのが入ったからな」
「さすがのマサヤでも耐えられなかったようだな」
「それよりマサ君は大丈夫なのかい？」
「大丈夫なんじゃない？十分もしたら起きると思うよ」

「陽菜。裏に寝かせてきておきてくれ」
「わかったわこーちゃん。よいしょっと」
誰かの背中に担がれ、裏に運ばれていく。これは……陽菜さんだな……。また迷惑かけちまったか……。

「ふんっ！（まったく。なんで気づかないのよ）」
「自業自得じゃ！（いい加減きづいてもよいじゃろ）」

「「（初めての唇が雅夜以外の人にもらわれちゃったってことに！）」」

第１３２話（後書き）

たぶん次回でオリ話『喫茶・翡翠屋編』は終わると思います。

次はなにかこうかなぁ～。

感想お待ちしております。

第133話

「……ん……ぅん？」

見慣れた部屋（ひすい）で目が覚める。…なんで俺こんなところで寝てたんだ？

「あ、目が覚めた雅夜？」

「優子？……あぁ、久しぶりに気絶したのか俺」

「そうよ。でも寝てたのは二十分ぐらいよ」

二十分か……。ならみんなはもう帰ってるだろうな。

「よいしょ、っと。っとと…？」

立ち上がるとすこしよろける。

「いきなり立ち上がらないの。まだ座ってなさい」

「…うーむ」

素直に座る。……最近ひよったなぁ。今度また山篭りでもやったほうがいいかな？

「まったく、アンタは自分の身体くらい気にしなさいよね」

「殴（や）った犯人がいうことか、それ？」

「殴らせて人もいけないわよね？」

「…すみません」

理由はわからんが、謝っておいたほうがよさそうなので謝っておく。

「そういえば、今何時かわかるか？」
「5時半ってところかしら。外もだんだんと夕暮れて来てるわね」
「そうか。なら今日はもう帰るか？それとも優子も泊まってくか？」
「さすがに泊まらないわよ。…って私も（・・）？雅夜は泊まるの！？」
「ああ。こっちにくると基本は泊まって昼頃に帰ってる」

そのほうが色々と都合がいいしな。

「じゃあ私も泊まるわ」
「即決かよ！？…まぁいいが。俺はマスターに行っておくから、優子は恋さんか秀吉にでも伝えておけよ」
「ええ。えーっと、『今日は家に帰りたくないのっ！！』っと」
「その誤解をまねきそうなメールはやめてくれ」
「送信送信♪」

聞いちゃいねぇ。

「どうなっても知らねぇぞ？…マスター！今日、優子も泊まっていっても大丈夫か？」
「優子君も？別に問題はないが……いいのか？」
「？いいのかって言われても、大丈夫じゃ――――――」
「聞いたわね祭、歩！今日は酒盛りよー♪」
「「いやったぁああ！！」」

そっちの心配かよ…。ってか優子に酒はやめてくれ。

「高校生で酒盛りとはなんじゃ！？」
「お、アヤメ。お前も泊まっていくか？」

「な、ななにをいっておるのじゃお主は！！」
「ん？ああ、この人達酒入ると大変だからな。常識人はすこしでも多くいたほうが助かるからな」

これでアヤメも酒飲んで、ヘンは酔いかたしたらやばいけどな。

「アヤメ君も泊まっていくといい。今日はお母さんが帰ってこなくて一人らしいじゃないか」
「う、うむ。そうなのじゃが…」
「母親が帰ってこないから一人？父親はどうしたんだ？」
「父上はすでに死んでおる。今は母上と二人で住んでおるのじゃ」

あちゃー。やばいとこ触れちまったか？

「す、すまん。知らなかったとはいえ、聞いてしまって悪いな」
「なに気にするでない。ずっと昔のことじゃ」
「それでどうするアヤメ君。泊まっていくかい？」
「うむ。御好意に甘えさせてもらうのじゃ」

アヤメもオーケーだな。一応、マスターのところの家は部屋が沢山あまってるから三人も泊まることになっても困ることはないから。

「優子。どうだった？」
「うん大丈夫よ。『今日も雅夜君と泊まるのね。別にいいわよ。PS．明日は赤飯でいいかしら？』ってちゃんと許可くれたわよ」
「ツッコム場所が多過ぎるから、スルーしていいか？」
「ええ、もちろん」

ありがとな。

「んじゃマスター。優子とアヤメの泊まる部屋、整理してきますね」
「頼んだ。雅夜の部屋の両隣が空いてたからそこを使ってくれ」
了解っと。
「雅夜の部屋!?なんでアンタの部屋がこっちにあるのよ」
「週一で泊まるからな。それにねーさんの部屋もあるぞ」
「…家がでかいとは聞いておったが、そんなに部屋は余っておるのかの？」
「昔ながらの日本家屋だからな。いくつ余ってるかは知らないが、余裕で泊まれるから安心しろ。それより、二人とも片付けしに行くぞ。手伝え」
「「はーい（なのじゃ）」」

第１３３話（後書き）

『喫茶・翡翠屋編』は一応これで終了です。

この後すこし、おまけを書きます。

感想お待ちしております。

第１３４話

泊まるための部屋を用意するため、優子とアヤメを連れて鳴海家にやってきた。

「うわぁ～、ホントにでっかいわね」
「家だけでなく庭もデカいのぅ。しかも道場らしきものまで見えるのじゃが？」
「あ、見て！あっちには池もあるわよ！」
「うむ。ししおどしも備え付けてあるようじゃな」

二人とも予想以上だったのか、驚きながら庭を見渡していた。

「ほら、庭を見るのは後にしとけ。マスター達が帰ってくる前に部屋の片付け終わらせるぞ」

俺も最初見たときは驚いたっけなぁ、と思いながら玄関の鍵を開ける。

「わかってるわよ雅夜」
「まずは掃除じゃろ？」
「……そういえばお前らは（一応）優等生だったな」

きちんとやるべきことがわかってるみたいだな。はぁ…明久達もすこしは見習って欲しいな。

「「おじゃましまーす」」

いらっしゃい、っと。

「へ～、なかもすっごく綺麗じゃない。此処にいるだけでも和みそうね」

「完璧な和風…と思っておったが、洋風なところも沢山あるのう」

「お前ら珍しいからっていちいち口に出して驚かなくていいからな」

「ダメよ雅夜。こういうのは言わなきゃ伝わらないのよ」

「そうじゃぞマサヤ。此処がどういう空間なのかはワシらが言わなければ伝わらないのじゃ」

んなもん知るか。こいつらのメタ発言は放っておくとして。

「「しっかりわかってるじゃない（ろ）」」

はいはい、放置放置（スルースルー）。

「とっとと二階行って片付けするぞ」

二人を先導するように階段をのぼっていく。鳴海家（ここ）の階段はすこし急なので、二人は手すりにつかまりながら登ってきていた。

「そういえばさアヤメ。祭ちゃんとか歩君の部屋も二階のあるの？」

「マツリとアユムかの？うーむ……。マスターと陽菜さんは一階に寝室があると行っておったのは覚えてあるのじゃがのぅ……」

「祭も歩も皆一階だ。普段使うのは一階だけで、二階は泊まりようの空部屋がほとんどで、他に宴会用の広間の一つあるだけだぞ」

空部屋は六つあるが、二つはねーさんと俺で使っているから実質四部屋だけどな。

「宴会用!?……すごいわねぇ」
「ここがそうなのじゃな。たしかよく使っておると皆から聞いたことがあるのじゃ」

まぁ、宴会好き……酒好きが多いからな。大人子供あわせて。

「ちなみにその結果どうなってるかも聞いてるか？」
「……ほとんどが狂乱で終わってるそうじゃな」
「……へ？……狂乱？」
「う、うむ。お祝いムードで始まって、狂乱で終わる。ワシはそう聞いておるのじゃ」

お祝いムードだけじゃなくて悲しみや慰めムードみたいな時もあったけどな。主に誰かが失恋した時、とかな。

「ホントなの…？」
「紛れもない事実だ。たいていは陽菜さんが何かしでかしたりして、大変なことになるからな」
「さすがに嘘……じゃないわね。陽菜さんだったらやってもおかしくないわね」
「ああ」

最初に被害をくらったのは……小五だったな。むりやり酒（テキーラ）を飲まされて、その後……トラウマを作らされたんだったな。

「ま、今はそんなこと考えなくていいだろう。ほらついたぞ」

話してる間に部屋の前に到着。廊下を挟んで三部屋ずつになっており、右側の真ん中が俺で、左側の手前がねーさんの部屋になっている。

…ん？そういえばマスター、あいてるのは俺の部屋の両隣って言ってたよな？左側奥二つは使ってるのか？

「ちょっとまっててくれ」

「え？あ、う、うん」

まずは真ん中の部屋。

ガチャ

「……」

バタン

さて、奥の部屋は……

「ちょ、ちょっと雅夜！どうしたの？」

「いきなり扉を開けたかと思えば、いきなり閉めおって。なにがしたいのじゃ？」

「いや、気にしなくていい。というより絶対気にするな」

この部屋はマズイ……。二人に中を見られたら、危ないことになる！

「なによ。そんなこと言われたら余計気になるじゃない」

「ダメだ。今回ばかりは絶対に見せられん。絶対にだ」

「なるほどのぅ。見られたらマズイものでも中にあるみたいじゃな」

優子もアヤメも、見る気満々だな。…だがっ！今回は真面目に見せ

られないんだよ！！

「優子にアヤメ」
「なにかしら？」
「なんじゃ？」

ジリジリと扉へと近づいてくる二人に言わせてもらおう！

「この部屋の中を見たら、一週間お菓子作ってやらないからな」
「「奥の部屋はどうなってるの？（おるのじゃ？）」」

よしっ！二人とも引いてくれたみたいだな。

「奥は平気であってほしいが……」

ガチャ

「……ん。ただの物置になったようだな」

というより邪魔なものを押し込んだ、ってところか？

「どれどれ。……たしかにそうみたいじゃな」
「わけの分からないものまであるわね。……なにこれ？どこかの民族のお面かしら？」
「こっちには拷問器具（アイアンメイデン）があるぞ」

ただ（・・）の物置じゃないなこれは。ヤバい物置だな。

「出よう。此処は長居したら危ない気がする」
「「賛成」」

部屋を出て、念の為鍵をかけておく。

陽菜さん達……どうしたんだこれ？

第１３４話（後書き）

一週間ぶりの更新（汗）

遅くなってすみませんでした！

感想お待ちしております。

第135話

「気を取り直して、部屋の掃除始めるか」
「そうじゃな」

この二つの部屋は無くして……忘れておいたほうがいいな。

「散らかってないといいんだけどな……ダメか」

期待を裏切るように見事に台風が通ったあとのような部屋だった。

「これは片付けるのには時間がかかりそうね」
「さっきの物置が整頓されておったように見えるのじゃ」
「だな。一応もう一つのほうも見てみるか？」
「そうほうがよさそうね」

簡単なほうを先にやっておいて、祭たちが帰ってきたら手伝わせてやったほうが効率はいいはずだ。

「これで向こうも同じような状況じゃったら……」
「その時は諦めて誰かの部屋に相部屋させてもらえ」

ま、片方の部屋が片付けられたらそこに二人で寝ればいいんだけどな。

「んじゃ……行くぞ？」

扉を開けるまえに二人に確認をとる。覚悟は……

「「（コクリ）」」

十分のようだ。二人とも神妙な顔つきで頷いてくれた。そのノリの良さ、好きだな。

「…では」

ガチャ　　キー……

ゆっくりと扉を開けていき……

バンッ！！

「「いっらっしゃぁーい！！」」

思いっきり開かれて、中から息を潜めていた祭と歩が飛び出してくる。

「やっぱり中にいたんだな」

「やっぱりって……気づいてたんだ」

「まぁな。お前ら、俺たちが奥の物置に入ってた頃にやってきてただろ？」

「おしい！ちょうどマサヤがあの部屋から出たころには此処についてたのよ」

そいつは気付かなかったな。どこから入って……ああ、窓か。

「にしても、つまんなーい！少しはマサヤを驚かすつもりだったのに！」

「残念だったな。俺を驚かすのはもう少し精進してからやれ」

「後ろの二人はノックダウンしてるけどね」

「って、おい！大丈夫か二人とも！！」

いつのまにか優子とアヤメは二人して目を回して倒れていた。

「「キュー……」」

あ、なんか可愛い――――じゃなくて、ちょうどいいな。

「祭。優子とアヤメをリビングにでも運んでおいてくれ。介抱を頼む」

「まかせんしゃい♪」

変な方言は使わなくていいからな。

「マスターと陽菜さん、ねーさんは後どれくらいで帰ってくる？」

「三十分くらいで来ると思うよ」

三十分か……。なら、

「充分だな。帰ってくるまでに片付け終わらせるぞ」

「ん。了解」

さてと。さっそく取り掛かるとしますか！

二十分後……

「どー？終わったぁー？」

ちょうど片付け終わったとき、祭がお盆を片手に部屋に入ってきた。

「って、聞くまでもなさそうね」

「ああ。これだけやればいいだろ。女子からみて、これで大丈夫か？」

「全然大丈夫よ。充分すぎるぐらいね」

ならよかったな。これでダメだしくらったら帰ってるところだったのに。

「祭、飲み物ちょーだい」

「わかってるわよ。ちゃんと持ってきてあるわ」

「ナイス気配り！」

「はい、水道水」

「前言撤回。せめて麦茶持ってきてよ」

「いやよ。めんどくさい。そんなことというなら自分でとってきなさいよ」

「ま、別に水道水でもいいんだけどね」

あらためて思うが、仲いいよな、この姉弟（ふたり）。いろんな兄弟姉妹見てるが、ここまで仲の良いのはあまりいないんだよな。

「ん？どうしたのマサヤ？変な目でこっち見て」

「変な目ってなんだ、変な目って。ただ考え事してただけだ」

「近親相姦について？」

「んなわけあるか！ってかこの場で言う言葉かそれ！」

「さぁーね。ただ、うちの学校でそういう内容の薄い本が流れてるのを思い出してね」

マジかよ！？……いや、よくあることなのか？文月（うち）でもＢＬ本が（腐）女子の間で広まってることだし。

「ふーん、そうなんだ。あ、そうだ。優子とアヤメならたぶんもうすこしで目覚めると思うよ。父さん達が帰ってくる前には、ね」

んじゃ、俺たちも下に降りとくか。

祭が冷や汗を流してるように見えたのはきっと、気のせいだったに違いない。

第１３５話（後書き）

祭と歩が出てこさせた時に、頭のなかに

どこからともなく、やーってくーる♪　たーらこ♪　たーらこ♪

たっぷりたらこ♪

が、流れたのはなんでだろ？（苦笑）

感想お待ちしております。

第136話

～side祭～

「「ただいまー」」

部屋から戻ろうとしたら、父さんと母さんとみーさんが帰ってきた。
もう翡翠の掃除は終わったみたいね。

「「（あ、おかえり）」」

小声で返事する。大きな声ださないように気を付けなくちゃ。

「（？なんで小声なの？）」
「（今、リビングで優子とアヤメが寝てるの）」
「（またなにかしたのか？）」
「「（違うよ。疲れて寝ちゃったみたい）」」

呆れたように肩をすくめながら即答する私と歩。言葉を出さず、目も合わせなくても心はしっかりと通じてる。

「（あー、初めてのバイトだもんねアヤメちゃん。寝ちゃってもしょうがないかぁ）」
「（優子君はこっちの空気に馴染むのに疲れた、ってところだな）」
「（そうね）」

内心でホッと一息吐く。私達が驚かしたのが原因とはバレずにすみそうね。

「（二人はリビングで寝てるのよね？記念に写真でも撮っちゃいましょう）」
「（そのつもりだよ）」
「（今部屋からカメラ持ってきたところなの）」
「（さすが私の子供達！わかってるわね）」

お互いに指を突き出す。…父さんとみーさんは相変わらず呆れたような顔してるけど、楽しんでるのはわかってるわよ。

「（そういえば、マサ君はどうしたの？）」

おっと！そうだよ、今はマサヤだ！早くいかなくちゃ！

「（付いてくればわかる）」
「（母さんが喜ぶのは保証するよ。絶対にね）」
「（…なんだか面白そうな雰囲気ね）」

だんだんと母さんの顔が悪人顔になってくる。この先の状況が何パターンくらい思い浮かんだのかな？

「（あんまり雅夜を怒らすなよ）」
「（追い詰めすぎないよーに気を付けてね？）」

わかってるって良心組（ふたりとも）。今回はちゃーんと、私たちはなにもしてないしマサヤも喜ぶことだから。

～ｓｉｄｅ雅夜～

カシャカシャカシャカシャ！！！

「……ぅん…？」

騒がしいシャッター音で目が覚める。うっせぇ……。

「静かに寝させてくれ……」

こっちはちょっと疲れてるんだ。少しくらい寝させてくれ。

パシャパシャパシャパシャ！！！

だが、シャッター音は鳴り止まない。だぁーっ、くそったれっ！なんなんだよ！

目を開けて、原因を確認する。予想通りの陽菜さん、祭、歩の三人がカメラでこっちを撮っていた。

「いい加減にしてくれ…」

もう目が覚めちまったじゃねぇかよ。

「ったく……ん？」

三人に制裁するために立ち上がろうとするが、―なにかが両足にのっているので立てない。

「……おいこらそこの三人。なにしてくれやがる」

両足にのっている二人を起こさないように問いかける。

「マサヤ。勘違いしてるみたいだけど、私達はただ写真を撮ってるだけだよ」

「嘘を吐くな。じゃあ誰がやったって言うんだ？」

「誰も。しいて言うならそこの二人が」

俺の足をまくらにしてすやすやと眠っている優子とアヤメを指さしながらいう歩。

「だから嘘を吐くな。寝てただろこいつら」

「驚いたよ。二人ともマサヤに気付いて起きたかと思えば、ふらふら～って近づいていってそのまま足を枕にして寝ちゃったんだもん」

「嘘だな。まだ優子だけなら納得できるが、アヤメまでやるはずはない。だからそれは嘘だ」

「「「「「……はぁ」」」」」

ため息吐かれた！？しかもマスターとねーさんまで！？

そんなことに気付かず、優子とアヤメは俺の足の上で気持ちよさそうに眠っていた。

第１３６話（後書き）

膝枕ならぬ足枕。

枕にしてるほうは気持ちいいかもしれませんが、

枕にされてるほうはすっごく足しびれるんですよね（笑）

感想お待ちしております。

第137話

「ま、いいや。ほら起きろ優子、アヤメ」

えー、つまんないーという陽菜さんの声を無視して二人の頭をペシペシと叩く。

「んにゃ……」

まず最初に、この起こされ方に慣れている優子が反応する。

「ぅ……ぅむ…？」

次にワシの睡眠を邪魔するな、という感じでアヤメが俺の手を払おうとする。

「こういう行動を無意識にやってるから面白いのよね～（パシャパシャパシャ）」

そして撮影を再開する陽菜さん。そばにカメラがもう一つ置いてあるのはなぜなのだろうな。

「……コーヒー煎れてくる」

付き合ってられんとばかりにキッチンに行ってしまうマスター。

「う～ん……お母さんに連絡したほうがいいかな……？でも、まだちょっと早い気がするけど……う～ん」

携帯を片手にうんうんと悩んでいるねーさん。連絡したらあの人、文字通り飛んでくるからな。絶対にやめてもらいたいところだ。

で、祭と歩はと言うと、ランニングに行っていた。

日々ではなくて、食前の日課（一日三回）でこなしているのですごいもんだ。

ってか、相変わらず誰も起こすの手伝おうとはしてくれないのな。

「…ん……雅夜…？」

目を半分開けた状態で上半身を起き上がらせてくる優子。

「おう。目、覚めたか？」

「十びょー待って……」

と、目をつぶる優子。すぅ…すぅ…と聞こえ始めるが、きっかり十秒後。

「ん、おはよ雅夜」

「今は夕方だけどな。って、あーヨダレ垂れてるぞ」

「え、嘘っ！？どこどこ！？」

「ちょっと動くな。ほら、拭いてやるから」

「あ、ん…」

常備してあるハンカチを取り出し、拭いてあげる。……俺の足にはついてないよな？……よし。大丈夫みたいだな。

「ありがとね」

「どういたしまして。そりより、そろそろどいてくれないか？」

片足でもいいから伸ばしたいんだが。

「どうくってどこから……あら。足枕してもらってたのねアタシ」

「正解。祭と歩によると、俺がここで寝たらふらふらと寝ぼけながら俺の足を枕にして寝たんだとさ」

「でも、なんでアヤメまでしてるのよ」

「知らん。お前と一緒にしてきたらしい」

「……ま、理由はわかってるからいいけどね」

「？」

複雑な表情をしながら呟く優子。なにか思うところでもあるのか？

「それより……いい加減起きろアヤメー（ペチペチ）」

「むぅ……なんじゃいったい…？」

「起きたか？」

「できれば寝させてもらいだいのじゃが……」

「まだ夕方よ？ほら、いいから起きるの」

「う、うむ…」

目を擦りながら起き上がるアヤメ。仕草が子供っぽく、なんだか可愛らしいな。

「ん、んー……。うむ…、おはようなのじゃ…」

「だから今は夕方だからな。というか、起きてるのか？目は閉じたまんまだが」

「大丈夫、起きてるのじゃ…んーっ！」

そう言ってアヤメは気持ちよさそうに背伸びをし、首を左右にこきこきと動かして目をゆっくりと開けて、

「……へ？」
「おう、おはよう…って、ん？」
目の前にいる俺を見て固まるアヤメ。おいおい、大丈夫か？
「な、なななんでお主がこんなに近くにおるのじゃ？」
「アヤメが俺の足を枕にして寝てたから」
「なんでワシはお主の足を枕にして寝ておったのじゃ？」
「知らん。アヤメが自分からやったこと。だから俺は悪くないはず。なのになぜ、お前は鉄アレイを振りかぶる？」
「自分の胸に聞いてみるのじゃ！！」
そう顔を真っ赤にそめながら鉄アレイ（だからどっから取り出したんだ？）を振り下ろしてくる。が、
「くらうのは面倒なので、普通によけさせてもらう」
「なんじゃと！？」
床にあたる寸前で手のひらで受け止め、床を傷つけないようにする。
「マサヤのくせに生意気じゃ！よけるでない！」
「断る！俺は何もしてないのに、攻撃を食らわなくちゃいけないなんて理不尽だ」
「ワシに足枕しておったことにはかわりはない！覚――――」
もう一つの鉄アレイ（だからどっから出てくるんだよ！）を取り出し、振り上げようと――――
「はいストップアヤメ。雅夜の言ってることは本当なのよ？」

できなかった。

「うぐっ。じゃ、じゃがせめて一発は…」

「ダーメ。はい没収～」

ナイス優子！これで殴られる心配はなくなったな。安心安し――

――ぐはっ！！

拳で殴られました。痛てぇ……。

第１３７話（後書き）

日常風景を書くのって、いがいと難しいですね。

どこまで詳しく書いていいのか、どこまで大雑把に書いていいのか

その境界線がよくわからないよ（汗）

感想お待ちしております。

第１３８話

※色々と酷いので、食事シーンは省略です♪

「うぇっぷ！……（ゴクゴク）ぷふぁー！」

胃からこみ上げてくるものを、水を飲んで無理矢理押さえ込む。

「……はぁ」

「え、えと……大丈夫かしら？」

「ああ…。夜風にでもあたってればすぐに治る」

縁側に腰掛け、月を眺める。今日の夜はいい感じに冷たい風がふいており、気持ち良い。

「隣、座ってもいいかしら？」

「断る理由がないな。優子なら大歓迎だ」

「じゃあ座るわね」

微笑みながら隣に座る。そしてこてっ、と俺の肩によりかかってくる。

「お、どうした？」

「…私も疲れちゃったわ。すこしくらいこうしててもいいでしょ？」

「遠慮するな。すこしじゃなくて寝るまでずっとこうでもいいぞ」

「ありがと。そうさせてもらうわ」

体を完全に預けて気持ちよさそうな、うれしそうな顔をする優子。

優子の頭を撫でながら片手で水を飲む。

「（ゴクゴク）ん。で、どうだ？こっちの奴らとは馴染めそうか？」

「もちろんよ。皆面白くて楽しくてやさしい、いい人たちすぎてこっちが戸惑うくらいよ」

「お人好しが多いからなぁ」

「その筆頭がなに言ってるのよ」

「俺が筆頭？まさか。俺がお人好しなのは認めるが、筆頭とは程遠いだろ」

「（これは何言ってもダメね）それもそうね」

ん？なんでため息吐いてるんだ？

「あ、そうだ。ね、聞かせて。皆との出会ったときのこと」

「皆との出会い？なんでまたそんなことを」

「いいじゃない。それになんかネタあるんでしょ？特に忍とか、絶対にあるでしょ」

「う～ん…あるにはあるが……、ダメだな。あの頃の話をすると怒るやつがいるから」

あの頃のことを語るには、あいつの部分を隠して話すには無理があ

る。それに、優子にはちょっと話づらいしな。

「ふ～ん、そっか。理由があるなら仕方ないわね」
「やけに素直だな。もうすこし引っ張るかと思ったんだが」
「そりゃあ、聞きたいわよ。でも怒るってことは、嫌なことなんでしょ？だから無理矢理聞くようなことはしないだけよ」
「そいつはどーも。本人に許可が取れたら話してやるよ」
「期待してるわ」

本人は語りたくないだろうから、俺が言うことになるんだろうけど。

「じゃあ他は？まさか全員全部が語れないってことはないでしょ？」
「んー、語ることがないな。鳴海一家は親族だし、忍・千夏・由美は語れないし、未来・大和・悟志の三人は普通に店員と客として出会ったからな。あ、アヤメも同じか？場所は翡翠じゃなくて文月だけど」
「見事に女子ばっかね。女子7：男子2じゃない」
「そんなところだろ。ま、あいつらから男の話しはあまり聞かないからな」
「皆すごく可愛いと思うけど……」
「告白はされてるけど、全部断ってるらしい」
「あら、そうなの？」

千夏と大和に至っては女子からも告られてるみたいだ。（忍情報）

「全部断ってるの？彼氏作ってみようとは思わないのかしら？」
「さぁ、そこまでは知らん。けど、あいつらの男の基準は俺らしい」
「……なるほど、そう簡単には無理ね」

おかげで杜丘の男子には恨まれっぱなしだ。

「雅夜ってなにげに高スペックなのよね。頭がよくて、スポーツ優秀。顔もいいし、貯金もあって、お金にはあまり困っていない。家事炊事は出来て、お菓子作りが得意。気遣い上手で、面倒見がいい」
「ずいぶんと持ち上げるな」
「全部事実よ。雅夜が基準となると、並みの男子じゃ無理ね」
「〈外見じゃなくて中身〉だというのに」
「今の世の中、〈中身だけじゃなくて外見も〉なの」

自らハードルを上げてるんだな。なるほど。

第１３８話（後書き）

感想お待ちしております。

第139話

「そういえば、歩君と悟志君はどうなの？やっぱりモテるの？」
「悟志はモテるな。今のところ全て断ってるけど」
「基準が雅夜だから？」
「んなわけあるか！！俺も悟志もＢＬ（そっち）の趣味はない。ノーマルだ」

それに悟志は……いや、俺が考えることじゃないな。

「じゃあ歩君は？」
「あいつはあんまり聞かないな。『友達としては良いんだけど、彼氏にはちょっと……ね』って感じが多いいな」
「あー確かにそういう感じね。『一緒にいると楽しいけど、うれしいってほどじゃ……』みたいな？」
「実際にそれもあったな」

他には『ワクワクはするけど、ドキドキはしないのよね』とかもあったっけな。

「…ちょっと待って。じゃあ、なに。あんなに可愛い子ばっかりなのに、だれも付き合ってる子はいないだけじゃなくて男の影すらないの？」
「まぁ、そうだ――――――いや、いる！最近になって一人、男の影が見えてきたやつがいた！」

そうだ！あいつがいるじゃねぇか！

「男が雅夜ってのは無しよ」
「違う違う。普通にそのうち付き合いそうな男女がいるってことだ」

「…マジ？」
「マジもマジ。大マジ」

きっかけさえあればすぐに付き合ってもおかしくないほど、いい感じな二人だ。

「誰誰誰！？どの子がなの！？由美？未来？千夏？忍？祭？大和？相手は誰！？杜丘高校の人？雅夜の知ってる人？アタシは知ってる？それとも私達の知らない人？出会いはどうだったの？普通に？ドラマチックに？」

取り乱しすぎだろ！？

「落ち着け。それとアヤメの名前が挙がんなかったぞ」
「アヤメはいいの！」

なぜに！？……いや、聞いたら怖そうだから聞かないでおこう。

「で、誰なの？もちろん教えてくれるわよね？」
「ああ。まずどっちから聞きたい？男ｏｒ女」
「女からでいいわ」

無難な選択だな。オーケー。だが、

「教える前に。優子は誰だと思う？考えてみてくれ」
「え？……なるほど、推理しろってことね？」
「察しがよくて助かる」
「いいわ。じゃ、正解だったら雅夜は一つだけアタシの言うことを聞くってことで」
「ちょっと待て。なんだそれは？」

「拒否は認めないわよ。雅夜から仕掛けてきたことじゃない」
「うっ……。だ、だが、俺が本気でいやなことはしないぞ！」
「むぅ……。例えばどんなこと？」
「それすら言いたくない」

ヒントを与えた時点で危ないからな。

「よほど言いたくないみたいね。わかったわ。その条件でいいわよ」
「よし、交渉成立だ」

お互いに笑みを浮かべる。……ん？待てよ……。優子が間違えた時どうするか決まってないような……。

「優子が間違えた時はどうするんだ？」
「もちろん、なにもなしよ。もう交渉は成立したの。今更ルール変更はできないわよ」
「…ま、いっか。七分の一の確率だし、間違えてあたりまえだからな」

それに優子に言うことを聴かせたいことなんて特にないしな。

「じゃあ、始めるわよ？七人――由美・未来・千夏・忍・アヤメ・祭・大和、いや、アヤメは外していいから」

だからなんでアヤメは外せるんだ？

「六人のなかから一番可能性が低いのは……忍かしらね。雅夜にべったりだし、他の男なんて認識すらしてなさそうだしね」

清水もそうだな。

「次は祭ね。歩君と同じで友達としてならＯＫって感じかしらね。それに近親相姦好きそうだし」

……俺はつっこまないぞ。けっしてさっきの会話と祭の冷や汗を思い出したからじゃないからな。

「次は……大和かしら？あういうタイプなら好きな人が出来た時、女の子らしい格好をしはじめると思うわ」

私服だけじゃなくて制服までも男物来てるからな。確かにそのとおりだ。

「あと三人。こっからが難しいのよね。千夏、未来、由美。三人とも出会いがあってもいいと思うし……」

「お、ここでギブアップか？ちなみに感で答えてもダメだからな」

「まだよ。まだ、これからよ」

チッ。なんか雲行きが怪しくなってきたから止めようと思ったんだがな。

「……ここは逆の発想――――男が誰を選びそうかを考えるべき。雅夜、その男ってどんな子か知ってるのよね？」

「知ってるが、教えんぞ。ヒントになっちまうからな」

「ありがと。それだけでも充分よ」

は？教えないのに充分って……おいおい、まさか！？

「ヒントになるってことは、わかりやすい性格なのかアタシがよく知ってる子なのかのどっちかってこと。でも、名前も教えてくれな

いってことは後者。確か、雅夜言ったわよね？」
「な、なにを？」
「最近になって出会った、って。最近出会って、アタシがよく知ってる子。つまり清涼祭の時に出会った文月学園の生徒ね」
こ、こわっ！よくそこまで考えられるな！
「さらに清涼祭の時に出会った子として考えられるのは、すれ違いや一目惚れは付き合うかもしれないってことから除外できるし、ナンパもありえないから、入ったお店（クラス）のなかで話した人だけ」
「ナンパがうまくいったかもしれないぞ？」
「ありえないわ。だって、ナンパしてたのってほとんどFクラスの人じゃない。成功してたら暴動になってるはず。でもそんな暴動はなかった」
よく考えてやがるな。
「それで次考えるのは、三人が入ったクラス。未来と由美はFクラスだけ入って、あとはどこもまわってなくて、千夏は一度Dクラスに行ったけど、清水さんに会いにいっただけだから実質千夏もFクラスだけしか行ってない」
…そういえば、そうだな。皆、俺に奢らさせて（アヤメは自分で払ってるが）食ったらそのまま帰ったんだったな。
「だから、Fクラスの生徒ってことになるわ」
「さすがは優子。だてにAクラスに入ってるわけじゃないな」
「ここまでくれば人物の特定は簡単ね。姫路さんと島田さん、ナンパしそうなFクラスの男子を除くと…、坂本君、土屋君、吉井君、秀吉、雅夜の五人。まぁ、雅夜は除くから四人ね」

「五十人いたのが、いっきに四人に減ったな」
「Fクラスだもの。で、さらにこの四人の中から女性と付き合うことができそうなのは……いないわね」
「……わぁーお。ゼロになったがどうするんだ？ギブアップか？」
「いいえ、違うわ。ここでまた逆に考えるの。付き合うことができそう、じゃなくて付き合えなさそうなのを考えるの」
「ふむふむ」
「まず坂本君。坂本君には代表がいるから無理ね。もし付き合おうを考えてるのなら、今頃目が無いわ」
「命もなさそうだな」
「次に吉井君。吉井君は坂本君と同じで、姫路さんと島田さんがいるから無理なのもあるし、雅夜と同じ鈍感ヘタレだから無理ってのもあるわね」

俺がヘタレだって？ふざけんな――――――――何度か一緒に寝たのに手を出してないから言われたのか？それだったら仕方ないな。

「そして土屋君。……で、秀吉」
「おい飛ばすな」
「言わなくてもわかるでしょ？それに土屋君に彼女ができそうだったら、愛子が黙ってないわよ」

まぁ、確かに。康太とは話しが合わなきゃ付き合えそうもないからな。

「で、秀吉は？」
「……ありあえなくもないのよね。男として認識して秀吉に接すれば、秀吉は感動したりよろこんだりするからね。そっから進展していってもおかしくないわ」
「俺の知り合いってのもあるから、気兼ねなく話しかけれたしな」

「ええ。だから相手の男は秀吉ね」
「正解だ」

第１３９話（後書き）

木下優子、本気発動！！

ひさびさにＡクラスとしても威厳が持てた気がする（苦笑）

感想お待ちしております。

第１４０話

「よくそこまで頭が働くもんだな」
「雅夜には負けるわよ。でも、そう……。秀吉にもついに春が来たのね」
「いい出会いがあったからな。出会いは大切に。そうすればいいことが必ずある、ってことだ」

偶然でも、出会いは出会い。物事の全てには意味がある。昔、マスターに教えてもらったんだっけな。

「雅夜は、…皆と――――アタシと出会えてよかった？」
「……ああ」

良いもなにも、最高に決まってるだろ。優子に出会ったからこそ、今の俺がいるんだ。

「なんで少し言いよどむのよ」

俺が迷ったとでも思ったのか、優子はすこし声のトーンを落としていう。
今のをめんとむかっていうのもなんだし……。なんか違うこと言っておくか。

「初めて会った日のことを思い出してたんだよ。特にほっぺたの感触を、な」
「そこまで思い出さなくていいわよ。まったく、雅夜はもう…」

顔をほんのりと赤く染めながら、照れたように言う優子。いや、実

際に照れてるのか？

「まぁ、いいわ。でも、続きは女のほうがわかってからにしましょ」

「残り由美・未来・千夏の三人だっけか？」

「ええ。さっきはここで詰まったけど、相手が秀吉なのがわかったから一人にしぼれそうね」

「そうなのか？」

「相手が秀吉、ってのは雅夜が思っている以上にカギになるのよ」

ふふん♪と、得意満面の顔になる優子。今は座ってるが、立ってたら腰に手を当てて胸を張っていそうだな。

「まずさっきも言ったけど、秀吉をオトすなら最初から男として認識してあげなきゃいけないわね」

「そうだな男相手として接してあげなければ、秀吉は落とせないもんな」

「だから秀吉を男として見抜けるかどうかが一つ目のカギ」

これだけでもほとんどの人数が減るんだよな。文月学園でも……十はいないんじゃないか？

「だが……三人とも見抜けそうだが？」

「甘いわよ雅夜。由美と未来は見抜けるとしても千夏には無理なのよ」

「そりゃ、またどうして？」

「千夏って父親が警官なんでしょ？それで千夏もその仕事が好きでよく手伝っているって聞いたわ」

「ああ、そうだな。（俺もたまに手伝わされてるが……今は言わなくてもいっか）」

でも、なんで無理なんだ?警官なんだから、人を見極めるのはむしろ得意分野だろう?

「雅夜もわかってると思うけど、警官は人を見極めるのが仕事。男っぽい女、女っぽい男の区別をつけるなんか簡単でしょうね」

「だな。だったら秀吉も見抜けるだろ?」

「いい雅夜?アタシの父さん――――父さんの友達が優秀な警官?みたいらしくてね」

「……それ榊さんじゃね?」

「名前まで聞いてないからわからないわ。で、その人から聞いたらしいんだけど、優秀な人ほど人を外見じゃなくて中身で判断してるのよ」

最近じゃあ、外見からじゃ想像もつかない奴が危ないことをやってたりするからな。確かにその通り……って、ちょっと待て。

「秀吉は男だ。中身で判断したらむしろ間違えないだろ?」

「……ねぇ雅夜。文月学園ではアタシと秀吉、どっちのほうが男子に人気あるかしら?」

「優子に言うのもなんだが、ぶっちゃけ秀吉だな。皆、優子より秀吉のほうが可愛い!って感じだし」

「なのよね。じゃあ、アタシと秀吉が同じ女の子の格好したら、どっちがより女の子らしく見える?」

「俺は優子だが……。まぁ、他の奴らは秀吉のほうが女の子らしいと思うんじゃねぇか?」

「悔しいけど、そうなのよ。秀吉は男らしく振る舞いたいと考えてるけど、中身からして女の子以上に女の子らしいのよ」

「だから、中身で判断しても女と思うってことか」

言われてみれば、そうだな。外見は女、中身も女ってなると男とは

思えないもんな。

「これで後二人。二択になったが、最後まで考えなければダメだからな」

「大丈夫よ。最後まできちんといけるわ」

行けるってことは、もうわかってるんだな。

「最後のカギは――――――三人の性格」

「ほぅ……」

三人ってことは秀吉のも考えてるのか。

「まず秀吉。まわりにいるのが、皆アクが強すぎるから振り回されてるでしょ？特に雅夜とか吉井君とか坂本君とか土屋君とか姫路さんとか島田さんとか雅夜とか」

「俺が二回でてるぞ。否定はせんが」

「つぎに由美。未来の世話役で、いつも引っ張られてるってイメージがあるけど、実際は悪戯好きで。怒ると怖いらしいわね」

「ああ。俺でも止めるのに一苦労するぐらいだ」

「最後に未来。ムードメーカー兼ペットでいつも楽し騒がしな子。なんだか吉井君と似てる感じがするのよね」

「…たしかに雰囲気が似てるな」

俺でも気付いてないことをこうも簡単に気づくとはな。

「三人ともだいたいこんな感じであってるわよね？」

「ああ。よく見てるなぁ…。俺より知ってるんじゃね？」

「上辺だけよ。深いところは全然知らないわ」

充分だろ。

「ここまで来るとあとは簡単よね。振り回されてる秀吉には、同じ引っ張られてる由美より引っ張っていく未来のほうが相性はいい。それに秀吉って吉井君と仲良いし、似てる未来とも仲良いはず」

似てるからって理由で仲良くなってるわけじゃないけどな。

「だから、女の子のほうは未来ね」

「よくできました（パチパチパチ）」

凄いな。最初はここまでたどり着くとは思わなかったんだがな。

「秀吉と未来ねぇ。たしかにお似合いなカップルになりそううね」

「まだ一回しか会ってないのに、お互いに好きみたいでな。くっつくのも早いかもしれん」

「じゃあ、今度は秀吉も連れてこっちに着ましょ。どうせいつかは連れてくるつもりなんだから、早いうちがいいと思うわ」

「わかってるって」

逆にこっちの奴らを文月のほうに連れていくとかでもいいな。Fクラスで騒ぎが起きるかもしれないが。

「罰ゲーム、忘れてないわよね？」
「ですよねー！ちくしょーっ！！！」

第１４０話（後書き）

言えることはただ一つ。

秀吉ドンマイ（；＾ω＾）

感想お待ちしております。

バカテスト第十三問目……ではなくて（前書き）

バカテストを考えるのが苦手な作者が書く人物紹介！

今回は祭と歩の二人です！

バカテスト第十三問目……ではなくて

名前：　鳴海　祭　（なるみ　まつり）

容姿：　紫の短髪　身長１６２ｃｍ　限りなくＤに近いＣカップ

家族構成：　父（マスター）　母（陽菜）　自分　双子の弟（歩）

所属：　杜丘高校二年　喫茶・翡翠

呼称：　祭　まっちゃん

性格：　母親譲りの悪戯好き　面白さ至上主義

好きな物事：　悪戯をする　修行　商売　予想外の展開

嫌いな物事：　悪戯をされる　梅雨

特技：　なにもしなくても歩と考えてることが通じ合う

名前：　鳴海　歩　（なるみ　あゆむ）

容姿：　紫の短髪　身長１６５ｃｍ

家族構成：　父（マスター）　母（陽菜）　双子の姉（祭）　自信

所属：　杜丘高校二年　喫茶・翡翠

呼称：　歩　あーくん

性格：　悪戯好き　楽しさ至上主義

好きな物事：　悪戯　冗談　修行　商売　心から笑える出来事

嫌いな物事：　真面目な話　憂鬱　孤独

特技：　なにもしなくても祭と考えてることが通じ合う

マスターと陽菜さんの子供。秀吉達と同じで双子の姉弟。

外見だけでなく性格も似ており、同じ格好であったら見分けるのが

困難であるほど。
一番わかりやすい違いは胸。

祭はダイエット、歩は身体を鍛える為にほどよく鍛練している。腕もそこそこ。
二人がかりなら雅夜や由美と同等に戦える。１＋１を５や１０に変えてしまうぐらいのコンビネーション力。

雅夜とは従姉弟なので、翡翠側のメンバーで一番付き合いが古い。
明久とも知り合いである。

恋したい年頃なのだが友人は沢山いるのだが、これっ！と思える相手がいなく、日々二人で悩んでいる。

仲が良く、一緒に行動することが多いので二人で一ペアとして周囲に認識されているが、二人のその自覚はない。

祭は友人に進められて近親相姦の薄い本を読んだらはまり、好きになった。最近は恋人は歩でもいいかなーと思い始めている。
歩は普通にノーマル。だが、若干ロリっけあり。

両親はやっと個性が出てきたと嬉しがってあまり関わろうとしない。

バカテスト第十三問目……ではなくて（後書き）

女子キャラの容姿欄に、何カップであるか付けました。

原作のキャラの公式スリーサイズがわかったら、スリーサイズも書く予定です。

後悔はしていない。

感想お待ちしております。

第１４１話（前書き）

ＰＶ１５０万、ユニーク十万突破！！

ありがとうございます！！！

第１４１話

「さて…（ゴクゴクゴックン！）ぷはぁー！よし、優子。そろそろ戻るか」

水を飲み干す。胃のなかも綺麗になったし、頃合だろ。

「そうね。もういい時間だものね」

「罰ゲームはまた今度、ってことで。今日はもう寝よう」

「また今度、絶対よ」

「わかってる。諦めは肝心だからな」

怒らせたり逃げたりして罰が酷くなるよりかはずっとましだ。

「んじゃ、さっさとアヤメを回収してくるか」

「ええ、お願い」

アルコールの臭いが漂う家のなかに入り、酒瓶やビールの缶がいくつも転がっている部屋を見渡して、酒で酔いつぶれた人達の中からアヤメを見つける。

「……まだ臭うわね」

「こんだけ飲めばすぐには消えんだろ。それより、せっかくこの人達から守れたんだからこの空気だけで酔うなよ？」

「…ちょっときついかもしれないわ」

「おいおい……」

やめてくれよ！？

「……むにゃ…むにゃぁ……」
「ったく。なにが“ワシは大丈夫じゃ！心配するでないぞ”だよ。完璧によったじゃねぇかよ……」

ソファで気持ちよさそうに寝息を立てているアヤメを横持ち――ぞくにいうお姫様抱っこで持ち上げる。寝転んでいるやつを運ぶにはこのやり方が一番やりやすいからである。別に他意はない。

「やっぱり小柄だから軽いな…」
「……んむ……」
「……今のは返事したのか？それとも寝言か？」

アヤメは酒に強いらしいのだが、鳴海家の面子には勝てずあえなく撃沈した。俺もどうにか助けようと頑張ったのだが、優子を守るのに精一杯でアヤメまで手が回らなかった。

「雅夜ー。この親子はどうするの？」
「放っておいて大丈夫。よくあることだから」
「りょーかい」

笑顔で、寝ているか起きているかわからない状態のねーさん。酒瓶を抱きながら寝ている陽菜さん、その隣でテーブルにつっ伏しているマスター。床で大の字で寝ている歩、その足を枕にして寝ている祭。こいつらの相手をするのは大変だったな。

「そうそう。ありがとね雅夜。アタシの分のお酒まで全部飲んでもらっちゃって」
「お前が飲んだら大変なことになるんだから、当然のことだ。礼はいらん」
「でも雅夜は大丈夫なの？みんなの二、三倍ぐらいは飲んでなかっ

たっけ？」
「度はそこまで高くなかったからな。高いのがあると危ないが、低いのばっかだったら問題ない」
限度はあるが。

アヤメを抱きかかえながら階段をあがり、二階にある部屋に行く。
「二人で同じベットでいいんだよな？」
「ええ。サイズあるから問題ないわ」
「ならよかった」
左側手前の部屋に入り、ベットにアヤメを寝かす。

「……ん……」
「――――うおっ！」
「あ！」

いきなりアヤメに腕を引っ張られ、アヤメに覆い被さるような体制になる。……既視感を覚えるのはなぜだろう？――あ、優子か。

「（ちょ、ちょっと雅夜！アンタなにやってるのよ！）」
「（アヤメに引っ張られてんだよ！俺はなにもしてない）」
「（なにもしてなくてもその体制は問題あるのよ！すぐにどきなさいってば）」

俺だってすぐにどきたいさ！でもな、

「（アヤメが腕、離してくれそうにない）」
「（なっ――――――!?）」

これじゃ、あの時と一緒じゃねぇかよ。勘弁してくれ。

「（どうにかできないか優子？）」
「（ダメ！握力強くて、手開いてくれないわ）」
「（マジかよ！？……どうすればいいと思う？）」

このままじゃアヤメと一緒に寝ることになっちまうじゃねぇかよ。

「（…仕方ないし、一緒に寝ればいいんじゃないかしら？）」
「（……は？）」
「（だから、一緒に寝ればいいじゃない。別になにもしないんでしょ？）」
「（あたりまえだ！だが、いいのか？）」

てっきり怒るかと思ってたんだが…。

「（いいわよ別に。アタシも一緒に寝るんだし）」
「（それが目的かよ……。逃げ道は？）」
「（七方塞がりね）」
「（あいてる一方はどんなだ？）」
「（諦めて一緒に寝る。って、普通なら喜ぶ状況よ）」

まぁ、傍から見たら羨ましい光景だろうけどな。だが、なにも出来ないからある意味拷問みたいなもんだぞ。

「（ってことで、ほら詰めて詰めて）」
「（お、押すなって！）」

「（詰めないとアタシが寝るスペースがないじゃない）」

強引に詰められる。二人でギリギリのベットに三人で入る。やはり狭く、ほとんど密着した状況になった。

「（おやすみ雅夜）」

「（あ、ああ。おやすみ優子）」

密着しているのにも関わらず、すぐに寝に入る優子。…すこし酒にやられたか？

左に優子、右にアヤメが寝ているこの状況…。

「（二人が起きたらどうなることやら……）」

優子はともかく、アヤメは怒るだろうなぁ。鉄アレイはやめてもらいたいが。

「（ま、いっか）」

考えるのをやめ、左右の存在になるべく意識しないうちに寝ることにする。

こうして夜はふけていった。

第１４１話（後書き）

最近、迫られることが多いな雅夜（苦笑）

感想お待ちしております。

第１４２話

ＡＭ５：５０

太陽もだんだんと昇ってきており、窓から眩しい朝日が差し込んで来た。

「……もう朝か…」

身体を起こそうとし、両隣でまだ寝ている二人に気を使ってゆっくりと二人を起こさないように起きる。

「…アヤメに特徴のある寝相がなくてよかった」

アヤメは体を横にして、自分の腕を枕にして眠っている。さっきまでは俺の腕が枕になっていたが。

ちなみに優子は、いつも通り俺を抱き枕にして寝ていた。いい加減もう慣れた。

「さてと…」

寝顔鑑賞はほどほどにして、自分の部屋に戻る。朝練ようの服に着替え一階に降りる。

そこにはこの朝早くという時間なのにマスター、祭、歩の三人が朝食の準備をしていた。

「あ、おはよーマサヤ。朝食ならもうすこしでできるから、先に顔でも洗ってきなよ」

「おはよう。んじゃ、お言葉に甘えて洗ってくるわ」
「ぱっと見寝癖は大丈夫そうだよ」
「ん、了解」

料理の進行を見た感じ、あと五分もしないで準備し終えるだろう。
さっさとやってくるとするか。

「雅夜。今日はひさびさに俺と打ち合うか？」
「マスターと！？……学校あるんだが」
「大丈夫だ。きちんと手加減はする……と思う」
「絶対する気ないよな！？」
「「頑張れ～」」
「人事だと思いやがって！」

四人で朝食を食べながら俺の寿命を縮める話しが進められる。

「そういえばこっちから文月までどんぐらいかかるの？」
「ん？ああ、だいたい４０分くらいだな。車だともうちょい早くいけるが」
「だったら俺が車出そう」

さすがマスター。わかってますね。

「じゃあ余裕をもって、７時４０分には出たほうがいいんじゃない？」
「だな。じゃあ、今日は半までにしとくか」
「「「異議なし」」」

いつもは俺が居る日は土日なので昼ごろまでぶっ続けでやっているが、平日にはこんぐらいにしとかないとな。

～ランニング中～

「マサヤ。なんで昨晩は優子ちゃんにお酒飲ませなかったの？」
「頑張って守ってたよね？」

走りながら二人が訪ねてくる。

「優子は酒癖が酷いからな。できる限り飲ませないようにしてるんだ」
「…もう飲ませたことがあったのか」
「2，3回程度」
「って、酷いってどんな感じになるの？」
「絡み？泣き？笑い？」

……正直に言っても信じてもらえなさそうだが、

「ネコ」
「「「……は？」」」

三人ともポカーンとした顔になった。

「だからネコだ。普段の優子からは考えられないような言動を取り始めて、仕草もネコっぽくなるんだ」

「なにその珍種。そういう人いままで見たことないんだけど」
「だろうな。俺も初めて見たときずっと驚いてたもんな」
「優子ちゃんがねぇ……。一度くらいはみたいもんだよ（チラッ）」
「こっち見るな。俺が阻止するに決まってるだろ」

この双子に陽菜さんが本気で加わると防ぎきれる自信がないけどな。

「アヤメ君の酔い方にも驚いたな」
「あーあれ？あれも酷かったな」

最初のほうは酔ってなかったんだが……

「終盤になってくるほど絡んで来たよね」
「絡み酒は見分には面白いんだけど、絡まれるのは厄介なんだよな」
「お前らなんかはまだいいほうだろ。俺が一番アヤメに絡まれたんだぞ？」

やたら愚痴に付き合わされたな。鈍感野郎がどうのこうのやら、なんとやらって。軽く十回はループしてたぞ。

「でもあのくらいだったらまだ平気だね」
「まぁな。いまさらあの程度が増えたところで宴会の時のカオスさにくらべたら」
「「「「子供だな（ね）」」」」

宴会か……。次やるときはいつもより数人増えることになるんだろうな。優子と秀吉はもちろん、明久（いけにえ）も久々にこっちに呼ぶか。

第１４２話（後書き）

ちなみにいつもの宴会参加メンバーは基本

鳴海一家・雅夜・深風・忍・千夏・未来・由美の十人で、

たまに近所の人や清水なんかも参加します（させられます）。

感想お待ちしております。

第１４３話

～ｓｉｄｅ優子～

ガサガサ　ガンッ！　ゴロゴロゴロ……

「……ぅ？……むぅ…」

「む。スマン。起こしてしまったかの？」

何かが床に落ちる音が聞こえ、目が覚める。

「ふぁ……。……んー、おはよ～。今何時～…？」

「おはようじゃ。七時をすこし廻ったところかの」

「ありがと…」

ベットから降りて背伸びをする。朝はこれやらないと起きたって感じがしないのよね。

「ユウコは目覚めはよいのじゃな。うらやましいのう」

「羨ましいってほどじゃないと思うけどね。アヤメはどんな感じなの？」

「よくわからんのじゃが…前、忍に『アヤメの起きたときって面白いね♪五分はぼーっとしてたよ？』と言われたのじゃ」

「…確かにそれは面白そうね。見てみたいわ」

「勘弁してくれんかの。頑張って直したいものなのじゃ」

まぁ、それは直せるものなら早めに直したいものね。

「しかし、お主の寝相はなんなのじゃ？人を抱き枕のように抱きつ

きおって。抜け出すのに一苦労したぞい」
「…家じゃいつも抱き枕で寝ててね。癖みたいなものなの」
「ほほぅ。ワシもたまに使っておる。ちなみにユウコのは絵柄はなににしておるのじゃ？まさか無地とうわけではあるまい」
「えーっと……その、皆には内緒よ？あのね……（ゴニョゴニョ）なの」
「マ…っ！？お、おおお、おおお主はな、ななな、なぜそのような絵柄をっ！なんてものを抱き枕にしておるのじゃ！」
「べ、別にいいでしょ！好きなもんは好きなんだから……ってアタシはなに恥ずかしいこと言ってるのよ！！」
顔が真っ赤になっていくのを感じる。ダメよ…っ！落ち着くのよアタシ！
「じゃ、じゃが、マサヤにそのようなことが知れたら…」
「大丈夫よ！隠蔽工作には万に一も抜かりはないわ！」
見つかるようなへまはしないわよ！
「その心強さはどこからくるのじゃが…」
「雅夜を思う強さからよ」
「頼むからさらっと恥ずかしいことを言わんでくれ。聴いてるこっちまで恥ずかしくなる。お主は恥ずかしくないのかの？」
「そりゃあ、恥ずかしいわよ。でも、聴いてるのがアヤメなら別の気持ちがすこし混じってるから大丈夫なの」
アヤメだからこそ言えるようなものかしらね。
「別の気持ちとな？」
「優越感。雅夜のことをどれだけ思ってるかアヤメにわかってもら

いたくてね」
「っ！」

一人の女として、これだけは負けるわけにはいかないのよ。

「これは宣戦布告と受け取ってもらってもいいわ。なにがあってもほかの女性はもちろん、アヤメには雅夜を渡さない」
「…優等生じゃと聞いておったが、ずいぶんと激情家だったようじゃな」
「そうでもないわよ？ただ、『恋いは戦争』。それに従ったまでよ」

相手が誰であっても手加減はしない。本気でやるわよ。

「……」
「？どうしたのアヤメ？」

いきなり黙りこくっちゃって。…言いすぎたかしら？

「言いすぎちゃったみたいならごめんね。でも発言の撤回はしないわよ」
「…いや、違う。違うのじゃ。ただのぅ……。ふふ。ふはははっ。わーはっはっはっは！！」
「ちょ、アヤメ大丈夫！？」

やばい。壊れちゃった！救急車！精神科行きの救急車呼ばなくちゃ！

「大丈夫じゃよ。いや、なに。お主の言葉が面白くてのう。ついつい笑ってしまったのじゃ」
「な、なにがよ？」

アヤメの顔がだんだんと笑顔――――ニヤけてくる。

「『恋いは戦争』？面白い。大いに面白い！」

「待って！キャラが変わり始めてるわよアヤメ！」

「うるさいのじゃ！…コホン。さきほどの言葉、まったくもってそのとおりじゃ！」

と、止まらない！さっきアタシのこと激情家って言ったけど、アヤメもそうじゃない！

「じゃがの！戦いというのは、障害があればあるほどやりがいがあり！燃えてくるというものなのじゃよ！」

！？

「お主の言葉をそのまま返そう。戦線布告として受け取ってくれ。いかなる場合でも、雅夜をワシの虜にしてみせるのじゃ！」

「ぐっ…！」

胸に手をあて、はっきりと宣言してくるアヤメ。

「どうじゃ？これでもまだ優越感にひたっておられるかの？」

「さすがにここまで言われちゃ無理ね」

今回は負けを認めるしかなさそうね。

「うむ。では、そろそろ一階に行こうかの。朝食の準備も出来てるじゃろうし」

「……はぁ。ええ、そうね」

時間も時間だし、早めにしたほうがいいわね。そういえば、こっちから文月(むこう)に行くのってどのくらいで付くのかしら？

「っと、そうじゃユウコ」

「ん、なに？」

「お主が持っておる抱き枕はどうすれば手に入るかの？」

「やっぱり欲しかったのね！？」

第１４３話（後書き）

なんだかおかしなことに…（汗）

この二人、書いてると面白いですね（笑）

感想お待ちしております。

第１４４話（前書き）

まだｓｉｄｅ優子は続きます。

第１４４話

「あ、おはよう二人とも。朝食なら出来てるよー」
「おはようございます深風さん」
「おはようなのじゃみーさん」

リビングに行くと、エプロンをつけて家事に勤しむ深風さんがいた。

「二人とも朝は遅いのね。いつもこのくらいに起きてるの？」
「はい。アタシもだいたいこのくらいに――――」
「あ、敬語使わなくていいよ。私、そういう畏まったのって好きじゃなくて。それと私のことは皆と同じでみーさんて呼んでちょーだい」
「そうしたほうがよい。ワシも初対面で言われたしの」

アヤメも隣で頷いている。まぁ、アタシ自信敬語はあまり好きじゃないのよね。

「そう？じゃあ、遠慮しないわ。アタシはいつもこの時間に起きてるわ。みーさんも？」
「ううん、六時半には起きてるよ。朝食の準備とかあるしね」
「へ～、凄いわね。アタシにはちょっと無理かな」
「ワシもじゃな。朝はぐっすりしたいものなのじゃ」

話しながらテーブルに着く。用意されてあった朝食は家の外見とは似つかない洋食であった。…ま、まぁ、内装は和というより洋ぎみだからそうだろうとは思ってたけどね。

「「いただきまーす」」
「はい、召し上がれ♪」

あ、美味しい。下味っていうのかしら？パンや野菜にもきちんと味付けがしてあって、手間がかかってるっていうのが凄く伝わってくる。さすがは喫茶店で働いてるだけあるわね。

「そういえば、他の人達はどうしたの？」
「む？…おお、言われてみれば確かに姿が見えぬのう」

アヤメが起きた時には雅夜も既にいなかったみたいだし、どこいったのかしら？

「陽菜は翡翠のほうに行ってるよ。片付けと準備を軽くしてきてるの。で、あとは……」
「もしかして道場かの？」
「ピンポーン♪月曜の朝以外に雅夜が鍛錬するなんて久々だからね。きっと今頃マスター、気合い入っちゃってると思うけど」

庭にあったあれね。食べ終わったら見に行こうかしら。

「でも、あの物静かなマスターが気合入ってる、ねぇ…」

なんか想像がつかないわ。

「アヤメちゃんは見たことあったよね？」
「うむ。始めて見たときは自分の目を疑ったほどじゃ。ユウコ、心しておくのじゃぞ」
「へ？なに、そんなに凄いの？」
「百聞は一見に如かず。自分の目で見てみるとよい」

「じらすわね……」

確かに言われてもピンとこないと思うけどさ。

差し入れのスポーツドリンクをもって道場に行くと…

「失礼しまー「オラオラオラァアア！」「ちょ、マスター！激しすぎるって！！」……す？」

道場内をもの凄いスピードで駆け回りながら手に持っている二本の小太刀で攻撃を繰り出しているマスターと、それから必死に自分の身を守っている雅夜の姿があった。

「ひゃあー、完全にスイッチ入っちゃってるねアレは」

「死ななきゃいいけど」

祭と歩は巻き込まれないように道場の隅の方でやりあっているようだ。

「ん？優子か「よそ見とは余裕だなぁ！」ごはあっ！」

雅夜がこっちに気づいてこっちを向こうとしたら、その隙を今のマスターが逃すわけもなく腹に一撃を食らわして5メートルほど吹っ

飛ばされた。

「ちょ、雅夜っ！！」
「あ、優子！来てたんだ」
「いまちょっと危ないから近づかないほうがいいよ」
「ちょっと！？5メートル吹っ飛んだのに、ちょっとですませていいの！？」
「「うん」」

お、おかしいよね？おかしいって思ってるアタシがおかしいわけじゃないわよね？

「っつつ…。ったく、吹っ飛ばしやがって。っとそうだ。優子、なにかあったのか？」
「……本当に無事みたいね。ううん、別になにかあったってわけじゃないわよ。ここで鍛練してるって聞いたから見に来てたのよ。あ、あとついでにみーさんからスポドリもらってきたわよ」
「お、さんきゅ」
「「ありがと～」」
「では俺ももらおう」

四人とも一飲みで半分近くを飲み干す。鍛練してるだけあって水分はたくさん必要みたい。

「優子。今何分ごろだ？」
「えっと、二十五分ぐらいだったはずよ」
「ありがと。んじゃ「最後に俺とやり合うか」うげっ！」

マスターの発言に心底嫌そうな顔をする雅夜。そんなに嫌なのかしら……って、さっき吹っ飛ばされてるんだっけ。

「どんまいマサヤ！頑張ってきな」
「死んだら花ぐらい添えてあげるよ」
「祭に歩。お前らも一緒に来い」
「「マジっすか！？」」

…二人も余計なこと言うから巻き込まれるのよ。

三対一だというのに、マスターには一撃も当てることもできずに三人は撃沈した。

第１４４話（後書き）

戦場に入るとガラッと雰囲気が変わるマスターこと鳴海孝介。

実力は雅夜の数倍も上であったりする。

感想お待ちしております。

第１４５話（前書き）

優子ｓｉｄｅは終わって、雅夜ｓｉｄｅに戻ります。

第145話

マスターの車で文月学園に向かう途中…

「いつつっ……」

痛めた箇所をさすり具合を確かめる。
マスターにやられたものなので、痕に残るようなものはないのだが、マスターにやられたほとんどがの箇所が内側から響いている。地味に痛い。

「大丈夫、雅夜？」
「動きに支障はないが……派手には動けそうにない」
「情けないな」
「アンタがやったんだろうが！！」

運転席にいるマスターに言い返す。ったく、人事だと思いやがって。

「それより雅夜。この頃なまってきてないか？すこし前からだんだんと動きから鋭さが無くなってきたように感じるぞ」
「……んー、まー、あー、そうだな。自覚はしてるつもりなんだが」
「また、アレか？」
「…ええ、まぁ」

やっぱりマスターは気付くか…。簡単には隠し通せないもんだな。

「どうかしたの雅夜？妙に歯切れ悪いけど」

「いや、ちょっとな……」
「？」
「あ、優子は気にしないでくれ。こればかりは俺の問題だからな」
「？？」

優子の顔が『どういう意味かよくわからないんだけど』って顔になってくる。んー、どうしたもんかね。

「気にしないでって言われたら余計気になるじゃない。なにかあるの？」
「あるにはあるが、話したくないな」
「話したくない？…そう。じゃあ『罰ゲーム』で言われたらどうする？」
「無理。絶対にしたくないことだったらやらなくていいんだろ」
「ならいいわ。……大丈夫なのよね」
「ああ。なんとかなる」

…優子に心配させるヘマはしない。

「助けが必要なレベルになったら遠慮なく俺を呼べ。慰め程度だが、力になってやる」
「このタイミングで微妙に誤解されそうな発言はやめろよな！」
「た、助けが必要なレベルって……！本当に大丈夫なのよね雅夜！？」
「ほら、やっぱり誤解してるじゃねぇかよ！！」

くっくっく、と声を押し殺して笑うマスター。くそっ。絶対狙って言っただろこの人。

喫茶・翡翠編オマケ――――――完

「って終わるわけねぇよな」
「アタシてきには終わってほしかったけどね」

文月学園に到着して、数歩歩いたところで

『『『女子と一緒に車で登校とはどうゆう了見じゃコラァ！！』』』

ＦＦＦ団の連中と出会した。マスターもすぐに帰ったし、どうすっかなー。

「疲れてるから戦うのは面倒なんだが…」
「頑張ってね～♪」
「ですよねー！ったく……」

一歩前に出てＦＦＦ団の連中を見据える。数はだいたい３０ちょいってところか？

『朝っぱらからいちゃつきやがって…っ！』
『いいご身分だなぁ、おいっ！』
『もっと俺たちに出番寄越しやがれってんだ！！』

最後のは俺に言われてもしょうがないんだが？
そろそろ特攻してきそう雰囲気なので相手にバレないように小太刀（木製）を一本取り出す。

『『『覚悟しやがれぇっ！！浅月雅夜ぁあああああ！！！』』』
「あーあ。手元が狂ってもしらねぇ――――――ぞっ！」

先頭にいるやつへ一瞬で詰め寄り、倒すためではなく、吹き飛ばすための突きを撃つ。

『――――――ぐふっ！？』
『『『がっ！？』』』

ガードすらまともに出来ずに喰らった奴は、後ろにいたやつを巻き添えにして１０メートル近く吹き飛び――――――校舎にぶつかった。

ＦＦＦ団の動きが止まる。

無理もない。ＦＦＦ団の連中からみたら、先頭にいたやつがいきなり目の前に現れた俺によって、１０メートル近く離れた校舎まで吹き飛ばされたことになる。誰だって驚くだろうな、そりゃあ。

「……お前らも、ああなりたいか？」
『『『うっ……』』』
小太刀を軽く振ってＦＦＦ団の連中を睨みつけ、
「俺が言いたいことは一つだけ。……ああなりたくなかったら――――――どっかいけ」
あらためて小太刀を構えて、脅しかける。こいつら相手なら、これだけやれば充分だろうな。
『『『く、くそっ！！覚えてろよーっ！！！』』』
やられ役の台詞を言いながら去っていくＦＦＦ団。……ふぅ。やーっと、行った行った。
「お疲れ様雅夜。身体は大丈夫？」
「大丈夫だと思うか？」
「ううん、全然」
こりゃあ、今日はまともに動けそうにないな。

マスター……やりすぎだ。

第１４５話（後書き）

結局その日はほとんど寝て過ごした雅夜であった。

『喫茶・翡翠編～オマケ～』完

感想お待ちしております。

第１４６話

～明久＆雄二ｓｉｄｅ～

「明久」
「ん？なに、雄二」
「そういえば、例のチケットはどうした？」
「例のチケットって――――――如月ハイランドのプレミアムチケットのこと？」
「ああ。確か今週末がプレオープンの予定日のはずだが、姫路を誘って行ってみたりはしないのか？」
「な、何を言ってるのさ雄二！だって、あのチケットを使って入場したら、如月グループの力で一緒に来た人との結婚を強要されちゃうんでしょ？そんなことになったら姫路さんが可哀想じゃないか」
「そりゃ、むこうも『如月ハイランドに訪れたカップルは幸せになれる』なんてジンクスを作り上げようと必死だからな。来園するカップルが結ばれるように色々な手出しをしてくるだろうが――――」
「うんうん。そうだよね」
「だが、姫路も満更じゃないと思うぞ」
「……ほぇ？」
「いいじゃないか。勇気を出して誘ってみたら。意外とすんなりＯＫをもらえるかもしれないぞ」
「あ、あはは。またまた雄二ってば、冗談ばっかり！僕なんかが姫路さんと結婚なんて、そんなのあるわけないじゃないか」
「ふむ。まぁ、お前がそう言うならそれで構わないが。けどそれなら、チケットはどうしたんだ？」
「ちょうど身近に結婚を考えてる一がいたからね。その人にあげようと思ってるんだ」
「そうか。そんなヤツがいるなら都合が良いな。そのままうまう結

婚になれば、如月グループも喜ぶだろうしな」
「そうだね。うまくいけば全員が幸せだもんね」
「その連中、うまくいきそうなのか？」
「うん。あとは時間ときっかけの問題だと思うんだ」
「そうか。うまくいくといいな」
「大丈夫。きっとうまくいくよ」

～明久&雅夜ｓｉｄｅ～

「う～ん。難しいなぁ…」
「？どうした明久。珍しく悩んでるように見えるが。病気にでもかかったか？」
「酷くない！？って、そうじゃなくて。霧島さんにチケット渡そうとしてるんだけど、雄二の監視が厳しくてなかなか渡せなくて困ってるんだよ」
「チケット？…ああ、如月ハイランドのやつか。確か二枚もってるんだよな？」
「そうそう。一枚は霧島さんに渡すとして、もう一枚の処理にも困ってるんだよ」
「お前が使えばいいんじゃないか？相手なら姫路とかがいるだろうが」
「雅夜まで雄二と同じこと言うの！？だからこのチケットを使って入場したら如月グループに結婚を強要されちゃうんだよ。姫路さん

に悪いじゃないか」
「……はぁ。もういいよお前は。それでどうするんだ？」
「なんか馬鹿にされてる気がするけど…。どうしよっかこれ？」
「疑問に疑問で返すな」
「と言われてもね…。雅夜、なんとか出来ない？」
「んー。まぁ、出来ないこともなさそうだが」
「出来るの！？」
「雄二にバレないようにやればいいんだろ？ついでだからもう一枚のチケットも捌いといてやるよ」
「ホント！？ありがとう～。でも、どうやって捌く気なの？」
「杜丘の方のツテでやってみる。文月（こっち）じゃ、持ち歩くのさえ危険だからな」
「杜丘って言うと……翡翠の近くにある高校だっけ？そういえば、最近全然行ってないな」
「今度秀吉でも誘って行くか。向こうの奴らならこういうのに飢えてるから、良い値で売れるだろう」
「売るつもりなの？別にあげてもいいと思うけど」
「バカか貴様は？いったいこのチケットにどれだけの価値があると思ってんだよ」
「もしかして……結構高い？3，４０００円程度だと思ってるんだけど」
「それの軽く4，5倍はするぞ」
「一万以上！？そんなに！？」
「おいおい、二万でも買う奴は出てくるぐらいだぞ？」
「……おぉ」
「まぁ、一万程度で売るつもりだけどな。で、だ。明久」
「なに？」
「チケットはお前から俺が買う。お前は嘘が下手だから実際に金のやりとりもしとくぞ」
「い、いいよ！そこまでしなくーーーー」

「ちなみにチケットの買値は二枚で二万だが？」
「交渉成立だね」
「ってことでほれ、万札二枚。チケットはもらってくぞ」
「わわっ！」
「あと、そうだな。プレオープンの日――――週末にお前らも如月ハイランドに行くんだろ？」
「え、あ、うん。ムッツリーニと秀吉と姫路さんでね。色々と手助けしたいから」
「その日の朝、雄二から非通知で電話くる」
「え！？なんでそんなことわかるの！？」
「そこは気にするな。で、だ。俺がチケットを二枚とも処分したことは正直に話してくれ」
「？なんで？」
「こっちにも考えがあるんだよ。へたに嘘を吐こうとしなくていいからな。正直に、っても霧島に売るつもりだということぐらいは言うなよ」
「あ、うん。それくらいなら出来るよ」
「いいか？非通知で電話が来ら雄二だと思え。電話に出たら『どうしたの雄二？』って感じにこっちから切り出して向こうに動揺を与えろ。頼んだぞ」
「任せて！それくらいならお安いご用さ」
「んじゃ、俺はこれから霧島に渡してくる」
「いってらっしゃーい」

～霧島＆雄二＆雅夜ＳＩｄｅ～

「見積はだいたいこれくらいで…」
「……ありがとう。はい、これ」
「確かに受け取った。んで、領収書」
「……この封筒は？」
「このまえ新聞勧誘でもらったチケット。よかったら使ってくれ」
「……そう、いつもありがと」
「お得意様だから、気にするな」
「ん？つなぎ？霧島宅でなにして――――――って、雅夜じゃねぇかよ！？」
「お、雄二。奇遇だな」
「奇遇だな、じゃねぇよ！なんでお前がこんなところにいるんだよ！？その格好はなんだよ！？」
「霧島に頼まれたことがあったから来た。これは作業着だが？」
「……いまちょうど終わったところ」
「頼まれたことってなんだよ！？ってかなぜ雅夜！？」
「つっこみまくってんなぁ。つっこむのは霧島にだけにしといてくれ」
「……（ポッ）」
「俺がつっこんでいるのはそう言う意味じゃねぇ！翔子も頬を赤くするな！」
「さくばんはおたのしみでしたか？」
「棒読み口調でおかしなこと言うな！！」
「……激しかったからちょっと疲れちゃってる」
「あらあら。こんやはせきはんですかね？」
「……毎日が赤飯（ポッ）」
「うらやましいかぎりですなぁ」
「だから棒読み口調をやめろ！翔子も悪ノリするんじゃねぇ！！」

「まぁ、冗談はほどほどにして。霧島に雄二の部屋（霧島宅）の修理とか改造を頼まれてな」
「まさか牢屋のことか！？」
「そうそう。雄二の性格の考えて、抜け出そうとする手段の対策トラップとかをな」
「余計なマネをしやがって！！今でさえ苦労するというのに！！ってかなんでお前がやるんだよ？」
「……こういうのは雄二を知ってる人じゃないと出来ないから」
「だな。ま、もう仕事は終わったけど。またこういうのがあったらいつでも遠慮なく知らせてくれ」
「……頼りにしてる」
「頼りにするな！」

第１４６話（後書き）

今回は如月ハイランド編・序章って感じです。

全部台詞で読みにくくて、すみません（汗）

感想お待ちしております。

第１４７話（前書き）

今回は雄二ｓｉｄｅでお送りします。

第147話

とある休日の朝。

カーテンの隙間から差し込む陽の光と雀の鳴き声で目を覚ますと、

「……雄二、おはよう」

俺のベットの脇に翔子がいた。

「……今日はいい天気」

シャッとカーテンを開く翔子。陽光が更に強く部屋の中に差し込んできた。

「ん？ああ、そうみたいだな」

強い光に目を細めながら、まじまじと幼なじみの姿を見る。

今日は休日だからか、いつもの制服姿ではないようだ。上は白い長袖のガーディガンで、その下に薄いピンクのカットソーを着ている。下は薄手の膝上程度のスカートで、下着が透けないためのインナーが中に見える。ペチコートとかいうやつだったか？いつもはTシャツにジーンズやデニムのミニをあわせている格好なので、今日はこいつにしてはずいぶんと気合の入っている格好だと言えるだろう。

なんて、柄にもなくファッション観察をしている自分に驚く。寝ぼけているのかもしれない。

眠気を振り払うように頭を大きく振って、翔子に向き直る。

「あらためて、おはよう。翔子」

「……うん。おはよう雄二」

「よいしょ、っと――――」

布団を押しのけ、ベットから出る。

そういえば、どうして翔子が俺の部屋にいるんだ？今日はコイツと何かの約束をしていたっけ？

寝起きのため本調子には程遠い頭で記憶を掘り返す。ダメだ。覚えがない。

覚えがないのなら、約束ではないだろう。だとすると……。

ほかの理由を考えて、一つの結論にたどり着く。そうか、そういうことか。

「悪い翔子。俺の携帯とってくれ」

「……電話でもするの？」

「ああ、そうだ」

翔子が渡してくれた携帯を操作し、番号をプッシュする。コイツがここにいること。それは――――

「ああもしもし？警察ですか？」

不法侵入だ。

ドドドドドドドド！　ガチャッ！

「おふくろっ！どういうことだっ！」

「あら雄二。おはよう」

キッチンに駆け込むと、おふくろは流しで洗い物をしながら朝の挨拶をしてきた。

「おはようじゃねぇっ！どうして翔子が俺の部屋にいるんだ！おかげで俺は警察のオッサンに二次元と三次元の区別が出来ない妄想野郎と思われたあげく、今度個人的にそうだんに乗ってもらうことになったんだぞ！」

幼なじみが無断で俺の起こしに部屋に入ってきた、と告げたときの相手の反応は俺の心に深い傷を残してくれた。しかも向こうは俺のことに心当たりがあるらしく、今度あったら相談に乗ってやるとまで言われてしまった。寝ぼけていたとはいえ、一生の不覚だ。

「……え？」

そんな俺の言葉をうけて、おふくろが何度か大きな瞳を瞬かせる。もうすぐ四十歳になろうかというのに、その仕草は子供っぽかった。持ち前の童顔もあるせいか、おふくろは実際の年齢よりも若く見られる。『よく女子大生に間違えられちゃうんだから！』というのは本人の談。俺とオヤジは微塵も信じてないが。さすがに女子大生は無理があるだおる。

「翔子ちゃんが……？」

おふくろが頬に手を当てて困ったような顔する。

この態度、もしや翔子単独の行動か？おふくろの手引きじゃないのか？もしそうだとしたら、いきなり朝から怒鳴るのは少々浅慮だったかもしれない。

「ああいや、怒鳴って悪かった。俺はてっきりおふくろがアイツを勝手に俺の部屋に上げたものだと――――」

「もう、翔子ちゃんってば奥手ねぇ。折角お膳立てしてあげたのに何もしないでいるなんて勿体な――――あら雄二。どうしてお母さんの顔を鷲掴みにするのかしら？」

「やっぱり、アンタのせいか……！」

この母親には一度きっかり常識を教えてやるべきだろう。

「……雄二。お義母さんを虐めちゃダメ」

「止めるな翔子。俺は息子としてこの母親の再教育をしないといけないんだ」

遅れて現れた翔子が俺の腕を掴んで邪魔してくる。なんとなく、翔子の言う『お母さん』の発言が普通と違うような気がするが、そこはツッコまないほうが安全だろう。

「……言うことを効かないと、この本をお義母さんと一緒に読む」

翔子が取り出したのはＡ４サイズの冊子。うん？あれは……まさか！？

「ま、待てっ！それは女子共の読むものじゃない！早くこっちに寄

越すんだ！」

よりによってあの本か！ムッツリーニですら唸らせた至高の一冊が見つかるなんて最悪の事態だ！っていうかどうやってみつげだしたんだ！？一緒に暮らしているおふくろでさえわからないような場所に隠したはずだぞ！？

「あら翔子ちゃん。それは雄二が世界史の資料集の表紙をかぶせて机の三番目の引き出しの二重底の下に隠してある秘密の本じゃない？」

今ほど明久の一人暮らしが羨ましいと思ったことはない。

「わ、わかった。おふくろは開放しよう」

言われた通りアイアンクローを取りやめる。なんて汚い脅迫なんだ。

「……そう。それなら、この本は――――――」

くそっ。取り返したら今度こそ絶対に見つからないように隠してやる。いっそのこと鍵でもつけて厳重に、いやそれよりも雅夜に頼んで翔子対策を――――

「燃やすだけに許してあげる」

「すまん翔子。どう考えてもそれは許された時の対応じゃない」

普通は許してくれたのならその本を返してくれるはずだ。

「……じゃあ、この本を燃やしても許さいない」

「燃やさないという選択肢はないのか！？」

小学校からの付き合うになるが、たまにコイツの考えについていけなくなる。

第１４７話（後書き）

ほぼ原作のコピーになってしまっているのはツッコまないでほしい（涙）

雄二視点場合、ほとんどが原作そのままになると思いますが見直し程度の気持ちでもいいので、見てください（汗）

感想お待ちしております。

第１４８話（前書き）

まだまだ雄二ｓｉｄｅは続きます。

第１４８話

「ふふっ。相変わらず二人は仲良しねぇ」

解放されたおふくろは特に慌てた様子もなく、最後の洗い物を終えてエプロンで手を吹いていた。なんともマイペースな母親だ。

「俺にはこれが仲の良い光景とは全然おもえないんだが……」

「あら、そうかしら？」

にこにこと微笑み続けるおふくろ。

この母親は俺が車に撥ねられても「あらあら、楽しそうねぇ」などと言いかねない。

「やれやれ……。んで、どうして翔子が来てるんだ？」

「……約束」

「約束？今日俺となにか約束をしていたか？」

「……うん」

いつもの調子で頷いてポケットから小さな紙切れを取り出す翔子。

どうやら何かのチケットのようだ。え～っと……

「あら。如月ハイランドのオープンチケット？しかもプレミアムって書いてあるから特別なチケットなんじゃないの？凄いわ翔子ちゃん、よくこんなもの手に入ったわね～」

「……優しい人がくれた」

「そう。良かったわね～。あら、雄二？どこに電話してるの？」

「ちょっとゲス野郎に用ができたんだ」

携帯電話の番号通知をＯＦＦにして明久の番号を呼び出す。
数票の呼び出し音の後、怨敵は軽快な声で電話に出た。

『あ、雄二？どうしたのこんな朝早くに電話してきて』
「……キサマヲ――――ってなぜ俺だとわかった！？」
『雅夜がそういってたからだけど……。あ、そうそう雄二。霧島さんに聞けばわかると思うけど、僕は霧島さんにチケットはあげてないよ』
「は？……そうなのか翔子」
「……うん。吉井じゃない」

嘘を吐いてるようには見えないな。

『ちなみに僕がもらったチケットは雅夜に二枚で二万で買ってもらったんだ。杜丘高校の知り合いに欲しそうな人が沢山いるから、そっちで捌いてくるんだって』
「杜丘高校？聞いたこと無いな。二人はしってるか？」
「……知らない」
「えっと、確かここから三、四駅ぐらい行ったところの高校だった気がするわ。近所に美味しい喫茶店があるって噂の」
『そうそう、それそれ。文月（こっち）にあるＦＦＦ団みたいなやつはなくて、至って平穏な高校だからカップルも普通にいるらしいからね。高く売れるだろうって雅夜が言ってたよ』
「そうか。わかった」
『じゃあ切るね――――（ブツッ）』

今の感じからすると、明久が嘘を吐いてる様子は感じとれなかった。
ってことは本当なんだろう。

「翔子。それ誰からもらったんだ？」

「……秘密。名出しはＮＧって言われた」
「どこの芸能人だよ！…まぁ、いい。雅夜にも電話してみるか」
翔子にチケットを渡したのはたぶん雅夜だと思う。が、アイツは二万で買ったものをタダでわたす性格とは思えないんだよな。
明久とは違い、雅夜はワンコールで電話に出た。

「雅夜か？ちと聞きたいことが――――」
『ただいま忙しいため電話に出れない。急ぎの要件があるならピーという音の後に言ってくれ。霧島は寝ている雄二に｛ピー｝』
「どんな留守電メセージだよ！？最後のはなんだよ！不吉すぎるわ！！」

伏字みたいになってるじゃねぇかよ！！寝ている時とか生々しすぎて怖いわ！

『相変わらずツッコムのが好きだな。要件はそれだけか？』
「って、留守電じゃないのかよ！ピーって音まで雅夜が言ったのか！？」

無駄に器用だな、オイ！

『で、ツッコミだけか？要件がないなら切るぞ』
「待て待て。お前、明久から買――――」
『ちなみに明久からチケットは二枚とも売却済みだ。二枚合わせて三万ってところだな』
「わかってるなら最初っからそういえ！」

たしか明久からの買値は二枚で二万だったか？利益は一万か。ちょっとした儲けだな。

『嘘だけどな』
「嘘かよ！？」
いつもの調子で嘘を吐くな！あやうく信じるところだったじゃねぇかよ。
『本当は金はもらってない。チケットを渡すかわりに、ちょっとした頼み事をやってもらうということで交渉した。Ｐｒｉｃｅｌｅｓｓ―お金で買えない価値がある―』
「二万の価値のある頼み事……。ちなみに相手は誰だ？」
『二人のうち片方のことは言えないが、一人は雄二が知ってる奴、とでも言っておくか』
「……翔子じゃねぇよな？」
『いや、違う。この言葉に嘘偽りはない』
「ほぅ…。そこまで言うなら本当なんだよな？」
雅夜がここまでいうのは珍しいな。
『ああ。嘘だったら西村さんよりも力があって、西村さんよりもスピードが早くて、西村さんよりも攻撃のリーチのある化け物と戦ってやるよ』
本当に珍しいな！あのメンドくさがり屋の雅夜がここまで言うとは！！
「本当に化け物だなソレ！？ってかそんなものが現実にいるのか！？」
『いるいる。雄二が気づいてないだけで結構身近にいるぞ？戦う時になったら教えてやるよ』

「戦う気まんまんじゃねぇかよ！」
『おっと。今のは言葉のアヤだ』
「…まぁ、いい。今回は信じてやる。じゃあな」
『Ｂａｄ（グッド）　Ｌｕｃｋ！』

……やけに今日はテンション高いな。しかし、それだったら誰が翔子にあげたんだ？

「……雄二、行こう？」

俺の手を翔子がそっと握る。余程行きたいのだろう。

「絶対に嫌だ」

けど、その願いを叶えるわけにはいかない。
これが普通のアミューズメントパーク程度なら考えてもいい。だが、これは如月グループの企みが裏に存在する危険な企画だ。そんなものに翔子と参加するなんてハメになったら、そのままなし崩しで結婚まで持ち込まれてしまうだろう。そんな事態は絶対に避けなければならない。

「あら。どうしてそんなに嫌がるの？翔子ちゃんと一緒に行ってきたらいいじゃない」

なにも知らないおふくろは暢気なことを言っていた。

「色々と事情があるんだ」

例の如月ハイランドの企みは俺や明久などの一部の人間しか知らない。同じ学園にいても翔子のしらないことだ。きっと『如月グルー

プの力を以て結婚を強要してくる』なんて事実をしれば、翔子はどんな汚い手を使ってでも俺との参加を狙ってくるだろう。コイツはそういう女だ。

「……私は、雄二と一緒に行きたい」

翔子がジッと俺の目を見ながら言った。

もう七年くらいになるのだおるか。コイツがこうやって好意を示し始めてから。いくら言って聞かせても、全然変わりやしない。ある意味尊敬できるほとの思い込みの強さだ。

とはいえ、いい加減ビシッと断っておかないといけないな。このままだと本当に結婚まで話が及んでしまう。いくらなんでも高校生で結婚の話なんて嫌過ぎる。俺はもっと気楽な立場で人生を謳歌したい。

よし。こうなった以上は仕方ない。今日こそははっきりと『翔子、俺のことは諦めてくれ』と言ってやろう。大きく息を吸って――

「翔子」

「……イヤ」

「俺のこと……」

早い！早すぎる！まだ名前の部分しか言ってないというのに！

第１４８話（後書き）

今、テスト期間中なのに更新してて大丈夫かな？

しかも明日は苦手中の苦手の化学だというのに…（汗）

感想お待ちしております。

第１４９話

「だ、だがな、翔子」
「……どうしても行きたくないなら――――――」
俺の言葉を遮り、翔子はトートバックから何かの冊子を取り出した。
「――――選んで」
翔子が取り出したのは、結婚式場案内のパンフ。
「すまん。話の流れがさっぱりわからない」
「……約束を破ったら即挙式って誓ってくれた」
契約の内容が変わっている気がする。
「お母さんはハワイとかの海外がいいな～」
「おふくろ。アンタはどうしてそんなにマイペースなんだ」
「……雄二。早く選んで。予約するから」
「あっ。ヨーロッパもいいわね。雄二、どこがいいかしらね？」
「く……っ！」
どちらを選んでも結婚の話がチラつくという恐ろしいこの状況。だが、この程度の困難に屈する俺ではない！なんとかして脱出を――――

「……俺は……無力だ……」

電車とバスで二時間ほどかけ、俺と翔子は如月ハイランドの前にいた。

こ、これは仕方がなかったんだ！翔子一人だけならともかく、おふくろまで面白がって結婚の話を進めだしたのが悪いんだ！あの妙な雰囲気から逃れるために出かけてしまった俺を誰が責められようか！

「……やっとついた」

嬉しそうにアミューズメントパークを見ている翔子。

……ふむ。そんな姿を見ると、少しは遠くまで連れてきた甲斐もあるかもしれないな。うんうん。

「よし。それじゃ、翔子」

「……うん」

「帰ろう」

ミシッ。

「……ダメ。絶対に入る」

「はっはっは。翔子、俺の肘関節はそっち側に曲がらないぞ？」

肘を極めてきた翔子に脂汗を流しながら笑いかける。

まずい。指先の感覚がなくなってきた。

「……恋人同士は皆こうしてる」

「待て翔子！お前は腕を組むという仲睦まじい行為とサブミッションを同様に考えてないか！？」
「……？？？」

素で疑問符を浮かべているとは、なんて恐ろしい女だ。きっとコイツには、世の中の恋人同士は相手を逃さない為に肘関節を取り合ってるように見えているのだろう。

「……とにかく、入る」
「ぐぁっ！せめて関節技を解いてから歩いてくれ！本当に肘が逆方向を向いてしまう！」

左肘を人質に取られたまま入場ゲートへと連行される。プレオープンという限定的な期間であるためか、特に待つこともなく係員の青年の前まで進むことが出来た。

「いらっしゃいマセ！如月ハイランドへようこソ！」

その男は日本人ではないのか、若干訛りの混じった口調で俺たちに笑顔を振りまいた。顔立ちはアジア系っぽいので日本人かどうかはよくわからないが。

「本日はプレオープンなのデスが、チケットはお持ちですか？」
「……はい」

翔子がポケットから例のチケットを取り出す。

「拝見しマース」

係員はそのチケットを受け取って俺たちの顔を見ると、笑顔のまま

一瞬固まった。

「……そのチケット、使えないの……？」

翔子がそんな係員の様子を見て不安そうに表情を曇らせる。

「イエイエ、そんなコトないデスよ？デスが、ちょっとお待ちくだサーイ」

係員はポケットから携帯電話を取り出し、俺たちに背を向けてどかかに電話をし始めた。

「――――私だ。例の連中が来た。ウェディングシフトの用意を始めろ。確実に仕留める」

「おいコラ。なんだその不穏当な会話は」

この係員、急に目の色が変わりやがったぞ。まさか例のジンクスを作るための工作員か？

「……ウェディングシフト？」

翔子が首をかしげている。如月ハイランドの企みを知らないコイツにはよくよくわからない単語だろう。

「気にしないデくだサーイ。コッチの話デース」

取り繕ったように元の雰囲気に戻る係員。あからさまに怪しい。

「アンタ、さっき流暢に日本語話してなかったか？」

「オーウ。ニホンゴむつかしくてワカりまセーン」

こいつムカつく。

「ところで、そのウェディングシフトとやらは必要ないぞ。入場だけさせてくれたらあとは放っておいてくれていい」

もはや潔いとも言えるネーミングのおかげで向こうのやろうとしていることはよくわかった。だが、そんなものに乗る気はない！そうしないと、俺の人生が……っ！

「そんなコト言わずニ、お世話させてくだサーイ。トッテモ豪華なおもてナシさせていただきマース」

「不要だ」

「そこをナントカお願いしマース」

「ダメだ」

「この通りデース」

「却下だ」

「断ればアナタの実家に腐ったザリガニを送りマース」

「やめろっ！そんなことされたら我が家は食中毒で大変なことになってしまう！」

あの母親は間違いなく伊勢海老だと勘違いして食卓にあげるだろう。なんて恐ろしい脅迫をしてくれんだ、この似非外国人め……！

「そういえば、俺たちの他にこのチケットを持ってきたやつはいないのか？」

「プレミアムチケットでデスか？一組み予定がありマスが、まだ来てないデース」

…まだ来てない？俺たちでさえ来るにはすこし遅い時間だというの

に、さらに遅いだと？なに考えているんだ？

「ちなみにそいつらにもウェディングシフトとやらをやるのか？」

「イエ。向こう側からお断りのおデンワをいただいておりマース。なんでもご自分達でヤルつもりなようデース」

？ウェディングシフトのことを知っている――――いや、雅夜から受け取ったときに説明されただけだな。もう一組みのやつらに関してはあまり深読みしないほうがよさそうだな。

「では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ？」

「……記念写真？」

「ハイ。サイコーにお似合いのお二人の愛のメモリーを残しマース」

「……雄二と、お似合い……（ポッ）」

翔子は似非外国人の言葉に仄かに頬を赤らめていた。今は俺の身を案じるだけで手一杯だ……！

「お待たせしました。カメラです」

そこに帽子を目深にかぶったスタッフがカメラを片手に現れた。うん？なんだか見覚えのあるヤツだな。帽子で顔を隠しているのが怪しいが……

「アナタが持ってきてクレだのデスか。わざわざありがとうございマス。助かりマース」

似非野郎が礼を言いながらカメラを受け取る。やはり妙だ。そこらのコンビニならともかく、こういった場所のスタッフが客の前で同僚に丁寧な礼を言うだろうか？

――――ふむ。少し試してみるか。

「悪いがちょっと電話させてくれ」

「わかりまシタ」

携帯を取り出し、番号非通知で『吉井明久』という名のバカに電話をかける。

Ｐｒｒｒｒｒ　Ｐｒｒｒｒｒ

「ああ、すみません。僕の携帯ですね」

すると、先ほどカメラを持ってきたスタッフの尻ポケットから電子音が響き出した。

ビンゴだ。

「……いよう明久。テメェ、面白いことしてるじゃねぇか……！」

「人違いですっ」

ダッ！

「あっコラ！逃げるなテメェ！ええい、放せこの似非外国人！」

「彼はココのスタッフのエリザベート・ハナコ（三十五歳）、通称スティーヴでース。吉井ナントカさんではありまセーン」

「黙れ！人種性別年齢氏名全てにおいて堂々と嘘をつくな！しかもどう考えてもその名前で通所スティーヴはないだろ！ついでに俺は吉井なんて苗字は一言もいってない！」

似非外国人に絡まれてるうちに明久の姿が見えなくなった。

あの野郎、絶対に俺をハメる気だ……！俺の人生をなんだと思ってやがる！さてはいつもの仕返しか！？

しかし、ここのスタッフになりすましているとなると、かなり大掛かりな話だ。明久の単独行動とは考えにくい。ババァ――――もとい学園長も一枚噛んでいると見て間違いないだろう。あのババァには貸しがあるから、明久が頼めば断れないだろうしな。

いや、ババァだけじゃない。他にも協力者がいる可能性が高い。

第１４９話（後書き）

今回もほとんどコピーだ……（汗）

感想お待ちしております。

第１５０話

「翔子、すまんがちょっと我慢してくれ」
「……？？？」
きょとんとしている翔子のスカートを掴み、軽く捲り上げる。
下着が見えるか見えないかというギリギリの高さまでスカートが持ち上がった。
「……っ！！（ギラッ）」
その瞬間、視界の隅で懐に手を伸ばした人影があった。人影というか、キツネの着ぐるみだが。
「咄嗟に懐にあるデジカメに手を伸ばすあの動き……。やはりムッツリーニも来ていたか」
俺が視線を向けると着ぐるみは脱兎の如くその場から消え失せた。
明久とムッツリーニがいるなら、秀吉や雅夜、姫路もどこかにいるのだろう。どいつもこいつも人の不幸を楽しげに……！
「……雄二、えっち」
処刑法を考えていると、翔子が少し怒ったような顔で俺を見ていた。
「なっ！？ち、違うぞ翔子！俺はお前の下着になんか微塵も興味がないっ！」
「……それはそれで、困る」
「ぐぁあああっ！理不尽だぁあっ！」

翔子の握力で俺の頭蓋が軋む音が聞こえてきた。

「でハ、写真を撮りマース。はい、チーズ」

近くでフラッシュが焚かれ、ピピッという電子音が聞こえてきた。

「スグに印刷しマース。そのまま待っていてくだサイ」

「……わかった。このまま待ってる」

「ぐぁああっ！このままだと俺の頭蓋がっ！」

律儀にも、翔子は握力を緩めることなくそのままの状態を保っている。

コイツ、本当に俺のことが好きなのか……？

「――――――はい、どうゾ」

ほどなくして似非野郎が写真を持ってきた。それと同時に開放される俺。

「……ありがとう」

翔子は嬉しそうに写真を受け取った。

「……雄二、見て。私たちの思い出」

咳き込む俺に翔子が写真を突きつける。

「……なんだ、この写真は」

写っているのは翔子の後頭部と摂関に悶える俺。そして――――

「サービスで加工も入れておきまシタ」

その二人と囲うようなハートマークと『私達、結婚します』という文字。

アイアンクローをかましている女とそれに苦しむ男の周りを、未来を祝福する天使が飛び回っている。余人が見ればどういった経緯で結婚に至ったのか気になるところだろう。

……どう見てもこの二人に幸せは訪れそうにない。

「コレをパークの写真館に飾っても良いデスか？」

「キサマ正気か！？コレを飾ることでここになんのメリットがあるというんだ！」

見に来る客はドン引き間違いなしだ。

「……雄二、照れてる？」

「すまない。どこからどう見てもこの写真に照れる要素が見当たらない」

なんて、印刷された写真を見てると、

『あぁっ！写真撮影してる！アタシらも撮ってもらおーよ！』

『オレたちの結婚の記念に、か？そうだな。おい係員。オレたちも写ってやんよ』

偉そうな態度でチャラいカップルがやってきた。

「すいまセン。こちらは特別企画でスので……」

似非野郎が断ろうとする。どうやらあの写真撮影は例のウェディングシフトとやらの一環で、俺たちだけが対象なのだろう。

『あぁっ!?いいじゃねーか!オレたちゃオキャクサマだぞコルァ!』

『きゃーっ。リョータ、かっこいーっ!』

男が下から睨みつけるように似非野郎を威嚇し始める。絵に描いたようなチンピラだな。その姿を見て喜ぶ女もどうかと思うが。

『だいたいよぉ、あんなダッセぇジャリどもよりもオレたちを写した方がココの評判的にも良くねぇ?』

『そうよっ!あんなアタマの悪そうなオトコよりもリョータの方が１００倍カッコイイんだからぁ!』

まぁ、とりあえずチンピラカップルが係員の注意を引いている間に逃げるとするか。

「……（ツカツカツカ）」

「っておい、翔子。どこに行くんだ」

急に勢いよく歩きだした翔子の腕を掴んで引き止める。

「……あの二人、雄二のことを悪く言ったから」

「あのなぁ……。その程度のことでイチイチ目くじら立てていたらキリがないぞ?」

あのテの連中は下手に相手をすると執拗に絡んでくることが多い。悪口程度で構ったりすると面倒事を抱え込むことにもなりかねない

ので、ここは無視という選択肢が一番楽だろう。あんな連中に何を言われても気にならないし、何より視界に入れておくだけでも不愉快だ。

「行くぞ、翔子」

「……雄二がそう言うのなら」

翔子もその光景は嫌だったようで、促すと渋々ついてきた。

『あぁっ!?グダグダ抜かすとマスコミにここの態度について投書すっぞコルァっ!』

『そーよっ!アタシたち、オキャクサマなんだからねっ!』

『お、面白いもん見つけたぞ。アソコ見てみろよ。ちまたでよく見る不良(笑)カップルがいるぞ』

『いまどき珍しいわね。でも、一応人間なんだから指さして笑っちゃダメでしょ』

『なんだとコラァっ!?テメェ、誰に向かってなめた口聞いてんだぁっ!』

『『不良(笑)』』

『っ!上等じゃねぇかっ!ちょっとツラかせやぁガキンチョよぉ!』

『…もしかして面倒なことに自ら突っ込んだ?』

『自覚なかったの!?……さっさと終わらせて来なさいよね』

『ダリィ…』

背後から更に大きく騒ぎだすカップルとそれとは違う男女の声が聞こえてきた。……どこかで聞いたことのある声だな。……いや……

…まさかな。

宣伝の為のイベントでこういう客が来るとは、如月ハイランドも運

がないな。

第１５０話（後書き）

そろそろ雄二サイドを止めて、雅夜サイドを書きたくなってきた（苦笑）

感想お待ちしております。

バカテスト第十四問目……ではなくて（前書き）

今回は秋山大和と牧悟志の二人の人物紹介です。

バカテスト第十四問目……ではなくて

名前：　秋山　大和　（あきやま　やまと）

容姿：　赤髪ショート　身長１６８ｃｍ　Ｃカップ

家族構成：　父　母　大和　妹×２

所属：　杜丘高校二年　トオサカ代行業（バイト）

呼称：　大和（ヤマト）　やまちゃん　やーさん（雅夜に冗談でたまに言われる程度）

性格：　勝気で男勝り　面倒みが良い　暴力系ツッコミ係

好きな物事：　誰かの為になること　正すこと

嫌いな物事：　はっきりしない奴　出来るのにやらない事　もし～や、～だったらなどのＩＦの話

趣味：　ウォーキング

特技：　雑用ならなんでも出来る

日常的に男のように振舞う女子。

優子で、初対面の人に男性と見間違えらた回数が連続５０回に達した。一目で気づいた人は数少なく、簡単に言えば秀吉の逆バージョン。

妹が二人いることから女子に対しては面倒見が良く、同学年からだけでなく後輩からも親しめられている。男子に対しては「自分でなんとかしてみろ」とのこと。

物事を出来るのにやろうとしない奴は好きではないため、雅夜のような奴を見ると、その根性を直させようとする。雅夜に対して数少ない攻撃を加えることが出来る人物。雅夜とは犬猿の仲。

トオサカ代行業（いわゆるなんでも屋）でバイトをしており、仕事柄様々な技術を持ち合わせている。

優子の逆鱗に一度触れてしまい、怒った優子に主従関係を築かされた。以後、優子様と呼ぶようになる。

名前：　牧　悟志　（まき　さとし）

容姿：　青混じりの銀髪　身長１７０ｃｍ

家族構成：　父　母　兄　悟志

所属：　杜丘高校二年　トオサカ代行業（バイト）

呼称：　悟志（サトシ）　悟志君　さーくん

性格：　奔放　賑やか　二枚目

好きな物事：　二番や補佐などの位置　人の為になること　恋話　ユリ

嫌いな物事：　一番上に立つ　目立つ事　女子に守られる事

特技：　豆知識が豊富

雅夜と気の合う数少ない杜丘高校の男子。

周りの女性（大和、祭、忍、千夏、未来、由美、アヤメ）が強すぎるため、男としての意地やプライドなどがあまり発揮できない。自身の運動神経はそこそこ。足の速さだけは飛び抜けている。

大和と同じ代行業でバイトしており、二人ひと組みで悟志が知識・大和が行動という役割分担で働いている。変なものをよく知っている。

補佐や副などの二番目の役職が好きで、一番や長のように上には立ちたがらない。最近は執事に興味を持ち始めた。

無駄に二枚目なためモテるが、大和に気があるため全て断っている。

実はユリ好き。

バカテスト第十四問目……ではなくて（後書き）

後もう少しでオリキャラの紹介が終わる……（苦笑）

感想お待ちしております。

第151話

「さて。それじゃ、テキトーに回って帰るか」
「……楽しみ」

園内には前評判通りの最新アトラクションが沢山あった。３Ｄの体感アトラクションから絶叫マシーン、コーヒーカップやメリーゴーランドなど、知っているアトラクションは全て揃っているようだ。中には見た目だけでは想像もつかないようなものまである。

「映画館でもあれば楽なんだがな」
「……折角一緒にいるんだから、そんなのはダメ」

翔子に却下されたので、仕方なく面倒が少なくて妙な雰囲気にならないようなアトラクションを探す。すると、そんな俺たちにヒョコヒョコと着ぐるみが近寄ってきた。さっきのキツネの着ぐるみに似ている。違いは服装だ。さっきのと違って大きなリボンをしているところをみると、こいつはきっとメスなのだろう。

『お兄さんたち、フィーが面白いアトラクションを紹介してあげるよ？』

着ぐるみから聞こえてくるのは若い女の声。ボイスチェンジャーなどを搭載していないのか、その声は普通の人間の声だった。……というか、聞き覚えのある声だ。気のせいか、クラスメイトの優等生に思えてならない。
こいつも確認しておくか。

「そういえば、さっき明久がバイトの女子高生に映画に誘われてたな」

『えぇっ、明久君が!?それはどこで見たんですか!?』

本当にこいつらは、揃いも揃って……。

「おい姫路。アルバイトか？」

『あ……っ！ち、違いますっ！私――――じゃなくてフィーは姫路なんて人じゃないよ？見ての通りキツネの女の子だよっ♪』

それでも取り繕う姫路は真面目だと思う。

「じゃあ、フィーとやら。お前のオススメを教えてもらえるか？」

『あ。う、うんっ。フィーのオススメはねっ、無効に見えるお化け屋敷だよっ』

姫路――――ではなくて、フィーの手が噴水を挟んだ向こう側に見える建物を示す。ふむ。廃病院を改造したとかいう例のアレか。

「そうか、ありがとう」

『いえいえっ。楽しんできてねっ』

「よし翔子。お化け屋敷以外のアトラクションに行くぞ」

翔子の背中をおして歩き出す。すると、姫路が慌てたように俺の腕をつかんできた。

『ままま待って下さいっ！どうしてオススメ以外のところに行くんですか!?』

「どうしてもクソもあるか。お前の口ぶりから察するに、お化け屋敷には余計な仕掛けが施されているのは明白だろう。わざわざそん

なところに行く気はない」

いくら成績優秀者とは言え、姫路は騙し合いはサッパリのようだ。
簡単にボロが出る。

『そ、そんなの困りますっ！お願いですからお化け屋敷に行ってください！』

「断る」

そのお願いとやらの為に残りの人生を捧げる気はない！断固として否定し、俺は自由を謳歌するんだ！

『お願いです～っ！お化け屋敷はきっと楽しいですから～っ！』

「い・や・だ！」

ずるずると姫路が引きずられるようについてくる。邪魔なので振り払ってしまおうか、なんて考えていると、そこには何かが近づいてきた。

『そこまでだ雄二――――――じゃなくって、そこのブサイクの男っ！』

「その頭の悪そうな仕草……明久かっ！」

颯爽と登場したのは、先ほども見た雄ギツネの着ぐるみだった。

『失礼なっ！僕――――じゃなくてノインのどこが頭の悪いって言うんだ！』

「黙れ！頭部を前後逆につけているヤツをバカと言って何が悪い！」

本来は可愛らしいであろう着ぐるみは頭部の装着が前後逆になって

おり、とてもシュールな生物になっていた。

「……雄二。ノインちゃんはうっかりさんだから」

「翔子。うっかりで頭部の前後が逆になる生物は自然界で即座に淘汰されると思うぞ」

一度うっかりしたら即死なんて生物は食物連鎖の底辺もいいところだろう。

『あ、明久君っ。頭部が逆です！ああっ！今小さな子が明久君を見て泣き出しちゃいましたよ！？』

『うわっ、しまった！どうりで前が見えないと思った！』

『早く直さないと坂本君にバレちゃいます！』

未だにごまかせると思っているこの二人はつくづくお似合いのカップルだと思う。

「ハイ、すいまセーン。お待たせしまシタ。チョット撮影に手間取ってシマいましテ」

さらに面倒なヤツが現れた。さっきの似非野郎だ。もう追いついてきたのか。……って、撮影？

「なんだ？結局さっきのバカップルを撮影したのか。ご苦労なこったな」

「イエ。あの方たちではナク、もう一組みのプレミアムチケットの方たちデース」

ってことはやっぱりさっきの聞き覚えのある声は雅夜のだったのか？一応確認を……いや、雅夜に連絡したところで煙にまかれるな。

なら……。

「翔子。木下姉の連絡先は知ってるか？」

一緒にいるであろう木下姉のほうを狙うべきだ。

「……優子？携帯電話のなら、知ってる。かける？」

「ああ、頼む。今どこでなにしているか聞いてみてくれ」

「……雄二がそういうなら（ピポパポ）」

携帯を取り出し木下姉に電話をかける翔子。数コールの後、相手が出たようだ。

『はい、もしもし。どうかしたの代表』

「……優子、今なにしてる？」

『？おかしなこと聞くわね。今は代表たちと同じで、デートしてるところよ』

ってことはやはり雅夜と一緒にいるみたいだな。

「……デート（ポッ）」

「一応言っとくが、違うからな」

『ちがくないでしょ。二人で如月ハイランドに行くのをデートと言わないわけないでしょ』

無理矢理連れてこられたのはデートとは言わない。

「……優子たちも如月ハイランドでしてるの？」

『なに言ってるのよ代表。如月ハイランドは今日、プレオープンなんでしょ？そう簡単にチケットが手に入るわけないじゃない』

いや、そうなんだが……。

「雅夜からもらわなかったのか？」

『え？なんで雅夜が……ああ、もしかして吉井君から買ったやつのこと言ってるの？それなら杜丘高校の子に売った……というより取引したみたいよ』

「そうなのか？てっきるお前を誘って来ているとばかり思ってたのだが」

「……優子はそれでよかったの？」

『確かに混んでない時は楽そうでいいけど……。別にプレオープンのときでなくても行けるからね』

ふむ。どうやら嘘はついてなさそうだな。じゃあ、さっきのは雅夜達じゃなかったのか。

「……ありがと。優子」

『じゃあデート楽しんでね？バイバイ――――（ピッ）』

別れの挨拶をして、電話を切る翔子。アテがハズレたか。んじゃ、さっきのはいったい……誰なんだ？

第１５１話（後書き）

テストが終わった……ｏｒｚ

二つの意味で終わってしまったよ、ちくしょーっ！！（泣）

感想お待ちしております。

第１５２話

「お電話は終わりましタカ？では坂本雄二サン、お化け屋敷に行って下サイ」
「前後の文に脈絡がないからな。それにイヤだと言っているだろうが」
そんな危険地帯に自ら踏み込む気はない。
「断れバ、アナタの実家にプチプチの梱包材を大量に送りマース」
「やめろっ！そんなことされたら我が家の家事が全て滞ってしまう！」
あのおふくろは全ての梱包材を潰し終わるまで他のことは何もしないだろう。なんて地味かつ微妙な嫌がらせをしてくれるんだ……！
『ところで明久君。さっき女子大生に声をかけられていたって聞きましたけど？まさか、大事な作戦の最中に他の女の人と……』
『え？なんのこと？僕は別に何も――――――あれっ？どうして携帯電話を取り出すの？誰か呼ぶ気？』
『美波ちゃんが今すぐきてくれるそうです。お話、ゆっくり聞かせて下さいね？』
『だ、ダメだよっ！オープン初日で刃傷沙汰なんてここの評判に――――――ひぃぃっ！なんだか凄い勢いで誰かが走ってきているみたいなんだけど！？土下座でもなんでもするから殺さないでくださいっ！』
離れた場所ではファンシーなキツネの痴話喧嘩という珍しい光景が

展開されていた。

「坂本翔子サン。お化け屋敷は彼氏に抱きつき放題デスよ？」

「……雄二。お化け屋敷に行きたい」

「汚いぞキサマ、翔子を罠にハメようなんて！それと、勝手に翔子を入籍させるな！ソイツの苗字は霧島だ！」

「……大丈夫。すぐに変わるから」

油断している隙に翔子に肘関節を極められた。これじゃあ抵抗できない！

「では、こちらにサインして下サーイ」

似非野郎が取り出したのは何かの書類とボールペン。なんだコレは？

「ただの契約書デース」

契約書が必要なお化け屋敷ってなんだ。そんなに危険なのか？

「だがまぁ、面白そうではあるな」

契約書が必要ということはそれほどまでにスリルに満ちているということでもあるだろう。それはそれで面白いかもしれない。

少し楽しみになってので、ボールペンを受け取って書類に手をかける。

【契約書】

1．私、坂本雄二は霧島翔子を妻として生涯愛し、苦楽を共にすることを誓います。

2．婚礼の式場には如月ハイランドを利用することを誓います。

3．どのような事態になろうとも、離縁しないことを誓います。

「……はい雄二。実印」
「朱肉はこちらデース」
「俺だけかっ!?俺だけがこの状況をおかしいと思っているのか！？」

こいつらは全員正気じゃない。

「冗談でス。契約書はいいので中に入って下サイ」
「……うん。冗談」
「カーボン紙を入れて写しまで用意しているくせに冗談と言い張るのか」

色々といってやりたいことはあるが、この連中に常識を求めるのも酷というものだろう。

「それデハ、邪魔になりそうなノデその大きなカバンをお預かりしマース」
「……お願い」

翔子が似非野郎にバックを渡す。そういえばヤケに荷物が大きいな。

「……零れちゃうから、横にしないで欲しい」
「このカバンをですカ？わかりまシタ。気をつけマース」

零れる?あの鞄に何が入っているんだ?

「デハ、行ってらっシャいマセ」
「……雄二、行こう」

「痛だだだっ！肘がねじ切れるっ！」

抵抗空しく、お化け屋敷の扉の前に立たされる。演出なのか、その扉は横開きの自動ドアでありながら電気が入っていないようで手動で開けるようになっていた。

『私だ。お化け屋敷にターゲットが入った。吉井さん考案の作戦を実行しろ』

『お、今入ったのか』

『ちょうどいいタイミングみたいね』

『おお、アナタたちは！先程は大変失礼いたしまシタ。ありがとうゴざいマス』

『別に大丈夫ですよ。自業自得ですし』

『扱い酷いな…。ま、確かに大丈夫だから気にするな』

扉が閉まる寸前、似非野郎と男女の会話が聞こえた。さきほどと同じ奴らみたいだが…。相変わらず聞き取りにくく、雅夜たちか判別しずらい。

それに明久考案の作戦か。いったいどんなものになっているかはわからんが、ヤツ如きの策に引っかかってたまるか！

薄暗い廊下を翔子と二人で歩く。カツン、カツンとリノリウムの廊下は足音を必要以上に大きく鳴らしているような気がした。

「さすがに廃病院を改造しただけのことはあるな。雰囲気満点だ」

「……ちょっと怖い」

「こういうのにあまりビビらないお前が怖がるなんて、珍しいな」

「……そうかも」

時折壁に貼られている《順路》というポスターに従って進んでいく。一階は特に何が起こるというわけでもなく、二階に上がり、少し進

んだ廊下で初めて何かの演出が顔を出した。

【――じの方が――――――よりも――――――】

冷たい風に乗って幽かに聞こえる声。

ふむ。怨嗟の声の演出か？

「……この声、雄二……？」

「ん？そうなのか？」

どうやらこれは俺の声そっくりらしい。秀吉に声真似でもさせたのだろうか。確かに自分の声が聞こえてくるなんて怖いといえば怖いが、明久にしては普通の演出だと――――――

【姫路の方が翔子より好みだな。胸も大きいし】

「……雄二。覚悟、できてる……？」

「怖ぇっ！翔子が般若のような形相に！確かにこれはスリル満点の演出だ！」

なんて恐ろしいことを考えてるんだあの野郎。まさか俺を生かしてここから出さないつもりか！？

なんてビビっていると、バンッと背中で何かの仕掛けが作動する音が聞こえた。

よっしゃ！ナイス演出！助かったぜ！

「翔子！何か出てきたぞ！」

音のしたほうに首を向けると、そこにはさっきまで何もなかったは

ずなのに、突如あるものが現れていた。それは――――――

「……気が利いてる」

……釘バット？

「畜生っ！よりにもよって処刑道具まで容姿してくるとは！全く趣旨は違うが最強に恐ろしいお化け屋敷だっ！」

「……雄二。逃がさない」

釘バットを持った幼なじみに追いかけられるという斬新なアトラクションを一時間あまり楽しむ羽目になった。

しかし、明久はコレで俺と翔子がくっつくと思っているのか……？

第１５２話（後書き）

相変わらずのほぼコピー（泣）

これは、もうひと組みの状況を少しずつ入れてますが丸写しと言われてもしょうがないですね（苦笑）

感想お待ちしております。

第１５３話

アレは秀吉の声真似だと逃げながら説明し、なんとか落ち着いた翔子を連れて俺はお化け屋敷を出た。

「お疲れサマでシタ。どうでシたカ？結婚したくなりまシタか？」
「アレと結婚を結びつけて考えることが出来るのはお前と明久ぐらいだろうな……」

絆どころか溝が深まった気分だ。

「オカしいデスね？危機的状況に陥っタ二人の男女ハ、強い絆デ結ばれルという話なのデスが……」
「まぁ、襲い来る危機が結ばれるべき相手自身でなければそうなるかもしれないが……」

この似非野郎、きっと明久と同レベルのアレなつだろう。

しかし、おかげで少し安心した部分もある。明久の作戦ということなら、、ヤクザを使っての詐欺まがいのことはされそうにないからな。これなら死にもの狂いで脱出すような真似はしなくてもよさそうだ。……面倒なので、できればすぐにでも帰りたいが。

「……そろそろ、お昼」

翔子が噴水の上の法を見ながら呟いた。そこにある大時計は午後一時過ぎを示していた。そろそろ昼飯か。

「……あの、私のバッグ――――」
「デハ、豪華なランチを用意してありマスので、こちらにいらして下サイ」

似非野郎がスタスタと歩き出す。昼飯も用意してあるのか。さすがはプレミアムチケットだな。

「翔子、どうした？」
「……なんでも、ない」
「？？？」

一瞬寂しげな顔をしていたような……？

「……雄二。急がないとはぐれる」
「お、おう」

俺たちがついてくるという自信があるのか、似非野郎の姿が随分と遠くに見える。まぁ、豪華な昼飯と聞いたからには馳走になるつもりではあるが。

しばらく歩くと、小洒落たレストランが見えてきた。

「コチラでランチをお楽しみ下サイ」

そう言って似非野郎が案内したのはパーティー会場のような広間だった。そこら中に丸テーブルが設置されており、前方にはステージとテーブルが用意されている。この雰囲気、レストランというより――――

「……クイズ会場？」

そう。一応丸テーブルの上には豪華な料理が用意されているが、TVでよく観るクイズ会場のような雰囲気になっていた。

「いらっしゃいませ。坂本雄二様、翔子様」

ボーイが現れ、俺たちを席に案内する。……コイツも見覚えのある面だな、オイ。

「秀吉。ボーイの真似事か？」
「秀吉？なんのことでしょうか？」

顔色一つ変えずに切り返してくるクラスメイト。こいつ、役者モードになってやがるな。こうなるとそう簡単に化けの皮は剥がせない。それならば、明久の時と同じように道具を使うとしよう。

「違うと言うなら、確認させてもらうぞ」

携帯電話を取り出し、アドレス帳から『木下秀吉』を呼び出す。すると、俺が通話ボタンを押すよりも早くボーイが動いた。

「おぉっと、手が滑ってしまいました！」

ポケットから携帯電話を取り出し、噴水のある方向に向かって思いっきり投げつける秀吉（？）。遠くから小さくポチャン、と何かが水没する音が聞こえた。

「そ、そこまでやるか！？アレもう確実に壊れたぞ！？」
「なんのことでしょうか？」

変わらないポーカーフェイス。
いくらあんまり使っていないとは言え、まさか携帯を捨ててくるとは……。敵ながら大した役者根性だ。

「それでは、こちらにどうぞ」
「あ、ああ……」

ボーイに連れられて会場の中を移動する。

「お客様は未成年だということなので、こちらを用意させて頂きました」

席に着くと、ボーイがグラスにノンアルコールのシャンパンを注いでくる。ラベルが見えるように持っているあたり、徹底した演技だ。さすがは演劇部、といったところか。

『だからノンアルコールでもお前は飲むなって！！』
『なんでよ。ちょっとくらいいいじゃない』
『そのちょっとでも酷いことになるから言ってるん――――――って、あぁっ！』
『（ゴクゴクゴク）…ん。ほら、にゃんともにゃいじゃない。ヒクッ』
『……もうダメだ』

視界の隅で少しおかしな会話が繰り広げられている。どうやら食後の一杯で酔ってしまったみたいだ。

「オードブルでございます」

グラスを置くと、すかさず運ばれてくる料理。豪華な、という前置

きは間違いないようで、慣れない料理に苦笑しながらナイフとフォーゥを手に取ることになった。
もっとも翔子はこういった席にはなれてるかもしれないが。

第１５３話（後書き）

時間があったので、本日二度目の投稿！

感想お待ちしております。

第１５４話

そしてデザートも食べ終え、ここには特に何の仕掛けもないのか、と安堵しかけたその時。

《皆様、本日は如月ハイラドのプレオープンイベントにご参加いただき、誠にありがとうございます！》

会場に大きくアナウンスの声が響き渡った。

《なんと、本日ですが、この会場には結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている高校生のカップルがいらっしゃっているのです！》

飲んだ水が少しだけ鼻から逆流した。

《そこで、当如月グループとしてはそんなお二人を応援する為の催しを企画させて頂きました！題して、【如月ハイランドウェディング体験】プレゼントクイズ！》

出入口を封鎖する重々しい音が聞こえてくる。退路を断つとは、おのれ明久。俺の行動パターンは予測済みということか……！

《本企画の内容は至ってシンプル。こちらの出題するクイズに答えて頂き、見事五問正解したら弊社が提供する最高級のウェディングプランを体験して頂けるというものです！もちろん、ご本人様の希望によってはそのまま入籍ということでも問題ありませんが》

大問題だバカ野郎。

《それでは、坂本雄二さん&翔子さん！前方のステージへとお進み下さい》

ご丁寧にも司会が俺たちの席を示してくれたおかげで、レストランにいる観客が一斉にこちらへと目を向けた。助けを求めるために、先程ノンアルコールで酔った奴のほうを見るが、その姿は既になかった。代わりに『頑張れ』と書かれたプラカードが置いてあった。くそったれっ！

「……ウェディング体験……頑張る……！」

「落ち着け翔子。そういったものはだな、きちんと双方の合意の下に痛だだだだっ！耳が千切れるっ！行く！行くから放してくれっ！」

ただの体験だと自分に言い聞かせ、渋々と壇上に上がる。

スタッフの誘導の下、俺と翔子は解答者席へと案内された。

《それでは【如月ハイランドウェディング】プレゼントクイズを始めます！》

俺と翔子の間に大きなボタンが一つ設置されている。コレをおしてから解答するというオーソドックスなシステムのようだ。

そうだな……。正解したらプレゼント、ということは、間違え続けたら無効になるのだろう。それなら俺が間違え続けるとするか。

《ではあ、第一問！》

ボタンに手を伸ばす用意をし、出題を待つ。

さて、どんな問題が来る……？

《坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょうかっ？》

おかしい。問題文の意味がわからない。

――――ピンポーン！

しまった。油断しているうちに翔子が勝手にボタンを！だが、いくらコイツでも正解の存在しない問題に答えなんて――――

《はいっ！答えをどうぞっ！》

「……毎日が記念日」

「やめてくれ翔子！恥ずかさのあまり死んでしまいそうだ！」

《お見事！正解です！》

しかも正解！？

司会者を睨みつける。すると、司会者は観客に見えない角度で、俺に向かって片目を瞑ってきた。さては……出来レースかっ！そこまでして俺たちにウェディング体験とやらをさせたいのか！？

いいだろう。それならば――――俺は維持でも間違えて見せよう！

《第二問！お二人の結婚式はどちらで挙げられるでしょうかっ？》

――――ピンポーン！

素早くボタンを押し、マイクに口を寄せる。既に問題自体がクイズではなくて質問と貸しているような気がするが問題ではない。不正解を出すなんて、造作もないこと！

《はいっ！答えをどうぞっ！》
「鯖の味噌煮！」
《正解です！》
「なにぃっ！？」

馬鹿な！場所を聞かれたのに鯖の味噌煮が正解なのか！？

《お二人の挙式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名【鯖の味噌煮】で行われる予定です！》
「待ていっ！絶対その別名はこの場で命名しただろ！強引にも程があるぞ！」
《第三問！お二人の出会いはどこでしょうかっ？》

ダメだ、聞いてねぇ……！だが、向こうのやり口はわかった。今度は確実に間違えてみせる。翔子が動くより早くボタンを押し、間違った解答を――――

「……させない」

ブスッ

「ふおぉぉっ！？目が、目がぁっ！」

――――ピンポーン！

《はい、解答をどうぞ！》
「……小学校」
《正解です！お二人は小学校からの長い付き合いで今日の結婚までに至るという、なんとも仲睦まじい幼なじみなのです！》

今俺が目を突かれたのは見えてないのか！？どこをどう見たら仲睦まじいという言葉が出てくるんだ！

問題を聞いてから動き出すようでは遅すぎるようだ。翔子の妨害が間に合わないタイミングで解答する必要がある。こうなったら――

――

《第四問に参ります！》

――――ピンポーン！

問題文が読み上げられるよりも先にボタンを押し、妨害が入る前に解答を済ませる！どんな問題が来るかはわからんが、【わかりません】と解答したら１００％間違いになるはず！

「――――わかり」

《正解です！それでは最終問題です！》

うぉっ！？俺の解答を無視したぞ！？問題を無視した仕返しか！？

視界の隅にあるプラカードに書かれた『頑張れ』って文字が異様にムカつく！

もはや間違えることは不可能だ、と諦めそうになったその時、

『ちょっとおかしくな～い？アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんなコーコーセーだけがトクベツ扱いなワケ～？』

不愉快な口調の救いの神が現れた。

第１５４話（後書き）

雄二サイドを早く終わらせる為、

少しだけ投稿スピードをあげました（笑）

感想お待ちしております。

第１５５話

不愉快な口調の救いの神が現れた。
その場の全員が声の主を探る。すると、彼らは呼ばれてもいないのにステージのすぐ近くまで歩み寄ってきていた。

『あの、お客様。イベントの最中ですので、どうか――――』
『あぁっ!?グダグダとうるせーんだよ!オレたちはオキャクサマだぞコルァ!』

茶髪で顔中にピアスと絆創膏をつけた男がスタッフを威嚇するように大声をだす。どこかで見た連中だと思ったら、入場口で似非野郎に絡んでいたチンピラどもか。あの時は絆創膏は付けてなかったはずだが?

『アタシらもウェディング体験ってヤツ、やってみたいんだけど～?』
『で、ですが――――』
『ゴチャゴチャ抜かすなってんだコルァ!オレたちもクイズに参加してやるって言ってんだボケがっ!』
『うんうんっ!じゃあ、こうしよーよ!アタシらがあの二人に問題出すから、答えられたらあの二人の勝ち、間違えたらアタシらの勝ちってコトで!』

慌てるスタッフをよそに、そのカップルはズカズカと壇上に上がり、設置してあるマイクの一つをひったくる。
これはチャンスだ。あの司会者が相手なら間違えられなかったが、この連中が相手なら間違えられることができる。あとは翔子の妨害

を邪魔しておけば……！

「……ゆ、雄二……？」

解答者席の陰で翔子の手を握る。これで目潰しは出来ない。あとは向こうの問題に間違えるだけだ！

『じゃあ、問題だ』

チンピラがわざわざ巻き舌の聞き取りにくい発音で言う。顔に貼ってある絆創膏と合わせて、なかなかシュールで面白い。

さて、どんな問題だ？安心してくれ、どんなに簡単な問題でも間違えて――――

『ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ！』

「……」

言葉を、失った。

『オラ、答えろよ。わかんねぇのか？』

確かにわからないと言えばわからない。俺の記憶では、ヨーロッパは国というカテゴリーに属していたことは一度もないのだから。その首都を答えるなんて不可能だ。

《……坂本雄二さん、翔子さん。おめでとうございます。【如月ハイランドウェディング体験】をプレゼントいたします》

『おい待てよ！こいつら答えられなかっただろ！？オレたちの勝ちじゃねぇかコルァ！』

『マジありえなくない!?この司会バカなんじゃないの!?』

バカップルがぎゃあぎゃあと騒ぎ立てる中、ステージの幕が下りてくる。明久以上のバカがいるとは、世界って広いもんだな……。

視界の隅にあったプラカードに書かれた文字がいつのまにか『頑張れ』から『お疲れ』になっていた。

「おメデとうございマス。ウェディング体験が当たるなんテ、ラッキーでスね」

「……凄く嬉しい」

レストランを出ると、未だに翔子の鞄を抱えている似非野郎がヒョコヒョコと近付いてきた。まったく、なにがラッキーだ。ハナから計画に入っていたくせに。

「そういえば翔子。お前の持ってきた鞄は何が入っているんだ?随分と大きいが」

「……別に、なんでも……」

翔子が少し困ったように答える。何かあるのだろうか?

まぁ、俺の実印すら持ち歩いているようなヤツだ。荷物が大きくても不思議はないが。

「翔子サン、ウェディング体験の準備があるノデ、このスタッフについていってもらえマスか？」

いきなり似非野郎の後ろから三十前後の女性のスタッフが歩み出て頭を下げる。いかにも業界人といった風貌の人だ。

「初めまして翔子ちゃん♪貴方のドレスのコーディネートを担当させて頂く鳴海陽菜って言います。気軽に陽菜って呼んで頂戴。一生の思い出になるようなイベントにする為に、お手伝いさせてもらうわ。よろしくね♪」

そう言ってスタッフは翔子に笑顔を向けた。なぜだろう。初対面のはずなのに既視感を感じる。

おいおい、随分と本格的だな。まさかスタイリストまでつけてくるとは。

となると、如月ハイランドの狙いはアトラクションじゃなくて最初からこのウェディング体験だったってことか。どうやら今からの時間を目一杯使って結婚式の擬似体験をさせてくるようだ。

「ってことは、俺は長い時間待たされるのか？」

ドレスを着てメイクをするってことは数時間もかかるような大作業になるだろう。その間俺は何していればいいんだ？

「ご安心下サイ。坂本雄二サンについての対応は吉井サンから聞いテ――――ではナク、ワタシが考えてありマース」

「もう今更隠す必要もないだろ。明久から指示が出ているのか？」

猛烈に嫌な予感がする。

「ハイ。坂本雄二サンにはコレを使うように、と」

そういって野郎が取り出したのは、見覚えのあるスタンガン（二十万ボルト）。

「坂本雄二サンは逃亡を考えるだろうカラ、コレで気絶させてカラ着替えさせるように、との指示デース」

「あ、明久ぁあああああああっ！！」

「少しガマンして下サーイ」

首の後ろでバチンッと大きな音が響き、俺は意識を失った。

第１５５話（後書き）

この如月ハイランド編ではある意味キーパーソンじゃないですか、このバカップル？

この二人がいなかったら話の結末が全く違う方向に言ってたかもしれないんですよね。

感想お待ちしております。

第１５６話

《それではいよいよ本日のメインイベント、ウェディング体験です！皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎えください！》

園内全てに響き渡るのではないかと思える程の拍手が聞こえてきた。このうちの何割かはサクラだと思うが、周囲の熱気に圧されて一般入乗客も拍手をしているようだ。

「坂本雄二サン、お願いしマス」

舞台袖で似非野郎が耳打ちしてきた。
コイツをブチのめして逃げてやろうか。

「抵抗すれバ、海栗とタワシの活け作りをアナタの実家に送りマース」

くっ。そんな物を送られたら、あの母親はきっと全部海栗だと勘違いしてタワシにも手を出してしまう……！

「やれやれ……。まぁ、あくまでもただの体験だしな。適当に付き合ってさっさと終わらせるか……」

油断を誘うため、似非野郎に聞こえるように諦めの言葉を呟く。

恐らくこいつらの狙いは、指輪交換から誓いのキスまでの一連のシーンだ。それらを大々的にメディアに発表することで、俺と翔子を世間的に結婚させるつもりだろう。確かに世間でそういった目で見られてしまえば、違うやつと歩いているだけで何を言われるかわか

ったもんじゃない。いやらしいが巧いやり方だ。勝手に映像を使われる――――要するに肖像権云々についての知識はないのでわからないが、向こうは大企業だ。なんらかの方法があるのだろう。

だがそれなら、俺は誓いの言葉に入るまでの間に脱走したらいい。好都合にも衆目の前だ。ちょっと大げさに仮病でも使ってやれば、相手側も式を断念せざるを得ないだろう。この場を逃れたらあとはどうとでもなる。

「さァ、どうゾ」
「あいよ」

トントン、と小さな階段を昇る。そのままステージに上がると、その光景に一瞬眩暈がした。

「おいおい……。なんだよこのセット……」

数え切れないスポットライトにライブステージのような観客席。スモークの設備はおろかバルーンや花火の用意までしてあるように見える。向こうにある電飾なんていくらかかってるか見当もつかん。

《それでは新郎のプロフィールの紹介を――――――》

ん？俺のプロフィール紹介か。まるで本物の結婚式だな。目的のシーン以外の部分もきちんとしているようだ。さっきのクイズもそうだが、きっと明久や雅夜にでも聞いて細かく下調べを――――

《――――――省略します》

手ぇ抜きすぎだろ。

『ま、紹介なんていらねぇよな』
『興味ナシ～』
『ここがオレたちの結婚式に仕えるかどうかが問題だからな』
『だよね～』

最前列に座っている連中からそんな声が聞こえてきた。
声の主は……さっきクイズ会場で騒いでいたチンピラどもか。しかし、最前列に座っているのに大声で会話とは。外観に相応しいマナーの持ち主だな。

《……他のお客様のご迷惑になりますので、大声での私語はご遠慮頂けるようお願い致します》

『コレ、アタシらのこと言ってんの～？』
『違ぇだろ。オレらはなんたってオキャクサマだぜ？』
『だよね～っ』
『ま、俺たちのことだとしても気にすんなよ。要は俺たちの気分がいいか悪いかってのが問題だろ？な、これ重要じゃない？』
『うんうん！リョータ、イイコト言うね！』

調子に乗って下卑た笑い声が一層大きく響きわたる。
主催側のイベントの邪魔になる要因は排除したいだろうに――――
やっぱりあれだけ騒ぐ連中だと手を出せないだろうな。宣伝目的でやっているのに悪評を流されたら意味がないから仕方ないな。

《――――それでは、いよいよ新婦のご登場です！》

心なしか音量が上がったＢＧＭとアナウンスが流れ、同時に会場の電気が全て消えた。シモークが足元に立ちこめ、否応なしに雰囲気

が盛り上がる。

……ははっ。コレで翔子に花嫁衣装が似合っていなければ興さめもいいところだな。

脱出はもう少し待つとしよう。折角来んだ。翔子のドレス姿くらい見ておくのも一興だ。

そんなことを考えながら待っていると、目が暗がりになれるよりも早く、一条のスポットライトが点された。

《本イベントの主役、霧島翔子さんです！》

アナウンスと同時に更に幾筋ものスポットライトが壇上の一点のみを照らし出す。暗闇から一転して輝き出す壇上に、思わず目を瞑ってしまう。

そして、再び目を開けた時に飛び込んできた姿に――――――俺は一瞬、言葉を失った。

幼い頃からの知り合いでありながらも今日この場で初めて出会ったような、そんな感覚を抱かせるほどの見違えた姿。彼女は花嫁と呼ぶに相応しくたおやかに佇んでいる。あれは……誰だ？

『……綺麗』

静まり返った会場から溜息と共に洩れ出た、誰のものともわからない台詞。だが、その言葉は何にも阻まれることなく壇上の俺のところまで届いてきた。

余程入念に制作したのか、純白のドレスは皺一つ浮かべることなく着こなされている。スカートの裾は床にすらない限界の長さに設定

されているようで、アイツがステージの中央まで歩いてくる間、一度も床に触れることはなかった。

「……雄二……」

ヴェールの下に素顔を隠し、シルクの衣装に身を包む幼なじみが、どこか不安げにこちらを見上げている。

胸元に掲げている小さなブーケが所在なげに揺れた。

第１５６話（後書き）

あと二、三話で雄二サイドも終わるかな？

感想お待ちしております。

第157話

「翔子、か……？」
「……うん」

頭野中が真っ白になり、いわずもがなの質問が口をついて出た。あまりの変わりように、確認せずにはいられなかったのかもしれない。動揺する俺に、翔子は恥ずかしげに問いかける。

「……どう……？私、お嫁さんに、見えるかな……？」

コイツが見知らぬ少女に見えたせいか、会場の雰囲気に飲まれたのか、それとものかの要因か。俺は考えを巡らせることもなく勢いで返事をしてしまった。

「――――ああ、大丈夫だ。少なくとも、婿には見えない」

先ほど頭に浮かんだ『似合わなければ興ざめだな』なんて言葉は既にどこかへと飛んでいた。婿には見えない、なんて言葉を付け加えられただけでも上出来だと思う。

「……雄二……」

翔子は小さな声で俺の名を呼び、ブーケを抱え直した。
そして、その場で動きを止める。

「お、おい。翔子……？」

なんだ？様子がおかしい。俺の返事が何かマズかったか？

駆け寄るべきか、一瞬迷う。すると、俺が迷ってる間に、翔子は再び言葉を紡いだ。

「……嬉しい……」

目の前で少女が俯き、ブーケに顔を伏せる。そして、それ以上は言葉を発することなく静かに震え出した。

《ど、どうしたのでしょうか？花嫁が泣いているように見えますが……？》

仕事を思い出したかのようにアナウンスが入る。

泣いている？

言われてみて初めて気づく。俯いて肩を震わせて――――翔子は静かに泣いていた。

「お、おい。どうした……？」

ヴェールとブーケが邪魔で表情が見えない。なぜ急に泣き出したんだ？

会場から静寂が消え、観客の間に少しずつざわめきが生まれ出す。

そんな中、彼女は小さな、だがはっきりと聞き取れる声で呟いた。

「……ずっと夢だったから」

涙混じりのかすれた声。

《夢、ですか？》

「……小さな頃からずっと……夢だったから……。私と雄二、二人

で結婚式を挙げること……。私が雄二のお嫁さんになること……。
私一人だけじゃ、絶対に叶わない、小さな頃からの私の夢……」

口数の少ない翔子が懸命に紡ぐ言葉は、俺に形容し難い何かの感情を喚起した。
幼い頃のある出来事がきっかけで抱かれた、コイツの俺への想い。
それは罪悪感と責任感からくる勘違いであるはずなのに――――
コイツはどうしてここまで強い気持ちを抱けるのだろうか。

「……だから……本当に嬉しい……。他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが……」

そこまで言って、あとは言葉にすることができずに翔子は静かに泣いた。

『うぅ…。イイ話ねぇ……。お姉さん、カンドーしちゃった…』
『…色々とツッコミたいが、とりあえず声を抑えてくれ』

会場のどこかから鼻をすする音が聞こえてくる。観客のもらい泣きだろうか?随分と涙腺の弱いヤツもいたもんだ。

《どうやら嬉し泣きのようですね。花嫁は相当に一途な方のようです。さて、花婿はこの告白にどう応えるのでしょうか?》

どう応える?そんなものは決まっている。場所がどこであろうと、時間がいつであろうと、俺がやるべきことはただ一つ。コイツの勘違いを正してやることだ。
頭ではそう考えている。それなのに――――不思議なことに俺の口はなかなか言葉を紡ぐことが出来ずにいた。

「翔子。俺は――――――」

『あーあ、つまんなーい！』

何かを言いかけたところで、観客から大きな声があがる。俺は慌てて口を噤んだ。よくわからないが、どこかでホッとしている自分がいる。ということは、これは俺にとって天の助けなのか。

『マジつまんないこのイベントぉ～。人のノロケなんてどうでもいいからぁ、早く演出とか見せてくれな～い？』

『だよな～。お前らのことなんてでおうでもいいっての』

どうやら俺の窮地を救ってくれたのは最前列に陣取る馬鹿二人組みのようだ。会場が静まり返っていたおかげで発言者がはっきりとわかる。

『ってか、お嫁さんが夢です、って。オマエいくつだよ？なに？キャラ作り？ここのスタッフの脚本？バカみてぇ。ぶっちゃけキモいんだよ！』

『純愛ごっこでもやってんの？そんなもん観るために貴重な時間割いてるんじゃないんだケドぉ～。あのオンナ、マジでアタマおかしいんじゃない？ギャグにしか思えないんだケドぉ』

『そっか！コレってコントじゃねぇ？あんなキモい夢、ずっと持ってるヤツなんていねぇもんな！』

『え～っ！？コレってコントなのぉ？だとしたら、超ウケるんだケドぉ～！』

口々に文句を言い、翔子を指さして笑い始める二人組み。すると、

《んだとテメェらっ！もういっぺん言ってみやがれ！》

《あ、明久君！落ち着いてっ！ステージが台無しになっちゃいます！》

そんな放送が入り、舞台裏の方から誰かが暴れるような音が聞こえてきた。どこかで今のカップルの発言に腹を立てたバカが暴走しているのだろう。

どこかで暴れているのかと、チンピラどものいる席から舞台裏の音がした方に一瞬視線を移す。

そんな短い時間の間に、

《は、花嫁さん？花嫁さんはどちらに行かれたのですかっ？》

翔子は壇上から姿を消していた。

さっきまで立っていた場所にブーケとヴェールを残して。

「……はぁ。やれやれ」

なんとなくヴェールを拾い上げる。

それは羽根のように軽いはずなのに。涙で湿って少し重くなっていた。

第１５７話（後書き）

変えられない（汗）

まったくのコピーであることを許してください（泣）

感想お待ちしております。

第158話

《霧島さん?霧島翔子さーんっ!皆さん、花嫁を捜して下さい!》

スタッフがドタバタと駆け出す。

ふむ。どうやらこのイベントは中止のようだな。ここまで大々的に用意しておきながら失敗とは、経営側のお偉方はきっと真っ青になっていることだろう。

「さ、坂本雄二さん!霧島さんを一緒に捜して下さい!」

スタッフが一人、息を切らせてこちらにやってくる。俺にアイツの行き先に心当たりがないか聞きたいのだろう。

「悪いが、パスだ。面倒だし、便所にも行きたいしな」

「え?ちょ、ちょっと、坂本さん……!」

背を向けて歩き出す俺にスタッフが声をかけてくる。

が、無視の姿勢を崩さないでいると諦めたように去っていった。まったく、俺なんかに頼るのなら最初から自分で探した方が早いだろう。

「君。ちょっといいか?」

と、思っていたら後ろからまた声をかけられた。ったく、自分で探せって。無視して歩き始める。

「…ふむ。やはりなかなか良い目をしてる」

「っ！？」

一歩後ろに後ずさり、拳を構え戦闘態勢に入る。

「反射神経もなかなか…。だが、雑なところが目立つ。不良相手に実戦で培ってきた、というところか？」

後ろから声をかけてきたはずの奴がいきなり目の前に現れ、俺の顔をのぞき込んでいた。

「……アンタ、なにもんだ？」

「しがない喫茶店のマスターだ。如月（ここ）グランドパークにはちょっとした用事で呼ばれていてな」

隙がありそうで、全くない状態で話し続ける男性。……実力は俺より数段も上の存在だな。

「で、そのしがない喫茶店のマスターが俺になんのようだ？生憎こっちは忙しんだが」

構わないと認め、戦闘態勢は解くが警戒心は解かずに話しかける。あのクソ野郎をとっととぶっ潰したいんだが。

「時間を取らせるつもりは無い。ただ、君みたいに熱く、真っ直ぐな眼を見たのは久しぶりだったからな。どれほどか見ておきたかっただけだ」

「…褒め言葉と受け取っておく」

本当にそれだけらしく、俺が再び歩き始めても今度は止めようとはしなかった。

そのまま退場していく客に混ざって会場を出ていく。五分もしないうちに目的地が見えてきた。あまり遠くでなくて助かった。

『いや、マジでさっきのウケたな！』

『うんうん！私……結婚が夢なんです……。どう？似てる？可愛い？』

『ああ、似てる！けど――――――キモいに決まってんだろ！』

『だよね～！』

さてさて。それじゃ、とっとと用を済ませるか。

ゆっくりと歩み寄り、背後から声をかける。

「なぁ、アンタら」

『ぁあ？ぁんだよ？』

二人組が絆創膏が沢山はってある真っ茶色な顔をこちらに向けてくる。

この二人がさっき俺の窮地から救ってくれたんだ。きちんと礼をしておかないとな。

『リョータ。コイツ、さっきのオトコじゃない？』

『みてぇだな。んで、その新郎サマがオレたちになんか用か、あァ！？』

男の方が一歩前に出て、威嚇するような仕草を見せた。

「いや。大したようじゃないんだが――――」

借り物上着を脱ぎ、タイを緩める。不思議なことに、身体は準備運

動を必要としないほどに温まっていた。
「――ちょっとそこまでツラぁ貸せ」

「よっ。随分と待たせてくれたな」
「……雄二」

如月ハイランドの中にあるホテルの前で待つことしばし。玄関から翔子がトボトボと俯きがちに出てきた。

「さて。それじゃ、帰るとすっか」

似非野郎から受け取っておいた翔子の鞄を担ぎ直して、駅に向かって歩き出す。

「……」

翔子はなにも言わず、静かに俺の少し後ろをついてきた。
夕暮れの中、黙々と駅に続く道を歩く。
どのくらいそうしていたのだろうか。如月ハイランドを出て人気のない道を歩いていると、翔子が聞き取れるからどうかギリギリの小さな声で呟いた。

「……雄二」
「……なんだ？」

「……私の夢、変なの……？」

例のバカップルに笑われたことをずっと気にしているのだろう。翔子は足を止めていた。俯いているから表情は見えないが、長い付き合いだ。どんな顔をしてるかぐらい見なくてもわかる。

第１５８話（後書き）

次回で雄二ｓｉｄｅも終わりですね。やっとです（汗）

感想お待ちしております。

第159話

「まぁ、あまり一般的ではないかもしれないな」

俺は少し言葉を選んでからそう答えた。

「……」

再び黙り込む翔子。

さっきの言葉を鵜呑みにするなら、こいつは決して短くない七年という時間をずっと、唯一つの揺るぎない夢を抱いて生きていたということになる。それがあんな大勢の前で笑われ、否定された。今の心情がどのようなものなのか、俺には想像もつかない。

しかし、だからと言って嘘をついて慰めるつもりもない。

「この際だから言っておく。お前のその気持ちは、過去の話に対する責任感を勘違いしたものだ」

七年も前に起こった出来事。翔子が俺に好意と勘違いした気持ちを抱くようになったきっかけ。今でもずっと、あの時のことを後悔している。もっとうまくやれたんじゃないか、と。

あんなことがあったせいで、コイツは俺のようなロクデナシに時間を費やすことになってしまった。だから、お前の気持ちは勘違いだ、と教えてやる必要がある。これ以上無駄な時間を過ごさせないために。

「……ゆう、じ……」

翔子が息を呑む。俺に面と向かってこんなことを言われて、傷ついたかもしれない。

「けれども――――」

だが、どこにもコイツが傷つく必要なんてない。おかしいのはコイツの勘違いだけで、一人の人間を長い間想い続けるという行為は胸を張れる誇らしいことのはずだ。

だから、これくらいは伝えてやりたい。全てが間違いなのではなく、気持ちを抱く対象を勘違いしていただけで、夢自体はおかしなものではないのだから。

「――――けれども、俺はお前の夢を笑わない。お前の夢は、大きく胸を貼れる、誰にも負けない立派なものだ」

会場で拾っておいた物を俯く翔子に被せてやる。

「ただし、相手を間違えていなければ、だけどな？」

折角の体験だったんだ。これくらいの思い出はあってもいいんじゃないか？

「……これ……さっきの……ヴェール……」

花嫁衣装の一つである白い薄布を手で押さえ、翔子は驚いたように声をあげた。

なぜだか俺はその顔を見るのはまずい気がして、思わず顔を背けた。

っと、そういえば、もう一つ言っておかなきゃいけないことがある

んだった。

「それと、翔子――――」

沈みきる寸前の夕日を見ながら、

「――――弁当、旨かった」

俺は軽くなった鞄を翔子に放った。

「……あ……私のお弁当……。気付いて……くれたんだ……」

「さて。さっさと帰るぞ。遅くなると色々誤解されるからな」

「……雄二」

「特におふくろの奴は、いくら言っても――――」

「雄二っ！」

ここ最近では記憶にない翔子の大きな声を聞いて、思わず立ち止まってしまう。

「……なんだ？」

平静に、いつも通りの態度と言葉で返す。

そして少しだけ振り返ると、赤い光の中、自らの手でヴェールを持ち上げて、

「――――私、やっぱり何も間違っていなかった」

満面の笑みを浮かべる幼なじみが、そこにいた。

「もう結婚しちまえよお前ら」

突如、道路脇にある木の上から声が聞こえてくる。

「ちょっと！アタシには声出すなって言っておきながら、なんでアンタが喋ってんのよ！」

「いや、これは仕方ないだろ。むしろ今まで耐えていられたのが不思議に思うほどだ」

「アタシだって雰囲気を壊さないように頑張ってたわよ」

その声は聞き覚えのある声で、今日なんども聞いたようなことのある声だった。

「……オイコラ、そこにいるバカ二人。ちょっと降りてコイ」

「断る！と、言ったら……どうする？」

「バカなこと言ってないでとっとと降りるわよ！」

「イテッ！叩くことはないだろ。……ったく。……よっと！」

掛け声と共に木の上から飛び降りてくる二人。

「よ、雄二。それに霧島も」

「こんにちは代表、坂本くん」

ちっとも悪ぶれた様子もなく、いつも通りの態度で挨拶をしてくる雅夜と木下姉。木下姉は翔子のほうに近寄り、雅夜は俺のほうにやってきた。

「やはり来てたのか。途中で何度か聞き覚えのある声が聞こえたからそうではないかと思ってはいたんだがな」

「なんだ。確信までは至らなかったのか」

「うるせぇ。こっちはこっちで忙しかったんだよ。それに木下姉があんなに嘘がついてるようには思えなかったんだよ」

秀吉の姉だということをすっかり忘れていたのが失敗だったな。

「で、なんでお前らはこんなところにいたんだ？場合によっちゃ殴るぞ」

「殴られて喜ぶ趣味はないんだが……。まぁ、お前らの会話を聞きに来たってところだ――――」

「死にさらせっ！！くそったれがぁああ！！！」

「ごぶるぁああ！！！」

アッパーで浮かせてからの渾身の右ストレートで雅夜を吹っ飛ばす。お。いいのが入ったな。

「わかってて此処にいやがったのかキサマは！！」

「当たり前だろ！！知らなきゃ、こんなところで木登りなんかやるかよ！」

「なんで知ってんだよ！！」

「企業秘密に決まってんだろ！！」

遠くにいることと、軽くキレてることもあった声が自然と怒鳴り声になる。

「とりあえず今言えることは、お前は大人しく俺にぶちのめされろ」

「断る！っていうか、録画だけで済ませてやったことに感謝してもらいたいぐらいだ！俺の父さんだったら、すでに知り合い関係全員にリアル放送されてたところだぞ！」

「お前の父親なんて知るか！！――――――――って今録画って言ってなかったかお前！？」

「おいおい、今から起きる出来事がわかってて後世に残したほうが面白い、もとい良い場合は記録に残さないわけがないだろ！」

なんてことしてくれてんだよっ！！そんなものが翔子の手に渡ったらどうなるかわかったもんじゃねぇ！

「そのデータをこっちに寄越しやがれ！！全て廃棄してやるっ！」

「それと、今回のデート中もずっと録画してたことは秘密だ！」

「なにが秘密だ！思いっきりばらしてるじゃねぇかよ！」

いったいどこから撮影してたんだ？まったく気付かなかったんだが。

「ちなみに撮影者は霧島がドレス着るときにスタイリストとして紹介された人なんだが」

「はぁっ！？あの人もグルだったのか！？」

「頼んだら二つ返事でＯＫ貰った。後、マスターとか名乗る人物と出会ってないか雄二？」

「あ、ああ。いきなり目の前に現れて良い目だとかなんだとか言ってきやがったな」

もしかしてあの人もグルなのか？って、俺が今日会った奴は全てグ

ルなのか？いや、でもあのマスターとか言う人と明久達が繋がってるとは思えられないな。となると明久たちとは別で、雅夜が頼んだ人なのか？

「雅夜。あのマスターだとか言う人はなにものなんだ？」
「……今度合わせてやるよ。そしたらわかる」

言いづらそうに答える雅夜。会えるならもう一度会っては見たいが、なぜ隠そうとする？

「ま、そんなことはいいとして。今日はもう疲れたし、帰るぞ優子」
「わかったわ。それじゃ、代表。アタシたちは先帰るから、また明日ね」
「……バイバイ」
「おう。カリはまた今度返してやるから覚悟しとけよな雅夜」

今はもう怒る気が失せた。っと、そういえば。

「お前たちも今日如月ハイランドに行ってたんだよな？」
「…ん？ああ、そうだが？」
「どうだった？こっちはグループの手でおかしなのしかしてなかったから、正直普通の場所には回ってないんだ」
「あー、あのお化け屋敷ぐらいしかアトラクションは回ってないみたいだしな。そう思うのも普通か」

今更どうしてそれを知っている！？とはツッコム気にはなれない。

「でもどこも普通じゃなかったかしら？他のよりちょっと規模が凄い程度で、他の所とあんまりかわりはなかったわよ」
「そうか。それでお前らの仲は進展したのか？よく雅夜が『まだ付

き合ってない』って言ってたが…ん？」

俺が言うと、二人は顔を赤く染めてそれぞれ逆の方向を向いてしまう。

「おいおい…。まじでなにかあったのか！？」

普段はこういった行為を全くしない雅夜までもが、顔を赤くしてしまうような出来事があったのか！？

「んー、あー、まー。……そんなところだ」

「そ、そうね。二人に言うようなことじゃないわね」

「……なにかあったの？」

「だ、代表！？べ、別にいいじゃない！ほら、雅夜！帰るわよっ！」

「お、おう！んじゃ、そういうことで！」

俺たちを振り切って駆け出していってしまった。こりゃ…一波乱起きそうだな……。主にＦＦＦ団の連中が。

「……雄二。私たちも帰る」

「ん？ああ、そうだな」

翔子がいつもの調子で言う。さっきまでの気まずい雰囲気はいつのまにかなくなり、いつのも雰囲気に戻っていた。これだけはアイツラに感謝してもいいかもな。

第１５９話（後書き）

～雄二ｓｉｄｅ～完

久々に雅夜を書いたから、少しおかしいかもしれませんが

許してください（汗）

感想お待ちしております。

第１６０話（前書き）

『如月グランドパーク編～Ｓｉｄｅ雅夜～』ですっ！

第１６０話

とある休日の朝…。

「それじゃ、そろそろ行ってくるね雅夜」
「おう。頑張ってこい」

まだ日も完全に昇りきってない時間に、打ち合わせなどの為早めに如月ハイランドに行く明久を見送り外に出る。

「やぱっり、雅夜も此方に来なくていいの？雅夜が好きそうなことだから、最初はてっきり来るとばかり思ってたんだけど」
「いつもなら行くだろうが、今日はちと用事があってな」

一応明久たちには俺がと優子が如月ハイランドに行くことは秘密にしてある。

「うん、わかってるよ。ちょっと確認しただけ」
「まぁ成功かどうかはわからないが、うまくいくから手加減しないでやってこい」
「了解！こういう時の雅夜の言うことは凄く当てになるからね。言われた通りにやってくるよ」
「電話の件はわすれてないよな？」
「大丈夫。『雅夜に二万で買ってもらって、杜丘高校の方で捌いてくるんだって』でいいんでしょ？」
「ああ、それで問題ない」

杜丘のほうなら雄二には確認のとりようもないから、俺に電話して

くるはずだ。あとは俺のほうでなんとかするからな。

「それにしても杜丘高校かぁ……。最後に行ったのっていつだっけ？」

「俺が知ってるかぎりじゃ中学二年の頃。俺がやらかした時だな」

「あぁ、あの時ね。そうか……あれ以来行ってなかったんだね」

「今度、皆連れて翡翠に行くか。清涼祭のときに何人かあってるし、あらためて紹介したほうがいいしな」

「え、嘘っ!?清涼祭のとき誰か来てたの!?言ってくれれば、会ってたのに」

「ん？なに言ってんだ明久。お前もあの時店内で仕事してただろ。ほら、Ｆクラスの奴らと一緒になってフォークやナイフ投げてただろ？（※第９８話参照）」

忍が妻発言したとき、ＦＦＦ団の連中に混じって投げてたはずだ。

「……あーっ！確かにそんなことしたね！じゃあ、あの時雅夜と秀吉が一緒にテーブル囲ってたのがそうだったの？」

「四年前だから顔を覚えてないもの仕方ないとも言えなくはないが、雰囲気で気付けって」

「雅夜を基準して言われても困るんだけどねぇ……」

気配じゃなくて雰囲気ならわかるだろ？

「ま、そんなことは今はいいとして、時間は大丈夫なのか？」

余裕をもって集合場所に行く予定だったみたいが、今からじゃぎりぎりじゃないか？

「って、あぁーっ！気づいてたなら早く言ってよー！行ってくるね

！」

「わざとに決まってるだろ。行ってらー」

薄情物ーっ！と言いながら走って駅のほうに行く明久。

さぁーて。俺も準備するとしますか。

～Ｓｉｄｅ優子～

朝…とっても、もう九時近くなんだけどね。布団から出て背伸びをする。二度寝したおかげで目覚めはばっちり。

「代表、今頃如月グランドパークで楽しんでる頃かしら」

少し遅めの朝食を食べながら呟く。今日は特に用事はないためのんびりと過ごしている。

「吉井君たちが頑張るって言ってたけど……大丈夫よね？」

今朝早く秀吉がどこかに出かけようとしているのを偶然見かけ、理由を聞いてみたらそんなことを言っていた。姫路さんもいるみたいだし、問題はないと思うけど……。心配なのには変わりがなかった。

ピンポーン♪

「……あら？」

玄関のほうから呼び鈴が聞こえた。服装、パジャマだけど……いっか。

ガチャ

「はいはい、どちら様です――――――」
「浅月雅夜と申すものです」
「――――なんでアンタなのよっ！！」

バタンッ！ガチャ！

すぐさま扉を閉めて、鍵をかける。ど、どどどうして雅夜がいるの！？

『おーい、優子ー。鍵まで閉めることはないだろ』
「ちょ、ちょっと待ってって！今、着替えてくるから！」
『此処で放置はないだろ！？せめて家のなかに入れてくれ』
「だ、ダメよ！まだ起きたばっかりなんだから！そ、その……い、色々とダメなのよ！」

パジャマのままだし、スッピンのままだし、寝癖も整えてないのよ！

『まぁ、そういうことなら待ってるが……。なるべく早めにしてくれよ？』

「わかってるわよ」

いったん軽く済ませてから雅夜を家のなかに入れて、それから本格的にやればいいわね。

「で、結局三十分待たされたわけだが？軽くでこれってなんだよ」

「仕方ないでしょ。いきなり雅夜が来たものだから、驚いてアタフタしてたのよ」

「確かに俺から訪れるのはめったにないがな」

滅多どころか、今までに一度もないわよ。

「言ってくれればメイクぐらいなら俺がしてやったのにな」
「……はい？」
思わず聞き返したくなる言葉を雅夜が発する。今なんていった？
「前、陽菜さんに嫌と言ったほど覚えさせられたからな。ヘタな女子高生よりかは上手く出来る自信はある」
「毎回毎回、あんた器用すぎるのよ！それにしてもなんで陽菜さんから？」
「あの人一応スタイリストの資格もってるからな。腕は相当のもんだぞ」
なんでスタイリストが喫茶店でパティシエやってるのよ。
「で、なんで雅夜は木下家に来たわけ？具体的に説明お願い」
「なんでって、優子と此処に行こうと思ってな」
ポケットからチケットを取り出し、アタシに見えるようにテーブルに置く。えーっと……
「……『如月グランドパーク・プレミアムチケット』って、ええっ！？」
こ、こここれって所謂――――――――でででで、デートのお誘い！？
「この間明久から買い取ってな。どうだ、優子。行かないか？」
「い、いいい行くわよ！」
即答して、チケットを取りじっくり見直す。ほ、本物よね？雅夜の

ドッキリってわけじゃないわよね！？

「俺の性格はそこまで悪くない」

「普段のアンタがとるような行動とは思えないからよ！！」

あの唐変木で鈍感で奥手でヘタレな雅夜からのデートのお誘い！！！

第１６０話（後書き）

テンパってる女子がうまくかけない（汗）

……美琴でも参考にしよっかな（笑）

感想お待ちしております。

バカテスト第十五問目…？（前書き）

出てきたキャラの人物紹介はほとんど終わったので、

今回は３．５巻に乗っているやつを書きます

バカテスト第十五問目…？

【文月新聞】

二年Ｆ組　浅月雅夜さんのコメント

『そういえば昔の偉い人が言ったっけな。

〈無理に一位を取りに行かなくていい。結果が一位になればいいだけだ〉

……あれ？現代人がいったやつだっけコレ？』

以上、

《今話題の人物ランキングＮＯ．１》

《コイツだけは敵に回したくない男子ランキングＮＯ．１》

《謎な奴ランキングＮＯ．１》

《頼りになる生徒ランキング（教師編）ＮＯ．１》

の四冠を制した浅月雅夜さんからのコメントでした。

【坂本夫婦のマル秘恋愛テクニック講座】

「……おい翔子。とりあえず俺にわかるように状況を説明しろ」
「……これは、私たち夫婦とアシスタントの浅月の三人で恋愛の秘訣を皆に教えるコーナー」
「驚いた。このタイトル、『の』以外全部嘘のことしか書いてないぞ。ってか雅夜がアシスタントかよ」
「暇してたところにこの企画やろうとしてた霧島を捕まえて無理矢理なった」
「……では早速ハガキの紹介」
「こっちは無視か。たまには俺の話を聞け」
「……『突然ですが、仲良し夫婦のお二人に相談です』」
「ハガキの差出人よ、よく聞いてくれ。俺は今、手足を縛られて床に転がされている。コイツが本当に恋愛相談の相手にふさわしいか、もう一度考えてみて欲しい」
「まずは初回なのに手紙が来ていることにツッコミを入れろ。自分の状況は二の次じゃないと、ツッコミの担当はできないぞ」
「……『私には婚約者がいるのですが、その人が周りの女の人の誘

惑に負けて浮気をしないか心配です。どうしたらいいでしょうか？』
」
「ついでに男の人の誘惑にも気を付けさせておいたほうがいいぞ。文月学園じゃ、性別なんて些細なもんだと思われてるからな」
「いや、その対応は違うだろ。しかし、どうしたらと言われてもな」
「……夫の浮気には私も困っている。他人事とは思えない」
「頼むから他人事だと思ってくれ」
「当人たちの間柄で適切な対応はかわってくると思うが、どうする？」
「……ここでは私の考えた浮気防止法を教えてあげる」
「翔子よ。それは俺の身に降りかかる不幸の予告とみなしていいんだろうか」
「いつものことだろ」
「……用意するものは三つ」
「言われたものは既に此処にあるぞ」
「？浮気防止に道具が必要なのか？」
「……一つ目は――――」
「一つ目は？」
「――――『手錠』」
「ちなみに安物ならパーティグッズとしてそのへんで売ってることがあるから、案外入手するのは簡単だったりするぞ」
「ちょっと待て。いきなり犯罪臭がする」
「……二つ目は――――」
「やっぱり聞いてないな。雅夜、お前だけが頼りだ」
「断る」
「ちっ。んで、二つ目は？」
「――――『エプロン』」
「こっちに関しては普通にそのへんに売ってるし、そこまで値は高くないから大丈夫だな」
「待て。急にお前の考えが読めなくなった。というか、その組み合

わせで俺に何をするつもりなんだ？」
「……そして三つ目は――――」
「三つ目は？」
「――――『ビデオカメラ』」
「ヨドバシでもヤマデンにでも行けばある」
「貴様何を撮るつもりだ！？エプロンと手錠でドレスアップされた俺の何を撮るつもりだ！？そして入手先がいきなり適当になってるぞ雅夜！」
「飽きたからしょうがない」
「……その三つを用意して、夫に浮気の怖さを教えてあげるといい」
「俺は今、何よりお前が怖い」
「雄二が霧島にやると少しは絵になるんだがなぁ……」
「……以上、『バカなお兄ちゃん大好き（十一歳）』ちゃんからのおハガキでした」
「差出人小学生かよっ！？世も末だな！」
「小学生で浮気の心配ってのもある意味凄いよな」

「……ところで、さっきのは冗談だよな？」
「……カメラは五台以上が望ましい」
「まぁ待て。じっくりと話し合おうじゃないか」

「ふぁあああ……。ねみぃ……」

バカテスト第十五問目…？（後書き）

まだ雅夜の家族や、木下恋さんや芳樹さん、榊さんとその妻などはあんまり出てきてないので

人物紹介はまた今度です（苦笑）

感想お待ちしております。

第１６１話（前書き）

Ｓｉｄｅ雅夜に戻ります。

第１６１話

「普段のアンタがとるような行動とは思えないからよ！！」

酷い言われようだな。確かに普段はデート（こういった）のお誘いことは全くしないが、一応俺も青春を謳歌したい高校生なんだからな？

「ちょ、ちょっと待ってて！今、準備してくるからっ」

「時間は大丈夫だが、なるべく早めにしてくれよ？」

「着替えてくるだけよ。メイクは雅夜に任せるわ」

そういって部屋に戻る優子。さっそく俺にメイクを頼んできやがったか。まぁ、人にやるのは以外と面白いから良いんだけどな。

「っと、そうだ。今のうちに連絡を……」

携帯を取り出しあの人に電話をかける。優子が戻ってくるうちに済ませておくか。

「おまたせ」

あらかた準備を終えすこしの間暇してると、優子の部屋からおずお

ずと優子が出てきた。

「そこまで待ってないから問題な…ぃ……」

リビングに入ってきた優子を見て――――――――身体が固まる。

「ど、どうかなこの服……？」

モジモジとこっちを見てくる優子。

少し青みのかかった白色をベースとして、全体的にフリルやレースが付いていて、いかにもお嬢様が着ているような服装だった。普段の優子から考えられない服装だが、これが凄く似合っていて――――――可愛いい。

「……おぉ」

「やっぱり、似合ってないわよね……？」

「いやいや、凄く似合ってるって！！いつもの服とは全然違うし、可愛い過ぎるからちょっと固まっただけだ！」

「……言い過ぎよ、バカ」

顔を真っ赤に染めて、そっぽを向いてしまう優子。その仕草も異様に様になっており、これまた可愛い。

そして、何かを思い出しかなようにあ。と呟いてこっちに寄って来て、俺の目の前で俺に背中を向けて座る。

「ど、どうした優子？」

「メイク、してくれんでしょ？」

「ああ、そういうことか。けど、後ろ向きじゃなくていいんだぞ」

「……だから、少しは察しなさいよね」

「？？？」

察しろと言われても――――――ああ、なるほどな。
優子が正面に座り直すと答えがわかった。この赤面してる顔が見られたくなかったのか。

俺だって顔が赤くなっているんだ。お互いさまだろ。

「んじゃ、やらせて頂くとするか」
「お願いね」

「良し。これで完了だな」
「へ～……。確かに言うだけあって、上手ね」
「時間がちょっとかかっちまったがな。そろそろ行くとするか」

時刻は十時近く。こっから如月ハイランドまで行くのに一時間以上かかるから、お昼ごろには向こうにつくだろう。

「早く教えてくれてたら色々と準備してたのにね。なんで行く当日に教えるのよ」

「準備はこっちのほうで万全だし、こういうのはサプライズの方がいいだろ？」
「アタシのほうにも準備があるのよ。今回はもういいけど、次はちゃんと教えてよね」
「はいはい。わかった……ん？」
次回のデートの予定が作られた気がする。
「ほら、行くわよ。時間が惜しいわ。ここからじゃ電車とバスを使っても二時間かかるのよ」
「大丈夫。一時間近くでつくさ」
「？なんでよ？」
靴を履いて玄関から家を出る。すると、
「こういうことだからだ」
「やっほー♪お二人さん、今日は絶好のデート日よりですね♪」
「時間通りだな」
玄関の前に止めてある車の中からマスターと陽菜さんが顔を出している。
「なるほどね。確かに車で言ったらもっと早くつくけど……」
「ちなみについでで送っていってもらうだけで、如月ハイランドじゃ一緒しないからな」
「残念なことに向こうにちょっとお呼ばれされちゃってね。お二人のことは観察できそうにないの」
「残念じゃなくて、最初っからそれでいいわよ！」
マスターと陽菜さんの知り合いが如月ハイランドの関係者で、手伝

ってほしいことがあるらしく呼ばれたみたいなので、乗せてってもらえるように先程頼んでおいたのである。

「仕事をサボってまでもこっちに来ようとしないでくれよな？」
「魅力的な案なんだけど今回ばかりはそうもいきそうにないのよね」
「仕事はきちんとこなさないといけないからな」

俺たちが車に乗り込むとマスターが車を発進させ法廷速度ギリギリアウトで走っていく。

第１６１話（後書き）

優子の服装が上手く表現できなかった気がする（涙）

だけど、凄く可愛らしいということぐらいは

伝わってくれてればうれしいです。

感想お待ちしております。

第162話

マスターの車で如月ハイランドに向かう途中。

Ｐｒｒｒｒｒ！

「っと。すまん、電話みたいだ。ちょっと静かにしててくれ」
「わかったわ」

断りを入れてから電話にでる。非通知でかかってきてるが、相手はどうせ雄二だろう。さて。

『雅夜か？ちと聞きたいことが――――――』
「ただいま忙しいため電話に出れない。急ぎの要件があるならピーという音の後に言ってくれ。霧島は寝ている雄二に｛ピー｝」

隣にいる優子に（なにやってるのよアンタ？）という顔をされる。

『どんな留守電メセージだよ！？最後のはなんだよ！不吉すぎるわ！！！』
「相変わらずツッコムのが好きだな。要件はそれだけか？」
『って、留守電じゃないのかよ！ピーって音まで雅夜が言ったのか！？』
「で、ツッコミだけか？要件がないなら切るぞ」

まぁ、要件はわかっているんだが。

『待て待て。お前、明久から買――――――』
「ちなみに明久からチケットは二枚とも売却済みだ。二枚合わせて

三万ってところだな」
『わかってるなら最初っからそういえ！』
「嘘だけどな」
『嘘かよ！？』

信じるなよ。ちなみに、明久に渡した二万は明久の母親からの仕送りの横領の一部だったりする。

「本当は金はもらってない。チケットを渡すかわりに、ちょっとした頼み事をやってもらうということで交渉した。Ｐｒｉｃｅｌｅｓｓ―お金で買えない価値がある―」
『二万の価値のある頼み事……。ちなみに相手は誰だ？』
「二人のうち片方のことは言えないが、一人は雄二が知ってる奴、とでも言っておくか」
『……翔子じゃねぇよな？』
「いや、違う。この言葉に嘘偽りはない」

平然とした口調で嘘を吐く。意外と騙されやすいからな雄二。

『ほぅ…。そこまで言うなら本当なんだよな？』
「ああ。嘘だったら西村さんよりも力があって、西村さんよりもスピードが早くて、西村さんよりも攻撃のリーチのある化け物と戦ってやるよ」

俺の声が聞こえていた三人共全員がマスターのことを指差した。確かに条件にハマるけど、違うから。

『本当に化け物だなソレ！？ってかそんなものが現実にいるのか！？』
「いるいる。雄二が気づいてないだけで結構身近にいるぞ？戦う時

になったら教えてやるよ」
『戦う気まんまんじゃねぇかよ！』
「おっと。今のは言葉のアヤだ」
『…まぁ、いい。今回は信じてやる。じゃあな』
「Ｂａｄ（グッド）　Ｌｕｃｋ！」（ピッ）

無駄なハイテンションでシめて電話を切る。……俺。こんな性格だっけ？

「…ねぇ、雅夜。頼み事って、なに？」
「ん？ああ、あげる代わりに～ってやつのことか？あんなもん一緒に如月グランドパークに行こうってだけだ」
「それが頼み事！？」
「まぁな。もし、今日優子が予定あったりしたら他の奴に売ってたけどな」

金取る気はないから適当に言っただけだ。まぁ、他の奴なら普通に金取るが。あくまで優子だから金を取らないんだけどな。

「じゃあ代表にはなんていったの？」
「特になにも言ってない。しいて言えば『今後も御贔屓に』ってところか？」
「御贔屓って…。まさかアンタ代表相手にも文月学園でやってるようなことやってるの？」
「んー？二人はなんの話してるの？」

ここぞとばかりに会話に参加するな。陽菜さんは運転中のマスターの相手でもしてればいいんだよ。

「えっと、雅夜って日曜大工のマネ事得意じゃないですか」

「え、えぇ、そうね」
「オイコラ。目をそらすんじゃねえ。あんた達のせいで身についた技術だってこと、わすれてないよな？」
「わ、わかってるわよ。流石にそのことに関しては悪いと思ってるわ！」
ったく。
「雅夜。どういうことなの？」
「俺が日曜大工のマネ事をやり始めたのはこの人たちのせいってことだ」
「なにかしたんですか陽菜さん」
「あ、あははは……」
「鳴海家の連中はなにかと物を壊しやすくて、さらにはそれを全部俺に直させようとしてな。面倒いから断るようとすると総攻撃くらうし、逃げようとするか息のあった家族（コンビ）プレーで退路を断つはで、否応なしに色々な物を直し方を覚えていったんだよ」
業者にやらせろって言っても『頑張れ』の一言で無理矢理済ませるからな。くそっ。昔、『これくらいなら俺でも直せるぞ？』って言った俺を殴りたい。
「ま、まぁそういうことで雅夜は代表――――友人相手に商売しているのよね？」
「トラップの設置だとか、鉄格子の設備だとか、特殊なやつばっかりだけどな」
「ねぇねぇ！その子の家ってどこ？！教えてちょーだい！」
「トラップって単語に反応してんじゃねぇ！！」
「失礼な。きちんと鉄格子って部分にも反応してるわよ」
「それはそれでダメだ！」

っていうか、陽菜さんは鉄格子の何に興味を持ちやがったんだ！？

「だいたい陽菜さんは――――――！！」
「そんなこと言ってもマサヤは――――――！！」
「うるさいぞお前ら。静かにしろ」
「「イエス、マスター！」」
「賑やかね……」

マスターに叱られたので静かになる。

なんでデートに行く途中でこんなことになってるんだろうか？

第１６２話（後書き）

デートなのにデートじゃない（泣）

感想お待ちしております。

第１６３話

なんだかんだで如月グランドパークに到着。

「送ってくれてありがとうございますマスター」

「ついでだから気にしなくていい」

「絶対に邪魔するなよ。陽菜さんはちゃんと自分の仕事に専念してくれ」

「わかってるわよ。契約はきちんと守るって決めてるもの」

車から降りてマスターたちと別れる。こっからは別行動だ。

「じゃ、雅夜。さっそく――――」

二人が見えなくなると優子は、俺の方に振り向き、

「近くの絶景スポットを見に行くか」

「なんでそうなるのよ！？」

ツッコミを入れた。

この打って響く反応が好きで、ボケをいれるのが止められない。今回はボケじゃないけど。

「いや、今如月入（なか）ると面倒なことになりそうだから、すこし時間潰しの意味合いもかねて近くにある穴場スポットでも紹介しようかと思ってな」

「？面倒なことってなによ」

ん？ああ、そうか。優子は明久たちが具体的にどんなことやるか知

らないんだっけ。

「秀吉たちが雄二と霧島の為に頑張ることは知ってるよな？」

「ええ。朝早く出ていこうとしてたから、捕まえて事情は聞いたわ」

「なら話は早い。かなり大掛かりにやってて、スタッフのほうにスパイみたいな奴がいるんだ」

「スパイって……。大袈裟よ」

まぁ、少しは誇張してるかもしれないが。

「そうでもないぞ。例えばゲートにいる係員。アイツは雄二たちが来ら明久たちに知らせる役割になっている」

「なんでそんなことしってるの！？……っていうツッコミはいらないのよね？」

「イエス。あの係員は雄二たちの顔をしらないから、客がプレミアムチケットを出したら明久に連絡が行くようになってな。今行くと俺たちが雄二と霧島に間違えられて、しかも明久たちにバレちまうってことだ」

一応、俺達（こっち）にはウェディングシフトは要らないと言ってあるが、俺達が持ってるチケットもプレミアムなので警戒しておく必要がある。

「確かアタシたちが今日如月（ここ）に来てることは、吉井君たちと代表たちには秘密なのよね？」

「ああ。終わった後ならバレても問題ないんだが、今バレたりすると確実に邪魔がはいるからな」

「それで代表と坂本君が来るまで違う場所で時間を潰すのね」

「そういうこと。雄二たちはだいたい一時間後くらいに来るから、それまで中に入らないでちょっと寄り道しようぜ」

「……相変わらずなんでもわかってるのね。ちなみに寄る所ってど

こなの？」

遊園地の目の前だからそんなに良いところがあるわけではないんだが。

「ホテルの最上階――――というより屋上だな」

「……ホテル？えっと……それって、アレのこと？」

「ああ」

「嘘っ！？」

優子が如月グランドパークの近くにあるとてもデカいホテルを指差しながら言い、俺の返答に驚いた。

「前にあそこに行ったことがあってな。屋上から見える景色がこれまた絶景で、しかも朝夕夜で違った感じがあるから優子にも見せてやりたくてな」

「あ、ありがと／／／」

「んじゃ、行くぞ」

優子の手を掴んでホテルまで先導しようとする。

「ええ……あ」

「……ダメだったか？」

「ち、違うわよ／／／ただ……アタシに言ってからして。心の準備とかあるから…／／／」

「そうか。じゃあ、握っていいか？」

「……うん／／／／／／」

確認をとってからあらためて手を握ると、優子は顔を真っ赤に染めて下を向く。仕草と服装が良い感じに合わさって、凄く可愛いな。

こっちまで顔を赤くなるじゃねぇかよ。

「わぁ～……きれ～……」
「どうやら気に入ってもらえたみたいだな」

コネとか色々のおかげで開業前のホテルに入れてもらい、さらに屋上の鍵まで渡してもらった。
その鍵を使って屋上に来るとそこには全面ガラス張りの空間が広がっていた。

「へぇ～…。見る方角によっても違ってくるわね」
「だな。北側(こっち)からは如月ハイランドの全貌が見れるし」
「西側(こっち)からじゃ海が見れるようね」
「で、東側(あっち)は住宅街のほうが見れるぞ。流石に俺達の家の当たりまでは見えんが」
「そりゃそうでしょ。どんだけ離れてると思ってるのよ。それで南側が……こっちは普通なのね。特にこれといったもがないじゃない」

森とまではいかない林が広がってるんだけど、流石にまだそこまでは手が回ってないみたいだ。けど、イベントがある時には装飾品を付けるとか言ってたな。

「優子はどの方角の景色が一番気に入った？」
「そうね。やっぱり海が見れる西側かしら。太陽が反射して水面がキラキラ光ってるのが、凄い綺麗なのよ」
「お、俺と同じだな。しかし朝見れるのもいいが、夕方の時に見れる夕日が海に沈んでいく景色は綺麗だったな」

夜のは此処からじゃなくて近くで見るほうがいいけどな。

第１６３話（後書き）

んー、なんか微妙……。

優子と雅夜のデレが上手くかけません（苦笑）

感想お待ちしております。

第１６４話

「……ん？」

北側（如月ハイランド方面）の窓から景色を見ていると、下の方に見覚えのある二人が見えた。

「優子」
「なに雅夜？」
「どうやら雄二たちが来たみたいだぞ」
「あら、早かったわね」

海の景色に見とれてた優子に声をかけ、窓際に連れてくる。

「…真下を見ると案外高いわね」
「落ちやしねぇから気にするな。ほら、あそこにいるぞ」
「……ねぇ雅夜。望遠鏡みたいなのはないの？アタシの視力じゃ米粒程度の大きさでしか見えないのよ」

俺の視力でもよく見えないからな？今の言い方じゃ俺の視力が良さ過ぎるみたいに聞こえるから。
雰囲気とノリでだいたいのことはわかるから望遠鏡の必要ないけど。

「わかってる。ちゃんと用意してある」
「ありがと。よいしょ。……あ、ホントね。今着いたってところかしら」
「そうみたいだな」

二人は二言三言会話したあと、霧島が雄二と腕を組――――肘関節をとった。

「あれ腕組んでるわけじゃないわよね？坂本君、凄く痛そうだけど」
「実際痛いだろうな。指先の感覚ないんじゃないか？」
「……腕を組み、かぁ……」
「ん？どうした優子」
「えっと、その……アタシたちも、腕組む？／／／」
「別に構わないが……関節だけは決めないでくれよな。もしも決めてきたら、移動はお姫様抱っこにしてやるから。覚悟しとけよ」
「それはそれでアリね。恥ずかしいけど／／／」

アリなのかよ！？言ったこっちのほうが恥ずかしいわ！！

「…今度代表に正しい腕の組み方教えてあげなきゃ」
「ついでに常識も教えてやってやれ」

これで、雄二の負担も少しは軽くなるかな。

「お、入場するみたいだぞ」
「どうやらゲートで少し坂本君が騒いでるみたいね。雅夜の言ったとおり係員がなにかやったのかしら？」
「おおかた係員が明久に連絡したのを雄二たちに聞かれたとかそんなところだろ。俺達もそろそろ下に降りるとするか？」
「ええ、そうね」

下に降りて、外に出たころには雄二たちも中に入ってるだろう。

「いらっしゃいませ！如月ハイランドへようこそ！」

思ったとおりゲートの前に来た頃には、すでに雄二たちの姿は見えず、ついでにあの似非外国人もいなくなっていた。

ちなみに目の前にいる係員は普通にちょっと背の高めの青年だ。

「本日はプレオープンなのですが、チケットはお持ちでしょうか？」

「ああ、これだろ」

ポケットからチケットを取り出し係員に渡す。

「拝見いたします。これはプレミアムチケットのようですね。……あ、ではお客様方は浅月雅夜様と木下優子様でよろしいですか？」

チケットを見たとき一瞬目の色が変わったが、すぐに普通の目に戻りこちらに聞いてくる。さっき雄二たちが来たことと、一組みキャンセルを入れてることに気がついたんだろう。

「どうやら話は通ってるみたいだな。電話した浅月だ」

「ちょ、ちょっと雅夜！話ってなによ！？アタシ聞いてないわよ！？」

「言わなかったか？如月グループがプレミアムで来たお客様にウェディングシフトとやらを振舞うって話。特にいらなさそうだから先に電話で断っておいたんだよ」

「あぁ、それのことね。ならわかってるわ」

電話事態はここに来る前に済ませてあるから心配はしてなかったんだが、今やっと安心できた気がする。

「聞いておけと言われたので言いますが……ウェディングシフトをやらないで、本当によろしいのですか？一応用意はしてありますが」

「大丈夫だ。電話で言ったとおり、自分達（こっち）でするから問題ない」

「わかりました。なにかご要望がありましたら、お近くの係員にお知らせください。できる限りのことはやらせていただきます」

そいつは良いサービスだな。特に困る予定はないが。あ、いや、そういえば、困ることがあるんだったな。

「では、当園自慢のアトラクションの数々をお楽しみください！」

軽く頭を下げてゲートの先へと促す。

さて、と。色々と頑張んないとな。

第１６４話（後書き）

今更だけど、如月グランドパークと如月ハイランドで良く間違えてることに気がついた（汗）

ちょっと如月ハイランドのほうに統一しないといけませんね（苦笑）

感想お待ちしております。

第165話

「さて、どっから回ろうか優子」
「そうね……。こういうのはやっぱり男子がエスコートするものじゃない？だから雅夜にお任せするわ」
「了解。んじゃ、最初はコーヒーカップでも行くか」
「ぶっ！！」

俺の発言に盛大に吹く優子。

「あんた恥ずかし気もナシでなんで最初からそこが選べるのよ！？いくらなんでもベタ過ぎるでしょ！？」
「仕方ないだろ。作者にはこういった知識はあまりないんだから」
「ちょ、ちょっと！メタはしちゃダメよ！」

事実なんだからしょうがない。※作者）デートなんて出来るリア充は死んで良し。

「じゃあ優子が行きたい場所はあるか？」
「……コーヒーカップでいいわ」
「他の案が浮かばなかったのか、単純に行きたかったのかわからないが」
「今のアタシなら言えるわ。後者よ」
「優子もずいぶんと恥ずかしいこと言うな」

だが、今日はデート！少しくらい羽目を外したほうが楽しめるというものだ！

「時間も惜しいか……ん？」

さっそくコーヒーカップへと行こうとすると、

『あぁっ！？グダグダ抜かすとマスコミにここの態度について投書すっぞコルァっ！』

『そーよっ！アタシたち、オキャクサマなんだからねっ！』

係員とバカップルの言い争い（バカップルが一方的に喋ってるだけだが）を見つけた。

「お、面白いもん見つけたぞ。アソコ見てみろよ。ちまたでよく見る不良（笑）カップルがいるぞ」

指さしながら笑う。そういえばこんなのもいたっけか。

「いまどき珍しいわね。でも、一応人間なんだから指さして笑っちゃダメでしょ」

優子の発言も充分ダメだと思うが？

と、思ってるうちにバカップルがこっちにやってきた。

「なんだとコラァっ！？テメェ、誰に向かってなめた口聞いてんだぁっ！」

男が下から睨みつけるようにしてくる。え？もしかしてこれで威嚇してるつもりなのか？これだったらまだ杜丘のやつらのほうが数倍怖いぞ。しかし、誰って言われれば…

「「不良（笑）」」

に決まってるだろ？なにを今更。

「っ！上等じゃねぇかっ！ちょっとツラかせやぁガキンチョよぉ！」

俺達がハモっていうと、不良はキレたのかガンを飛ばしながら近付いてきた。……ちょっと待てよ。これって……

「…もしかして面倒なことに自ら突っ込んだ？」

「自覚なかったの！？」

いつものノリで話してたつもりなんだがな。最近のバカは感情的で困るな。

「……さっさと終わらせて来なさいよね」

優子が溜息を吐きながら言う。

確か、こいつらこの後結構重要な役割あったよな？ってことは手加減しないといけねぇじゃねぇか。

「ダリィ…」

しかたなく男の後ろを歩いて、人目の少ないところまで行く。場所はある意味有名なトイレ裏の茂み。

「よし。ココならダレの邪魔もねぇ――――――」

「『鳴海流体術・不意打ち』」

「ごぶるぁっ！？」

振り返ってこちらを見ようとしたところを威力を弱めた拳で殴りと

ばす。これぐらいなら五分もしたら目覚めるだろう。
そのまま男を放置して優子の元へと行く。

「いやぁー、すまんすまん。次からは気をつける」
「別にいいわよ。今に始まったことじゃないんだしね」
「面目ない」

優子に誤っていると、隣で男の帰りを待っていた女が慌ててトイレの裏へと走っていく。これで少しは自重してくれるといいんだが。

「すいまセンお客様。ありがトウございマース」
「あ、似非外国人……じゃなくて係員か。気にしなくていい、こっちが勝手にやったことだしな」
「そうそう。係員さんが気に止めることじゃないですよ」
「そうデスか。ならせめてものお詫びに、記念写真でもいかがでショーカ？」

持っていたカメラを取り出しこちらに見せる係員。写真かぁ……。

「どうする優子？」
「せっかくだし撮ってもらいましょうよ」
「いや、それはそうだが。俺が聞いたのはポーズについてなんだが」
「ポーズ？普通に撮ってもらえばいいじゃない」

普通の立ち絵っていうのじゃつまらないだろ？んーそうだなぁ。

「よし。お姫様抱っこで撮るか」
「なんでそうなるのよ！？」
「何もしないのはつまらないし、手を繋ぐ・腕を組むってのも在り来たりだからな」

「雅夜の基準がわからないわ！！」

本音を言えば、手を繋いだ写真とかはいつでも撮れるがお姫様抱っこはこういう時しか出来ないんだからなんだけどな。

「オ決まりにナリましタカ？」
「ああ。優子、よいしょっと」
「ひゃっ／／／」

優子を持ち上げてカメラの前に立つ。…っと、やばいやばい。いつもと優子の格好が違うから、いつも以上に恥ずかしいぞコレ。

「デハ、写真を撮りマース。はい、チーズ」

フラッシュがたかれ、ピピッという電子音が聞こえた。

「スグに印刷しマスので、そのままお待ち下サーイ」
「だってさ優子」
「お姫様抱っこのまま待たなくていいわよ！とっとと降ろしなさい！」
「わかってるって」

冗談冗談。すぐ降ろすって。

第１６５話（後書き）

いや、これもう無理ですね。デートシーンが書けませんよ（汗）

そもそもデートしたことがないのにデートシーンを書こうとしたのが間違ってたんだ（泣）

デートシーンがおかしくてもツッコまないで頂けるとありがたいです（苦笑）

感想お待ちしております。

第１６６話

「お待たせしマシた。はイ、どうゾ」

程なくして係員が戻ってくる。

「ありがとうございます」

「デハ、私ハこれで失礼しマース」

写真を俺達に渡し、忙しいのかすぐに去っていってしまった。あぁ、雄二たちのあいてをしないといけないんだっけな。

「さて、写真はどんな感じ――――――ん？どうした優子？」

「こ、こここ、こここここ」

「？」

写真を見ながら優子が壊れたテープのようになっていた。写真になにかあったのか？

「どれどれ？……なんだ。別になんともないじゃねぇか」

「アンタにはこの加工されてるフレームが見えないの！？なんともなくないじゃないっ！！」

「まぁ、確かに俺達はまだ結婚するわけでもないのに、『私たち結婚します』の文字はやりすぎだと思うが」

学生なのに結婚は流石に早すぎる気がする。結婚の話はせめて高校卒業後だとか、社会人になってからとかにしてもらいたい。

「だからなんでそっちにしか目がいかないの！？ハートマークとか

周りにいる天使とかの方のことよ！！／／／」

顔を真っ赤に染めながら言い寄ってくる優子。今日はよく真っ赤になるなぁ。

「お姫様抱っこしてる時点でそんなこと気にならないだろ」

「それはそれ、これはこれよ！雅夜は恥ずかしいとかは思わないの？／／／」

「優子。羞恥心を捨てないと今日は楽しく過ごせないと思うんだが？それと言っとくが、これでも相当恥ずかしがっているんだからな」

だからこそ、知り合いに見られないよう細心の注意を払っているんだからな。知り合いにこの場面が見つかっってみろ。俺が死ぬ。

「…私にはいつも通りに見えるんだけど？」

「表に出さないよう努力してるだけだ。よほどのことがないかぎり赤くすることはない」

「よほどのことって……こんなこと？／／／」

言いながら腕に抱きついてくる優子。

「一つだけ言っておこう優子。お姫様抱っこを済ませた俺が、腕に抱きつかただけで顔を赤くすると思うか？」

「あ、アタシは恥ずかしいわよ／／／」

「俺も恥ずかしいことは恥ずかしいんだが、さっきも言ったが羞恥心は捨てた！優子も今日ばかりは捨てたほうがいいぞ」

「簡単にできたら苦労しないわよ！」

まぁそうだよな。

「それよりも早くアトラクションに行きましょ！」
「お、そうだったな。えっと、確かコーヒーカップの場所は……」
「ホントにコーヒーカップに行くつもりなの！？」
「なにをいまさら。優子も賛成しただろ？……あった。ここからの道のりは…お化け屋敷の前を通っていくのが近いな」
お化け屋敷かぁ…。雄二たちと遭遇しないようタイミングをはからないとな。

「お化け屋敷ねぇ…。それも後で行くのかしら？」
「一応そのつもりだな。廃病院を改造したってのもちょっと気になるし、お化け屋敷と言ったらデートの定番だからな」
「普通前後逆でしょ…？雅夜らしいからいいけど」
俺らしいってのはなんだよ？と思っていると、だんだんとお化け屋敷が見えてきた。
あたりを見渡して見てみても、大きなカバンを持った係員（似非外国人）しか見つからなかった。

「私だ。お化け屋敷にターゲットが入った。吉井さん考案の作戦を実行しろ」
係員は携帯を取り出して、どこかへと連絡していた。

「お、今入ったのか」
「ちょうどいいタイミングみたいね」
狙っていたとはいえタイミング良すぎだろ。

「おお、アナタたちは！先程は大変失礼いたしまシタ。ありがとう

ゴざいマス」

こちらに気づいた係員が頭を下げて礼を言う。さっき謝ったんだから、また謝ることもないのにな。

「別に大丈夫ですよ。自業自得ですし」

「扱い酷いな…」

否定は出来ないが、別に問題なかったから良いんだけどな。

「ま、確かに大丈夫だから気にするな」

「そう言ってモラえると助かりマース」

何度もやられると面倒だけどな。

「お二人はこの後、どうなされるマスか？」

「とりあえずこの先にあるコーヒーカップにでも乗ってくるつもりだ。混んでたりしないよな？」

「大丈夫デース。今なら待たないでスグに乗れると想いマース」

「教えてくれてありがとうございます」

「イエイエ、お客様のために動くのが私たちの仕事デスから」

「んじゃ、雄二たちを頼んだぞー」

適当に係員に別れを告げて歩き出す。さてと、件のコーヒーカップは……

「あ、あれじゃない雅夜！」

「みたいだな。さっきの奴の言ったとおりあまり客の姿が見えないな」

「プレオープンだからでしょ？」

ごもっともですな。

「それじゃさっそく入るとするか。すみませーん、コーヒーカップ（これ）今から乗れますか？」

「はい。乗れますよ。お二人ですか？」

「ええ」

「それではお好きなところをお選びしてお座りください。こちらで座ったのが確認できましたら、動かせますので」

席は自由なのか。だったらせっかくだし、真ん中あたりを…。

「お。意外と大きなコレ」

「そうね。ちゃんと大人も乗れるよう設計されてるみたいね」

席について乗り心地を確かめる。ふむ。前評判通りなかなか上手く作られてるみたいだな。

ガコンッ　という音がして、コーヒーカップが動き始める。

コーヒーカップ・結果。

「まさかアタシたち以外に客がいないなんて予想外だったわよ」
「イメージ的には大丈夫な気がしたが、周りに誰もいなかったから結構ヤバイな」
「さすがにコレは恥ずかしかったわね／／／」
「同感だ（／／／）」

第１６６話（後書き）

楽しむことと諦めることは慣れてしまってる雅夜。

彼が顔を赤くしてしまうことはあるのか！？（笑）

感想お待ちしております。

第167話

「それじゃ、次はどこいきましょうか？」
「そうだな…」

お化け屋敷はあと三十分ばかりは雄二たちが居るし、ジェットコースターみたい絶叫系のはもうちょっとしてからにしておきたい。だとすると…

「次も軽めに、メリーゴーランドみたいの行ってみるか？」
「だからアンタの発想はおかしいのよ！」
「仕方ないだろ。こういうところはあんま興味なかったし、来たことも少ないんだぞ。それにデートで行くようなアトラクションと言ったらこれが思い浮かんだんだ」
「だいたい、コーヒーカップみたいにアタシ達以外のお客さんがいなかったらどうするのよ」
「…それは考えてなかった」

二連続でさっきの空気は色々とマズイ。

「んじゃ、どこに――――〈ぐぅ～〉」

あらためて行く場所を考えていると腹がなった。そういえば朝飯（五時）から何も食ってなかったなぁ。

「……よし。ちょうどいいし、昼飯にするか」
「アタシも少しお腹へっちゃってたところだから、いいわね」
「どこで食おうか？確か如月ハイランドにあるレストランは……二

つだったな」

本当なら他にも3，4店あるのだが、プレオープンとのこともあって今日はやってなかったはず。

「片方は小洒落たレストラン、もう片方はマスターが助っ人で入ってるレストラン。どっちがいい？」

「小洒落たレストランね」

「即答!?もうちょい悩むことはないのか？」

「…だって、マスターがいると話がおかしな方向にいっちゃいそうじゃない」

「…否定はできないな」

幸いなことに陽菜さんは他のとこにいるが、マスターの対応だけでも充分困るからな。

「それじゃ早速行くとするか。雄二たちが来る前にさっさと済ませておきたいしな」

「そうね。代表には悪いけど、今日は出会いたくないわ」

「悪くない悪くない。それが普通だ」

っていうか誰にも会いたくないな。

レストラン到着。

「へぇ～。なんだかパーティ会場みたいなお店ね」

中に入ってからの優子の第一発声。実際にパーティ会場としても使われてたっけな。

「今はクイズ会場としてセッティングしてあった気がするぞ」

「クイズねぇ…。もしかして代表たちが挑戦者だったりするかしら？」

「ああそうだぞ。成功するとウェディング体験が出来るらしい。デキレースだが」

「最後の一言は余計よ。でも、ウェディング体験かぁ……」

なんだ？もしかして優子もしたかったのか？

「んー、今回は流石に無理だな。俺達の分は断ったし、如月ハイランド全体で雄二たちの舞台を整えるから手が空いていないっぽい」

「そうよね。でも、出来ないのは出来ないんだし、今回は諦めるわ」

「そうしとけ」

そうこう話していると店員がやってきて、料理を持ってき始める。格式ばった食べ方はあまり好きじゃないが、礼儀はきちんとしないとな。

「ふぅ…。食った食った」
「美味しかったけど、こういうのには慣れてないからね……」
「緊張してあまり楽しめなかったか？」
「ええ」

苦笑する優子。その気持ちはよくわかる。最初の頃は俺もそうだったからな。

『おぉっと、手が滑ってしまいました！』（ポチャン）
『そ、そこまでやるか！？アレもう確実に壊れたぞ！？』
『なんのことでしょうか？』

少し離れたところから雄二の話し声が聞こえ、泉になにかが投げ込まれる音がした。おっと、もうこんな時間か。

「優子。そろそろ出よ――――」

雄二たちに見つかる前に出ていこうと思い優子の方を見ると、店員からノンアルコールのシャンパンを受け取っていた。

「……なにやってるですか優子さん？」
「なにって店員から食後の飲み物貰ったのよ」

食後の飲み物にノンアルコールシャンパンだと！？っていうかノンアルコールでも優子だったら酔いそうで怖いんだが？

「優子。悪いことは言わない。それは飲むな」
「…もしかしてアタシが酔うと思ってるの？さすがにノンアルコー

ルで酔うほどじゃないわよ」

空気だけでも酔った奴の言葉は信用できません。

「だからノンアルコールでもお前は飲むなって！！」

「なんでよ。ちょっとくらいいいじゃない」

「そのちょっとでも酷いことになるから言ってるん――――――って、あぁっ！」

俺の言葉を無視して口の中に流しこむ優子。だ、大丈夫なの――――

「（ゴクゴクゴク）…ん。ほら、にゃんともにゃいじゃない。ヒクッ」

「……もうダメだ」

どうしよっかコレ…？

とりあえず冷たい水を飲ませた後、頬をペチペチと叩いて目覚めさせることに成功した。

ノンアルコールだったため、まだ症状は軽かったのだろう。

第１６７話（後書き）

ね、眠い…。

最近、睡眠時間が一時間ばかり減ってきている（汗）

一時間だけ短くなっただけでもこんなに違うんだ……

感想お待ちしております。

第168話

優子の酔い覚ましと休憩をかねてベンチで休憩することにした。

「ほいよ。で、気分はどうだ優子？」

「ありがと。だんだんと平気になってきてるわ」

買ってきたジュースを渡し、ベンチに腰掛ける。いやー、遊園地で売ってる物ってやっぱり街で売ってるのと全然値段が違うな。

「それと、ごめんなさい。雅夜に言われたのに勝手に飲んで酔っちゃって、自業自得ね」

「別に気にすんなって。まさかノンアルコールで酔うなんて誰も思ってなかったことだしな」

なんとなくそんな気がしてはいたが。

「ホント、自分の体質に驚かされたわ。なんで酔っちゃうのかしら？」

「遺伝子的にダメだったりするんじゃないか？」

「…そうかもしれないわ。お父さんは人前で飲めないほど酷いってお母さんから聞いてことがあったわね。お母さんはどうだか聞いたことないけど」

「芳樹さんほどじゃないけど恋さんも悪いぞ。ウチの親共が二人と飲んだことがあるらしく、その時のことを聞いたことがある」

「じゃあやっぱりアタシの酔い方は血なのね」

まぁ、酒癖は酷いと聞いたが、酔いやすいかは聞いたことはないってことは言わないでおこう。

「あ、そういえば。アンタ学生なのに酒好きで酔わないじゃない。それも親譲りなの？」
「いや、ウチの両親は普通だぞ。酒はそこそこ飲む程度で、酒癖もそこまで悪くない。それに俺だって最初の頃は酔ってたぞ」
「じゃあなんで酔わなくなったりしたのよ？」

んー、そうだな。

「小学生の頃から鳴海家に泊まったら水感覚で飲まされたからな。それに酔ったらあの人達に何されるかわからないから、酔わないようにと思って頑張ってたらいつのまにか耐性がついちまった」
「…慣れって凄いわね」
「…俺もそう思ってる」

『好きこそ物の上手なれ』――――ではなくて、『慣れこそ物の上手なれ』。なんだかんだ言って経験にまさるものはないと思ってる。

「ま、この話はまた今度にするか。優子も、充分休めただろ？」
「ええ。もうすっかり元気よ」

立ち上がり飲み終えたカンをゴミ箱に捨てる。こういうところだと、ベンチの近くにゴミ箱があるから助かる。

「次は……お化け屋敷だな」
「お化け屋敷？アタシ怖いのはダメなのよね」
「嘘つくな。全然怖くないくせになにいってやがる」
「なんでそう思うのかしら？」
「怖がりが夜の学校を平然と歩けるわけねぇだろ」

光が非常灯と懐中電灯だけの暗がりを、特に怖がる様子もなく歩けたり泊まっていけたりしたら充分だろ。それと原作でのこともあるしな。

「……ん？扉の近くに係員がいないな」
「あらホント。でも、どこにもクローズの立て札はないわよ？」
「ってことはご自由にどうぞ、ということでいいのか？」
「いいんじゃないかしら。もし違ってもその時に考えればいいんだし」
「だよな。んじゃ入るぞー」

電気の通ってない自動ドアをギギギッと音を鳴らせながら手動で開けて、中に入っていく。
中は暗いが、適度に非常灯が光っており演出が出ていた。

「やっぱり雰囲気はこうでなくちゃな」
「廃病院を改造しただけはあるわね」

そっか。そういえば廃病院を改造して作られたんだっけコレ。だからさっきから出てきてるオバケ類は病院にちなんでるやつばっかりなのか。

「ねぇ雅夜。足音ってここまで大きく聞こえるものかしら？」
「そりゃ周りに音がなかったらな。リノリウムの廊下だからってのもあると思うが」
「そうよね……。でも……さっきからなにか変な感じがするのよね……」

？変な感じってなんだ？
《順路》と書かれたポスターに従って進んで行くと階段があり、二

階まで来た。

【《ジジッ》――――じの方が――――《ジジッ》―よりも――《ジジッ》――】

「声……？」

「みたいだな。けど、この声は……」

雄二の声、だよな。もしかしてまだ明久が仕掛けた対雄二ようのが残ってたのか？

【ひ《ジジッ》じの方が《ジジ…ジジッ》ょう子より《ジジッ》好みだな。む《ジジッ》も《ジジッ》おきい《ジジッ》】

…音割れが酷いな。機械が故障してるのか？

「これって坂本君の声よね？…内容が凄く気になるけど」

「内容は明久（バカ）が考えて、それを秀吉に喋らせて録音したやつってところだな。なんでこうなったかわからんが」

「根本的に吊り橋効果の趣旨間違えてるじゃない」

バカだからしょうがない。

その後、雰囲気はあまり変わることもなく外に出てしまった。

「なんだ、これで終わりだったのかよ」

「ほとんど何もなくてつまらなかったわね」

オバケは沢山は見かけたが、どれも俺達になにかしようとしたわけでなくそのへんをぶらついてただけだったから、優子の言ったとおりつまらなかったな。アクションが全然なくて物足りない。

「……おヤ？アナタたちは先程の。マタお会いしましタネ」

なんて優子と愚痴ってると係員（似非外国人）が声をかけてきた。

雄二たちの世話は……あぁ、今クイズ中なのか。

「さっきの係員か。ちょうど良いところにいたな。聞きたいことがあるんだが、ちょっといいか？」

「ハイ。なんでショうか？」

「あのお化け屋敷、中に何もなくていいんですか？」

「何もない…デスか？おかしいデスね、坂本様たちはもう済ませたので通常のセッティングになってるはずですが」

通常どころかまだ対雄二ようのやつが残ってたぞ。

第１６８話（後書き）

雄二たちはクイズ中のため、暇をしてた似非外国人。

この人、意外と偉い立場の人だったりする（笑）

感想お待ちしております。

第１６９話

「どこかで連絡が間違って伝えられたんじゃないか？中通ってきたが、通常のセッティングとは全く思えなかったぞ」
「そうデスか、ありがトウごザイます。係りのモノに聞いてミマス」
と、懐から携帯を取り出しどこかへと電話をかける似非外国人。数コールののち、相手が出たようだ。

「私だ。お化け屋敷のほうは今どうなっている？……なに！？違うっ！二時からじゃない、一時半からだ！」

先程までのタドタドしい日本語とは違い、流暢に話す係員。知ってはいたが、ここまで変わるとはな。

「（どうやら正解のようだな）」
「（みたいね）」

小声で優子に話しかけると、噴水の上にある大時計を見ながら返事する優子。時計の針は一時四十五分を指していた。

「今すぐ配置にかかれ。……ああ。今日は忙しくなるぞ。（ピッ）」
「どうでしたか？」
「どうやら、お二人の言ったトーリ時間を間違えてイタようです」
「やっぱりな。まぁ、幸いなことに俺達以外に入った客はいないようだから、早めに気付いてよかったな」
「ハイ。誠にありがトウございマース」

深々とお辞儀をする似非外国人。今日は俺達には謝ってばっかだな。

「そこまでしなくてもいいわよ。雰囲気だけでも充分楽しんできたから。そうでしょ、雅夜？」

「ああ。何も仕掛けはなかったが、そのへんを歩いていたオバケ（やつ）もリアリティがあって良く出来てたと思う」

あまりのリアルさに本物か！？と思ったほどだしな。

「「……なに言ってるよ？（デスか？）」」

「何って、なかでの出来事についてだが？」

二人こそなんで不思議な顔してるんだ？

「ちょ、ちょっと待って。係員さん、今中って……」

「え、ええ。確かにそのはずなのデスが……」

顔を見合わせて冷や汗をかく二人。なんで冷や汗なんかかいている……ん？

「おい、もしかして……お化け屋敷（ここ）って、俺達が入ってたときは誰もいなかったのか？」

「「（コクリ）」」

んじゃあ、俺がさっき見たのは……

「本物（マジ）なのかよ……」

「……アナタは霊感が強いのですか？」

「除霊が出来る程度には」

「やめてっ！お願いだから言わないで！お化け屋敷のオバケは偽物

だから怖くないけど、本物幽霊だったら怖いんだから！」

優子が俺の腕を掴んでガクガクと震え出す。どんだけ怖がってるんだよ。

「じゃあちょっと耳塞いどいたほうがいいぞ優子」

「（コクコク！）」

言うことに従い、耳と目を塞いで腕をつかむ力がます。やべ、なんかかわいいぞ優子？

「っと、そうじゃねぇや。廃病院（こういうところ）って普通はお清めとかやるもんだろ。やってもらわなかったのか？」

「イエ、やってもらいマシた。確か『仙田忠勝』という有名な方にお願いして……」

「そいつって贋物って意味で有名なやつじゃん」

仙田忠勝。本人には全く霊感がないのだが、自称霊能者として金を荒稼ぎしている人物。※たぶん今後に登場予定はなし。

「そうなのデスか！？そうとは全く知りませんでした……」

「それは仕方ないとして。俺の知り合いにこういうの専門にしてる暇人がいるから、そいつに連絡してみるといい」

「その方のお名前は？」

「『浅月風人（あさづきかざと）』。年中暇してるような人だから遠慮なく連絡していいですから」

「わかりマシた。本当に何から何までありがトウございマス」

もう一度お辞儀をし、走ってどこかへと行ってしまう似非外国人。

雄二たちの方を忘れないといいけどな。

「（ガクガクブルブル）」
「おーい、優子ー。話し終わったぞー」
「……ふぅ」

俺の声に反応して目を開けた優子が溜息を吐いて近くのベンチに座る。

「そんなにダメなのか？」
「あのね、雅夜。確かにアタシはお化け屋敷が怖くないって言ったわ。でもね、いくらなんでも本物がいると知ったら怖いわよ」
「学校でも似たようなもんだろ？」
「学校のは雅夜が消してくれてるでしょ。それに雅夜が一緒にいるから安心だし」

そのとおりなんだけどな。

「で、ここはどうするの？」
「知り合いの専門家の連絡先教えておいたから、そのうちなんとかなるだろ」

幸いなことに今日はプレオープンで、オープンの日まで少しあるんだからそれまでには問題なくなるだろう。

「……ったく。せっかくのデートだというのに、なんだってこんなことに遭遇するんだか」

いい雰囲気が台無しになっただろうが。（別に良い雰囲気になっていたわけではないが）

「日頃の行いのせいでしょ。だから普段からちゃんとしなさいって言ってるのに…」

「俺が悪いのか！？」

理不尽だ！

第１６９話（後書き）

変な感じになってるのは気のせいです！

誰がなんと言おうと気のせいなんです（号泣）！！

感想お待ちしております。

第１７０話

「あー、気を取り直して次行くか」
「次はどこかしら？」
「定番だとか言われても仕方ないと思うが、ジェットコースターだな」
「本当に定番ね！」
王道でもあるからいいじゃねぇか。
「コーヒーカップ、お化け屋敷、ジェットコースター……。いくら経験がないとはいえ、これはないんじゃない？」
「と言われてもな……」
まぁ、如月ハイランドのなかには沢山のアトラクションがあるんだが、外見や名前，パンフの説明だけじゃ楽しめるかどうかまではわからんだろ？折角プレオープンの日に来たというのにつまらないアトラクションで時間を潰すわけにはいきたくないからな。
「定番どころはハズレがないから楽しめていいじゃないか。試しでそのへんのに入ったら、全然面白くなくて鬱になったら嫌だろ？」
「そりゃ、ね。でもそれだけだとなんだか、物足りないというかやりきれないというか……。やるせない気持ちにならない？」
つまりは不完全燃焼ってことでいいのか？
「そんなもんあたりまえだ。今回だけで色々なところ周るとかは無理に決まってるだろ」
「でも、せっかくのデートなんだしマイナーなところも回ってみた

いと――――」
「おーい、優子さん？俺の話をちゃんと聞いてたのか？」
「わ、わかってるわよ」

ふんっ、とそっぽを向いてしまう優子。……おい。

「俺が言ってる意味理解してないだろ！？俺は今回だけでって言ったんだぞ？」
「……へ？」
「やっぱり理解してなかったみたいだな。別にそういうところは次来たときに回ればいいだろって言ってるんだよ」
「ふぇ！？え、えっ！？ちょ、ちょっと！」

俺が言ってる意味に気付いたのか、優子は顔を少し赤くしながらテンパる。

「だいたい今日は雄二たちの方を気にしながらじゃないと行動できないから、俺だって微妙に燃焼しきれてないんだぞ？」
「待って雅夜！いったん落ち着かせ――――」

だが断る！

「要するに次のデートの計画をねってるってことだ！」
「だからちょっと落ち着かせてよーっ！なんでこういうときだけ強気なのよ！！」
「んーノリ？」
「ノリ？じゃないわよ！！」

わぁーお。ご乱心になっておらっしゃる。

「っていうかどういうこと!?今どういう状況になってるの!?」
「雄二と霧島がデート→便乗して俺も優子とデート→雄二たちに見つからないように行動する→不完全燃焼→次回のデートは心行くまで堪能したいな。という感じだな」
「冷静に返さなくていいわよ!（バキッ）」
「ぐふぁ!!」

照れ隠し（?）で殴られる。俺の何が悪いと…?

「話の流れてきに最初から気付いてよかったと思うんだが?」
「あのねぇ!今日のことでさえ雅夜からデートに誘われたのがドッキリだと思ってたのよ?それなのに概念朴で鈍感でヘタレで奥手な雅夜から二回目のデートのお誘いが来ると思うわけないでしょ!!」
「相変わらず俺の評価ってそれなんだな!?いい加減変えてくれよ」

奥手とヘタレってのは否定できないが概念朴と鈍感はやめてもらいたい。

「でも、そうね。そういうことなら今日のところは我慢しといてあげる」
「一気に大人しくなったな。ま、そうしてもらえると助かる」

顔が笑顔になってるし、本当に大丈夫そうだな。よかったよかった。

「っと、話してるうちについたみたいだぞ」
「嘘っ!?なんで!?」
「優子を先導しながら歩いてたからな」

ジェットコースターには客もいるみたいだし、コーヒーカップのようなことにはならなさそうだな。

「ふーむ。それにしてもデカいな。世界一は伊達じゃなさそうだ」
「全長、コース、スピードのどれもが世界レベルで評判がすごかったやつよね」
「如月ハイランドの売りの一つでもあるからな。力を入れてるアトラクションなんだろうな」

一周するだけでどれくらいの時間がかかるんだ?

「それじゃさっそく乗りましょ」
「ああ」

列に並び数分もしないうちにジェットコースターに乗れることが出来た。プレオープンだからこその並び時間の短さ。こういうときは素直に喜べる。

「そういえば優子って絶叫系は得意なのか?」
「違うわよ。得意じゃないけど苦手でもない、ってぐらいよ」
「マジで!?」
「なんで驚くのよ。別に普通よ普通」

そうだったのかよ。そうと言ってくれれば言ってくれれば違うところを選んだのにな。

「まぁ、乗ったら吐くレベルじゃないんだろ?」
「ええ。多少気持ち悪くなるかもしれないけど、大丈夫よ」
「ならよかった」

ガコンッ　と音がし、そろそろ頂上を過ぎようとしていた。

「優子……Ａｒｅ　ｙｏｕ　Ｒｅａｄｙ？」
「は！？もしかしてアンタ絶叫好――――」
「Ｇｏ！！ぃいいいいやっほーっ！！！！」
「きゃあああああああっ！！！」

落ちたり回ったりするたびに俺と優子の悲鳴（歓喜？）の声が上がった。

第１７０話（後書き）

相変わらずのグダグダだ（汗）

次回のデートは書かないかもしれません（苦笑）

感想お待ちしております。

バカテスト第十六問目…？

【土屋と工藤の性活小噺】

「……土屋と」
「工藤と」
「アシスタントの浅月の」
「「「性活小噺っ！」」」
「はい。このコーナーでは、日々の生活に根ざしたちょっとエッチな小噺をボクこと工藤愛子とムッツーーーー」
「……土屋康太」
「ムッツリーニ君で紹介していき、浅月雅夜君がアシスタントするというものです」
「……最近、本名を呼ばれない……」
「前回と同様に捕まった俺を、バカなやつだと笑えばいい」
「……本名……」
「ダルい……」
「最初っから暗いよ二人とも！」
「まったくもう。では、今日のテーマですが……『シャワーの正しい使いたか』です」
「……っっ！！（ドバッ）」
「えぇっ！？もう鼻血！？ムッツリーニ君、想像力豊かすぎない！？」
「気にするないつもどおりだ。ホレ康太、輸血パック」
「……助かる。構わず続けろ」

「う、うん。えっと、ちょっとエッチなお話ということなので、ボクの体験談をお話します。実は先日、学校帰りに雨が降ってきて」
「……っ！（ダラダラ）」
「ホイ、二個目」
「運の悪いことに、その日は部活でふざけていたらプールに着替えを落としちゃって、下着がビショビショになっちゃったんだ」
「……っっ！！（ダバダバ）」
「ん？今度は二つ同時だと？はいよ」
「下は流石に我慢して履いたんだけど、上は――――――ってムッツリーニ君！？もうニリッターくらい鼻血が出てるみたいだけど本当に大丈夫なの！？」
「ちゃんと輸血してるから平気平気……っと、もう五個目か」
「……構わずに、続けるんだ……っ！！」
「そ、それで、雨でシャツが透けてきちゃって」
「……っっっ！！！（ブシャァァァア）」
「やっぱりこの企画無理があるよ！まだシャワーの話に入ってないのに相方がグロッキーになってるんだもん！」
「無理を通して貫わないと俺がこの企画に無理矢理連れてこられた意味がなくなる。おい康太、逝けるか？」
「……死しても尚、魂で聞き続ける……っ！」
「そんなの無理に決まってるでしょ！？とにかく今回はこれで終わり！それではまた次回お会いしましょう！お元気で！」
「……続きが気になる」
「それより先に保健室！」

「ツッコミをしなかったというだけで、疲れないでスムとはな……」

バカテスト第十六問目…？（後書き）

今回は鉄拳人生相談もつけるつもりだったんですけど、
文字数的にいつもの長さを余裕で越してしまうので
次回にさせていただきました～（苦笑）
感想お待ちしております。

第１７１話（前書き）

昨日投稿できずにすみませんでした（汗）

第171話

「いやー、さすがは世界一。こんだけ叫んだのは久しぶりだな」

ジェットコースターを降りて近くにあるオープンカフェでちょっと一息。

「アンタの叫びは歓喜の叫びじゃない…。アタシは悲鳴だったのよ？」

「叫んだってのに意味があるんだ。心の鬱憤だとかストレスだとかを発散できただろ？」

今頃、雄二たちはウェディング体験の着替えに入ってる頃だから、もうアイツらに見つかる心配もなくなったわけだ。

「その代わり少し恐怖心が入ってきたけどね。如月（ここ）ハイランドのジェットコースターは絶叫系が好きな人じゃなきゃ乗っちゃダメね」

「優子は好きじゃなかったか？」

「好きだけど大好きってほどではないわね。だから少しなのよ」

なら次の時はもうちょい軽目なやつに乗るか。

「雅夜はやっぱりこういうの好きなの？」

「もともとはそこまでじゃなかったけどな。小学生の頃から絶叫系は嫌というほど体験した辺から平気になってきて、楽しめるようになった感じだ」

「嫌というほど体験した？雅夜って遊園地に来たことが沢山あるの？」

「あぁ、違う違う。俺が体験したのはアトラクションじゃなくてだ

な……」

まぁ、ある意味アトラクションみたいなものだが。

「マスターから受けた修行のことだ」

「……はい？」

「あの人小学生が相手だからって躊躇わないで攻撃して、５メートルくらい空に飛ばしたり、ジャイアントスイングかけてきたり、道場の端から端に吹き飛ばしたりされたんだ。しかも速さもあるからタチが悪い」

「色々ツッコミたいところがあるけど。とりあえず、なんというかまぁ。アンタよく生きてるわね……」

哀れみの目で優子に見られる。死にかけたことなら結構あるがな。

「体力と回復力は普通より桁外れにあるからな」

「つくづく思うけどさ……雅夜ってホントに人間なの？」

「言われても仕方ないと思うが、流石にその言い方は傷つくぞ」

っていうかつくづく思うな。

「だいたい俺が人間じゃないならマスターは化けも――――――」

「俺がなんだって？」

「ぶっっ！！マスター！？なんでアンタが此処に！？コーヒー一杯くれ！」

「落ち着きなさい雅夜。なんでかわかんないけど注文してるわよ」

冗談冗談。落ち着いてるから普通に注文してるんだよ。

「ちゃんと持ってきてあるぞ」

「流石マスター。俺の行動は予測済みか」
「…いや、おかしいでしょそれは」
「長年の付き合いだから相手の考えることはある程度わかるもんだぞ」
陽菜さんは相変わらずわからないが。
「それにしても雅夜は驚かないのね。マスター、いきなり出てきたっていうのに」
「元からマスターが此処にいることは知ってたし、気配消して登場してくるのもよくあることだしな」
「マサヤほど頻繁に――――《ピピッ》――――ん、すまない。電話だ」
俺ほどじゃない、みたいな言葉を言おうとしたとき電話がかかってきた。むぅ。タイミングが良すぎるな。
「――――ああ。――――――――その通りだ。頼んだぞ。――――そうだ。では切るぞ、じゃあな《プツッ》」
「なにかあったのか？」
「陽菜が今、着付けを開始するところらしい。俺も仕事に戻ってくる」
そう言って去ってしまうマスター。もうそこまで行ったか。早いもんだな。
「となると俺達もそろそろ行った方だよさそうだな」
「？行くってどこにかしら？」
「最後のアトラクション」

コーヒーを飲み干して立ち上がり背伸びをする。うーん、気合い入れないとな。

「もう最後なのね。それで、どんなアトラクションに行くの？」

「コーヒーカップ、お化け屋敷、ジェットコースターとくれば……」

「くれば？」

「締めは観覧車だ！」

「やっぱりね。なんだかその気がしてたのよ」

ここまでくれば誰でも想像つくだろ。観覧車なんて定番もいいところだしな。

「けど、時間はまだ結構あるのになんで最後なの？」

「家に帰る時間を考えないといけないからな。こっから家まで帰るのに二時間かかる。それに観覧車に乗ってる時間は長いぞ」

「確かにそうね」

それにアトラクション以外のやりたいことがあるから、な。

「でも雅夜。さっきのホテルに泊まってけば帰る時間気にしなくていいんじゃないかしら？」

「ホテルってお前な……」

問題発言じゃないか、それ？よくサラっと言えるな。

「色々と言いたいことはあるが、とりあえず明日の学校はどうするつもりだ？」

「……そういえば今日は日曜だったわね」

「まぁ、そういうわけだから泊まりは無理がある。他のワケもある

が」
「むぅ……。せっかく雅夜が言ってた夜景が見れると思ってのに」
それはまた今度な。……いや、別に次来たときにホテルに泊まろうとは思ってないけどな。
っていうかプレオープンの日にホテルってやってるのか？
「ま、そんなことはどうでもいいや。よし、行くか」
「ええ」
優子と手を握りながら観覧車へと出発する。
ちなみにあんまり書かれてなかったが、移動するときはほとんど優子と手を握っていたりする。腕を組むとまではいってないが。

第１７１話（後書き）

最近忙しくて執筆時間がなかなか取れない（泣）

感想お待ちしております。

第１７２話

如月ハイランドの観覧車は、高さ１７０ｍ・一周約三十分という世界一の名に相応しい大きさである。

「一周三十分か…。結構長いな」

普通のがだいたい高さ１１０ｍ・一周十五分程度だった気がするから、軽く二倍か。

「でもこういうのって乗っちゃうと短く感じるものよ」

「たしかにな。いつのまにか一周していて、二週目に入ってたりするかもな」

「係員に出されるわよ。周りにアタシたち以外の客の姿が見えないけど」

「今の時間帯はほとんどの奴が雄二たちの結婚式（仮）のほうに見に行ってるからじゃないか？」

「結婚式（仮）？……あぁ、ウェディング体験のことね。そろそろ始まるの？」

「あと十分したら、ってところだな。もう準備は整ってるみたいだし」

遠目に見える会場の辺を観察しながら言う。会場の周りにいる係員が若干増えてるな。

「まぁいいわ。そんなことより、早く乗りましょ」

「ん。そうだな」

優子に促されて観覧車の箱のなかに入る。中は意外と狭く、四人が

限界になるほどの広さだった。

「観覧車って最初の方はつまらないのよね」

「だな」

乗ってから少しの間は地上よりちょっとだけ高い位置から外が見えるだけなので、面白味もなんともない。

「そういえば、観覧車の頂上ってある意味告白スポットになっているのよね」

「結構ありがちなシチュエーションだな。俺は気に入ってるけど」

「へぇ～。雅夜って実はロマンチストなのかしら？」

「ないない……とは言い切れないな。少しはそうなのかもしれない」

ロマンチストと言われるのは嫌だが、こういうシチュエーションなどは気に入ってるから否定はできないんだよな。

「アンタ生徒会の手伝いとかやってるけど、それも夜の学校っていうのが好きだからあえて引き受けてるの？」

「まぁ、そうだな。半分くらいはその気持ちが入ってる」

きちんと許可が出てるってのには目を瞑らないといけないけどな。

夜の学校は勝手に侵入するときが一番楽しんだよな。

「……あれ？……ねぇ、雅夜」

「どうした？」

「ってことは……もしかして狙ってるの？」

？なにをだ？

「だから、その……頂上での告白、とかよ／／／」

顔を真っ赤にしながら俺の顔をのぞき込むように見てくる優子。

「んー、まぁそうだな。一応そのつもりだったりするぞ」

隠すつもりもないので、普通に教える。元から今日はこのために来たようなもんだったしな。

「な、なんでアンタはしれっと言えるのよ／／／恥ずかしくないの!?／／／」

「何度も言ったが、これでも恥ずかしいんだぞ?顔に出さないだけだ」

それに覚悟は決めてあるからな。と思っていると、

《ワァァァァァッ!!!》

盛大な拍手の音が聞こえてきた。この方角は……会場(ゆうじたち)の方(ところ)か。

「なにこの音?」

「どうやら会場で結婚式（仮）が始まったみたいだぞ」

「それって代表と坂本君のよね。いくらなんでも音が大きすぎない?」

「相当な人数がいるし、場所が近いってのもあるだろうな」

アトラクションを一つ挟んだところに会場があるので視認も可能である。

「さて、と。向こうも始まったみたいだし、こっちも始めるとするか」
「ふぇ!?ちょ、ちょっと待って!少しでいいから心の準備をさせてっ!!」
あらためて優子の方に向き直ると、優子は慌てながら心臓に手をあてて深呼吸を始めた。
「すーはー。すー、はー」
「いや、別に落ち着かなくてもいいんだが?」
「ダメに決まってるでしょ。一生の思い出に残る出来事かもしれないのよ?……よし、もう大丈夫よ」
「…どうなっても知らないぞ」
落ち着かなくてもいいと言ってるのにな。
「とりあえず優子。外をよく見てみろ」
「ん?別になんともないわよ?」
「気付けよ。まだ頂上に達してないことに」
「……あ」
告白スポットは頂上なのに、それに達する前に告ってマヌケも良いところだぞ。
「じゃ、じゃあなにを始めるっていうの?」
「それはだな――――」
やることも決めてるしやる覚悟も決めてある。
普段の俺からは考えられない、今後のことを気にかけない捨て身の行動。だが、結果がどうなろうとしったこっちゃない。

「――――とある少年の物語の話、だ」

俺の思いを全力で伝える！！

第１７２話（後書き）

投稿時間が安定しない（泣）

この頃リアルが忙し過ぎて困る（汗）

感想お待ちしております。

第173話

「『とある少年の物語』…？なによそれ」

いきなりの俺の発言に優子がキョトンとする。こんな場面で言われたら誰でもそうなるだろうが。

「まぁ聞けって。この話は他の奴に話したことはないし話そうと思ったこともない。もちろん幼なじみの明久や師匠でもあるマスターにも、だ。その辺のことを考えて、ちょっとだけでもいいから――」

「ちょ、ちょっと！そういう大事なのは別に今話さなくてもいいで――――」

「真剣に聞いてくれ」

遮って続ける。すまんな、これだけは譲れないんだ。

「う、うん……」

「あ、別に畏まらなくてもいいからな。普段通りの優子で居てくれ」

変に意識されるとそれはそれで困る。

「んじゃ、話し始めるぞ。気になることがあったら話の途中でも聞いていいぞ。答えることが可能な範囲だったらいくらでも答えるから」

「…ええ、わかったわ」

さてと。それじゃあ、いっちょやるか。

「昔、昔……といってもそこまで昔じゃないんだけどな。あるところに一人の少年がいた。名前はM君な」
「さっそく質問！」
さっきまでの緊張している雰囲気は残っておらず、元気になった優子が手を上げて質問してくる。
「なんだ？」
「少年M君って雅夜のこと？」
「答えられないな。登場人物の詳細についての質問はなしだ」
「あ、そう。どうぞ」
特に気を落とした様子もなく続きを促す優子。
「M君は少し大人びていたが、いたって普通の男の子だった。妹のような存在である幼馴染み、Sちゃんと毎日を過ごしていた」
「Sちゃん？誰のこと……って質問はなしなのよね」
「イエス」
教えてもわからないだろうが。
「Sちゃんはいつも元気で明るい性格、M君はしっかりしていて優しい性格。周りの人達からしたら、二人は付き合ってるように見えていたが、当人達は兄妹のような関係だった」
「そこに恋愛感情はなかったのね？」
どこかホッとしたように聞いてくる。

「そうだな。どちらともそんなものは持ってなかった」

……まだこの時は。

「そんなとある日、Sちゃんが風邪をひいた。まぁSちゃんは風邪をひいても元気で、「学校が休めて一日中ゲームができるなんて幸せすぎる！」ってなことは言う子だったが」

「なんだか吉井君を女の子にしたような子ね」

「イメージてきにはそんな感じだな。Sはバカじゃないが」

むしろ優等生だったな。

「M君は一応形だけでもお見舞いしとこうと思い、適当に見舞いの品を見繕ってSちゃんの住んでるマンションへと向かった」

「マンション……。雅夜もそのマンションに住んでるのよね？」

自然にM君＝俺にしないでくれ。

「俺じゃなくてM君な。M君は同じマンションの一つ挟んだお隣さんだった」

「この話に関係は？」

「少しだけ。続けるぞ」

いつのまにか観覧車は頂上を超えていた。まぁ、元からもう一周するつもりだったからいいんだけどな。

「マンションについた時M君はふとSちゃんの住んでるところを見上げた。いつも通りの光景。だが、その隣の部屋が違った。――――――轟々と燃えていたんだ。炎の勢いは強く、両隣……つま

りM君とSちゃんの部屋まで火の手を広げていた」
「え……」
「それを見た瞬間M君は駆け出した。その中にSちゃんが取り残されていると、M君の直感がそう告げていたから」
思いすごしであって欲しいと願いながら。
「階段を全速力でのぼり、火災がおきている階にすぐについて……驚愕した。大量の油が巻かれていたのか、目の前は炎の海と化していた。大声をあげると返事があり、Sちゃんが取り残されてることがわかった」
「やっぱり……」
「消防車がくるのを待っていられず、M君は炎の中に飛び込んだ。幸いなことにSちゃんはすぐに見つかり、炎の海から一緒に出ることが出来た」
「よかったぁ……。二人とも助かったのね」
いや、残念なことに違う。
「火の手から逃げ切ったと思ったとたん、真横にあった扉がSちゃん目掛けて倒れてきた。外からはわからなかったが、部屋の中が燃えていたんだ」
「うそ……」
こっからは少し嘘をつかないといけないのが辛いな。
「M君は咄嗟にSちゃんと扉の間に入ろうとしたが、間に合わなかった……。この後のことは省略するぞ」
「え、ええ。でも二人はどうなったかだけは教えて」
「……SちゃんとM君は死に別れた。これで充分だろ」

「……うん」

本当は少しだけ違う。M君は間に合いSちゃんは大丈夫だった。

「その火事で起こったことは、マンションの火事が起きた階は全てダメになりその上の階も何部屋かは火が回っていた。負傷者十数名、死亡者二名。死亡者の一人はM君とSちゃんの間の部屋の住民で火事の原因もそいつだった。部屋のなかで非合法な実験をしていたらしく、それが失敗して火の手が広がったらしい」

まぁ、そんなことどうでもいいが。

「M君はその日を堺に……生まれ変わった」

第１７３話（後書き）

執筆時間が無い（泣）

一話一話が短いかわりに毎日投稿してたのに

短くて毎日投稿できないってヤバいじゃん（号泣）

感想お待ちしております。

第174話

「M君はその日を堺に……生まれ変わった」

『生まれ変わる』という言葉には二つの意味があり、一つは文字通り死んで再び生き返ること。二つ目は心を入れかえて性格や行いなどが一変すること。

実際は前者などだが、優子は後者のほうだと思うだろう。

「M君は生まれ変わったのだが、すぐには死に別れたショックからは治らなかった」

「……そりゃそうよ。そう簡単にショックから治ったらもう一度生まれ変えさせなくちゃダメね」

「同感だな。しかしM君は周りに心配させないため、表情に出さず普通に過ごしていた。一人っきりのときだけ思いっきり泣くようにしていたんだ」

何度泣いても泣いても涙は止まらず、いつも身体の水分がなくなるまで泣き続けていた。

「だが、隠していたことはいつしかバレてしまう」

「誰かに知られちゃったのね」

「ああ。いつもはただのバカなのにこういう時だけは目ざとい幼馴染みのA君にバレてしまった」

いつかは誰かに気づかれるとは思っていたが、まさか最初に気づかれるのがあのバカだったとはな。

「A君は「なんでいつも悲しそうな顔してるの?」とM君に聞いた。

そのA君の発言は親切に、M君の力に少しでもなろうと思っての発言だったのだろう」

「幼馴染のA君ねぇ……。いい子じゃない？」

「だと思うだろうがな。M君にとってA君はとてつもなくうざったかった為、適当に突き放した」

なんていって突き放したんだっけな……あぁ、そうだ。「バカにはそう見えるんだよ」だったな。

「あらまぁ。残念だったわね」

「確かに残念だった。A君ではなくてM君が。M君はA君の性格を把握しきれてなかったんだ」

甘く見すぎていた。アイツは天性のお人好しだってことを理解してなかった。

「突き放されただけでA君は諦めなかった。自分の力が弱いからダメなんだと考え、ある行動をとった。なんだと思う？」

「……信頼出来る友人や家族に相談した。それも相当な人数に」

「その通り。A君は自分とM君の両親と姉、M君の伯父伯母とその子供、A君とM君の友達……。全部で十一人。たぶんこのときのM君と関わりのある奴全てを集めて会議を開いた。信じられるか？まだ小学生に上がったばっかりのガキがここまでするんだぞ？」

「行動力が尋常じゃないわね」

それと無駄にカリスマ性があったってことも幸いしてな。

「そのすぐ後、M君は捕まった。悪知恵が相当働く伯母の完璧な策略によってあっさりと。まさか知り合い十一人全てがグルだとは思ってもなかった」

「子供相手にえげつないわね…」

もはやいじめの領域だったな。

「それであえなく捕まってしまったM君だが事実の話の中に気づかれない程度に嘘を混ぜて、実話とは全く違う物語を信じさせました。まぁ、感の良い何人かは嘘だろうと見抜いていたかもしれなかったが、誰もこれ以上このことについてM君に言い寄る人はいなくなった」

俺の両親と姉さん、マスターと陽菜さんには勘づかれてる気がする。

「M君は嘘とは言え、皆に話したことで心の蟠り（わだかま）のようなものが取れた感じがし、明るく過ごせるようになった。その日から生き方も変わり、いつ死んでも後悔のないように、悔いの残らぬように毎日を面白可笑しくやれるだけのことをやって生きていった」

「まるで雅夜みたいね。というか雅夜以外ありえないでしょ」

「M君はM君だ。それ以外のなにものでもない」

まぁ、確かに俺のことなんだけどな。

「それから数年後……だいたいM君が中学二年になったころ、ある出来事が起こり始めた」

「ある出来事？またなにか問題が起こったのね」

「ああ。数年間のあいだ音沙汰なかったのだが、ある日突然起こった。Sちゃんとの死に別れた時の夢をみたんだ。夢のなかでもう一度死を見てしまったM君は、具合が悪くなるどころの騒ぎではなく目覚めてすぐに気絶したかのように倒れ込んだ」

「それはきついわね……。夢だから無駄に鮮明で、リアルに感じたんでしょうね」

「そう。だが最悪なことに、この悪夢は何度も何度も続いた。寝る度に毎回毎回。こんなのヘタすれば自殺しかねないほど精神が壊れかけた」

実際に何度か自殺まがいなことをやったっけな。

「中学はサボリ、平日休日関係無く適当にぶらぶらと歩いて街行く不良に喧嘩をふっかけたり、ふっかけられたりして鬱憤を晴らしていた」

「そういえば中学生のころ悪鬼羅刹が暴れてるとか、夜叉に気をつけろみたいなこと男子が騒いでたわね。あと鬼人もあった気がするわね？アレ、全部雅夜のことだったの？」

「悪鬼羅刹は雄二で、夜叉はM君な。鬼人は誰なのか教えないけど。それと自然にM君＝俺で言わないでくれ」

同時期に名を轟かせていたんだったよな。本気の直接対決はしなかったけど。

「一ヶ月ほどのあいだ毎晩悪夢だったのだが、一ヶ月を過ぎた頃には二日に一回・三日に一回とだんだんと感覚が長くなってきて、だんだんと心が落ち着いていった。それでも学校には行く気がしなかったのでサボって喧嘩の毎日なのだが。ちなみに今でもたまに見ている」

一ヶ月に一回のペースで。

第１７４話（後書き）

シリアスはもうちょい続きます（苦笑）

感想お待ちしております。

第175話

「そんなとある日の夕方。いつものように町中を歩いていると、マンションか飛び出してきた男性とぶつかった。また喧嘩を吹っ掛けられたのかと一瞬思ったのだが、その男性はすぐさま逃げていってしまった」

「四年前のマンションって、あのコトよね！？M君が雅夜って認めてるようなものじゃない！？」

「気にするな。まぁ、優子に思い当たることがあるみたいだから簡単にすませるぞ」

なんかもうどうでもよくなってきた気がするが、M君という名前が気に入ったのでM君で続ける。

「M君はマンションのなかでなにかあったのかと思いマンションを昇っていってみたら、三階で火事が起きていた。Sちゃんの時と同じでマンションでの火事」

「あ……。前、雅夜にその火事のことを話してもらったときに言ってた『前の時』ってのは、Sちゃんの時のことだったのね」

「M君は俺じゃないからわからないな」

「まだ認めないの！？」

認めろ認めろって言われると認めたく無くならないか？

「その火事のなかでSちゃんと同じように身動きが取れない二人がいた。M君はSちゃんの時の過ちを起こさなぬように二人を救い出すことに成功した」

「あの時、ヘタすればアタシたちは死んでたのかもしれなかったの

よね……。ホントにありがと雅夜」
「どういたしまして。M君は二人を救い出せたとき三つのことを思った。人の死を見なくてよかった、初対面の可愛い子に頬にキスされた、火事が起きたのはさっきの男が関係あるのか?。この三つ――」
「ちょっと待って雅夜!!」
優子にスットプをかけられる。チッ。できればスルーしてもらいたかったんだがな。
「一つ目のはさっきまでの話を聞いたからわかるけど、二つ目と三つ目はどういうこと!?特に二つ目!」
「どうもこうもあるか。そのまんまの意味だ。というかこれはM君の話だぞ」
「雅夜でもM君でもどっちでもいいわよ。アタシの第一認証ってなんだったの!?」
「無茶苦茶で大胆、だけど可愛い女の子。そんなところか?」
「ぅわぁ……／／／

任せなさいと言われた」

アレはちょっとムカついたな。最後の良いところを持って行かれるのは好きじゃない。

「だがM君はそんなことを納得するわけもなかった。どうしても一発は殴りたかったM君は色々と手を尽くして警察の人達と交渉して、どうにか一日だけの猶予をもらったんだ」

「その時中学二年生よね？」

「そうだが？まぁ、不良グループと言ってもリーダーのY一人以外そのへんにいるチンピラみたいなやつばっかだったんだけどな」

バカどもの集まりみたいな感じだな。悪ふざけをするためにつるんでいたんだろう。

「猶予を貰った一日。直接そいつの家に殴り込みに行くのはマズイので、不良どもが多く集まる時間に不良グループがたむろしているところに殴り込んだ。さて、ここで優子に質問だ。このときなにがあったと思う？」

「と、突然すぎるわよっ！え、え～っと……その男はいなかった、とか？」

「おしい！ちょうどその時、グループ内での仲間割れ――――YVS残り全員の対戦が起こってたんだ」

「タイミングが悪いにも程があるでしょ！？」

「見渡してみても男の姿は見えなかったので帰ろうとしたら、なぜか戦いに巻き込まれてしまいリーダー格の奴の味方をして不良達の相手をすることになったM君。まぁ、不良たちは数が多いだけではっきり言うと雑魚しかいなかったのですぐに決着がついたので、Yの奴に放火犯がどこにいるかを聞いてぶん殴りにいった。そっちはそっちで一悶着あったんだけどな」

語るのは面倒なのでそこは省略。言い出したら長くなりそうだからな。

その後そのグループは潰れた――――――と思いきや潰れず今も残っている。なぜか俺とYの命令には従う、というより不良共の上に立たされて尊敬されてるかもしれない。

「放火犯を警察に突き出して事件は解決。大雑把に言うとこんなもんかな？」

「これで話は終わり？結局、この話はなにが言いたかったのかしら？」

「いや、実はまだ続きがあってな。それからM君は平和に過ごし、高校二年生になった。そこで火事の時助けた女の子と男の子に出会い、女の子に好まれた。『また会ったら責任とってよね』という言葉を律儀に覚えていたM君も彼女を好きになっていた」

「雅夜……」

優子が嬉しそうに目が潤い始める。

はっきりと好きだと思ったのはいつなのかわからない。気づいたら好きになっていた。だが……

「しかし、M君は彼女を好きになったのだが、M君の中で一番になったというわけではなかった」

「M君の心のなかにはまだSちゃんへの気持ちが残っており、彼女への好意が大きくなっていってもその気持ちは薄れることはなかった」

そう。これが俺がいままで告白しなかった原因の一つである。もしスバルに出会えるとしたら、全てを捨ててでも俺はスバルに会いにいくだろう。
この気持ちだけは決して揺るぐことはない。

「……」

優子の目が冷たくなってくる。表情も冷静な顔つきになり、怒っているように見える。

「……M君はこのことを正直に彼女に話そうと決意した。今までになにがあったのか。自分はどのような奴なのか。今の気持ちはどうなっているのか。……M君は覚悟を決めて彼女に話した。決して一番になることはないだろうが、彼女のことが好きという気持ちに嘘偽りはないと」

一生に二度とないだろう告白。

「M君がやることは返事を待つだけ」

この先に俺が出来ることはない。

この話の続きは優子しだいだ。

第175話（後書き）

ついに告白した雅夜。

楽しい雰囲気での告白ではなく、シリアスな雰囲気での告白。

感想お待ちしております。

第176話

「……」

沈黙の時間が続く。告白は普通楽しい雰囲気のなかでやるものだというのに重苦しい雰囲気で言ってしまったんだ。無理もないな。

「……」

俺がすることは優子の返事をひたすら待つだけ。急かしたりせず、頭の中が整理出来るのをただ待つのみ。

「……」

「……」

「……」

「……」

どれだけの時間が経過したのかわからないほど、長い時間沈黙が続いた。一時間か二時間、もしかするとそれ以上経ったと思えるほどなのだが、ガラスの向こうに見える景色からまだ十分も経っていないことがわかる。

どれだけ一秒を長く感じているのだろうか。

「……ねぇ雅夜」

沈黙の時間が終わる。

「もう一度聞くけど、M君と雅夜は同一人物じゃないのよね？」

「あ、ああ。同じだけど同じじゃない存在ってどころだな」
「なによ、それ。まったくもう……」
呆れたように、だがどこかホッとしたように呟く優子。答えが出たのか？
「それでいいなら、さっきまでの長い昔話の解答が出たわ。M君に対する答えと、その話をした雅夜に対する答えの二つが」
「…そうか」
律儀にも俺への解答も用意してくれたか。頼もしいやつだ。
「先に雅夜への答えでいいわよね？」
「ああ、そこは別に優子に決めてもらって構わない」
「そう。ありがと。じゃあとりあえず雅夜。目を閉じなさい」
「うえっ！？」
ちょっと待て。その前フリはなんだっ！？
「なに気持ち悪い声だしてるのよ。目を閉じなさいって言っただけでしょ」
「……目を閉じたらなにをするか教えてもらえませんかね？」
「いやよ。いいからさっさと閉じなさい」
「……了解」
告白の返事で目を閉じろって……。この先の展開が一つしか思い浮かばないんだが？
そう思いながら目を閉じる。とりあえず覚悟しといたほうがよさそうだな。

「……（スッ）」

目を閉じると優子が無言で近付いてきた。む。目を閉じていても気配でなにをしようとしてるかが、だいたいわかってしまうな。今は気配をよむのをやめるか。

「……すぅ…はぁ」

「……？」

これは……深呼吸しているのか？むぅ。感が鈍ったか？久しぶりに気配をよむのをやめたから、なにもわからん。

「……行くわよ」

「お、おう」

最後の確認？を取られる。返事のとき声がうわずったが、優子は気にせず、

「……（スッ）」

また近付いてくる。やべぇ。心臓がドキドキうるさくなってきてやがる。こんなの俺のキャラじゃない！

だがそんな俺に構わず、また近付いて……

「……『鳴海流体術・眉間割り（デコピン）』」（ダンッ！！！）

強烈なデコピンをやってきた。……え！？

「って、痛ってぇえええええ！！ふぬぉおおおっ！！」

「これがアタシの答えよ」

ちょ、ちょっと待ってくれ。結構頭に響いたぞこれ。っていうかいつのまに教わっていやがったんだ！？

「いくら雅夜にとって重要な話といってもデートの時に話さなくてもいいじゃない」

「それは、俺のことを知ってもらおうと――――――」

「黙りなさい。自分のことを知ってもらうって言うけど、今の話に嘘はなかったって言えるの？言えないでしょ。微妙に嘘っぽいところが何箇所かあったことくらいアタシにはお見通しなのよ」

嘘がバレてたのか！？

「それに男がうじうじしてんじゃないわよ！いくら過去に大変なことがあったとしてもね、過去のことを引きずっていろんな人に迷惑かけてるんじゃないわよ！！」

「話の根本を否定された！？」

俺の存在意義の一つでもあるんだが！？

「だいたいそんなの雅夜らしくもなんともないじゃない！アタシの知ってる雅夜だったなら、きちんと問題を解決して、なおかつ最後には皆が笑顔になるようにしてくれるわよ！」

それはそれ、これはこれだ！

「俺だって毎回毎回そんなふうにできるわけな――――」

「ああ、もうっ！じれったいわね！もう一度目をつぶりなさい雅夜！」

「マジかよ！？」

第１７６話（後書き）

優子が雅夜の告白でキレた（汗）

告白されてキレるなんて……。どうしてこうなった（苦笑）

感想お待ちしております。

第177話

優子の叱咤で慌てて目を閉じる。最近怒ってる顔をよく見るな。怒らせることが多くなったか？

「次はもうちょい優しめに頼むぞ」

「アンタにとやかく言う権利はないわ」

「つまり『覚悟をしろ』ってことなんだな」

また眉間割り（デコピン）をくらうのか。さっきの眉間割りや不意打ちもそうだったが、鳴海流体術ってのは俺とマスターと祭&歩でノリで考えだした技であって、日常的に使いそうななんともない行動に威力をつけたやつなのだ。

つまり例をあげるとすると、さっきの眉間割り（デコピン）は優子みたいな初心者が使えば通常のデコピンよりもちょっと強い程度なのだが、俺やマスターみたいな武芸を嗜んでいる奴が使うと脳に響かせるほどの威力を発揮することができる。

まぁ、不意打ちのほうはいかに音を出さずにタイミングよく相手を攻撃するかという非道さが大切なんだが。

「いいからさっさと目を閉じなさい。いい加減にしないと目、潰すわよ」

「……」

無音ですぐさま目を閉じる。本気でやりそうな目をするな。

「……脅しって凄いわね」
「あんまり多様はしないでくれると助かる」
「雅夜がアタシにさせなければいいのよ」

優子が悪女になってきてる気がする。俺のせいかもしれないが。

「さて……と。一つ目は済ませたから次は二つ目のほう、M君の告白に対する答えだったわよね？」
「……ああ、そうだな」
「アタシは木下優子としての解答じゃなくて、話の中に出てきた彼女の解答を考えた。決してM君のなかでは一番になれないけど、好きで居てくれる。拒絶でありながら受け入れでもあるその告白に対しての答え」

すっ…と近付いてくる優子。目をつぶっているので今優子が哀しそうしているのか嬉しそうにしているのかわからない。声からも悲しさと嬉しさが混ざっているように感じる。

さらに、音もなく静かにすっ…と近付かれる。元々狭いゴンドラのなかなのだが、なぜ優子は近付いてきた？

その疑問に対する答えは、すぐ優子が教えてくれた。

「……ん」

かすかに感じる優子の吐息。ほのかに香る優子の匂い。そして、ち

ょん、と唇に触れるなにか。

「――――――!?」

驚いて目を開けると目の前に目を閉じて顔を真っ赤に染めた優子の顔があった。

「……ぷはっ……」

驚いて固まっていると、優子の顔が離れていく。

「……はっ!?い、今なにをした優子!?」

「キス。これがM君に対する彼女の答えよ」

今までに見たことのないほど顔を真っ赤に染め、声だけは平然としながら答える。それは俺の立ち位置だろっ!!

「彼女はM君が好き。M君のなかでSちゃんが一番であっても、彼女がM君のことが好きなことにかわりはない」

「……一生一番になれないのかもしれなくてもか?」

「彼女は人一倍負けず嫌いよ。絶対にM君のなかでSちゃんを越して一番になるわ」

「……どれくらいかかるかわからないぞ」

「一年でも二年でも、三年五年十年でも、彼女は諦めないでM君にずっとついて行くわ」

「……M君に捨てられるかもしれないぞ」

「捨てようと思うときには捨てるのを後悔するほどの良い女になってるわ」

「……こんな浮気してるみたいな男でいいのか?」

「浮気は気持ちが移り変わること。雅夜ならSちゃんとアタシを変

わらずに愛してくれるわ」

聞かなくてもいいことを、言い訳のように言い続ける。ツッコムべき箇所がいくつかあるのにツッコめずにいる。頭のなかがこん混乱している証拠だ。

「…で。結局答えはなんなんだ？キスが答えつってたが、ようするにＯＫってことなのか？」

落ち着く為、とりあえず話を前に進める。なるようになっちまえってんだ！

「もちろん、ＯＫ」

すぐさま答えが返ってきて、

「――――――――だったわよ。あんな話を雅夜から聞かされるまでわね」

ニコッっと笑顔で続きを言う優子。

第177話（後書き）

キスシーンってこれでよかったのかな……？

書いてて恥ずかしくなる（苦笑）

感想お待ちしております。

第178話

「アタシが雅夜に好きって言ってもいつもはぐらかされてた。周りからどんなにアタシと雅夜付き合ってるように見えても、雅夜が毎回毎回『俺達はまだ付き合ってねぇ』って否定する」

なにかを思い出すように目を閉じながら呟いていく優子。

「勇気を出して大胆に迫っても雅夜はなにもしてくれない。酔ってさらに大胆になった時でもさえも。いつもいつも『まだ早い』『正気に戻れ』ってアタシを遠ざける」

閉じている目の端に水滴が溜まる。

「たまに、アタシは雅夜にとって迷惑なんじゃないかな？もしかしたら嫌われてるのかな？って思うときがあった。雅夜の周りにはアタシより綺麗で可愛い子が沢山いたし、雅夜に好意を持ってる子もいた」

思い浮かべるのは杜丘高校の奴ら。確かに見た目も中身も良い奴らばっかりだ。

「だからアタシはきっと、雅夜から告白されたら、嬉しくて涙を零しながら、『やっと言ってくれたわね』って言ってたと思う」

「だけど出てきた答えは違う、か？」

「うん」

哀しそうに言う優子。目の端に溜まっていた涙がこぼれ落ちる。

「アタシは雅夜が好き。……でも、うじうじして過去の事を今でも引きずってる人は嫌いよ。別に綺麗さっぱり忘れろってわけじゃなくて、そのことを糧にして雅夜には今を過ごして居て欲しかった」

後悔するのではなく、それを教訓にする。それは後ろ向きに行くか前向きに行くかの違いだ。

「そしてなにより……」

優子の顔が哀しい顔から怒った顔になり、俺のことを睨んで、

「いつも側にいたアタシにこのことを今までずっと話さずに隠していた雅夜が大っ嫌い」

俺のことを嫌う最大の原因を言い放ってくる。

「話したくないことなら話してもらわなくてもよかった。聞いて欲しいことだったならアタシはいつでも聞く準備は出来てた。たぶん、雅夜はタイミングを図ってたんだと思うけど、なにも今日に突然言わないで欲しかった」

「それについては謝る。今日のデート事態サプライズだったし、言う機会がなかったんだ」

「そんなことわかってるわよ」

言い訳じみた謝罪をする。ありのままの優子からの答えが欲しかったから教えなかったというのもあるのだが、それこそホントに言い訳なので言わないでおく。

「だから雅夜。アナタからの告白の返事は『ごめんなさい』よ」

「ああ、そうだろうな」

正式にお断りの返事を貰った。悲しく思うのだが、涙は出なかった。

「でもさっきも言ったとおり、アタシは雅夜が好きなことには変わりはないわ」

「……なるほどな」

好きだけど振る、好きだからこそ振る。普通ならありえないようなことだが、心が強い優子だからこそできるのだ。

「今度は俺が優子を振り向かせる番、ってわけだな。覚悟しろよ優子。俺を振ったことを後悔させてやる」

「ええ、もちろん。期待させてもらうわ」

今までに見たこともない最高の笑顔で答える優子。涙の跡はなく、晴れ晴れとしていた。

「これからは忙しくなりそうだな」

「あら？珍しくやる気なのね」

「そりゃあ、好きな女を振り向かさせる努力は大変だし。色々とやらなきゃいけないことが出来ちまったからな」

「ふ～ん。それは頑張んないとね」

「ああ、頑張んないとな」

クスクスとお互いに笑う。

こうして俺の初めての告白は失敗に終わった。

「んじゃ、そろそろ帰るか。二週目の観覧車も終わりみたいだしな」
「結局一番上での景色をゆっくりみることはできなかったわね」
「次来たときにまた乗りにくればいい。そんときはゆっくりと楽しもう」
「そうね」

観覧車から降りて出口へと向かう。
向かう途中、遠目に見えた如月ハイランド内にあるグランドホテル前にいるところどころ破けた跡のあるタキシードを着ている男の姿が見えた。

「お、雄二発見。まだ帰ってなかったみたいだな」
「そういえば代表たちも来ていたんだっけ。さっきまでの出来事が強烈すぎてすっかり忘れてたわ」
「気持ちはわかるがな。しかし、よかったよかった。間に合ったみたいだな」
「間に合った？……まだなにかする気なのね雅夜」
「ああ。やっぱり友人の勇姿はしっかりと（ビデオに）収めておかないとな」

自然と顔が笑みを浮かべる。俺が言ってる意味がわかったのか、優子も顔がニヤける。

俺は俺らしく、最後までやらせてもらいますかっ！！

第178話（後書き）

色々な出来事があった如月ハイランドデートも

そろそろ終わりを迎える。

雄二パートも書いたから、結構長く感じたなぁ……。

感想お待ちしております。

第179話

如月ハイランドを出て駅に向かって歩き出す。

「ねぇ雅夜。代表たちになにかするんでしょ？出ちゃっていいの？」

「ああ、大丈夫だ。事が起きるのはランド内じゃなくて帰り道だからな」

「相変わらず変なことわかってるのね。どうせ、なんで知ってるの？って聞いても『企業秘密』なんだろうけど」

「そうだな。これぱっかりは優子にも教えられん」

「別にいいわよ。特別知りたい事ってわけじゃないんだし」

教えてもわからないと思うしな。

「それで、具体的な場所はどこなの？」

「帰り道にある木の下。……お、ちょうど見えてきたな。ほら、あそこにある木だ」

少し遠目に見える木を指差して言う。他に木はなかったし、これで間違えないだろう。

「ふ～ん。でも、どこで見張るつもりなの？近くに隠れるような場所ないじゃない」

「そりゃあ、木に登ってそこから――――」

っと、ちょっと待てよ…。……あ、いや、でも……。

「アタシのこの服装で木のぼりさせるの？」

「ん、大丈夫だ。俺が上まで運ぶから」
優子一人抱えて木を登るくらい難しくないしな。
「それにあそこの木のなかには軽くスペース作ってあるから、枝とか気にしなくて平気だ」
「軽くスペースって……」
「見ればわかる」
木の下までやってきて、優子に木の中を見上げてもらってみると、
「……アンタまた変なもの作ってるわね」
「これは変じゃないだろ!?ただ木の中に座れる場所をつくっただけだろ!?」
ちゃんと外から見えないよう工夫もしたんだぞ。
「それが充分おかしいのよ」
「むぅ……。如月の奴らには好反応だったんだがな」
「あそこの人たちも変わってるからね…」
「遠まわしに俺が変わってる奴って言ってないか?」
「割と直球でいってるわよ。というか自分が普通と違うって自覚してるでしょ?」
否定はしないな。……ん?……うぉっ!やべぇ!
「とりあえず話は後だ!雄二たちがもう来やがった」
「え、嘘っ!?キャッ」
「暴れるな、よっ!!」

優子を抱えて木の中に飛び込む。バレては……ないようだな。

「んじゃ、優子。声立てるなよ」

「ええ、わかってるわよ。流石に途中乱入する趣味はもってないわよ」

「できれば終わったあとでも声出さないでくれよ。バレなければバレないままでいいからな」

「自信はないけど、その方が良いから少しは頑張ってみるわ」

「頼んだぞ」

だんだんと雄二たちが近付いてきて、木の目の前で止まる。

カメラのセットは完璧にすませてある木のすぐそばで。

……

……

……

※ちょっと省略（詳しくは第１５８話と第１５９話にて）※

『雄二っ！』

『……なんだ？』

『――――私、やっぱり何も間違っていなかった！』

目の前で繰り広げられる微笑ましい光景。

俺はその光景をみて……

「もう結婚しちまえよお前ら」

つい、本音を吐いてしまった。

第１７９話（後書き）

次回で終わり……だと思います（苦笑）

感想お待ちしています。

第１８０話

「もう結婚しちまえよお前ら」

気付いた時には遅く、口が勝手に本音を吐いていた。

「ちょっと！アタシには声出すなって言っておきながら、なんでアンタが喋ってんのよ！」

「いや、これは仕方ないだろ。むしろ今まで耐えていられたのが不思議におもうほどだ」

「アタシだって雰囲気を壊さないように頑張ってたわよ」

告白して振られた後にこんな場面を見たら誰でも邪魔したくなるだろ。まさかここまでイライラするとは思ってもいなかった。

『……オイコラ、そこにいるバカ二人。ちょっと降りてコイ』

少し怒ったような口調の雄二。

「断る！……と、言ったらどうする？」

「バカなこと言ってないでとっとと降りるわよ！」

「イテッ！叩くことはないだろ。……ったく」

ノリで言っただけだというのに……。ま、バレたらしょうがないけどな。

「……よっと！」

木から飛び降りて着地する。目の前にはやはり怒った顔をしている雄二と少し恥ずかしそうにしている霧島がいた。

「よ、雄二。それに霧島も（優子、霧島のほうを頼む）」

「こんにちは代表、坂本くん（ん、任せて）」

アイコンタクトで優子に話して、俺は雄二のほうに近づく。

「やはり来てたのか。途中で何度か聞き覚えのある声が聞こえたからそうではないかと思ってはいたんだがな」

「なんだ。確信までは至らなかったのか」

「うるせぇ。こっちはこっちで忙しかったんだよ。それに木下姉があんなに嘘がうまいとは思ってもいなかったんだよ」

まったく。優子と秀吉は姉弟なんだぞ？あれくらいできて当然だろ。

「で、なんでお前らはこんなところにいたんだ？場合によっちゃ殴るぞ」

これは絶対殴られる場合だな。一発くらいはもらっといてやるが。

「殴られて喜ぶ趣味はないんだが……。まぁ、お前らの会話を聴きに来たってところだ――――――」

「死にさらせっ！！」

言い切ろうとしたところでアッパーをくらい、

「くそったれがぁああ！！」

「ごぶるぁああ！！！」

浮いたところを右ストレートで吹き飛ばされる。まさかの二連激！？もろにくらったじゃねぇかよ！！

「わかってて此処にいやがったのかキサマは！！」

「当たり前だろ！！知らなきゃ、こんなところで木登りなんかするかよ！」

「なんで知ってんだよ！！」

「企業秘密に決まってるだろ！！」

なぜか雄二がキレて怒鳴っているので俺もそれに合わせて大きな声で答える。

「とりあえず今言えることは、お前は大人しく俺にぶちのめされろ」

「断る！」

俺が大人しくぶちのめされるわけがないだろ。

「っというか、録画だけで済ませてやったことに感謝してもらいたいぐらいだ！俺の父さんだったら、すでに知り合い関係全員にリアル放送されてるところだぞ！」

芳樹さんと恋さんの時みたいにな。

「お前の父親なんて知るか！――――――――――――って今録画って言ってなかったかお前！？」

「おいおい、今から起きる出来事がわかってて後世に残したほうが面白い、もとい良い場合は記録に残さないわけがないだろ！」

……ふむ。もしかして芳樹さんと恋さんの奴もどこかに残ってるかもしれないな。今度父さんに聞いてみるか。

「そのデータをこっちに寄越しやがれ！！全て廃棄してやるっ！」
いやだね！これは宴の肴（ネタ）にするから渡せないな。
おっと、ついでにあのことも言っておくか。
「それと、今回のデート中もずっと録画してたことは秘密だ！」
「なにが秘密だ！思いっきりばらしてるじゃねぇかよ！」
「ちなみに撮影者は霧島がドレス着るときにスタイリストとして紹介された人なんだが」
そっちの仕事もちゃんとしたよなあの人？
「はぁっ！？あの人もグルだったのか！？」
「頼んだら二つ返事でＯＫ貰った」
グルというか協力者みたいなもんだが。たぶん今頃編集作業に忙しいだろうな。
「後、マスターとか名乗る人物と出会ってないか雄二？」
「あ、ああ。いきなり目の前に現れて良い目だとかなんだとか言ってきやがったな」
やっぱりか……。こりゃ、完璧にマスターに目をつけられたな。
「雅夜。あのマスターだとか言う人はなにものなんだ？」
「……今度合わせてやるよ。そしたらわかる」
一瞬化け物って答えようかと思ったが、自分自信で確かめさせたほうがいいな。理不尽な目にあうがいい。

「ま、そんなことはいいとして。今日はもう疲れたし、帰るぞ優子」
霧島と話していた優子に声をかける。
「わかったわ。それじゃ、代表。アタシたちは先帰るから、また明日ね」
「……バイバイ」
「おう。カリはまた今度返してやるから覚悟しとけよな雅夜」
できれば面倒いからパスしておいてくれ。
「お前たちも今日如月ハイランドに行ってたんだよな？」
「…ん？ああ、そうだが？」
もう隠す必要もないので正直に答える。それがどうしたっていうんだ？
「どうだった？こっちはグループの手でおかしなのしかしてなかったから、正直普通の場所には回ってないんだ」
「あー、あのお化け屋敷ぐらいしかアトラクションは回ってないみたいだしな。そう思うのも普通か」
お化け屋敷という単語に優子がビクッと反応する。マジでお化け屋敷だったからな。
「でもどこも普通じゃなかったかしら？他の（遊園地）よりちょっと規模が凄い程度で、ほかの所とあんまりかわりはなかったわよ」
「そうか。それでお前らの仲は進展したのか？」

！？

「よく雅夜は『まだ付き合ってない』って言ってたが…ん？」

観覧車のなかでの出来事を思い出し、優子とは逆の方向を向く。たぶんだが、優子の同じことをしているだろう。や、やばい。顔が赤くなってる気がする。

お、落ち着け俺！あれだけはほかの奴にはバレるわけにはいかないんだ！

「おいおい…。まじでなにかあったのか！？」

俺と優子の反応を見て雄二が驚いている。くそっ。普段はまったく顔を赤くしないことがここで仇になるとは！

「んー、あー、まー。……そんなところだ」

「そ、そうね。二人には言うようなことじゃないわね」

お互いに言葉を濁す。まぁ、実際進展はしてないからな。

「……なにかあったの？」

「だ、代表！？べ、別にいいじゃない！ほら、雅夜！帰るわよっ！」

「お、おう！んじゃ、そういうことで！」

ダッ！と逃げるように駆け出す。

絶対なにかあったって思われたな、こりゃ。ヘタにＦＦＦ団の連中などが動かなければいいんだが…。

……いや、ＦＦＦ団より杜丘の奴らのほうが問題だな。

第１８０話（後書き）

如月ハイランド～雅夜ｓｉｄｅ～完

あと後日談を一話分書いて完璧に終わりですね。

その後はプール編ですかね？

感想お待ちしています。

バカテスト第十七問目……？

～特別コラム～《鉄拳人生相談》

「このコーナーは鉄拳先生こと、この私、西村宗一と」
「毎度おなじみドナドナされたアシスタント、浅月雅夜」
「で、諸君の悩み答えていくコーナーだ」
「……はぁ。なんで俺が毎回毎回こんな目に合うんだよ……」
「日頃の行いの結果だ。いい加減観念して付き合え」
「捕まったからにはやるけどな。とりあえず、一枚目のハガキ読むぞ」

三年生　T村Y作さんのご相談

『鉄拳先生、僕の悩みを聞いてください。実は僕には好きな人がいます。その人はとても可愛らしくて人気があります。ですがそのK下H吉さんはどうやら戸籍上では♂のようなのです。これは同性愛になってしまうのでしょうか？先生、僕はどうしたら良いか教えてください』

「すまない。いきなり凄い相談が来たため困ってる。正直、このコラムを引き受けなければよかったと後悔してるくらいだ」
「人を巻き込んでおいてなにいってるんだ」
「……おそらく君が好きになったその相手には恐らく双子の姉がい

るはずだ。容姿に惚れたのであれば彼女に思いを告げることだ」
「いやいや。そんなことする前に俺が絶対に殺し……ゲフンゲフン。止めるからな」
「お前も最近壊れてきたな……。あぁ、そうだ。一部の生徒の間では“彼は第三の性別『秀吉』である為同性愛ではない”という説があるが、決してその説に惑わされないように」
「それでも最終的には“秀吉なら男でも女でも構わない！”ってやつが出てくるんだけどな」
「君が健全な学生生活を遅れるよう祈っている」
「どっちにしろ、秀吉には好きな女子がいるから振られるだろうが。……んじゃ、次のハガキ」

二年生　K保T光さんのご相談

『最近、寝ても覚めても僕の頭の中から離れない人がいます。彼――――Y井A久君が笑う姿を見ると僕も幸せな気持ちになり、彼が沈んだ表情をしていると僕も悲しくなります。相手は同性なのですが……この気持ちは恋愛感情なのでしょうか？』

「君はここ最近の間に頭を強く打ってないだろうか？記憶にないとしても念の為に病院で診察を受けることを推奨する。同性愛云々の話はその後だ」
「二通目で早速逃げたな……。これじゃあ今後はやってけないんじゃないか？」
「これならまだ吉井達の相手をしてるほうがマシだ。浅月、次だ」
「ん、了解」

二年生　S水M春さんのご相談

『私には一年生の頃からずっと好きなお姉さまがいます。ですが、最近そのお姉さまが悪い男に騙されています。どうしたらその男を殲滅できるか教えて下さい』

「貴様らには同性愛以外の悩みはないのか！」
「ノーマルな奴らが少ないからな、この学校。杜丘の奴らならまともなんだろうけどな」
「次回からは浅月、お前一人でやれ。俺はもう疲れた」
「ちょ、それは無いだろ！？面倒いからその案却下で」
「教師命令だ。その代わりと言ってはなんだが、アシスタントはお前のほうで決めていいぞ」
「理不尽だ！……まぁ、どうせ断ってもやらされるだろうが。アシスタントのほうは読者様にアンケートで決めてもらうとして、今回はもう終わりか？」
「そうだな。では、次回からは任せたぞ浅月」
「あー、ダリィ」

さて、誰を呼ぶとするか？

バカテスト第十七問目……？（後書き）

まさかの西村さん逃げ出し（笑）

えっと、本文に書いてある通りアンケートです。

雅夜と一緒に『鉄拳（訂正）浅月人生相談』をやる人を誰にするかというアンケートです。

アンケート対象は

Ａクラス　優子　霧島　工藤
Ｆクラス　明久　雄二　康太　秀吉　姫路　島田
杜丘高校　アヤメ　忍　千夏　未来　由美　祭　歩　悟志　大和
その他　深風　榊　マスター　陽菜

です。この二十二名のうち一人を指名してもらえれば嬉しいです。

アンケートの期間は次のバカテストとまでとさせていただきます（まぁ、その後も続くかもしれませんが（汗））

アンケートの答えだけでも構いませんので、どしどし書いて頂けるとありがたいです。

感想とアンケートお待ちしております。

第１８１話（前書き）

アンケートにご協力ぐださった方々、ありがとうございます！

締切は次のバカテストまでなのでまだまだ受け付けています。

第１８１話

如月ハイランドでの一件を終えて、週明けの学校にて。

「よっ、秀吉。それに康太も」
「うむ。おはようなのじゃ雅夜」
「……おはよう」

秀吉と康太に挨拶をして自分の席に座る。そういえばこの二人って、Ｆクラスの中に居る時は一緒にいること多いよな。なんでだ？

「それにしても週末はお疲れさんだったな。秀吉の携帯ダメにしたんだろ？」
「まぁ、別にそこまで使っておらんから平気なのじゃがな。しかし、なぜにお主が知っておるじゃ？」
「企業秘密。けど康太はなにしてたんだ？あんまり動きは見れなかったんだが」

最初にキツネの中に入ってるということしか確認出来てないんだが。

「……裏で色々とやっていた。監視カメラの調子が悪かったからそれの解析などなど」
「ほぉー。どうだ？調子はよくなったのか」（↑こいつが犯人）
「……雄二たちが如月ハイランドから出る頃にいきなりシステムが回復した。問題はない」
「そいつは良かったな」

一応傷跡が残らないようやっておいたはずだから、システムのほうに異常は起きてないだろうな。

と、秀吉たちと他愛の無い話をしていたら教室の扉が開いて雄二がやってきた。

『おい、明久』

『ん？おはよう、雄二。どうしたの？』

登校してきた雄二が教室に入ってすぐに明久に声をかけていた。十中八九如月ハイランドのことだろう。

『如月ハイランドでは随分と色々やってくれたな』

『あははっ。何を言ってるのさ。朴は一日中家でゲームをやっていたんだよ？如月ハイランドになんて行けるわけないじゃないか』

あそこまでバレたのにまだ隠し通すのか。

「……まだ隠せると思ってるのじゃか、明久はやつは……」

「……バカ極まりない」

隣にいる二人が哀れみの視線で明久を見る。

『……そうか。お前がシラを切るならそれでもいいだろう』

『な、なにを言ってるのさ。変なヤツだなぁ～』

『ところで、お前にプレゼントがある』

『え？なになに？』

『今話題の恋愛映画のペアチケットだ。気になる相手がいれば一緒に行くといい』

必要以上に大きな声で告げる雄二。教室内にいるある二人に聞こえるほどの大きさで。

「姫路と島田が戦闘態勢に入ったな」

「これが狙いじゃな……。まったく、アヤツにも困ったものじゃのう」

「……似たもの同士」

というかなんで雄二はペアチケット(そんなもん)を持ってんだ？

『ペアチケット？う～ん、そんなものもらっても、使い道に困って――――』

『それじゃあな』

強引に明久の手の中にチケットを握らせ、明久の席から離れる雄二。

『あ、アキっ！そういえば、ウチ週末に映画を観たいと思っていたんだけど――――』

『あ、明久君っ！私も丁度観たい映画があったんだすけど！』

『ほぇ？なになに？どうして二人ともそんなに殺気だってるの！？このチケットは換金して生活費に痛あ〝あ〝っ！もげちゃう！人体の大事なパーツが色々と取れちゃうよ！』

明久の悲鳴を聞いて復讐完了と言わんばかりの顔で雄二がこっちにやってくる。

「よう、盗聴野郎。今日も朝から盗聴か？」

「どうした、新郎（笑）役。週末のテープと音声なら安くしといてやるぞ」

「「やんのかコラァッ！」」

ガンのくれ合いを始める。今日も平和だなぁ……。

「なんでお主らは挨拶してすぐにガンのくれ合いになるのじゃ」

「……こっちもこっちで似たもの同士」

「いや、なんとなくノリで（雄二、ここは停戦協定しとこう。その方がお互いに良いだろ？）」

「雅夜の顔を見たらついムカついてな（……仕方ない。その案を呑んでやってもいい）」

アイコンタクトで交渉を成立させる。お互いに周りにバレると面倒なことを知っているので協定を結ぶ。特に文月学園（ここ）じゃ噂の広まりは早いからな。

※同時刻・杜丘高校にて※

「大ニュース！大ニュース！なんか凄い噂が広まってるみたいだよ！！」

「月曜からうるさいよミク……」

「ははっ。元気なことは良いことじゃないか。それでミク。凄いってなにが凄いんだい？」

「これでつまらなかったら罰ゲームね♪」

「今回はなににしようかな……？」

「急に元気になったねユミ！？ま、まぁ、ホントにビックなニュースだから大丈夫だけど！」

「チッ」
「舌打ちしないでよっ！」
「そんなこどうでもいいから。そのビックで凄いニュースってのは結局なんなんだい？」
「え、あ、うん！それがね――――――――」
……
……
……
「（ゾクゾクッ）――――――っ！？な、なんだこの寒気は！？」
「どうかしたかの、雅夜？」

第１８１話（後書き）

以上で『如月ハイランド編』は終了ですっ！

次はプール編でも書きましょうかね？

感想とアンケートお待ちしております。

第１８２話（前書き）

アンケートはまだ受け付けております。

『アンケートは〇〇で』と、だけでもいいので書いてもらえたら嬉しいです。

第１８２話

先週末の如月ハイランドでの出来事も過去のこととなり、またやってきた週末の夜。

「どうだ。あとどのくらいで終わりそうだ？」
「んー、後一時間ちょいってところだな（ガガガガガガッ）」

学園の職員室で宿直である西村さんの仕事を手伝わされ（押し付けられ）、キーボードを操作しながら書類を作成していく。

「で、なんでこんなに仕事が溜まってるんだ？そろそろ教えてくれてもいいと思うんだが」
「なんだ。言ってなかったか？」
「部室で白金の調整してたところをいきなり『こっちを手伝ってくれ』とだけ言って職員室（ここ）に連行しておきながら何をいってやがる！」
「落ち着け。浅月が主にやっているのは俺が他の人達に頼まれた分のやつだ。しかし、俺も自分の分の仕事があるからな。手が回らなそうだからお前を呼んだんだ」

いまさら『そんなの生徒にやらせていいのか？』と聞く気にはなれない。

「やっぱりか。だいたいそんなんだろうなぁ、とは予想ついていた」
「だったら聞くな」

と、ズズッとコーヒーを飲みながら言う西村さん。

「でもな！だったらなんでアンタは暇そうに読書しながらコーヒー飲んでんだよ！！」
「実際暇してるからだ」
「暇してるんだったら俺に押し付けた仕事を自分でやれよ！」
「おっと。そろそろ見回りの時間だな。どれ行ってくるか」
無視して逃げんな！

「ったく……。今日は久々に優子が居ないから、仕事進めてこうと思ってたんだがな……」
溜まってるって程はないのだが、色々とやることがあるから今日のうちにやっておきたかったんだけどな。

「一人で愚痴るなら榊相手に愚痴っておけ。あいつも年中暇してるだろ？」
「残念ながらあの人は今日非番だ。っというか西村さん相手に愚痴ってるつもりなんだが？」
「……さて。最近は不審者などが多いからな。じっくりと時間をかけて見回ってくるか」
「どんだけ俺に仕事やらせたいんだよ！？」
この人俺が仕事終わらせるまでに帰ってくる気ないな。

「では行ってくる。くれぐれも俺がいない間に不審者が現れたとしても、殺さず捕えるだけにしとくように」
「はいはい、わかってますよ。っと、そうだ。近頃は夜中にプールに勝手に侵入して使ってるバカどもとかがいたりするから、そっちも見に行っておいたほうがいいと思うぞ」
「ふむ。わかった。プールのほうにも行っておこう」

と了承して見回りにむかう西村さん。……さて。

「反省文ようの紙でも用意しとくか、っと……」

押し付けられた仕事をやりながら呟く。

……あの二人の処理も押し付けられないといいんだけどな。

『……で、何か言い訳はあるか？』

『『コイツが悪いんです』』

プールは最後に見てきたのか見回りに行ってから四十分後、明久と雄二を連行しながら西村さんが宿直室へと入っていった。

職員室と宿直室は近くなので、職員室にいても声がよく聞こえる。

『って、明らかに悪いのは雄二じゃないか！雄二がまともな差し入れを持ってきたらこんなことにはならなかったのに！』

『それは違うだろ！お前がガス代を払っておけばこんなことにならなかったんだぞ！』

『何を言うのさ！水が出るだけマシじゃないか！』
『お前の家は水すら出ないこともあるのか！？』
『……もういい。よくわかった』
あ、怠くなったな西村さん。
『わかってもらえましたか？それはよかったです』
『んじゃ、わかったもらえたところでそろそろ帰るか。いい加減時間も遅いしな』
『そうだね。それじゃ西村先生。失礼しま――――――ぐぇっ！』
『そう急ぐこともないだろう二人とも。帰るのは恒例のヤツをやってからでも遅くはないよな？』
お。どうやら二人の相手は俺に回ってこなそうだな。よかったよかった。
『そ、そうですね……。是非、そうさせてもらいます……』
『お、俺も、そうさせてもらおう……』
それじゃ、俺は予定より早く西村さんに押し付けられた書類も終わらせたことだし、先に部室に戻らせ――――
『よしよし。それじゃ、早速始めるぞ。……っと、紙がないな。浅月！そっちにいらない紙かなんかはないか？』
『『雅夜っ！？』』
「あぁ、もうっ！なんでこのタイミングでバラすんだよっ！！」
先程用意した紙をもって宿直室へと行き、
「ほらよっ！西村さん、頼まれた仕事は終わらせたので、俺は部室

に戻ってますから！」

紙だけ置いてさっさと宿直室から出ようとすると、

「なんだ、もう終わらせてたのか。ならコイツらの相手も任せたぞ」

西村さんが巫山戯たこと言ってきた。

「ちょっと待った！アンタ、俺に仕事全部押し付ける気か！？」

「後は任せたぞ」

「マジかよっ！？」

第１８２話（後書き）

バカテス９．５巻読みましたよ！

今回も相変わらずのバカテスっぷりでしたね（笑）

感想とアンケートお待ちしています。

第183話

二日後――――週明けの教室。

「ってなことがあって、おかげで散々な週末だったよ」
「お前らが悪いだからそうなるんだ」
「オマエのせいでもあるよな！？鉄人から解放されたかと思ったら、鉄人みたいに鬼の補修を俺たちにやっておいて！」
「そりゃ、任されたことだからな。やるときはしっかりとやらないとな」
「嘘だ！！あの時『憂晴らしに付き合え』って言ったことを僕は忘れてない！」
「うるせぇ！こっちもお前らのせいで土日は平均四時間しか安眠できなかったんだぞ！」
「「そんなの知ったことか！」」

いつものメンバーで卓袱台を囲いながら愚痴をこぼしあっていた。
（※作者より：日曜に起きたことは、プール編が終わったら書きます）

「なんだかよくわからんのじゃが、災難じゃったのぅ……」
「オマケに今週末はプールの罰掃除だよ。はぁ……」
「……重労働」

元々は教師陣の仕事なんだが、ついでにやらせておけと西村さんから言われたのだ。

「あんなに広いところを掃除するなんて、考えただけでも気が滅入るよ」
「まぁ、そう言うなって。一応褒美も出てるんだしな」
「褒美？」
俺の言葉に明久が首を傾げる。
「褒美って言うほどのものじゃないが、『掃除をするならプールを自由に使ってもいい』と鉄人に言われたぞ」
「え？そうなの？」
「貸切でプールが使えるんだ。充分な褒美だろ？」
褒美と仕事内容が釣り合ってないかもしれないが、気にしない。
「ああ。だから秀吉とムッツリーニも今週末にプールに来ないか？ただし、ムッツリーニには掃除を手伝ってもらうけどな」
「……」
頷こうとした康太が動きを止める。掃除を手伝う、という部分に迷っているのだろう。
ちなみに俺もやることになっている。掃除兼観察という名目でこれまた西村さんに押し付けられた。
「ちなみに、姫路と島田にも声をかけるつもりだ」
「優子は既に了承済みだぞ」
「……ブラシと洗剤の用意をしておけ」
即答。流石は“寡黙なる性識者”。あだ名は伊達じゃない。
「うむ、そうじゃな。貸切のプールなぞ、こんな時でなければなか

なか体験できんじゃろうし、相伴させってもらおうかの。無論、ワシも掃除を手伝おう」
「え？結構大変だと思うけど、いいの？」
「うむ。お安い御用じゃ」

杜丘のやつらに声かける気はなかったんだが……よしっ。秀吉のためだ。未来だけでも声かけといてやるか。

「んじゃ、あとは向こうの二人だな。おーい、姫路、島田！」
「どうしたの坂本？何かよう？」
「呼びましたか、坂本君？」

雄二の声に反応して二人がやってくる。ふむ。相変わらずの色々なところが凹凸のコンビだな。

「浅月。今アタシの悪口言わなかった？」
「滅相もございません」

女はなんで心の声が読めるんだろうな？

「二人とも今週末は暇か？学校のプールを貸切で使えるんだが、よかったらどうだ？」
「「え……？」」

プールという単語に露骨に反応する二人。

「あ、さては二人とも予定があったりする？」

それに気付かずに聞くバカ一人。ここまで露骨でなぜわからん？

「い、いや、別に予定はないんだけど。その、どうしようかな……？プールっていうと、やっぱり水着だし……」
「そ、そうですよね。水着ですよね……。その、えっと……」
それぞれが自分の気にしてる身体の部分へと視線を送る。島田はともかくとして、姫路は気にしすぎだと思うけどな。
「まぁ、お前らにはお前らの悩みがあるんだろうが……。一つ言っておくと、秀吉は来るぞ。水着姿を明久に見せに、な」
「秀吉が見せる相手は別に――――――――っと、なんでもない」
「……今、何を言いかけた？」
「企業秘密だ」
事前に秀吉に知らせておくより、やっぱりサプライズのほうが断然良いだろう。
「ひ、卑怯よ木下！自分は自信があるからって！」
「そ、そうですっ！木下君はズルいです！」
「？？？お主らは何を言っておるのじゃ？」
「理解しなくていいぞ秀吉」
「で、どうするんだ二人とも？」
「い、行くわ。その、イロイロと準備をして……」
「そ、そうですね。準備は大事ですよね」
複雑そうな顔をして頷く二人。当日、周りを見てどれだけ絶望するか楽しみだ。

第１８３話（後書き）

本編で書いたとおり、日曜に起きた出来事はプール編が終わったら書こうと思ってます。

まぁ、なにが起こったのかは皆さん予想つくと思いますけどね（苦笑）

感想とアンケートお待ちしています。

第１８４話

「そういえば、いい加減水着を新調せねばならんのう。丁度良い機会じゃから買いに行ってくるとするかの」

秀吉が顎に手を当てて呟く。んー、原作とは違い未来の存在があるからな。水着は変わるかどうか疑問だな。

「う、ウチも新しいのを買おうかな……？」

「あれ？でも美波ちゃん。この前水着の話をしてたときには『去年買ったばっかりだから今年は要らない』って……」

「み、瑞樹！余計なこと言わないの！こ、今回買うのは……そう！勝負用だから別口なのよ！」

「島田。焦って更に墓穴を掘っているぞ」

「……気のせいよ」

「まぁ、相手が相手だしな」

隣に居る明久（バカ）は『美波って水泳が好きなのかな？』という顔をしている。ほらな。

「あ、そうだ雄二。霧島さんにもきちんと声をかけておいてね」

「……言われなくてもそのつもりだ」

「早めに言っておいたほうがいいぞ。雄二よりも先に優子が言うかもしれないからな」

「それを先に言え！すまん。ちょっと連絡してくる！」

いってら～。西村さんに見つからないよう気をつけてな。

「うんうん。雄二も大人になったってことだね」

「いや、そういう問題じゃないぞ明久」
「???それじゃ、どういう問題さ」
「あのな……。ちょっとは自分で考えてみろ。いいか?雄二の立場で、優子――――他の女子から聞かされるか、後々になってからこのことが霧島に知られるという状況を」

自分より先に他の女子を誘ったり、女子とプールで遊んだことを霧島に知られたら……

「樹海の奥……、いや、湖の底……」
「事後処理は『転校』もしくは『元から居なかった』ってところだが、まぁそんなところだな」

これだから普段は素直じゃない雄二も声かけるわけだ。と、思っていたら電話を終えた雄二が教室に戻ってきた。

「ふー。危ないところだった。どうやら全員オッケーのようだな。んじゃ、土曜の朝十時に校門前で待ち合わせだな。水着とタオルを忘れるなよ」
「「「「「「「「「「はーい（了解っ）」」」」」」」」」」

雄二の締め台詞とほぼ同時にチャイムが鳴り、西村さんがドアを開ける音が教室に響いた。

「おぃーっす。今日は晴れてよかったな」
「みんなおはよう。プールにはもってこいの日ね」
「おはよー。絶好のプール日和だね」

週末。待ち合わせて一緒に来た優子と途中で出会った明久と同時に校門前にいる秀吉と姫路に挨拶をする。

「おはようじゃ明久と雅夜、それに姉上。良い天気じゃな」
「おはようございます吉井君、それと浅月君と木下さん。今日は良い一日になりそうですね」

きちんと挨拶を返す二人。姫路と休みの日に会うなんて久しぶりだな。

「秀吉。一緒に行こうって誘ったのに、アンタなんで先に行っちゃうのよ」
「姉上の気持ちを考えて、そうしたほうがよいと思ったからのう。明久が一緒にいるのを見たところ、途中で邪魔が入ったって感じじゃろ？」
「否定はしないけどね」

ホント。明久の空気の読めなささも面倒だよな。途中までは手を握っていたんだが、明久のせいで離してしまったんだぞ。

「ムッツリーニ。おは――――」
「……！！（カチャカチャカチャカチャ）」

件の明久は、康太に気がついたようで挨拶しようとするが、康太の鬼気迫る表情に動きが止まる。

「あ、あのさ、ムッツリーニ」

「……今、忙しい」

「ムッツリーニ。準備はいいけど、無駄になっちゃうんじゃないかな」

「……なぜ？」

「いや。だって、ムッツリーニはどうせ鼻血で倒れちゃうじゃないか」

どうせじゃなくて絶対だな。むしろ倒れなかったら奇跡だろう。

「……甘く見てもらっちゃ困る。……輸血の準備は万全」

「うん。最初から鼻血の予防を諦めているあたりが男らしいよね」

つくづく思うんだが、こいつらやっぱり最上のバカだろ？

第１８４話（後書き）

さてはて、秀吉の水着を変えるべきか変えざるべきか。

性別：秀吉だから上がないとやばいんだけど、普通に男らしいのを着せてあげたいんだけどなぁ……。

感想とアンケートお待ちしています。

第185話

「準備といえば、秀吉は新品の水着を買うとか言ってたよね？忘れずに買ってきた？」
「うむ。無論じゃ」

胸を張って鞄を掲げる秀吉。さて、気になるところだが。

「ちなみに、買ってきた水着じゃが――――――トランクスタイプじゃ」
「「バカなぁぁあああっ！！」」
「地面に突っ伏すな。お前ら、周りからみると不審者だぞ」

明久と康太が二人揃って同時に地面に突っ伏した。どっからどうみても、おかしな光景だな。

「最近お主らはワシを女として見ておるようじゃからな。ここらで一度ワシが男じゃということを再認識させようと――――――二人とも聞いておるか？」
「酷いよ秀吉！君は僕のことが嫌いなのかい！？」
「……見損なった……！」
「な、なんじゃ！？なぜワシは責められておるのじゃ！？」
「き、気にしなくていいと思いますよ。木下君」

涙を流さん勢いで秀吉に寄り縋る二人。これは気持ち悪い。

「ちなみに優子。どっちだ？」
「……たぶん雅夜が思ってるほう」

「二つあるんだが。アウト？セーフ？」
「アウトのほうよ」
「だよなぁ」

まぁ、今日は未来に見せる予定ってわけでもないし、変わるわけもないか。
と、溜息を吐いていると。

――――――タタタタタッ

「バカなお兄ちゃん、おはようですっ！」
「わわっ！？」

走ってやってきた葉月ちゃんが明久の背中に飛びつく。

「もう葉月ってば。アキがびっくりしてるでしょ？」

そして少し遅れて島田が――――――呆れ半分羨ま半分の顔をしながら登場。

「やっぱり葉月ちゃんだ。おはよう」
「えへへー。二週間ぶりですっ」
「よっ、葉月ちゃん。元気してたか？」
「メガネのお兄ちゃんもおはようですっ！」

明久の背中に乗ったまま顔だけこちらに向けて挨拶をする葉月ちゃん。……ふむ。

「なぁ、葉月ちゃん。あんまりメガネかけてないんだしさ、メガネのお兄ちゃんはやめにしないか？」

「そうですか？じゃあ……凄いお兄ちゃんでいいですか！」
「凄いって……。まぁ、別にいいか。オーケー葉月ちゃん。今日から俺は凄いお兄ちゃんだ」
「はいですっ」

頭を撫でてあげると、はにゃーとした顔になる。流石、天真爛漫って言葉が似合ってるだけあるな。

「バカなお兄ちゃんは冷たいですっ。酷いですっ。どうして葉月は呼んでくれないんですかっ？」
「あ、うん。ごめんね、葉月ちゃん」
「家を出る準備をしていたら葉月に見つかっちゃって。どうしてもついてくるって駄々こねてきなかいもんだがら……」

連れてきた、と？別に隠す必要もなかったんだけどな。

「あれ？坂本はまだ来てないの？ウチが最後だと思ったのに」
「あ、そういえばそうね。代表の姿も見えないし、遅れてるのかしら？」
「いえ、もう来ていますよ。今職員室に鍵を借りに行って――――――あ、丁度戻ってきたみたいです」

姫路がむいたほうを見てると、雄二と霧島が歩いてくるのが見えた。

「おはよう雄二、霧島さん」
「おい。きちんと遅れずに来たようだな」
「……おはよう」

明久が挨拶をすると、雄二は偉そうに、霧島は物静かに挨拶をする。挨拶一つでも性格って出てくるもんなんだよな。

「お兄さん、おはようですっ」
「ん？チビッ子も来たのか」
「チビッ子じゃないですっ。葉月ですっ！」
「ああ、悪い悪い。よく来たな葉月」
「はいっ」

子供好きである雄二は葉月ちゃんの頭にポンポンと手を置く。相変わらず、顔に似合わない行動で面白いな。

「んじゃ、早速着替――――」
「ああ、ちょっと待った雄二」
「ん？どうした雅夜。なにがあるのか？」
「ああ。サプライズで呼んだやつがいるからな。そいつを今紹介しとこうと思ってな」
「サプライズだと？また、面倒なことを」
「それって雅夜だけが知ってる人？それとも僕たちも知ってる人なのかな？」
「んー。この中で知ってる奴も何人かいると思うが……。まぁ、そんなことはいいとして。とりあえず呼ぶぞ」
「うん」

自然と皆の視線が俺に集まる。そんななか、俺はポケットからアル物をとりだして、

『……笛？』
「イエス」

そして思いっきり吹く！

第１８５話（後書き）

次回、あの子達がやってきますよ！

……登場キャラが余裕で十人を超えそうだけど

ちゃんと扱いきれるかな（苦笑）

感想とアンケートお待ちしております。

第186話

笛に思いっきり息を吹き込む。すると、普通なら高い音が出てくるのだが、

「音が……ない…？」

「たぶん違うぞ明久。俺達には聞こえないだけで、音ははっきりと出てるはずだ。きっとあれは――――」

「……犬笛」

「ですね。一度だけ昔見たことありますけど、浅月君がもってるのにそっくりですから」

その通り。人間には聞こえず、犬に聞こえる音を出すことが出来る特殊な笛。

「でもなんで犬笛なのじゃ？雅夜が呼んだのは人なのじゃろ？」

「……本当は犬だとか？」

「お犬さんが来るのですかっ」

「まさか、そんなことあるわけないじゃない。きっと浅月の冗談よ」

んー。まぁ、ネタではあるんだけどな。

「って、木下さんはなんで溜息吐いてるの？」

「姉上には心当たりがあるのかの」

「…いや、もうだいたい誰が来るかわかっちゃったわよ。というより雅夜。あの子、それに反応出来るの？」

「前に試したことがある。ちゃんと反応する――――――っと」

笛を吹いてから十数秒後、道路に向こうから土煙をあげんばかりの勢いで呼んだ奴が駆けてくる。

「あ、誰か走ってきてるよ」
「ホントじゃのぅ……って、アレはもしや!?」
「なんだ。秀吉の知ってる奴なのか」

ものすごいスピードで近付いてきている人物を見て、秀吉が声をあげる。ようやく気付いたよう――――――っ!!

「雄二、二歩下がって右を向け!!」
「は?いきなり何を言って――――」

雄二に向かって怒鳴る声をあげるが、雄二はきょとんとした。
バカ野郎っ!言われた通りに早く動けって!じゃないと……

「ちぇいさぁっーーーー!」
「うおっ!?」

――――――死角からやってきた空中回し蹴りに対応できねぇぞ!

「――――――ぐはぁっ!!」
「「雄二っ!」」

ガードが間に合わず、盛大に吹っ飛ぶ雄二。見た感じインパクトはずらしてあるから、痛さはあまりないから大丈夫だと思うが。

「ヒー!デー!君っ!!」
「わわっ!」
「ついでにマサ君ーっ♪」

「予測済み！」
「「「！！？？」」」

雄二のほうに気を取られてるうちに走ってきた奴が到着すると、まっさきに秀吉に飛びついた。そしてその後ろに隠れていた奴が俺に向かって飛んできたので、頭を抑えて勢いを殺す。

「やっぱりね……」
「呆れてるみたいだけど、驚いてないのかい？」
「犬笛ってところで気付いたわ。むしろ、いきなり隣に現れたアナタに驚いてるわよ。心臓に悪いからいきなり現れないでくれないかしら？」
「ははっ。これは癖みたいなものでね」
「「「！！！？？？」」」

今度は秀吉のほうに気を取られていると、自然に優子と会話している突然現れた奴に皆驚いて、

「なぜお主らは、もう少しゆっくりと行動しようとは思わんのかのう」
「それができたら苦労しないだろうな」
「言っとくがお主も入っておるのじゃぞ？」
「モチロンお前も入ってるんだろうな？」
「そんなわけなかろう」
「ジュークもほどほどにしとけよ」
「「「！！！！？？？」」」

俺に隣にいる秀吉（ジジィ）口調の奴にも驚く。さて、皆は何回連続で驚いたでしょうか？

「おはようございます、マサ君…」
「おはよーマサ君っ！」
「マサ君、おはよう♪」
「やぁ、マサ君」
「おはようなのじゃマサヤ」

自分たちがやっていた行動を止めて、こっちをむいて挨拶をする五人。

「とりあえず俺が言いたいことはただ一つ。お前ら普通に登場しろ」
「「「「「イヤだね」」」」」
「……もう、いいよお前ら」

第１８６話（後書き）

なんか久々にグダってる気がする（苦笑）

さて、登場してきたのはいったい誰なのか！？（笑）

感想とアンケートお待ちしております。

第187話

「いつっ……。ったく、いきなり過ぎてなにがなんだかわかんねぇぞ」
「……大丈夫雄二？」
「ダメージはなくてただ吹き飛ばされただけだ。意図的に手加減されたのが、ちとムカつくところだが」
吹き飛ばされた雄二が、服についたゴミを落としながら戻ってきた。
「えっと、この人達が雅夜が誘った人達でいいんだよね？」
「初めまして、じゃないえすよね。なんだか、そうじゃない気がするんですけど…」
「アタシもどこかで見たことがある気がするのよね」
「……データには無い」
「うーん。お姉さんたち、どこかで葉月と会ったことあるですか？」
どうやら皆、覚えてないみたいだ。秀吉と優子ははっきりと覚えてるみたいだが。
「木下姉弟は知ってるみたいだな。雅夜、誰なんだこいつら？」
「まぁ、覚えてないのも無理ないか。こいつら清涼祭の時に客として来た奴らなんだが。ほら、お前らが俺にナイフやらフォークを飛ばしたじゃねぇか」
「「「……。……ああ、あの時の」」」
「思い出したか。そっちの女子四人――――霧島は知らないから三人も思い出したか？」
「はい。浅月君が一緒に話していたお客さんですね」

「騒がしかった時のよね？思い出したわ」
「葉月も思い出したですっ！」

これで、わかる奴はわかったみたいだな。

「こいつらは杜丘高校の生徒で俺の仕事先である喫茶店の常連客。んで」
「アタシは雅夜経由で清涼祭の時からの付き合いよ」
「ワシは清涼祭の時に沢山話をしたからのう。それに、今は携帯が壊れてしまったのじゃが、前まではメールのやりとりをしておったのじゃ」

優子は何度か会ってるが、秀吉はこれで二度目だ。そういえば、翡翠に連れていくって言ったのに、全然連れていってないな。

「マサ君。とりあえず自己紹介をすませないかい？名前を知らないってのは不便なものだしね」

確かに炎天下の下での長話ってのもなんだしな。そのほうが良いか。

「ん、そうだな。じゃあ、せっかくだし千夏からやってくれ」
「了解」

千夏は雄二たちの方を向いて、わざとらしくコホンとしてから始める。

「私の名前は片桐千夏。片桐でも千夏でもどっちで呼んでくれても構わないよ。趣味は警察の真似事と剣道。好きな食べ物はマサ君が作ったお菓子。よろしくね」

ニッと微笑む千夏。相変わらずその仕草は似合っており、そのへんの男子よりかっこいいな。

「次は私かな？私は椎名忍。文月学園（こっち）に通ってる清水美春（ミハ）とは従姉妹同士だよ♪マサ君と同じバイトをしてて、料理は得意なほうかな♪好きな食べ物はマサ君が作ったお菓子。よろしくね♪」

笑顔で手を振る忍。紹介文に『マサ君の妻をやってます♪』というのが無くなっていてよかった。

「長瀬由美…。格闘技を少々やってて、スポーツは得意…。好物はマサ君のお菓子。よろしく…」

短めに自己紹介し、ぺこっと綺麗にお辞儀する由美。先程の空中回し蹴りをやった面影は消えていた。

「アタシは長瀬未来！気軽にミクって呼んでね。得意なことはあまりないけど、嗅覚には自信があるよ！好きな食べ物はマサ君が作ったお菓子。よろしくね！」

ウィンクをして親指を立てた右手を突き出す未来。『秀吉が好きです』っていう説明はしなくていいのか？

「最後はワシじゃな。ワシは名前は植田菖蒲。マサヤとは文月学園（ここ）の文化祭の時に初めてあったのじゃから、この中ではマサヤとは一番付き合いが短いの思うの。好きな食べ物はマサ君が作ったお菓子。よろしくなのじゃ」

最後にアヤメが笑顔でいいきる。っと、確かにそうだな。この中じゃアヤメが最後に出会ってるんだな。

どうでもいいんだが、なぜ皆俺のお菓子が好物だと言うんだ？

「んじゃ、俺から時計周りな。俺は坂本雄二。Ｆクラスの……っと、文月学園の特徴は教えてあるのか雅夜？」

「ある程度は教えてある。それで充分伝わるぞ」

「そうか。Ｆクラスの代表を務めている。運動と勉学全般は得意だ。以後よろしくな」

まぁ、雄二と霧島のことは知られてるんだけどな。あのビデオで。

「……坂本雄二の妻、坂本翔子。旧姓は霧島。Ａクラスの代表を務めている。……よろしく」

「誰が妻だ！自己紹介の時に嘘ついてどうする！」

「あ、大丈夫だよ坂本君。皆ちゃんと理解してるから。ね、みんな？」

「「「「うん」」」」

「激しく不安なんだが……」

その不安は間違ってないから大丈夫だ。

というより、あのビデオを見たやつは普通に二人は付き合ってると思ってるぞ。

第１８７話（後書き）

グダグダだぁ……（泣）

最近さらに時間が足りなくなってきた（汗）

感想とアンケートお待ちしております。

第１８８話

その後、全員の自己紹介が滞りなく終わった（特になにもなかったので省略！）。

「自己紹介も済んだことだし、そろそろ着替えるとするか。女子更衣室の鍵は翔子に預けてあるからついていってくれ。着替えたらプールサイドに集合な」

雄二の言葉をうけ、皆は一旦男女にわかれ、それぞれの更衣室を目指す。

「こらこら。葉月ちゃんと秀吉は女子更衣室でしょ。霧島さんについていかないとダメだよ」

明久が二人の背中を押しながらそんなことを言う。葉月ちゃんはそうだが、秀吉は違うだろ。

「えへへ。冗談ですっ」

「ワシは冗談ではないのじゃが……？」

「秀吉は女子（むこう）更衣室にいかなくていいからな。というか絶対に行くな」

「わかっておる！」

顔を少し赤くして力強く答える秀吉。女子扱いされるのと、未来に見られる（見る？）のが恥ずかしいんだろう。

「マサ君はこっちじゃなくていいのかい？」

千夏が笑いながら言ってくる。いつにもまして今日はテンションが高いな。

「なにバカなこと言ってるんだ。俺が女子更衣室に行くわけねぇだろ」

「なんだつまらない。マサ君ならノリで付いてきてくれると思ったんだけどね」

「ノリが良くても、それはない」

「というかアタシがさせないわよ」

ナイナイと顔の前で手をふる。ノリで死地に赴くほどバカじゃない。

「ほら、遊んでないで行くわよ葉月、木下」

「し、島田!?ついにお主までそんな目でワシを見るように!?嫌じゃ!女子更衣室で着替えるのだけは嫌なのじゃ!助けてくれ、雅夜!」

「ちょ、俺にしがみつくなって!未来パス!」

しがみついてきた秀吉を剥がして未来のほうに投げ飛ばす。……ん?これ、ちょっとまずくないか?

「――――わふっ」

「え、えぇっ!?」

狙い通りしっかりと未来に（未来の腹に顔を埋めるように）抱きついた秀吉。秀吉はすぐに離れることなく、抱きついたまま停止してしまった。

「マ、マサ君!いきなりなにするの!」

「す、すまん。つい……」
「つい、じゃないよ！ほ、ほら、ヒデ君っ。（名残惜しいけど）とりあえず、一旦離れて！」
「うむ……。取り乱してしまって、すまぬのじゃ。（柔らかくて気持ちよかったのじゃ）」
心の声が手に取るようにわかってしまうんだが。

「ホント、ウチの弟は男として認識されてないわよね……」
「可愛いから仕方ないよ♪」
「男相手に可愛いと言ってもどうかとおもうのじゃが…」
「男の娘か…。良いね、嫌いじゃないよ」
「チカは自重して…」
若干一名楽しんでるみたいだが、溜息や苦笑が飛び交っていた。

「あの……。木下君は一人で別の場所で着替えるっていうのはどうですか？」
見かねた姫路がおずおずと手を挙げて提案した。幸い休日の学校だし、着替える場所なんてどこにでもあるしな。

「ぬ、ぬぅ……。納得行かぬが、この際我慢じゃ……。水着姿を見せればきっと皆もワシのことを見る目が変わるはずじゃ……」
「俺は変わらんぞー。むしろ変わったらまずくないか？おーい、秀吉？」
ブツブツと言ってる秀吉に声かけたのだが、既に自分の世界に入っているのか返事が返ってこなかった。気合いれるのはいいが……頑張れ秀吉。

「よし。決まったのならさっさと行こうぜ。時間がもったいない」
「うん。そうだね」
「……（コクリ）」
「いま気がついたんだが、男女比5対10だよな？二倍じゃねぇか……」

とまぁ、色々とあってやっと更衣室に入れた。

――――二十分後――――

「やっぱり女子はまだ着替え終わってないか」
「そうみたいだね」
「日焼け止めとか色々とあるからな」
「……（コクリ）」

ひと足早く着替えを終えた俺達は、プールサイドで女子の登場を皆で待っていた。

「それにしても雅夜。傷、また増えた？」
「んー、最近は特にやられてないから増えてないはずだぞ」
「そう？肩の傷は初めて見る気がするけど」
「肩のは一ヶ月前のだ」

身体のところどころについた切り傷。打撲とかならすぐに傷痕はなくなるんだが、切り傷ともなるとなかなか痕は消えず残っている。

「相変わらず痛々しい身体をしてるんだな。どうしたらそうなるんだ？」
「主に真剣での鍛錬でだな。真剣だとかすっただけでも結構傷になるからな。痕に残りやすいんだ」
「真剣って、おまえな……」
「……高校生のやることじゃない」

流石に自分が普通だと言えないことくらい自覚はしてるさ。まぁ、俺以上におかしな奴はいるんだけどな。

もっとも、マスターところの道場なら真剣は日常的に使われていたりする。

第188話（後書き）

次回、やっと皆の水着姿が出てきますね。

さてどんな水着にしましょうか……（笑）

感想とアンケートお待ちしております。

番外・七夕編　前編（前書き）

番外編、第五弾！

今回は優子ｓｉｄｅでお送りいたします。

番外・七夕編　前編

～Ｓｉｄｅ優子～

「雅夜が学校に来てない？」

放課後の学校。雅夜と一緒に帰ろうと思いＦクラスに寄ってみると、そこには雅夜の姿は見えなかった。

「うん。雅夜は今朝から用事があるって学校にも来ないでどこかに行ってるんだ」

「それって要するにサボリよね？」

「うむ、その通りじゃ。なんでも西村先生に『今日はサボリます』と連絡が云っておったようじゃぞ」

「そういえば鉄人が今朝のＨＲでそんなこと言ってたっけ」

随分と堂々とサボったわね。

「雅夜がサボリねぇ……」

また誰からに呼び出しくらって高校生らしからないことでもしてるのかしら。

「バカなことしてなければいいんだけど……」

「そうだね。……って、あれ？もしかして木下さん、今日サボってる理由雅夜から聞いてない？」

「ええ、なにも聞いてないわよ。吉井君は知ってるの？」

雅夜ったら…。吉井君に知らせてるのに、なんでアタシに知らせて

ないのよ。

「なにやってるかは知らないけど、毎年七夕の日は一日中どこかに出かけてるんだ」

「へぇー……って、それってなにも知らないのとほとんど同じじゃない」

「毎年恒例でどこかに行っておる、ことしかわかっておらんのじゃのぅ…」

毎年同じ事やってるから、今年もそうだろうってだけじゃない。

「し、仕方ないじゃん！後で雅夜に聞いても答えてくれないし、事情を知ってそうなマスターに聞いても口止めされてるみたいでなにも教えてくれないんだよ！」

「雅夜が口止めしてるってことは、よほど人に知られたくないみたいね」

「幼馴染みである明久にすら言わないとは、徹底しておるのう」

「そうなんだよ。電話してみたらわかると思うけど、今日は携帯すら持ち歩いてないんだ。なんだか邪魔されたくないみたいでね」

試しに雅夜に電話してみる。すると、出ないと思っていたのだけど、2コールめにあっさりと出た。

「なんだ出るじゃない」

「……電話に出た相手と話せば僕が言った意味がわかるはずだよ」

それってどういうこと？

「あ、もしもし雅夜？あんた一体どこでなにして――――」

『…もしもし。こちら浅月雅夜の携帯』

「……何をおかしなこと言ってるのよ雅夜？」
『優子君かい？すまないが、雅夜は今ここにはいないんだ』
「はい？え、えーっと、どういうことですか？」
状況が飲み込めないんだけど。
『携帯は私の下に預けて、雅夜は出掛けている。雅夜になにか言いたいことでもあるかい？』
「あ、いえ、ただ朝から姿が見えないからなにしてるかなー、って思って」
『そうか。それだったなら今日聞くのは諦めて、後日、雅夜に聞くといい』
「えっ！？い、今聞くことはできないんですか？」
『無理だ。よほどのことがないかぎり、雅夜には連絡しないことになっている』
いつもより冷たい……いや、冷酷な感じがするマスター。なんだか……少しだけ……怖い……。
『一応言っておくが、優子君だけにこの冷たい態度を取ってるわけじゃない。皆、この態度で接している』
「――――っ！！」
考えを見透かされてる！？
『要件は以上かな？では、切るよ』
「あ、待っ（プツ、ツーツーツー）きられちゃった……」
まるで『もう要はない』とでも言うように、向こうから一方的に電話を切られる。

……いくらなんでも素っ気なさすぎないかしら？

「どうだった木下さん。隣で聞いてた感じじゃダメだったみたいだけど」

「……吉井君が言ってた意味がわかったわ。前からこうなの？」

「うん。毎年なに言ってもマスターと雅夜、二人とも教えてくれないよ」

少しだけ寂しそうな表情を見せる吉井君。たぶんだけど、幼馴染みなのになにも出来ないのが悔しいんだと思う。

「話がよく見えないのじゃが……。それで姉上。今日はどうするのじゃ？」

「……そうね。ちょっと用事が出来ちゃったから、先に帰るわ」

遠出になりそうだから、時間があまりないわね。

「あ、そうだ。吉井君」

「ん？」

「毎年、雅夜ってだいたい何時ごろまで帰ってこなかった？」

「夜中ぐらいかな。たまに日付跨ぐときもあるけど」

「そう。ありがと」

なら、問題ないわね。

「じゃ、私はこれで。また明日ね！」

「うむ。ではの、姉上」

「また明日木下さん」

鞄を持ってＦクラスを出る。少し駆け足で下駄箱まで行き、靴を履

き替えて外に出る。

すると、

『木下さん！』

吉井君が三階の窓から身を乗り出して、下まではっきりと聞こえる大きな声で、

『雅夜を、お願い！僕にはこれ以上なにも出来そうにないけど、木下さんなら出来るから！』

力強く言ってきた。吉井君に言われなくてもそのつもりよ。

だから。

「――――――任せなさいっ！」

だからアタシも、力一杯大きな声で言い返す。

番外・七夕編　前編（後書き）

番外・七夕編　前編

今回は、いつもとは一味違ったテイストで書こうと思ってます。

後編（中編もあるかも）は明日投下予定です。

水着回を期待してた方はすみません（苦笑）

感想とアンケートお待ちしております。

番外・七夕編　中編

時は過ぎ、場所は喫茶翡翠屋……

カランコロン♪

「いらっしゃいませー……って、優子ちゃんじゃない」
「こんにちは陽菜さん」

翡翠に入ると陽菜さんに出迎えられる。この人、パティシエなのになんでウェイトレスしてるのかしら？いつも此処に来るたびに疑問に思うのよね。

「こんにちは♪あ、席は奥が空いてるからそこに座ってちょうだい。注文はいつものでいいわよね？」
「えっと、違うんです陽菜さん。今日はお客として来たんじゃなくてですね……」

急いでるから此処でお茶してる時間はないのよね。
ちなみにアタシのいつものとは翡翠屋特性シュークリームのこと。

「あら？雅夜のこと、もしくはマスターの居場所について聞きに来たんじゃなかったの？」
「！？ど、どうしてそのことを知ってるんですかっ！？」
「優子ちゃんの顔みればわかるわよ。それよりも、とりあえず席に座って待ってて」
「……はい」

言うだけ言って陽菜さんは厨房の奥へと消えていってしまった。
顔を見れば……？そんなにわかりやすい表情してるのかしら？鏡があれば見てるところだけど、生憎今はもってないのよね。

と、思いながら席に着いたら、陽菜さんはもう戻ってきた。

「お待たせってほどじゃないわよね」
「え、ええ。なにして来たんですか？」
「孝ちゃんが奥にいないか確認してきただけ。思った通り居なかったけど」

やれやれと溜息を吐きながらアタシの向かい側の席に座る陽菜さん。
その仕草は雅夜がよくやるのと似ていた。

「それで優子ちゃん。時間があまりなさそうだから、単刀直入に答えてあげるわ。雅夜のこと、孝ちゃんの居場所。どっちから先に聞きたい？」
「マスターの居場所でお願いします」
「あら、即答。てっきり雅夜について先に聞いてくるかと思ってたわ」
「それについてはマスターから聞くつもりなので」

元からそのつもりだった。此処にはマスターを探す為に寄っただけだしね。

「そ。（孝ちゃんから聞くのは難しそうだけどなぁ……。ま、いっか）孝ちゃんの居場所ね。さっきも言ったとおり、今ここにはいないわ」
「今ってことはさっきまで居たんですか？」

「優子ちゃんが電話したときには居たわよ。でも、電話を切ったすぐ後に出ていったけど」

電話の後。じゃあマスターはアタシがここに来るって思ったわけね。

「どこに行ったかわかりますか？」

「愚問ね。夫の行動がわからない妻はいないわよ。ちゃんと居場所はわかってるわ」

やっぱり雅夜の師匠ね。雅夜と言動が似てるわ。

「場所はここから北西の方角にある廃ビルの中よ」

「は、廃ビル！？……なんでそんなところにいるんですか？」

「誰もいなくて静かな場所だからよ。一人で居たい時や、考えごとするときにはうってつけのところなの」

屋上は景色もいいしねと続ける陽菜さん。そういうところは勝手に使っちゃいけないはずなんだけど、いいのかしら？

「ありがとうございます。さっそく行ってきますね」

「あ、待って。私からも一つだけ聞かせてもらいないかしら？」

「はい？なんですか」

目的地がわかったので席を立とうとすると呼び止められる。

「『なぜそこまで雅夜にかまうのか？』この問いの答えはあるかしら？」

まるで誰かの受け売りの言葉のように言われる。

でも、その問いに対する答えはすでに見つかっていた。

「『そこに愛があるから』。雅夜とは悲しみを分かち合い、嬉しさを共有する、そんなお互いを思いやる関係になりたいの」

雅夜は過去の辛いことや哀しいことを一人で溜め込む癖がある。今日もきっとそのはず。

お節介かも知れないけど、アタシは雅夜の側に居たい。側に居て、雅夜に頼ってもらいたい。雅夜の拠になりたい。

「だからアタシは雅夜の元へ行く。そこには必ず意味があるはずだから」

なにも知らないままでいるのは絶対に嫌。理由を聞くまでは引く気にはなれない。

「……上手くいくのを祈ってるわ」

「ありがとうございます」

番外・七夕編　中編（後書き）

番外。七夕編　中編

書いてるうちに長くなった（汗）

しかもなぜか優子が、平然と恥ずかしいこと口走ってるし（苦笑）

後編は明日です。

感想とアンケートお待ちしております。

番外・七夕編　後編

「――――おいテメェ。こんなところでなにしてやがる？」

陽菜さんが言っていた廃ビルに入ろうとしたら、いきなり首筋にナイフのようなものをあてられる。……え？

「ちょ、ちょっと待って。なんでこんな展開になってるのよ！？」

さっきまでの雰囲気はどこいったのよ！！

「カタギか……？オイ女。『この町にいる一番繋がりの深いやつを教えろ』」

「はい？」

男はなにかを見ながら問いかけてきた。え、えーっと……こういう時は素直に答えたほうがいいわよね？

「ま、雅夜。浅月雅夜よ」

「！？す、すみませんっ！！兄貴の知り合いは知らず、失礼なことしてすみませんでしたっ！！」

雅夜の名前を言うと、慌ててアタシの首に当ててたものを仕舞って頭を下げた。あ、兄貴……？それって雅夜のことよね？なんでそんなことになってるのよアイツ。

「まぁ、そんなことは今はいいから。入っていいわよね？」

「はいっ！兄貴の知り合いなら拒む理由はねぇっすからっ！」

楽しそうな笑顔で言われる。態度が変わりすぎじゃないかしら？……まぁ、そんなこと今はどうでもいいんだけど。

「そうだ。ねぇ、マスター知らないかしら？陽菜さんからここに居るって聞いたんだけど」

「マスターに陽菜嬢まで知り合いなんすかっ！？外見に似合わず、す、凄いっすね……」

質問に答えなさいよ。

「で、マスターはいるの？いないの？」

「中にいるっす！三階の奥のほうから数えて右から三番目の部屋……って、わかりにくいっすね。案内します」

男の後ろをついていきながら階段を昇り、マスターがいるらしい部屋までたどり着いた。

「ここっす」

「ありがと」

連れてきてくれた男にお礼をいい、さっそくノックをする。

『……入っていいぞ優子君』

やっぱり来たのがアタシだってわかってるみたいね。じゃあ、遠慮なくいかせてもらいますか。

「失礼します」

部屋の中にはいる。廃ビルだというのに、部屋の中はなかなか綺麗

だった。

「優子君なら来てくれると思ってたよ」

「電話ではあんなに拒絶しておいて何言ってるんですか。諦めろとか言ってたじゃない」

「だからこそ、だよ」

ん？

「だからこそ、優子君が此処に来ると思ってた。いや、伝えられた。『優子は簡単に諦めてくれる奴じゃない。だから来る』と」

雅夜ね……。今日のアタシの行動は予測済みだったってことね。

「優子君。雅夜のなにが聞きたいのかな？一応雅夜からある程度の許可をもらってる」

「全て……ってのは流石に無理があるわよね」

マスターから聞くものでもないしね。

「雅夜はなぜ毎年七夕の日に一日中外出していて、それを誰にもバレたくないのか。そして今、雅夜はどこで何をしているのか」

「……うむ。それなら全部答えられそうだ。その代わり、雅夜のことを教えるかわりに条件があるみたいだが、いいか？」

「条件によるけど、対外のものなら受け入れるわ」

「だろうな。そう言うと思ってた。条件はただ一つ『今日は俺には声をかけるな』だ」

雅夜に声かけるな。余程邪魔されたくないのね。

「いいわよ別に。理由さえ教えてもらえれば、それで充分よ」
「……そうか」

マスターは少し微笑み、語り始める。

「まず今日、七夕の日は雅夜にとって凄く大事な日だ。優子君なら聞いたことあると思うが、雅夜は昔火事にあったことがあるだろう？」
「はい」

如月ハイランドで雅夜が教えてくれたほうよね。

「その時に雅夜にとって大事な人死んでしまったことも？」
「ええ、雅夜の口からはっきりと教えてもらいました。……あ、もしかして…」
「今日がその日だ。死者の命日」
「そっ、か……。そういうことね……」

雅夜がなによりも大切にしてるもの。火事の時に死に別れてしまった彼女。たとえ昔のことだとしても彼女に対する思いはいまでも続いている。

「『邪魔されたくない』ねぇ……。マスター、雅夜はどこにいるんですか？」
「ここから少し行ったところにある山――――大砲山の頂上。そこに一人でいるはずだ。行くのかい？」
「当たり前です。たとえ雅夜に話しかけていけなくても、行くこと自体に意味がある」

時間は……あまりないわね。早くいかなくちゃ。マスターにお辞儀

をして部屋を出る。

『……なるほどな。優子君は『強い』んだな。雅夜が惚れるだけのことはある』

後ろからそんな声が聞こえた。アタシ女なんだけど、強いって言われてもねぇ……。

「あ、優子嬢！お帰りっすか？」

「ここは寄り道よ。って優子嬢ってなによ」

「皆で話あった結果そうなったっす。ダメっすか優子嬢？」

「別にいいわよ。それより大砲山ってどこにあるか知ってる？聞き忘れちゃって困ってるのよ」

なんか普通に出て来ちゃったから聞きそびれたのよね。

「大砲山ならこっからバイクで二十分くらいのところにあるっすよ。行くんだったらよかったら後ろ乗るっすか？」

「なにからなにまで悪いわね。お願いするわ」

「『困ってる人には手を差し伸べろ』って教えられたっすからね。ウチのもんは基本は良い奴ばっかですよ」

バカばっかですけどと笑いながら言う男。そしてバイクにキーを差し込みエンジンをかける。

「一応二人乗りなんでヘルメット被ってもらえるっすか？」

「わかってるけど……アタシよりアナタのほうが外見に似合ってない性格してるわよ」

「よく言われるっす。んじゃ、発進するっすよ」

二十分後……。

「制限速度しっかりと守ってた……」
「ヘマはしないよう気を付けてますっ。それで優子嬢。帰りまでどのくらいかかるっすか？」
「そんなに掛からないわよ。早くて十分、遅くても三十分以内には戻ってくるわ」

雅夜を見てくるだけだし、そんなに時間はかからない。

「そんじゃ、待ってるっすよ。帰りも送っていくっす」
「あ、ホント？うれしいわね」

外見はただの不良なのに、心は普通の人よりも優しいのね。なんで不良やってるのかしら？

「それじゃ行ってくるわ」

頑張ってくださいっ！という声を背中に受けながら山を登ってく。
バイクで結構頂上付近まで登れたからそんなに歩く必要はない。
すぐに頂上が見えてきた。

そして……

木の下で一人静かに空を見ている雅夜がいた。

空を見上げながら側に置いてあった飲み物をのみ、憂い顔で涙を流していた。

「……」

その光景にアタシは魅入っていた。

そこにはアタシの入る隙はなく、アタシという存在は邪魔にしかなっていない。

自然と足が来た道を歩いていた。

「は、早いっすね。五分もたってないっすよ？」

「いいの。思ったより用が早く済んだだけ――――って、そちらの女性は？」

「さっきそこであったんっす」

バイクを降りた場所まで戻ると、送ってくれた男と、さっきまでいなかったはずの女性がそこにはいた。

「初めまして、でいいのかな？」
「そうだと思いますよ。初めまして。アタシは木下優子。高校二年生です」
「高校二年生？凄い。奇遇ね。私も高校二年生なの」
同い年かぁ……。どっちかというと年下に見えたんだけどね。

「優子ちゃんは山から降りてきたけど、頂上まで行ってきたの？」
「すぐ引き返して来ましたけど、一応は行きました」
「へ～……。ちょっと聞きたいんだけど、頂上で男の子見なかった？私たちと同い年くらいの」
「！？」
雅夜を知ってるの！？

「……なんでそんなこと聞くんですか？」
「気になるから、かな？毎年見てるから今年もいるかなー、なんて思ったの」
ホントにそれだけの理由なのかしら？でも、初対面で嘘つくのも悪いし……

「一応見ました。一人で静かに過ごしてましたよ」
「そっか。ありがと」
と、哀しそうに、でも笑顔でお礼をいう。

「優子嬢、エンジンかかりましたがどうするっすか？」
「わかったわ。えっと、そういうことなので……」

「帰るのね。男の子のこと教えてくれてありがと優子ちゃん」
「こちらこそ……って、そうだ。名前教えてもらえないですか？」
名前聞きそびれちゃってたわね。
「ん～…、ここであったのも何かの縁だし、教えないって選択肢を取りたいわね」
「そんなものありません。別に教えたくないなら、無理には聞きませんが……」
「そうね……あ、そうだ！私はプレアデス。今日は七夕だから星にちなんだ名前にしときましょ」
「プレアデス？なんですかそれ？」
「企業秘密♪なんの企業かは私にもわからないけど！」
雅夜と同じ……。やっぱり雅夜のこと知ってるのかしら？
「また会ったら、その時はちゃんとした名前を教えてあげるよ」
「ここであったのすら偶然なんだから、次なんてあるのかしら？」
「それは私にはわからない。なかったらなかったで縁がなかっただけだしね」
口では会えない会えない言ってるけど、心のなかではこの人とはどこかで会うことがあるだろうとわかってる。
「んじゃ優子嬢、発進するっすよ」
「ええ。バイバイ、プレアデス！次はもっとましな名前教えなさいよ！」
「優子ちゃんもね！」
旧友が別れたときのように姿が見えなくなるまで手を振り合う。

番外・七夕編　後編（後書き）

番外・七夕編　後編

～完～

後編より中編のほうが絶対人気ありそうだな（泣）

不良男子は今後出てくるかわかりません（笑）

もう一人のほうは……どうだろ？（苦笑）

感想とアンケートお待ちしております。

第１８９話

「ムッツリーニ。心の準備は出来てる？命にかかわるからね？」
「……問題ない。イメージトレーニングを２５６パターン、昨晩済ませてある」

思い出したかのように明久が康太に話しかける。

「……そして２５６パターンの出血を確認した」
「致死率１００％じゃないか」
「いや、明久。もっと上をいくぞ」
「……雅夜の言うとおり。彼女たち五人が増えたことでさら３９５パターン増加した」

多いのか少ないのかわからない数だな。っというか今までの間にそんなに考えついたのか？

「そのうち出血のパターンはいくつ？」
「……３９５」
「致死率２５０％以上だな」

まぁ、最初から死にに来たようなもんだし問題ないか。……ん？

「お、誰か来たぞ」

俺が気付くのと同時に雄二が呟く。女子更衣室のほうに顔を向けると葉月ちゃんが駆け寄ってきているのが見えた。ふむ。水着は小学生らしく紺色のスクール水着か。

「どどどどどどうしよう雄二！？あれってスクール水着だよね！？そんなものを着た小学生と遊んでいたら逮捕されたりしないかな！？」

「……弁護士を呼んで欲しい（ボタボタボタ）」

「あのな……。落ち着け二人とも。小学生の水着姿でそこまで取り乱すな」

「たかが小学生の水着ってだけで、なんで動揺（よくじょう）してんだよお前ら」

そんなこっちの様子を知らずに元気に駆け寄ってくる葉月ちゃん。

「お兄ちゃんたち、お待たせですっ」

島田の妹だけあって手足は細く健康的に伸びていた。スレンダーな家計なんだな。胸はパッドで大きくしてるみたいだけど。

「懲役は二年程度で済みそうだね」

「……実刑はやむをえない（ボタボタボタ）」

「お前ら冷静なフリしてるだけだろ」

「現実をしっかりと見ろ」

どう考えてもパッドだというのに。

と、思ってたら更衣室のほうからまた一人やってきた。今度は島田か。水着はスポーツタイプのセパレートってところか？水着にはあまり興味がないからそこまで詳しくないんだが。

「こ、こら葉月っ！お姉ちゃんのソレ、勝手に持っていったらダメでしょ！？返しなさいっ！」

諦めろ島田。もう遅いんだよ。

「……パッド」
「ほぇ？」
いまさらながら康太が呟く。その視線の先は……
「あぅ。ずれちゃいました」
水着の中に手を入れて、ずれたパッドを直している葉月ちゃんの姿。
「ん？ってことは、今美波が返しなさいって言ったのは、葉月ちゃんがつけている胸パッ――――」
「この一撃に、ウチの全てを賭けるわ……！」
「だ、ダメだよ美波！その一撃は僕の記憶どころか存在まで消し――――ってなんで雅夜も拳を構えてるの！？」
「なんとなくノリで」
「そんなノリいらないよ！」
なんだ。つまらないな。
「うぅっ……。折角用意してきたのに……。葉月のバカ……」
「嘆くこともないと思うがな。ほら、島田はあっちいった（ドンッ）」
「キャッ！」
とりあえず島田を明久のほうに押しといた。二人には適当にイチャイチャしといてもらおう。
島田がこっちを見ないようにな。
「マサくーんっ♪」

「抱きつこうとするなっ！」

更衣室から文字通り忍が飛び出してくる。いつもなら適当にあしらうのだが、今回は水着なので抱きつかれたら色々とまずいのでちょっと大きめによける。

「むー、やっぱりよける。たまには抱きつかせてくれてもいいじゃない」

「アホか。今の服装を考えてから行動しろ。俺が死をみるぞ」

「ユウちゃんとか厳しそうだもんねー♪」

忍の水着は前に紐があるタイプのビキニで色は青。元々スタイルが良い&胸はEカップ近くあるので抱きつかれたら本気で危ない（俺の理性だとか、優子の理性だとか）。

「それにしても女子の水着って毎年変わるもんなんだな。去年とは違うよな？」

「うん、そだよ♪成長時期だからね、去年のだともうパツンパツンだったから新しいの買ったんだ♪」

「確か去年は水色でラインが白だったよな。ビキニってのは変わってないが」

「相変わらず記憶力いいねぇ」

ちなみに去年の丁度今頃、翡翠メンバー総勢１２人で海に行ったのだ。まぁ、男組みの俺とマスターと悟志の三人は性格が性格なのでもっぱら雑用ばっかやっていたが。

「……お。次が来たみたいだな」

忍と話していると霧島が更衣室から出てきた。白のビキニで下は水

着用ミニスカ。こういうのを大和撫子っていうんだな。

「ショウちゃんだね♪胸は……ギリギリ勝ったかな？」

「着目するところはそこかよ…。更衣室で見たんじゃないのか？」

「揉んできた。なかなかの好反応だったよ～♪うへへへっ」

「オヤジみたいな発言やめろ」

目を爛々と輝かせながら言う忍。やばい、こいつマジだ。

第１８９話（後書き）

水着一人目披露～♪

女子の水着ってビキニの場合が多いですよね。

感想とアンケートお待ちしております。

第１９０話

「……雄二。他の子を見ないように」
「ぐあああああっ！目が、目がぁっ！！」

登場と同時に流れるゆおな動きで雄二の目を潰す霧島。これはある意味芸術だな。

「凄いわ……。坂本の目を潰す仕草まで綺麗なんて……」
「うん……。あの姿を見られるのなら、雄二の目なんて惜しくないね……」
「そりゃお前らには実害がないからなっ！」
「目が潰されて何も見えない……つまり、ラッキースケベのチャンスだね♪」
「ないからな、そんなの」

霧島相手なら良いかもしれないが、他の奴にでもやってみたら絶対に血を見ることになるからな。

「ふぇ……。お姉さん、とっても綺麗です……」
「……そう言われると、嬉しい」

のたうってる雄二の隣で霧島が頬を赤らめながら俯いていた。やっぱり普段の仕草とのギャップの差が大きいと、より可愛く見えるよな。

『ほらほら雄二。雄二も霧島さんに言うべきことがあるでしょ？』
『翔子』

『……うん』
『ティッシュをくれ。涙が止まらん』
『このバカ雄二！もっと他に言うべきことがあるじゃないか！』
『視界を奪われて他に何を言えと！？』

繰り広げられるバカな会話。こいつらのテンポは見てるだけで面白い。

「っと、そろそろ誰かきそうだな」
「もう来てるよ…」
「ぅおっ！？」

声をしたほうを見ると、由美がしたり顔でこっちを見ていた。

「だーかーらっ！気配を消して突然現れるなって」
「無理な相談…。私はまだ初めて出会った時のことを忘れてない…」

……まぁ、確かに由美と出会ったときは気配を消して由美の目の前に突然現れたりしたけど。四年前のことじゃねぇか。

「いつまで根に持ってるんだよ……」

言いながら由美の水着を観察する。ふむ。やはり水着はビキニなようだが、忍とは違い後ろに紐の結び目があるやつだ。色は紫と白のボーダー（しましま）タイプで髪の色によく合っていた。

「似合ってるなその水着。由美の茶髪とも相性いいんじゃねぇか？」
「ありがと…。これ、見つけるのに結構苦労した…」
「だろうな。今年の新作とかか？」
「うん…」

少し顔を赤くする由美。普段は未来の影に隠れがちなので、容姿を褒められるのにあまり慣れてないからな、こいつ。

「はぁ～……。マサ君、私のときと由美のときとじゃ態度が全然違うね……」

「そうかぁ？変えてるつもりはないんだが」

「私には似合ってるなんて一言も言ってくれなかったじゃん」

「普通に似合ってたんだから、言わなくてもいいだろ」

なにをいまさら。

「……うぅ～、その言葉は反則だよ」

「なにが反則だ。俺は思ったことをそのまま口にしてるだけだ」

だからそういうのが反則なんだよ…と呟きながら縮こまっていく忍。ったく。なんなんだいったい？

「マサ君は気にしないほうがいいと思う…」

「いや、最初からそこまで気にしてないんだが」

「それはそれでダメだよ…」

溜息を吐いて沈んでいる忍の背中を撫でる由美。背中側に紐がないことに気がついて舌打ちをしてなければ、普通に由美が優しそうに見える光景だったんだがな。

「そういえば由美。次は誰が出てきそうだったか？」

「まずミク…。その次にミズキとチカが同時で、最後にアヤとユウ…」

「姫路と千夏よりも優子とアヤメのほうが後なのか？意外だな」

「よくわからないけど、二人であーだこーだ言ってたからね…」
ん？なにかあったのか？……っと。未来が来たみたいだな。
「やっほーっ！おまたせっ！」
「相変わらず元気がいいな。そんなに秀吉にあえて嬉しいのか？」
「ふぇっ！？べ、別にそんなんじゃないよっ！」
顔を真っ赤にしてぶんぶんと頭を振る未来。否定しているのか肯定しているのかわからない仕草だな。
「ちなみに秀吉はまだ来てないぞ」
「あ、そうなの？なんだ……」
「露骨にがっかりするなよ」
「してないよっ！」
未来の水着はオレンジ色をベースとした、動きやすそうなフィットネス系（要するにタンクトップ）だ。島田のスポーツタイプの水着と似てい――――じゃなくて、これはもしかするとアレだよな。
「いい水着選んだな未来。お前にしては上出来だ」
「ありがとう……でいいのかな？なんか素直に喜べないんだけど？」
「喜んでおけ。理由はもうすこししたらわかるからな」
「？？？」
首をかしげて不思議がる未来。やっぱりこういうのを運命っていうのだろうな。

第１９０話（後書き）

水着の描写が難しい（汗）

キャラのイメージに合った水着を考えるのも難しい（泣）

アンケートは明日の１２：００までで締切とします。

感想とアンケートお待ちしております。

バカテスト第十八問目……？（前書き）

アンケートにご協力ありがとうございました！
アンケート結果は優子：９　忍：４　明久：３　マスター：２　アヤメ：２　工藤：２　秀吉：１　陽菜：１　未来：１　康太：１　雄二：１と、なり

二位と倍以上の差をつけて優子が一位になりました！

バカテスト第十八問目……？

「暇だな……」

放課後の部室にて。今日は特にやることもなく、部室でダラダラと過ごしていた。

「っと、そうだ。暇潰しにこの前西村さんに頼まれた（押し付けられた）のでもやるか。アシスタントに呼ぶのは……優子でいっか」

携帯を取り出して優子に電話する。まだ校内にいるといいんだが…。お、でたでた。

『はい、もしもし。どうしたの雅夜？』

「今部室にいるんだが――――――くそっ！すまん優子！このままじゃ俺は、俺はぁーーーっ！！」

『えっ！？な、なに！？なにがあ（プツッ）』

優子がなにか言ってる途中で電話を切る。その後すぐ電話がかかってきたが、あえて出ないで放置しておいた。

～1分後～

バンッ！！

「雅夜っ！！いったいなにがあったの！」

扉を勢いよく開けて入ってくる優子。早かったな。

「流石は優子。たった一分で来るとは思ってもなかったぞ」

「……はい？」

ちょうど煎れ終えた紅茶をテーブルに置く。むぅ。やっぱりマスターがいれたのにはかなわないな。

「え、えっと……」

「どうした、優子？いつまでもドアのところにいないで、中に入って座わればいいだろ」

「……ねぇ、雅夜。さっきの電話は？」

「ああ、あれか。ノリで言っただけだ。俺はこのとおり平常運転だぞ」

普通に呼ぶのじゃ面白くないからな。つい、やってしまった。後悔する気はない！

「嵌められたってわけね……」

両手を壁についてうなだれる優子。よほど悔しいみたいだ。

「まぁ、優子。そんなところで落ち込んでないでこっちこい。一応、呼んだのにはわけがあるんだから」

「……なによ。つまらない用事だったら殴るわよ」

「……たぶん、大丈夫だ。まずこれを見ろ」

優子に紙束は渡す。俺は読んでて面白かったが、優子にとっては面白いかどうかはわからん。

「えっと、なになに……。『～特別コラム～《鉄拳人生相談》※訂正《浅月人生相談》』。『※注意：アシスタントは浅月が決める。選ばれたアシスタントに拒否権は無し』って、なによこれ」

「いつも通り西村さんに押し付けられた仕事。ちなみに今回選ばれたのは優子だから、書いてあるとおり拒否権はないぞ」

無慈悲に告げる。アシスタントの仕事は基本的に苦労が耐えないから、誰もやりたくないのだ。

「そして二つ目の理由。上から２１枚目を読み上げてみればわかる」

「２１枚目？意外と量が多いのね」

確か全部で５０枚以上あったっけな？なぜか他校の奴らの分まで入っていたし。

「ああ、そうだ。先に言っとくが、どんな内容でも途中で止めたりするなよ。必ず最後まで読み上げること」

「？なんか嫌な予感がするわね……。あ、２１枚目ってこれね」

二年生　K下Y――――

「止めるなっ！！」

「止めさせて！この先は絶対に読みたくないわっ！（ビリビリッ）」

「だぁーっ！破くな！ゴミを散らかすな！」

「ダメよ、ダメ！絶対にダメ！こんなのは破棄よ！（ビリビリビリッ）」

書いてる内容が読めなくなるほど細切れにしていく優子。顔が真っ赤になってるのは怒り、はたまた羞恥のせいか。

「なんで破くんだよ。せっかく面白い内容だったというのに……」
「アタシは悪くないわ。アンタが全部悪いのよ」
「仕方ない。どれか適当に選んで読むから、紙束貸してくれ」
「はい」
優子から一枚少なくなった紙束を受け取り、パラパラと適当に捲る。
さて、と。
「んじゃ、読むぞ」

二年生　K下Y子さんのご相談

『鉄拳先生、今アタシは凄く悩んでいます。アタシには好きな人がいて、いつも積極的にアピールしているのに毎回あしらわれています。勇気を出して一緒に泊まったり、同じ布団で寝たり、抱きついたりしているのに彼――A月M夜はアタシを遠ざけます。彼から嫌われているようではなく、どちらかと言うと好まれていると思うのです。アタシはどうしたらいいでしょうか？』

「なに読んでんのよーっ！？」
「さっき優子が破ったのに書いてあったやつだ。いやー、もしものことを考えて覚えててよかったみたいだな」
「全然よくなわよっ！！」
顔全体が真っ赤に染まる優子。これは如月ハイランドにまだ行ってない頃――――つまり俺がまだ優子に告白してない時のだ。

「さて、アシスタントさん。これについて個人的な意見はありますかな？」
「うぅ……。な、なにもないわよっ！！」
「だったら仕方ない。俺が真面目に回答するか」
「待って、お願いだからその役はアタシにやらせて」
「そうか？」

声を荒らげたかと思ったら、急に泣きそうな顔で迫る優子。やばい、これは面白い。

「…こほんっ。えーっと、アナタの思いすごしだから大丈夫。彼は心の中の迷いとかがあるから決心しきれないだけ。時が来れば必ず応えてくれるはず。だから焦らず待ってるほうがいいわ」
「おおーっ。流石は優等生だな。言い答え方じゃねぇか」

ふふんっ、と満足げに無い胸「殺すわよ」「すみません」をはる優子。羞恥心はどこに消えた。

「で、俺からの答えは――」
「アンタはやらなくていいわよっ！」
「断るっ！――――安心しろ！彼はお前のことが凄く好き…いや、愛してると言っても過言ではない！アピールしたときの対応も彼は心のなかで相当我慢して、耐えているに違いない。きっとそのうち、時期がきたら彼も真剣に対応してくれるはずだ。これが、俺から言えることだ」

俺の嘘偽りない心の気持ちを正直に力強く言う。

そして、静まり返る室内。

「「（……恥ずかしい／／／）」」

俺と優子は同時に思った。

バカテスト第十八問目……？（後書き）

浅月人生相談～Ｐａｒｔ１～了

というわけでいかがでしたか？（苦笑）

期待通りに出来たのなら嬉しいです。

書いてて面白かったのでｔまたやりましょうかね。

今回の件で恥ずかしくなった優子は次回はお休みです（笑）

Ａクラス　霧島　工藤
Ｆクラス　明久　雄二　康太　秀吉　姫路　島田
杜丘高校　アヤメ　忍　千夏　未来　由美　祭　歩　悟志　大和
その他　深風　榊　マスター　陽菜

の中から何人でもいいので選んでもらえたらありがたいです。
（※注意：出てくるのは一位の人だけです。同立一位の場合は先に投票されたほうを優先します）

感想とアンケートお待ちしております。

第１９１話

「マサ君がなに言ってるかわからないんだけど…。わかる、ユミ？」
「なんとなくだけど、理解した…。つまり『リア充爆破しろ』ってことでいいんだよねマサ君…？」
「なにそのたとえ！？なんか怖いんだけど！」
「あ、私もわかったかも♪ようするに『おうおう、見せつけてくれんじゃねぇか』ってことだね♪」
「忍までもそんな物騒なたとえしないでよっ！？」
「ああ、問題ない。二人とも正解だ」
「しかも二人とも正解なの！？ホ、ホントにどういう意味なのーーっ！？」

むしろ、なんでここまでいっても気がつかないんだ？普通気付くだろ。

「（キュピーンッ！）生物兵器二つ反応あり、来るよ…！」
『……すまない、明久。……俺は先に逝く……』
『ムッツリーニ！？ムッツリィニィ――――――――っ！！』

由美が呟くと同時に康太が鼻血を盛大に吹き出して崩れ落ちた。やばいっ！もう来たかっ！！

「未来と由美は島田を生物兵器からガードしろ！忍は二人の対応！俺は康太の救助に廻る！」
「「「了解っ！」」」

三人に指示を出して後ろを振り向かないで康太の元へと急ぐ。

『す、すいません。ちょっと背中の紐を結ぶのに時間がかかっちゃって……』

『いやー、試着しないで買ったのが仇になったな。まさか前計測した時より大きくなってたとは思ってなかったよ。念の為、予備で少し大きめの買っておいて正解だったな』

『うぉっ、デカッ!?くぅーっ、更衣室で揉んどけばよかったぁ！――――――じゃなくて、二人とも遅かったね♪』

『シノ。今、思いっきり本音が聞こえたんだけど?』

『え、えっと……。更衣室で着替えてるときに聞こえた翔子ちゃんの恥ずかし気な声って、まさか……』

『危ない僕っ！（ブスッ）』

『明久っ！セルフ目潰しなんかしてないで康太の止血と輸血手伝えっ！ああ、くそっ！なんで血が止まらねぇんだ!!』

『Ｗｏｒａｕｆ ｆｕｒ ｅｉｎｅｍ Ｓｔａｎｄａｒｄ ｈａｔ Ｇｏｔｔ ｊｅｎｅ ｕｎｔｅｒｓｃｈｉｅｄｅｎ，ｄｉｅ ｈａｂｅｎ，ｕｎｄ ｊｅｎｅ，ｄｉｅ ｎｉｃｈｔ ｈａｂｅｎ！？Ｗａｓ ｗａｒ ｆｕｒ ｍｉｃｈ ｕｎｇｅｎｕｇｅｎｄ！（神様は何を基準に、持つ人と持たざる人を区別してるの!?ウチに何が足りないっていうのよ!）』

『間に合わなかった…！落ち着いてミナちゃん…!!』

『今はとりあえず後ろを向いてて!これ以上（辛い）現実を直視してたら危険だよっ！』

『もうすこししたら清涼剤がくるから…』

『うぅ……。やっと翔子に奪われた視界が回復して――――』
『……雄二は見ちゃダメ（ブスッ）』
『ぐあぁぁっ！またか！？またなのか！？』
『ふわぁ……。お姉さん達のお胸、凄いです……』

プールサイドが一瞬で地獄絵図と化す。忍たちは陽菜さんや千夏で慣れてるから平気だが、やはり文月（こっち）の奴らには耐性がなかったようで、犠牲者が四人も出た。

「ははっ。文月（こっち）の人は皆、面白い反応をするんだね。流石に目潰しは驚いたけど」
「……まぁな。これだから俺は飽きない。あと、無音で背後にまわるな」

いきなり背後から声をかけられて驚きはしたものの、すぐに冷静に対応する。こういう皆の反応も慣れている千夏だが、セルフ目潰しは初めてだったようだ。
すこし離れた場所では明久と姫路の会話が繰り広げられ始めた。

「この水着、マサ君的にはどうだい？」

自信有りげに千夏が見せつけてくる。黒のビキニでボン！キュ！ボン！という言葉を表している抜群のスタイルを惜しげもなく披露。大人っぽい雰囲気の千夏には黒はとても似合っており、凄く色っぽい。姫路には少し負けるが、Eカップ近くある胸が水着からこぼれ落ちん勢いで主張していた。

「『素晴らしい』の一言に尽きるな。千夏に凄く似合ってる。俺に

理性が弱かったら襲ってるところだ」
「ありがと。でも言い過ぎだよ」

実際千夏の水着姿は、俺の好みをどストライクしている。黒とか大人っぽいのが大好きで悪いかよ。決して巨乳好きというわけではないので誤解のないように。

「というより、ユウに聞かれたらまずいよ。マサ君。好きな人がいるのに安易に他の女性を褒めるは、気を付けたほうがいいよ」
「それは大丈夫。人を褒めるときは基本心から思ったことを言ってるだけだからな」
「……それは大丈夫っていえるのかい？」

優子も俺のストライクゾーンど真ん中だからな。まぁ、優子は外見もそうだが内面が凄く俺好みであったりするのだが。

優子とアヤメの水着がどんなのか考えていると、

「う、うぅ……。俺は未だに目が見えないんだが……全員揃ったのか？」

雄二が涙を流しながらこっちに向かって聞いてきた。

「まだだ。後、優子とアヤメ、それと秀吉がまだ来てない」
「ユウとアヤはもうそろそろ来ると思うよ」
「そうか……」

霧島に喰らった目潰しのダメージが残ってるのか、目を開けずにこっちを向いている。少し不気味だな。

「……秀吉は、トランクスタイプ……」

輸血が間に合った康太が寂しそうに呟く。

第１９１話（後書き）

自覚のある生物兵器と自覚のない生物兵器。

ちなみに雅夜の千夏に対する『好き』はあくまで友達としてのです。

感想とアンケートお待ちしております。

第１９２話

「トランクスタイプ、ねぇ……。そういえば、ミクの水着ってトランクスタイプだよね？」

意味深な顔でミクに尋ねる千夏。これは……もしかして気づいたのか？

「うん、そだよ！ビキニにしようか迷ったんだけど、やっぱりこっちの方が私に合ってそうだったからね」

「ミクは動き回るからね。というより私が気になったのはそこじゃないんだけど。相変わらずミクってすこし天然入ってるよね」

「チカまでおかしなこと言うの！？」

「？私『まで』？ってことはマサ君たちも言ったのかな？」

俺達は一斉に頷く。

「うぅ……。なんで皆して私の水着を気にするの……？」

「だから、もうすこししたらわかるって」

「いやな予感がするんだよぉ……。ヒデ君。お願いだから早く来て、私を助けて……」

「「「「……」」」」

もはやなにも言うまい。

「それにしても優子とアヤメは遅いな。もうそろそろ来てもいい頃だと思うんだが？」

「二人とももう来るよ…」

「お、そうか。楽しみだな」

優子はもちろん、アヤメの水着姿に期待で胸が膨らむ。どんな水着がくるのかまったく予測出来ないからな。

「ちなみに皆は二人がどんな水着だったか、知ってるのか？」

「知らないよ。私たちが出るまでずっと、お互いの水着について言い合ってたからね」

「割と真剣に言い争ってた気がするね♪」

「どんな内容だったか聞こえなかったのか？」

「無理だったよ！こっちから何話してるの？って聞くと、二人とも静かになっちゃうんだもん」

それは千夏たちの胸を見て絶望してるだけでなくてか？

「そうこう言ってるうちに、二人がきたよ…」

「ホントか！？」

由美の言葉ですぐさま更衣室のほうに目を向ける。すると……

「ごめんね、遅れちゃって。ちょっとアヤメと話してたら長くなっちゃった」

「すまぬのぅ。ワシらにとっては一大事のことであっての」

優子とアヤメが歩いてきていた。二人の水着は似ており――――――って同じやつじゃないかこれ？色が違うだけで後は同じじゃねぇか。

「もしかして二人で言い合ってたのって、水着のこと？」

水着の感想よりも先に千夏が聞く。確かに気になるところだ。

「ええ。色は違うとはいっても同じ水着だからね。偶然ってホントにあるのね」

「うむ。最初は同じタイプなだけだと思っておったのじゃが、色違いの同じやつとわかったときは驚いたのじゃ」

少し離れた位置で二人の水着を鑑賞する。二人の水着はワンピースタイプでヒラヒラが少し多めのやつで。色は優子が白色、アヤメが紺色である。なんとなくだが、如月ハイランドに行ったときの優子の服にイメージが似ている気がするな。

と、思いながら眺めていると優子とアヤメがこっちに近付いてきた。

「どうかなこの水着、似合ってる…かな？」

「お主からはワシはどう見えておるかの？べ、別に深い意味で言っておるわけではないのじゃぞ！そ、その……ほら、男の意見は貴重じゃろ！」

頬をほんのりと上気させて俺の顔をじっと見てくる。俺の顔を見るということは、二人の身長は俺より低いので自然と上目遣いとなる。

水着＋上気した顔＋上目遣い＝生物兵器

「……（ダラダラ）」

「わわっ！凄いお兄ちゃん、鼻血出てるですよっ！」

「――――ぉお！ティッシュ、ありがとな葉月ちゃん」

ティッシュを受け取り、鼻血を止める。危ない危ない。

「ま、雅夜？大丈夫なの？」
「お主が鼻血を出すところなど初めて見たのじゃが」
「すまんすまん。目の前の光景が凄すぎて危うくのぼせて倒れるところだった」

さっき千夏に言った『褒めるときは基本心から思ったことを言ってるだけ』というのが早くも嘘になりそうだ。この二人のはマジでやばいって。可愛すぎる。

お持ち帰りしたいんだが、問題ないよな？

第１９２話（後書き）

雅夜が壊れた（笑）

水着の描写が難しくて、読んでくださった方たちに上手く伝わるか不安です。

感想とアンケートお待ちしております。

第193話

「どういう意味じゃそれは？」
「えっと、つまり雅夜が鼻血を出したのは……アタシたちの水着を見て興奮したから？」
「まさか。マサヤに限ってそんなことはないじゃろ」
「そうよね。冗談よ冗談、本気で言ったわけじゃないわよ。気にしないで頂戴、雅夜」

優子とアヤメが苦笑して、千夏たちを見ても出してないもんね、と続ける。そりゃな。あいつらはまだ我慢が出来るからな。
……まぁ、その、なんだ。つまりなにが言いたいかと言うと。

「否定出来ないな」
「「……はい？」」
「だから、否定できないって言ってるんだ。お前らの水着姿に欲情――――じゃなくて興奮したから鼻血を出しちまったんだよ。悪かったな。俺だって一応、思春期の男子高校生なんだよ」

途中で言い直したのは気にしない方向で頼む。

「「〜〜〜〜〜！／／／／／／」」

俺が恥ずかしいことを言うと、二人は赤面しながら顔を背ける。くそっ。後ろでニヤニヤしてる奴らがウザイ。

「ってなわけだから、頼むからあまり俺に向けて挑発的な態度を取らないでくれ。お持ち帰りしたくなる」

「マサ君。微妙に犯罪ちっくな発言だよ、それ」
「黙ってろ未来。秀吉ことを考えて秀吉を待ってればいいんだよ」
「？もちろん、そうしてるけど？」

そんな当たり前のことを今更どうしたの？って顔で答えられる。

「いや、普通に返されても困るんだが……。せめて少しは恥ずかしがってもらわないとな」
「ミクのなかでは常識になりかけてる…」
「ねぇ、二人が会ったのってまだ二回目だよね？二回目でこれなの？」
「人って変わるもんなんだね」

溜息を吐きながら思い思いの言葉をだす俺達。ちなみに優子とアヤメはまだトリップ中だ。もうしばらく続きそうだな。

「でもホントに遅いなぁ、ヒデ君。ユミにマサ君、ヒデ君が今どこにいるかわかる？」
「俺はわからん。気配察知はあまり得意じゃないからな。由美はどうだ？」
「んー…、ヒデ君は感じ慣れてないから確かじゃないけど……男子更衣室のほうから誰かが出てきそう…」
「ホント！？」

由美の言葉を聞いてすぐに駆け出す未来。どんだけ早く会いたいんだよ。

「ちなみに。ホントに誰か出てきそうなのか？」
「む。今回は嘘はついてない…。別に、いつもミクを弄って遊んでるわけじゃないんだよ…」

「わかってるって。そんな不機嫌な顔するなよ」

由美も俺と同じで良い意味でも悪い意味でもお人好しだからな。伝えるときはきちんと伝えるってわかってるさ。

「待たせてすまぬの。着替えはさほど手間取らなかったのじゃが、いかんせん校舎からぷプールまでが遠くてな」

「☆●◆▽♪◎×（ううん、そんなに待ってないよ秀吉）」

「落ち着け明久。ここは地球だぞ」

「ヒーデー君っ！！」

「な、なんじ――――――ってミクではないか！突然なにをするのじゃいったい！」

若干嬉しそうに秀吉が言う。やはりというか、予想通りで秀吉の水着はトランクスタイプの水着だ。

「ヒデ君のことずっと待ってたんだよー？少しは嬉しいって思ってもらいたいんだけどね」

「うむ。ワシは嬉しいぞい。ありがとなのじゃ、未来」

「えへへー／／／」

秀吉に未来が抱きついた状態で笑顔で話し続ける二人。こんな仲睦まじい二人を見て、

『（イライライライラ！）』

と、優子や杜丘のやつらが思い始めた。焚きつけた由美ですらいつでも蹴りかかれるように構えている。

そして、雄二たちはというと……

「え、ちょ、ちょっと待って！これってどういうこと！？」
「……情報が足りない……っ！」
「おいおい。まさか秀吉が、か……？」
「……二人のお互いに対する態度は明らか」
「しかも今気づいたけど、二人して同じ水着じゃない！」
「ホントですっ！私、木下君にこういうお相手がいるなんて、今までしりませんでした」

絶賛、驚愕中であった。
それもそうだろうな。校内で一番人気の秀吉にきちんとした恋人（？）がいたら、誰でも驚くよな。しかも今までこのことを誰も気づかなかったんだからな。

「雅夜っ！秀吉のこのこと、知ってたんだよね！？」
「ああ、もちろんだ。ってか、こいつらを呼んだ理由は秀吉に未来を合わせるためだしな」
「……そんな話一度も聞いてない」
「言ってないからな。言うつもりはまったくなかったし」

未来のことを話すってことは、杜丘の奴らのことも話すなきゃいけなくなる。そしてさらには翡翠のことまで説明しなくちゃいけなくなる。
ほら、話す利益がまったくないだろ？

「おい、雅夜。こいつらが付き合い始めたのはいつ頃からなんだ？」
「ん？」

おぉ、そうだったな。こいつらにはそう見えてるんだった。

「付き合ってないぞこいつら。会ったのもまだたったの二回目だぞ」

「「「「「「えええええええええええっ！！？？」」」」」」

第１９３話（後書き）

周りを気にせずイチャイチャし始める二人。

これで一応全員の水着は書い……まだ二人いたっけ（汗）

感想とアンケートお待ちしております。

第１９４話

「ど、どうじゃ……？これで少しは、ワシも男らしく見えるかの……？」
「わっ。お姉ちゃん、とっても可愛いですっ」
「んむ？『可愛い』じゃと？島田妹よ、何を勘違いしておるかしらんが、ワシは見ての通り男じゃぞ？」
「ふぇ？でも、葉月はその水着、女の子用だと思うです」
「な、なんじゃと！？ほ、本当かの未来？」
「うん。ほら、ヒデ君が着てるのって私と同じやつでしょ？これ女物だもん」

こっちの驚いた声が聞こえなかったように会話している三人。

「き、木下……！アンタ、どこまでウチらの邪魔をしたら気が済むの……！」
「木下君は卑怯です……！トランクスだなんて私たちを油断させておいて、最後の最後に裏切るなんて……！」
「変な噂されると困るから、アタシはあんまり女物の格好してもらいたくないのよね」
「まぁ、ここにいるメンバーは信用できるから大丈夫だろ」

今日のことが噂されるなら『秀吉に彼女がいる』ってことの方が廻るだろうからな。

「秀吉！やっぱり秀吉は僕らの気持ちをさっしてくれていたんだね！」
「……永遠の友情と劣情をその水着に誓う」

「ち、違うのじゃ！ワシは本当に男物の水着を買ったはずなのじゃ！きちんと店員にも『普通のトランクスタイプが欲しい』と言ったのじゃぞ！？」

「多分、その店員さんは勘違いしたんでしょうね……。何も知らずに木下君に『トランクスタイプの水着が欲しい』なんて言われたら」

「……そうね。ウチでも間違いなくそんな感じの水着を勧めるわ」

「そ、そうじゃったのか……。ワシも少しはおかしいと思ったのじゃ。なにゆえ男物の水着に上があるのじゃろうかと……」

別に着なくてもよかったと思うんだがな。そこで着てきてしまうのがいけないんだよ。

「姉上に雅夜も、気付いていたなら教えてくれてもよかったじゃろうに……」

「気づいてはいたが変えない方が面白そうだったからな」

「何言ってるのよ。アタシは止めたけど、アンタが『この水着じゃなければ嫌なのじゃ』ってどうしても聞かなかったじゃない」

「でも、いいんじゃない？ヒデ君に似合ってると思うよ！」

「そうだね。可愛いんだし、悔やむこともないよ」

「うんうん♪おかげで未来と同じ水着になったんだし、よかったじゃん♪」

「とりあえず激写…」

「いつも文月学園の生徒はこんな感じなのかの……？」

だいたいこんな感じだな。疲れるが面白くて飽きなくて慣れれば楽しいぞ。

「……雄二。目、大丈夫？」

「ん？ああ。大丈夫だ翔子。だいぶ見えるようになってきた。だが、心配するなら目潰しなんかーーーーー」

「……それなら、もう一度（ブスッ）」
「ま、またなのか！？お前俺になにか恨みでもあるのか！？」
「……ここには雄二に見せられないものが多過ぎる」
水着に着替えただけなのに病院にでもいきそうなやつがいた。

「雅夜ー、オイル塗ってくれない？」
みんなが準備体操を済ませてプールに入っていくなか、優子が日焼け止めのオイルを片手に持って笑いながら寄ってきた。
「ん、いいぞ」
プールに飛び込もうするのを止める。オイルか。プールの時でも使うんだな。てっきり海でしか使わないかと思ってた。
「ふぇ！？嘘嘘っ！冗談で言っただけよ！というより、なんで恥ずかし気もなくすぐに了承できるの！？」
「なんだ嘘か。恥ずかしいのはむしろやってもらってるほうだろ？やる方は恥ずかしいんじゃなくて、戸惑ってるだけだ。あと、オイル塗りの経験はあるしな」
下手に意識しないでやれば恥ずかしくもなんともないからな。

「いや、確かにそうだけど……って、経験あるの!?」
「ん?あぁ、あるぞ。陽菜さんやねーさん、後、優子の後ろで順番待ちしてる奴らとかにな。アヤメにはしたことないが」
「はい?」

優子の後ろでシートなどを敷き始めてスタンバイしてる千夏・忍・由美、それと戸惑いながらもオイルを大事そうに握りしめてるアヤメを指さしながら言う。未来はいないみたいだが、どうやら秀吉と泳ぎに行ったようだ。

「いつのまに!?」
「ユウの次はワシでいいかの?ほれ、水着も同じじゃし、勝手がよいじゃろ」
「マサくーん♪アヤの次、お願いねー♪」
「じゃあその次は私で…」
「私が最後か。うん、いいね」
「俺はなにも言ってないのに、全員にやるってことは確定なんだな」

相変わらず俺には拒否権がないな。別に構わないんだが。

「しかし、優子とアヤメの水着でオイルっているのか?ワンピースだし、塗る場所なんて手足と首くらいしかないだろ?」
「そ、それもそうだけど……。ここまで来らやってもらわなきゃ損じゃない」
「うむ。皆がやってもらっておるのに自分達だけやってもらわないというのは勿体ないからのぅ」

つまり、アレか。ノリなのか。

第１９４話（後書き）

次回はサービスシーン満載！？

の予定だけど……上手く書けるかなぁ？

感想とアンケートお待ちしております。

第１９５話

「シート良し♪パラソル良し♪オイル良し♪」
「枕も設置完了…」
「マサ君。準備終わったよ」
「サンキュ。んじゃ、優子。さっそくうつ伏せになってくれ」
「う、うん……」

あ、でも手足なんだから座ってもらったほうがやりやすいか？まぁ、どうでもいいんだが。

「優子。どんぐらいの強さでやってもらいたいか？」

オイルを手にとり、手のひらで温めながら尋ねる。冷たくてひんやりしている。

「ちなみにマサ君がいう強さってのは『優しく』『強め』『激しく』の三つのうちのどれかのことだからね♪」

優子の顔を覗き込んで忍が言う。そういえば、優子には説明してなかったな。

「激し――――――――優しくでお願い」
「ん、了解」

言い直したことには言及しないでおく。別の意味が込められてそうなので、考えるのが怖いからだ。

「なにか気になることがあったらすぐに言ってくれよ」

「ええ、わかったわ」
「後、忍達。面白そうだからって近くにいるな。気が散る」
「「「「えーっ？」」」」
「えーっ、じゃない。近くで見てた奴はやってやらないからな。終わったら呼んでやるからそれまでプールに入ってろ」

不満気にしている忍たちにピシッと言う。
やるのは別に平気なのだが、やってるところを見られるのは充分恥ずかしいんだ。

「了解、マサ君。自分の番が来るまでプールで適当に遊んでるよ。一応言っておくけど、順番はユウの次がアヤ→シノ→ユミ→私の順番だからね」
「わかった」

千夏がそう言って、文句を垂れてる奴らを引きずってプールの中へと入っていく。グッジョブ千夏。

「さて、始めるとするか」
「よろしくね」

邪魔者が消えたことなのでさっそく始めるとする。
（※以下音声のみでお楽しみ下さい）

「ゆっくりやるぞ。止めて欲しかったらすぐに言えよ」
「うん。……んっ、そこ」
「ここか？（グイッ）」
「はふぅ……。気持ちいい……やっ、あ、あんっ、ちょ、ちょっ

と待っ――――やんっ」
「お？いい反応だな。マッサージになってる気がするが」
「れ、レベル高すぎじゃない雅夜……。なんでそんなに上手く出来るの……？」
「望(のぞ)んで覚えたわけじゃないけどな。初めては陽菜さんに強制的にやらされた時だし」
「よかったぁ…。これが雅夜の趣味だったら、アタシ、雅夜をどうかしてたわ」
「面倒(めんどう)なことを間考えてるな、よ！（グイッ）」
「っ！！？？ひゃっ！い、いきなり強く、んっ、しない、あふっ、でよ、んん――――――っ！」

結果。

「も、もう立てない……」
「すまん、やりすぎた」

ぐったりと横たわる優子。途中から完全にマッサージに移行してしまっていた。しっかりとオイルは塗ったのだが。

「止めてくれるって言ったのに、最後のほうは待ってって言っても待ってくれなかったし」
「いやー、『押すなよ！絶対に押すなよ！』てきなノリかと思ってな」
「あの時にそんなギャグやってる余裕なんてないわよっ！わかるでしょ！」

落ち着けって。……余裕が無いとは思えなかったが。

「だいたい雅夜は、みんなにこんな感じでやるつもりなの？」

「いや、そんなつもりはないぞ。なんとなくノリでやっただけだ」

「ノリって……。アンタ、このままだと大惨事起こしかねないわよ」

「……なんとなく予想ついてる。まぁ、なんとかなると思うがな」

どうせ今考えたって、忍や由美が意図的になにかしでかすんだしどうにもなんないんだがな。

「はぁ……。雅夜のなんとかなるって信用できないのよね。絶対アンタ、成り行きに任せるつもりでしょ」

「ああ！」

「断言しなでよっ！……ったく。もう、いいわ。アヤメ呼んでくる」

「オーケー。頼んだ」

溜息を吐きながらプールへと向かう優子。

こんな調子であと四人かぁ……、大丈夫だよな？

「っと、そうだ。ヒント：縦読――――」

「それ以上言ったら殺すわよ」
「怖っ！？」

一瞬で背後に回られた。なんで女ってこう、偶にありえない動きするんだろうな。

第１９５話（後書き）

優子のターンだけで終わってしまった（笑）

次はアヤメと忍の二人分かけたら行幸ですかね（苦笑）

感想とアンケートお待ちしております。

第１９６話（前書き）

更新遅れてもう訳ございません！！

第１９６話

優子がプールに入ってきて、少しするとアヤメが出てきた。

「マサヤ。ユウになにかしたのかの？やけに気の抜けたような顔をしておったのじゃが」

「さぁ？ただオイルを塗ってやっただけなんだがな」

「なんでじゃろうな。マサヤが嘘をついてるように思えてしまうのぅ」

「ははっ。んなわけねぇよ」

渇いた笑い声をあげる。感が鋭いなアヤメ。

「まぁそのことはおいといて、とりあえずここに座ってくれ。オイル、塗るんだろ」

「う、うむ。そうじゃの」

頷き、てくてくとシートのところへ近づいて「ふにゅー」と言いながらうつぶせになる。

行動がいちいち小動物チックで可愛らしいな。

「塗る箇所は手足と首元だけでいいんだよな？」

オイルを暖めながら一応アヤメに確認を取る。背中が露出してない水着――――ワンピースタイプの水着なので背中には塗らなくていいんだよな。

「というより他に場所がない――――まさか水着のなかまで塗るつ

もりじゃったのかっ!?だ、ダメじゃぞ!流石にそれは無理があるのじゃ!」

「んなわけねぇよ!」

「はっ!も、もしや、先程ユウが気の抜けたようは顔をしておったのはマサヤが――――」

「その先は言わせねぇ!!」

アヤメの言葉を途中で遮る。……こいつって純粋な設定もとい性格だったよな?まったくそうは思えないんだが。

「ったく。くだらないこと言ってないで始めるぞ」

「じゃ、じゃが、お主の性格ならやってもおかしくぅうっ!」

触るとビクッとアヤメの身体が震える。ん?まだ少し冷たかったか。

「すまんすまん。もうちょい暖めたほうがよさそうだな」

「ち、違うぞマサヤ。今のは冷たかったから驚いたのではなく……その……くすぐったかったからなのじゃ(ボソッ)」

……。

「……(ピタッ)」

「ひゃうっ!」

「……(ヌリヌリ)」

「んんっ、ぁん、はぁっ」

「……(グイグイ)」

「あうっ、やっ、んにゅ」
「……（グッ！）」
「――っ！ふあぁ――――――っ！」
※注意；足にオイルを塗るついでにマッサージをしてるだけです。

「ってんなわけあるかーっ！絶対、わざとやってるだろアヤメ！！」
「ん…、なんじゃ、マサヤ……、なんの、ことかの？」
息を絶え絶えに呟くアヤメ。この様子だともしかして……わざとじゃない、のか？

「それよりも、足は、終わった、ようじゃ、の」
「あ、ああ…。次は腕のほうだな」
「うむ。よろしく、頼むぞい」
ちらっと見えたアヤメの顔はほんのりと赤く染まっていた。

「……はぁ（もう、どうとでもなってくれ）」
充分に暖かくなったオイルをアヤメの腕に塗っていく。触れたとき、今度はさっきのような『ぅうっ！』という声でなく『んっ』という声を出した。
「腕は足より大丈夫みたいだな」

「……うむ」
「そうか。そいつはよかった」
「？なんでそう思うのじゃ？」
「そりゃ、お前。アレだけ凄い声ださせてるところを誰かに見られたりしてたら大変なことになるかもＳしれないんだぞ」

幸い康太は鼻血で輸血中だし、忍たちはこっちに寄ってこないようにしてるし、秀吉や雄二に明久は女子の監視があるし、皆こっちにこれないからな。

「そこまで凄い声じゃったか？自然と溢れてきたものじゃから、ワシにはよくわからんのじゃが」
「まぁ、アヤメは気にしなくて平気だ、っと。よし、終わったぞ」

話してる最中に塗る箇所全てを塗り終えた。腕はアヤメが変な声を出さなかったから早く終わったな。

「む、もう終わったのじゃか。あっという間じゃったのぅ」
「元からそんなに時間をかけるものじゃないからな」
「それもそうじゃの。ありがとうなのじゃマサヤ」
「礼はいらねぇよ。こっちも充分楽しませてもらったことだし」
「楽しむ……？」

…あ、やっべ。

「お主……ワシの足にオイルを塗っておったとき、もしやワシの反応を楽しんでおったわけであるまいな？」
「な、なんのことかな？」

べ、別に途中からアヤメの反応が面白くて夢中になってたわけはな

いからな！

「とぼけるでない！一発殴らせるのじゃ！！」

「まぁ、待て。落ち着いて俺の話を――――――その鉄アレイをどこから出した！？」

第１９６話（後書き）

さて、そろそろＲ－１５設定でもしますかね（笑）

結局アヤメの番だけで終わってしまった（汗）

感想とアンケートお待ちしております。

第197話

「主役は遅れて登場するんだよ♪」
「お前が主役なわけないからな、忍」
「…その発想はなかったよ」
「なかったのか!?」

アヤメと交代でプールから出てきてさっそく馬鹿なことを言う忍。
主役は俺だ――――――よな?俺でいいんだよな?

「ねぇ、マサ君。アヤになにか変なことした?怒ってるみたいだったけど」
「そこにあるものが答えだな」
「……鉄アレイ?なんだ、マサ君を殴っただけか♪」

それはそれで問題なんだけどな。

「それと、妙にお肌がツヤツヤしてたような気がするんだけど、そっちのほうでもなにかしでかしたの?」
「いや、なにも。手足と首元にオイル塗るついでに軽くマッサージしただけだ」
「なるほどね。マサ君のヌルヌルした手で身体中をまさぐられたら、ああなってもおかしくないね♪」
「その表現は止めろ!」

手をワキワキと動かしながら言う忍。それだと俺がアヤメにエロいことをしたみたいじゃねぇかよ!

「ったく……。ほら、さっさとうつぶせになれ。とっとと終わらせるぞ」
「りょーかいっ♪」
敬礼のポーズをとってシートへと向かう忍。
「……はっ!?」
そして途中でなにかを思いついたかのよう動きを止める。ん?
「ってことはもしかして、私もいまからアヤと同じようにマサ君のエロエロな手で身体中をまさぐられるの!?」
くだらないことを考えてた。
「はいはい、黙って――」
「興奮しちゃう♪」
「変態だぁーっ!ここに変態がいるぞーっ!」
恍惚とした顔になって身体をくねらせる忍。……チェンジで。

「気を取り直して……」
「お願いね♪」
シュルシュルと上の水着を外して横に置き、うつ伏せになる忍。
……ま、まぁ、前紐タイプだからな。仕方ないな。プールのいたるところから色々な感情の視線を感じるが、気にしないでおこう。

「一応言っておくが、いきなり起き上がったり寝返りうったりするなよ」
「善処するよ♪」
「俺の経験上、善処するってやるきのないやつの台詞なんだが……」
「……」
「そこで無言になるなっ！」

ったく……。忍なら本気でやりそうだから困るんだよな。

「変な動きするなよ（ヌリヌリ）」
「ん、大丈夫だよ～♪」
「力加減はこれくらいでいいよな？（ヌリグイヌリグイ）」
「そうそう♪……ん、はぁ～……いやされる～」
「…ここはこってるな。少し強めにやるぞ（グリグリ）」
「んっ～～、はぁ、はぁっ、気持ち、いいよ、ん、マサ君」
「次は腕だ。横に伸ばせ」
「はい♪――――んにゅ、く、くすぐったいよ～」
「我慢しろ。ほら次は逆」
「う、うん――――ま、待って！わ、脇はホントにダ、ダメな、にゃの～っ！ふなぁっ――――！」
「うおっ！？」

突然忍が俺の手から逃げるように腕を振る。そ、そんなにダメだったのか？――――って、やべぇ！！

「きゃっ！」

勢いよく腕を振ってしまい、身体の重心がずれ、そのまま――――――仰向けになってしまう。

上半身裸の忍が仰向けになる――――――つまり、Eカップ近くある忍の胸が惜しげもなく露に。

っ！！！！

『……っ！！！！！！！！（ブシャアアアアアアアアアア！！！！）』

『……浮気は禁止』

『見ちゃダメですっ明久君っ！！！』

『なにやってるのよ、アキィ！！！』

『『目が、目がぁあああああああああああああっ！！！！！！』』

『ヒデ君は見てないよね？ね？』

『う、うむ。もちろんじゃなのじゃ』

『『またか……』』

『ま、雅夜ぁあああああああああ！！！！！』

『お主はぁあああああああああ！！！！！』

プール全体から響きわたる悲鳴と怒声。そして、

「いやぁあああああああああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！！！」

甲高い悲鳴をあげて、目を赤くして思いっきり俺をぶん殴る忍。

「やっぱり、こういうオチかぁ――――――っ！！！――――――――ごふっ！」

フェンスに磔（はりつけ）にされるのなんて初めての経験だ。

第１９７話（後書き）

……バカノリって前からこんなのだっけ？
いや、プール回だから仕方ないか（苦笑）

感想とアンケートお待ちしております。

第１９８話

フェンスに磔にされたあと、優子とアヤメのクロスアタック（鉄アレイで思いっきりぶん殴り、地面に落ちたところを二人同時に逆十字固め）を受けながら忍の「うわーんっ！こうなったらお嫁にいってやるー♪」という無駄に嬉しそうに新手の脅迫をされた。まぁ、その言葉を忍が言った瞬間、十字固め威力があがったのは言うまでもないだろうが。

「死ぬレベルだぞ、これ……」

身体中が痛い。特にフェンスに磔にされたときについた痕が。鉄アレイと十字固めのほうは慣れてるからそこまで問題はない。

「平然と動いていてなに言ってるの…？」

「常人だったら死ぬってことだ。俺が異常なだけだよ」

「それもそれでどうかと思うけど…」

溜息をはく由美。お前も充分常人離れしてると思うがな。

「そういえばお前と千夏はそこまで驚いてなかったよな。どうしてだ？」

「……なに言ってるのマサ君。それが、去年も似たようなことやった人がいう台詞…？」

「お、そうだったな。そんなこともあったっけか」

あんまり思い出したくないことだから、思い出すのに時間がかかった。去年の海で起きた出来事のほとんどがカオスだったからな。

「……そんなこと？被害にあった本人を前にしてよくそんなことを言えるな。いい覚悟じゃねぇか」
「ま、待て由美！出てる、鬼神が出てるって！」
「――――っとと。……ふぅ。危ない危ない…」
よかった。ぎりぎりセーフみたいだな。ぎりぎりで。流石にこんな時に由美が鬼人モードに入るのは色々と危険だからな。
「だけど今の言葉を撤回すようとは思ってない…」
「わかってるって。すまなかったな」
「ん…」
素直に謝ると由美はそれで納得したのか、シートのほうへと向かう。ああ、次は由美の番だったな。
「去年と同じことしたら……わかってるよね…？」
「さっき以上に酷いことになるのは確定してるな。一日に何度も吹き飛ぶ趣味はない。というか去年のは俺が悪かったとは言え、お前にも原因があっただろ」
「……そんなことはない…」
たっぷりと間を開けて顔を逸らしながら言う由美。その仕草はむしろ肯定してる気がする。
「忘れたとは言わせねぇぞ。お前があんなことを――――」
「別に私は『ローションプレイとかエロいね…』なんて言った覚えはない」
顔の前で手をぶんぶんと振る由美。まるで康太が自分はエロくない

と言ってるときみたいだな。

「……って、一字一句間違えずに覚えてるじゃねぇかよ！！」

真顔で嘘ついてんじゃねぇよ！あやうくスルーするところだったじゃねぇか。

「その言葉のせいで俺は悪ノリしちまったんだからなっ！」

「なんで私、そんなこと言っちゃたんだろう…？覚えてるマサ君…？」

「俺の言葉はスルーですか。……というか知らん。ノリで言ったんじゃないか？」

「だよね…。私もそれ以外理由が思い浮かばない…」

確か脈絡なく突然言われたんだっけな。言われた時凄く驚いた記憶がある。しかし、ノリかぁ……。

「……」

「……」

無言でお互いの顔を見合う。もしかすると、こいつは……。

「「ノリだから仕方ないか！」」

やっぱり同じことを考えてたな。流石心の友と書いてソオルメイトと読める俺達だ！

「でも、塗り方が相変わらずエロいよね…」
「そんなことないとおもうがなー」

気を取り直して由美にオイル塗りを始める。普通に塗ってるだけなんだけどな。

「……無意識でこれなの…？」
「ああ。そうだが」
「あのねぇ…。敏感なところを重点的に攻めてるくせになにを言ってる、んあぁ…」
「敏感なところじゃなくて凝りやすいところなんだがな」

足だったら内ももや足の裏、腕だったらわきや手のひら、胴体だったら首元や横脇腹。俺自身が体感した疲れがたまりやすい場所なんだけどな。

「それが、んっ、ダメなんだ、ふぁ、よ…。んにゅう、効く～」
「なんだかんだ言いながら気持ちよくなってんじゃねぇかよ」

オイルじゃなくて、マッサージのほうが主になってるな。

第１９８話（後書き）

由美の鬼人モードにはご注意を（苦笑）

去年になにが起きたかは企業秘密ですので（笑）

感想とアンケートお待ちしております。

第１９９話

「チカにはオイタしちゃだめだよ…」

オイルを塗られ終わった由美はプールに戻る途中でこっちを振り返って釘を指してきた。

オイタって、お前な……。

「善処するつもりだ」

「……『一応やらないつもりだけど、状況によってはやるかもしれない』ってこと…？」

「ああ！」

「力強く即答!?」

お約束ってのもあるし、否定は出来ないからな。べ、別に千夏だから期待してるってわけじゃないんだからなっ！

「うぅ……。頑張ってね、チカ…」

「……ここで千夏の応援をするお前もどうだと思うんだが」

「マサ君には死地に赴く友人を止められないという気持ちがわからないの…？」

例えが酷くないか？……いや、まぁ、わかりやすい例えではあるんだが。優子ならともかく、雄二や明久だったら笑って逝かせるだけどな……。

「こんなに腹が捻られるほど痛い気持ちがホントにわからないの…？」

「そうだな……って、それ笑ってるじゃねぇかよ!?」
「ハプニング期待してるよー♪」

と、笑顔でプールへと向かっていく由美。プールに入る直前でスピードを上げ、思いっきり飛び込む!

『シノ、覚悟ーっ!』
『え、なにユ――――きゃあっ!!』
『プールは飛び蹴り禁止よー』
『禁止なのは飛び込みじゃないのかのぅ』
『っていうかユミのテンション高くない!?』

ドォーン!という音とともに水柱を高くあがる。その後、「わーはっはっはっはーっ!」と高笑いが聞こえたのは気のせいだろうか?

「……もしかして、由美が一番楽しんでるんじゃないのか?」
「だろうね。あそこまで楽しそうにしてるユミは久しぶりだ」

独り言を吐いたつもりだったのだが、返事がくる。ったく。

「相変わらずいきなり出てくるのな。気配を消しての登場しかしないつもりか?」
「別にしようと思ってしてるわけじゃないよ。ただ自然とそうなっちゃうんだ」
「それがおかしいんだよ」

まぁ、千夏だから仕方ないか。

「しかし、どういうつもりだいマサ君。皆がみんな、オイルを塗ってもらってきたら変な状態になってるんだけどね」

「さぁ？俺にはわからん」

しらばっくれる。話しても大丈夫なんだが、実際意識してやってるわけでもないしな。

「なるほどね。シノとユミ相手なら別にいいんだけど、アヤとユウにはもうちょい抑えたほうがいいよ。あの二人は慣れてないんだからさ」

「なにも言ってないのにこの返事。ちょっと待てやコラ」

「なにかな？別に覗いてたわけじゃないよ」

「俺の考えを先読みしすぎだ。なにも言えなくなるだろ」

クスクスと笑いながら言う千夏。こいつも充分楽しんでやがるな。

「それが私の性分なんだよ。マサ君もわかってるだろ？」

「そう言われるとなにも言い返せないから困る」

「だろうね。もちろんわかっててやってるよ」

「ですよねー」

千夏につられて俺も笑う。苦笑だけどな。

「あ、そうだ。千夏に言っとかなければいけないことがあったんだったな」

「ん？私に言わなければならないこと？」

「ああ」

「ふ～ん……。なんだい？」

半分驚き、半分興味ありの顔で聞き返してくる千夏。俺が言うことはただ一つ。

「……もう……ネタがないんだ……」

「……マジで？」

口をポカーンとあけて言葉を漏らす千夏。俺はそれに対して真剣な顔で答える。

「マジもマジ。大マジ」

「……嘘だと言ってくれよ、マサ君」

「残念ながらこれが真実で現実だ」

地面に膝と両腕をつけ項垂れる。ホントにすまなかったと思ってる。

その後千夏に普通にオイルを塗ってプールへと入っていった。

ここまで落ち込んだ千夏を見たのは久しぶりだな。

第１９９話（後書き）

こんなオチですみません（汗）

千夏のサービスシーンを期待していた方々、申し訳ございませんでした。

感想とアンケートお待ちしております。

第２００話

「……ふぅ（プカ～）」

オイルを皆に塗り終わり、特にやることがなくなったのでプールにて漂っていた。身体の力を抜いてプールのなかで仰向けになってさきほどまでの疲れを取る。

「心が癒される……」

身体には心地よいそよ風。耳を澄ませばザワザワと鳴る木々の音。ほんのりと漂うプールの匂い。そしてなにより、太陽から降り注ぐ――――――水柱。……は？

「ちょ、ま（ドボーンッ！！）」

慌てて逃げようとするが間に合わず、降ってくる水柱に直撃して水中へと叩き込まれる。

その威力は強く、例えるなら戦車砲クラスの攻撃だ。か、身体中が痛い……っ！だ、誰だ！こんなことをするやつ――――――アイツだな！

「（ガバッ！！）――――よくもやってくれやがったな由美！」

水中から這出て怒鳴り声を上げる。

こんなことが出来るやつなんて由美ぐらいしかいねぇ！くそっ、アイツはどこに――――

『チッ…。あの一撃をよく耐えられたね…。流石はマサ君…』
『総員撤退！此処にいたら巻き込まれるよ！』
『『『ラジャー！』』』

プールの端の方にいる由美達の声が聞こえる。
って、遠っ！？こんなに離れててさっきの威力なのかよ！？

『だけど、戦いは始まったばかり…（ドンッ！ドンッ！ドンッ！）』
「今度は三連撃！？というか戦ってる覚えはないんだ、がっ！（ドン！ドン！ドン！）」

由美の出した水柱と同じ数の水柱で相殺していく。力は……こっちが劣勢！？馬鹿な。由美に力負けしてるだと！？

「嘘だろオイ！いくら由美でも力は俺のほうが上のはずなのに…っ！」

由美の強みは『怒涛のラッシュ』。どちらかというと雄二みたいな戦闘スタイルで動き回りながら攻撃するのが主のはずだ。
ちなみに俺は戦闘スタイルは『追い詰めてからの一撃必殺』。相手の行動を読んで攻撃で体制を崩したところに一撃を決めるタイプだ。
だというのに、これはなんだ？立ち止まってる状態での撃ち合いなのに由美のほうが威力が高い！

『ほらほら、どうしたのマサ君…？（ドドドドドドッ！！！！！）』
「く、くそったれ……っ（ドドドドドッ！！！！！）」

アイツがこんなに元から強かったわけはないんだ！せめて相手の力の源――――やるきの元さえ分かれば…！

「なんでそこまで必死なんだよ由美！お前らしくねぇぞ！」
『っ！！――――――うるさい…っ！マサ君に私の気持ちなんてわかるわけないんだ…！』
「さらに威力があがった！？さ、流石にこれ以上は持たねぇぞ……っ！」

今にも泣き出しそうな顔をして水弾を打ち続ける由美。こいつは……もしやっ！！

『頑張ってねユミ～♪このままマサ君に勝っちゃうんだ♪』
『……たまに。たまにだけどさ。こいつらって本当に人間なのか疑問に思うときがあるのよね』
『うむ。ワシも同感じゃの』
『そうじゃの。マスター曰く《そのうち嫌でもなれる》とのことじゃがな』

こっちは傍観者達か。こいつらじゃない！
というか秀吉とアヤメは文字だけだと区別がつかないな。（上秀吉下アヤメ）

『ユミ、もうすこしで勝てるよ。頑張って。マサ君に勝ったらマサ君の奢りで翡翠でお菓子のフルコースなんだからさ』
『そうだよ頑張って！マサ君に負けたらユミがマサ君にフルコース奢らないといけないんだよっ！』
『わかってる…！』

やっぱりかぁーっ！そりゃ確かにこんなに必死になるわけだなっ！
ちなみに翡翠のお菓子のフルコースとは、いうなれば食べ放題のことだ。好きなやつを好きなだけ食べられて、しかもお持ち帰りまで

出来てしまうのだ。相当高い（６５００円）

「というか俺もやらなきゃまずいよ、なっ！！！」

『威力が上がってきた…！もしかして気づかれたか…？』

さらに力を込めていく。こうなった以上俺も負けられない。なにがなんでも勝ってやる！

「負けられねぇもんがあるんだよ、男にはなぁっ！！！」

『その信念をブッ壊す…！！！』

空中で炸裂して花を咲かせる水弾の花火。太陽の光と反射して見てる分にはさぞかし良い光景なんだろうな。

お互いにラストパートをかけていく。……そろそろ自重しないとプールの水嵩が酷いことになりそうだらな。

「『（次だ。次で決めてやるっ！）』」

だんだんと水弾の数が減っていく。由美の同じ考えか…？思いついたのもほぼ同タイミングってところか。

そして、空中に水弾が飛び交らなくなると。

「『死に――――――』」

深く息を吸い込んで、お互いに最後の一撃を撃つモーションに入る。

周りの水を一点に集中させるようにイメージし、

『雅夜たちの争いが弱まってきた！これなら雄二から逃げられる。今のうち――――』
『あ、こら明久！待ちやが――――――』

それを撃ち抜く！！！！

「『さらせーーーっ！！！』」

さきほどまでと比べ物にならないほどの威力の水弾がまっすぐと――――俺達の間をわたろうとしていた明久と雄二に――――――向かっていった。

『『……へ？』』
「『あ』」

打ち抜いた水弾をいまさら止めるすべは無く。

ドォーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーンッ！！
！！！！！！！！！！

『『ぎゃあああああああああああああああああああっ！！！！！！！！！！』』

……

……

……

雅夜ＶＳ由美

結果…引き分け。両者奢りなし。被害者二名。

第２００話（後書き）

どんなバトル漫画だよ（汗）

明久と雄二は水中鬼をよっている途中でした（笑）

次回は『二百話記念』を書くつもりです。

前回の百話記念とは違い今回はバカノリＩＦの予告編（？）みたいなものです。

感想とアンケートお待ちしております。

祝２００話記念！（前書き）

最初はノリで始めたこの『バカノリ』！
まさかここまで来るとは思ってもいなかった（苦笑）

今回は前から言ってたとおり番宣的なものをやっちゃいます（笑）

祝２００話記念！

時は四年前――――俺こと浅月雅夜が中学二年生のとき。全てはここから始まったと言っても過言ではないだろう。

☆

「はぁ？放火犯を探すのを手伝わせてくれだって？」
「ああ」
場所は警察署の休憩所。俺はちょっとした偉い立場である知り合いの榊さんに頼み込んでいた。
「なんだっていったいそんなことを。まぁ、お前さんがその事件に関わってることはわかってるんだが……」
困ったように頬を掻く榊さん。民間人である俺に警察の手伝いを『被害者の一人』という理由だけでやらせるわけにもいかないからだ

ろう。

「んー。マサ坊は結構頼りになるから俺は別に構わないんだが……。マサ坊を知らない奴に何言われるかわからねぇからなぁ。ちと難しいな」

「なにか納得させやれるものがあればいけるってことでいいのか？」

「まぁな。ここの部署は気さくな奴らが多いし、実はというと前例があるからな」

前例だと？

☆

そのきっかけは小さな出会い、そして揺るぎない決意。

☆

時は少し立ち、場所は町外れの廃ビル。

『ふざけるんじゃねぇ！オメェら自分がなに言ってんのかわかってんのかっ！？』

『こちとらもう我慢の限界なんだよっ！』

扉の向こうから話声――――――いや、怒鳴り声が聞こえる。よかった。今日は集会があるって情報は間違ってなかったんだな。

『なるほどな。一応確認はとっておこう。――――――――――お前ら全員とも同じ気持ちなのか？』

『『『『っ！！ったいめぇだっ！！』』』』

怒鳴り声は続く。その音に隠すようにドアをそっと開け気配を消してなかに入っていく。

『そうか……。薄々思ってはいたが、俺もこの程度だったってことか』

……ん？一人を全員で囲ってる？

妙に殺伐としてるな。俺にとってはどうでもいいんだが。

『ここまで、か……』

『ああ、そうさ！オメェの命もここまでだっ！！！』

『違げぇよ。ここまでなのは――――――オメェらの人生だ』

おおっ！ますますやばくなってきてるな。こりゃ早いとこ要件を終わらせたほうがよさそうだな。

『手加減できる自信はねぇ――――』
「取り込み中すまないな」
「っ!?だ、誰だテメェ!?いきなり目の前に現れやがって!!」
リーダー格と思しき一人に話しかける。周りで取り囲んでいた連中は……ふむ。こいつが噂の『鬼人』だな。
「少し聞きたいことがあってな。『青柳竜平』って野郎はどこにいる?」
「こっちの質問がさきだ!!何もんだオメェ!!」
「っとと。いきなり鉄パイプで殴りつけるな、危ないだろ」
「受け止めた!?」
というかこっちが先に質問したんだがな。
「お前さんと同じ中学二年生だよ。ちょっと変わったな。で、こっちの質問の答えはどうなんだ?」
「あ、ああ。リュウなら今日はここにいねぇ。どこにいるかも俺はしらねぇぞ」
「チッ。こいつは予想外だな……」
此処に来てると思ってたんだがな。あてがハズレたか。だったらいつまでも此処に残ってても意味ないな。さっさと次をさがすか。
「待て」
立ち去ろうとすると肩を掴まれる。ったくなんなんだよいったい。
「……もしかしてお前『悪鬼羅刹』――――――いや『夜叉』のほう

か？」
「それがどうしたってんだ」
「手伝え」
「はぁ？」

後ろを振り向くとそこにはニタァと笑みを浮かべる鬼人がいた。

☆

しかしその思いは真っ直ぐ進まず、寄り道をしてしまう。

☆

「――――――てめぇら。そこでなにしてやがる」

傷だらけの身体を引きずって目的地へとたどり着く。

「なんだよガキンチョ。今いいところだからあっち行ってやがれ」
「いやぁっ！助けてぇっ！！」

「ああ、くそっ。抵抗するんじゃねぇっ！」

そこには複数の男に取り押さえられる女の姿があった。誘拐か強姦か、はたまたそれ以外なのかわからない。助けてと言われたら助けるのが男ってもんだ。

だが、助けるまえに一つ確認を取らねぇとな。

「『青柳竜平』ってのはお前であってるか？」

「あ？なんで俺の名前をしってやがる」

見覚えのある一人の男に話しかけると燻しかけな顔をしながら反応する。どうやら間違えないみたいだな。

「――――――なら手加減はいらねぇってことだよな！！」

☆

けれども、寄り道をしてもきちんと目的ははたされる。

☆

「へぇ～『最近の喧嘩は格が違う！？不良８０人が一度に入院』だってさ。事があったの近所みたいだよ」
「喧嘩の理由は仲間割れ……。立っていられたのは誰もいない、かぁ」
新聞の見出しを読み上げながらニヤニヤとした二人が顔でこっちを見てくる。
「そうか。そいつは凄いな」
無視してフロアの掃除を続ける。そんなもんどうでもいいから少しはこっちを手伝えってんだ。
「そういえばマサ君は昨晩どこでなにをしてたのかな～？」
「夜中に傷だらけで帰ってきたけど」
「俺がそれをやったと思ってんのか？よく見てみろ。俺の身体に傷一つついてないだろ」
「え！？なんで！？昨晩はついてたよね！？」
「ホントだ！傷が全部治ってる！？」

☆

そんな少し変わったボーイミーツガールズから始まるお話。

☆

『バカとノリと召喚獣ＩＦ～ちょっと変わった翡翠の日常～』（仮題）

「初めまして。……いや、久しぶりかな」

「おいおい……。なんでお前が此処にいるんだよ……っ！」

祝２００話記念！（後書き）

という感じで予告編でした！！

今のところいつ書くかは未定です（笑）

バカノリが一段落ついたら頑張ってみようかな。

感想とアンケートお待ちしております。

第２０１話

あの後、水死体のように水面に浮かんだ明久と雄二をプールサイドまで持っていき適当に放り投げた。そのうち復活するだろう。

「無駄に疲れた……」

肩を回すとコキコキと音が鳴る。ちとやりすぎたようだな。

「すこし休憩とでもしとくか。……ん？」

腰を降ろそうとしたとき、霧島がこっちに近付いてきた。なんだか困ってるみたいだな。

「……浅月。ちょっといい？」

「ああ、大丈夫だぞ。なにかあったのか？」

「……助けて。お願い」

「へ？」

霧島は告げると俺の後ろへと隠れる。どうやら実際に困ってるようだが……いったいなんなんだ？

「なにから助けろってんだよ霧島」

「……あれ」

「えーっと……忍、であってるか？」

「……うん」

「……もしかしてまたやられてるのか」

「……だから逃げてきた」

プールのなかでキョロキョロとしている忍を見ながら霧島と会話する。忍と霧島という組み合わせで思いついたのは着替えて来た時のアレだ。

『おっかしいな～……。どこいっちゃったんだろショウちゃん。おーい、ショウちゃーん。出ておいでー♪悪いようにはしないからー♪』

耳を澄ませてみれば案の定忍が霧島を探していた。悪いようにしないって台詞は信用できないな。

「しかし、なぜ俺のところに逃げてきたんだ？千夏にでも頼んだほうが確実だけどな」

「……まだそれほど親しくないから」

「あー、そうだったな。確かにそれだと難しいか」

明久と秀吉ならともかくほかの奴らは今日が初対面みたいなもんだからな。

やっぱり今日いきなりあいつらを誘ったのには無理があったか？

「……向こうはそうは思ってないみたいだけど」

「ああ。お前と雄二のことは既に知ってるからな。如月ハイランドの件で『あ、ショウちゃん見っけ！目標を捕獲する♪』逃げろ霧島ぁーっ！」

忍は俺の後ろに隠れていた霧島を発見したら勢いよく水面から飛び出しこっちに向かってもの凄いスピードで駆け寄ってくる。

「止まれ忍！お前のやろうとしてることは、いくら女子同士だとい

ってもダメなことなんだ！」

忍の前に立ちふさがる。女子に助けてと言われたら助けるのが男の役目だからな。それにこのままだと霧島が色々と危なくなる。

「マサ君に言われたくないよ！？さっきのことを忘れたとは言わせないからね」

「む。それはそうだが「隙あり♪」あ！」

呆気なく抜かれる。か、カッコわりぃ……。

『……や、やめ』

『ふっふっふっ♪もう逃がさないよ～♪』

『……誰か、助けて……っ』

『残念♪頼りになる坂本君とマサ君はもう無理だよ～♪ショウちゃんは私に揉まれるという未来しかないんだから♪』

プールのなかに逃げ込んだ霧島はすぐに捕まり、忍に後ろから胸を掴まれてしまった。

『……んっ、あっ』

『ん～、やっぱり揉み心地抜群だね♪大きすぎず小さすぎなくて、手に丁度収まるところがなんとも……（もみもみ）』

忍の親父っぽい台詞と霧島の色っぽい声が聞こえ始める。すまん、霧島。あとは頑張ってくれ。

☆

「それで二人を向こうに放置してきたってわけ？なにやってんのよアンタ」
「ショウコが危ない目にあってるのに見捨てたとは、それこそ情けないじゃろ」
「最後まできちんと助けなさいよね」
「返す言葉もない」

暇になったので優子・アヤメ・島田の三人の元にいったら、第一声から罵倒された。あんな雰囲気に入ったら、そう簡単に近づけねぇんだからしょうがないだろ。すこしはこっちの気持ちも考えてから言ってくれ貧乳ズの三人。

「ったく（ガッ、ゴキュ、ガシッ、ガボガボガボ）」

溜息を吐きながら頭を殴られ、手足の関節を外され、首を掴まれて水中へと押さえつけられる。

……へ？

ちょっと待て！い、いったい今、なにが起こったんだ！？

『ねぇ、雅夜――――』
『――――お主、今――――』
『――――なにを思ったの？』

……三人の表情は底に頭を抑えられていても簡単にわかる。

怒ってる顔なんか生易しい。無表情のはずだ。

俺、死ぬのかな？

第２０１話（後書き）

どうして雅夜って自ら地雷を踏み抜くんだろう（笑）

感想とアンケートお待ちしております。

第２０２話

「身体が動かねぇ……」

危うく殺されかけた。臨死体験をこうも簡単にさせられるなんて、どんだけ殺生力が高いんだよあの三人。

息の合ったコンビネーションだったし、流石は貧乳ズ――――――いや、これ以上は止めとこう。また沈められる。遅い気がすることもないけど。

「しかし、あいつらは流石だな。もう馴染んでやってるな」

フェンスに寄りかかりながらプールを見渡す。未来と秀吉だけならず、千夏は姫路、アヤメは島田、忍は霧島、由美は葉月ちゃんと楽しく騒いでいる。明久と雄二はまだ寝ていて、康太は血液補充中。優子は……

「皆親しみやすいからね。アタシも初対面の時でも結構しゃべったっけ」

俺の隣で座っている。普段はこうして騒がないため、身体が慣れてないから疲れたらしい。

「そういえば雅夜はあの子達と初めて会った時っていつなの？長い付き合いとか前言ってた気がするけど」

「中二の時。優子と出会って少し後だな。アヤメだけは清涼祭のときだが」

「へ～。皆アタシより後だったんだ」

「むしろ優子に出会ったから、あいつらに出会うきっかけが作られたんだよ」

優子と出会わなかったらあいつらともそこまで仲良くなってなかっただろうな。普通に翡翠の店員と客という感じの間柄になってたはずだ。

もっともアヤメはどうだかわからないが。

「？えっと、それは……」

なにか思い当たるところがあるのだが、その何かがわからないという顔をする優子。

「ほら、如月ハイランドですこし話しただろ？放火犯を一発殴る為に色々とやった、ってな」

「そうそう。雅夜から聞いたことだったわね。……でも、あの時は不良グループのところに殴り込みしただけじゃなかったかしら？」

「だから色々とあったんだよ、その時は」

全部説明するのは面倒だし、思い返せば自分でも信じられないようなことばっかだったからな。

「その色々が気になるんだけど……」

「機会があったら話してやる……ん？誰か来たみたいだぞ優子」

「え？」

人の気配を二つ感じ、そのうちの一つがいるほう――出入口のほうを指さす。

「って、愛子じゃない」

「優子？プールを使ってるのは誰かと思ったら優子たちだったの？」
「そうよ」
入ってきたのはＡクラスの工藤愛子。休みの日でも制服で来てるとは偉いな。
「なんで愛子はここに来たの？水泳部でもないのに」
「ボクは水泳部だよ！？前に教えたよね！？」
「ごめん、忘れちゃった」
「酷いよ優子！」
と、二人とも笑いながら言い合う。どうやらお互いに冗談だとわかってるみたいだな。
「笑ってるところすまないが、今日は水泳部は休みだろ？」
優子の後ろから口を出す。
「うん。すっかり忘れていて学校に来てやっと思い出したんだけど――――人の声がしたから寄ってみたんだ。よかったらボクも混ぜてもらっていい？」
「許可を取らなくても別にいいんだけどな。俺も皆には言わないで勝手に知り合いを連れてきたし、俺達のプールってわけでもねぇ。それにちょうど今、一人増えたみたいだしな」
プールの中で騒がしくなったところを指さす。
『お姉さまっ！どうしてプールに行くなら美春に声をかけてくれな

いのですか!?美春はこんなにもお姉さまのことを愛していますのに!』

『美春!?アンタどうしてここにいるのよ!プールで遊ぶなんて誰にも言わなかったはずなんだけど!』

『美春にはお姉さまを害虫から護るための特別な情報網がありますから!』

『ん?その声は……やっぱりミハだ!!ひっさしぶり~♪』

『げっ!?なんで忍が此処にいるんですか!?』

『残念ながら居るのは忍だけじゃないよ』

『ミク。ミハからミナちゃんを護ってあげて…』

『任務了解っ!ヒデ君、ちょっと待っててね!』

『アナタたちまで!?ちょ、お姉さまから離れなさい未来!――――って、忍はどこを触ってるんですかっ!』

『ん~、いまいち。相変わらず成長してないね♪やっぱりショウちゃんがいいや♪』

『黙りなさいっ!』

『……もう止めて』

想像以上にカオスになってやがる。

「なにやら賑やかになってきたのう」

未来から見捨てやれた「その表現はやめぃ!」……。とりあえず、秀吉がこっちにやってきた。

「あ、弟君もいたんだ」

「うむ。どうやらお主は姉上の友人のようじゃな」

「仲良くやらせてもらってるよ♪」

「アタシは苦労してるけどね……」

腰に手をあてて、二人に向かって溜息を吐く優子。二人とも優子の態度に気づいてない振りをしていた。

「あのさ、ボクも泳いでいいかな？」

「ん？遠慮することはなかろう。ここは学校のプールじゃからな」

「ありがと。皆同じこと言うんだね。それじゃ、水着に着替えてくるね」

スポーツバッグを掲げて更衣室の方へと向かっていく工藤。すると途中で振り向いて、

「覗くなら、バレないようにね♪」

と、言い残していった。

視界の隅で一瞬、覗きという単語に雄二と明久が反応したように見えたんだが……？

「あら？雅夜は動かないのね」

「まぁな。さすがに今日は死に掛けすぎだから、自重したほうがいいと思ってな」

「懸命ね」

殺意を消しながら優子が言う。興味がないといえば嘘になるが、死を覚悟してまで見るようなもんじゃない。

『ん～、ちょっと物足りないけど、これはこれでなかなかの手応え……』
『きゃっ！だ、誰……って女の子！？』
『初めまして♪清水美春の従姉妹でマサ君の妻の椎名忍。きがるに忍って呼んでね♪』
『……妻？ああ、清涼祭のときにそんな噂があったっけ。え、えっと、優子と代表の友達の工藤愛子って言います』
『じゃあアイちゃんだね♪よろしくっ♪』
『あ、うん。よろしく。……えっと、そろそろ手を離してくれないカナ？』
『ヤダ♪』
『……。まさか初対面で胸を揉まれるとは思ってもなかったよ……』

第２０２話（後書き）

忍がかなりの変態……というかセクハラ親父っぽくなってきた（苦笑）

最初はこんなキャラじゃなかったのに……（汗）

感想とアンケートお待ちしております。

第２０３話

復活はしたが泳ぐ気になれないらしい雄二と明久たちと、プールであんまり泳いでもいないのに疲れてしまった俺はプールサイドのベンチに腰掛けて皆の姿を眺めていた。

「あのさ、雄二」
「なんだ？」
「僕の気のせいかもしないんだけど」
「ああ」
「あの二人、ヤケに険悪な雰囲気で水中バレーやってない？」
「大丈夫だ。俺にも険悪な雰囲気に見える」

バシッ、ズバン、と勢い良く音が響くほうを見ながら雄二と明久が呟く。

『美波ちゃん！絶対に譲りませんからね！』
『上等よ瑞樹！スポーツでウチに勝とうなんて思わないことね！』

ボールよ割れろ、と言わんばかりに全力で打ち合う姫路と島田。元気なことだ。

「こっちはこっちで雰囲気がおかしいけどな」

姫路たちとは少し離れたところを指さす。そこには姫路たちがやってるのとは別に、もう一試合行われていた。

『これで、決まりだっ！』
『まだまだだね、っと。忍、頼んだよ！』

『任せといてっ♪必殺《顔面直撃（フェイスクラッシュ）》！』
『技名でなにするかバレバレ…（スッ）』
『アウト！……って、それよりなんなのよアンタたちの化物じみた動きは！！ガッとかザシュとかキュルキュルとか、水中バレーをやってて鳴る音じゃないわよっ！！』

有り得ない効果音と優子のツッコミが響きわたる。落ち着け優子！そいつらに常識を求めてはダメなんだ！

「相変わらず杜丘の人達は皆、凄い運動神経だよね」
「凄いどころですまねぇレベルだぞアレ。あいつら本当に人間なのか？」
「さぁ？」
「「否定しないの（か）！？」」

人間だとは思うんだけどな、一応は。残念ながら、断定できるほどの判断材料を俺は持ち合わせていない。

『負けた方が諦めるって約束、忘れてないわよね！』
『もちろんです！美波ちゃんこそ負けても約束を破らないで下さいね！』
『そっちこそ！』

『……ほぅ。どうやら向こうはなにかを賭けてるみたいだね。どうだい皆。こっちもなにか賭けてみないかい？』
『『『乗った！』』』
『んじゃ、負けた方は勝った方に翡翠のデザートセット（２７００円）を奢るってことで、いいよね？』
『『『いいとも！』』』

全員、さらに気合がはいって苛烈になってくる。というかあいつら、賭ける金額が半端ねぇな。俺に助けを求めてもしらないからな？

「あやつらの異常な動きにはついていけん……。あっちでやっておるミズキとミナミらの動きが普通のはずじゃ」

「ほぅ……。姫路と島田とは面白いのう。どちらが優勢なのじゃ？」

プールから上がってきながら会話するアヤメと秀吉。可哀想に。みんなにハブられ「「その表現もやめいっ！」」仲良いんだな。

「今のところは姫路が優勢だな」

「んむ？それは以外じゃな。球技ともなれば島田の方に軍配が上がりそうなものじゃが」

「姫路と島田の一対一ならそうだろうけどな」

「一対一なら……つまりは相方が問題なのじゃな？」

「そのとおり」

姫路には霧島が、島田には清水が味方に付いている。才女コンビＶＳカップル（清水称）コンビの戦いだ。

ちなみに向こうは忍＆千夏チームＶＳ未来＆由美チームで戦っている。戦力は……まぁ、五分五分だな。

「なるほどのう。霧島は運動神経も良いようじゃな。島田と互角とはなかなかやるではないか」

「うむ、ヒデヨシの言うとおりじゃな。ショウコは頭が良いと聞いておったのじゃが、運動も出来るのかの？」

「その辺のことが詳しく知りたかったら、夫の雄二に聞いたほうが

よくわかる」
「誰が夫だ！」

お前だよお前。今更否定できないところまで来てるっていうのに。
まだ否定するのか。

「ではよろしく頼むぞい、ユウジ」
「……植田もナチュラルにスルーするなよ、ったく……。翔子の運動神経は中の上ってあたりだ。普通より高いんだが、ある程度運動をやっているやつには負ける。特にこれと言った得意スポーツなんてのはなくどれも平均より少し上ってくらいだ。っと、そういえばこの前、スポーツとは全く関係ないんだが、気配遮断は得意とか言ってたっけか。いつも突然どこからともなく現れてくるからなアイツ」
「はいストーップ！それ以上のノロケは止めてくれ。頭がおかしくなりそうだ」
「なっ！？ばっ、ば、バカッ、違げぇよ！ただ俺が知ってることを言っただけで……っ！」

面白い具合に雄二がどうようする。やべ1、面白い。

「なに、照れることはなかろう。お主達の仲は充分承知しておるつもりじゃ。ぞんぶんに語ってくれて構わぬぞ」
「そうそう。幸い霧島は今、島田達と水中バレーやっててこっちの声なんて聞こえてないって」
「だからそんなんじゃねぇっていってるだろうがーーーっ！」

顔を真っ赤にした雄二のツッコミがプール内に響きわたる。
どうようしすぎだろ、おい。

第２０３話（後書き）

時間がぁ……時間が足りないよぉ……。

ＩＦと同時進行で書いてるけど、キツイ（汗）

感想とアンケートお待ちしております。

第２０４話

「しっかし、面白いもんだな」
「なにがじゃ？」

赤面してる雄二を無視して乱戦と化している水中バレーを見ながら言う。珍しく男子と女子でわかれているので気になったことを言う。ちなみにさっきまで此処に居たアヤメは優子のところに行ってしまっている。

「五人の男子のうち半数以上の三人がカップルとして成立しそうってことがだよ。しかも一人は彼女を通り越して妻とまで行ってるんだぞ」
「あぁ、確か……片桐だったっけか？アイツのことだな。清涼祭のときそういう噂が流れ――――」
「何言ってんだ？お前と霧島のことに決まってるだろ雄二」
「ふざけんじゃねぇぞテメェ！」

というか忍の妻発言はアイツが勝手に言ってるだけであって、そういう関係は微塵もない。

「それであとの二人は誰？僕じゃないから、雅夜とムッツリーニしかいないけど」
「待て明久。なぜワシの名前が自然と向けておるのじゃ？」
「そりゃ秀吉だからね」
「答えになっておらんのじゃ！」

どうせ明久のことだから、秀吉の性別は『秀吉』だから男じゃない

とかそんな理由だろうな。

「違うぞ明久。二人のうち一人が秀吉のことだ」

「まっさか～。いくら雅夜でもその冗談はないよ。秀吉が彼女をつくるわけないじゃない。だよね、秀吉」

笑いながら秀吉のほうを見る明久。

「……すまぬ」

明久の顔から逃げるように横を向いて答える秀吉。

「なんでそこで謝るの!?えっ、今の話もしかして本当だったの!?」

「あたりまえだ。というかさっきまで秀吉と未来が二人っきりで遊んでたじゃねぇかよ。お前の目玉はビー玉か？」

「せめて節穴って言って!って、相手は未来ちゃんなの?秀吉とそんなに接点あったっけ?」

そこは疑問に思おうよな。これでもまだ二回目だというのにな。

「恋に出会いの数は関係ない。当人達によれば一目惚れだとよ」

「ワシはそんなこと言った覚えはないのじゃが!?」

「そうだったか?そういえば未来からも聞いた覚えはないが……けど、間違っちゃないだろ」

「……」

無言になる秀吉。ふむ。青春してるな。

「この反応はガチだな……。しかし、ちょっと待ってくれ雅夜。一

つ気になることがあるんだが、いいか？」
「ん？」
雄二が真面目な顔で明久たちには聞こえない程度の小声で問いかけてくる。どうしたんだいったい？
「（小声）このことをＦＦＦ団の連中が知ったらどうなる？」
「（小声）暴動が起こるだろうな。だが、あいつらの中では秀吉の扱いは『女子』ってことが問題だ。『女子同士なら許せる！』という結論に行くかもしれない」
あいつらは百合は否定しないからな。
「（小声）やっぱりか雅夜もそう思うか。となると、許した時の場合だとそのやるせない気持ちはどこに向かうと雅夜なら考える？」
「（小声）……あいつらにとっての異端者、だな。日頃の恨みを込めていつもより過激になるだろうな」
特にＡ級異端者でもある俺や雄二、それと明久。俺達三人が集中的に喰らう気がする。
「お主たち、さっきからなにをコソコソしておるのじゃ？」
「やたら雄二が冷や汗をかいてるように見えるけど？」
秀吉と明久がこっちを覗き込んでくる。っと、ちと長く話しすぎたようだな。
「いや、気にするな。雅夜に気になったことを聞いてただけだ」
なんでもないと続ける雄二。嘘はついてないな。

「それで雅夜。雄二と霧島さん、秀吉と未来ちゃんの二つはわかったけど最後の一つは誰なの？やっぱり雅夜と木下さん？」
「今にも殴りかかろうとするな。というかやっぱりってなんだ、やっぱりとは。俺と優子は付き合ってねぇよ」
「「なんじゃと！？（だと！？）」」
「って、なんでそこで二人が驚く？」

秀吉はまだわかるが、なぜ雄二までも？

「い、いや、だってお主、姉上と如月ハイランドに行ったじゃろ？」
「ああ。雄二たちと同じ日にな」
「そうだったの！？僕、全然気付かなかったんだけど！」

はいはい、バカは黙ってろ。

「帰ってきた姉上が至極幸福そうな顔をしておったぞ。てっきりワシはお主達の間になにか進展があってそれに姉上が喜んでいると思っておったのじゃが？」
「間違いじゃない。喜んでいる理由はだいたい想像つくがな」
「そういえば雅夜には珍しく顔を赤くしてたっけな。なにかあったのか？」
「おいおい、それを聞くのは無粋ってもんだぞ」

誰が言うかってんだ。

「そういえばあの時以来『まだ付き合ってない』って言わなくもなったよな」
「それは単に言う機会がないだけ。まぁ、いま言うなら『まだ』は言わないけどな」

優子はどうだかしらんが。

第２０４話（後書き）

なんてグダグダな（笑）

～ちょっとＩＦの話～

バカテスの二次の二次になるんだけど、召喚獣が基本的に出ない・原作キャラがほとんど出ない・文月学園が舞台じゃないのナイナイ三拍子（苦笑）

それでも原作名がバカとテストと召喚獣でいっていいのだろうか？

感想とアンケートお待ちしております。

第２０５話

「というと……進展はあったが付き合ってはいない、ってことなのか？」
「そんなところだ」
結局、お互いのお互いに対する気持ちがすこし変わった程度だったしな。俺と優子の関係も変わってない。
「して、それでは三人目は誰じゃというのか？明久でもお主でもないとなると後はムッツリーニしかおらぬぞ？」
「その康太だよ。あいつには工藤がいるだろ？」
「「「……は？」」」
ん？なんで皆ここで首をかしげるんだ？普通にわかることだろ。
「確かにあの二人なら気があってるからありそうだけど、流石にそれはないよ」
「だな。雅夜にしては珍しくおかしなことを言ったな」
「ムッツリーニもじゃが、工藤もそんな気持ちは一切もってないじゃろう」
だが三人は口々に否定の言葉を放った。むぅ……。さすがに鈍感すぎないか――――って、そうか。時系列てきに、二人にはまだフラグがたってないか。
「すまんすまん。今のは冗談だ、気にしないでくれ」

康太と工藤がいい雰囲気になるのはまだ先の話だったな。頭のなかでこっちと原作が少しこんがらがってる。注意しないと。

「だが、まぁ。確かに面白い話ではあるな。俺達はあのFクラスのメンバーだってのに、こうして今日みたいに女子と遊ぶ機会があるんだもんな」

「FFF団にバレたら血祭りにあげられるけどね。女の子と遊べるのは嬉しいけど、代償がでかすぎるんだよ」

「しかもその女子と遊んでるだけでも命の危険があるからな。例えば霧島・姫路・島田・優子の制裁だったり、姫路の殺人料理とか」

「どちらも洒落にならないレベルだよね」

どれも気を緩めたら死んでしまうレベルだ。今でも生きてるのが不思議なくらいだしな。

『お姉さまごめんなさい！美春は嘘をついてました！』

『いいのよ美春！これからも友達でいましょうね！』

突然、まるで寸劇のような妙な台詞が聞こえた。

「あれ？なんかもういつのまにか結構進んでない？」

「チェンジコートしてるところを見ると、どうやら一セットは終わったみたいだな」

「忍たちのほうは……っと、まだチェンジコートしてないな。接戦でもしてるのか？」

「姫路たちのほうとは違って力は同じくらいだからのぅ。点を取っては取られての繰り返しじゃ」

忍たちの方に目を向ける。確かに。秀吉が言ってたとおり点の取り合いをしている。審判をやっているアヤメから『いい加減に決着を

つけてくれ』というオーラが出てる。

『由美～。なんか良い策ないの～？このままじゃ体力負けしちゃうよ』

『策はあるし、期もそろそろ…。あとはタイミングしだい…』

『なるほど！私がやることってあるの？』

『頑張って耐えてて…。あとは私に任せていいから…』

『了解っ！』

『……ふむ。忍。どうやら由美がなにかしてきそうだよ。気を付けて』

『わかった♪……でも、今の状況と由美の性格を考えたらあれしかないよね？ちゃんとわかってるよね？』

『当たり前だよ。ちゃんと理解して言ってる』

『へー♪つまり私に躊躇いなく死んでこいって言ってるのか♪』

『うん』

『すこしは悪びれてよ！？』

こっちはなぜかクライマックスになってきてるな。姫路たちのほうもそろそろ終わるし、ちょうどいいかもしれないな。

しかし、由美の策っつうと、アレだよな？というか絶対アレだよな。

『！未来、あげて！』

『はいよっ！！』

『来るか！忍、頑張って！』

『ホントに私に任せるの！？』

高く上がったボールを追いかけるように未来を踏み台「わぷっ！」にして水面から飛び出す由美。

そして空中で拳を握り――――――――

由美の十八番。それ即ち、

『鳴海流体術《星落とし》！！！』

力業。

――――――正面のボールを、ほぼ垂直に相手に向かってたたき落とすっ！！

『ちょ、やっぱりこれは無理だっ――――――――』

『頑張って盾（しのぶ）。これを防いだ――――――――』

『って、これワシも危険じゃ――――――』

ドオーーーーーーーンッ！！！！

『『『きゃあぁあああああああああっ！！！』』』

三人の悲鳴とともに綺麗な水柱があがる。

第２０５話（後書き）

ＩＦの話を作ってってあらためて思った。

二つ以上の作品を同時にやってる人って凄い！！

感想とアンケートお待ちしております。

第２０６話

「やりすぎだボケ（ポカッ）」
「痛い…」

プールから上がってきた由美の頭を殴る。ったく。プールサイドにいた俺達のほうまで水しぶきが飛んできたんだぞ。ビーチボールも耐え切れず破裂しちまったみたいだし。

「少しは手加減しろ。遊びで本気をだすんじゃない」
「むぅ…。別にいいじゃん…。みんなに迷惑かけてないんだし…」
「何言ってやがるんだ!?あそこで倒れてる二人を見て、同じこと言えるのかよ!」

意識はあるものの、横になっている千夏と忍を指差して言う。

「忍と千夏のこと…?遊びすぎて疲れちゃったんだね…。すこし横になってると良いよ…」
「しれっと嘘を吐くな!お前がやったんだろ、オイ!別に言うことがあるだろ!!」
「えーっと……『ふっ。所詮この程度か』」
「違うだろ!」
「違うの?だったら…『戦闘能力たったの5か。ゴミめ』でいいのかな?」
「お前の目はスカウターか?それも違う」
「じゃあ『まだまだだね』…?」
「どこぞの王子様でもない」
「なら『まだだ。まだこれからだ!』だね…!」

「違うどころか、酷いからな！？それだオーバーキル過ぎる！さもそれが正答かのように自信満々に言うなよ！」
「あんたらねぇ！！（ドゲシッ）」
「なんで俺が――――ガハッ！」

由美と漫才をやってるといきなり優子に蹴られる。俺が。悪いのは由美なのに！

「普通に謝れば済む話でしょうが！！とっとと二人に謝ってきなさい！」
「「だが断る！」」
「なんで！？しかも雅夜まで否定するの！？」

いや、だってなぁ？

「「それだと面白くない」」
「なんでハモるの！？というか謝るのに面白みはいらないわよ！」
「「えーっ？」」
「だからなんでハモるのよっ！いいから来なさい！」

怒鳴り声をあげて由美を引っ張っていく優子。耳を持って。

『痛い！！痛いから耳を引っ張るのは止めてユウちゃん！歩く！ちゃんと自分で歩くから！』
『うるさいわよっ！』
『話を聞いて！？痛たたたっ』

そんな二人を見て、両手の平を合わせる。ご愁傷さま由美。

「アンタら賑やかねぇ。浅月っていつもはもっと静かじゃなかった

っけ？」
「どちらかというとクールな人だと思ってたんですけど」
由美の冥福を祈ってると島田と姫路の凹凸コンビが近づいてきて声をかけてくる。ん？俺がクール？
「俺は別にクールじゃねぇぞ。むしろどちらかというと素はこっちだし、騒がしいほうが好きだぞ」
まぁ、学校だと眠たかったり、疲れてたり、面倒だったりしてるから普段はぐだってるけどな。
「それよか、そっちの水中バレーはどうした。もう終わったのか？」
「違うわよ。由美の出した水柱に驚いて美春が力加減を間違えてボール割っちゃったのよ」
「だからボールが見つかるまでは休憩することにしたんです」
「なるほどな。そりゃ賢明な判断だ」
水中で動くのは地上で普通に動くのより何倍も疲れる。ほとんどのやつが、運動を止めるまで自分がどれだけ疲れてるのかちゃんと理解できないからな。最悪、気がついたら足がつってたみたいなこともあったりする。
「……ね、浅月。ちょっと気になったんだけどさ」
「ん？」
などと考えていると島田が少しばかり表情を曇らせて訪ねてくる。
「あの子達、皆。アヤメは除いてだけど……胸大きくない？」
「そりゃお前よりか――――――すまんすまん！悪かったから！無

音で関節を取りに来るな！」
「逃がさないわよ。優子、そっちお願い」
「任せて」
「なぜ優子！？いつからそこにいた――――って、ふぬぉおおっ！！」

両腕の関節を外してははめるの三連続を食らった。
※ちなみに関節は外されるときよりもはめ直す時のほうが意外と身体に響きます♪

「痛つつつ…。まぁ、確かに平均的に皆デカいだろうな」
「そうよね。アヤメは例外だけど、千夏・忍・由美・未来の四人の平均はDカップくらいはあるんじゃないかな？」
「でしょ？で、それでね浅月。なにかあの子達の胸が大きい理由か秘密しらない？些細なことでもいいんだけど、知ってたら教えて！」

土下座しかねない勢いで頼み込んでくる島田。隣にいる優子――――と、近くで聞き耳を立てているアヤメもやけに真剣だ。
必死すぎるだなぁ、オイ。

「知るか。というか男の俺にきくような話じゃないだろ」

別に小さいままでもいいと思うけどな。
ほら、よく言うだろ？『貧乳はステータスだ！希少価値だ！むしろ誇っていい！胸の大きさなんか関係ない。どれも等しくおっぱいだ』ってな。

第２０６話（後書き）

感想とアンケートお待ちしております。

第207話

「ところで、どうしてプールを借りることが出来たんですか？」
「そういえば此処、学校のプールだったね。教師の許可でも貰ったのかい？」

姫路が顎に指を当てて尋ね、うつ伏せの千夏がそれに便乗する。あー、みんなにはプールに誘っただけで、その辺の事情を説明していなかったな。

「明久と雄二がバカやってな。プールの罰掃除を受ける代わりに一日貸切にしてもらったんだ。ちなみに俺は巻き込まれただけ」
「ちょっと雅夜！もうちょっとオブラートに包んで言ってくれてもいいじゃないか！」

事実を言って何が悪い。

「お掃除ですか？このプール全部を？」
「うん。でも、一人でやるわけじゃないよ。僕と雄二とムッツリーニと秀吉と雅夜の五人でやるんだ」
「なんで俺まで……。西村さん、最近仕事押し付けすぎだろ」
「自業自得じゃないの？」
「ほぉ～。よくそんなことが言えるな明久」
「いひゃいひゃい！」

明久の口を思いっきり引っ張る。この口か？この口がそんなことを言うのか？

「プール掃除？それならウチも手伝おっか？」
「そうじゃな。なに、どうせ午後も暇なのじゃしワシも手伝おう」
「ええ。どうせそんな理由だと思ってたし、アタシは最初から手伝うつもりだったわよ」

話を聞いていたのか、そばにいた島田とアヤメと優子が掃除への参加を申し出た。

「私もお手伝いします。遊ぶだけじゃ悪いですし」
「だね。これだけ楽しませてもらったんだし手伝わないとね」
「うん！それくらいならお安い御用だよ！」

姫路と千夏、未来も当然とばかりに名乗り出る。やっぱり、こいつらはいい奴らだよな。

「皆元気だね♪私はもう疲れちゃってるから休憩してるよ♪」
「掃除という単語を聞くだけで気が滅入る…」
「お前らもすこしは手伝おうと思え！」

このバカ二人はダメだが。

「ありがとう。でも、掃除は僕らだけで充分だよ。道具も五人分しか借りてないし」

まぁ、取りにいけないこともないんだけどな。ものすごく時間がかかって面倒だが。

「そうですか……」
「う～ん、道具がないなら仕方ないわね」
「あ、そうでしたっ。それならっ」

姫路がなにかを思い出し方のようにポン、と手を打つ。その瞬間、俺達男子の間に本能的な何かを感じ取った。やはり、くるか…？

「ちょっと失敗しちゃって人数分用意できなかったから黙っていたんですけど――――――」

姫路さんがにこやかに言葉を紡ぐ。

そのたった数秒の間にオレら五人は目まぐるしくアイコンタクトのやり取りをしてた。

「――――実は、今朝作ったワッフルが三つ」

「第一回っ！」（雄二の声）

「最速王者決定戦っ！」（明久の声）

「ガチンコ、水泳対決――――――――っ！！」（俺の声）

「「イェーーッ！」」（秀吉と康太の合いの手）

姫路の台詞を遮って始まるタイトルコール。

突然の事態についていけず、女子は全員目を丸くしていた。

「明久、ルールの説明だ！」

「オッケー！ルールはとても簡単。ここのプールを往復して、最初にゴールした人の勝ちという、誰にでもわかる普通の水泳勝負です」

そう、本当にただの水泳勝負。誰が一番速く泳げるかというものを競うだけの単純明快なもの。

「っと、そうだ。ただ見てるだけじゃ女子はつまらないだろうから、俺が作ってきたマフィンでも食いながら待っててくれ」

「「「「「「マサ君（雅夜）の手作り！？」」」」」」

「俺も姫路と同じように作ってきてたんだよ。全員に配ったらちょうど三個たりなかったから黙ってたんだけど、運良く（・・・）姫路がワッフルを三個持ってきたから合わせて全員分になるからな」

もちろん嘘。俺は自己防衛ようにちゃんと作ってきておいたんだよ！

「で、上位二名が俺のマフィンで、下位三名が姫路のワッフルを食えるってことにしようと思ってな」

「ちょ、ちょっと待ってよ雅夜！それだと姫路さんに失礼――――」

「俺が作った奴が姫路に劣るとでも？勝者の景品に旨いものを持ってきて悪いのか？」

たとえ姫路が相手じゃなくてもほかの奴が作ったお菓子に俺がそう簡単に負けるとは思っていない！

「姫路には少しは悪いと思うが……。俺のを食えば理解してくれるはずだ」

「少しだけなんだね。まぁ、確かに雅夜のお菓子は絶品だけど」

「なんだか、女子としては複雑な気分です……」

第２０７話（後書き）

雅夜は回避出来るのか！？

最近の彼だと、貧乏くじをひきやすいですからねぇ（苦笑）

感想とアンケートお待ちしております。

第２０８話

「バカなお兄ちゃんたち、突然どうしたんですかっ？急に水泳勝負だなんて、葉月ビックリですっ」
「葉月ちゃん。男にはね、大切なものを賭けて戦わないといけない時っていうものがあるんだ」
「ふぇ～。お兄ちゃん、かっこいいですっ。プライドを賭けた勝負ってやつですねっ」

少し離れたところで明久が葉月ちゃんに教えていた。
男には大切なものを賭けて戦わないといけない時がある、ねぇ……。
あったな、昔そんなこと。はぁ……。

「どうしたんだいマサ君？溜息なんかついちゃって」
「いやな過去を思い出しちまってよ。あの時の俺はバカだったなぁー、とガラにもなく思ってるんだ」
「ふむ。誰にだってそういう過去はあるものさ。ね、由美もそうだろ？」
「そこで私に振る…？確かにあるけど、というか思い出させんじゃねぇよっ！！」
「わわっ！落ち着いてユミ！皆が見てるよっ！チカもわかってて言っちゃダメだよっ！」

暴れ出しそうな由美を慌てて未来が止めに入る。こういう時だけはこいつらの立場が逆になるんだよな。

「マサ君も見てるだけじゃなくて、手伝ってよ！」
「やだ、面倒い。優子、ゴー！」

暴れ出した由美の相手をするほど俺はバカじゃないぞ。とりあえず隣にいる優子に回しておく。

「アタシには無理よ。忍、お願いね」

「私もパス♪というわけでアキ君、ガンバ♪」

「僕!?荒事は僕より美波のほうが得意だよ」

「ウチ!?それ、どういう意味よアキ!!荒事はどう考えても坂本の仕事でしょ!」

「そこで俺に振るなっ!ってか、煽った片桐本人にやらせればいいだろ?」

「か弱き女の子に荒事を任せるなんて……。君はそれでも男かい?ちゃんとイチモツは付いてるんだろうね?」

「……ちゃんと付いてる」

「翔子!?お前、なんで俺のズボンに手をかけてるんだよっ!!」

「雅夜が連れてきたモノたちは皆、元気じゃのぅ。みてて飽きないのじゃ」

「あ、あはは……。確かに楽しそうですもんね。……ところでアヤメちゃんと葉月ちゃん。そろそろ止めてもらえませんか?」

「嫌じゃ。……しかし、なにを食べたらこんなに大きくなるんじゃ?(モミモミ)」

「葉月も大きくなったらお胸、こんなに大きくなるですかねっ?(モミモミ)」

「……今日は鼻血(これ)ばっかり(ダクダクダク)」

一瞬で話がおかしな方にいってるな……。うん。騒がしくてなによりだ。

『……ねぇユミ。誰もこっち気にしてないみたいだよ』

『暴れた私がバカみたいだね…』

『げ、元気だして二人ともっ！ボクはちゃんと気にしてるから、ねっ？』

こっちは二人とも静かになったな。アフターケアは任せたぞ工藤。

☆

「さて、気を取り直して始めるとするか」

「「「「応っ！！」」」」

スタート位置に着く。右レーンから順番に秀吉・明久・俺・雄二・康太。

……嘘だろオイ。なんで明久と雄二の間なんだよ。

「判定はボクに任せてね。浅月君のマフィンのお礼にやってあげる」

工藤がスタート兼ゴール地点に立つ。口元にマフィンのカスが付いてるのは言わないでおこう。そのほうが面白いし。

ちなみに俺が作ったマフィンは大好評だった。

「はい、行くよ！位置について――――――」

工藤がコールを始める。
五人とも一斉に飛び込みの構えを取る。

「よーい――――――」

ちらりと隣にいる明久と雄二の構えを見る。飛び込む姿勢なのだが、若干俺のほうに重心が動いている。両隣のバカどもは合図とともに仕掛けてくる気だ。なら、俺のやることはただ一つ――――

「――――――スタートっ！」
「「くたばれぇぇっ！！」」

スタートの合図とともに雄二と明久が飛び蹴りを仕掛けてくる。工藤の合図でプールに飛び込んでいたら横っ腹に容赦なく蹴られていただろう。

「――――だが、甘いっ！（ガシッ）」
「「んなっ！？」」

そんなことはあらかじめわかっていたので、俺はプールには飛び込んでいない。
両サイドから襲いかかってきたその足を掴む。

「よろこべお前ら――――――――――（グルン）」
「「いっ！？」」

そして二人の足を掴んだまま一回転する。二人は遠心力の力に従い……

「――――ショートカットさせてやる」
「「ぬぉぉぉぉ――――――――っ！？（ボシャーンッ！！）」」
プールの半ば――――秀吉と康太より少し先――――当たりまで飛んでいき、小さな水柱をつくる。
うまい具合に秀吉と康太を少しだけ妨害出来たみたいだ。
さて、俺もスタートするか。

第２０８話（後書き）

バカテスのなかで一番の常識人って工藤ですよね……。

二次創作を書いてて常常思ってます。

感想とアンケートお待ちしております。

第２０９話

『ねえお姉ちゃん。あの飛び込み方、葉月もやってみたいですっ！』
『ダメよ葉月。バカになっちゃうわよ？』

普通にプールに飛び込んだ時、変なやりとりが聞こえた気がする。

（さて、と）

二人を投げ込んだとき、秀吉と康太を少しの間足止め出来たのは行幸だな。二十メートル近く差があったらいくらなんでも無理がある。

（秀吉と康太は１５メートル、明久と雄二は７～８メートル差ってところか）

流石明久と雄二。もう大勢を整えて泳ぎ始めてやがる。もう正攻法でやったほうが良いとわかってるみたいだな。

（――――五人の中で生き残れるのはたったの二人。俺と秀吉が生き残るために、明久と雄二、ついでに康太には死んでもらおう。なに。あいつらならきっと耐えてくれるだろう。たぶん）

だったら今、俺がやるべきことは――――っ！

『おーっ♪マサ君がスピードアップし始めたよ♪』
『……え？な、なにあの速さ！？』
『……オリンピック選手並みの速さ』

『雅夜って水泳とかやってたっけ？』
『いや、やってないよ。由美、マサ君がこんなに早い理由の説明よろしく』
『“滝の一歩手前での川登り『気を抜いたら一瞬で滝に落ちる編』～今ならお得の一時間コース～”という修行の賜物…。速く泳げないと死ねる…』
『『『『どんな修行よ！！』』』』
『ほぇ～。凄いお兄ちゃんはやっぱり凄いですっ』
なんかよくわからんが……葉月ちゃんには褒められてるみたいだな。
（↑ちなみに二回落ちた）
スピードを上げてから程なくして、折り返し地点で明久と雄二と並ぶ。
（まずは雄二から落とすか……）
潜水状態で泳いでいる雄二の真下に入る。そしてそのまま雄二と並泳。
「……ん？」
水中で雄二と目が合う。
「……」

「……」
「……（ニコッ）」
「っ！？――――――ブハッ！！！」

水中で思いっきり良い笑顔を見せ、雄二を吹かせる。
雄二が吹いたのを確認したらコースに戻ってまた泳ぐ。秀吉と康太は残り２０メートル、明久は……秀吉たちの少し後ろあたりか。

『まっ、雅夜っ！テメェ、きたねぇぞ！！』

雄二――――――敗北決定。
うるせぇ！命が関わってる勝負に汚いもくそもあるかっ！！

（次は明久だな……）

雄二と同じ手段は面白くない――――というか明久相手ならもっとスマートに行ける！
また潜って今度は明久の真下に向かう。

「（……雅夜！？何しにきたの！？）」
「（明久。取引しよう）」

水中で泳ぎながらアイコンタクト。流石に口パクは無理がある。

「（この勝負で明久が負けても、マフィンなら今度作ってやる。だからお前は負けろ）」
「（断るっ！！命が賭かってるんだ！そんな安いものに釣られるか！）」

俺のお菓子が安いものだと……？いい度胸――――っと、問題はそこじゃないか。

「（……一週間、いや二週間毎日飯作ってやる）」

「（……もう一声！）」

「（ええぃ！気が向いたらお菓子も作ってやる！）」

「（取引成立！）」

「（俺達の友情は不滅だ！）」

水中でグッと親指を突き出す。……計画通り。なんて安い男だ。

明久――――――敗北決定。

（最後は康太か……。今日は鼻血を出しているか輸血しているかしか印象はないが……容赦はしないっ！！）

康太の攻略は簡単だ。弱点を突く、ただそれだけで終わる。俺が手を下すまでもない。

（頼んだぞ、忍！）

コースに戻って泳ぎ始める。あと俺がやるべきことは泳ぐのみ！

『（ピーン！）おっ♪なんか電波来たみたい♪』

『どうしたシノ？とうとう壊れたかい？』

『違うよ！えーっと、内容は……ふむふむ。なるほどね♪』

プールサイドから聞こえる声。よしっ！ちゃんと忍に届いたみたい

だ！
秀吉と康太は残り１０メートル。間に合え…っ！
『シ、シノ？どうしてこっちに躙り寄って来てるんだい？なんだか嫌な予感がするんだけど』
『大丈夫、大丈夫♪優しくするからっ♪』
『ならなぜ私の水着に手をかけ――――――』
『てやや～っ♪（バサッ！！）』
『ちょ！？ば、バカッ！！』

一瞬水面から飛び出そうになる身体を抑える。

『……っ！！（バシャーッ！！）っ！！（ブシャァアアアアアアアア！！）』

抑えきれなかったやつもいるみたいだが。
ちなみに忍に送った内容は『とりあえずなんでもいい。エロいことをやれ』である。
……どうやら忍は千夏の水着を取ったみたいだ。くそっ。

「とりあえず……鳴海流蘇生術・其の参！《血止め》」
「（ブシャァ――――ピタッ）……っ！？……止まった？」

すれ違いざまに康太にやっておく。これで十数秒は血が止まるはずだ。……人体にちと影響があるが、康太ならきっと死なないはずだ。むしろ後のことを考えるとありがたいことだろう。

少しの間味覚がおかしくなるだけだからな。

第２０９話（後書き）

万能術ですな鳴海流（笑）

でも、これくらいできないと雅夜とかがやってる修行でガチで死ねますからね（汗）

感想とアンケートお待ちしております。

第２１０話（前書き）

第二回『浅月人生相談』のアンケート締切は
明日の１２：００です。

アンケートだけでも良いので、どしどし書いてください！

第２１０話

「ぷはっ！さて、ワシの順位は……なにがあったのじゃ？」
「気にするな優勝者（ひでよし）。俺とお前が勝ち、他の奴らは負けた。ただそれだけのことだ」

結局秀吉が一位で俺が二位、後の三人は明久、康太、雄二の順番でゴール。

「う、うむ……。なんじゃ、こう…。勝ったのに素直に喜べんのぅ」
「喜んで良いんだよ。ほら、これで姫路のから逃げれて俺のお菓子が食べられるんだぞ？」

肩をポンと叩いて言い聞かせる。勝てば官軍って言うだろ？……ちょっと意味が違うか。

「おかげでこっちは地獄行きだがな。くそったれ。俺はまだ死にたくねぇぞ」
「……俺もここまでか……」
「まぁまぁ。二人ともそんなに落ち込まないで。まだ死ぬと決まったわけじゃないし、元気出しなよ」

向こうではなぜか雄二と康太が明久に慰められていた。

「ん？やけに冷静じゃねぇか明久。辛い現実を前についに頭が壊れたのか？」
「……その気持ち、わかる」
「違うよっ！！こういう時は無駄に慌てず、冷静に考えろって雅夜

に教えてもらったんだ。だから慌てず、平常心で――――――――」

『……美味しい』

『これ本当に浅月の手作りなの？お店で売ってるのより断然良いんだけど』

『あら、お姉さま。知らないんですか？浅月は――』

『はいストップ清水さん。そのことは雅夜に口止めされてるでしょ。気軽に言おうとしちゃダメよ』

『どう姫路さん。姫路さんのワッフルはこれに対抗できそう？』

『さ、流石に無理ですよ…。いくらなんでも浅月君、美味しすぎます……』

『綺麗なお姉ちゃん元気だすですっ！お姉ちゃんが作ったのならきっとお兄ちゃんたちも美味しいって言ってくれるはずですっ』

『……そう、ですね！私だって気合いれて作って、隠し味にも工夫してきたんですからきっと大丈夫ですよね』

『はいですっ！』

「雅夜ぁっ！！僕を見捨てないで！！雅夜ならなんとか出来るでしょ！？」

「結局取り乱してんじゃねぇかよ！！気合と隠し味って単語に恐怖を覚えるんだが！？マジでやばいだろ、これ！どうにかしやがれ雅夜！！」

「……助けてくれ…っ！」

姫路の言葉を聞いた瞬間、三人が詰め寄ってくる。

ええい、気色悪い！！顔を近づけるなっ！こんな場面を優子に見られ――――――くそっ、遅かったか！既に恍惚とした目でこっちを

見てる。

「わかった、わかったから！……ったく」

三人を引きはがす。優子は……ダメだ。トリップしてやがる。今度言い聞かせておかないとな。

まぁ、それは今は置いとくとして。

「おーい、姫路！ちょっとこっちに来てくれ！」

『あ、はい。なんですか浅月君？』

明久たちと少し距離をとり、姫路を呼び寄せる。

「（小声）ワッフルに隠し味に何入れたか教えてくれないか？」

「（小声）えっと……隠し味は『閲覧禁止』と《閲覧禁止》を加えて、さらに【劇物♪】で仕上げただけですけど」

顔が青ざめるのを姫路にバレないように隠す。一舐めで死ねるレベルの組み合わせだな、それ。

「（小声）やっぱりな……。姫路、そりゃダメだ。味見してないからわからないかもしれないが、その組み合わせだと味がおかしくなる。ほら、食べ合わせって奴があるだろ？」

「（小声）そうなんですか！？知らなかったです……」

もちろん嘘。おかしくなるレベルとか以前の問題だ。

「（小声）もしかして、って思っといてよかった。明久たちに食わせる前に気付けてよかったな」

「（小声）はいっ！……でも、どうしましょう？このまま明久君

たちに食べてもらったら大変なことになりますし……」
「（小声）心配するな、対策はとってある。こういう時の為に、俺もワッフルを作ってきたんだ」
「（小声）こういうときってどういうときなんですか…？それより私、浅月君にワッフルを持ってくるって言いましたっけ？」
そこは気にするところじゃない。
「（小声）で、俺のワッフルと姫路のワッフルをみんなにバレないように交換して、恰も姫路が作ってきたやつだと思わせればいい」
「（小声）でも、私が作ったのと浅月君が作ったのじゃ美味しさが全然違いますし、バレちゃうんじゃないですか？」
「（小声）その辺は問題ない。ちゃんと姫路の腕前に合わせて作ってきてある」
もちろん薬品は抜きで、だ。
「（小声）……用意周到過ぎませんか？」
「（小声）子供の頃を知ってれば、ある程度なにをするかわかる。これくらい朝飯前だ」
「（小声）確かに小学生の時はよく遊んでいましたが……なんで覚えてるんです？」
「（小声）忘れてないだけ。っと、そろそろ戻ったほうがよさそうだな。どうやら疑われ始めてるようだ」
長く話過ぎたな。突き刺さった視線を沢山感じる。
「（小声）あ、そうですね。戻ってワッフルの交換もしなくちゃいけませんし」
「（小声）交換は姫路がやってくれ。俺が作ったのは……よいし

ょっと。ほれ、これだ」
「（小声）どこから出したんですか！？」

姫路を無視して歩きだす。
当たり前のごとく企業秘密だ。そう簡単に教えてたまるか。

その後……

「どうですか明久君？美味しいですか？」
「う、うーん。美味しいといえば美味しいんだけど……その……少しだけ……」
「甘すぎる。一口食っただけで胸焼けしそうだ」
「……砂糖入れすぎ」
「えっ！？」
「台無しじゃないか！僕がせっかく気の利いた台詞を言って慰めようとしてたのに！」
「ま、待ってください！あ、明久君、一口いいですか？」
「え、あ、うん。姫路さんのだし別にいいけど」
「（パクッ）……浅月君っ！！さっき問題ないっていいましたよね！？」
「ハハッ！ナンノコトヤラ」

第２１０話（後書き）

なんというグダグダっぷり（苦笑）

結局姫路の兵器は食わずじまいだし、杜丘の奴らは誰も出てこなかったし（雅夜が作ったお菓子でどれが一番美味しいか口論していた）

アンケート協力よろしくお願いします！

感想とアンケートお待ちしております。

バカテスト第十九問目…？（前書き）

アンケートにご協力ありがとうございました！

結果は……翔子：１　愛子：２　秀吉：２　明久：２　アヤメ：２　忍：３

ということなので今回のアシスタントは忍ですっ！！

バカテスト第十九問目…？

タンッ！

「よし、っと」

エンターキーが押される音を部室に響かせ、今までやっていた仕事を終わらせる。

「これでこの仕事はオッケーだな。……お。予想より早く終わったな」

傍らに置いてある時計をみると、まだ放課後になってから二時間もたってなかった。
もうちょいかかると思ってたんだがな。

「さて、次はなにやるかな……。……そういえばこれがあったな」

乱雑に置かれた紙束の中から目を瞑って適当に掴むと『人生相談』と表紙に書かれているものを取り出した。うわぁ…。なんでこれ掴んじまったんだろ俺。

「枚数もいつのまにか五十枚超えてるし……。見なかったことにしたいが……仕方ない。今の時間なら誰でも呼べるし、やっておくか。やらないと西村さんが五月蝿そうだし」

溜息を吐きながら携帯を取り出す。優子は前回弄りすぎたから流石に今回も呼べないからな…。

「えっと、確か今回のアンケート結果は……忍かぁ……」

ってことは忍と部室で二人っきりになるのか。……貞操の危機を感じるな。

「よしっ！あいつを呼ぶのはやめよう。別のやつでも《Ｐｒｒｒｒｒ！Ｐｒｒｒｒｒ！》っと電話？しかも非通知で？……《ガチャ》はい、もしもし」

『あたしメリーさん。今、学校の目の前にいるの』

「……は？《ガチャ》」

相手は言いたいことを言っただけですぐに電話を切る。……オイオイ。

ちなみに話とはまったく関係ないんだが、《Ｐｒｒｒｒ！》と《ガチャ》は俺の携帯の音で、設定してるだけである。別に黒電話とかではないのであしからず。

《Ｐｒｒｒｒ！Ｐｒｒｒｒ！》

「またか…。《ガチャ》はい、もしもし」

『あたしメリーさん。今、昇降口にいるの』《ガチャ》

んー、これはあれか。『メリーさんの電話』って有名な怪談か。またかよ……。

《Ｐｒｒｒｒ！Ｐｒｒｒｒ！》

《ガチャ》「はい、もしもし。こちらセガワ急便でございますが」

『あたしメリー――――え！？あ、あたしメリーさん！！今、一階にいるの！！』《ガチャ》

……怒らせたか？

《Ｐｒｒｒｒ！Ｐｒｒｒｒ！》

《ガチャ》「は『あたしメリーさん。今、二階にいるの』い《ガチャ》……はやっ！？」

はい、って言うまえに言い切られたぞ。どんだけ焦ってんだよ。

《Ｐｒｒｒｒ！Ｐｒｒｒｒ！》

《ガチャ》『あたしメリーさん。今、さ《ガチャ》

今度はこっちが言い切らせる前に電話を切る。というかもう三階か。もう、すぐだな。

《Ｐｒｒｒｒ！Ｐｒｒｒｒ！》

《ガチャ》『あたしメリーさん。今、扉の前にいるの』

「へー」

ん、確かに扉のところから気配を感じるな。ついでにガチャガチャってドアノブを回す音が聞こえる。

『……』

「……」

『……』

「……鍵は開けないぞ」

『お願い……開けて……』《ガチャ》

断る。開ける理由もない。自称メリーさんはこのまま放っておくか。

さて、いい加減忍に連絡でも――――

「扉からと思わせて……実は窓からでしたーっ♪いやっほぅーーーっ♪」《ガッシャーンッ！！》
「――――――ぐわはっ！？」
と思ったところでいきなり外から忍が窓を突き破りながら飛び蹴りを仕掛けてきた。なぜに外から！？扉の前にいたんじゃないのか！？
「椎名忍、華麗の登場♪」
ポーズを取りながら着地して名乗り上げる。
「部室の窓を壊しておいて華麗と言えるかっ！というか壊すなよっ！危ないだろっ！」
「あ、マサ君。額にガラス刺さってるよ♪」
「うれしそうに言うなーっ！！」
刺さったのが小さいので良かったが、大きい破片が刺さったらやばいだろ！
額に刺さってるガラスを抜くと血が少しでる。……よかった。手の平サイズならギリギリセーフだ。
身体中に刺さってるガラスを抜いている間、忍は扉を開けて外にいる誰かと会話していた。
『《ガチャ》お勤めごくろー♪ありがとね』
『い、いえいえ。これくらいお安い御用ですっ！』
……ん？今、ちらっと見えたが……アイツはF（ウチ）のクラスの柴崎だったな。なんでアイツがこんなところに？
二三言葉を発したあと、扉に鍵をかけてこっちに忍が戻ってくる。

「おい、忍。今のはどういうことだ？」
「今の人のこと？屋上に居ながらじゃドアノブ触れないから、そのへんに居た子に協力してもらっただけだけだよ♪名前は忘れちゃったけど♪」
哀れ柴崎。名前すら覚えてもらってないみたいだぞ。
「お前の登場については正直どうでもいいんだが、なんでお前がここにいるんだ？」
「？だってアンケートで私が選ばれたんでしょ？」
なんでアンケートの結果をしってるんだコイツ？
「まぁ、そうだが……。つまりアレか？『呼ばれる前に来ちゃった♪』って吐かすつもりなのか」
「うん♪」
「よし、帰れ。無駄に登場で行数使いやがって。いつもより長くなっちまったじゃねぇか」
「メタらないでよ…。まぁまぁ、そんなこと言わずに♪お悩み相談にいっちゃおー♪」
くそっ。こいつ止めさせない気か。はぁ……。仕方ない、か。
「んじゃ、来てる奴の中から忍に適任のやつをいくつかやるか。言っとくが途中でやめたりするなよ」
「だいじょーぶ♪ユウちゃんみたいにはならないから♪」
と、胸を叩いて自信満々に言う。なんで前回のことを知ってるんだよ。ツッコミと怖いのでスルーするが。

「さて、最初は西村さんがやり残した奴から頼む。一番上にあるはずだ」
「りょーかい♪ええと……」

二年生　S水M春さんのご相談

『私には一年生の頃からずっと好きなお姉さまがいます。ですが、最近そのお姉さまが悪い男に騙されています。どうしたらその男を殲滅できるか教えて下さい』

「これミハのだよね？」
「ああ。前はこれについてなにも言わなかったからな。それにお前、清水の従姉妹だろ。解決案を出してやれ」
「殲滅方法かぁ……。あ、ねぇマサ君。殲滅って皆殺しにするってことだよね？相手は一人なのに皆殺しっておかしくない？」
「そこは観点じゃない。気にするな。ただでさえ長引いてるんだ。無駄なことをしゃべるな」
「でも血が流れるようなことは止めてほしいんだけどね……。なるべく穏便に済ませた方がいいよね♪」
「それができたらこんなところに相談なんかするか。だいたい穏便にすませると言ってもどうさせるつもりだ？」

「寝取っちゃえばいいんだよ♪」

「……はぁ？」

「その男じゃなくて自分だけを見てもらうために、ね♪そしたら男も傷つかなくて、ミハも幸せ♪皆ハッピーになれ《デデーン。忍、アウトー》わっ、驚いたなぁ……。なにこれ？」

突然部室に響いた声に忍が驚く。さて、と。

「本日の仕事はおしまいです。今回はありがとうございました」

「なんで接客モード！？マサ君、目が笑ってないよぉ……」

「お帰りはこちらです。またのご利用を拒絶いたしております」

「……なんで窓の方を示しながら言うの？しかもちょっと最後のところ違うよね？」

いや、これで正しい。

事態についていけず、戸惑っている忍を持ち上げる。

「わ、なになにマサ君。突然お姫様抱っこしてきて♪もしかして私のこと……って、窓から捨てな――――――きゃーっ♪」

「結局また一通しか消費できなかったな。……こんな調子が終わるまで続くのか……カッタリィ」

バカテスト第十九問目…？（後書き）

浅月人生相談～Ｐａｒｔ２～了

相変わらず忍の暴走が酷い（苦笑）

しかも人生相談は一人分しかしてない。窓ガラス割るな。メタりすぎ。とツッコミどころ満載（笑）

こんな調子で次回も出来るのかな……？

――――第三回『浅月人生相談』アンケート――――

※恥ずかしかった優子さん復活！

※忍は影響なし

Ａクラス　霧島　工藤　優子

Ｆクラス　明久　雄二　康太　秀吉　姫路　島田

杜丘高校　アヤメ　忍　千夏　未来　由美　祭　歩　悟志　大和

その他　深風　榊　マスター　陽菜

の中から何人でもいいので選んでもらえたらありがたいです。

（※注意：出てくるのは一位の人だけです。同立一位の場合は先に投票されたほうを優先します）

感想とアンケートお待ちしております。

第２１１話

俺のマフィンと姫路（俺）のワッフルを皆で食べたあと、時間的にもちょうどよかったのでそのままお開きということになった。

「んじゃ、俺達はこの後掃除があるから女子は先に帰っていてくれ」

「残ってても意味ないしな。忘れもんはするなよー。後で届けるのが面倒だからな」

俺と雄二で場を仕切り「遊び足りない～」とほざいているバカな奴らを更衣室に押し込む。とっとと帰りやがれ。

『マサ君。下着忘れて行っちゃいそうだけど、後で届けてくれるかな？』

「黙れ。なにが忘れていっちゃいそうだよ。故意に忘れようとするな。見つけたら捨ててやる」

『とか言ってもどうせ持ってきてくれるんだろ？マサ君はツンデレだからね』

「女子の下着を持ち歩いたりしたら変態扱いされるわ！いい加減バカなこと言ってるとごめんなさいって謝るまで胸揉みしだくぞ」

『それはセクハラだよ。そういうのはユウやシノやアヤ相手にやってあげな』

「忍はおいといて後の二人は――――――――――この先を言ったら俺の命が危ないから言わないが、誰がやるか！」

揉む胸がない、とか言ったら絶対に殺されるからなぁ。いい加減学んだ。

そろそろ此処に残って千夏と話してたら死亡フラグ立てそうだから

明久たちのところに戻るか。

「ということで俺は掃除してくるから、お前らはさっさと帰れよ」

『ん、もう行ってしまうのかい？じゃあマサ君。最後に一つ頼まれてくれないかな』

「別に構わないが、面倒なことは御免だぞ？」

面倒なことだったら即逃げさせてもらおう。やっかいなことでも同じだが。

『簡単なことだよ。なに耳を澄ませてもらえばわかると思うが――――』

耳を澄ませろ？……んー、シャワー音と女子連中の会話が聞こえるだけだが……

『ちょ、美春！アンタどこ触ってんのよっ！』

『ああっ、お姉さま！やっぱりお姉さまのさわり心地は最高ですわ』

『んー、しばらくショウちゃんのこの胸を揉めないと思うと、なんがか嫌だね……（モミモミ）』

『……揉みながら、んっ、言わないで』

『ねぇねぇ、今日はずっとアピールしてたけど未来は秀吉のどこに惚れたの？』

『ゆ、ユウちゃん顔が近いよぉ……』

『……ええぃ、なんでこのデカ乳は！凶悪なものを持っていやがって、成敗してくれるっ！』

『おやめになってお代官様～……ってなにやらせるんですかっ。そんな鬼気迫る表情で近付かないでくださいっ！』

『葉月ちゃん。ワシと一緒に向こうでシャワーを浴びるのじゃ。ここに居たらダメ人間になってしまうぞい』

『でも止めたほうがいいと思うのは葉月だけですか……？』

『――――――止めて来てくれ』

「頑張れ！後は任せた！」

ダッシュで明久たちのところへ向かう。一刻も早くここから立ち去らないと。

というか知るかっ！俺になにをさせる気だ！あれか？突入しろとでもいいたいのか？死んでもごめんだね。ってかこのメンツの着替え中に突入したら余裕で死ぬだろ。

『ちょ、マサ君！私一人じゃ収束がつけられないんだってばっ！！』

グットラック。千夏の幸運を祈ってるよ。

それにしても優子と未来のやり取り以外、被害者は文月の奴らで加害者が杜丘の奴らか。相性でもあるのかね。

「おい雅夜。今叫び声が聞こえたが、気のせいか？」

「気のせいだ」

「そうか。やけに魂の篭った声だったら思わず駆けつけるところだったんだがな」

駆けつけていたら死んでいただろう。命拾いしたな雄二。

「雅夜。頼まれた掃除道具持ってきたよ」
「……洗剤も借りてきた」

そこに五人分の掃除道具を持った明久と康太が到着。

「こっちは言われたとおりプールの栓を開けてきたぞい。いやはや、中は思った以上に混雑しておって、雅夜に教えてもらってなかったら危なかったところじゃ」

別の方向から秀吉も到着。事前に栓の特徴や場所を教えておいて正解だったみたいだな。

「準備は整ったようだな。んじゃ、今日はもう充分に楽しんだことだし、たまには真面目に掃除でもするか」

珍しくやる気のある雄二。やる気があるのは雄二だけでなく俺達も珍しく、本当に珍しくやる気があった。目の保養はバッチリだからな！

「行くぞ野郎共！きちんと掃除して、鉄人を見返してやるぞ！」
「「「「おーっ！」」」」

西村さんが見たら夢だと思われるような光景が今此処に繰り広げられる！

☆

プール掃除を完璧に終えた週明けの朝。

「……おい浅月。ちょっと聞きたいことがある」

ＨＲの時間に現れるなり、朝の挨拶をせずに西村さんは――――明久や雄二ではなく――――俺に聞いたきた。

「どうしましたか西村さん？」

ドヤ顔になりそうな顔を抑えながら冷静に聞き返す。

「正直、今でもこれは夢じゃないかと思ってるくらいだが……プールを掃除したのはお前らだよな？もしかしたら業者に頼んだとか、誰かを脅してやらせたとかじゃないよな？」

「……流石にそれは疑いすぎだろ。確かにそう思われても不思議じゃないが」

明久と雄二が互いを見て「してやったり」というニヤッとした顔になる。その気持ちよくわかる。

「――――――だがな。一つだけ、どうしてもお前らに言いたいことがある」
「ん？なにか問題でもあったのか？」
「問題どころではない！あのフェンスはなんだ！今度はなにをしでかしたんだ！！生活指導室で詳しい話を聞かせろ！！吉井に坂本、お前らもだ！」

やべぇ！！そういえば俺が磔にされた時、思いっきりフェンスがへこんだんだっけ！くそっ、ギャグ補正になれたせいか修理するという発想が思い浮かばなかったぞ！

「ちょ、それは雅夜がやったやつですって！僕たちは関係ありません！」
「そ、そうだ！さすがにその件で俺達が呼び出しをくらうのは理不尽だ！ええい、逃げるぞ明久！」
「了解っ！雅夜、この場は任せた――――――っていない！？」
「貴様ら、少しは見直してやったというのに結局はこれか！！鉄拳をくれてやるっ！」
「だから僕達は関係ないんですって！！悪いのは雅夜一人で――――」
「おいこら、西村さん。直して来たぞ！！！」
「「雅夜！？」」

つ、疲れた……。全力疾走なんていつぶりだ……くそったれ。

「ほら、双眼鏡。こっからでも…見えるだろ……」
「相変わらず仕事が早いな。貸してみろ。……どうやら本当に直してきたみたいだな」
「おいおい、仕事が早いとかそういう問題じゃねぇだろ！今の数秒

の間にどうやって直してきたんだ!?」
「走ってフェンスのところまで行って、反対側から平らになるように押し込んで、此処に戻ってきた」
形が少し歪になってるかもしれないが、許容範囲内だろう。
「……お前、本当に人間か?」
「え?もしかして雄二……雅夜が普通の人間だと思ってたの?」
「自覚はあるが明久に言われると無償にいらつくな。よし。紐無しバンジーをさせてやろう」
「ちょ、三階の高さは死ぬって!!窓を開けないでっ!!」
「はぁ……。まったくこいつらは……。なにがあったらこうなるんだ……」

第２１１話（後書き）

以上でプール編はおしまいですっ！！

次はどうしまょうかね？

プールの前日に起きた喫茶翡翠での騒動か、３．５巻のバイトの話か、そろそろ本編に戻るべきか。

感想とアンケートお待ちしております。

第２１２話

とある日の朝。相変わらず西村さんに押し付けられた仕事を学校に泊まり優子と一緒にやり終えた次の日の朝、ＨＲが始まるまでの間俺達は部室にいた。

「ねぇ雅夜」
「ん、どうした優子？」
「一つ、聞きたいことがあるんだけど、聞いていいかしら？」
「俺でよければ。答えられることなら答えてやるよ」
「そう。じゃあ聞くわね」

そんな中、ふとなにかを思い出した優子が聞いてくる。

「正直に答えなさい。強化合宿で今度はなにをしでかすつもり」
「企業秘密です」

さて。そろそろ時間だし、教室にでもいくとする――――――――

ガッ！（足払いをされる音）

ボスッ！（ベットに倒されてマウントを取られる音）

ゴキュゴキュ！（両手両足の関節を外せられる音）

「もう一度聞くわ。今度はなにをしでかすつもり？」

「落ち着こうぜ優子。とりあえず関節を戻してくれ。話はそれからだ」

最近の優子の動きがおかしい気がする。平気で俺が認識できないほどの速さで仕掛けてくるようになっている。これで優子も人外の仲間入りかぁ……。

「ダメ。雅夜が答えるのが先よ」

「だから企業秘密って言ってるだろ。ほら答えたから関節を戻してくれ」

「それじゃ答えたうちに入らないわ。正直に答えなさいって言ったわよね？次は首よ」

「首の関節はまじでヤバイからな！？」

笑顔で俺の首に手をかけるな。ガチで死ぬぞ。

「わ、わかった。答えるから！俺は今回はなにもしでかさねぇよ。これはマジ」

「ふーん。じゃあ、強化合宿で騒動は起こらないってことよね？」

「……ウン、ソウダトオモウヨ」

「声が裏返ってるわよ。雅夜って首の関節を外されるのが好きなのかしら？」

「んなわけあるかっ！！」

どんな趣味だよそれ。

「俺がしでかさないだけで、他の奴が騒動を巻き起こすんだよ。俺はその時ちょっと楽しみがあるだけ」
「嘘じゃなさそうね。ちなみにどんな騒動なの？」
「流石にそれは企業秘密。まぁ、大規模な騒動ってことくらいは教えとく」

これ以上教えると面白くなくなるので教えない。これだけ教えれば優子も納得してくれるだろう。

「そう。それならいいわ」

ゴキュン！！！（四肢の関節をほぼ同時にはめ直される）

「～～～～～～～っ！いきなり関節をはめ直すな！身体に結構響くんだぞ！？」
「外されるアンタが悪いの。自業自得よ」
「確かにそうだが、理不尽だろ！」

しかも同時ってどういうことだよ！どうやってやったんだ！？

「それにしても騒動ねぇ……。まったく。アンタたちはもう少し大人しくできないの？行事があるごとに騒動を起こされちゃ大変なのよ」
「無理。俺的には騒動は大歓迎だから止める理由はない。それに――――」
「それに？」

『最悪じゃぁ――――――――――――っ！』

「バカを見てると飽きなくて良い」

「雅夜らしいわね。……って、今の叫び声って吉井君のよね！？屋上のほうから聞こえたけど、なにかあったの！？」
「気にするな。どうせ脅迫状でも送られて驚いてるだけだ」
「それはそれで気になるんだけど……」

ん？脅迫なんて翡翠だと日常茶飯事で起きてるぞ。まぁ、脅迫してるのは主に陽菜さんだけどな。

「よしっ。俺達もそろそろ教室に行くとするか」
「あら、もうそんな時間？時間が経つのは早いわね」
「明日から合宿だし、心のどこかで浮かれてるんじゃないか？」
「そうかもしれないわね」

と、優子は微笑む。むぅ……。やっぱり可愛いなぁ。朝からいいもの見せて貰えて眼福だ。

「で、そろそろ俺の上からどいてもらえないか？マウントを取られていると立てないんだが」
「えー、どうしよっかな～？」
「なぜそこで迷う！？……そして悪戯を思い浮かべたような子供の顔になってるぞ優子」

身の危険を感じるのは俺だけか？

第２１２話（後書き）

バカテス第三巻『強化合宿編』始まりです！

二巻が終わってから四ヶ月近く経ってることに気付き、番外編は後にして本編をやることにしました。

というか番外やりすぎだ（苦笑）

感想とアンケートお待ちしております。

第２１３話

「よっ、島田」

あれから数分後、教室に入ろうとしたところで島田が勢いよく廊下に出てきた。

「あ、おはよう浅月……やけにげっそりしてるけど、なにかあったの？」

「気にするな。それよりいそいでるみたいだが、なにかあったのか？」

「ちょっとね。金属バットってどこにあるかしらない？」

「野球部の部室からとってくるのが一番手っ取り早いと思うぞ。取りに行くんだったら西村さんが来る前に戻ってこいよ」

「わかってるわよ。ありがとね」

お礼を言って駆け出していく島田。それを見送って教室に入る。

『……トランクスだからセーフ、トランクスだからセーフ、トランクスだから……』

『あ、明久!?自我が崩壊するほどのものが写っておったのか!?』

入るなりそうそう明久がバカをやってる光景が目に入る。あぁ、脅迫状に入ってた写真を確認してるのか。こんなところでやるなよ。

『もういやぁぁぁっっ！』

『何じゃ!?一体何が写っておったのじゃ!?』

『見ないで!こんなに汚れた僕の写真を見ないでぇっ！』

『よ、よくわからんが落ち着くのじゃ！皆が注目して――――――雅夜！お主は笑っておらんで、明久を止めるのを手伝うのじゃ！』

やだ、面倒い。ただでさえこっちは優子に『閲覧禁止』をされて疲れてるんだから、いちいち明久に構ってやれるか。

「はぁ、はぁ、はぁ……。恐ろしい威力だった……。これは僕を死に追い詰める為の卑劣な計略と言っても過言じゃない……」

「考えすぎではないかのう。メイド服くらい、人間一度は着るものじゃ」

「それは絶対嘘だ……いや、あの雅夜も昔――――」

ガッガッガッガッガッガッ！！！（マウントを取って顔面を思いっきり殴りまくる音）

「明久。今、なにを言おうとしたんだ？」

「ひゅみみゃへん。ひゃんでもひゃいでひゅ」

そうか。それなら良いんだがな。

「なにがあったかわからんが、顔の原型がなくなるまで殴らんでもよいと思うのじゃがのぅ」

「元からこんなのだろ？…いや、こっちはもうちょい凹んでたかな？（ガッ）」

「もう止めるのじゃ！これ以上は明久が死んでしまう！」

大丈夫。死ぬ一歩手前までしかやらないから。と整形拳術を続けようとすると、

「おはようございます。浅月君、木下君、明久君……？」

姫路が教室に入ってきた。

「よっ、姫路」

「姫路か。おはよう。今朝は遅かったんじゃな」

「はい。途中で忘れ物に気がついて一度家に帰ったので、ギリギリになっちゃいました。……ところで浅月君の下にいるのって明久君であってますよね？顔が凄い腫れてますけど……なにかあったんですか？返事もありませんし」

ん？おおっ、だんだん色が紫色に変わってきてるな。手加減間違えたか？

「いや、なに。清涼祭のときに明久がメイド服を着ておったじゃろ。それについて話ておったら雅夜がいきなり明久を殴り始めたのじゃ」

「メイド服、ですか？明久君は確かに可愛かったですけど……あ、もしかして」

「む。なにか思い当たることがあるのかの？」

「はい。えっと、確か小学六年生の時に――――」

「はぁ……。女子に暴力を加えるのはあまり好きじゃないんだが……仕方ないか」

悪いのは姫路だしな。うん。俺はなにも悪くない。

「やっぱりなんでもないですっ！木下君、忘れてくださいっ！浅月君もすみませんでしたっ！私はなにも思い出してませんっ！」

一瞬で土下座の体制に移る姫路。とりあえず近付いてきた康太を蹴っ飛ばしとく。

「お主もか！？なんなのじゃ！？メイド服で一体なにがあったのじゃ！？」
「ん？気になるのか？特別に教えてやらんこともないが――――――死ぬぞ」
「いらん。ワシは知らないままで良い……」
懸命な判断だな。秀吉はしゃがみこんで「大丈夫かの明久？」と明久を介抱しはじめた。

「っと、そうだ姫路。ちと良いか？」
「は、はいっ！」
「質問なんだが、メイド服姿の写真があったらどう思う？」
「すぐに逃げますね。その写真には近づきたくありません」
「なにを思い浮かべたかあえて聞かないが、明久のだ」
「え！？あ、は、はいっ。そっちですか。そうですね……」
今のは聞かなかったことにしてやろう。

『……あれ？さっきまで教室にいたはずなのに、なんで僕、川辺にいるんだろう』
『明久！しっかりするのじゃ！その川は渡ってはならぬ、戻ってくるのじゃ！』
ついでにこっちも。

「もしそんな写真があったら――――――とりあえずスキャナーを買います」
「ほう。それで？」
「それで、明久君の魅力を全世界にＷＥＢで発進しちゃいます」

天然って怖いな。発想が素晴らしすぎる。

『！――――――――はっ！？今のは……』

『おおっ！生き返ったか明久。よかったのじゃ――――――』

『なんでだろう。僕、生きていける気がしなんだけどな……』

『生き返ってそうそうお主はなにを言っておるのじゃ！？』

ちっ。明久が蘇ったか。このまま姫路に写真を見せようかと思ったんだがな。

第２１３話（後書き）

悪女よりも天然の人のほうが意外と怖いかもしれませんね（苦笑）

雅夜が優子になにをされたかは企業秘密です♪

感想とアンケートお待ちしております。

第２１４話

「そ、そうじゃ！雅夜お主なら「だが断る」……ムッツリーニじゃ！ムッツリーニならばこの手の話には詳しいはずじゃ！事情を説明して――――――」

「ムッツリーニに笑われる？」

「違う！事情を説明して脅迫犯を見つけ出してもらうのじゃ！」

「おおっ！なるほど！」

お前が言うなって言われそうだが、盗聴や盗撮に詳しい奴が高校生やってるなんておかしいよな。

「ナイスアドバイスだよ秀吉！流石は僕のお嫁さんだ！」

「婿の間違えじゃろ！？そ、それにワシは……」

「秀吉はすでにアイツが先約してる。お前のじゃない」

「木下君……未来ちゃんともうそんな関係まで進んでるんですね」

いや、冗談だぞ姫路。秀吉の真っ赤になった顔を見る限り、あながち嘘じゃなさそうだが。

『『『『『『『『『『『！？！？！？！？！？』』』』』』』』』』

と、まぁ、そんな会話をしているとＦクラスの連中が一斉にこっちを見てくる。

さて、と。

「それじゃ、僕はムッツリーニ話があるから！」

周りの様子が見えていない明久は、そのまま自分のことだけを考えて康太と雄二が話しているところに向かっていった。

「ところで、明久君のメイド服姿がどうとか……」

「ひ、姫路！ワシと話でもせんかの！？」

秀吉は姫路の足止め。別に話しても問題ないと思うんだがな。

そして俺はというと……

『我がクラスのアイドル、木下秀吉の嫁が先約済みだと聞こえたのだが』

『浅月特務一等審問官。今の話について詳しく教えてもらおうか』

ＦＦＦ団に取り囲まれていた。うーむ。いつ見ても暑苦しいな。

「冗談だよ冗談。ただ俺の知り合いの人懐っこい奴が秀吉によく構ってて秀吉もそれを拒んだ様子もあまりなかったから、周りの連中で『お前ら付き合ってんじゃねぇの？』みたいな感じでからかってるだけだ」

嘘の中にある程度本当のことを混ぜておく。というか言ってから気がついたが、コレ間違ってなくね？

『…ふむ。それなら問題はないんだが……一応その知り合いとやらの情報を教えてもらえるだろうか？どうやらこちらの情報収集部隊が手間取ってるみたいでな』

「（そりゃ、向こうには頼りになる奴がいるからな。そう簡単に知られるわけがない）お前らに教える理由が見当たらんな。安心しろ。秀吉にはまだ彼女はいねぇよ」

『……浅月特務一等審問官がそう言うなら、今回は信じておこう』

そう言って散っていくＦＦＦ団。やけに素直だな。なにか変な物でも食ったのか？逆に気持ち悪いんだが。

「っと、そうだ。今のうちに《ピポパッ。Ｐｒｒｒｒ！Ｐｒｒｒ！ガチャ》こちらＣＮ（コードネーム）『チカポンは俺の嫁』。どうぞ」

『こちらＣＮ（コードネーム）『アナタの存在が罪です』。なにかな？』

お、出た出た。向こうもギリギリＨＲ前みたいだな。

「そっちで秀吉と未来のことについて聞かれなかったか？」

『ああ、来たね。適当に嘘ついて追い払っておいたよ。なにかあったのかい？』

「ウチのクラスのバカどもにバレそうになってな。男子の間じゃ秀吉はアイドル的な存在だからな。すまんがしばらくの間、二人の関係は『中の良い友達』ってことにしておいてくれないか？」

『ん、そういうことかい。別に問題ないよ。こっちの連中には私から言っておく』

「助かる。んじゃ、要件はそれだけだから」

『Ａｌｌ　Ｌｉｇｈｔ。バイバイ、マサ君』《ガチャ》

これでよし、っと。

「遅くなってしまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。ＨＲを始めるから席についてくれ」

ちょうど西村さんが教室に入ってきたし、席に座る。

「どうだ明久に雄二。康太に依頼は終えたか？」

「うん。快く引き受けてもらったよ」

「相変わらず言ってないことなのに知ってるんだな。まぁ、ムッツリーニに任せとけば問題ないだろ。アイツはこの手の件に関してはエキスパートだからな」

『吉井に坂本に浅月！ＨＲ中に喋るな！』

「「はーい（うーす）」」

これ以上は西村さんを怒らせてしまいそうなので、喋るのを止める。

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのことは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。まぁ旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えさえ用意してあれば得に問題はないはずだが」

前の席の明久から冊子――――西村さんに押し付けられて俺と優子で昨晩完成させた栞を受け取る。

「集合の時間と場所だけはくれぐれも間違えないように」

ドスを利かせた声で言う西村さん。

今回俺らが向かうのは卯月高原という少し洒落た避暑地で、この街からは車でだいたい四時間、電車とバスの乗り継ぎ行くと五時間くらいかかるところだ。ちなみに杜丘とは正反対の方向にある。

「特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラスごとでそれぞれ違うからな」

こういう時はＡクラスの方がいいんだよな……。リムジンバスとか乗る機会なんてめったにないし。

「いいか、他のクラスと違って我々Ｆクラスは――――現地集合

だからな」

『『『案内すらしないのかよっ！？』』』

……やっぱり誰かに車で送ってもらおうかな。頼めば送ってくれそうな人は沢山いるし、大丈夫そうだが。というか明久達と一緒に電車に乗りたくないだけなんだけどな。

俺がなにをやっても、どうせ乗るはめになるだろうが。

第２１４話（後書き）

雅夜と千夏のコードネームはノリですので（笑）

感想とアンケートお待ちしております。

第２１５話

強化合宿当日……。

「……後二時間はこのまま」

運転手に後どれくらいかかるか聞いてきた霧島が戻ってきた。

「遠いとは聞いてたけど、やっぱり結構時間かかるのね」

「どちらかというと田舎だからね。森の中っていうのも時間がかかる理由じゃないカナ？」

それを聞いて少し憂鬱気味に答える優子と工藤。二時間もバスの中で座りっぱなしという事が嫌なのだろう。

「避暑地だからね。それに、なんでも僕らが泊まる旅館は、文月学園が買い取って合宿場に作り替えたらしいよ」

三人の会話に読んでいた雑誌から顔を上げずに久保が答える。ちなみに読んでいる雑誌は『意中の彼を振り向かせる方法』（女性向け雑誌。工藤から借りたらしい）

「雅夜もそんなこと言ってたわね。確か、召喚システムを使う条件が珍しく揃ってる土地なんだって」

「へ～。召喚システムって土地とかにも関係があったんだ。てっきりシステムのデータと設備さえあればどこでも出せると思ってたよ」

「……初めて知った」

「改めて考えると、召喚システムについて僕たちは知らないことばっかりだね……。科学とオカルトと偶然によって生み出されたシステム、って事くらいしか教えてもらってないんじゃないかな？」

「「うん」」

久保の言うことに皆が素直に頷く。システムのことより、試召戦争のことについての説明しかされてないからな。というかシステムのことを言っても理解できないからだろうが。

まぁ、そんなことは置いといて。

「いい加減、この縄解いてくれないか？後、俺がここに連れてこられた理由を教えてくれ」

横たわっていた身体を起こして、優子に言う。

捕まったのは今朝のこと。明久たちと一緒に卯月高原へ行くため駅で待ち合わせしていたところ、後ろからいきなりハンカチに染み込んだクロロフォルムを嗅がされ、意識が朦朧とした瞬間縄で縛られリムジンバスへと押し込まれ、つい先程まで寝かされていた。

「あ、起きてたの雅夜。てっきりまだ寝てるかと思ってたわ」

なんの悪ぶれた様子もなく、縄を解き始める優子。

「起きたのはついさっきだ。何時間くらい寝てたんだ俺？」

「三時間くらいかな。出発の一時間くらい前からリムジンバスの中で寝てたよ」

「……バスに乗ったら既に縄で縛られて横たわっていた」

「皆驚いてたよ。縄で縛られてたことじゃなくて、Ｆクラスの君がＡクラスのリムジンバスの中にいたことにね」

縛られた姿は雄二で見慣れてるのか。相変わらず常識がなくなってるよな文月学園。

「で、雅夜をここに連れてきたわけなんだけどね。特に理由はないわ」

「ないのかよ！？それにしてはやけに準備は良いと思うんだが……」

「この前、陽菜さんに手渡された奴よ。『必要になったらいつでも使って』って真剣な顔で渡されちゃった。クロロフォルムの他に痺れ薬やなんの効果が出るかわからない変な薬もあったわね」

「貰うなよ！！というかそんな危ない物は今すぐ捨てろ！」

「あ、でもほとんどの奴は代表にあげちゃったからアタシはもってないわよ」

「なにやってんだよ優子！おい、霧島。雄二以外の奴に絶対に使うなよ！！」

「……わかってる。使うのは雄二にだけ」

「いや、坂本君にも使ってはいけないと思うんだが……」

「というかなんでその陽菜さんって人はそういうものを沢山持ってるの……？」

そこは気にしない方がいい。

「ったく…。ま、今更なに言っても遅いか」

「あ、ちゃんと秀吉には雅夜がこっちに居ることは言ってあるから大丈夫よ」

「そうか。なら『明久が意識不明になった！こいつはマジでヤバイぞ！』って雄二からメールが来てても問題ないよな」

「問題あるよね！？吉井君になにがあったの！？」

「ええ、もちろん」

「優子も頷かないでよ！ほ、ホントに吉井君は大丈夫なの！？意識不明って合宿どころじゃないよね！？」

大丈夫、大丈夫。臨死体験はするかもしれないが、死にはしないさ。

「そんなことより、腹が減ったな。昼飯食っていいか？」

「確かにお腹がすいてきたわね。アタシも食べよっかな」

「今は一時半か。お昼休みは少し過ぎた頃合だね」

「……皆で食べよう」

そう言ってカバンからそれぞれ持参した昼飯を取り出す。霧島と優子は弁当で久保はサンドイッチが数個である。

「あ、あれ？吉井君のことを心配してるのってボクだけ？……なんか心配してるボクがおかしいみたいだね」

「気にすんな。工藤は常識人なんだから、それでいいんだよ」

「ありがと。褒め言葉として受け取っとくよ」

ボクも弁当たべよー…と、力無い声を発しながらカバンから弁当を取り出す工藤。元気だせって。

「あれ、雅夜のお昼は？」

「俺は基本昼は少しで済ませるからな。はっきりいってお茶とお菓子が少しあれば足りるんだ」

形が崩れないよう箱のなかに入れて持ってきたシュークリームとクッキー、魔法瓶に煎れてきた紅茶を取り出す。

第２１５話（後書き）

Ｆクラスの連中でではなく、Ａクラスの連中といる雅夜。

……あれ？

感想とアンケートお待ちしております。

第２１６話

「……女の子みたいなお昼ね」
「ほっとけ」

最近は疲れることが多いから糖分が欲しいんだよ。それに杜丘の奴らの昼飯に付き合うと、アイツらお菓子オンリーで済ませたりするから、それに合わせてると自然とこれで足りるようになったんだよ。

「あははっ。浅月君ってもっと食べる人だと思ってたよ～」
「……それだとお昼というよりオヤツ」
「ほんとうにそれで足りるのかい？」

俺の昼飯を見て驚いた表情をする三人。その気持ちはわかる。俺だって自覚はしてるさ。

「今日は運動とかはしてないからな。普通に過ごしてる分にはこれで足りる」

紅茶を飲んでクッキーを一枚つまむ。ん、上出来。

「やっぱりクッキー系統は冷めても美味しいように作るのがポイントだよな。焼きたては焼きたてで旨いが」
「って、これ自作！？この前のプールの時のマフィンも美味しかったけど……浅月君ってもしかしてお菓子作り好きなの？」
「好きで得意だ」

そして趣味でもある。

「それに雅夜の作るお菓子はそこら辺のお店で売ってるのより美味しいわよ。雅夜、一枚貰っていいかしら？」
「クッキーなら沢山あるから別に構わんが、俺の昼飯なんだから食いすぎるなよ。三人もどうだ？」
「え、いいの？ありがと～♪実はというとさっきから食べたかったんだよね～」
「……いただきます」
「では僕も相伴に与ろうかな」

そう言って包み紙の中からクッキーを取っていき、口の中へといれる。というかお前ら、自分の飯はいいのか？

「ん～、やっぱり雅夜の作るお菓子はいつも美味しいわね」
「……プロの腕前に匹敵する」
「これは驚いた……。まさかここまで美味しいとはね。Ａクラスの設備にある菓子類に常備しておいて欲しいくらいだよ」
「その案良いわね。学園長に相談してみましょうかしら」
「……クラスのみんなも喜ぶ」
「流石にそれは面倒いからな！……って、あれ？」

工藤の反応がない……固まってないかコイツ？

「どうした工藤？おーい」

固まってしまってる工藤の体を前後にゆする。なにがあったんだ？

「……はっ！？今少しの間意識飛んでたかも！」
「それやばいだろ、おい！大丈夫なのか？」
「た、たぶん大丈夫。ちょっと考えごとしてたらトリップしちゃっただけだから」

「それ大丈夫って言えるの！？」

しかも考えごとってなんだよ。

「浅月君にはボクの好物教えたことあったっけ？」

「聞いたことはないが知ってる。シュークリームだろ」

「教えてないのになんで知ってるの！？ま、まぁ、それは置いといて、そうボクの大好物はシュークリームなんだ」

そんなに身を乗り出して力強く言わなくてもわかってるって。大好物ってほどじゃないが、俺もシュークリームは好きだしな。

形を崩れないようにもってきたシュークリームをカバンから取り出す。

「だからボクの好きな食べ物はシュークリームなんだよ（ジー）」

「大事なことだからって二回も言わなくていい」

「好物はシュークリームなんだよ（ジーーー）」

「三回目もいらん」

工藤の視線が俺が作ってきたシュークリームに釘付けになる。

……。

「（ツー）」（工藤の前に持っていく）

「！」（やったぁ♪という顔でシュクリームに手を伸ばす）

「（ヒョイ）」（触れる寸前で引き戻す）

「ぁ……」（項垂れる工藤）

「（パッ）」（シュークリームさらにもう一つ取り出して両手に持つ）

「（ッ！）」（工藤の目がキラキラと輝く）

「（アーン）」（右手に持ったシュークリームをゆっくりと口に運んでいく）

「あっ！！」（手を伸ばして奪い取ろうとする）

「（ササッ）」（手を上に上げて取らせないようにする）

「……ふぅ」（ホッとして手を胸に当てる）

「（アーン）」（今度は左手に持ったシュークリームを口へと近づける）

「（バッ！！）」（反射的に手を伸ばす）

「（スッ）」（また上に上げて工藤が届かない位置に持っていく）

「……（ジー）」（手を伸ばした状態で俺の顔を睨んでくる工藤）

「（ニコッ）」（笑顔でお返事）

やばい…っ。そろそろ笑いが堪えきれなくなってきた……っ。

「意地悪しないでよっ！！」
「なんのことか――――クッ！だ、ダメだ！堪えきれない…！わははははははっ！！！！！」
「あ、笑った！？うぅ…。こうなったら意地でもとってやるんだから！！」

席から立ち上がって襲いかかってくる工藤。

「ククッ。誰が捕まるかよ！」

シュークリームを上げたまま工藤から拠けて席から立つ。身長＋反射神経の差があるかぎり、取らせはしないっ！！

「足掻け、足掻け！そして俺ももっと楽しませてくれ工藤！」
「性格悪っ！みんなも見てるだけじゃなくて助けてよっ！」

バスの中を工藤から逃げる回る。リムジンバスという無駄に広い空間が仇となったな！！

『あ、代表。雅夜のカバンの中からもう一個シュークリーム出てきたけど、半分こで食べない？あ、久保君もいるから三分の一ずつね』
『僕はいいよ。二人で食べると良い』
『……いいの？勝手に食べちゃって』
『平気よ。どうせ元から誰かに上げる（食べられる）分を考えて多く作ってあるはずだから、食べちゃっても問題ないわ。どうせならクッキーもクラスのみんなにわけてあげましょ』

『それだと彼のお昼が無くなってしまうんじゃないかい？』
『大丈夫、アタシの弁当を少し分けてあげるから。それより、雅夜が愛子で遊んでる間に配っちゃいましょ』
『……うん。シュークリームを先に食べてから配る』

ん？なんか不穏当な会話が聞こえた気がするぞ？

第２１６話（後書き）

工藤を弄って終わった（笑）

感想とアンケートお待ちしております。

第２１７話（前書き）

雅夜「結局あの後工藤と工藤の味方についたＡクラスの女子連中に囲まれて、シュークリームを二つとも持っていかれた。せめて一つにしてくれよ……。

仕方なく席に戻って残ってる奴を食べようと思っていたら、俺が作ってきたお菓子が全て美味しく頂かれた後だった。……泣いていいか？」

第２１７話

「くそっ！生き返りやがれ明久っ！！お前はこんなところで死ぬようなバカじゃないはずだっ！！」

合宿所について最初に取った行動、心肺蘇生

「雅夜も見てるだけじゃなくて手伝ってくれ！今回のはガチでやばいぞ！」

――――の見学。

いやだね。今はそんな気分じゃないんだ。明久の命？ペッ。そんなもん捨てちまいな。

「雄二！ＡＥＤを借りてきたぞい！！」

と不貞腐っていると、ＡＥＤを抱えた秀吉が扉を勢いよくあけて中に入ってくる。

「よっしゃぁ、ナイス秀吉！さっそく取り掛かるぞ！今は一刻も争ってるんだ！」

「うむ、合点なのじゃ！！」

テキパキとＡＥＤを明久に慣れた手つきで取り付け始める二人。ＡＥＤの扱いになれる高校生って……。

「流石の俺でも、明久の死因が『女子の手料理を食べたから』ってのは可哀想だと思うからな…！」

「ワシもクラスメイトから殺人犯を出したくないしの…！」

あれ？死にかけてる明久に対しての心配は無し？

「これで、どうだ！３００Ｊ、チャージ！！」

「（ビクンッ！）……ぅん……」

「明久、起きたか！よかった……。電気ショックが効いたようだな……」

明久の反応があると、雄二は安心した表情を浮かべてＡＥＤをしまい始める。

「結局生き残ったか。流石に知り合いが死んだら目覚めが悪いからな、よかった」

「幼馴染みなのに友達どころか知り合いなの！？……ところで、ここは合宿所？」

「ああ、そうだ。まったく贅沢な学校だよな。この旅館、文月学園が買い取って合宿所に作り替えたらしいぞ」

それはもうさっき話した。

「まぁ、明久が無地に生き返ってよかったのじゃし、愚痴らぬのじゃ」

秀吉は胸を撫で下ろして明久の横に座る。

「心配してくれてありがとう。秀吉もこの部屋で一緒なんだよね？」

「うむ。ムッツリーニも含めた五人でこの部屋を使うのじゃ」

「西村さんに問題児を一ヶ所に纏められた結果だけどな」

「あ、やっぱりそうなの？」

ちなみに秀吉に対して問題を起こさせない為、ってのも少しはあるらしい。ＦＦＦ団の連中の中に秀吉を入れたらなにか起こりそうだからな。

「ムッツリーニはどこいったの？覗き？盗撮？」
「友人に対してそんな台詞がサラッと出てくるのはどうかと思うのじゃが……」
「康太ならもう来るぞ」

ガチャッ

「……ただいま」

康太が部屋に入ってくる。なぜか普通の奴より、逆に気配を消してる奴のほうが察知しやすいんだよなぁ……。

「おかえりムッツリーニ」
「……明久。無事で何より」
「あ、心配してくれていたんだ。ありがとう」
「……情報も無駄にならずに済んだ」
「情報？昨日俺と明久が頼んだ例のヤツか。随分早いな」

情報という単語に反応する雄二。

「ムッツリ商会は仕事が早いことが売りだからな」
「……そうだと思ってるなら少しは手伝え」
「断る。けど最近そっちで動いてないからなー。よし、今度は手伝うとする」
「……それなら良い」

けど暇ができると誰かしらに呼び出しやらなんやらくらうからな…。その今度がいつになるやら。

「……昨日、犯人んが使ったと思われる道具の痕跡を見つけた」
「おおっ。さすがはムッツリーニだね」
「……手口や使用機器から、明久と雄二の件は同一人物の犯行と断定できる」
「そうなのか。まぁ、そんなことをするやつなんて何人もいないだろうし、断定して間違いなさそうだな」
「というか僕らの学年に三人もいるなんておかしいと思うよ」
「三人ってもしかして俺も入ってるのか？失敬な。俺は盗聴や盗撮なんてマネはしないぞ」

その辺は全て康太にやらせてる。どうも写真は苦手でな。

「それで、その犯人は誰だったの？」
「……（フルフル）」
「あ、やっぱり犯人はまだわからないの？」
「……すまない」
「いや、そんな。協力してくれるだけでも感謝だよ」
「……『犯人は女生徒でお尻に火傷の後がある』ということしかわからなかった」
「君は一体なにを調べたんだ」

火傷ねぇ…。切り傷や打撲痕は余裕で平気で銃痕も慣れたんだが、やっぱり火傷だけはダメだな。生理的に身体が受け付けない。

第２１７話（後書き）

忘れ気味な設定…『雅夜はムッツリ商会でバイトしている』

初期のころに付けた設定って忘れることがありますよね（苦笑）

感想とアンケートお待ちしております。

第２１８話

「……校内に網を張った」

そう言いながら小さな機械を取り出す康太。あれは……康太がいつも使ってる小型録音機だな。

「これは？」

「……小型録音機。昨日学校に盗聴器を仕掛けた」

――――ピッ《――――らっしゃい》

スイッチを押すとノイズ混じりの声が聞こえてきた。

「随分と音が悪いね」

「校内全てを網羅したのなら仕方ないだろう。音質や制度にこだわる余裕はないからな」

「それにしても『らっしゃい』か。声からして女子なのに、八百屋のオッチャンみたいに言うんだな」

音が悪い為人物の特定はできないが、女子だということがわかる。

《……雄二のプロポーズを、もう一つお願い》

対するもう一つの声。こっちも音質が悪いため声からは人物の特定ができないが、内容と雰囲気で誰だか断定できる。

「しょ、翔子……！アイツ、もう動いていたのか……！」

「よっぽど早く手にいれたいんだね」

「俺にでも言ってくれれば無料で渡したのにな……」
「お前も持ってるのか！？」

んー。そりゃあ、ねぇ。もちろんだとも。

《毎度。二度目だから安くするよ》
《……値段はどうでもいいから、早く》
《流石はお嬢様、太っ腹だね。それじゃあ明日――――と言いたいところだけど、明日からは強化合宿だから引渡しは来週の月曜で》
《……わかった。我慢する》

「あ、危ねぇ……。強化合宿があって助かった……」
「タイムリミットが来週の月曜まで伸びたね」
「合宿中にどうにかしないというのは変わらないがな」

土日に犯人を特定出来るすべはあまりないし、合宿中に無理だったら諦めるしか方法はないだろう。

「……それで、こっちが犯人特定のヒント」

康太が機械を操作する。

《――――相変わらず凄い腕前だね。でも、このまえ母親にバレてお灸を据えられたんでしょ？よく続けてやれるよね》
《ああ、文字通りお尻にやられたよ。全くいつの時代の罰なんだか。まぁ、この程度じゃ乙女の心は止まらないけどね》
《それはまた……バカだね》
《その口調の君に言われたくないね。でも未だに火傷の痕がお尻に残ってるんだよ。なにか早く治すいい方法知ってるかい？》
《知ってるけど教える気はないよ。面倒だしね。自然治癒に任せれ

ばいいんじゃないかな？》

《……その口調でも性格はまるで変わらないんだね？まぁ、放っておけばそのうち治るか》

その後は他愛もない商談がいくつか続いた。

「……わかったのはこれだけ」

「なるほどね。それでお尻に火傷の痕か」

「今の会話を聞いても女子というのは間違いなさそうだな」

「口調は芝居かかっていたけど女子なのは間違いないだろうね」

うんうんと頷きあう明久と雄二。自分で乙女って言っちゃってるし、そりゃわかるよな。

「犯人を特定できる有益な情報だけど、お尻の火傷か……。仮にスカートを捲ってまわったとしてもわからない可能性があるし、う～ん……」

「赤外線カメラでも火傷の痕なんて映らないだろうしなぁ……」

「流石に身体測定のデータのなかにも『お尻に火傷の痕がある』って載ってなかったし……」

真剣に真顔で女子の尻を見る方法を考える俺達。……はたから見たら異様だろうな。

「お主ら、さっきから何の話をしておるのじゃ？」

と、今まで側で話を聞いてるだけだった秀吉が声をかけてくる。

「秀吉、実はね――――――――――（以下略）」

事情を知らなかった秀吉に明久が簡単に説明する。

「そうじゃったのか。それにしても、尻に火傷とは……」

真剣に尻を見る方法を考える奴が一人増えた。

「そうだ！もうすぐお風呂の時間だし、秀吉に見てきてもらえばいいのか！」

「明久。なぜにワシが女子ブロに入ることが前提になておるのじゃ？」

「というか無理だからな明久」

「どうして無理なのさ？」

「いや、じゃからワシは男じゃと――――」

「しおりの３ページ目を見てみろ」

秀吉の言葉を遮って雄二がしおりを明久に放りながら言う。確か３ページ目に書いてあるのは……

～合宿所でも入浴について～

・男子ＡＢＣクラス……２０：００～２１：００　大浴場（男）
・男子ＥＤＦクラス……２１：００～２２：００　大浴場（男）
・女子ＡＢＣクラス……２０：００～２１：００　大浴場（女）
・女子ＥＤＦクラス……２１：００～２２：００　大浴場（女）
・Ｆクラス木下秀吉……２０：００～２１；００　個人風呂？

「……くそっ！これじゃあ秀吉に見てきてもらうことができない！」

「そういうことだ」

「どうしてワシだけが個室風呂なのじゃ！？」

答えは簡単。プール編でのフラグは消したけど――――――杜丘の連中の脅しというフラグは消しなかったからな！
未来に脅されるなんて初めてたぞ。

……未来一人じゃなくて、千夏たちも引き連れてきたときは目を疑ったが。

第２１８話（後書き）

杜丘と文月――――――――互いに影響がありすぎる（笑）

感想とアンケートお待ちしております。

第２１９話（前書き）

すみません。昨日はコミケに行っていまして更新できませんでした（汗）

第２１９話

杜丘と文月の奴らの変化を感じて一人で黄昏（たそがれ）ていると……

――――――ドバン！！

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！」

勢いよく扉を開けて俺らの部屋に女子がぞろぞろと入ってくる。

さて、と。

『な、なにごとじゃ！？』

『木下はこっちへ！そっちのバカ三人は抵抗をやめなさい！』

『なぜお主らは咄嗟の行動で窓に向かえるのじゃ？……って、三人？明久に雄二にムッツリーニ……雅夜はどこじゃ！？さっきまで此処におったのじゃが、いつのまにかに消えておる！？』

気配を消して女子と入れ違いになるように部屋を出ていく。すまんが皆、俺は……逃げる！

「（ガシッ）雅夜、談話室に行くわよ。詳しい話しはそこで聞かせてもらうから」

――――ことも出来ずに廊下に出たところで優子に捕……まっ……た？

「……WHY？」

「なんで英語なのよ。いいからさっさと歩きなさい。此処にいたら

雅夜も荒ぶってる女の子たちの的になっちゃうわよ」
「あ、あぁ……」
優子に手を引っ張られてそのまま談話室へと連れて行かれる。

「で、雅夜。さっそく話しに入らせてもらうけど、さっきの件について詳し――――」
「へい、優子。ちょっとストップだ。先に一つだけ聞かせてもらえないか？」
「なによ」

談話室についてそうそう話しをはじめようとする優子を遮って言うと若干嫌そうに優子が返事をする。まぁ、そう怒るなって。冷静になろうぜ？ほら深呼吸して、スーハースーハー……

「なんで気配を消したのに優子に捕まるんだよ！？それと事前に騒動があるけど発端は俺じゃないって優子には言ってあるよな？だったらさっきの件もそれにかんすることだとわかるはずだ。それなのになんでお前があの場にいたんだよ。あれか？姫路たちと一緒に拷問にでも俺をかけにきたのか？いくら俺でも痛いもんは嫌なんだぞ？それから――――」
「アンタが冷静になりなさいよっ！！」

っとと。

「すまんすまん。いやー、文月の生徒に気配を消したのにバレるなんて初めてでな。ちと動揺しちまった」

教師と警備員にはいるけどな。杜丘？あぁ、あそこは気配を消した程度じゃ普通に声かけられるぞ。

「なんか誤解してるみたいだけど、別にアタシは雅夜を認識して捕まえたわけじゃないわよ？」

「……は？」

「感よ、感。さっきみたいにいきなり女子が部屋に入ってきた時、雅夜なら気配を消して皆を挑発するように横を通ってゆっくりと部屋を出ていくだろうと思ったのよ。だから後はタイミングを見計らって手を突き出して雅夜の手を掴むだけ。まぁ、まさかあんなに上手く行くとはアタシ自身思ってなかったけどね」

つまり俺が出てくるタイミングを予想して闇雲に手を出したら俺を捕まえられたってことか？

「それって……なんていうか、こう……」

「ん？」

「そろそろ優子も人外（おれたち）の仲間入りしちまったんだな。哀しいような絶望したような……複雑だ」

「仲間入りしてないわよっ！！流石にそこまでの域まではいってないわよ！！」

「そこまでってことは少しは自覚してるのか？」

「雅夜と過ごしてれば自然とそうなるわよ」

ごめんなさいっ！！

「気を取り直して……。さっきの件についてだっけ？」
「ええ。雅夜ならどうせわかってるんでしょうが、脱衣所に小型のカメラとマイクが設置してあったのよ」
「それで、そんなことをやりそうなのは俺達……まぁ、二学年問題児代表の俺達くらいしかいないから俺達のところに問い詰めにきた。正直、盗撮＆盗聴をやりそうってのは否定せんよ。男のロマンだしな」
「そこで開き直るのもどうかと思うわよ？」

嘘ついても仕方ないしな。

「問題は誰がカメラを仕掛けたか、なのよね」
「意外だな。優子は康太が犯人とは思ってないのか？」

少しは疑われているかと思ってたんだが。

「いい雅夜？この『バカノリ』はＲ―１５のタグが付いてるけど、原作は規制なんかかかってないのよ？だから土屋君は盗撮や盗聴をやっていても、女子風呂みたいな危ないところに仕掛けるわけないわ」
「メタ発言自重しろーっ！！！！！！」

なに血迷ってんだよっ！！

第２１９話（後書き）

優子、どうしようかな？

このまま人外キャラとして成長していくのも良いけど

やっぱり普通に戻ってもらいたいという気持ちもあるんですよね（苦笑）

感想とアンケートお待ちしております。

第２２０話（前書き）

『第三回・浅月人生相談』のアシスタント決めアンケートは明日の１２：００までとさせて頂きます。

まだアンケートに書かれていない方は、アンケートの回答だけでもいいのでどしどし書いていってくださると嬉しいです（＊´∀`＊）

第220話

メタ発言がどれだけ危険かを優子に三十分程言い聞かせてから、俺は自分の部屋へと戻る。

「おーい、生きてるかー？」

部屋に入るなり中にいる拷問を食らって座っているのがやっとの状態の明久たちに声をかける。

ん、逃げて正解みたいだったな。

「いつもより生命の危機が多い気がするけど、なんとか大丈夫だよ……。というか見捨てないで助けてよ……」

「やだ、面倒い。というかどう助けろと？」

こんなこと日常茶飯事なんだからいちいち助けていられるかよ。

「酷い濡れ衣じゃったのぅ……。なぜだかワシは被害者扱いじゃったのも解せぬが」

「ホント、酷い誤解だったよ」

「……見つかるようなヘマはしないのに」

康太はもう黙ってろ。

「雄二、大丈夫？さっきから黙っているけど」

返事のない雄二に明久が話しかける。すると雄二は、なにかを決意したかのように立ち上がる。

「……上等じゃねぇか」
「え？雄二。どうしたの？」
「気にするな明久。雄二は、な……？」
「可哀想な奴を見るような目をするなっ！！どうせここまでされたんだ。本当にやってやろうじゃねぇか」

雄二の目が強い光を宿す。声には少し怒りを孕んでおり、どうやら火がついたみたいだ。

「まさか、本当にって……」
「ああ。そのまさかだ。あっちがそう来るなら、本当に覗いてやろうじゃねぇか！」
「雄二。そんなに霧島さんの裸が見たいなら、個人的にお願いしたらいいんじゃない？」
「バ、バカをいうな！翔子の裸なんかに興味があるか！」
「もしかして……興味がわかないほど見飽きてるのか？」
「んなわけあるかっ！！！」

ちぇ。面白くないな。

「ふむ。もしや、例の尻に火傷のある犯人探しかの？」
「そうだ。流石に覗きなんて真似はやりすぎだと思って遠慮していたが……向こうがあんな態度で来るなら遠慮は無用だ。思う存分覗いて犯人を見つけてやろうじゃないか」
「これで下心がなかったら完璧なんだけどな」

顔を逸らすな。ちなみに俺は下心があるかないかで言うと――――――無い！！この合宿の目的はただ一つだけだからな。

「……さっきのカメラとマイクは、脅迫半の物と同じだった」

「仕掛けられるのは康太か犯人（あいつ）くらいしかいないしな。断定出来るだろう」
「なんじゃと？それは本当かのムッツリーニ、雅夜？」
「……（コクリ）」
「ああ」
「そうか。それは嬉しい事実だな」
「そうじゃな」
「……（コクリ）」

明久を置いて四人で頷きあう。

「つまり、どういうこと？」
「流石明久。この程度の会話にもついてこられなかったか」
「それが明久が明久である証明だからな。説明してやると、雄二と明久を脅している犯人は同じで、さっきの覗き犯のカメラとマイクがその犯人と同じだった」
「そして、覗きの犯人は火傷の痕があるという話しだから――――」
「ああ、なるほど！その火傷の痕がある人を探したら全部解決するってわけだ！」

手をポンッと打って納得する明久。うん、すげぇ今更だな。明久らしいけど。

「これでもう迷う余地はないな」
「そうだね！やってやろう！…って、それにしても相変わらず雄二って霧島さんのことになるとやる気が凄いよね。どうしてそこまで頑張るのかって疑問に思うくらいだよ」
「……実はこの前、いつものように翔子にクスリをかがされて気を失ったんだがな」

……優子が霧島に渡した陽菜さん特性の薬じゃないよな？
俺が原因とかそういうわけねぇよな。うん、きっとそうだ。そうに違いない。

「ごめん。その前置きから既にイロイロと厳しいと思う」
「大丈夫だ明久。薬なんてよくあることだ」
「雅夜の普通は普通じゃないからアテにならないよ」

いや、杜丘高校の話しなんだが……。

「目が覚めたらヤツの家に拉致られていたんだ」
「ふぅん。そこで霧島さんの両親に挨拶をしたとか？」
「いや、そうじゃない。ただ、ヤツの家に――――――俺の部屋が用意されていたんだ」

部屋？……ああ、あの牢屋か。対雄二用トラップが満載で、そう簡単に逃げられなくしてあるあの部屋のことか。

「あんな台詞を聞かれたら、間違いなく俺は、俺の未来は……！」

満更でもないと思うんだけどなぁ……。やっぱりそういうのは強制されてじゃなくて、自分の意思で言いたいのかね？その気持ちよくわかる。

「そ、そうとなれば、すぐにでも向かわねば風呂の時間が終わってしまうぞ！」
「……（コクコク）」
「だな。決意したら時間切れだった、なんてつまんないオチはいらねぇからな」

「え？三人も協力してくれるの？」
「うむ。友人の危機なのじゃ。当然じゃろ。……雄二の台詞には責任があるしのう……」
「……（コクコク）」
「騒動有る所に俺が居る。覗きに参加するのは当然だ」

正直俺の目的は最終日だがせっかくだから初日から楽しませてもらおうかっ！！！

第２２０話（後書き）

気がついたら夏休みも残り１５日程。

……宿題なにもやってねぇ（；。Д。）！

感想とアンケートお待ちしております。

バカテスト第二十問目……（前書き）

アンケートにご協力いただいて、ありがとうございます！
アンケートの結果は工藤：３　霧島：１　千夏：１　由美：１　未来：１　深風：１　優子：４　明久：３　アヤメ：１
となり、前々回に続いて優子となりました！

バカテスト第二十問目……

「今回は前回と違って、普通に呼んだわね」
「毎回毎回ネタに走ってもしょうがない。それに全然人生相談のほうに力が入ってないからな」

放課後の部室。いい加減、アシスタントを呼ぶときのに時間をかけすぎているので、今回は普通に呼ぶことにしたのだ。

「そういえば、バテノリ本編じゃ今アタシ達合宿所にいることになってるけど、学校の部室でいいの？」
「そこはツッコまない方向でオケ」
「はーい」

では、さっそく一枚目に行きますか。紙束のカナから一枚抜いて優子に渡す。
俺一人じゃ手を付けられなくて困っていたやつを。

二年生　T野M紀さんのご相談

『清涼祭のときに見かけた、とても可愛らしい女の子に一目惚れをしました。誰なのか気になって調べてみたら、彼女は実は女の子ではなく女装していた男の子――――――Y井A久君だったのです。私はどうしたらいいでしょう？というかAキちゃん可愛いよぉ！！はぅ～。お持ち帰りしたいよ～。――――――（以下感情の赴くまま

にAキちゃんの可愛さについて書かれているため省略）』

「これが送られたのは清涼祭が終わったあたりだな」
「えーっと、内容をまとめると……『好きな人が出来たけど、女の子かと思っていたらその子は実は男の子だった』ってことでいいのかしら？」
「ああ」

女子が女子に一目惚れって所は少しおかしいが、珍しくもないのでスルー。

「好きな人が女の子じゃなくて男の子だった。……これって普通は男子が言う台詞じゃない？」
「普通はな。文月学園の生徒じゃある意味こっちが普通じゃないだったりするんじゃないか？ヘタすれば清水とかも言ってるかもしれないぞ」
「流石にそれはないでしょ」

いや、あながちありやなくないかもしれないぞ？

「ま、そんなことより。これについて一言どうぞ」
「そうね～。女装した彼が好きなら、彼が女装してるときにアタックしてみるのもいいかもしれないわね。雅夜は？」
「俺も優子とだいたい同じだな。女装してる姿に一目惚れしたなら、いっそそいつを彼氏にして、いつでも女装させるような立場になるのも一つの手かもしれない」

正直どうでもいいが。まぁ、最後に一言付け足す事が有るとすれば、

「「彼がどう思うかわからないけど」」

☆

「それでは二通目行ってみよーっ！」
「アンタ、ノってきてない？」

まともに進んでるからな。紙束の中から一枚適当に抜いて優子に渡す。

二年生　Ｎ本Ｋ二さんのご相談

『俺には付き合っていた彼女がいるんだが、清涼祭中に無理矢理女装させられた時の写真を彼女――――Ｏ山Ｙ香に見られてしまい振られてしまった。ヨリを戻したいんだが、なにかいい案はあるか？教えてくれ』

「黙れ女装趣味の変態野郎。付き合えたの自体奇跡なのにそんなことしたら次なんてあるわけねぇだろカス」

親指で首の前を一の字を書く。くそったれ。なんでこんなもん引いちまったんだよ俺。引き運悪ぃな。

「一気に機嫌が悪くなったわね。どんだけ嫌いなのよ」
「クズなのに自分は頭が良いだとか思って好き勝手してる奴ほどウザイ奴は居ねぇよ。あー気分悪い。優子、次だ次」

「雅夜が此処までの態度を取るなんて珍しいわね。まぁアタシも嫌いだからどうでもいいけど」

しかも微妙に上から口調で頼んでくるってのも気に入らない。

個人的に文月学園の中じゃ嫌いな奴ＴＯＰ３に入る。残りの二人？

それは秘密だ。

「それでは三枚目～♪」

「テンション変わりすぎよ！！」

「時間的に次で最後だな。よし、優子。お前が選んでくれ」

紙束を扇状に広げて優子の前に差し出す。今の俺は引き運がない！

俺が引くと嫌な奴か面倒い奴を１００％引くだろうからな。此処は優子に託す！！

「別にいいけど……後悔してもしらないわよ」

と前置きをして、優子は引いた一枚を読み上げる。

二年生　Ｎ瀬Ｙ美さんのご相談

『最近、心の底から楽しめることが無くて身体が宴(きょうらん)を求めていて困っています。友人達――――Ｎ島Ｍ来やＵ田Ａ蒲をからかったりしてどうにかやって抑えてるんですが、これだけではやっぱり物足りなく、近いうちに爆発してしまいそうです。この蟠(わだかま)りを無くすいい方法を教えてください！』

「これって由美の？なんで杜丘の生徒の由美が文月学園の人生相談にお便りだしてるのよ」
「そこは気にするな。というか……うわぁ……」
頭を抱えて蹲る。あれだな。俺の引き運が悪いんじゃなくて、運そのものが悪いんだ。思いっきり後悔してるよ俺。
「いつか来るとは思っていたが、ついにきちまったか……」
「ついに？なにか思い当たることがあるのね」
「まぁな……」
ちょびちょび動いていたとは言え、全力全開でやったのは俺が知る限りじゃ三年前だしな……。今までよく耐えていたほうだと思うが、できればまだ先であって欲しかったんだがなぁ。
「どうする雅夜？なんだかアタシには対処しきれないような感じがするから雅夜に全部任せたいんだけど」
「ああ。この件については全部俺がやっておく。正直不安しかないが」
はぁ……。アイツ、絶対本気でかかってくるだろうし……骨の十数本は観念しといたほうはよさそうだな。
「大丈夫？なんだかアタシまで不安になってきたんだけど」
「まぁ、たぶんどうにかなるだろ。最悪、骨は拾っておいてくれ」
「ちょっと、それホントに大丈夫なの！？」
時は……合宿明けがちょうど暇な時間が沢山あるからその時でいっか。

バカテスト第二十問目……（後書き）

第三回『浅月人生相談』～了～

今回はいつもとまったく違う感じでお送りしました（苦笑）

というか夏休みの宿題を片手にやっていますので、少しおかしな部分があったかもしれません（汗）

ありましたら、すみませんでした（泣）

――第四回『浅月人生相談』アンケート――

※優子の警戒心がＵＰ！

※由美の様子が……？

Ａクラス　霧島　工藤　優子

Ｆクラス　明久　雄二　康太　秀吉　姫路　島田

杜丘高校　アヤメ　忍　千夏　未来　由美　祭　歩　悟志　大和

その他　深風　榊　マスター　陽菜

の中から何人でもいいので選んでもらえたらありがたいです。

（※注意：出てくるのは一位の人だけです。同立一位の場合は先に投票されたほうを優先します）

感想とアンケートお待ちしております。

第２２１話

「……女子風呂の位置は確認済み」
「経路は一つ。どうどうと正面から行くしかない」
言うがいなや部屋を飛び出して階段のほうへと向かう。
「うし。雄二起きて！覗きに行くよ！（ボゴッ）」
「ぐふっ！――――――はっ！？」
「明久も雄二の治し方が手馴れてきたのう」
コントしてないでとっとと付いてこい。
「……後半組の入浴時間、残り四十分」
「時間が無いね。急ごう」
「そうだな。走るか」
「了解じゃ」
「着替え場で女子とばったりなんかしたくないからな」
音をたてないように焦らず急いで行動する。入浴時間の為か、人通りは皆無だ。
「……この階段を降りて、しばらく進めば女子風呂」
先行していた康太が階段の前で止まる。
まるで俺達の覚悟を確かめるかのように。
「よし。時間がない。一気に突っ込むぞ」
「迷うんじゃねぇぞ。なにがあっても突き進め」

「「「……（コクリ）」」」

神妙な顔つきで頷き、階段を一斉に降り数秒で廊下へと到達。そのまま廊下を駆け抜ける。

「君たち、止まりなさい！」

走り出して間も無く、前方から鋭い声があがった。

「更衣室にカメラが設置されていたと聞いて警戒してみたら……まさか本当に覗き犯がやってくるとは思いませんでした」

あれは科学の布施さんか。……ふむ。問題ないな。

「雄二、どうする！？布施先生だよ！」

「構わん！ブチのめせ！」

「そこは構いなさい坂本君！私は一応教師ですよ！？」

「了解！一撃をケリつける！雅夜手伝って！」

「合点っ！俺は明久に合わせる！」

「吉井君も浅月君も了解じゃないでしょう！？」

明久がスピードを上げ布施さんに一気に駆け寄る。俺はその後ろを駆け、いつでも飛びかかれるよう体制をとる。

「この前の補習の恨みをくらえぇっ！」

「押し付けられた仕事の恨み、はらさせてもらう！」

「思いっきり私心で行動しておらんか！？」

明久が布施さんに向かって拳を突き出す！

「ひぃぃぃぃっ！さ、試験召喚（サモン）っ！」

――――が、呼び出された召喚獣によって拒まれる。

「し、試験召喚獣……？」

「動きを止めるな明久っ！」

召喚獣を蹴り飛ばして、その隙に一旦飛び下がる。

布施さんの足元には同じみの魔方陣。そして明久の目の前にはテストの点数に応じた力を持つ試験召喚獣。成績の悪い生徒の召喚獣でも人の数倍の力をもつと言われている召喚獣。教師の力ならいかほどか。

「くっ……！教師用の召喚獣は物に触れるのか……！」

「ふぅ、間に合いましたか……。まぁ、吉井君が《観察処分者》に認定されるまでは雑用を自分たちでやっていましたからね。物に触れる方が都合が良いのですよ。こういった若者の暴走を止めなければいけない場合もありますし」

雑用を自分達でやっていた、という所にツッコミたいが心の中でどうにか抑える。俺によく押し付けてるくせに……っ。

「けど、卑怯じゃないですか！自分たちが作ったテストで召喚獣を喚びだしたら強いに決まってますよね！？」

「いや、正式な勝負というわけではないので秘境もなにもないですし、それ以前に自分たちが一方的に暴力を振るおうとしたことを棚にあげていませんか……？」

「それに明久。一応教師もテストを受けているんだぞ。他の学年の先生が作った問題で」

「え？そうなんですか？」

「そうなんですよ。『教える側にもそれに相応しい学力が必要だ』というのが学園長の方針ですからね」

ちなみになんで俺がそんなことを知っているかというと……ああ、そうだよ！西村さんに押し付けられたんだよ！！あの人、生徒になにやらせてんだよ！！仕返しに引っ掛け問題ばっか作ってやったけどな！

「さて、それでは大人しくしてもらえますか？」

召喚獣に構えをとらせて対峙する布施さん。

第２２１話（後書き）

宿題で忙しいはずなのに、俺、なにやってんだろ……？

感想とアンケートお待ちしております。

第２２２話

「こうなりゃ徹底抗戦だ！布施センを召喚獣ごと叩き潰すぞ！」
「その意気だよ雄二！ここは任せたからね！」
「頑張れよ雄二！」

雄二を生贄に先を急ぐ俺と明久。時間は……残り３５分。早い奴ならもう上がってもおかしくない時間だ。これは急いだほうがいいだろう。

「待てやコラ」

急いで先に進もうとすると雄二に首根っこを掴まれる。くそっ。やっぱりそう簡単に行かせてくれないか。

「一応、お前らの化学の点数を聞いておこう」

明久はともかく、俺にまで聞くのか？ったく。冗談はほどほどにしてほしいぞ。俺は明久みたいにバカじゃないんだからな。
それにしても化学か……。あの時は徹夜明けで眠くて、テスト中に眠っちまったんだったっけな。だから点数は……

「あと一点で二桁だったと思う」
「あと一点で腕輪が使えた」
「先に行ってろ生ゴミ。雅夜はこいつらを援護してくれ」

おっしゃぁっ！ここで残って布施さんの相手しろとか言われなくてよかった。爆発（バースト）が使えないんじゃ戦いが面白くないからな。

「教師相手に一人では辛かろう。ワシも手伝おう。お主らは先に行くと良い。二人を頼んだぞい雅夜」

だが断るっ！そんなことは面倒いし、俺は俺の好きにやらせて貰う。

「すまないな秀吉。いくぞ、試験召喚(サモン)っ！」

「なに、これも友の疑いを晴らす為じゃ。試験召喚(サモン)じゃ！」

二人が召喚獣を呼び出し布施さんとの戦闘に入る。

「よし、ムッツリーニ！今言われたとおりここは雄二と秀吉に任せて僕らは先に――――――って、もうすでにいない！？」

「なにグズグズしてんだよ明久。さっさと付いてこい」

「雅夜まで！？二人とも行動力が高すぎるよ！」

康太は俺と明久が雄二に肩をつかまれた辺からダッシュの準備してたぞ。

『こ、こら！三人とも待ちなさい！』

『布施先生。申し訳ないのじゃが、三人を追わせるわけにはいかんのじゃ』

『そういうことだ。しばらく俺達と遊んでもらう』

雄二達のやりとりを背中で聞きながら先へと進んで行く。すると…

「そこで止まれ」

「……大島先生」

保健体育担当の大島さんが現れた。康太が苦々しく呻くのはわかる。

康太の師匠とも呼べる人で、康太の最強の武器が唯一聞かない数少

ない人だからだ。

「康太。バカをするなよ」

「……（コクリ）」

康太は真剣な顔で頷いて大島さんの前に歩み出る。

「……大島先生」

「なんだ」

「……これは覗きじゃない」

あ、やっぱりやるのかコレ。バカなことは止めろといったのに。

「それなら何だと言うんだ？」

驚いている明久をアイコンタクトでダッシュするように促す。此処はもう時間の問題だ。

「……これは――――――保健体育の実習」

「試験召喚（サモン）だ」

大島さんが召喚をした瞬間に駆け始める。

「康太。ここは任せたぞ」

「……試験召喚（サモン）」

若干不満そうに召喚を開始する。最初から分かりきっていた結果になにが不満あるんだよ。

「そうじゃあね、ムッツリーニ！先生を片付けたらまた会おう！」

「片付ける、か……。いいかお前たち。教師を――――舐めるなよ」

『体育教師　大島武　ＶＳ　Ｆクラス　土屋康太
保健体育　　６６３点　ＶＳ　４２４点　』

「……は？」

後方で表示された点数に呆気をとる明久。そんなに驚くことか？

「雅夜の時も思ったけど……まさか、点数操作でもしてるの……？」

失敬な。実力に決まってるだろ？
本来ならここで殴ってる所だが……今は目の前に現れた敵に集中しないとな。

「俺たち教師がそんな卑怯な真似をするか。バカモノが」
「出たな鉄人！」
「西村先生と呼べ！」

我がクラスの担任であり、生徒指導の担当でもある西村宗一さん。
筋骨隆々の身体で女子風呂の入口を守っている。

「まったく、お前は知らないだとうが、教師は教師で勉強をしているんだぞ？より良い教育者になるためにな」
「あ、そうなんですか。それは大変ですね～」
「ああ。教育者というものは大変なんだ」

俺の睨みを無視してしみじみと西村さんが言う。面倒いことを俺に押し付けてるクセになにがより良い教育者だよ……。

「ちなみに、西村先生はどのくらいの点数を？」

「俺はこの前の担任入れ替わりのゴタゴタのせいで試験を受けそびれてな。今は点数がないんだ」

「そういえばあの時期に教師陣のテストがあったんだったな。その頃は俺も忙しかったし、手伝いを全部断ったんだっけ」

腕輪の開発で忙しかったからなぁ…。あの頃が懐かしい。

「そうですか。ないに等しい点数ですか。さすがは筋肉バカの西村先生ですね」

「バカ久。流石にそれは西村さんに失礼だろ。西村さんも少しは気にしてるかもしれないんだからさ」

「吉井に浅月。念の為に血液型を聞いておこう」

矛先が俺のほうまで！？フォローしただけなのに、理不尽だ！

……いや、まぁ、わかってやってますけどね。

第２２２話（後書き）

宿題が大変なのに残りの夏休みほとんどにバイトが入ってるってどういうこと？

違う意味で終わりそうだ（笑）

バカノリは、だいたい二日に一度のペースで更新していくつもりです（苦笑）

感想＆アンケートお待ちしております。

第２２３話

「と、とにかくそこはどいてもらいますよ！雅夜、行くよ！試験召喚（サモン）っ！」

西村さんとの戦闘は禁じられてるが……まぁ、禁は破るためにあるようなもんだしな。

『補修教師　西村宗一　ＶＳ　Ｆクラス　吉井明久＆浅月雅夜
総合科目　ＮＯＮＥ　ＶＳ　９２９点　＆　ＮＯＮＥ』

「遊び程度なら問題ないよな？」

「構わん。かかってこい」

お互いに拳を構え、明久を無視して睨み合う。この人相手に無刀で遊びだと流石に無理があるんだけどな……。

ま、今日は勝つつもりないし別にいいか。

「って、あれ？まさか僕の召喚獣が人に触れる特別性だってこと忘れてます？」

西村さんと睨み合ってる中、自分以外が誰も召喚しないことに疑問を感じる明久。こいつはアホか？

「阿呆。我が校初で唯一の問題児のことを忘れるわけがあるか」

「その設定したのは俺だぞ？忘れるわけねぇだろ」

「でも、だったら……」

ちなみに俺の召喚獣は明久みたいに特別性じゃない為、召喚しても

意味ないから召喚しないだけだからな。

「って今雅夜、衝撃に事実をさらっと言わなかった!?初めて聞いたんだけど!」

そりゃ、すぐに教えたら面白くないだろ?こうやって後々驚かせたほうが面白いに決まってる。だから教えなかったんだ。

「さっきも言っただろうが。俺は今点数がない、と」

「ってことはもしかして――――召喚できないってこと?そうとわかれば日頃の恨みを込めて――――くたばれ鉄人!」

そう意気込みして明久は西村さん目掛けて召喚獣を突っ込ませる。そして直前でみえみえなフェイントを入れて――――

「ふんぬっ!」

西村さんに召喚獣の武器である木刀を叩き落とされる。まぁ、当たり前だわな。

「……はい?」

「っと」

カランカランと床に転がる木刀を拾い上げる。

んー、やっぱり重さは結構あるな。でも召喚獣用とは言え凄く小さい。片手で握ったら十センチ程度しか拳からはみ出さないぞ。重いボールペンを持ってる感触だ。

「そ、そんなバカな!生身で召喚獣に勝てるはずが……!」

下手に武器を使わずに、召喚獣本来の力だけで捩じ伏せようと明久が召喚獣を西村さんに突っ込ませる。
それを横目に手元の召喚獣の武器である木刀を観察する俺。むぅ…。いくら明久の点数が低いからって少し強めに握っただけで軋んできてるぞ。強度は微妙だな。

「吉井。どうして俺がお前の召喚許可を取り消さないかわかるか？」
「ほぇ？」

明久の呼吸に合せ、小さな蹴りで召喚獣を宙に浮かせる西村さん。
おーっ、流石だな。

「いやはや。お前が観察処分者で良かった。召喚獣を殴るだけならば――――――体罰にはならなんからなぁっ！」

空中で無防備な召喚獣を目の前に西村さんが拳に力をいれる。

「ええっ!?今まで一度でも体罰なんか気にしたことなんて――――」
「歯ぁ食い縛れぇっ！」
「ごぶぁっ!?」

瞬間、一息で鉄拳を五度叩き込み、

「これ返しとくぞ明久っ!!」

俺は吹き飛んできた召喚獣に木刀を思いっきり刺す！……あ、やべ。
胸の中心、貫いちゃった。

「っ!?――――ガハッ！」

あまりの衝撃に膝を付いて倒れ込んでしまう。……ちょっと、やりすぎたかな？

「なんで……雅夜、まで……？」

「ノリで」

今にも吐きそうな顔でこっちを見る明久。どうでもいいが吐くなよ。一応女子風呂の目の前なんだしさ。

「まぁ、男らしく正面から堂々と現れた気概に免じて、停学は勘弁してやろう。心優しい西村先生が相手で良かったな」

「……これは所謂ツンデレっ子のデレの部分なのか？照れ隠しで暴力をする島田がよくやるような展開だが……。いやしかし、西村さんのツンデレに需要があるのか？……ん～、どう思いますか西村さん？」

「殴られたくなかったらその口を塞げ」

「サー、イエッサー！」

考えるのはまたの機会にしよう。あるかどうかわからないが。

「なに。俺も鬼ではない。きっちり指導を終えたら解放してやる。――――そっちの三人もな」

「へ？」

西村さんの視線の先――――明久の後ろには捕縛された雄二と秀吉、ムッツリーニの三人がいた。

無傷は俺一人か。やったね！

「さて、まずは英語で反省文でも書いてもらおうか。文法や単語を

間違えていたら何度でもやり直しだ！終わった者から部屋でシャワーを浴びて寝ても良し！」

そんなもの簡単だ。すぐに終わらせて一人で部屋に戻るとするか。厄介事をくらうまえにな。うん、

「ちなみに浅月には別に書類の整理をやらせてやる。少し多いが、お前なら今日中に終わるだろう」

「やっぱりなちくしょーっ！！」

どうせこんなことだろうとは思っていたよ！！わかってましたとも！！どうせ俺は逃げられないんだろ！！

第２２３話（後書き）

合宿初日終了～。

ちなみにこの後、雅夜が部屋に戻れたのは皆が寝静まった頃でしたとさ（笑）

感想とアンケートお待ちしております。

第２２４話

強化合宿二日目。予定通り今はＡクラスとＦクラスの合同自習の時間である。

「……雄二。一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子、当然のように俺の膝に座ろうとするな。クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

そんな中、霧島は雄二の膝の上に座ろうとしてくるのを雄二は押しのけようと攻防していて、

「……（ジリジリ）」

「……（ザッザッ）」

それを見た優子が俺の方にジリジリと寄ってきたので、俺は立ち上がって優子の睨み合っていた。

「雅夜も姉上も、睨み合っておらぬで普通に座ったらどうなのじゃ？」

優子が狙ってこなくなったらな。後、Ｆクラスの馬鹿共も。

「なんで嫌がるのよ雅夜。別にいいじゃない減るもんじゃないんだし」

「俺の命が縮まりそうだからパス」

「ＦＦＦ団のこと？雅夜ならなんとかできるでしょ」

「いや、それだけじゃないんだが……」

「？？？」

もし優子に膝の上に乗られたら思わず抱きしめちゃいそうだしな。
辺の目をはばからず。
そしたら……こっから先は言わなくてもわかるよな？

「でも、なんで自習なんだろう？授業はやらないのかな？」

空気を読まないバカが独り言を呟く。こういうときだけは使えるよな明久は。

「授業？そんなもんやるわけないだろ」
「明久が自習より授業をやりたがるなんて――――――――天変地異の前触れか！？」
「お主、それは酷いと思うぞ。……気持ちはわからんでもないが」

これ幸いと雄二は明久の左隣に、俺は明久の対面に座る。ちなみに秀吉は明久の右隣にすでに座っていた。

「やらない？どうして？」
「明久。お前はＡクラスと同じ授業を受けて内容が理解できるのか？」
「むっ。失礼な。雄二にはそうかもしれないけど、僕にとってはＦクラスもＡクラスも大差ないよ」
「どっちも理解できないからな、明久だし」
「一瞬でも凄いと思ってしまったワシの気持ちはどうすればいいのかのぅ」

捨てちまえ。

「……この合宿の趣旨はモチベーションの向上だから」
「まぁ、AクラスとFクラスの合同じゃあ、あまり意味ないかもしれないけどね」

雄二を追っていた霧島は雄二の隣に、俺を追っていた優子は俺の左隣（秀吉の正面）に座った。流石に膝の上は諦め――――ちらちらと膝を見るなよっ！！

「翔子、それだけじゃ明久にはわからんだろ。つまり、AクラスはFクラスを見て『ああはなりたくない』と、FクラスはAクラスを見て『ああなりたい』と考える。そういったメンタル面の強化が目的だから、授業はさして問題ではないということだ。……まぁ、木下姉が言ったとおりあまり意味はなさそうだがな」

二人の言葉の続きを雄二がFクラスのダラダラしている様子に溜息を吐きながら言う。俺達の所以外にAとFが同じテーブルに付いてる場所なんてないからなぁ。などと思っていると、

「あ、代表に優子に浅月君。三人ともここにいるんだったらボクもここにしようかな？」

勉強道具を片手に工藤がやってきた。

「工藤さん、だっけ？」
「なんだ明久。工藤のことはうろ覚えなのか？」
「会ったのは試召戦争の時とプールの時の二回だけだからしょうがないじゃないか」
「あははっ。確かにそうだね。えっと吉井君だったよね？久し振り」

ニッと歯を見せて笑う工藤。ボーイッシュな雰囲気を持つ奴は皆爽

やかだよな。いいことだ。

「それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。Ａクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から７８・５６・７９、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ。ね、浅月君？」

「んー俺が知ってるのとは少し違うな。ウエストは確か５８じゃなかったか？」

「着眼点が違うよっ！ボクはシュークリームのほうを言ったの！」

もちろん分かって言ってるが？

「っていうかなんで知ってるの！？」

「そこは気にするな」

別に学年全員の身体測定のデータに目を通してるワケジャナイデスヨ？

「ん？どうしたの吉井君？」

「いや、別に工藤さんの特技を疑ってるわけじゃないんだ。ただ、その……」

特技がパンチラなんてまだ可愛いほうじゃねぇか。忍は『乳揉み』だぞ？貧乳にはあまり興味がないから優子はされてないみ――――――はっ！？殺

ゴキュキュン♪

「ふぬぉぉおおっ！？」

テーブルの上に置いていた左手の指の関節が一瞬で全て外される。
手の関節じゃなくて綺麗に指の関節を抜きやがったぞ優子の奴。

「あ、ごめん雅夜。なんか手が勝手に動いちゃって」
「しかも無意識かよ……」
「姉上も変わったのぅ」

すっかり人外に染まっちゃって……。そろそろ後戻りできなくなってきてないか？

第２２４話（後書き）

優子ぉ（涙）

彼女はどうしてこうなってしまったんだろう？

感想＆アンケートお待ちしております。

第２２５話（前書き）

すみません、お待たせしましたっ！！

宿題も無事オワタ（＾∀＾）アヒャヒャ状態になりましたのでこれからは普段通りに投稿できると思います。
ですが、この間最初の頃を見直したところ、今の雅夜と全然違うので少しずつ編集していきますので投稿スピードが少し遅くなるかもしれません。

それでは本編をどうぞ！

第225話

コキュ、コキュ。

「ふ～。一時はどうなるかと思ったぞ。それで明久。なにか気になることでもあるのか？」

関節をはめ直し「手馴れておるのぅ…」「雅夜にはこれが日常なのよ」双子を無視して明久と工藤のほうに向き直る。

「いや、パンチラが特技かどうか言えるのか気になってるだけなんだけどね」

「あ、さては疑ってるね？なんなら、ここで披露してみせよっか？」

「止めはしないが、やるなら俺が目を瞑ってるうちに頼むぞ。もし俺がパンチラを見てしまったら優子に目潰しされそうだからな」

「……」

視界の隅にチョキにしてある指が見えた気がしたので慌てて目を瞑る。雄二は気付くのが遅かったようで「目が、目がぁぁあっ！」「……浮気はダメ」と夫婦漫才をしていた。いや漫才とは言えないかもしれないが。

「……明久。工藤愛子に騙されないように」

「あれ？ムッツリーニ、随分と冷静だね。僕ですらこんなにドキドキしているんだから、てっきり鼻血の海に沈んでいると思ったのに」

「……ヤツは、スパッツを穿いている……！」

「そ、そんな!?工藤さん、僕を騙したね!?」

なに言ってやがる明久っ!!スパッツはスパッツでパンツとは違った需要があるんだよっ!!なぜそこに気づかない!見損なったぞ!

……口に出したら優子になにされるかわからないので言わないけど。

「アンタ今なにか変なこと考えなかった?」

「滅相もございません」

口に出さなくてもやばいみたいだ。

「あはは。バレちゃってたか。さすがはムッツリーニ君だね。まぁ、特技ってわけじゃないけど、最近凝っているのはコレかな?」

そう笑いながら工藤が取り出したのは日常でよくみかけるアノ機械だった。

「小さな機械……。なんなのアレ?ムッツリーニわかる?」

「……小型録音機」

……日常的に使うよな?

「雅夜もアレ持ってたわよね?」

「ああ。そういえば優子と秀吉の目の前で姫路を弄るのに使ったんだったな」

「……なんじゃか悪い予感しかしないのじゃが」

秀吉の感は正解だな。こっからは地獄絵図となるだろう。

「うん。コレ、凄く面白いんだ。例えば――――――」

――――ピッ《工藤さん》《僕》《こんなにドキドキしてるんだ》《やらない？》

「わあああああっ！僕はこんなこと言ってないよ！？変なものを再生しないでよ！」

――――ピッ《優子》《を》《弄》《ったら》《どうなるか》《気になる》

「ちょっと待ったぁあああっ！！やるなら明久だけをやれ！俺まで巻き込むな！」

というか明久のやつはまだギリギリセーフだとして、俺の奴はアウトだろ！？

「浅月君は微妙に警戒されてたから音がとぎれとぎれなのが残念だけど……ね？面白いでしょ？」

と悪戯に成功した子供のような顔をする工藤。……ふっ！この程度で悪戯だと？甘い！甘すぎる！陽菜さんの相手をしてたらこの程度日常茶飯事で慣れきってるんだよ！

「……ええ。最っっ高に面白いわ」

「……本当に、面白い台詞ですね」

「……人前でなにトチ狂ってるのかしら？」

「……さて、ちと母上に連絡でもするかの」

こういうのの対処には慣れてないが。

「瑞希。ちょっとアレを取りに行くのに手伝ってもらえる？」
「わかりました。アレですね？喜んでお手伝いします」
勉強道具を机に置いて学習室を出ていく二人。どうせ拷問器具（いしだたみ）でもとりにいったのだろう。
「さて雅夜。覚悟は出来てるんでしょうね？」
「落ち着け優子。お前なら今のは工藤の仕業だってわかってるだろ？」
「わかってるわよ。でもね、アンタがあんなこと言ったらアタシの風評が酷くなるでしょ」
「だったら工藤に言え。俺に言ったところでなにも変わらんぞ？」
だから構えてる拳は工藤のほうに持って行ってくれ。というより今は優子より秀吉だ！
「おい秀吉。その携帯を俺によこせ」
「むっ、すまんが電話する用事があってのぅ。少し待ってくれ《パシッ！》って奪わんでほしいのじゃ！」
「どれどれ、かけようとしてる相手は……まじで恋さんかよ。あぶねぇ」
あの人に今の言葉が聞かれたら赤飯たかれるどころの騒ぎで収まるわけがない。恋さんからも陽菜さんと同種の匂いがするし、最近の俺の中での危険人物ランキングで上位だからな。
「返すのじゃ雅夜！こういうことはきちんと母上に連絡をせねばならぬじゃろ」
「しなくていいし、やらせるつもりはない。お前だって未来とこういう出来事があったら恋さんに知られたくないだろ？」

「そ、それはそうじゃが……」

ここで言いくるめられるのもどうかと思うぞ？ってかもうそこまで想像するくらいまで行ってるのか……。早すぎるだろ。

第２２５話（後書き）

相変わらず物語の進行スピードが遅いなぁ……。

今回は原作での二ページ分しか進まなかったよ（汗）

感想とアンケートお待ちしております。

第２２６話

「工藤。今のは録音した会話を合成したのか？」
「うん。そうだよ」

俺と明久の必死な行動を無視して、雄二が工藤に真剣な顔で詰め寄っていた。あぁ、工藤を盗撮犯かもしれないと疑ってるのか。バカなことを。

「というか工藤。いくらなんでもさっきの合成の仕方はマズイだろ。俺が変態だと思われるかもしれないだろ」
「え、違うの？」
「そこで真顔で返さないでくれ。俺はどちらかというと紳士だろ？」
「「……プッ」」
「なぜ笑う！？しかも優子まで！お前ら失礼だろ」

扱い酷くね！？これでも女子相手には優しくやってるつもりなんだけどなぁ…。

「シュークリーム（ボソッ）」

「英国紳士浅月雅夜様。このボクになんなりとご命令を。必要とあればこの命、貴殿の為に捧げましょう」

「変り身はえぇな！！」

そんなにシュークリームが好きなのか！？今の台詞には色々とツッコミどころがあるがスルー。俺は英国育ちじゃねぇよ。……あ。

「ねぇ雅夜。もちろんアタシにもつくってくれるわよね？」
「別に構わんが……いい加減食う量控えないと太るぞ」
「大丈夫よ。ちゃんと《雅夜と》《ベットの上》で毎日運動してるから問題ないわよ」

……オイ。

「工藤さんや。今のは優子が言ったわけじゃなくてお前がやった奴だよな？」
「ん～、なんのことかな？」

優子も気付いてないみたいだし、俺にだけ聞こえる音量でやりやがったなコイツ。いつのまにかもう一個増えてる小型録音機にはテープで『優子専用』って貼ってあるし、こりゃ普段からタメてあるな。

「どうしたの雅夜？《そんなに》《アタシの身体》《が》《気になる？》」
「……っ」

我慢だ、我慢しろ俺。ここでツッコんだら俺の負けだぞ。

「ちょっと大丈夫なの雅夜？顔色悪くて凄く《気持ちよさそうに見える》けど」
「だ、大丈夫だ。けど、少し静かにしてもらえると嬉しい」
「別に構わないけど《こういうのを》《放置》《プレイ》《って》

《言うのかしら？》」
「……」
心を無に。ツッコミを入れたい衝動や、横でケラケラと楽しそうに笑ってる工藤に制裁を与えたい気持ちを抑えるんだ……っ！
「浅月君と優子は本当に面白いな～♪」
「工藤さん。キミが……」
この声は明久か？バカッ！今お前まで加わったら抑えきれなくなるだろ！！早まるんじゃないっ！
「ん？なに、吉井君？」
だが俺の念は明久には届かず、
「あ～、え～と、その、キミが――――――僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ！」
「黙れ変態」
後戻りは出来なくなってきた。ええい！こうなりゃやけくそだっ！
「……ぷっ。あははっ。吉井君はお尻が好きなの？それともボクの胸が小さいから気をつかってお尻にしてくれたのかな？」
明久のセクハラ発言を笑って流す工藤。器が大きいのかよくわからんヤツだな。
「……（ジー）」
「おい優子。今の流れでどうして俺を見る」

「雅夜もお尻が好きなの？」
「落ち着け。俺は明久とは違うし、俺は外見で人を判断するつもりはない」
「中身だけじゃなくて少しは外見も入ってるでしょ。雅夜は胸が好きなの？それともお尻が好きなの？」
「顔」
「即答で第三の選択肢！？偶に雅夜の思考回路がわからなくなるわ……」

これくらいのセクハラ質問は嫌と言うくらい杜丘のやつらに受けてるからな。回避方法はもちろん“自分に正直になる”だ！……助かるかどうかは五分五分だけどな。

「ご、誤解だよ！別に僕はお尻が好きってわけじゃなくて！」

さっきのバカ発言を今更ながら否定しようとする明久。ったく。少しはいつもの康太を見習って落ち着いて否定しろよ。必死にやるとさらに誤解が広まるだけだぞ。

「流石だな明久。まさか録音機を目の前にそこまで言うとは」
「へ？」
「ごめんね。折角だから録音させてもらったよ」

――――――ピッ《僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ！》

「ひゃあああああっ！これは合成すらしてない分ダメージが大きいよ！？お願い工藤さん！今のは消してください！」

学習室に明久の悲鳴が響いた。

第２２６話（後書き）

雅夜が紳士かどうかは皆さんの判断にお任せします（笑）

感想とアンケートお待ちしております。

第227話

「吉井君って、からかい甲斐があって面白いなぁ。ついつい苛めたくなっちゃうよ」

――――――ピッ《お願い工藤さん！》《僕にお尻を見せて》

「うあぁぁんっ！どんどん僕が変態になってる気がするよ！」

「前からこんな感じじゃなかったか？」

「違うよ！？」

違わないと思うけどなぁ。

「……今の、なにかしらね？瑞希」

「……なんでしょうね？美波ちゃん」

明久の後ろで石畳を設置し始めた二人は気にしないでおく。

「まさか、ただでさえ問題クラスとして注意されているのに、これ以上問題を起こすような発言をしたバカがいるのかしら？」

「困りましたね。そんな人がいるなら、厳しいオシオキが必要ですよね？」

優子は杜丘だが、姫路はだんだんとFクラスにそまってきてるな。

優子だけでもそのうち修復したほうがいいかな？姫路は……まぁ、どうでもいいや。

「二人ともこれは誤解なんだ！僕は問題を起こす気はなくて、ただ

純粋に《お尻が好きって》だけなんだ――――――待って！今のは途中に音を重ねられたんだ！お願いだから僕を後ろ手に縛らないで！あとそっちの皆も笑ってないで助けてよ！特に雄二と雅夜！」

「だってさ雄二。呼ばれてるぞ」

「なんで俺が明久を助けなきゃいけねぇんだよ。呼ばれてるのはお前も一緒じゃないか」

「やだ、面倒い。巻き込まれたら一溜りもないからパス」

「同意だ。いつこっちに矛先が向くかわからないからな」

うんうん。と頷く俺と雄二。俺は弄るのは好きだけど、弄られるのは苦手なんだよ！

「……工藤愛子。おふざけが過ぎる」

「ムッツリーニ！助けてくれるの！？」

「……うまくやってみせる」

小型録音機を構えて明久のそばに立つ康太。お前までなんで今そんなものを持っているんだ？というツッコミはしたほうがいいか？

「姫路さん。美波。よく聞いて。さっきのは誤解で、僕は《お尻が好き》って言いたかったんだ。《特に雄二》《の》《が好き》《雄二！》《お願いだから》《僕にお尻を見せて》ってムッツリーニィィーッ！後半はキサマの仕業だな！？うまくやるって、工藤さんよりも上手に僕を追い込むってことなの！？」

「すまん明久。後半の途中からは俺だ」

「雅夜まで！？僕の周りには敵しかいないの！？」

いやー偶々（・・）ポケットの中に小型録音機があって、ついな。

康太と工藤ほど上手く扱えないが意外と楽しいのなコレ。

「……工藤愛子。お前はまだ甘い」
「くっ！さすがはムッツリーニ君……！」

明久を余所に睨み合う二人。ライバルとしてお互いに認めてるんだろう。……二人が凄く微笑ましいな。
日頃見てる火花が杜丘の奴らのガチ火花だからそう思うのかな？

「……吉井。雄二は渡さない」
「雅夜には絶対に手を出させないわよ」

そして妙な意識を持った二人。俺も雄二も明久に手を出されてるほど腐っちゃいないから安心しろ。

「アキ……。そんなに坂本のお尻がいいの……？ウチじゃダメなの……？」
「前からわかっていたことですけど、そうはっきり言われるとショックです……」
「二人ともどうしてすぐに僕を同性愛者扱いするの！？僕にそんな趣味は――――」

ない、と明久が言い切ろうしたら廊下の方から覚えのある気配がつかつかと近付いてきた。……ふむ。

（バンッ）「同性愛を馬鹿にしないで「せいっ！」（バンッ）

勢いよく開いたドアをすぐさま閉める。ふぅ……。

（バンッ）「なにするんですかっ！！」
「うおっ！？」

一息ついたところでまたドアを開かれる。諦めて帰れよっ！

「やっぱり今のは浅月の仕業でしたか。お姉さまとの会う時間を減らすとは……覚悟は出来てるんでしょうね？」

「お前の親父にコレ――――（ピッ）《美春はお父さんのことが大好きっ！》を聞かせていいのなら。いいぜ、かかってこいよ」

録音機と携帯を片手に構えを取る。もちろん携帯はワンプッシュで清水の親父さんにつながるようにしてある。

「なっ！？な、ななななんですかソレ！？美春はそんな吐き気のするようなことを言った覚えはないです！」

「む？それはこの前雅夜に頼まれてワシがお主の声真似をしてやつではないかの？」

「なんてことしてくれてるん――――――」

おいおいバラすなよ秀吉。黙っていればお前には矛先が向かなかったのに。

「み、美春？なんでここに？」

「お姉さまっ！美春はお姉さまに逢いたくて、Ｄクラスをこっそり抜け出してきちゃいましたっ！」

「変り身早っ！？」

清水は島田を見つけると熱烈抱擁の構えで勢いよく飛びつく。んー、この音声どうしよ？こういう時の脅迫材料に持ってたんだけど……清水に教えたら二度目は使えなしなぁ。

「どうしたらいいと思う優子？」

「さぁ？忍にでも渡して思いっきり笑わしとけばいいんじゃないか

しら」
「それもそうだな」
音声データをメールに添付して忍に送るか。ついでに清水には隠しておくように言っておこう。その方が面白そうだし。
――――――メールが送られた時忍たちは――――――
「《ピロピロリンッ》こんなときにメール？誰から――――――隊長！たった今、マサ君からメールが来ましたっ！」
「っ！くっ……。もしやこっちの動きがバレたか！？」
「それはない…。むこうは昨日から強化合宿に行っていて、こっちの動きにはなにも気付いていないはず…」
「メールにはなんて書いてあったの？」
「えっと『清水には隠しておくように』だって。なんか音声データもついてるよ」
「どうやら関係なさそう…。今来たのはただの偶然だと思う…」
「同意。シノ、今は無視しておいていいよ。皆、作戦に変更は無しだ。行くぞ」
「「「おうっ」」」
「最終確認。家主、学園の最高権力者の両名ともに許可は取ってある。何度も言うが躊躇う必要はない」
「「「はいっ！」」」
「忍と未来は主に見える範囲にあるものを！」

「りょうかいっ♪」
「任せて！」
「私と由美は隠し場所の探索！残らず全てみつけるよ！」
「心得てる…」
「鳴海家は祭たちに任せてあるから、私たちはマサ君の家の部屋と文月学園の部室の二箇所。時間は今日と明日しかないから素早く見逃しなく的確にやるつもりで！それじゃあ行くよっ！合い言葉は――――」

「「「「部屋主の居ないうちに家宅捜索をっ！！」」」」

第２２７話（後書き）

鬼の往ぬまになんとやら。

雅夜のプライベートが大変なことに！？

感想とアンケートお待ちしております。

第２２８話

「須川バリアー」
「け、汚らわしいです！腐った豚にも劣る抱き心地ですっ！」
メールをし終え清水たちの方を向いたら、須川が盾にされた挙句罵倒され、涙を流してＦクラスの奴らに慰められていた。

「お姉さまは酷いです……。美春はこんなにもお姉さまを愛しているというのに、こんな豚野郎をつかませるなんてあんまりです……。そして浅月はいい加減死ねばいいんです……」
「ちょっと美春！こんなところで愛してるとか言わないでよ！アキに勘違いされちゃうでしょ！？」
「なんか今、さらっと俺まで巻き込んでなかったか！？」
「大丈夫よ。雅夜はいつもそんな感じだし」

お前のほうがひでぇよ…。偶に助けてやってるってのにその扱いはあんまりだろ。優子の言葉も微妙にフォローになってないし。

「君たち、すこし静かにしてくれないかな？」
「あ、ごめん久保君」
「吉井君か。とにかく気をつけてくれ。まったく、姫路さんといい島田さんといい、Ｆクラスには危険人物が多くて困る。浅月君、ちゃんと皆を纏めてくれたまえ」
「また俺！？なんでそんな面倒なことを俺が……」
「君が一番まともそうだからだよ」
『『『『『ええっ！？』』』』』
「って、ちょっと待てお前ら！なんでそこで驚いてんだよ！確かに

秀吉や工藤には劣るかもしれないが、充分まともな部類だろ俺は！」
『『『『『ないない』』』』』
「仲良いなぁオイ！」

全員が同タイミングで首を振って答える。そんなに否定しなくてもいいじゃねぇかよ。少なくとも雄二と明久と康太には言われる筋合いはないと思う！

「それと、同性愛者を馬鹿にする発言はどうかと思う。彼らは別に異常者ではなく、個人的思考が世間一般と少し食い違っているだけの普通の人たちなのだから」
「え？あ、うん。そうだね」

明久と清水と優子以外の顔が一瞬気まずそうになる。その台詞を久保が発すると限りなくアウトに近いと思うんだけどなぁ……。ちなみに清水は同意します！という爛々とした顔で頷いて、優子は久保×吉井もなかなか…という妙に真面目な顔で二人を見ていた。口の端にヨダレが垂れてなかったらまだよかったんだけどな。

「ほら美春。くだらないことで騒いでないで自分の学習室に戻りなさい」
「くだらなくなんかありません！美春はお姉さまを愛しているんです！性別なんて関係ありません！お姉さま、美春はお姉さまのことが本当に――――」
「はいはい。ウチにその趣味はないからね？」

騒ぎの一端でもある清水を島田が学習室の外に追いやる。これで少しは静かになるな。本当に少しだけだけどな。

「……性別なんか関係ない、か……」

「性別なんか関係ない、ねぇ……♪」
「性別なんて関係ない、ですか……」

清水の言葉に久保・優子・姫路は三人三様の態度でそれぞれ、思いつめた表情の久保、微妙に嬉しそうな優子、雄二と明久を交互に見る姫路。どれもまともじゃないことは確かだ。

「あのね姫路さん。その台詞を呟きながら雄二と僕を交互に見るのはやめれもらえるかな？きっとキミは誤解しているよ。知っての通り、僕は《秀吉》《が好き》なんだってちょっと！？」

あ、また音を重ねられてるよ。俺も参戦し――――なくていいか。二人に任せておけばそれで充分だろうから俺は違うことでもするか。

「優子さん。明久のこの発言についてどう思いますか？」
「そうね。アタシとしては嬉しい展開でもあるけど、とりあえず望み薄ってことだけは言えますね」
「なるほど。では当人である秀吉さん。すみませんが、一言もらえますか？」
「なぜ実況風なのかわからぬじゃ……まぁ、好意はありがたいものじゃ。別に嫌ではないぞい」
「つまりは『ワシには未来という心に決めた人がいるからお主の気持ちには答えられぬ』ってことですね。わかりました」
「大幅に脚色されておるぞい！？」
「間違ってはいないからいいじゃない」

まぁ、秀吉だしな。ったく。進展が早すぎるんだよお前らは。

「け、けど、誤解しないでね？僕は秀吉の《特に》《お尻が好き》なんだ――――ってこれだと余計に誤解を招くよね！？ムッツリ

ーニと工藤さんに雅夜、とにかくその機械をこっちに渡しなさい！僕を取り巻く環境が変わらないうちに！」
「もう遅いと思うし、俺はやってねぇよ」
「あ、明久……。ワシにはその、未来がおるから……」
「しまった！もう手遅れ！？こうなったら、《久保君》《雄二と》《交互に》《お尻を見せて》違う！どうしてこんな場面で久保君のお尻をみる必要があるのさ！」
「人前でそんなこと言っちゃダメよ。そういうのは当人達だけで居る時に言わないと」
「吉井君。そういうのは少々困る。物事には順序がある」
「わかってる！木下さんの言ってる意味がよくわからないけど、順序云々の前に人として間違っているってことはよくわかってる！」
「アキ、アンタやっぱり女より男の方が……」
「だからどうして皆僕をソッチの人にしようとするの！？落ち着いて僕の話しを聞いてよ！」

その後明久が弁明しようとするたびに毎回康太と工藤（たまに俺も）が邪魔をして、結局西村さんが騒ぎに気付いて怒鳴り込んでくるまで明久は弁明に成功できなかった。

第２２８話（後書き）

なんだか優子が軽くオープン気味になってる気が……

ま、気のせいだよね！

感想とアンケートお待ちしております。

第２２９話

「僕は工藤さんが犯人だと思うんだけど」

工藤と鉄人の精神＆肉体ダメージを受けた地獄となかなか満足できた夕食が終え、今は入浴の時間となっていた。

「その可能性は高いだろうな」

明久の意見に雄二が頷く。昼間の時にやられた録音機の慣れ具合を見る限り工藤はかなり怪しい部類に入るだろう。

「それじゃ、工藤さんを一気に取り押さえる？」

「……それはやめた方がいい」

「やめた方がいいって、何か問題でもあるの？」

「……チャンスは一度きり。失敗したら犯人は見つからない」

「もし取り合わせて間違いだった場合、それを見ていた真犯人がどうするかをよく考えてみろ、ってことだろ？」

説明不足の康太の言い分をいつものように雄二がわかりやすく言う。バカな明久でもわかるように。

「ああ、そっか。証拠を隠滅するとか、自分を探さないように更に脅迫するとか、そういったことを考えるね」

「そういうことだ」

明久が納得したかのように手をポンッと打って言う。よほどの自信がないかぎり下手な手出しはむしろ自分の首を絞めることに気が付

いた。

「けど、あんなに怪しいのに手を出せないなんて……」
「例の火傷の痕を確認できたら良いのじゃが……」
「いっそ、怒られるのを承知でスカート捲りでもしてみる？」
「……ヤツは、スッパツを穿いている……！」
「げ。そういえばそうだった」

工藤がスッパツを穿いている理由は火傷の痕が見られたくないからなのか？彼女の性格からしたら下着が見られるのは気にしないはずなのに。明久達はそう考え、

「……確認するには女子風呂を覗くしかない」
「やっぱりそうなるんだね……」

結論へと至る。これ以上は推測の域を出ることが出来ない所まで来ているのだ。後はもう行動するだけ。

「雅夜ならなにか重要なことを、下手したら犯人を知っているかもしれないのに僕たちに隠していると思うんだけどなぁ……」
「教えても面白くないから、という理由だけでじゃろうな……」

今此処にはいない、やけに物知りな友人を頼る道を残して。

～Ｓｉｄｅ雅夜～

明久たちが部屋で作戦を練っていたころ……。

「うーむ。やっぱり質は微妙だが数がそれなにあるなぁ」

合宿所の外、合宿所の全てが見渡せる大きな木の頂上一歩手前。俺は今そこで枝に座っていた。

「こりゃ、昨晩感じた妙な気配を今日のうちに調べてみて正解だな。明日だったら最終日までに間に合わなくなるところだ」

ははっ、と無意識のうちに軽く笑ってしまう。今のは気が滅入っての苦笑いなのか、それとも面白そうなおもちゃを手に入れた子供のような無邪気な笑いなのか。自分でもわからなかった。

――――――――――サァ……

風が吹き木々が揺れる。此処が避暑地であるだけのことはあり、それは涼しくて心地よく心が癒された。

「なぁ。あんたもそう思わないか？」

「――――――――知らん」

座ったまま上を見上げながが問いかけると、まるで忍者かのように木の頂上で腕を組みながら立っていた人物がそっけない答えを返してくる。奴の名は浅月風人（あさつきかざと）。俺の伯父――――――俺の父、風雅の兄だ。

「今思ってることはガキと煙は高い所が好きっていう話しは本当だったんだなってくらいだ」

「その言葉は『バカと煙は～』だし、アンタのほうが高いところにいるんだが？」

「お前は相変わらず変なところを気にするんだな。こまけぇことはいいんだよ」

性格ってのはなかなか治らないものなんだよ。

「しっかし、酷いもんだなぁコレは」

目下に広がる合宿所を見て風人が眉を近づけながら言う。

「試験召喚システムだっけか？ガキンチョが言うには、それのおかげでこんなんなってるんだったんだよな」

「ああ。オカルト面（こっち）のほうにうまい具合に作用していて、悪霊（あいつら）にとってとても通りやすい架け橋になっている。正直数が多くて俺一人で対処しきれるか厳しいところでな」

「だから俺を呼んだ、と」

文月学園では頻繁に対処しているため溜まることはないのだが、合宿所は来る機会が全然ないので此処には溜りにたまりきっているのだ。

「ったく、メンドクセェな。こちとらこの間如月ハイランドでお化け屋敷の除霊を行なったばっかりってのにな」

「本業なんだから仕方ないだろ。俺だって本当はアンタに全部任せて合宿を楽しんでいたい気持ちなんだぞ？」

「それこそ俺の知ったことじゃねぇな。時間が少しでも惜しいんだったらとっとと済ませに行くぞ」

そう言いながら木を降り始める風人。っと、置いていかれては困るな。俺も枝から枝に飛び移るように降りていく。

言葉とは裏腹にやる気があるみたいだ。

「目標は建物の外中合わせて五十ちょい。外のほうがじゃっかん多いから外は俺がやっといてやる。中はガキンチョに任せるぞ」

「はいよ。わざと逃がして中に追い詰めるとかはやめてくれよ」

「それはこっちの台詞だ。散らすだけじゃなくてちゃんと片付けろよな」

こうして俺の強化合宿二日目の夜は悪霊退治に勤しむことで終わり、明久たちは昨日と同じで覗きに失敗したようだった。

第２２９話（後書き）

久し振りにオカルトサイド。

相変わらずのグダグダっぷりだ（笑）

前に名前だけ一度出てきた伯父さんがついに登場！

感想とアンケートお待ちしております。

第２３０話（前書き）

長らくお待たせしまって申し訳ございませんでしたっ！！

九月に入ってから書けなかった理由は……活動報告のほうを見てもらえればわかると思いますっ！（書くのが面倒なわけじゃないですよ）

それと第四回浅月人生相談のアンケートの締切を明日の午後三時とさせてもらいます。

第２３０話

『……嘘だろ？』
『ふふっ。残念だけどこれが本当なのよ。私が勝って、貴方が負けた。紛れもない事実よ！』
『今回ばかりは負けを認めるんだなマサヤ』
『最後の最後に大逆転、ね。マサ君が一番好きなやりかたで負かすとは』
『さすが陽菜さん…。性格が悪い…』
『味方なら心強いけど、敵なら厄介な人！それが陽菜さん！』
『本気の戦いでマサヤが負けるなんて珍しいな』
『まぁ、相手が悪かったとしかいいようがないけどね』
『悪口言われてる気がするけど、今は気分がいいから褒め言葉として受け取るわよ。……さて、マサ君。最初に言ったこと、もちろん覚えてるわよね？』
『さ、さぁ？ナンノコトデスカナ？』
『諦めなよマサ君。どうせ逃げられないんだよ？』
『わかってるよちくしょーっ！！《負けたほうは勝ったほうの言うことを三つだけ聞く》だろ！ほらとっとと俺に命令しやがれってんだっ！』
『ええ、もちろん！……今思えばあれから三年間たったのね』
『？急になにを――――――――三年？三年前っつうと小六の頃……おい、まさか！？』
『気づいたわね、そのまさかよ！あの時からずっと待っていた。マサ君にアレ（・・）をやらせることの出来る機会を！』
『ふざけるなっ！！アレだけは断固として断るっ！俺の男としてのプライドに傷がつく！』
『同時に女としてのプライドを傷つけたマサ君に拒否権はない！！

祭、歩。協力しなさい！！』
『『了解っ！！』』
『くそったれぇえええええええええっ！！！！！！！！』

と、言うところで悪夢は覚めた。

「夢オチ最高ーっ！！」

思い出したくない出来事なのにいちいち夢に出てこなくていいんだよっ！朝から気分が最悪だ。よりにもよってなんであの時のことなんだよ。

「夢オチ！？がっかりだよ畜生！！」
「うるさいっ！」
「ぐふっ！」

いきなり叫び出した明久の腹に拳を一発入れて黙らせる。ったく。こっちは気分が悪いんだよ。

「ま……、まさ…や……？朝、か…ら、機嫌悪い、ね……」
「お前は気分が悪そうだな。ちゃんと睡眠とれなかったのか？」
「さっき雅夜に殴られたせいだよっ！！」

ええい顔を近づけるな！暑苦しいじゃねぇかよ。それに充分元気だ

ろお前！？

「そんなに大きな声を出すな明久。周りの奴を起こしちまうだよ」
「あ、そうだね。皆が――――――最悪だ」

明久が周りを確認しようとしたところで、隣で寝ている雄二に気付く。うむ。相変わらず優子が見たら喜びそうな風景だな。

「起きろコラァッ！」
「ぐふぁっ！」

明久が布団から雄二を蹴り出す。だから静かにしろって言ってるだろ！ほら、隣にいる秀吉も起きて……ん？

「んむ？なんじゃ？雄二はまた自分の布団から離れた場所で寝ておったのか」
「そういうお前もなんで俺の布団にいるんだ？」
「ワシの布団が明け方入ってきてのぅ――――――ってやめるのじゃ明久！花瓶を振りかざしてどうするつもりなのじゃ！」
「殴る！コイツの耳からドス黒い血が出るまで殴り続ける！」
「というか秀吉。今のじゃ俺の布団に入っている説明になってないんだが？」
「そうかの？雄二がワシの布団を占領したからワシはお主の布団に邪魔させてもらった、というだけなのじゃが――――――今度は雅夜に向かって花瓶を投げようとするでない明久！」
「どうして秀吉は僕のところじゃなくて雅夜のところに行ってしまったんだ！」
「いや、問題はそこじゃないと思うんだが？」

大方家の匂い（優子の匂い）に惹きつけられたとかそんなところだ

ろ。

ガチャッ

「おいお前ら！起床時間だ――――ぞ……？」
「とりあえず死ね雄二と雅夜！死んで詫びるんだ！あるいは法廷に出頭するんだ！」
「なんだ！？朝からいきなり明久がキまってるぞ！？持病か！？」
「ある意味、いつも通りじゃね？」
「落ち着くのじゃ明久！雅夜も煽るでない！西村先生、すまぬがこやつらを取り押さえるのを手伝って頂きたい！」
「……（コクコク）」
「……お前らは朝から何をやっているんだ」
「いやな夢を見たので明久で憂晴らしですが、なにか問題でも？」
「そうか。いや、それなら問題ない」
「いやいや！問題ありますよね、ソレ！？」

その後西村さんは朝飯の時間を俺に教えて去っていってしまった。
……ガチで行きやがったよこの人。せめて秀吉の手助けくらいはやってやれよ。

第２３０話（後書き）

西村さんがダメな人になってきてる今日この頃。

久々の投稿なのでおかしなところがあるかもしれませんので、なにか気付いたら遠慮せずに教えてください。

感想とアンケートお待ちしております。

バカテスト第二一問目……（前書き）

アンケートにご協力ありがとうございますっ！！

アンケートの結果は由美：５深風：１優子：４工藤：５康太：２明久：１未来：１千夏：１忍：１千夏：１となり今回は由美です！

同立一位の工藤は惜しかったですね（苦笑）

バカテスト第二一問目……

「……今回は由美か」

いつもの放課後。本編では今は合宿所にいるという設定なのだが、ここは学校の部室。そこんところはツッコミはナシで。

「募集の時に『由美の様子が…？』なんて書かなければよかったなぁ。アレは本編の方で書く予定だったんだが……まぁ、それは置いとくか」

どうせこれは番外。本編とは全てが全て関係あるわけではないんだしな。（※都合の良いことだけ本編で拾う形式です。

「しかし、問題は今の由美の状態だ。普段通りなら別にそれで構わんのだが、前回の便りに書いてあった状態のアイツが来ら……部室が壊れるのは確実だな。今のうちに大切なものはどこかに移動させておく――――――――――っ！」

殺気！？――――――どこからだ！？

「姿を見せやがれ、由美っ！！」

『言われなくてもっ！！鳴海流体術《震脚》！！』

突如部室が揺れる――――――否、振動する。
鳴海流体術《震脚》。これはただ単に思いっ切り地面に足を叩きつけて軽い振動を起こす、というものだ。
だが、これは普通の人がやったときのこと。
マスターや由美のような化物じみた奴が本気でやると…！

ドッゴォオオオオオン！！

「見せてやったぞマサヤァアアアアアア！！」

部室の天井――――――つまり四階の床を突き破って瓦礫と共に降りてくる由美。

「普通に登場出来ねぇのかお前らはぁあああああ！！！」（ダンッ！）

降ってくる瓦礫と攻撃してくる由美から壊れたらマズイものを、こういう時のために作っておいた緊急排出装置を作動させて部屋から消す。まさか使うとは思ってなかったぞちくしょーっ！
ちなみに排出先は校庭の片隅にある物置小屋。人目につかず、存在そのものを知ってる生徒が少ないためである。

「というかなにやってんだよ由美!!学校を壊してんじゃねぇよ!おまえ、コレどうするつもりなんだ!?」
「困けぇことはいいんだよ!マサヤが後でなんとかしとけっ!」
「ふざけるなっ!なんで俺がやんなきゃならねぇんだよ!」

理不尽もいいところだっ!それに学校の修理なんて出来るかよ。業者に頼むレベルだぞ。

「うっせぇ!生意気にオレに刃向かうってんのか!?」

辺に散らばってる紙をグシャリと踏みつけて俺を睨んでくる由美。完全に鬼神モードに入ってるなコイツ。一人称がオレ・喋り方がどこぞの不良、と口調が昔のに戻ってる。

「違げぇよ!いくら俺でもそれは無理だっていってるんだよ!」
「はっ!まぁ、マサヤは肝心なところで使えねぇガキだからしょうがねぇかっ!」

ブチッ

俺の頭の辺からなにかが切れる音がした。

「――――誰が使えねぇガキだって?」

部室の壁に飾ってある木刀を手に取って正眼の位置に持ってくる。

珍しい。俺が切れるなんていつぶりだ？

「やっとヤル気になったみてぇだな。……オメェのことに決まってんだろクソガキがぁっ！悔しかったらかかって来なっ」

「いいぜ、その挑発乗ってやる」

戦場が部屋では狭すぎるため窓から外へ飛び出す。ちょうど目の前に校庭があるんだ。校庭なら周りの被害がすくなくて済む。

「相手の意識が無くなるか負けを認めるまでの一本死合でいいよな」

「相手を倒すまで、だ。俺もお前も死にかけても負けを認めるわけねぇだろ」

「それもそうだな」

いつものじゃれ合いの延長である軽い喧嘩ならともかく、本気でやりあうなら四肢がもがれても戦意を失う俺達じゃない。

こうなった俺達を止められる奴はマスターを除くと誰もいない。たとえ西村さんや優子であってもだ。

「んじゃ――――始めるとするかぁあああああっ！！」

「簡単にくたばんじゃねぇぞぉおおおおおおっ！！」

【文月新聞】

某月某日の放課後。文月学園の校庭にて学園始まって以来最大規模の喧嘩が行われました。喧嘩していたのは最近なにかと話題になっている二―F浅月雅夜氏と、隣町にある杜丘高校の生徒である長瀬由美氏であることが調査の結果判明。

また、近くで一部始終を見れた（面白がって見ていた生徒のほとんどは巻き添えを食らい倒れていたらしい。最後まで見れていたのはほんの数名だけであった）方達の話によると

『ありゃあ喧嘩ってレベルの話しじゃねぇよ。個人での戦争って表現のほうがあってる』

『拳で殴れば木が折れて。地面を蹴ればヒビが入って。木刀を振るえば暴風がする。お互いがぶつかり合えば爆発するわ……爆発は火花が散ってたから粉塵爆発だったのかな？』

『二人が戦ってる途中鉄人が止めにはいったんだが、一瞬で吹き飛ばされてたっけな。俺、鉄人があんな簡単に吹き飛ばされるの始めて見たぜ』

と、驚愕の声が多数であった。

そこで取材班は二人のことをよく知っている人物――K下Y子さ

んに話しを伺ってみたところ。
『放っておけばいいのよ、そういう時は。下手にちょっかい出すと狙われるわよ』
と溜息を吐きながら去っていってしまった。

また浅月雅夜氏の幼馴染みであるY井A久に取材してみてみると。
『雅夜が本気で暴れるのは久し振りだけど……まぁ、ある意味これが雅夜の望んでいる日常なんじゃない？』
と頭の悪い解答を得られた。どうにも使えないバカである。

また同時刻。文月学園の四階のとある一室の床が壊れているという報告を受けた。
しかし、取材班が現場に行ってみるとどこも壊れているような場所はなく、そこには『トオサカ代行業をなめるなよ』というカードが一枚あるだけであった。

バカテスト第二一問目……（後書き）

第四回『浅月人生相談』～了～……？

あれ？人生相談をやってないような……。

と思ってるそこの貴方！

本文にあるこのシーンを思い出して欲しい。

――――――

「うっせぇ！生意気にオレに刃向かうってんのか！？」

辺に散らばってる紙をグシャリと踏みつけて俺を睨んでくる由美。

――――――

由美が床を突き破っての登場後、少しした後である。

おわかりいただけだろうか？

そう！このとき由美が踏みつけていた紙こそが人生相談が書かれた紙だったのだ！

なのでこのとき、今まで送られてきたお便りは全て破けたため、人生相談はできなかったのである！

とまぁ、ハイテンションで説明しましたが、ぶっちゃけると人生相談のネタが思いつかなくなっただけなんだすよね（苦笑）

ですがご安心を！ちゃんと次のネタを考えてあったりします！

題して『あのキャラとこのキャラでの対談シリーズ！』

はい、題名だけじゃ意味がわかりませんよね。

いままで通りアンケートを取るのですが、今回は前までと違って。

『○○と××の漫才対談が見てみたいです！』
『△△が●●に弄られる場面が気になります』
『◆◆は（アニメの名前）を見てどう思いますか？』

など、といった《誰に・どんな話》をさせるかをアンケートしたいと思ってます。

基本的にはどんなご要望でも受け付けるます。もちろん『雅夜が他の女子を選んだ時はどうなりますか？』などと言ったアンチ本編の案もオッケーです。

まぁ、全部書けるわけではないと思いますが、なんか思いついたらどしどし送ってください。少しずつ書いていこうと思ってます。

優先順位とかはなく、送られた内容にあう話しが書けたら十話ごとに投稿するという形式でやっていきますので『私が書いた案はまだぁー？』や『いつになったら書いてくれるんですか？』などと急かさないでくれたら嬉しいです。

感想とアンケートお待ちしております。

第２３１話

「言い訳はいらないわ。昨日の夜、どこで何をしていたか説明しなさい」
「ちょ、優子さん！？食堂で俺を見つけるや否や、なんでマウントポジションを仕掛けるんだよ！？」
騒がしい寝起きが終え食堂に移動すると、いきなり優子に組み倒されて馬乗りされる。周りの目が痛いんですけど！？Ｆクラスの馬鹿共からは殺気じみたものも感じるぞ！
「これくらいのことしないと雅夜は逃げるでしょ。今も話しをそらそうとしたし」
「ツッコミを入れただけなんだが！？それに俺は逃げたりしねぇよ。理由を聞いて、必要なことだったらちゃんと答えるぞ」
「そして言わないほうが面白かったら教えないんでしょ？」
「うむ。もちろんそうだ」
なんでもホイホイと教えたりしたら面白くも楽しくともなんでもないからな！
「……」
「すまん冗談だ。だからその振り上げた拳を止めてくれ！！昨日の夜のことならちゃんと話すから！」
「……そう。残念ね」
「なにが！？」
最近優子がわからなくなってきました。

「大方、俺が昨日の覗き戦線に参加していなかったのが気になってるんだろ？」
「吉井君に聞いても『僕のほうが知りたいよ』の一点張りだし、部屋に行ってもいなかったのよね」
「……部屋に入ったのか？」
「ええ。なにか見られたらマズイものでもあるの？」
「……いや、別に」

男の部屋に入るのは少し躊躇って欲しいところだが……なんでだろ。“家主のいない部屋”“勝手に侵入”この二つの単語が頭の中で危険信号だしてきてるんだが。

「それで雅夜どこにいたのかしら？」
「合宿所の屋根の上」
「……へ？」

そういえば夜空が綺麗だったなぁ～。やっぱり建物の光がある都会と比べて、こういうところで見る夜空は格が違う。

「そんなところでなにしてたのよ」
「なにも。ただ皆が寝静まるまで時間を潰してただけだ」
「寝静まるって……ん？ちょっと待って。え～っと……」

呆れたような顔をしていた優子がだんだんと青ざめていく。どうやら気付いたようだな。

「さっきから噂されてる『夜中に小さな爆発音が沢山聞こえた』ってもしかして……」
「その件についてはノーコメントで」

「……深く聞かないほうがよさそうね」

納得してくれたのか、マウントポジションを解いて立ち上がる優子。
さっきまで当たってた太腿の感触が離れたのが少し残念だってことは秘密だ。

「じゃあ、アタシは代表たちのところ戻るわね。朝食をまだ食べてないし」
「おう。俺も今日はちゃんと朝飯を食いたいしな」
「次も期待してるわよ」
「ちょっと悪びれようぜ！？」

手を振りながら去っていく優子。リムジンバスの中での出来事を少しでも反省してもらいところだ。
……まぁ、なんだかんだ言って作っちゃうんだろうな俺。

「…で。なんか俺に聞きたいことでもあるのか雄二に明久？」

さきほどから少し離れた位置からこっちを見ていた明久と雄二のほうを振り向きながら声をかける。要件なんかはわかってるいるが、な。

「気付いていたなら早くしてもらいたかったんだがな」
「四人で話し合う時間を与えていただけなんだけどな。もう話し合いは終わったのか？」
「ああ。カメラは二段構え・戦力の増強・俺達の保身について明久たちにきちんと説明しておいた」

ふむふむ。やることはやっておいてくれたみたいだな。

「んじゃ、俺に聞きたいこととってなんだ？」
「決まってる。は――――」
「ちなみに犯人についてのことは教えるつもりはないからな」
「なんでだよ！」

それこそそんなの決まってるだろ。面白くないからだ！！

「というか『教えるつもりはない』って、まさか知ってるのか！？」
「なにをいまさら。“犯人のお尻に火傷の痕がある”って盗聴したとき犯人と会話してたの俺だぞ？」
「なにさらっと重大発言してるんだよ！？」
「嘘っ！？あの会話って女の子同士じゃなかったの！？」
「……もう一度再生する《ピッ》」

康太が慌てて小型録音器を取り出して操作する。なんで今持ってるんだよ。

《――――相変わらず凄い腕前だね。でも、このまえ母親にバレてお灸を据えられたんでしょ？よく続けてやれるよね》
《ああ、文字通りお尻にやられたよ。全くいつの時代の罰なんだか。まぁ、この程度じゃ乙女の心は止まらないけどね》
《それはまた……バカだね》
《その口調の君に言われたくないね。でも未だに火傷の痕がお尻に残ってるんだよ。なにか早く治すいい方法知ってるかい？》
《知ってるけど教える気はないよ。面倒だしね。自然治癒に任せればいいんじゃないかな？》
《……その口調でも性格はまるで変わらないんだね？まぁ、放っておけばそのうち治るか》

「ほ、ホントだ……。言われてみると雅夜っぽいかも」
「なんでお前まで女口調なんだ？」
「むぅ…。全く気付かなかったぞぃ」
「もちろん盗聴されてるのに気が付いてたからな、俺だとバレないように注意していたんだ。それに一発でお前らにバレるとつまらないだろ？」
「……バレていたのか」

昔機械を使って陽菜さんに徹底的に弄られたからな。近くに起動してある機械があるとわかるようになったんだ。

「……お前はいったいなにがしたいんだ？」
「楽しみたい。ただそれだけだ」

そして俺がこの合宿で求める一つだけの楽しみは合宿最終日。それ以外のなんでもない。

久々に血が踊る気分を味わえるはずだ。

第２３１話（後書き）

衝撃の事実発覚（笑）

雅夜は女装は大っ嫌いですが、女口調くらいなら平気なのです。

感想とアンケートお待ちしております。

第２３２話

「えーっとつまり……雅夜は覗きには協力するけど犯人探しには協力しないってこと？」
「まぁ、そんなところだな。だから協力者の確保をしにいくのも俺はパスする」

今日中にちとやっておきたいこともあることだしな。

「……今回は非協力的」
「うむ。いつもの雅夜なら率先して動くところじゃがのぅ」
「コイツにはコイツの考えがあるんだろ。力になってくれるなら俺はそれでも構わねぇけどな」

んー、別に味方になるってわけじゃないんだよなぁ。裏切ったほうが面白そうだったらすぐに裏切るつもりし、俺は俺の願いを叶える為に動くだけで雄二達のために動くわけじゃないんだよな。

「…っと、そうだ。お前らに一つ言っておくが、この合宿中俺は基本的に一人で行動するつもりだからな」
「んだと？」

俺の言葉に雄二がすぐさま反応してくる。

「言葉通りの意味だ。この後お前らは協力者を増やしにいくみたいだが、俺は付いていかない。もちろん学習室に残って西村さんの足止めをしてるわけでもない」
「ならばどうするつもりなのじゃ？」

「俺も自習を抜け出す。お前らとは違った目的でな」
「じゃあついでに鉄人の注意を引きつけてよ」
「断る。西村さんの相手なんてしてられるかよ。優子の奴、気配消してる俺を捕まえられるんだぞ？優子から逃げるのに精一杯だよ」

昨日のこともあるし、自習のときは優子にずっと見張られてるような状況のはずだ。うまく逃げ出せる確率は７０％ってところかな？

「まぁ、そんなわけで俺を頭数に入れないでおいてくれ。夜には戻れると思うから」
「夜！？そんなに長い間抜け出すの？」
「予定ではな。早く済めば夕方には戻れるだろうが、手間取っても最悪覗きには間に合うようにしとく」
「……今度はなにをするつもりだ？」
「そりゃもちろん企業秘密だ」

面白いことを思いついたんだが、今回のは成功するか微妙なところなんだよな。

「ねぇ皆。話しはこれくらいにしておいて、そろそろ朝ごはん食べない？僕もうお腹ペコペコなんだけど」
「ん？……っと、確かに思ったより時間がたってるな。場違いな発言にはツッコまないでおいて、飯食うか」
「確かにそうじゃな。食堂もいつのまにか人が少なくなっておるからの」
「……時間ももうない」
「うおっ！？あと十分もねぇじゃねぇかよ！くそったれ。一昨日みたいに朝飯抜きは御免だぞ！」

急いで飯を食べ始める。

こうして俺達の朝は慌ただしく終わった。

☆

「こっからは別行動だな」

学習室に入るなり雄二たちに小声で言う。

「ああ。俺達はまず久保と交渉してあと、学習室を抜け出して他クラスとの交渉に行くつもりだ」

「俺はタイミングを見計らって此処を抜け出す。少しは西村さんの目を引くかもしれないが期待せんでくれよ」

「わかってるって。雅夜こそドヂふんで木下さんに捕まんないようにしなよ」

「姉上も警戒してるようじゃしな。あれはきっと片時も雅夜から目を離さないと思うぞい」

「問題ない。本気でやれば優子にでさえ、消えたことすらしばらく気付かないようにできる」

「……それはそれで人間として問題がある」

そこは気にしちゃダメだ。

第２３２話（後書き）

今回はちょっと短いですね（汗）

十日もブランクがあるだけで、こうも書けなくなるのか…っ！

感想＆アンケートお待ちしております。

第２３３話

朝食を終え、昨日と同じ自習室へ。

「お。いい席発見。今日は此処にするか」

Ｆクラスの方は騒がしいためＡクラスの方で空いてる席を探すと、ポツンと一ヶ所空いてるテーブルがあった。しかも自習室にある二つの扉のうち明久たちの近くにある扉とは逆の位置であった。

「あ、浅月君。ボクも一緒していい？」

俺がテーブルにつくと近くにいた工藤が問題集を片手に声をかけてきた。

「ん。別に構わないぞ」

「ありがとね♪ちょっと解らないところがあったから頭の良い人に教えてもらいたかったところだったんだ」

テーブルに勉強道具を広げながら鼻歌交じりに言う工藤。

「おいおい。誰も教えるなんて言った覚えないぞ？」

「でも自習時間なんだからさ、教えてくれてもいいじゃん♪え～っと、確かこのあたりに……あった！此処の問題なんだけど、参考書にも乗ってなくてね」

「自分でやれ。わかんなかったら答えをみて覚えればいいだろ」

俺の眼前に工藤が問題集を広げてきたので顔を逸らして逃げる。静を求めてこっちに来たってのに……。

「浅月君でもわからないのかな～？いつもなんでもやれてすごいけど、やっぱり無理なこともあるんだ」
「……ほぅ。なんだ工藤。それは俺を挑発してるのか？」
「べっつに～。ボクはそんなつもりじゃないんだけどナ～♪」
どう考えても挑発してるな。よしっ。乗ってやろうじゃねぇか！
「貸せ。出来なかったら今度好きなだけ菓子作ってやる」
「ホント！？やったぁ～♪」
コイツ……俺ができないと思ってやがるな！
「その代わり、正解したら工藤の奢りでラ・ペディスな」
「ふぇ？」
明久みたいにきょとんとしてる工藤から問題集を奪い取る。科目は数学か。公式を当てはめれば出来ないことはないと思うが……っと、やっぱり応用問題か。しかも『超難問！！』って書いてあるじゃねぇか。製作者からも挑発を受けるとはな。
「だが答えが出せない問題などない」
「ちょ、ちょっと待――――ムグッ！？」
騒ごうとする工藤を片手で抑える。
え～っと、此処はあの公式を使って……っと、此処であっちも使うのか。違う公式を使わせるとは、確かに面倒いレベルだな。……ん？どこかで間違え――――いや、これで合ってるな。引っ掛けもいれるとは性格悪いなこの問題集……となると……ふむふむ。

「答えは……はぁっ！？ぁあ、くそったれ！どんだけ性格悪いんだこの問題つくった奴は！！」
「ど、どうだった浅月君？さっきからペンが動いてないってことは、やっぱり浅月君でも無理だったんだよね？」
ホッと胸をなでおろしながら工藤が言う。
「いや、解けたぞ。ホレ」
「うそっ！？」
が、一瞬で驚いた表情になる。
そんな工藤を余所に俺は答えを書く欄に『1』といれる。ウザイことに最後までやると綺麗にこの数字になるという回答者をおちょくる問題であった。
「って、1ぃ？ホントにこんな綺麗な数字になるの？」
「ああ。正解がどうか気になるんだったら答えを見てみな。合ってるはずだから」
工藤は俺から問題集を奪い取って答えが書いてあるページを慌ただしく開く。そして答えの書いてある場所を見つけると……
「あってる……」
「はっ！この程度の問題、俺にかかれば暗算でいけんだよ」
「なんで出来るのかな～……。代表でも難しいって言ってたのに……」
しょぼんとして問題集を見直す工藤。Aクラスの上位に入ってるだけあって、自分に出来ないのに他の人が出来るのが悔しいのか？

「工藤」
「……なに浅月君」
そんな工藤の肩をそっと叩く。俺だってな人間だ。泣きそうな顔を見たらほっとけないんだよ。
「ちゃんと約束は守れよ。期待してるぞ（グッ！）」
「……わかったよ。今週の日曜でいい？」
「おう！」
ラ・ペディス行くの久し振りだなぁ。前行ったのは……如月ハイランドに優子と行く前だったな。
と楽しみに思ってると、工藤の目に『仕返してやる！』という強い光が宿った。
「というわけだから優子。今度の日曜は浅月君とデートに行ってくるね♪」
「ちょ、優子！？いつのまに俺の後ろに――――――ええぇ、腕を放せ！関節を決めようとするな！」
ホントに気配を消すのが上手くなったな！なんで気づけないんだ俺！？
「ちゃんと理由を説明するから！」
「話しは最初から聞いてたから初めからじゃなくていいわよ」
しかも最初からいたのか！？今日は優子から逃げる予定なんだが……
……幸先が不安になってきたぞ。
「まず第一に。俺は『工藤の奢りでラ・ペディスな』と言ったんだ。

これなら俺だけじゃなくて他の奴も誘って工藤の奢りでいけるだろ？」

「まぁ、そうね」

「ええっ！？ボクそんなにお金もってないよ！！」

「そこは頑張れ。第二に。工藤には前、お菓子を作ってやると約束しちまったからな。ついでに果たしておこうと思ったんだ」

「あー、そんなこともあったわね。確かシュークリームだったかしら？」

「ああ。けど此処に来るときに工藤に食べられたから違うのだがな」

「んーなんだろ。今ボク、残念なような楽しみなような不思議な気持ちだよ」

約束したのは番外編のバレンタインの時で時系列がおかしいかもしれないが、気にしないっ！！！

「そんで優子もその時約束してたろ？だから最初っから優子を誘うつもりだったんだ」

「でも三人デートってのはいただけないわよ？」

「デートって思わなければいいだろ。途中でＦＦＦ団や雄二に見つかろうが問題ないし」

どうせバカテス補正でギャグになるだろうし。

第２３３話（後書き）

こんなに長く工藤と絡ませたのは始めてかもしれない（笑）

ちなみに三人デートの話しは書くかどうかわかりません。

どちらかと言うと『書かない』かな？デートのネタがそんなにありませんので（苦笑）

感想＆アンケートお待ちしております。

第２３４話

「そういえば、浅月君が一人でいるのって珍しいよね？」

すっかり落ち着いた優子もテーブルに座って勉強道具を広げると、さきほど俺が一人でいた事を思い出したのか、工藤が訪ねてきた。

「そうかぁ？そうでもないと思うんだがな」

一人でいるときも結構あるはずだが。

「雅夜の場合は一人でいることが多いのは、他の人に知られたくないことをやってる時が多いからよ。愛子が言ってる意味は、“何もしないで一人で居る時”ってことよ」

「あー、それなら納得」

「納得しちゃうんだ……」

確かに俺はいつも悪巧みしたり、悪戯したり、計画練ったりしてるな。今も逃げ出そうとして様子を伺ってるだけで、なにもしてないわけじゃないんだけどな。

「まぁ、俺でも静かに一人で居たい時だってあるってことだ。だからFクラスのほうに行かず、Aクラスのほうにある空きスペースでのんびりしてたんだ」

「のんびりするだけだったら知り合いのいるところでも出来たんじゃない？それこそ優子の居るところ、とかさ♪」

「ぐーたらしてるだけの奴が目の前にいたら、流石に勉強の邪魔になるだろ。人に迷惑をかけてまでグータラするなんて野暮な真似はしねぇよ」

それっぽい事を言っておく。本当は一人のほうが抜け出しやすいからだ。それまでグータラしてるってのは本当だが。

「そう。だったらちょっとアタシの勉強手伝ってくれないかしら？」

「さっきも工藤に言ったが、面倒いから断る」

「……私からもお願い」

「だから断――――って霧島！？お前いつのまにテーブルについていやがった！？」

声をしたほうを見るとそこにはさっきまで居なかったはずの霧島が勉強道具を広げていた。

うん。もう既に日常的にだったら俺より気配を消すのがうまいんじゃないかな。優子も。

「……気配遮断は得意」

「頼むから、そういうのは雄二相手だけにしてくれ」

「あ、代表。代表も浅月君に教わりにきたの？」

「……うん」

「可愛い子三人に囲まれるなんてよかったじゃない雅夜」

ＦＦＦ団の連中に睨まれてなくて、優子が皮肉っぽく言わなければな。

「まぁ確かにな。才色兼備の霧島に最後の常識人の工藤、で俺の愛する優子。こんな状況で嬉しがらない奴がいるわけがないわな」

「今さらっと凄いこと言ってなかった！？ねぇ、ボクたちの説明おかしかったよね！？」

こういうツッコミが出来るから工藤は常識人なんだよ。

「なにかおかしなところあったかしら？」
「さぁ？霧島を才色兼備じゃなくて雄二の妻って言ったほうがよかったか？」
「……それでもいい」
「違うよ！ボクが最後の常識人ってところだよ！」

いや、そこは間違ってないだろ。むしろ優子の説明のほうにツッコンで欲しかったんだが。

「だってなぁ。俺の周りにいる面子は雄二・明久・秀吉・康太・島田・姫路・優子・霧島・工藤・清水・久保で。こんなかで言ったら文句なしの一番の常識人だろ？」

久保と清水は同性愛者。島田と姫路と霧島と優子は好きな奴のことになると人外の動きが出来る。康太は高校生なのに盗撮や盗聴のエキスパート。秀吉は声帯模写。雄二と明久はバカ。ほら、残ったのは工藤しかいない。工藤は少しエロいってところ意外は凄いまともだからな。

「さりげなく優子を人外扱いしてるみたいだけどいいの？」
「そりゃ雅夜みたいな人と一緒に入れば誰でも人外の仲間入しちゃうから別にいいわよ。アタシが雅夜のことが好きなのには変わりはないんだし」

優子もさらっと言うなぁ。前までは恥ずかしがっていたってのに。なにが優子変えちまっ――――――いや考えるまでもないか。

『島田。そんなに血相を変えてどうした？』
『西村先生。ちょっと須川に用事があるんです。スグに終わります

から』
『そうか。だが、その剣幕だとお前が須川を血の海に沈めないかと心配なんだが』
杜丘の奴らは人外ばっかりだからなーと思っていると、少し離れた位置から島田と西村さんの声が聞こえてきた。む。もうそんな時間か。
「っと、そろそろお喋りは止めて勉強をし始めないといけないんじゃないか？」
「発端がよく言うわね」
俺が言うと三人はテーブルに広げてある参考書とノートの方に目を移す。流石はＡクラスの才女たち。勉強するときはきちんと勉強するんだな。
さて、俺も――――――。
「っ！！そこぉっ！！！（ガシッ！！）よし、掴んだ――――」
「ん？なにか僕にようかい木下さん？」
「久保君！？ご、ごめんなさい。なんでもないわ」
「？？？」
☆

「ふぅ……危ない危ない。どんだけ反応が良いんだよ優子の奴」

俺が気配を消して逃げたと同時に気付きやがったな。今回は間一髪でどうにか逃げ切れたが、次は捕まるかもしれん。

「俺が鈍ってきてるのか、それとも優子の成長が早いのか。どっちにしろ頑張んないといけないのは俺のほうか。めんどくせぇな」

悪態を付きながらも俺は今、笑っている。これはこれで戦いとは違った楽しさがあるからだ。

優子には悪いが、俺の楽しみの一つにさせてもらおう。

「まぁ、それはおいといて。――――――俺は俺のやるべきことをやっておくか」

合宿所のとある一室。数台のパソコンを同時に起動させ『試験召喚システム』のデータバンクを開き、『黒金の腕輪』と書かれた項目をクリックする。

「火種は多いにこしたことはないからな」

第２３４話（後書き）

またもシステムを弄る雅夜。

今回はどんなふうに戦局を変えるのか、雅夜はどう動くのか注目！

――――するまでもないですね（笑）

感想＆アンケートお待ちしております。

第２３５話（前書き）

更新遅れて申し訳ございません！

第２３５話

合宿所のとある一室にエンターキーを押す音が響く。

――――タン。

「……ふぅ」

椅子の背もたれに体重をあずけ、大きく息を吐いて力を抜く。

時刻は１９５０。もう覗き騒動が始まるほんの十分前なのだが、自習中に抜け出してから今だに俺は雄二たちの元へ戻っていなかった。

「やっぱり一日足らずじゃ無理があったか」

ポチッ、ポチッ。と人差し指一本だけでパソコンを適当に弄りながら呟く。『無理があった』という言葉からわかるように、今日中にやっておきたかった修正（改造？）は終わらせることができなかったのだ。

「無理があったなかで、唯一の出来たことが『腕輪の能力発動の速さＵＰ』というしょぼい項目。しかも俺の黒金だけじゃなくて全ての召喚獣に作用しちまったから、ヘタすれば自分を追い込んだことになったからなぁ」

例えば霧島の腕輪《拘束（バインド）》が厄介になった。発動が早くなるってことは回避がしにくくなるってことだ。

さらに言えば姫路の腕輪《熱戦》もヤバい。今までは腕輪が光って

からワンテンポ置いてからきたのだが、それがワンテンポ置かずにすぐに来るってわけだ。防御が間に合うか微妙になってきた。

「……んー、ま。気にしないでおこう」

腕輪もちは少ないんだしどうとでもなるだろ。

☆

～side明久～

「吉井っ、大変だ！」

突如ドアが開かれ、クラスメイトの須川君が飛び込んできた。

「須川君、どうしたの？作戦開始まではあと少し時間があるはずだけど」

「やられた！大食堂で敵が待ち伏せしていたんだ！今は戦力が分断されて格階に散り散りになっている！」

「なんだって！？」

まさか向こうに先手を打たれるなんて。こっちの情報が洩れていたのか！？

「……情報が洩れるようなことはない」

ムッツリーニが僕の疑問を払拭するように断言した。ムッツリーニがそんなヘマするはずがないし、もし洩れていたとしても敵側が行動を開始するには相応の準備が必要なはずだ。となると……

「こっちの考えを読まれていたか……！」

雄二が悔しげに呟く。

そう。こっちが戦力を増強して正面突破を図るのを読まれていたことになる。普通は隠密行動に出ると考えるはずなのにこの作戦を読むということは、相手は余程雄二の思考回路を熟知していると言える。そんなことができるのは雅夜以外に一人しかいない。

「霧島翔子じゃな。流石、学年代表の名は伊達ではないの」

「よっぽど雄二の覗きが許せないんだね」

こっちのアドバンテージは雄二の練る常識はずれな作戦だけだったのに、それすらも許されないとなると状況はかなり苦しい。

「くそっ、雅夜のやつ……！こうなるとわかってたのに俺達に知らせなかったな……！」

そんな中、皆の気持ちを雄二が代表して言う。

あの雅夜なら絶対こうなるとわかっていたはずだ。だけどなんで？

なんで雅夜は僕たちに教えなかったんだ？

「アイツはいったいなにがしてぇんだよっ！」

部屋に雄二の叫び声が木霊する。だがそれに返事はなかった……。

☆

～ｓｉｄｅ優子～

２０００時。大食堂のほうから奇襲に成功した女子と驚いてる男子の声が聞こえ始めた。

「皆！代表の作戦が開始したみたいよ！アタシたちもそろそろ行動を開始するけど、準備は出来てるわよね？」

『『『はいっ！』』』

後ろにいるクラスメイト達が元気よく声をそろえて応えてくれる。アタシたちは戦線に加わらず、ある人物を抑えるための別動隊として合宿所を動き回る役目だ。

「んじゃ、行くわよ！付いてきて！」

その声をきっかけに大浴場前の廊下に潜んでいたアタシたち――アタシを含めてＡクラス女子六名で一気に階段をかけあがる。

「まずは一階から探していくわよ！ここが一番可能性が高いから念入りにお願いね！」

周りで起きている戦闘を無視して、指導室の近くにある小部屋を探し始める。

事前の調査じゃ三階と二階にはないことがわかったけど、一階はまだ完全には調べきっていなかった。

『今更だけど、えーっと……浅月君だっけ？その一人を捕まえるためにこんなに人数っているの？』

そんな中、一人が聞いてくる。なに言ってるのよ。抑えておくだけならこれで足りるけど、捕まえるにはこれでも足りないくらいよ？

『浅月君！？私たちの目的って、浅月君を抑えに行くことだったの！？』

『……アンタさっきまでなに聞いてたのよ？最初っからそう言ってるでしょ』

『まぁ、落ち着きなって二人とも。確か浅月君って清涼祭の時のあの人でしょ？代表や坂本君たち五人でも全く歯が立たなかったっていう』

あの戦いは校内でも有名な話しとなっている。学年一位と二位、元神童、学園初の観察処分者、それとアタシの五人がたったの一人に負かされたんだから無理もないけど。

「そうよ。けど、その注意すべき雅夜は昨日と同じで今日も戦線に姿を見せてない。それどころか昼頃から姿を見たものは誰もいないわ」

きっと合宿所のどこかでなにかを企んでいるはず。企むだけなら可愛げがあるけど、あの雅夜のことだからそれ以外にもなにかやっていそう。

「だからこそ、アタシたちは雅夜を抑えるためだけに動くのよ。わかった？」

『了解！――――って、さっそく隠し部屋発見！』

「ホント!?でかしたわね!」

声がしたほうを見ると、傍から見たらなにも無い壁のところが少しだけ押されているの見えた。よく見つけたわね。

『うわっ。ドアの境目がなくて押しドア式って、ホントに隠し部屋だな』

『なんの為に作ったのか不思議に思うね』

どうせ雅夜が面白がって作っただけでしょ!それより入るわよ!

(バンッ!!)「抵抗しないで大人しくしなさい雅夜っ!!」

そしてアタシたちは扉を勢いよく開け、中に一斉に入っていく。

第２３５話（後書き）

最近、明久たいの雅夜への不信感が上がってきてるきがする（笑）

なんかそのうち喧嘩が起きそうな勢いですね（汗）

感想＆アンケートお待ちしております。

第２３６話

ピョーンピョーン

《残念！ここはダミーだよ♪ははっ。残念！ここはダミーだよ♪ははっ》（裏声）

扉を開けると目の前に箱があり、触ってもいないのにその中からビックリ箱のようにミ〇キーが飛び出してきた。いや、ようにじゃなくてビックリ箱そのものね。部屋に誰か入ってきたら作動するようになっていたのかしら？

《残念！ここはダミーだよ♪ははっ。残念！ここはダ――――（グシャ！！）

リピートし続けてるミ〇キーを踏み潰して黙らせる。地味に似ているから余計にムカツクわね。

「皆。雅夜はここにはいないみたいだから、次行くわよ！」

『『『は、はいっ！』』』

アタシが怒っていることに気がついたのか、皆の声がどもっている。怯えさせてたらごめんなさいね。

「こういう部屋が沢山あると思うから、次からはバラバラに行動するわよ！」

『『『はいっ！』』』

「それぞれの階に二人づつで探しにいって。二階と三階も念入りに

もう一度おねがい！見つけ次第無理に捕まえようとしないで、アタシに連絡すること！制裁はアタシがするわ！」

『『『了解です！』』』

「それじゃあ皆――――――――捜索開始っ！！」

アタシの号令に従って階段の方へと駆け出す四人。アタシと一緒に一階を探す一人はすぐさま壁に手を付きながら歩きだしていた。

「――――――覚悟しときなさいよね雅夜」

この前由美に教えてもらったやり方で殺気をだす。雅夜ならこれに気づくわよね？

☆

「っ！？」

殺気！？しかもこの感じは由美――――――と似てるけどずいぶんと小さいな。由美に殺気のだし方を教えてもらった優子、ってところか？

「ってか、それくらいしかねぇか」

今みたいな野生本能が強い殺気を出せる奴なんてこの学園にはいないからな。あ、俺は別で。俺も出せるっちゃ出せるけど、そこまで野生的ではない。

「ついに殺気のだし方まで習い始めたか優子のヤツ。杜丘の連中も面白がって教えてるなぁ」

それが原因で人外に成りかけて――――いや成り始めてるってのに。

「それにしてもなんで殺気が？思い当たるのはダミー部屋くらいしかないが、さっそく見つかったのか？」

だとしたら関心ものだな。部屋は合宿所の見取り図にも載ってなくて、しかも傍目にはわからない。壁に手をついた程度じゃ開かないよう上手く作っておいてある。それをいとも簡単に見つかったとすれば大したものだ。

「まぁ、ダミーが先なら此処は絶対に見つかんないな。一番初めが此処じゃなかった時点でアウトだ。残念だったな優子」

悪戯は無事に成功。これでしばらくは安全だが、後が怖いな。

……出るのはもう少し後にしとこう。

☆

『優子！三階と二階が四箇所、一階には七箇所！全部で１５箇所発見したって！』

「１５！？あのバカ。どんだけ隠し部屋つくってんのよ！！」

しかもまだ雅夜が見つかっていないってことは他にもあるってことよね。

「三階と二階は一人にして、残り全員を一階に回して！一階にはまだ沢山あるはずよ！」

『了解！』

探し始めて十数分しかたってないのにもう七個。周りが邪魔で動き辛いはずなのにこの数だ。いくらなんでも多過ぎる。

「でもしらみつぶしに探せば必ず見つかるはず！」

効率が悪いかもしれないが、今はこれが最善策。……ん？

「……しらみつぶし？」

なぜかしら、なにかおかしな気がするわね。自分で言った言葉に違和感がある。

しらみつぶし……一階から三階までちゃんと探してる。屋上や屋根裏には流石にいないと思うから全部――――――――

「地下があるじゃない！！」

そうよ！アタシたちは元々地下にある女子風呂を守るために行動してて地下には誰もいないから、地下は全然探してないじゃない！！出発地点がそこだったから誰も雅夜が近くにいたなんて気がついてない。
さっきから感じていた違和感はこれだったのね！

「可能性としてはゼロじゃない。むしろ高いわね…！」

ほぼ１００％と言ってもいいかもしれない。地下なら地上以上に隠し部屋が作りやすい。それに入浴の時間以外は鍵がかかってるといっても、風呂までの廊下にはなにも仕掛けはされていない。鍵がかかっている為警備などの人も誰もいないから人気もまったくない。

「やってくれたわね雅夜……！」

しかも雅夜が動き始めると思う最終局面は必然的に風呂場に近くなるはず。風呂前の廊下に隠し部屋があるならすぐに登場することができ、なおかつ直前まで姿を隠していられる。

「皆！三階と二階にいる人たちも呼び戻して全員で地下に行くわよ！雅夜は地下にいる可能性が高いわ！」

覗き騒動の音にかき消されないように大きな声で皆に伝える。

待ってなさいよ雅夜……っ！

第２３６話（後書き）

優子と雅夜の心理戦（？）もついに終幕か！？

『バカとテストと召喚獣さんっ！』はやるのかな（ワクワク）

感想＆アンケートお待ちしております。

第237話

『優子！優子の思ったとおり隠し扉あったよ！』
『だけど、今までなかった鍵がついちゃってるよ。どうしよう！』

皆で地下に向かってすぐ、目当ての扉が見つかった。思ったとおり、此処に本命があったのね！

「――――って鍵！？それは予想外ね……」

一応陽菜さんから簡単なピッキング方法は教わってるけど、雅夜が作った奴を突破出来るかしら……？

「いけるかどうかわかんないけど、アタシがやってみるわ。この中でピッキングが出来る子ってアタシ以外にいないわよね？」
『うん。普通は出来るわけないよ』

冷静なツッコミを喰らう。もう自分が普通じゃないことはわかってるわ。

『あ、でも優子。これピッキングじゃ開けられないよ』
『テンキーだから暗証番号が必要なの』
「あら。鍵ってそっちのことだったのね」

そりゃ確かにピッキングじゃ開けられないわね。というか今までにない厳重さね。

「暗証番号ねぇ……。そんなのわかるわけないじゃない！！」

『ちょ、優子!?今は怒ってたって無駄だって!』
『そ、そうだよ。こっちは私に任せてだいじょーぶだから、皆は他をお願い』
「……任せていいの?」
『感と運には自信があるからね。自称選択問題で一度も外したことのない私なら五分以内にやってみせる!』
と笑顔でVサインを見せて、さっそく暗証番号を適当に押し始める。
余程自信があるみたいね。
「それじゃ他の皆はもう一度部屋を探しはじめ《ピロリーン♪ガチャ》『三度目の正直とはこのことか!』……て、ゑ?」
『『『……はい?』』』
え、ちょ、ちょっと待って!?なに、今の音!?アタシには鍵が空いたような音が聞こえたんだけど!?
「ま、まさか……!」
漫画ならギギギという効果音がなりそうな感じで後ろを振り返ると……
『この私に不可能は無い!!』
『『『「嘘でしょ!?」』』』
腰に手を当てて胸をはってる姿が目に入った。テンキーにはｃｌｅａｒと書かれており、隣には今まで存在しなかったくぼみがあった。
「アンタ……なにものよ」
『私は私であって、他の何者でもないよ。まぁ、私自身たった三回

で当てられるとは思ってなかったけど』
『流石運の良い子！略して運子！』
『その略称は止めて！？』
『というかアンタの名前なんだっけ？』
『酷い！！クラスメイトなのに名前すら覚えてもらってない！？』

そういえばこの子の名前なんだっけ？というか同じクラスにこんな子いたっけ？

「ねぇ。名前はなんて言うのかしら？」
『優子まで！？もうっ、皆して酷いよ！！』

怒らせちゃったのか、勢いよく扉を開けてなかに入っていく運子ちゃん（仮）。

『って、私たちも早く中に入ろ。私たちの目的は浅月君の足止めなんだから！』
『そういえばそうだったわね。なんかもうすっかり宝探し感覚で隠し部屋探してたから忘れちゃってたよ』

それに釣られるかのようにそのあとを付いていく皆。

「あ、ちょっと待って皆！もしかしたら雅夜の――――――」

――――ドサッ

「罠……なのね。やっぱり」
『気付くのが少し遅かったみたいだね。優子以外の子は皆眠っちゃったよ』

部屋の中に入ると床に倒れた四人のクラスメイトと、スプレー缶を片手に持った運子ちゃん（仮）がいた。やっぱりこの子、私たちのクラスメイトじゃないだけじゃなくて雅夜の協力者でもあったのね。

「どおりでおかしいと思うはずね。最初に隠し部屋を見つけたのもあなただし、地下の隠し部屋を見つけたのもアナタ。それにクラスメイトじゃないとしても同じ学年の子なら名前だけならともかく顔まで知らないわけないもの」

『皆、誰かの知り合いだと思ってたからね。とくに疑問に思わなかったんでしょ』

「してやられたわね。負けを認めるわ」

でも雅夜をアタシの動きに集中されてただけでも充分。もとよりアタシの役目はそれだけだったんだから。

『ちなみに今頃マサヤは騒動に加わってる頃かな？さっき今日の騒動の終わりが近いって言ってたから出向いてると思うけど』

「えっ！？」

『ん？まさか僕を止めただけでマサヤを止めれたと思ってた？残念。僕はマサヤにたま～に報告とかしてたけど、マサヤから僕にあった指示は最初に一つ《優子の足止めヨロ》だけだよ』

「雅夜を足止めするつもりが、いつのまにか逆に雅夜に足止めされてたってこと……？」

『うん』

嘘……。それってつまり、アタシは雅夜の手の平で踊らさせられてたってことじゃない。

『あ、そうだ。一応言っとくと、此処がマサヤの本拠地ってのは間違えじゃないよ。優子たちが動き始めるまではマサヤは此処にいて

――――』

「アタシたちが行ったのを見計らって別の場所に移動した、でしょ？」

『Ｙｅｓ』

その別の場所がどこかこの子に聞いてもどうせ教えてもらえない。そういえばこの部屋の暗証番号を教えてもらってなかったわね。どれも雅夜の計画通りってわけなのね。

「いいわ。なにからなにまで完全にアタシの負けね」

たぶん、自習の時に雅夜を捕まえられなかったのと、探し始めるとき最初に此処を見つけられなかったのがアタシの敗因。まだまだ雅夜には追いつけない、か……。

「って、そろそろアンタの正体を教えてくれてもいいんじゃないかしら？話しを聞いた感じじゃ杜丘の男性が女装してるってくらいしかアタシにはわからないんだけど」

『それだけ分かっていれば充分だよ！？』

雅夜のことをマサヤってカタカナで呼ぶし、部屋に入るまでは一人称が私だったけど、さっきからは一人称が僕に変わってる。それに口調も男っぽくなってるからね。

『まぁ、隠し通す気はないからいいんだけどね』

そう言って後ろにある机に飛び乗る。

「ある時は女装男子！ある時は魔法使い！またある時はなんでも屋！その正体は……」

「待って！二つ目がなんかおかしくなかったわよね！？」

魔法使いってアンタねぇっ！！というか声で誰なのかわかっちゃったわよ！

「オレだよ、オレオレ」

そして名前をちゃんと名乗りなさいっ！！

「というわけでお休み優子。騒動が終わるまで眠っててもらうね」

言葉が聞こえると同時にアタシの意識は眠りへと落ちていった……。

第２３７話（後書き）

昨日は台風の影響で停電になり、ネットが繋がらず更新できず（泣）

六時頃からふて寝をしたら起きたのが朝の七時。どんだけ寝てんだよ俺（笑）

感想＆アンケートお待ちしております。

第２３８話

～ｓｉｄｅ雅夜～

『ミッションクリア。優子の無力化に成功したよ』
「ごく、ろ……う…。お前は…引き……続き、……指示、通りに……頼、む」
『了解。なんか声が途切れ途切れだけど、電波か調子か雅夜の頭が悪いのかな。そっちは大丈夫？』
「さぁな」
『マサヤがツッコミ放棄！？そいつは一大事だな！！』

うるせぇ。頭に響くから少し静かにしろや。

「いい、からっ。お前は言われた……とおりに、しとけ！！この程度の傷、一分もあれば治る」
『言い返せば五分は動けないってことだな。ってことは……外傷だけじゃなくて内部までやられた？』

ちっ。相変わらず無駄に鋭いやつだ。

「肋骨が三本持ってかれて、両腕にひびが少しってところだ。スキをつかれて後ろから一発もらっちまってな。ガードは間に合ったんだが、ガードの上から食らってこのザマだ」
『なにその化物？マサヤ相手にそれだけ出来るとか人間の仕業じゃないね。それが噂の召喚獣の強さなのか？』
「いいや。これは別の人外に喰らったもの。まぁ、確かに召喚獣が原因であるけどな」

少し前にあった出来事を簡単に説明すると……

1。優子が地下に気付いたことを、既に見つかっている隠し部屋の中で壁伝いにいるときに知る。
（ダクト移動。全ての隠し部屋はそれで繋がっている※風呂の近くは暑いので注意が必要）
←
2。優子が地下に行くまでバレないようにやり過ごし、地下に行った頃を見計らって廊下に躍り出る。
（いつも通り気配を消して）
←
3。雄二たちが霧島たちに遭遇したところにばったり。どちらにも俺の存在はバレてなさそうだが。
（ちょっと気まずい雰囲気）
←
4。雄二たちを助けるかどうか迷っていると明久が召喚獣を呼び出し、？橋女史も召喚獣を呼び出す。
（相変わらずの軍服に鞭という装備。点数が高い＝見た目からして強そう、というわけではないんだよな）
←
5。明久がやられるところを見送ってから「待たせたな！」と片手を上げながら皆の前に姿を表す。
「やられる前に助けてよ！？」ｂｙ明久
（当然無視。霧島たちも優子が失敗したことに気付く）
←
6。俺も召喚して、前哨戦という意味から？橋女史の召喚獣と戦う。

（ちなみに？橋女史の７０００にたいして、今の俺の点数は５００ちょい。清涼祭のときほどヤル気は出てないからな）

←

７。とりあえず……試しに一発、行ってみますかっ！複製（レプリカ）、最大展開！！

（後ろに跳んで黒金の腕輪発動。無数の小太刀で壁を作り射出する）

←

８。守りに徹する？橋女史だが、俺もこの程度で終わるつもりはない。すかさず腕輪発動。爆（バー）――

（周りに「グロっ！？」とか言われても止める気は俺には一切ない！！）

←

９。「教育的指導！！」ストと言い切るまえに俺の身体が壁まで吹っ飛びました。くそ痛ぇ。

（戦いに夢中で西村さんに気付かないとか、俺バカだなぁ）

←

１０。俺は肋骨が折れた痛みで行動不能に。ポカーンとしてるその他の生徒たちが次々に西村さんに捕まっていく。

（いくら西村さんとは言え、十人以上を同時に担げるのはどうかと思いますよ？）

と、まぁだいたいこんな感じだ。詳しく書くのは面倒――ゲフンゲフン。詳しく書くと何話かかるかわからないため省略させてもらう。

『相変わらずバカなことに努力してる、ってことでいいのか？』
「それ以外になにかすることあるのか？」
少し前のことを思い出してると身体の調子が戻ってきた。治った――――かどうかはわからないが、もう充分に動ける。
……さて、と。
「俺は逃げさせてもらいましょうかね」
「っ！？……浅月。もう目を覚ましたか、早すぎるぞ」
立ち上がっていつでも逃げれるように体制をとって呟くと、西村さんが俺の声に反応してきた。
「回復力には自信があるんで。さきに俺を確保しなかったのは間違えでしたね」
「骨を何本かは貰った感触があったんだがな……。手加減はしなかったはずだが、お前にはまだ足りぬか」
「いや、もうこれ以上は無理ですからね！？」
骨を何本持ってけば気が済むんだこの人は。というか手加減しないでやったのに、まだ上があるんですか！？
「これ以上此処に居ると身の危険を感じるのですぐに逃げさせてもらいます。ではでは」
「この俺が逃がすと思うか？」
「逃げ足なら流石に負ける気はしない」
身軽さならいくらトライアスロンが趣味の西村さんが相手であっても負ける気はしない。というか負けたくない！！

「それは――――――俺ではなく木下優子だとしてもか？」
「……ウン、ソウダトオモウヨ」
西村さんと優子。どっちから追いかけられるのが怖いかと聞かれれば、即答で優子と答えられる自信がある。あたりまえだろ？

第２３８話（後書き）

なんかもうグダグダだな（苦笑）

未だに協力者の名前を出せてないし（感の良い人なら気づいてるかな？）

雅夜が死にかけてるけどすぐ復活するし（回復力の高さの理由は番外のほうでわかるけど、書くのはまだ先だし……）あっ。

バカノリの番外、杜丘の奴らが主体の話しはバカノリの一周年が近いので（あと一ヶ月ちょい？）その時からはじめようと思ってます。

感想＆アンケートお待ちしております。

第２３９話（前書き）

？？「で、俺はこの後どうすればいいんだっけ？」
雅夜「明日の夜まで特にやることがないから此処で待機しててくれ」
？？「一日も部屋に閉じこもっていろと！？」
雅夜「別にいいだろそんくらい。……アレを持って帰るのが面倒なんだよ」
？？「アレって俺が持ってきたアレのこと？」
雅夜「ああ」
？？「つまり俺は荷物運びの為だけに此処に呼び出されたってこと？」
雅夜「ああ」
？？「……帰る」
雅夜「じゃあな」
？？「まったく憂いもなく言われた！？ちくしょー！！マサヤなんか合宿中に自宅をあさられて、エロ本の趣味とかを暴露されちゃえばいいんだよ！！！」
雅夜「ちょっと待てぃ！！」

第２３９話

「まさか？橋女子まで参戦してくるとはな」
「あの人、もう反則なまでの強さだったよ……」
「俺はどちらかというと西村さんの方が恐ろしいんだがな……」

覗き騒ぎから一時間ちょい。あの後起きた優子から逃げることにどうにか成功して、俺たちは今部屋にて反省会＆作戦会議（？）を開いていた。

「じゃがどうする？このままではお主らは脅迫犯の影に怯え、且つ覗き犯という不名誉な称号を掲げられてしまうぞい」

秀吉は昨日に引き続き無罪放免だったが、優子に俺の居場所を聞かれたときに軽く関節技をくらったそうだ。

「勿論諦める気は毛頭ない。残るチャンスは明日だけだが、逆に言えばまだ明日が残っているんだからな」
「そうだね。圧倒的な戦力差だったけど、そんなのは僕らにとってはいつものことだし。こういった逆境を覆す力こそが僕らの真骨頂だよね！」
「まぁ、どこぞの誰かさんがちゃんと戦いに参加すればもっと楽になったんだけどな」
「そんな奴がいるのか？まったく、酷い奴もいたもんだな」
「お前のことだ！！」
「ですよねー」

楽な戦いって面白くないし、つまらないだろ？だからこそ、ギリギリのところまで自分を追い詰めてそこから戦う。そのほうが何倍も面白い。

「……このまま引き下がれない」

「そうじゃな。こんなことはＦクラスに入ってからは慣れっこじゃ。今更慌てるまでもない」

康太と秀吉もやる気十分。うちのクラスの連中は勉強から離れてるほどヤル気が増すのかね？

「そうか。お前らが諦めていないで雅夜が本気をだすのなら、まだ手は残されている」

「流石は雄二！なにか考えがあるんだね！」

「当然だ。俺を誰だと思っている？」

「霧島の夫」

「……お前は少しでいいから場の空気を読んでくれ」

無理です。なぜなら、これが俺の性分なんだからなっ！！！

「それで、今度はどんな作戦を考えているの？」

「正面突破だ。……そんな絶望的な顔をせずに最後まで話しを聞け。正面突破の基本スタンスは変えないが、その分事前の準備で考えがある」

「変えないじゃなくて変えられない、だろ？」

「お前は少し黙ってろ」

扱いが酷すぎないか？まぁ、最近信用されるようなこと全然やってないから当然と言えば当然なんだが。

「正面突破を続行するってことは、こっちの戦力を増やすってこと？」

「そうだ。向こうの戦力はもう頭打ちだ。アレ以上は戦力を増やせない。口惜しいことに今日は負けたが、おかげで相手の戦力を知ることができた。これは大きいぞ」

戦争でもっとも重要視されるのは情報。いかに情報をすばやく、正確に手に入られるかが勝負の決め手となる。

まぁ、相手が強すぎたりしたら絶望してしまって余計に士気が下がるかもしれないんだが。

「……他のクラスでの目撃情報も集めた」

「向こうの布陣は教師を中心とした防御主体の形だが、色々と弱点がある、それがなんだかわかるか？」

「微塵もわからないね」

「チョキの正しい使い方を教えてやる」

「ふぎゃぁあっ！目が、目がぁっ！」

明久がのたうち回るのを余所に康太集めてきた情報に目を通す。

1、2、3……全部で6人か。戦闘に参加せずただ廊下を走りまわっていた女子生徒は。

だが、そのうち一人はアイツだから実質5人。予想通りAクラスに所属してる奴で俺を捜して足止め、運が良ければ捕獲をしようとしていたようだ。

明日はどうなるのか――――――――楽しみだな。

「まったく、少しは考えろってんだ。いいか？召喚獣を呼び出すフィールドには《干渉》というものがある。これは一定範囲内でそれぞれ別の教師がフィールドを展開すると、科目同士が打ち消し合っ

て召喚獣が消えてしまうということだから――――」

「要するに教師は余程開けた場所以外では複数人数を配置することができないということじゃろ？」

「そういうことだ」

別に教師が二人以上いても、誰か一人だけがフィールドを作成して他の人達はそのフィールドに召喚すればいいだけのことだと俺は思うんだが……ま、どうでもいっか。

第２３９話（後書き）

雅夜の扱いが酷くなったね！！（笑）

運子ちゃん（仮）の正体を書くタイミングを逃した気がする今日この頃。

……どうしよう？

感想＆アンケートお待ちしております。

第２４０話

「その現象とムッツリーニが調べてくれた目撃情報を総合して判断すると、明日の相手側の布陣はだいたいこんな感じになると予想できる」

テーブルに紙を広げて雄二が予想した配置を書いていく。

目的地の女子風呂前に西村さん、その前の廊下に大島さん、そこに行くための唯一の階段前に高橋女史。あとはある程度距離をとって数名の教師の名前。興味はないためカットさせてもらうぜ！

「あれ？高橋先生は今日と違う場所になるの？」

「確実にというわけではないが、俺が向こうの立場ならそうする。絶対に通らなければならない道に主力を置くのは定石だからな。どうだ雅夜？」

「正解。俺の情報にも雄二の予想通りの布陣で明日はやるみたいだ」

「此処で『なぜお主が知っておるのじゃ！？』や『知ってるのなら初めから教えて欲しいのぅ』というのは無粋というものじゃろうな……」

勿論。

「それなら、なんで今日もそうしてこなかったのかな？」

「圧倒的な力を見せてこちらの戦意をくじきたかったんじゃないか？俺達の進路は予想できていたみたいだしな」

「ふむ。あの点数は圧巻じゃったからのう」

８０００点近くの点数とか、全科目を康太の保健体育並みに取らなければいけないんだぞ？流石に俺もそこまではいけねぇ……。

「それにしても、こうしてみると随分と苦しい勝負だよね。鉄人と大島先生と高橋先生のいる場所は絶対に通らないといけないし」

現状では覗き騒動に加わってる男子はＤＥＦの三クラスのみ。それにたいして向こうは教師が十人近く、生徒はＡ～Ｆ全部出てきてる。どこからみてもこちらの戦力が見劣りしているのがわかる。

「俺達の勝利の為には、どうしてもあるヤツを極力無傷で鉄人の前まで連れていく必要がある」

「あるヤツ？」

「お前だよ明久。最初は雅夜ってのも考えはしていたんだが、雅夜にもやってもらうべきことがあるからな」

「俺の仕事、とな？……聞こうか」

だいたい予想はついている。俺が必要になるほどの相手はこの学園に西村さんともう一人くらいしかいないからだ。

「学年主任の高橋女史」

学年主席の霧島の二倍近くの点数を持つ高橋女史。雄二・明久・霧島・姫路・優子の五人を同時に相手できる俺よりも点数が高い。つまりＡクラスの高成績者を十人近くでかかっても勝てる可能性は低い。

「８０００点近くのヤツと対等以上に戦う為には腕輪を使う必要がある。だがフィールドは総合科目。俺達の学年で総合科目で４００点を超えることが出来るのは翔子と姫路と――――お前だけだ」

調子がよければ久保もいけそうだがな、と続ける雄二。

確かに腕輪持ちを相手するにはこちらも腕輪を持ってなければ善戦するのすら難しいだろう。

「だから頼む雅夜。明日は真面目に参加してくれ」
「いや、言われるまでもないが？最初から俺の目的は高橋女史との戦闘だし、今までは失敗するとわかっていて参加するのはどうかと思っていたから真面目にやらなかっただけだぞ」
「最初からじゃと…？お主はいつからこうなると予測しておったのじゃ？」
「言わせんな、恥ずかしい」
「なぜそうなるのじゃ！？わけがわからんのじゃ！！」

まぁ、冗談だよ冗談。教えるのが嫌なだけだ。

「どうせ雅夜のことだから教えるのが面倒とかそんな理由でしょ？教えなかったのも面白くないからとか、つまらないとかそんなところだろうし」
「……話を戻してくれ、雄二」

むぅ。なんという素っ気なさ。流石にコミュニケーションをとらなすぎたか？

「そうだな。もう一度確認をとるが、高橋女史は任せていいのか雅夜？」
「無論。むしろ任されなかったら雄二を拳で説得するところだ」
「なら問題ない」

信用ねぇな俺。

「話を戻す。雅夜が高橋女史、ムッツリーニが大島、明久が鉄人を

倒すのは覗きを成功させるためにどうあっても外せない条件だ」
「それってやっぱり僕が《観察処分者》だから？」
「そう。鉄人は最後の砦として女子風呂を前に陣を敷いているだろう。ここはどうあっても通過せざるを得ないポイントだからな。だが、ヤツを生身の人間が倒すのは不可能だ」
「確かに。俺も武装してやっと、って感じだからな」

剣を手にしたとしても西村さん相手にどこまで通じるかわからない。なぜなら、一度も戦ったことがないからな！！

「猛獣と人間は武器を持って初めて対等の敵たりを得る。その武器を持っているのは、明久、お前しかいない」

召喚獣は人より数倍以上もの力を持つ。普通は人や物には触ることが出来ないため安全なのだが、観察処分者である明久の召喚獣ならその力を現実に起こらせることが出来る。

「じゃが、そうなると？橋女史の場所を無傷で通過する必要があるじゃろう？」
「ああ。大島はムッツリーニにやってもらうとしても、高橋女史と戦う為の戦力が足りない。というか、今の戦力では高橋女史のところに辿りつくことすらできないな」
「たったＤＥＦだけだからなぁ…。戦力的には軽く見積もって今の三倍は欲しいところだ。……まぁ、結局はＡＢＣの三クラスの全てが協力してくれないことには変わりはないんだよな」
「ああ」

ＢとＣは高橋女史に辿りつくため、Ａは高橋女史の周りの連中を抑えて、俺がたたかいやすくするため。そんなところだろ。

「前置きが長くなったな。そういった理由から他のクラスからの今日六は必要不可欠となる。そこで、明日は作戦時刻まではその根回しに全力を注ぐことにする」

「要するにA～Cクラスを仲間にするってことでしょ？でも、一度断られたわけだし、そう簡単にいくかな？」

「そこをなんとかするのが俺たちの仕事だ」

そういって雄二はデジタルカメラと各部屋に備え付けられている浴衣を掲げる。

たま～に思うんだが……雄二って服装フェチなのだろうか？事あるごとに色々な服をもってるし。

なんか将来、霧島相手にコスプレを強要させてるような気がするんだが……。

第２４０話（後書き）

雅夜の覗き騒動での目的がついにはっかく！！
強者と戦うということは狂者にとって最高の肴なのである！！！！！

……まぁ、前々からバレていたと思いますがね（苦笑）

感想＆アンケートお待ちしております。

バカテスト第二十二問目（前書き）

王様ゲーム in 文月～これはきっと普通なんだ～

バカテスト第二十二問目

とある放課後。電気を消し窓を暗幕で覆ったFクラスにて、小さな丼状のカゴが置いてある卓を歴戦の勇者十人で囲っていた。

「――――王様ゲェームッ！！」
「「「「「イェーーーーイ！！！」」」」」

雄二の掛け声で場にいる皆のテンションが盛り上がりをみせる。

「明久に雅夜。ルールの説明を頼む」
「オーケー。ここに1から9の数字と王と書かれたクジがあります」
「この王様のクジを引いたやつは他の奴に命令が出来る。例えば一番が王の肩を揉む、だとか二番が三番にシッペをするなど」
「そして、王様の命令は――――」
「「「「「絶対っ！！！！！」」」」」

全員で一斉に声を揃えて言う。

「それじゃあ、始めるぞ！」

雄二の掛け声に皆が同時にカゴに手を伸ばし紙を一枚ずつ手に取る。いつもの俺なら戦いにおいてイカサマをするのに一切の躊躇いを持たないが、今回、俺はイカサマをするつもりはない。なぜなら面白くないからだ！！

「よし。お前ら、覚悟はいいか？」
「それを聞くのは野暮ってもんだぞ雄二」

皆の覚悟はとっくのとうに出来ている。ここは戦場。一瞬の迷いが死を招くことを皆がわかっているのだ。

「いくぞ！」
「せーのっ！！」
「「「「「王様だーれだっ！！！？」」」」」

カコンッ

「よっしゃーーっ！！」
「「「こんちくしょーっ！」」」
「「「ああ、もうっ！」」」

雄二のガッツポーズに全員が嘆いた。
そして雄二が王様と書かれたクジを見せびらかすように前に突き出しながら、

「それじゃあ命令だ。そうだな――――五番と六番が鉄人に『好きです、付き合ってください』（裏声）と告ってこい」

非情な命を下す。

「「キサマァーッ！！」」
「初っ端から命の危険があるものを選ぶか……流石雄二。汚い」

そこに憧れないし、痺れもしないがな！！

「なんて命令するんだ！そんなことしたら完全に誤解されるじゃないかっ！」
「……不名誉な……！」
「……ふむ。けどこれだけだと物足りないな――――――よしっ。ついでに9番は告ってこい、？橋女史に」
「ちょ、おま！？なに言ってくれちゃってんだよ雄二！！」

なんか巻き込まれたーっ！ふざけるんじゃねぇーよ！！しかもよりによって？橋女史だと！？
……まぁ、康太と明久よりかはマシだし別にいっか。

「ダメよアキ。さっき自分で説明したばっかりでしょ」
「そうだよ三人とも」
「「「「「王様の命令は！」」」」」
「「「絶対……！！」」」

告ることよりその後のことが怖いんですけど、ねぇ優子さん？

～罰ゲーム執行中～

『私は教師をからかったことを反省しています』×2

《好きです、付き合《試験召喚（サモン）》って――――ほぶらへばっ！？》
ちょ、この流れは予想外だ《これより異端者審問会を始める》しかも追撃だと！？

～罰ゲーム終了～

「二回戦、行くぞーっ！！」
「「「うおおおっ！！！！」」」

このまま終わってたまるかぁあああああああっ！！

「「せーのっ！！」」
「「「「王様だーれだっ！！！！」」」」
「あ、ボクだね」

なぜ、俺に反逆の機会はこない……！？

「それじゃあ……2番が4番のほっぺにチューを！」
「本当ですかーっ！！？？」

4番の紙を持った姫路が歓喜の声をあげる。

「あ、明久君。明久君のクジの番号は2番ですよね…？」
「姫路さん……」↑3番
「……え？」
「ん、んっ。いらっしゃい、瑞希」↑2番
「ええっ！？」

島田も案外ノリノリだな。

「愛子にしては結構まともね」

「んー、確かにそうだね。じゃあ追加で、８番は１番にディープなキスを！！」

ちょっと待ったぁあああああああ！！！！！！！

「いっきに過激になりすぎだろっ！？優子もヘタに煽るなよ！！」↑１番

「いや、いつもの工藤ならこれで普通だな」↑９番

「霧島とムッツリーニも講義せぬでよいのか？」↑５番

「……絵になるならそれでいい（ボタボタ）」↑６番

「……雄二じゃなければ」↑７番

それぞれが紙に書かれた番号を見せながら我関せずと呟く。

……ま、待て。今出たのは５６７９で雄二・霧島・秀吉・康太、姫路が４・島田が２・明久が３。ってことは……っ。

「さぁ、逃げることは許されないわよ雅夜！！」↑８番

「キサマらぁあああああっ！！！」

共犯か！？優子はそんなセコイことをしてまで俺のキスがしたいのか！？

別に二人っきりで雰囲気が良ければいくらでもしてもいいのに（嘘です、調子に乗りました。すみません）

～罰ゲーム執行中～

その昔。元々の生命力が弱いと言われていた吸血鬼は、人間に口付けをし、そこから生命力を吸い取って長い生涯を生き抜いていたという。

そんな感じ――――――――――だったらしい。

～罰ゲーム終了～

「ミッションコンプリート」（フキフキ）

「……はぁっ、んっ、はぁ……」（バッタリ）

この俺にかかれば、優子を返り討ちに獲ることくらいどうってこともないっ！！！

“やられる前にやり返す”俺のモットーの一つだ。

「わかりました。そういうちょっとエッチなのもオーケーなんですね。それだったら私も、もう容赦しません！」

「普通は女の子はいやらしい罰ゲームは嫌がるはずなのじゃが……」

普通じゃないからな。

「いきますよ、せーのっ！！！」

「「「「「王様だーれだっ！！！」」」」」

クジを引いたとき、頭のなかをある諺が過ぎる。それは――――――
三度目の正直。

「――――我、此処に君臨せし！」
「「「「「「ついにきたかぁあああ！！」」」」」」

全員が悲鳴をあげる。誰が標的になってもおかしく雰囲気、誰を標的にしても楽しめる俺。
別に全員に罰ゲームを期せてもよいが、それだと面白くない。ここは誰かピンポイントで……そういえばさっき工藤から罰ゲームの対象にされたんだっけか。

「んじゃ、3番は7番に愛の告白」
「えっ、ボク！？」
「……なんだと？」

ん、待てよ。秀吉って今回、なにか被害あったか？
――――ないな。

「それと、5番は携帯の画像フォルダの中身を全て俺に見せる」
「お、お主は……っ！」

～罰ゲーム執行中～

『え、えっと、その、ムッツリーニ君……／／／／／／／／／／／／／／／』
『……』

『前からボクは、ムッツリーニ君のことを――――――好』《ッ！！ブシュアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！！》『ムッツリーニ君！？』

『ほほぅ。秀吉も男の子ってわけか、このムッツリスケベめ』

『ち、違うのじゃ！これは……そ、そうじゃ！由美どのがワシに送り付けてきたものであって…！』

『画像を隠しフォルダに保存して、メールボックスから画像が添付されてたメールを消しているのに今更言い訳されてもなぁ』

『違うのじゃぁあああ！！！！！』

～罰ゲーム終了～

「あーっ、スッキリした！！」

携帯を握り締めて『違うのじゃ、ワシはムッツリじゃないのじゃ』とブツブツ繰り返す秀吉と、『ちょっと！この鼻血の量は不味いんじゃないかな！？』『……（ドクドクドク）』今までに見たことのないほどの量を流し続ける康太とそれを介抱する工藤。なんだろう。この晴れ晴れとした気持ちは！

「鬼畜ね、雅夜……」

「今ならそれすらも褒め言葉として受け止められる！」

「いつもは傍観者の秀吉まで被害者に加えるとはな……」

「……愛子は嬉しそうだった」

「誰も雅夜がピンポイントで番号を知っていたことにツッコマない

んだね」

気にしたら負けだ。

「ワシかてやられるだけで終わるわけにはいかないのじゃ！！いくぞい、せーのっ！」

「「「「王様、だーれだっ！！」」」」

……

……

……

「……お？」

沈黙のなか、雄二がなにかに気付く。雄二の視線のさきは霧島。霧島の手には《王》と書かれた紙が――――。

「すまんが急用が――――」

「「「逃がすかっ！！！！」」」

逃げ出そうとした雄二を明久と康太が飛びかかり、雄二の動きが止まった瞬間に関節技を決める。

「さぁ、王様。ご命令を」

「止めろ、てめぇら。放しやがれぇっ！！」

断る。この俺が、雄二に罰を下す霧島に手助けをしないわけがない！！

「……じゃあ、雄二は今から私になにをされても抵抗しちゃダメ」

「ま、待てお前！！俺になにをする気なんだ！？」
「……そんなの――――――恥ずかしくて……言えない……」
「コイツ変態だぁーっ！！」

流石霧島、大胆だなー。顔を赤らめてる辺はまだまだ純情みたいだが。

「じゃが霧島よ、さきの命令は残念ながら無効じゃ。きちんと番号で言わなければルール違反になるのじゃ」
「いやいや、そこは行っちゃいかんよ秀吉。夫婦の営みに余計な口出しはしてはいけないんだぞ」
「誰と誰が夫婦だ！！」
「「チッ」」

秀吉の言葉が正論であることを認め、不満げに拘束をとく康太と明久。そして雄二は余裕綽々の態度で制服を直す。
だが、現実はそんな甘いものじゃない！！

「……じゃあ４番」

……

ダッ！　バッ！　ガシッ！

～罰ゲーム執行中～

残念ながら霧島は雄二を伴って隣の部屋に行ってしまったのでどんなことをしているのかわからないが、康太と明久がトイレに行ったとだけ言っておこう。

～罰ゲーム終了～

「いったいなにがあったのじゃろうか？」
「まるで拷問のあとみたいね」

亀甲縛り&猿轡の雄二、口元をハンカチで拭う霧島。

「口元を拭くってことは口でナニかをしたってことだな。口でナニをしたのか気になるところだ……」
「その表現はやめなさい雅夜！」

つまりもっと過激に表現しろってことか！？（冗談）

「それじゃ、次でラストにしよっか」
「五回目で区切りがいいしな。んじゃ――」
「「「「「王様、だーれだっ！！！！！」」」」」
「よし、僕だっ！！」

最後の最後で明久か。こいつくじ運悪いはずなんだがな……チッ。

「それじゃあ、1番から9番の全員は――――――隠し持っている僕らの女装写真をデータ諸共全て焼き捨てる！」
「「そ、そんな～っ！！」」
「それは名案じゃな！」

まぁ、俺に被害はないから別にいっか。
Q、俺が持ってるのは明久たちの女装写真ですか？A、いいえ、仮装写真です。

「そんなの酷いです！あんまりです！」
「そうよアキ！それだと木下の写真まで燃やすことになるのよ！」
「大丈夫。僕が持っていない秀吉の写真なんてないからね」
「待つのじゃ明久。それはど「さぁ、燃やすんだ！！！」」

秀吉の言葉を遮って高々に叫ぶ明久。

「はい、雅夜」（ライター）
「サンキュ優子」（スプレー缶）
「火事になると危ないからね」（金ダライ）
「ワシのもなくなるのじゃから、ワシも手伝うぞい」（油）

合体！！！

メラメラメラメラ……

「いやぁあああああああああ！！！」
「あ、あああああっ！！」

姫路と島田から強制押収した写真と、康太のデータの入ったメモリー（この際全て燃やしちまえ♪）を次々と火のなかに投下していく。

「う～む。相変わらずどーも火は好きになれないな」

「あら。てっきり雅夜なら『燃えろ燃えろ！！ひゃっはーっ！！』って感じになると思ってたのに」
「雅夜は昔から火が苦手だからね。そのせいで料理とか抵抗があるから火をあまり使わないお菓子を作り始めたんだよね」
「意外な弱点じゃのぅ」
それを焚き火気分で味わう俺たち。他の奴らは……まぁ、ご想像通りだ。
「あははっ。こんなところ人に見られたら大変だねー」
人はそれをフラグと言う。
ガラッ
「浅月。忍が今度――――――――――なんですのコレ？」
「「「「「解散っ！！！」」」」」

バカテスト第二十二問目（後書き）

アンケート番外第一団『王様ゲーム』

ま、ほとんど原作通りなんですけどね（汗）

アニメのやつを文にするのって結構面倒くて時間がかかってしまった（苦笑）

感想＆アンケートお待ちしております。

第２４１話

「でも、それをどうするの？」
「着せて写真を撮り、Ａ～Ｃクラスの野郎どもの劣情を煽る。うまくやれば覗きへの興味が湧いて協力を取り付けられるはずだ」
「男の性に訴えるやり方か。なんとまぁ、俺好みの作戦だな」
「ふ～ん。なんだか雄二の作戦はいつもそんな感じだよね」
「ほっとけ」
「でも、効果はありそうだしやってみる価値はあるね。はい、秀吉」
「……またワシが着るのかのう……？」

浴衣を渡された秀吉は不満ありげな声を出す。そりゃそうだよな。男の劣情を煽るために男を使うこと自体がおかしいもんな。

「安心しろ。秀吉だけじゃない。姫路と島田にも着てもらう」
「いや、ワシ一人で着るのが不満だとかそういうワケではないのじゃが」

それとも未来以外の奴に見せるのが嫌、だとかか？流石にそれはないだろうが……ないよな？

「それじゃ、明久。姫路と島田に連絡を取ってくれ。ムッツリーニはカメラの準備を、雅夜は木下姉を見張ってきてくれ」
「ほぅ……。それはつまり、俺に死んでこいと言うのか雄二」

怒らせた優子は何よりも怖いと思い始めた今日この頃。

「なんじゃお主。また姉上になにかしでかしたのかの？」
「俺自体は“補習中に優子の前から姿を消した”程度しかやってな

いんだが、ちと用事があって呼び出した杜丘の奴に今日の覗き騒動時に優子を足止めついでにはめておいてもらってな。イイ感じに危なくなってる」

「杜丘っつーと、あのプールの時の奴らか？いったいなんの用事があったんだ」

あえて優子について触れない雄二。懸命な判断、助かる。

「まぁ、雄二たちが会ったことのない奴なんだけどな。覗き騒動の時に勝つために必要なものがあってな、持ってきて貰ったんだ」

個人てきに必要になりそうなものというか、使ってみたいものなんだけどな。

「……女か？」

「いや、残念ながら男」

「ムッツリーニにとっては一番重要なことはそこなんだね」

杜丘の奴らは無駄にレベルの高いやつが揃ってるからな。康太が聞くのも無理はない。

「しかし、その『勝つ為に必要なもの』とはなにかの。ワシらにもちと見せてくれぬか？」

「そうだな。雅夜がなにをしようとしてるのか確認ついでに見せてもらいたいところだ」

「まだ完全に信用されきってねーのな俺。ま、元から隠すつもりはない」

そして部屋のふすまにしまっておいてアレを引きずりだして――

――――――

☆

「んじゃ、ちょっくら優子たちに会ってくる。謝るのは早いにこしたことはないからな」
「ああ、頼む。なるべくこっちに被害なこないようにしてくれよ」
「無茶な注文を頼むんじゃねぇよ」

扉をあけながら振り向かずに答える。霧島の相手は雄二って相場が決まってるからな。俺に言わないで直接霧島に言う勇気があるなら、どうぞ。

「あ、そうそう。前に言っと思うが、俺が今回覗き騒動に参加する理由の一つは『雄二との約束を守る』だからな」
「如月ハイランドに行った日の朝に電話で言ったやつ、か……。アレも結局は、こうなることがわかっての言葉だったんだな」
「まぁな。だからこそ俺は勝てる為の布石を打ち、最後の一手で逆転を出来る素晴らしい舞台を作るために動いていたんだ」

今更言ってもいいわけにしか聞こえないだろうが、一応は言っておく。
俺は振り向かないまま手を振って部屋を後にした。

「さぁ、煮るなり食うなり好きにしてくれ！！」
「あ、もう最初から許してもらえると思ってないんだ」
「……ある意味潔い」
「アタシってどういうふうに思われてるのよ！！」

優子たちの部屋に入れさせてもらっての第一声。どうせ死ぬんだし開き直ることにした。
ちなみにこの部屋は優子と霧島と工藤の三人で使ってるらしい。

「あのね雅夜。確かにアタシは最近すこし過激になってきてるって自覚してるけど、別にアンタはなにもしてないでしょ。だから雅夜の手足の関節という関節全てを外して軟体動物のようにした後、手足を縛って忍たちの前に突き出そうなんて思ってもいないわ」
「やけに具体的な例だね……」

確かに俺はなにもしてないが、元となる原因を作ったのは俺だ。

「あんだけ俺に向けて殺気を出しておいて、怒ってないと言われてもな」
「それはあんな風にはめられたら誰でも怒るわよ。でも、アタシが怒ってるのは雅夜じゃなくてアイツに対してよ」
「つまり俺に対する怒りとかも含めてアイツが全て引き受けてくれた、ということか？」
「ええ」

なんという身代わり人形。帰ったらお礼にメロンでもあげるか、郵送で。

「……それより一つ、浅月に聞きたいことがある」
「ん？なんだ霧島。如月ハイランドでの記録映像なら合宿明けに渡せると思う」
「……ありがとう。でも、要件はそれじゃない」
「今さらっと問題発言した気がするのはボクだけかな？」

この場にいる工藤以外はその時現場にいたからな。
というか霧島が俺に聞きたいこと？雄二関連・非関連の相談は前からいくつか受けたことはあるが、合宿中にわざわざ聞くようなこととなると……なんだ？

「俺で答えられるものなら出来るだけ答えるぞ」
「……うん。私がする質問は浅月が一番答えやすいはず」

答えやすい……？
って、まさか――――

「……雄二は本当に己の欲望のためだけに女子風呂を覗くの？」

少しだけ目尻を潤させて言う霧島。

……やっぱりそれかぁ。
充分答えにくい質問だぞソレ。

第２４１話（後書き）

雅夜のしたいことを理解した雄二たち。

決死の覚悟で挑む雅夜に雄二はなにも言えなくなる――――――――。

感想＆アンケートおまちしております。

バカノリ一周年記念!!

作者（以下作）「まさか此処まで来るとはねぇ……」
雅夜（以下雅）「よく続いたよなぁ……」
作「自分が一番実感をもってないかも。去年から毎日投稿してたとは思えないよ」
雅「毎日、ねぇ。一年は３６５日なんだが、話数はこれで２８５個だぞ。残りの８０はどうした。丸二ヶ月分は書いてないぞ」
作「そりゃあ、忙しかったからだろ。学生らしくテストの勉強してたり、事故にあって腕折ったり、バイトで死んでたり、ヤル気が出なかったり、コミケ行ったり、積みゲー消化したり、エロゲ消化したり……。とまぁそんな感じでな」
雅「最初の三個は認めてやるが、残りの四個はおかしいだろ!?特に一番最後!!なんだよエロゲって!?お前学生だろ!高校二年生じゃねぇのかよ!?」
作「心はいつだって大人なのさ!!というか十八禁のものを見たりやらない高校生ってのはいると思うか?」
雅「思わなねぇけどさ!……それをなぜ、わざわざこんな時のネタにしたんだ?」
作「いや、ただやったことのあるエロゲが今秋の新作アニメとして出て、冬には続編?が出て、この間体験版が出たからつい」
雅「これだけで知ってる人にはどのアニメか特定されそうだな。お前は隠すつもりは最初から無さそうだが」
作「モチロン」

雅「で、そろそろ今回は何をするか説明しろ」
作「いい加減グダってきたからね」

作「今回はやっぱりＩＦについて話すべきかと思うんだよ」
雅「ＩＦというと、バカノリ一周年記念で始めた『バカノリＩＦ～杜丘と翡翠の非日常な日常～』のことだよな？前から要望があって、丁度いいから書いたんだっけ」
作「イエス。と言ってもまだプロローグしか書いてないんだけどね。どんなストーリーにするかはだいたい決まってるし、苦手なプロットもちゃんと書いてある。はっきり言うとバカノリを始めた時よりＩＦの方は結構真面目に書いていこうとしてるよ」
雅「時系列的に言うと俺が優子を火事から助けた辺から始まるんだよな？火事をきっかけに杜丘の連中と関わっていくとか」
作「うん。実はというとその頃雅夜は『夜叉』って呼ばれていて、『悪鬼羅刹』の雄二と『鬼人』の由美の三人は結構不良ども間では有名になっていたんだけど、雅夜の実力は雄二と由美が本気を出すと手も足も出ないほどだったんだ」
雅「懐かしいなぁ……。その頃は俺も普通より少し喧嘩が強い程度だったっけな。それでただ、ちょっと二人より非道で残虐な仕方の闇討ちが好きだったんだよ」

作「昔も今も人として終わってるのは変わらないけどね！」
雅「否定はしない！！」
作「出来ない、だろ」

作「という事で今回はＩＦで活躍するオリキャラ達に登場してもらい、気になる話の展開について注目すべき大事な一言を言ってもらおうかと思います」
雅「なんともまぁ、ネタバレ覚悟の企画だとこと。そんなんで大丈夫なのか？」

作「平気平気。完璧にわかる人なんてそんなに居ないよ」
雅「凄い自信だな。どこからその自信は出てくるんだ？」
作「そりゃあ勿論、自分ですらわかっていないからに決まってるだろ！！！」
雅「ダメだこの作者……。早くなんとかしないと……」

作「ってなわけで最初の一名はこちら！『自称雅夜の妻』椎名忍ですっ！！」
忍「やっほー♪」
雅「出たな疫病神。とりあえず登場と同時に抱きつこうと飛びかかるな。重いんだよ」
忍「酷っ！？女の子に対してその言葉は禁句なんだよ」
作「はいはい。バカはやってないで話を進めて」
雅「キャラも多いことだし、それもそうだな。ってことで忍。適当にＩＦに対する気持ちと、読者が気になる一言を頼む」
忍「適当に、って……。まぁ、それでこそマサ君だけど♪」
作「こっちとしては適当は困るけどね……」

忍「んじゃ、お言葉通り適当に♪――――――ＩＦでは私とマサ君の関係が明らかになって、私という個としての存在が案外大きいと思う。一言は……そうだね『此処で死ぬか生き地獄を体験するか、どっちがいい？』かな」

作「お次はこの方！『鬼人の名は伊達じゃない』長瀬由美ですっ！」
由美（以下由）「どうも…。……って、喋り方は昔と今のどっちが

良いんだ？」
雅「今のままでいいんじゃね？ヘタに変えて読者が混乱するのも面倒いし」
作「昔の口調はＩＦだとほとんどだから、今はそのままでいいよ」
由「それもそうだね…」
雅「てなわけで、さっそくＩＦに対する気持ちと、読者が気になる一言を頼む」
作「時間と尺の都合で手早くお願いね」
由「随分とおざなりだね…。こういうのは苦手だからありがたいけど…」

由「ＩＦの話だと私が『鬼人』だった頃だね…。あの頃は楽しかったらそれで良い！…みたいな感じだったからある意味では充実してたかな…。一言は……うん『間違えるのが怖くて逃げていられるかよ』だね…。この言葉がきっと私を一番表してると思う…」

作「さぁ、だんだん調子にノッテきました！お次は二人同時で！『タバコじゃなくてシュガレットチョコだよ』片桐千夏と『だから私は犬じゃないってば！？』長瀬未来ですっ！」
千夏（以下チ）「ん。相変わらずどーも」
未来（以下ミ）「というか紹介文がだんだんとおかしくなってきてるよね！？」
雅「そこは気にするな。ってか、なんでこの二人が一緒なんだ？」
チ「読者の為の質問かい？マサ君ならわかっているだろ」
作「ぶっちゃけるとＩＦだと二人は一緒にいることが多い――――わけじゃなくて、ただ未来が人見知りで千夏以外とはまともに顔を合わせられないからなんだよね」

ミ「あの頃は私も幼かったんだよ！！あんまり昔を掘り返さないでほしいよ」
雅&作&チ「「「この話の根本を否定しやがった！？」」」
ミ「だからハモるの止めてってば！！」
作「いつも通りの未来弄りを終えたところで、行ってみようか千夏」
チ「前の二人みたいにやればいいんだろ。任せて」

チ「ＩＦでは、もしかしたら私が一番予想外な立ち位置に居るかもしれないけど……まぁ、私は私。いつでもどこでは変わりはないよ。一言は……あれだ『……笑いたければ笑いな。これが私の本職なんだよ』ってところだ」

ミ「ん～、私はＩＦだと出番が遅めなほうかな？たぶんだけど、主要キャラの中じゃワースト５位に入ってると思う！もしかしたら皆は『何この新キャラ？』とか考えるんじゃないかな。一言は……ええと『む～。千夏以外にこれを教えるのはマサ君が初めてなんだからね』ってところだね」

作「とまぁ、主要キャラ四人の境遇はだいたいこんな感じです」
雅「たったの四人かよ。オリキャラは俺を覗くと十人は軽く超えてるのに、なんでこれだけなんだよ」
作「そりゃあ、ヒロイン候補&物語の重点の方達だからね。全員分やっていたら一話で収まりきらないよ」

雅「いや収まるだろ。たんに面倒いだけだろ?途中からグダってきてたし」
作「痛いところをつかなくて良いんだよ。それより疑問に思った方がいるかもしれませんけど――――アヤメの登場はオリキャラのなかでは一番最後の予定です」
雅「はぁ?なんでまた、まともそうな奴が一番最後なんだ?」

作「純粋に登場するた機会が無いだけなんだよ。ぶっちゃけると、最初のほうに居ても要らない子になっちゃう」
雅「アンタ最低だよ」

作「あ、そうだ。もう一人出す予定だったんだけど急遽別の用事が入ってしまった為出れない子がいたから伝言を預かっているんだった」
雅「出れない子?なんなんだそいつ。いくらなんでもおかしいだろ」
作「この作品ではいつものことだろ?まぁ、相手は雅夜の姉――――深風さんなんだけどね」
雅「ねーさん?となると伝言って俺あてか?」
作「まさか。さっきの四人がやったみたいに一言言ってもらうだけだよ」
雅「ふ~ん。んじゃ、ラストはそれでしめるとするか」
作「オーケー。んじゃ行くよ――――」

【深風『昔はあんなに可愛いかったのに……。さぁ、遠慮はしないで。昔みたいに素直になって、――――――――この服行ってみよー♪』】

雅「いやな過去を思い出させるなぁあああああああああああ！！！！！！！！！」

バカノリ一周年記念!!（後書き）

相変わらずのグダリっぷり（汗）

こんなんでよく一年間やっていけたな俺（笑）

感想お待ちしております。

第２４２話

「ノーコメント――――――じゃ、納得してくれねぇよな」
「……うん。今回は真剣」
潤んだ瞳で下から見上げられる。
むぅ……、困ったもんだ。あんまり教えたくないんだけどなぁ。
「とりあえず、欲望の為だけではない事は確かだ」
始めたときは、な。確かに今の雄二は欲望がほとんどで動いてるかもしれないが、覗きをするきっかけは脅し犯を捕まえる事と俺たちを覗き犯と決めつけた女子に対する反逆。今はまだ目的とか諸々を忘れていなそうだが、たぶん明日には覗きを成功させる為のことだけを考えて忘れていることだろう。
「……そう。ありが――――」
「それじゃ、ダメよ雅夜。代表は真剣なんだから、雅夜もそういう逃げるような言い方は無しにして真面目に答えて」
霧島が礼を言おうとするのを手で制しながら、俺と霧島の間に優子が入ってくる。
ま、やっぱりそう来るよな。
「へ？逃げる言い方ってどういう意味ソレ？」
工藤が突然の優子の発言に戸惑いながら疑問をぶつける。
「雅夜は代表の質問にちゃんと答えられるはずなのに、肝心の所を

隠して少しの事しか代表に答えていないわ。今のは欲望だけではないと言っただけで、欲望が入ってるのは否定してないし他にもなにか理由があるのに話そうとしてないわ」

そうでしょう、雅夜？と続けてながら優子は俺の目を見つめる。まるで俺の言葉の意味の奥底までお見通しとでも言うように。

まったく……優子にはかなわないな。

「……そうなの浅月？」

「浅月君もそうだけど、優子も浅月君の彼女なだけあって浅月君のことならなんでもわかってるんだね」

俺たちは付き合ってないけどな。

「…オーケー、降参だ。ちゃんと全て話してやるよ」

両手を上げて降参のポーズをとって溜息を吐く。やれやれ。いつも俺はこんな役回りなんだな。

「唯一つだけ条件を付ける。今から俺が言うことはお前ら三人の心の中にしまっとけ、誰にも喋るな。もちろん雄二や明久、秀吉にもだ」

「……問題ない」

「もちろん、最初からそのつもりよ」

「あははははっ……。なんだかボクだけは場違いな気がするんだけど」

工藤は貴重なツッコミ役として必要なんだよ。

「んじゃ、てっとり早くしまさせてもらうぞ――――――――――――」

☆（事情説明中）

「――――というわけだ」
「なるほど……。土屋君は別として、坂本君と吉井君は犯人探しのため、秀吉は友を助けるため、雅夜は騒動に参加したいだけ――――って今の長い説明をたったの『事情説明中』で終わらせなかった！？手を抜くにしてももう少しちゃんとやりましょうよ！」

メタ発言自重しろ。というか全部書かなくてもわかるだろ？

「え～っと、つまり……。坂本君たちは最初はやましい気持ちはまったくなかった。んで、だんだんと日を増してくごとに仲間が増えていって本当に覗きの為だけになりそうだ、ってことかな？」
「最初も少しやましい気持ちはあったかもしれないが、まぁだいたいそんな感じだ」
「少しは止めようとしなさいよ、雅夜（バカ）……」

楽しめる出来事を止める理由なんか俺にはないな。というかこの合宿で覗き騒動を止めたら、なりをやりに来んだってんだよ。

「……」

そんな中、霧島は一言も声を発せず、ただ沈黙を続けていた。

「代表。大丈夫？」

「……大丈、夫」

「なんだ霧島。事の発端が自分にあることがそんなにショックだったのか？」

「ちょっと雅夜！言葉を少し選びなさい！代表は落ち込んでるんだから――――」

「……いいの、優子。……浅月の言うとおりだから」

寂しそうに、静かに言う霧島。

確かに優子の言うことにも一理ある。あるのだが、俺は俺らしくいつも通りやらしてもらうぞ。

「もしかしたら雄二に嫌われたかも、もういつものように接してもらえないかも――――――とか、そんなことを考えてるんだろ？」

「……っ」

「そりゃ、合宿所についてそうそう、なにもしてないのに勝手に覗き犯にされたあげく拷問されたりしたら誰でも愛想はつかすよな」

霧島の目尻に水滴がたまり始め、ついに流れ出す。

「しかもそれは付き合ってもいない女にだ。毎日付きまとわれて、他の女子に声をかけたりするだけで目潰しや拷問までされる。好意があるとは思えない行動をとる女に、な」

「…やめて……っ！……それいじょう、いわないで……っ」

「ちょ、ちょっと優子。浅月君止めなくていいの！？これ以上言わせてたらまずいことになりそうだけど！？」

「……止めなくていいわよ愛子。だって、雅夜も代表もアタシ

が認めた強い人だもの」

優子に認められてるのか俺。

……どうやら俺がやろうとしてることがわかってるみたいだな。

Ｐｉ Ｐ ｉ Ｐ ｉ Ｐ ｉ Ｐ ｉ

突如、部屋のなかからケータイの着信音らしきものが響く。

「……あ、この音……雄二から……っ！雄二……っ」

着信音で雄二からのメールだとわかった霧島はポケットから携帯を取り出し、まるで藁にもすがるような必死な形相でメールを見ようとする。

「霧島。お前はそれをみる覚悟があるのか？」

「――――――え……？」

「なんだ？もしかしたら雄二が慰めのメールでも送ってくるとでも思ってたのか？そうだとしたらおめでたい頭だな。今の状況を考えろ。覗きが成功しなかったら雄二のプロポーズの音声がお前の親に聞かれて、一生をお前と過ごさなければならなくなるんだぞ。『邪魔するな』とかそういった内容のメールが来ると思うんだが」

「そんなことないっ！！雄二はそんな酷いことを絶対に言わないっ！！」

「ならばなぜ、携帯を持つ手が震えている！！」

「――――――っ！？」

霧島の怒鳴り声に、間髪入れずに声を張り上げて返す。

「心の底から雄二を信じているなら、お前は震えもせず怯えもせず

に堂々とメールを見ることが出来るはずだ！なのにお前の手は震え、俺の言葉に動揺しまくっている！わかってるんだろ！雄二に嫌われてる可能性があることに！お前はわかっているのに認めてないだけだ！」

「浅月君っ！！！それ以上言ったらボクが許さないよ！！」

俺と霧島との間に工藤がわって入ってくる。

その工藤の後ろからは嗚咽が混じった泣き声が聞こえはじめる。

優子はさっきの立ち位置から一歩も動いていない。俺を止めようともせず、霧島を慰めようとせずに。

第２４２話（後書き）

鬱成分たっぷりの後半。霧島好きの方達すみませんでした。

それと、私は霧島が嫌いってわけではありません。
それだけはわかってもらいたいです（汗）

感想＆アンケートお待ちしております。

第２４３話（前書き）

ＩＦの方も書きましたので、そちらもどうぞ。

第２４３話

「許されなくて結構。俺はなにも嘘は言ってねぇからな」
「それでもだよ！お願いだから、この部屋から出てってくれないかな？友達が目の前で傷つけられてるのを見て、放って置けるようにボクは出来てないからね」

構わねぇよ。言われなくても、もう出るつもりだったからな。

「友達想いな良い奴だこと。憎まれ役はそうそうと出ていくことにしますよ」
「……浅月君がこんなに酷い人だとは思ってもいなかったよ」
「そりゃ残念。俺はもとからこんなやつだよ」

ま、杜丘の連中に付き合ってれば性格も黒くなるものさ。なんせ、周りは腹黒いやつばっかだからな。朱に交われば赤く染まるってな。

「あ、そうそう。『誰にも喋るなよ』って約束、ちゃんと守れよな」

そう言い残して部屋を出る。扉を閉める瞬間『さいってーっ！！』と聞こえた気がするが、聞き間違えだろう。
そして霧島たちの部屋からある程度離れ、部屋には戻らず談話室にあるソファーに身をあずけて……

「ぷはぁー……。慣れてねぇことをするってのはきっついな……」

思いっ切り息を吐く。こんなに疲れたのはいつぶりだ？

「やっぱりこういう憎まれ役は俺の性分にあわないな。……もし次があったら、次は誰かに頼んだほうがよさそうだ。というか絶対誰かにやらせる」

というか二度とやりたくない。今回も、遠まわしすぎるかもしれないけど実質これが一番いいやりかただったと思うからやっただけで、やりたくてやったわけじゃねぇんだよなぁ。途中で優子も俺が無理してることに気づいていたみたいだし。

「後は優子に任せるとして……俺は一眠りでもするかー」

～ｓｉｄｅ優子～

「……」

「ほ、ほら代表。落ち着いて、泣き止んで、ね？酷いこと言う浅月君ならもう行っちゃったから」

雅夜が部屋を出ていって数分経った今。まだ代表は泣いたままだけど、そろそろ泣き止みそうな感じになってきた。愛子が必死に慰めたおかげだろう。

「あ～もう。せっかくの綺麗な顔が台無しになっちゃってるよ～」

そう言いながらタオルで代表の顔と拭いて、ついでに涙も拭き取ってあげる愛子。本当にこの子は友達想いの良い子ね。

雅夜が日頃から“数少ない常識人”って言ってるのがよくわかる。

「……ありがと愛子」

「どういたしまして。というか優子も手伝ってくれればよかったのに」

「ごめんね、ちょっと考え事してて。代表、携帯貸してくれる？」

「？……うん。構わない」

代表から携帯を受け取り未開封のメールを開く。内容は――――――やっぱり。少し疑問を覚えるけど、なんら問題はない。

「ね、代表。少しアタシの話を聞いてくれる？」

「……さっきの浅月の話の続き？」

「ええ。雅夜に任されちゃったし、アタシから言いたいことが一つだけあるの」

「ええっ！？まさか優子まで浅月君みたいなこと言うつもり！？それはいくら優子であっても止めさせてもらうよ」

あながち間違えではないわね、愛子。アタシも雅夜と同じで、代表に説教するつもりよ。

「……いいの愛子。優子にも考えがある」

「そういうこと。大丈夫。雅夜ほど酷くいうつもりはないわ」
「心配だなぁ……」
そういいつつも一歩下がってアタシを代表の正面に立たせてくれる。ありがとね。
「代表。ごめんね？本当だったらアタシは雅夜を止めなくちゃダメだったんだろうけど、雅夜を止めるどころか雅夜を止めようとする愛子まで止めちゃって」
「……いい。優子はなにも悪くない」
哀しそうに言う瞳を潤わせて言う代表。でもその言い方だと雅夜が悪いみたいに聞こえるわよ？
「だから、本当にごめんね。先に謝っておくわ」
「……優子が何度も謝ることはな――――」
パァンッ
部屋に絹を切り裂けるような音が響く。それはアタシが代表の頬を叩く音。
「……ぇ？」
「優子……なにしてるの？」
その音に遅れて、代表と愛子の呟きが聞こえてくる。声からは心底

驚いているような感じがする。

「――――――――ふざけないでっ！！」

第２４３話（後書き）

優子さんがお怒りになられた！？

＜お静まり下さいませ～

感想＆アンケートお待ちしております。

第２４４話

「なにバカやってのよ代表！！」

肩を掴んで代表の目を真っ直ぐみて怒鳴り立てる。

「優子っ！！優子までなにやってるのさっ！！」

「愛子は黙ってて！！これはアタシと代表の問題なんだから！！」

「――――っ！？」

アタシを止めようと、代表を守ろうとした愛子を叫んで止めさせる。

ごめんね愛子。これは真剣な話なの、お願い止めないで。

「アタシはね、代表のこと尊敬してるのよ？ううん、アタシだけじゃない。もっと沢山の人が代表のことを尊敬してるはず。……なのになんで？なんでアタシたちの期待を裏切るような真似をしたのよ……」

「……優子？なにを言――――」

「アタシの知ってる代表はね、才色兼美の優等生で、誰もよりも優しくて、みんなの憧れで、そしてなによりも――――――」

アタシはいつも代表みたいになりたいと思ってた。代表のようにどんなことがあっても――――

「好きな人を絶対に信じる心（きもち）を持っているのよ！！」

代表の坂本君を信じる気持ちほど強いものは、アタシは今までに見たことがない。代表ほど好きな人のことを信じて、信頼していられ

る人をアタシは知らない。だからアタシは代表に尊敬した。だからアタシは代表のような強い心を持ちたいと思っていた。

「雅夜の言葉がなんだっていうのよ！！代表が信頼してる坂本君ってのは雅夜が言ったようなことを平気で思えるような人なの！？違うでしょ！！なんで信じてあげられないのよ！！」

「……っ」

「確かに坂本君も雅夜が言ったようなことを少しは思ってるかもしれない！けど、それがどうしたっていうの！？それでも坂本君は本気で！心の底から！代表のことを遠ざけるようなことを一度でもしたことがある！？」

「……な…い……。……一度もない……っ！」

「そう、一度もない。いつも、どんなに酷い仕打ちをされようと、坂本君は代表の側を離れたことがなかった。そのことを代表はちゃんとわかってる？それが彼がどんなに心優しい方かを！彼がどんなに代表の事を信頼しているのかを！」

雅夜がやりたかったのは代表を虐めることじゃない、説教よ。代表の強くて弱い心に、崩れかけている部分を作り直してあげるような、誰もやらない説教を。

「そんな坂本君を代表は誰よりもわかっていたかもしれない！だけど代表は、雅夜の言葉で簡単にその気持ちが揺るいでしまった！――――ホントに、バカね代表」

「……ぁ……ぁぁ……ああ」

正面から代表を抱きしめる。だんだんと代表の口から嗚咽が再び出始めてくる。

今度のは先程の苦しみから生まれるようなものではなく、嬉しさからこみ上げてきたものだろう。

「さっき来たメール。あの時に雅夜の言葉に惑わされず、すぐに見ることができれば合格だったでしょうに」
「……なんて……ぐすっ……書いて…あった？」
「自分の目でちゃんと見なさい――――」
代表の目の前に先程受け取った携帯を突き出す。そこにはこう書かれていた。

【ＴＯ：霧島翔子　Ｆｒｏｍ：坂本雄二
　もう一度きちんとプロポーズしたい。今夜浴衣を着て俺の部屋まで来てくれ】

「――――彼がどれだけ代表のことを好きなのかを」
「……あ、ぁあ、……雄二っ！！雄二っ！！雄二ぃっ！！」
文面を見た瞬間、代表が携帯を抱えて泣き崩れる。今度は正真正銘、嬉しさ１００％の喜びからの涙のはずね。

「愛子。後は……代表のことは任せるわよ」
「任せて。優子は浅月君のところにいくの？」
「ええ。このまま此処にいるのもなんだし、雅夜に任されたことちんと完了したって言いたいしね」
「……じゃあさ、ついでに『ごめんね』って伝えておいてもらえる？事情を知らないとは言え、少し酷いこと言っちゃったからね」
「雅夜は気にしてないと思うけど、わかったわ。ちゃんと伝えておく」
泣き続ける代表を愛子にあずけ、アタシは部屋を出た。
……まったく。いくら雅夜に感化されたとはいえ、アタシが此処

まで熱く語るのっていつぶりかしら？
やっぱり怒鳴るとスッキリするものね。

「んーっ。――――さて。雅夜は談話室あたりにいるかしら？」

軽く背伸びをして、談話室のあるほうへと足を進める。

途中、廊下でウロウロしてる島田さんを見つけたけど、なんだったのかしらアレ？

第２４４話（後書き）

霧島への説教終了～（笑）

やっぱりこういうのは苦手です、はい（苦笑）

感想＆アンケートお待ちしております。

第２４５話

「あ、雅夜。やっぱりここにいたのね」
「……優子か」

ソファーでうたた寝していると、優子の声で目が覚める。
声をかけられるまで優子の気配を感じ取れなかったような気がするが、俺の気のせいだろう。

「代表にしっかりとメールを見せてきたわ」
「ありがとな。あのまま霧島がメールを見なかったら俺は悪者になって、雄二と霧島との仲が危なくなるところだったからな。助かった」
「いいわよ。どうせ元から私に任せるつもりだったんでしょ？」
「まぁな」

あそこで工藤に出てけと言われなくても、適当なことを言って部屋から出ていくつもりだった。工藤の友達を想う強さは予想以上だったな。

「それと伝言。愛子が『酷いこと言ってごめんね』だって。事情がきちんとわかったら納得してくれたわ」
「あー、別に気にしてないんだけどなぁ……。もしかして、俺との仲が悪くなるとシュークリームを作ってもらえなくなるからか？食い意地はってるな」
「違うでしょ。普通に愛子が良い子なだけ」

わかってる。冗談だよ冗談。アイツは一番の常識人だからな。

「後はなんかあるか？」
「ないわ。アタシも部屋に戻って代表と愛子に話をしなくちゃいけないから、部屋にもどるわ」
「ん、了解」

俺もそろそろ部屋に戻るとするか。雄二に頼まれたことも充分やったし、部屋に戻ってもなにも言われないだろう。

「おっと、そうそう。優子。部屋に戻る途中で島田を連れていくといいぞ。お前らのしようとすることにアイツも協力してくれるはずだ」
「島田さん？さっきそこでウロウロしてるの見たけど……。わかったわ」

ウロウロ？俺はてっきり部屋の中で悶えてるかと思ってたんだが。
まぁ、そのほうが優子に捕まりやすそうだからちょうどいいか。

「んじゃ、バイバイ優子。良い夜を」
「ええ、雅夜。また後でね」

お互いに手を振って自らの部屋がある方向へと歩き出す。また後でねぇ……。

☆

俺は今、部屋に入ることなく、部屋の前の廊下であることをしていた。

「おーい。生きてますかー？（ペチペチ）」

「……（無反応）」

むぅ。ダメだ。まったく反応がない。生きてはいるっぽいが、しばらくは目を覚まさなそうだな。

「生きた屍ってところか？そりゃまたなんとも――――――文月ではよく見るものだな」

日常茶飯事で見れる……というか体験してるからなぁ、主に俺とか雄二とか明久とか。

でも、この人の屍は初めてじゃないか？

「西村さーん？口から毒素みたいなもの垂れ流してないで、いい加減起きてくださーい（ベシベシ）」

食べかけのクッキーを片手に掴んだまま床に倒れて口から異形のものを垂れ流し続けている西村さんの頬を叩いて目を覚まさせようとする。

だが、しか……

「……（無反応）」

「これでも起きないのか。姫路の料理ってのは昔から変わらず、やっぱり殺戮兵器だな」

鉄人の異名を持つ西村さんですら、姫路の手作り料理（へいき）の前には手も足も出ないか。どんだけ強力なんだよオイ。

「んー……よし。このまま放って置くのもなんだし、どっか適当に捨ててくるか。西村さんなら三時間もしたら目が覚めるだろうしな」

隠し部屋にいれるのは……面白くないから、近くに窓があることだしそっから投げ捨てるか。死にはしないだろう。

「距離良し！方向良し！角度良し！人影なし！というわけで――――シュートッ！！」

思いっ切り西村さんの身体を窓に向かって蹴り飛ばす！――――って、やべぇ。窓を開けてねぇ……ま、問題ないか。

ガッ、シャアアアアンッ！！――――――――ドサッ。

「西村さんなら身体は丈夫だし、生きていられるだろ」

この後、外に『衛生兵っ！！衛生兵早くっ！！』と叫ぶ声が聞こえたという噂が流れたらしいが、なんのことだろうな？

第２４５話（後書き）

グダグダ（泣）

修学旅行で一週間近くパソコンに触っていなかったから書くスピードが落ちて、しかもネタがいいように思い浮かばない（汗）

感想＆アンケートお待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0754o/

バカとノリと召喚獣

2011年10月10日09時24分発行